

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第122集

# 馬立II遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

馬立Ⅱ遺跡正誤表

頁	行	誤	正
7	27	配石郡や土塚郡	配石群や土塚群
93	16	口径は21.0m	口径は21.0cm
142	11	(10)凹岩	(10)凹石

# 馬立II遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000箇所にあぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。特に東北縦貫自動車道の建設は、産業経済開発の大動脈として多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

東北縦貫自動車道八戸線に関連する遺跡は、安代町から青森県境まで53遺跡があり、二戸市所在の6遺跡については昭和60・61年に野外調査を終了し、発掘調査報告書の作成をすすめてまいりました。

本報告の馬立II遺跡は、二戸市南西の丘陵縁辺部に立地し、昭和61年の発掘調査によって縄文時代の竪穴住居跡や陥し穴状遺構等が発見されました。特に縄文時代中期末から後期にかけての集落と狩猟文土器や人面付土器等の多様な遺物の出土は注目されるところであります。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、二戸市、二戸市教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和63年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 中村 直

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸市福田字馬立18—15ほかに所在する馬立II遺跡<sup>まだち</sup>の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴う緊急調査である。日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 馬立II遺跡の岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は次のとおりである。  
登録台帳番号……………J E 18—2298      遺跡略号……………MD II 86
4. 発掘調査は昭和61年6月2日～10月31日に実施した。室内整理は昭和61年11月1日～62年3月31日及び昭和62年9月1日～10月31日で行った。
5. 調査担当者と整理担当者は次のとおりである。  
野外調査……菊池利和・佐々木嘉直・高橋義介      室内整理……菊池利和・高橋義介
6. 検出した遺構は次のとおりである。  
縄文時代の住居跡…18棟 住居跡状遺構…1棟 炉跡・焼土遺構…16基 土坑…24基  
陥し穴状遺構……………14基 配石遺構…1基 埋設土器…4基 炭窯跡（近代）…1基
7. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。  
I. 調査に至る経過……………昆野 靖  
II. 遺跡の立地と環境……………菊池利和・酒井宗孝  
III. 調査の経過と調査方法……菊池利和・高橋義介  
IV. 検出遺構と遺物……………菊池利和・高橋義介  
V. 遺構外出土遺物……………菊池利和・高橋義介  
VI. 鑑定・分析結果……………菊池利和  
VII. まとめ……………菊池利和・高橋義介
8. 分析や鑑定は次の方々に依頼した。（敬称略）  
火山灰の同定分析……………三辻利一      （奈良教育大学教授）  
炭化物の樹種同定……………早坂松二郎      （岩手県木炭協会）  
石質鑑定……………佐藤二郎      （佐藤地質工学研究所）  
赤色顔料の分析……………赤沼英男      （岩手県立博物館）
9. 発掘調査及び室内整理では次の機関の御協力と御教示を賜った。  
日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、二戸市教育委員会、浄法寺町教育委員会
10. 調査によって得られた資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の立地と環境	
1. 遺跡の位置	3
2. 地形と地質	3
3. 基本層序	5
4. 周辺の遺跡	7
III. 調査の経過と調査方法	
1. 調査の経過	11
2. 野外調査の方法	11
3. 室内整理の方法	12
IV. 検出遺構と遺物	
1. 縄文時代の竪穴住居跡	15
2. 竪穴住居跡状遺構	56
3. 炉跡・焼土遺構	62
4. 土坑	70
5. 陥し穴状遺構	84
6. 配石遺構	100
7. 埋設土器	100
8. 炭窯	103
V. 遺構外出土遺物	
1. 土器	104
2. 土製品	122
3. 土偶	129
4. 石器	129
5. 石製品・その他	143
VI. 鑑定・分析結果	165
VII. まとめ	
1. 遺構	166
2. 遺物	173

## 図版目次

<p>第1図 遺跡位置図 …………… 2</p> <p>第2図 地形分布図 …………… 4</p> <p>第3図 基本土層柱状図 …………… 5</p> <p>第4図 馬立II遺跡周辺地形 …………… 6</p> <p>第5図 周辺の遺跡 …………… 9</p> <p>第6図 調査区画略図 …………… 11</p> <p>第7図 馬立II遺跡遺構配置図 …………… 13</p> <p>第8図 A II i 10住居跡 …………… 15</p> <p>第9図 A II i 10住居跡出土遺物 …………… 17</p> <p>第10図 A III i 2住居跡・出土遺物 …………… 18</p> <p>第11図 A III j 4住居跡 …………… 19</p> <p>第12図 A III j 4住居跡出土遺物 …………… 21</p> <p>第13図 B II a 10住居跡・出土遺物(1) …… 23</p> <p>第14図 B II a 10住居跡出土遺物(2) …… 24</p> <p>第15図 B II a 10住居跡出土遺物(3) …… 25</p> <p>第16図 B II b 9-1住居跡・ 出土遺物 …………… 27</p> <p>第17図 B II b 9-2住居跡 …………… 29</p> <p>第18図 B II b 9-2住居跡出土遺物 …… 30</p> <p>第19図 B II d 6住居跡・出土遺物(1) …… 33</p> <p>第20図 B II d 6住居跡出土遺物(2) …… 34</p> <p>第21図 B II e 9住居跡・出土遺物 …… 35</p> <p>第22図 B II f 10住居跡・出土遺物(1) …… 37</p> <p>第23図 B II f 10住居跡出土遺物(2) …… 38</p> <p>第24図 B III b 2住居跡・出土遺物 …… 40</p> <p>第25図 C III h 1住居跡 …………… 41</p> <p>第26図 C III i 3住居跡・出土遺物(1) …… 43</p> <p>第27図 C III i 3住居跡出土遺物(2) …… 44</p> <p>第28図 C III i 3住居跡出土遺物(3) …… 45</p> <p>第29図 C III j 3-1住居跡・</p>	<p style="text-align: right;">出土遺物 …………… 47</p> <p>第30図 C III j 3-2住居跡・ 出土遺物 …………… 49</p> <p>第31図 D III a 4・5住居跡 …………… 51</p> <p>第32図 D III a 4・5住居跡出土遺物 …… 52</p> <p>第33図 D III c 1住居跡・出土遺物 …… 53</p> <p>第34図 D III c 3住居跡・出土遺物(1) …… 54</p> <p>第35図 D III c 3住居跡出土遺物(2) …… 55</p> <p>第36図 B III a 4住居跡状遺構 …………… 57</p> <p>第37図 B III a 4住居跡状遺構 出土遺物(1) …………… 59</p> <p>第38図 B III a 4住居跡状遺構 出土遺物(2) …………… 60</p> <p>第39図 B III a 4住居跡状遺構 出土遺物(3) …………… 61</p> <p>第40図 A III j 3炉跡 …………… 62</p> <p>第41図 D II h 9・10炉跡、出土遺物 …… 63</p> <p>第42図 D III c 1炉跡 …………… 64</p> <p>第43図 焼土遺構(1) …………… 68</p> <p>第44図 焼土遺構(2)・出土遺物 …… 69</p> <p>第45図 土坑(1) …………… 71</p> <p>第46図 土坑(2) …………… 74</p> <p>第47図 土坑(3) …………… 77</p> <p>第48図 土坑(4) …………… 81</p> <p>第49図 土坑(5) …………… 83</p> <p>第50図 土坑出土遺物(1) …………… 85</p> <p>第51図 土坑出土遺物(2) …………… 86</p> <p>第52図 陥し穴状遺構(1) …………… 88</p> <p>第53図 B III b 2陥し穴状遺構 出土遺物 …………… 89</p>
--	--

第54図	C III i 4 陥し穴状遺構 出土遺物	90	第79図	遺構外出土土器(12)	121
第55図	陥し穴状遺構(2)	91	第80図	土製品・古銭	123
第56図	C III j 4 陥し穴状遺構 出土遺物	93	第81図	円盤状土製品(1)	124
第57図	C III j 5 陥し穴状遺構 出土遺物	94	第82図	円盤状土製品(2)	125
第58図	D II f 10 陥し穴状遺構 出土遺物	95	第83図	円盤状土製品(3)	126
第59図	D III b 5 陥し穴状遺構 出土遺物	95	第84図	円盤状土製品(4)	127
第60図	陥し穴状遺構(3)	96	第85図	土偶	128
第61図	D III c 5 陥し穴状遺構 出土遺物	97	第86図	石鏃、石錐、石匙、搔・削器(1)	131
第62図	陥し穴状遺構(4)	98	第87図	搔・削器(2)	132
第63図	D III f 3 陥し穴状遺構 出土遺物	98	第88図	搔・削器(3)	133
第64図	C III j 5 配石遺構	99	第89図	搔・削器(4)	134
第65図	埋設土器(1)	101	第90図	搔・削器(5)	135
第66図	埋設土器(2)	102	第91図	搔・削器(6)、楔形石器(1)	136
第67図	D II c 7 炭窯	103	第92図	楔形石器(2)	137
第68図	遺構外出土土器(1)	105	第93図	楔形石器(3)、不定形石器(1)	138
第69図	遺構外出土土器(2)	107	第94図	不定形石器(2)、石核(1)	139
第70図	遺構外出土土器(3)	109	第95図	石核(2)	140
第71図	遺構外出土土器(4)	111	第96図	磨製石斧(1)	144
第72図	遺構外出土土器(5)	112	第97図	磨製石斧(2)	145
第73図	遺構外出土土器(6)	113	第98図	石皿(1)	146
第74図	遺構外出土土器(7)	114	第99図	石皿(2)	147
第75図	遺構外出土土器(8)	116	第100図	凹石、磨石(1)	148
第76図	遺構外出土土器(9)	117	第101図	磨石(2)	149
第77図	遺構外出土土器(10)	118	第102図	磨・凹石(1)	150
第78図	遺構外出土土器(11)	119	第103図	磨・凹石(2)	151
			第104図	磨・凹石(3)	152
			第105図	磨・凹石(4)	153
			第106図	磨・敲石、磨・凹・敲石	154
			第107図	石製品	155
			第108図	竪穴住居跡分布図	167



## 写真図版目次

<p>図版 1 空中写真……………178</p> <p>図版 2 遺跡遠景・近景……………179</p> <p>図版 3 作業風景・土層断面……………180</p> <p>図版 4 A II i 10住居跡……………181</p> <p>図版 5 A III i 2 住居跡……………182</p> <p>図版 6 A III j 4 住居跡……………183</p> <p>図版 7 B II a 10住居跡……………184</p> <p>図版 8 B II b 9—1 住居跡……………185</p> <p>図版 9 B II b 9—2・B II f 10 住居跡……………186</p> <p>図版10 B II f 10住居跡……………187</p> <p>図版11 B II d 6 住居跡……………188</p> <p>図版12 B II e 9 住居跡……………189</p> <p>図版13 B III b 2 住居跡……………190</p> <p>図版14 C III h 1・C III i 3 住居跡 ……191</p> <p>図版15 C III i 3・C III j 3—1 住居跡……………192</p> <p>図版16 C III j 3—2・D III C 1 住居跡……………193</p> <p>図版17 D III c 3 住居跡……………194</p> <p>図版18 D III a 4・D III a 5 住居跡……………195</p> <p>図版19 B III a 4 住居跡状遺構(1)……………196</p> <p>図版20 B III a 4 住居跡状遺構(2)……………197</p> <p>図版21 炉跡……………198</p> <p>図版22 焼土遺構(1)……………199</p> <p>図版23 焼土遺構(2)……………200</p> <p>図版24 焼土遺構(3)……………201</p> <p>図版25 土坑(1)……………202</p> <p>図版26 土坑(2)……………203</p> <p>図版27 土坑(3)……………204</p>	<p>図版28 土坑(4)……………205</p> <p>図版29 土坑(5)……………206</p> <p>図版30 土坑(6)……………207</p> <p>図版31 土坑(7)・C III j 5 配石遺構……………208</p> <p>図版32 陥し穴状遺構(1)……………209</p> <p>図版33 陥し穴状遺構(2)……………210</p> <p>図版34 陥し穴状遺構(3)……………211</p> <p>図版35 陥し穴状遺構(4)……………212</p> <p>図版36 埋設土器(1)……………213</p> <p>図版37 埋設土器(2)・炭窯跡……………214</p> <p>図版38 A II i 10住居跡出土遺物……………215</p> <p>図版39 A III i 2・A III j 4 住居跡 出土遺物……………216</p> <p>図版40 B II a 10住居跡出土遺物……………217</p> <p>図版41 B II a 10・B II b 9—1 住居跡出土遺物……………218</p> <p>図版42 B II b 9—2 住居跡出土遺物……………219</p> <p>図版43 B II d 6 住居跡出土遺物……………220</p> <p>図版44 B II e 9・B II f 10住居跡 出土遺物……………221</p> <p>図版45 B III b 2・B II f 10住居跡 出土遺物……………222</p> <p>図版46 C III i 3 住居跡出土遺物(1)……………223</p> <p>図版47 C III i 3 住居跡出土遺物(2)……………224</p> <p>図版48 C III j 3—1・2・ D III a 4 住居跡出土遺物……………225</p> <p>図版49 D III a 5・D III c 1・3 住居跡出土遺物(1)……………226</p> <p>図版50 D III c 3 住居跡・B III a 4 住居跡状出土遺物……………227</p>
--	--

図版51	B III a 4 住居跡状遺構 出土遺物……………228	図版72	円盤状土製品(1)……………249
図版52	B III a 4 住居跡状遺構 出土遺物……………229	図版73	円盤状土製品(2)……………250
図版53	D II h 9 炉跡・焼土遺構 出土遺物……………230	図版74	石鏃、石錐、石匙、搔・削器(1)……………251
図版54	土坑出土遺物(1)……………231	図版75	搔・削器(2)……………252
図版55	土坑出土遺物(2)……………232	図版76	搔・削器(3)……………253
図版56	陥し穴状遺構出土遺物(1)……………233	図版77	搔・削器(4)……………254
図版57	陥し穴状遺構出土遺物(1)……………234	図版78	搔・削器(5)……………255
図版58	C III j 5 配石遺構・埋設土器……………235	図版79	搔・削器(6)、楔形石器(1)……………256
図版59	遺構外出土土器(1)……………236	図版80	楔形石器(2)……………257
図版60	遺構外出土土器(2)……………237	図版81	楔形石器(3)、不定形石器(1)……………258
図版61	遺構外出土土器(3)……………238	図版82	不定形石器(2)、石核(1)……………259
図版62	遺構外出土土器(4)……………239	図版83	石核(2)……………260
図版63	遺構外出土土器(5)……………240	図版84	磨製石斧(1)……………261
図版64	遺構外出土土器(6)……………241	図版85	磨製石斧(2)……………262
図版65	遺構外出土土器(7)……………242	図版86	石皿(1)……………263
図版66	遺構外出土土器(8)……………243	図版87	石皿(2)……………264
図版67	遺構外出土土器(9)……………244	図版88	凹石、磨石(1)……………265
図版68	遺構外出土土器(10)……………245	図版89	磨石(2)……………266
図版69	遺構外出土土器(11)……………246	図版90	磨・凹石(1)……………267
図版70	遺構外出土土器(12)……………247	図版91	磨・凹石(2)……………268
図版71	土偶・土製品・古銭……………248	図版92	磨・凹石(3)……………269
		図版93	磨・凹石(4)……………270
		図版94	磨・敲石、磨・凹・敲石……………271
		図版95	石製品……………272

## 表目次

表 1	石器計測表(1)……………156	表 8	石器計測表(8)……………163
表 2	石器計測表(2)……………157	表 9	石器計測表(9)……………164
表 3	石器計測表(3)……………158	表10	竪穴住居跡・竪穴住居跡状遺構 一覽表……………167
表 4	石器計測表(4)……………159	表11	炉跡・焼土遺構一覽表……………169
表 5	石器計測表(5)……………160	表12	土坑一覽表……………170
表 6	石器計測表(6)……………161	表13	陥し穴状遺構一覽表……………172
表 7	石器計測表(7)……………162		

## I. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は二戸郡安代町で青森線と分岐し、浄法寺町、二戸市、一戸町、九戸村、軽米町を経て、青森県八戸市に至る延長68kmの高速自動車道である。このうち、本県にかかる第7次及び第8次施行命令区間は54.3kmであり、一戸インターチェンジ以北の第7次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年までに終了している。

二戸郡安代町から浄法寺町、二戸市、一戸町に至る27.6kmは、昭和53年11月に第8次施行命令区間となり、岩手県教育委員会はこの間に所在する埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。その結果、浄法寺町に所在する天台宗の古刹である天台寺及びその周辺の地域が天台寺緑地保全地域に指定されていることから、路線はこれを避けて設定された。

昭和54年10月、岩手県教育委員会文化課は日本道路公団の協力を得て、実施計画路線に沿った幅500mについて埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、さらに両者で協議を行った。

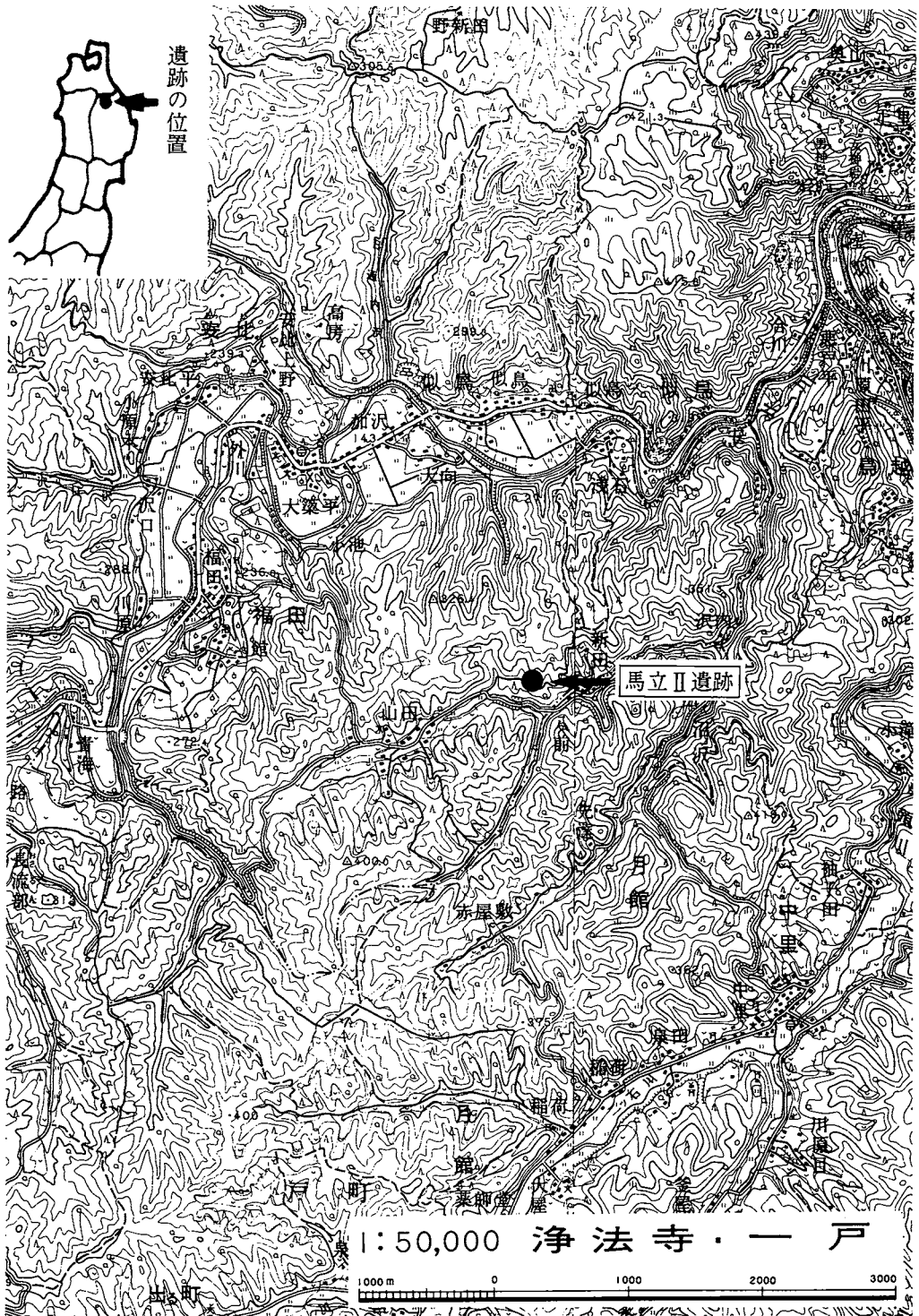
ついで昭和56年5月に路線が公表されたことに伴い、文化課によって道路用地内の分布調査が実施され、約30遺跡が確認された。翌57年には安代町所在の5遺跡について発掘調査範囲の確認が行われた。

昭和58年に至り、安代町に所在する遺跡の発掘調査が文化課の調整を経て当埋蔵文化財センターに委託された。湯の沢Ⅲ・繋沢Ⅱ・石神Ⅱ・関沢口遺跡の4遺跡である。そのほか、文化課によって浄法寺に所在する12遺跡の現地確認調査が実施された。

昭和59年には、安代町に所在する関沢口・水神の2遺跡と浄法寺町所在の柿ノ木平Ⅲ・五庵Ⅰ・五庵Ⅱ・海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ・沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰの9遺跡について発掘調査が委託された。また、文化課によって二戸市、一戸町所在の各6遺跡の発掘調査範囲の確認が行われた。そのほか、新たに発見された浄法寺町の五庵Ⅲ・広沖遺跡についての現地確認調査が実施され、浄法寺町所在の発掘調査対象遺跡は14遺跡となった。

昭和60年は、前年からの継続調査となった沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰの3遺跡のほか、浄法寺町に所在する田余内Ⅰ・田余内Ⅱ・五庵Ⅲ・安比内Ⅰ・広沖の5遺跡と二戸市所在の西久保・大久保の2遺跡、一戸町所在の堀切・竹林・親久保Ⅲの3遺跡の発掘調査が委託された。

昭和61年には、二戸市大久保・太田・馬立Ⅰ・馬立Ⅱ・青ノ久保の5遺跡と一戸町親久保Ⅰ・親久保Ⅱ・親久保Ⅲ・親久保Ⅳ遺跡の発掘調査が委託され、第8次施行命令区間のすべての遺跡について調査することとなった。



第1図 遺跡位置図

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の位置

馬立II遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線<sup>にのへ</sup>二戸駅の南西6kmに位置し、主要地方道二戸・<sup>あしろ</sup>安代線の外川地区から市道外川・山田線にて山田地区に至り、これより1.3kmに所在する。(第1図参照) 遺跡が所在する二戸市は岩手県北の奥羽山脈と北上山系に挟まれた馬淵川<sup>まべち</sup>(延長142km)中流域にあり、東は軽米町、西は浄法寺町、南は一戸町と九戸村、北は青森県三戸町と田子町に接している。

国土地理院発行の2万5千分の1地形図では「浄法寺」(NK-54-18-15-2)、5万分の1地形図では「浄法寺」(NK-54-18-15)の図幅に含まれ、北緯40度13分2秒、東経141度14分43秒付近にあたる。また、平面直角座標(第X系)では $X = +24,100 \sim 24,170\text{m}$ 、 $Y = +35,080 \sim 35,220\text{m}$ に位置する。

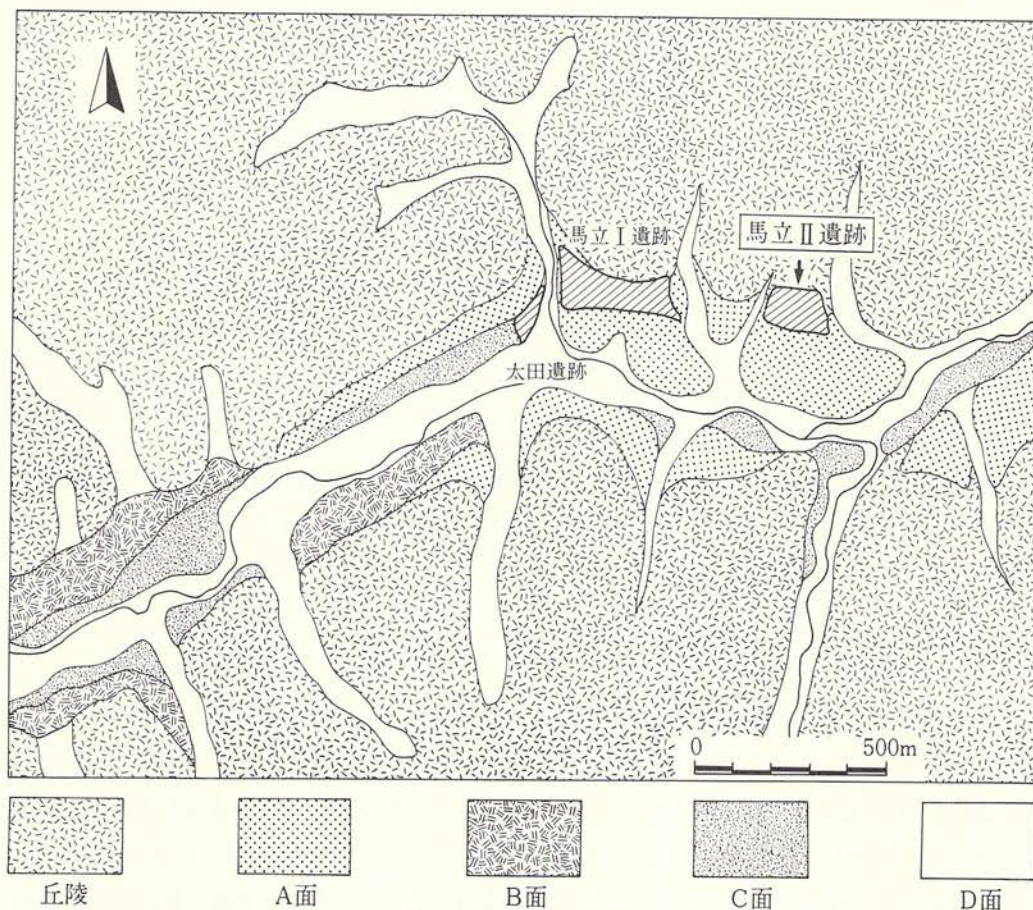
### 2. 地形と地質

二戸市は、青森県境に接する岩手県の北端にあり、東を北上山地、西を奥羽山脈に挟まれ両山地を分ける形で馬淵川が北流している。奥羽山脈は青森県から福島・栃木県境までの総延長約500kmに及び、まさに東北地方に脊梁をなす山脈である。新第3系と火山岩類を主体とした褶曲山地で山体は険しく、これに那須火山帯が併走するため、現在活動を続けている火山も多い。これに対して北上山地は、古生層・中生層とこれを貫くように介在する花崗岩類からなる隆起準平原で、馬淵川を挟みその地質構造は大きく異なる。

遺跡の所在する福田地区は、広義の奥羽山系に属し山脈の北部東側にあたる。地形分類上では、隣接する浄法寺町を中心に広がる火山性丘陵地に分類される。この火山性丘陵は300m~400mの定高性をもっており、中央部には馬淵川水系最大の支流である安比川が北東に流れている。丘陵地はさらに安比川を境にして、稲庭岳(標高1,078m)から続く稲庭岳山麓丘陵と七時雨山(標高1,060m)から連なる七時雨山山麓丘陵とに区分され、当地区は七時雨山山麓丘陵に含まれる。丘陵は安比川及び小川河によって開析をうけており、沢筋に沿って細長い谷底平野が樹枝状に分布している。安比川沿いには数段の河岸段丘が観察され、馬淵川流域と比べてその発達は良好でない。支流の沢沿いはさらに小規模な段丘が丘陵の縁辺にはりつく程度である。

馬立II遺跡は、安比川支流である沢内川西岸の小規模な丘段上に立地する。周辺は標高350m前後の山々が真近に迫り、近隣する山田地区は狭い谷底平野に営れる典型的な山間地集落の様相を呈する。第2図の地形分類図によって若干の説明をする。

**A面** 周辺部で最も高い段丘面であり、馬立I遺跡調査区の大半と本遺跡調査区の一部を載



第 2 図 地形分類図

せる。日本道路公団の試錐調査では、ローム層下位に層厚 9 m 前後に及ぶ凝灰質の二次的シラス層が堆積し、火山灰砂段丘の性格をもつ。馬淵川流域での福岡段丘（洪積世低位段丘）に相当するものと考えられる。沢内川流域では、馬立 I・II 遺跡周辺と相ノ沢地区周辺で比較的明瞭な面が観察されるが、これらのほかに尾根の先端部にはりつく小規模なものとなる。標高は 265m～255m、全体に開析が進み段丘面は緩い傾斜をもつ。下位の面との標高差は約 10m である。

**B 面** 緩傾斜地形を一括した。標高は A 面と同じであるが丘陵の縁辺からなだらかに高度を下げ、明瞭な段丘崖はみられない。調査区以西（上流部）では広く分布し、下位の沖積地との区分がつきにくくなる。山田地区や大久保遺跡はこの面に立地する。上流部では牧草地として利用されている。

**C 面** 沖積古期面である。標高は 250m 前後で山田地区以東では小規模な段丘地形を呈し、宅

地や畑地として利用されている。

**D面** 沖積新期面である。小さな沢による開析地も含めた。沢内川流域では水田として利用され、沢筋では牧草地が多い。

道路公団の試錐調査資料によれば、本遺跡の基盤は末の松山層の凝灰質砂岩でこの上位に二次的シラス層、ローム層が堆積している。

<引用：参考文献>

石川長喜・他（1986）：五庵Ⅰ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集

浜沢満郎・他（1985）：海上Ⅰ・Ⅱ・大久保Ⅰ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第90集

多田元彦・他（1974）：縮尺20万分の1土地分類図付属資料（岩手県） 経済企画庁総合開発局

阿部文夫（1979）：北上山系開発地域土地分類基本調査（浄法寺） 岩手県

石野公一（1972）： ” ” （一戸） 岩手県

サンコーコンサルタント（1986）：東北自動車道八戸線二戸地区構造物土質調査土性縦断面図  
日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所

※地形分類図の作成にあたっては、5千万分の1地形図の検討と空中写真の判読を主体とした。

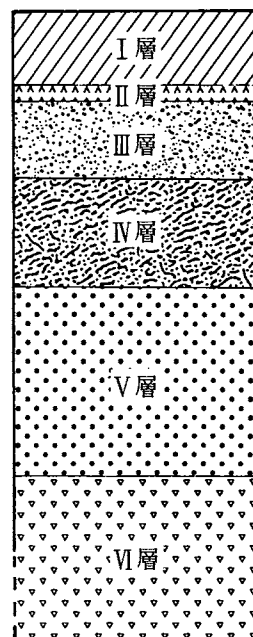
### 3. 基本層序

調査区域内は第4図に示すように大部分が畑で占められている。これらの畑は近年大規模な造成によって改変されたものである。東西に走る林道を境に中央部から西側地域にかけては地山層の削平と数mに及ぶ盛土整地が行われている。東側は傾斜地のため土砂の移動が著しく、表土は遺存していない。このように調査区域全体が攪乱と削平を受けていることから、地点によって土層堆積状況に大きな差異が見られる。本遺跡の基本層序は以下のように大別される。

**I層** 黒色～黒褐色（7.5YR $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{2}$ ）砂質シルト 表土（耕作土）である。層厚は15cm～25cmである。

**II層** 灰黄褐色（10YR $\frac{5}{2}$ ～ $\frac{6}{2}$ ）細粒浮石 窪地などに塊状を呈して堆積する。火山灰分析により十和田a降下火山灰と同定されている。層厚は1cm～10cmで一定していない。

**III層** 黒色（7.5YR $\frac{3}{1}$ ）シルト質 浮石粒の混入は少なく、やや粘性に富む。傾斜面下方に堆積し、層厚は10cm～20cmである。



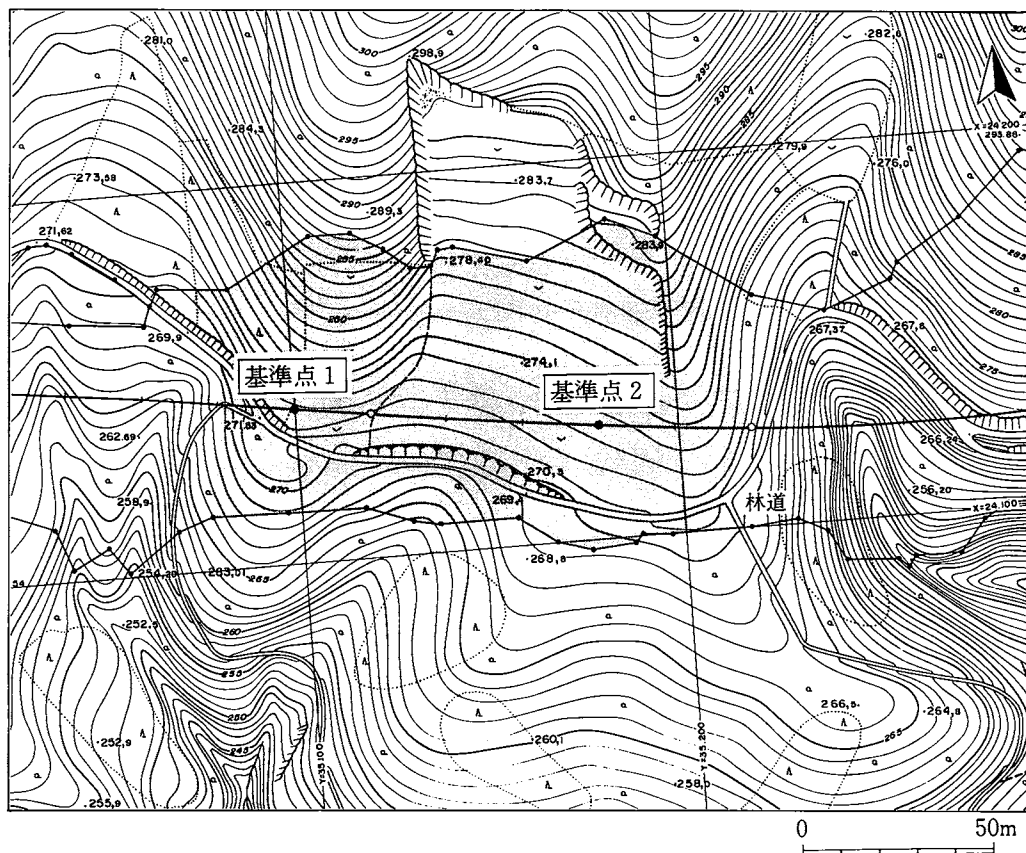
第3図 基本土層柱状図

IV層 暗褐色～黄褐色 (7.5Y R $\frac{3}{4}$ ～ $\frac{5}{6}$ ) 砂質 浮石を多く混入し柔らかい。傾斜面下方では暗褐色となり粘性も増す。層厚は10cm～30cmである。遺物を多く含んでいる。

V層 黒色 (7.5Y R $1\frac{1}{4}$ ～ $\frac{2}{1}$ ) シルト質 灰黄色浮石を多く混入し堅く締まっている。上位には中礫浮石と考えられる粗粒の浮石を塊状に含む。層厚は10cm～60cmと幅がある。上位に僅かな遺物を含んでいる。

VI層 褐色 (7.5Y R $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{6}$ ) シルト質 八戸浮石流火山灰と考えられるものである。上位は浮石を多く混入し、傾斜面下方ではより暗色となる。堅く締まり粘性に富む。層厚は不詳である。

遺構の検出面はIV層上位～V層中位であり、遺構外出土遺物はIII層～IV層で出土したものが多。



第4図 馬立Ⅱ遺跡周辺地形



#### 4. 周辺の遺跡

岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧（昭和61年7月発行）によれば、馬立Ⅰ・Ⅱ遺跡の周辺地域（二戸市・一戸町・浄法寺町）には423遺跡が登録されている。このうち、近年の道路網整備を中心とする開発行為によって発掘調査された遺跡は約170遺跡に及び、縄文時代早期～近世に至る多くの考古学資料が畜積されてきている。第5図にはこれらのうち58遺跡の分布を示した。以下にその概略を時期別に述べることとする。

##### 〈縄文時代〉

早期の資料は県中央部や県南部に比べて多い。二戸市長瀬B遺跡・家の上遺跡、一戸町小井田Ⅲ遺跡、浄法寺町飛鳥台地Ⅰ遺跡・五庵Ⅰ遺跡からは住居跡が検出されており、一戸町平船Ⅲ遺跡や当遺跡と同地内にある大久保遺跡からも良好な資料が得られている。これらのほとんどは貝殻文系土器を主体とするが、飛鳥台地Ⅰ遺跡の住居跡はこれに先行する日計式押型文を伴う。馬立Ⅰ遺跡からはこれまでの総数を上回る16棟（建て変えを含む）の住居跡が検出されており、該期の集落跡の研究に大きな指標となろう。

前期の遺物は各地域で出土している。前葉では飛鳥台地Ⅰ遺跡や二戸市中曾根遺跡から大型住居跡を含む集落跡が確認されており、後葉では浄法寺町沼久保遺跡や二戸市上里遺跡から住居跡が検出されている。なお、中曾根遺跡や沼久保遺跡からは大木系土器の出土がみられ、この分布域の北限には興味深い資料と言えよう。

中期前葉の遺跡は少なく上里遺跡で数棟の住居跡が検出されているだけであるが、中葉になると二戸市荒谷A遺跡や一戸町馬場平Ⅱ遺跡で大規模な集落跡が確認されている。当期は大木系土器が北に広がり、馬場平Ⅱ遺跡は文化圏の変遷が顕著にうかがわれる遺跡である。後葉～末葉では一戸町田中1・2・4・5遺跡・小守A遺跡、二戸市上村遺跡・荒谷A・B遺跡・沢内B遺跡などで住居跡が検出されており、これらの中には該期に特有な複式炉を有する住居跡も多い。馬立Ⅰ遺跡からもこの時期の住居跡が検出されている。

後期前葉には一戸町親久保Ⅱ遺跡、二戸市長瀬A遺跡・沢内B遺跡などで住居跡が検出されている。しかし、いずれも1～5棟前後の小規模な集落である。これに対し馬立Ⅰ・Ⅱ遺跡では総数30棟を越える住居跡が検出されており、大規模な集落跡と言える。なお、特殊な遺構としては配石郡や土埆郡が検出された二戸市下村B遺跡がある。中葉～後葉には浄法寺町桂平遺跡・沼久保遺跡・五庵Ⅰ・Ⅲ遺跡、一戸町堀切遺跡・竹林遺跡・小井田Ⅲ遺跡などがあり、いずれも比較的小規模な遺跡が多い。

晩期では多量の遺物を出土した二戸市雨滝遺跡や一戸町蒔前遺跡が有名であるが、遺構の検出例は以外に少なく、浄法寺町五庵Ⅲ遺跡と一戸町堀切遺跡から中葉の住居跡が各1棟検出さ

れているにすぎない。

#### 〈弥生時代〉

遺物は各地域で出土している。住居跡が検出された遺跡は二戸市大淵遺跡・長瀬D遺跡、一戸町小井田III遺跡・上野B遺跡、浄法寺町五庵III遺跡・沼久保遺跡がある。今回馬立I遺跡から4棟の住居跡が検出されたが、他の遺跡でも1～数棟とその規模は小さい。また、北海道との交流がうかがわれる北海道系土器も二戸市長瀬B遺跡・大久保遺跡・西久保遺跡、一戸町親久保II遺跡から数点出土している。

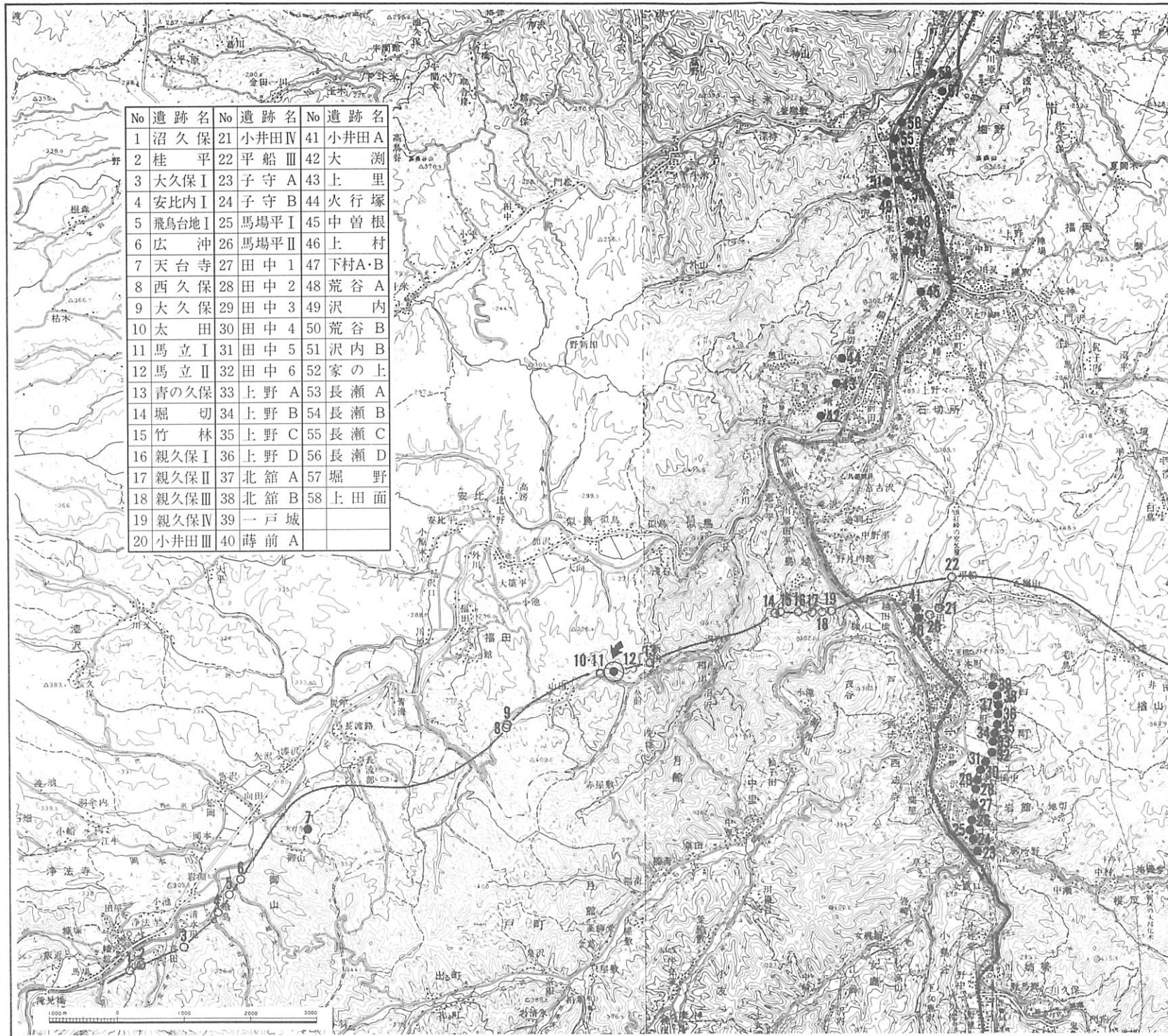
#### 〈古代〉

奈良時代の遺跡は馬淵川流域の二戸市・一戸町に広く分布し、図に掲げた大半の遺跡から集落跡が検出されている。特に古代蝦夷の地とされる爾薩体（仁左平）の地名をもつ二戸市では、長瀬遺跡群・中曽根遺跡・堀野遺跡など大規模な集落跡が存在する。しかし、浄法寺町の各遺跡からは遺物・遺構とも検出されていない。これに対して、浄法寺町内には平安時代の遺跡が多く、特に飛鳥台地I遺跡では長期にわたる大集落が営れている。同町には神亀5（728）年行基による創建とされる古刹天台寺があり、これらの遺跡との関係が興味深い。一戸・二戸地区では、奈良時代の遺跡に対して平安時代の遺跡は比較的少なかったが、近年二戸市駒焼場遺跡から大溝を伴う大規模な集落跡が検出されている。近隣の遺跡では、馬立I・II遺跡と同様に沢内川左岸の小規模な尾根上に立地する青の久保遺跡があり、奈良・平安時代の住居跡がおのおの5棟検出されている。

遺跡の所在する福田地区周辺には弘仁2（811）年文室線麻呂の蝦夷征伐に関わる部族名でないかと言われる長流部<sup>おきるべ</sup>や前述の仁左平のほか、律令体制の崩壊とともに台頭し奥六郡の司長となる安倍氏<sup>あつび</sup>発生の地とされる安比など東北古代史に関係する地名も多い。

#### 〈引用・参考文献〉

- 石川長喜・他（1986）：五庵I遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第97集  
高田和徳（1981）：一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I～IV 一戸町教育委員会  
高橋富雄（1980）：天台寺研究の現状と課題 天台寺研究創刊号  
（1977）：天台寺—みちのく守護の寺—



第5図 周辺の遺跡

### III. 調査の経過と調査方法

#### 1. 調査の経過

昭和61年6月2日発掘用器材を搬入し現場設営を行う。翌3日から刈払いと雑物撤去にとりかかる。6月5日調査区域の数箇所に試掘トレンチを入れ、遺構検出面までの深さと土層の観察をする。6月10日から調査区画の設定ならびに区画割りの杭打ちをする。粗掘りは土捨場の関係から林道南側DⅢ区から西側AⅢ区へ開始し、続いて調査区域の西側AⅡ区から東側DⅡ区へ順に実施する。表土層が厚い区域と畑地造成による盛土の箇所は7月1日から10月1日の間に3回に分け、延べ17日間重機(ユンボ)を使用する。また、粗掘りと並行し順次遺構検出を行う。精査・実測は8月11日BⅢ区検出の土坑から開始する。10月8日現地説明会を西側に隣接する馬立Ⅰ遺跡に引き続いて開催する。10月20日空中写真撮影を実施し、10月30日調査の一切を終了し、一部埋め戻しと器材の洗浄を行う。10月31日器材を搬出し現地を撤収する。

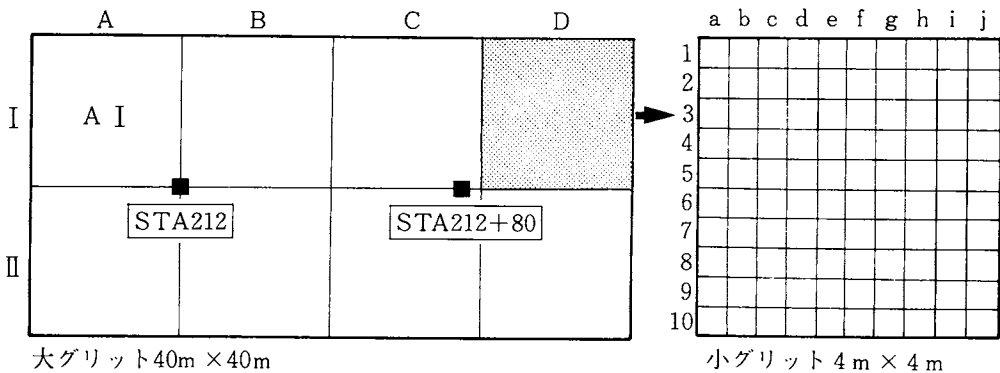
#### 2. 野外調査の方法

調査区画の設定と遺構の名称 本遺跡調査区域(第4図参照)は、東西140m、南北約70m、調査対象面積8,690m<sup>2</sup>ほどである。調査区の設定に関しては、日本道路公団設置の中心杭(STA211+80、STA212+60)を用いた。杭(基準点)の平面直角座標値(第X系)は次のとおりである。調査区画は、基準点1と2を結ぶ東西線とこれに直交し基準点2を通る南北線及び

STA211+80(基準点1) X=+24140.6855m、Y=+35099.9632m

STA212+60(基準点2) X=+24129.8508m、Y=+35179.2221m

平行する直線によって、下図のように設定した。なお、区画の南北線は真北に対し約7.8度東偏している。40mの大区画を設け西から東へアルファベットA~E、北から南へローマ数字のⅠ~Ⅲを付した。さらに4mの小区画に細分し、西から東へ小文字のアルファベットのa~j、



第6図 調査区画略図

北から南へ数字の1～10を付した。区画の名称はこれらの組合せによってA I a 1、A I a 2と呼称した。遺構名は、遺構の位置する区画のうち最も北側乃至西側の区画名を付した。また、同一区画内にある遺構には1・2（DIII b 5-1土坑、DIII b 5-2土坑）の番号を付した。

粗掘り 盛土の箇所と表土層が厚いB II～C II区は重機を使用し、他は手掘りによって実施した。

精査 住居跡は4分法で、他の遺構は2分法を原則とした。遺構内出土の遺物は必要に応じて実測や写真撮影後に取り上げた。

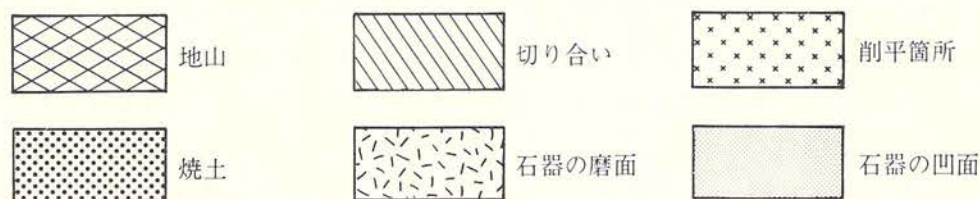
実測 実測は調査員が主体となり作業員が補助を行った。実測図の縮尺は20分の1を原則とし、状況に応じて10分の1で作製した。

写真撮影 調査員が6×7判1台（モノクロ）と35mm判2台（モノクロ、カラーリバーサル）を使用して撮影した。

### 3. 室内整理の方法

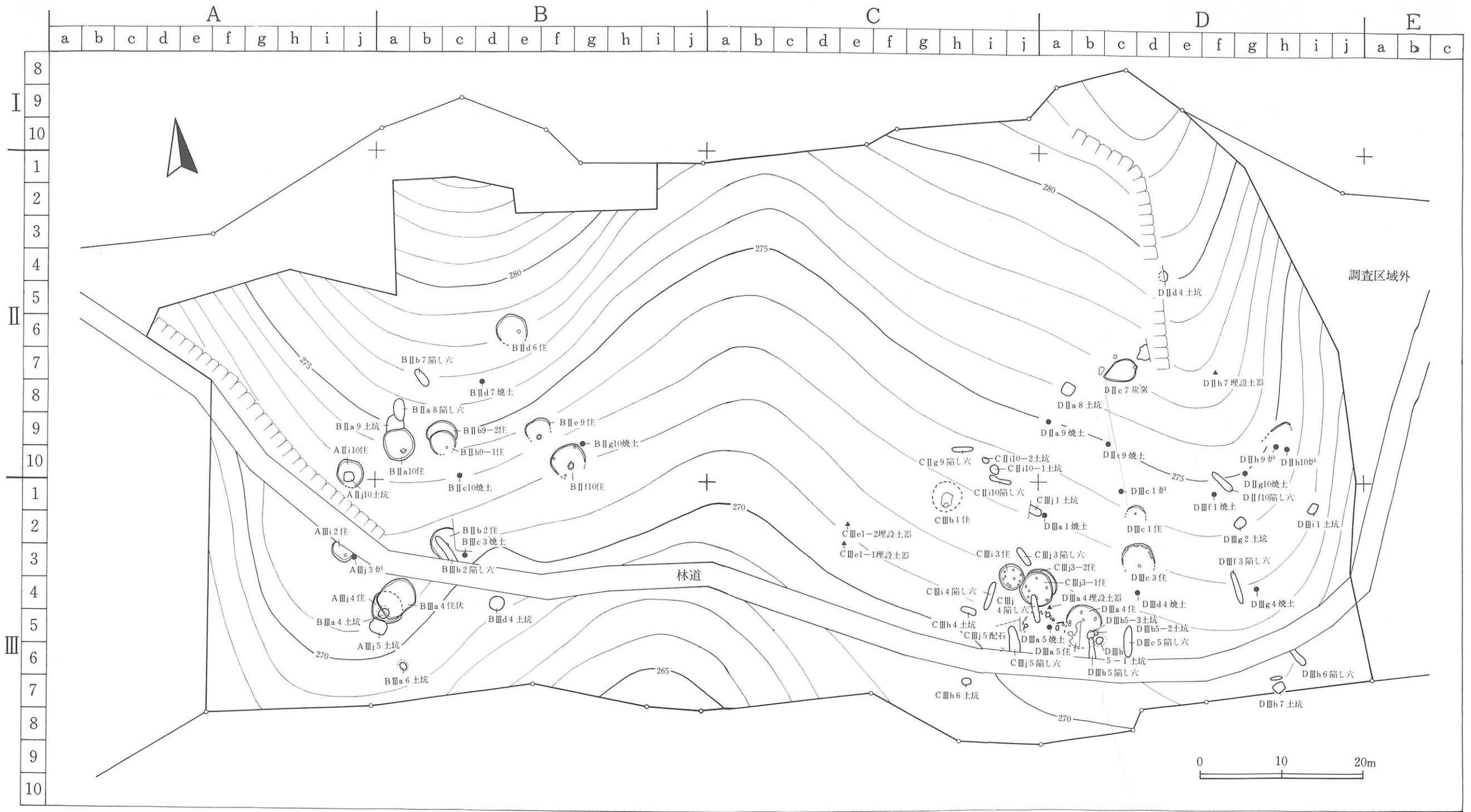
遺物の処理 調査現場で残った水洗とラベルの記入を行い、種類ごとの仕分け、接合復元、実測、トレース、拓本、写真撮影の順に作業を行った。

遺構図版 第一原図の点検、修正、合成、トレース、図版作製の順に整理を行った。図版の縮尺は住居跡・陥し穴状遺構・配石遺構・炭窯が60分の1、土坑が40分の1、他遺構には各々に縮尺を掲載した。図版中の地山、切り合い、削平箇所、焼土、石器の磨面、石器の凹面は次のようなスクリントーンを使用している。石はアルファベットのS、土器はP、小穴・柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>…で図示している。



遺物図版 遺構別に配置し、遺構外出土遺物は種類ごとに掲載した。縮尺は土器・土器拓影・礫石器が3分の1、剥片石器・土偶・土製品が2分の1を原則としたが器種の大小に応じて適宜縮尺を変えて掲載した。

写真図版 遺構と遺物の縮尺は不定である。遺物番号は遺物図版と符合している。



第7図 馬立II遺跡遺構配置図

## IV. 検出遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡18棟、竪穴住居跡状遺構1棟、炉跡・焼土遺構16基、土坑24基、陥し穴状遺構14基、配石遺構1基、埋設土器4器、炭窯跡1基である。竪穴住居跡は地床炉乃至石囲炉（配石炉）を伴い、大部分が縄文時代後期初頭頃に属するものである。土坑7基と炭窯跡が現代のほかは、縄文時代（後期を主体とする）に比定されるものが多い。

出土した遺物は土器、土製品、土偶、剥片石器、礫石器、石製品等である。土器は完形品が少なく破片が多くを占めている。

以下縄文時代の竪穴住居跡から順に記述することとする。

### 1. 縄文時代の竪穴住居跡

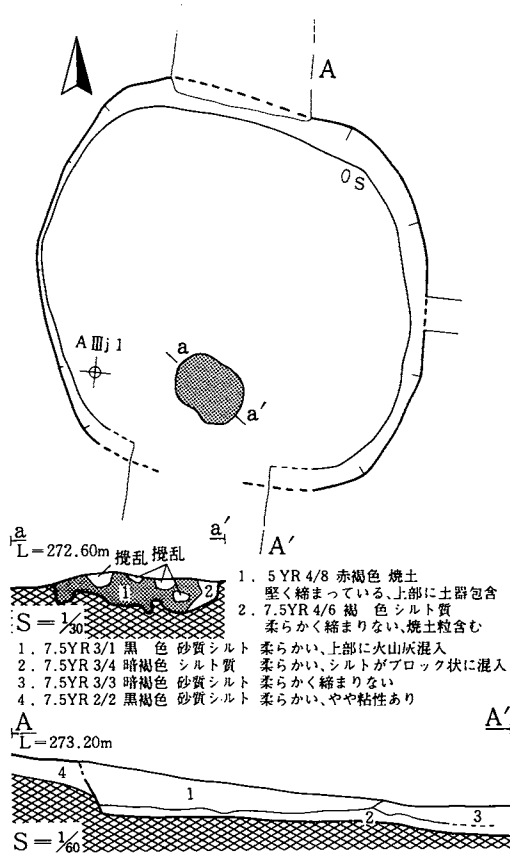
A II i 10住居跡（第8図、写真図版4・38）

位置 調査区域西側の尾根中央西寄りに位置する。北東側3.5mにB II a 10住居跡がある。本住居跡の南側上位にはより新しいA II j 10土坑が重複している。検出 IV層上面で遺構北側を半円状の暗色部として検出している。

形態・規模 南側壁は土砂等の流失で遺失しており明確にされていない。北半の検出状況から不整な隅丸方形を呈していたと推測される。規模は床面で東西2.9m、南北は推定2.7mである。埋土 2層に分けられる。埋土の主体を占めるのは黒褐色の砂質シルトで、上部に十和田a降下火山灰が僅かに混入する。床面上位には暗褐色のシルト質土が堆積する。壁 北半部はIV層～VI層上位、南半部はIII層とIV層の混合土中にあるため南壁は明確にされなかった。壁高は北東壁45cm、東壁33cm、西壁14cmである。

床 全体的に平坦であるが傾斜下方の南側に僅かに傾斜して下がる。特に堅い締まりは認められない。柱穴・土坑 検出されていない。

炉 中央部南壁寄りに地床炉がある。上部はA II j 10土坑により攪乱を受けている。焼土は



第8図 A II i 10住居跡

赤褐色を呈し全体に堅く締まり、60cm×45cmの楕円形状に広がり床面より数センチ盛上がっている。厚さは最大13cmを測り、中に粗製深鉢の破片を多く含む。

#### 遺物 (第9図1～20)

**土器** (1～12) 1・2は炉内から破片として出土している。他は埋土中からの出土である。1は底部からやや屈曲しつつ外傾して立ち上がる器形で、口縁部に最大径をもつ。底部は体部に比べてやや厚手の網代痕である。火熱を強く受け器表は脆い。口径27.2cm、器高32.6cm、底径9.6cmである。2は深鉢の体部～底部片である。底部から直立気味に立ち上がり円筒状に近い器形を呈する。底面に網代痕が見られる。胎土は小礫や砂粒が多く、全体に火熱を受け極めて脆い状態である。1・2の地文は共に単節斜縄文(RL)である。3は内面調整を丁寧に施した小形鉢である。底面から直線的に外傾して立ち上がる。胎土に砂粒を多く含むものの、焼成は良い。体部は斜縄文(RL)が施される。5～9は沈線が施文される口縁部片と体部片である。5はやや内湾する小波状の口縁部で、口縁に平行した2条の沈線とその下位には曲線の沈線文が施される。6は平縁で3条の横位沈線が施文される。7は横位の平行沈線文と渦巻状の沈線文が施文されている。8は曲線の沈線で縄文帯と無文帯を区画している。9は地文がなく曲線の沈線が施文されており、壺の体部片と思われる。10～12は粗製土器の口縁部片で、10は複合口縁部がナデ調整され、12は口縁に平行する1条の原体圧痕が施されている。

**石器** (13～20) 石錐(1点)、楔形石器(2点)、搔・削器(1点)、不定形石器(2点)、フレイク(4点)、磨石等(2点)が埋土中から出土している。フレイクの図面掲載は割あいした。13は頭部がつまみのない棒状の石錐で、錐部の断面は三角形を呈し両面から調整加工を施している。楔形石器は平面形が四辺形を基本とし、対辺する縁辺部に使用剝離痕を有する14と破片と思われる15がある。17の搔・削器は曲刃状で両側縁から刃部加工を施している。15・18は側縁の一部に刃部加工を施した不定形石器である。19・20は磨石で、19の側縁の一部は磨滅し平らになっている。20は半分以上を欠損しているが両側縁はツルツルに磨滅し、端部は粗く三角形の面取りが施されている。

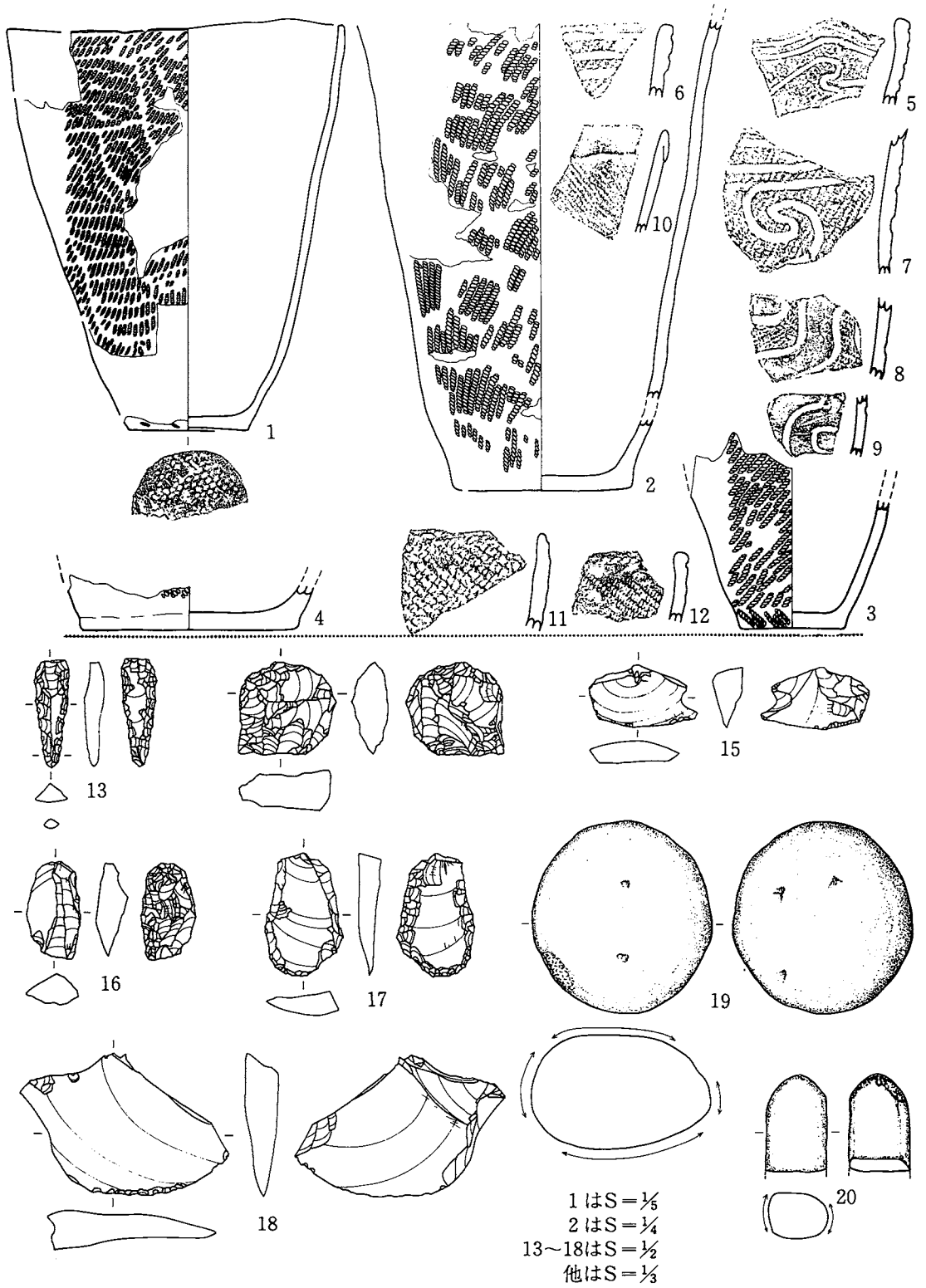
#### A III i 2 住居跡 (第10図、写真図版5・39)

**位置** 調査区域西側尾根の南西寄りに位置する。A III j 3 炉跡と東側で重複し、北側は林道で大きく切られている。重複する遺構との新旧関係は本住居跡が新しく、A III j 3 炉跡が古い。

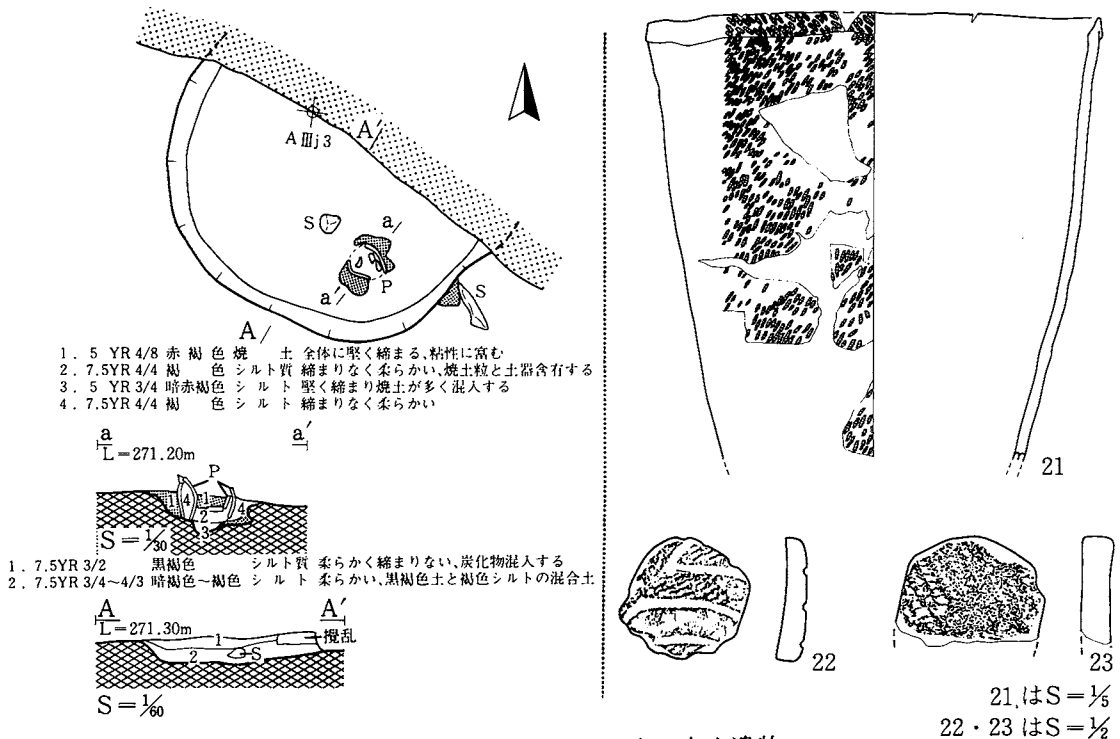
**検出** IV層上面で半円状の暗色部として検出している。

**形態・規模** 現存する南半部は半円状であることから、平面形はほぼ円形を呈していたと推測される。現存する床面の規模は東西2.5mである。**埋土** 黒褐色と暗褐色～褐色のシルト質土で構成されるが、木根の混入が多く柔らかく締まりはない。上位には炭化物が、下位には褐色





第9図 A II i 10住居跡出土遺物



第10図 AⅢi2 住居跡・出土遺物

シルトの混入が多い。壁 壁高は西壁が23cm、南壁15cm、東壁12cmである。

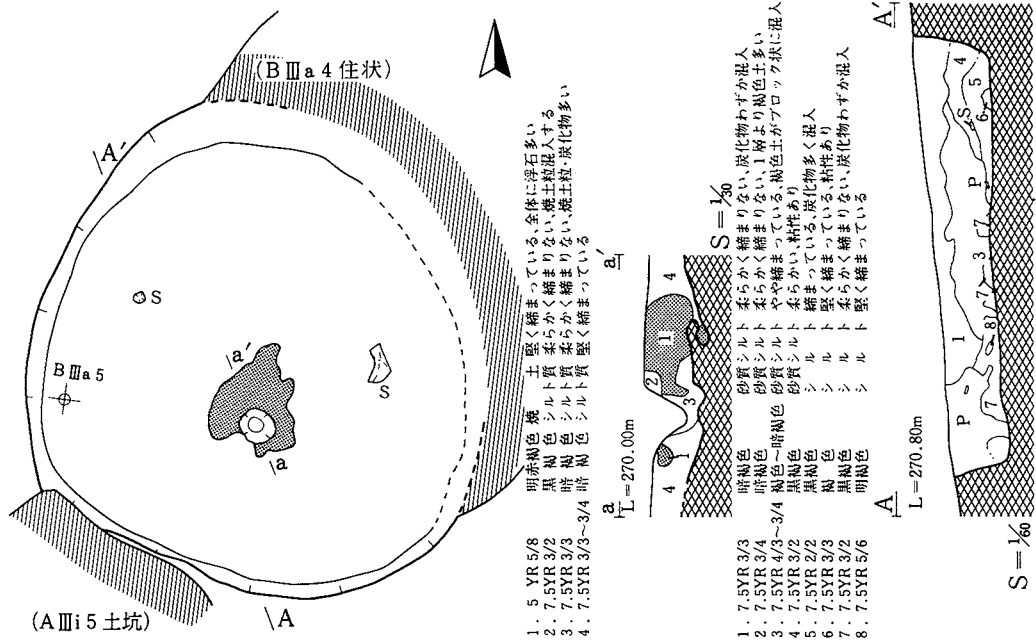
床 VI層のシルト上面にある。小さな凹凸があるものの、ほぼ平坦である。柱穴・土坑 検出されていない。

炉 南東の壁寄りに地床炉がある。焼土は50cm×36cmに広がり、中央部に深鉢が横位に埋置された状況で出土している。底部の欠損した深鉢で強く火熱を受けややボロボロしており、焼土上面の胴部はつぶれている。土器の内部にも焼土の形成が見られる。

#### 遺物 (第10図21~23)

土器 (21) 炉跡中央で横位に埋置された状況で出土した深鉢である。土器内側にも焼土が形成されていた。体部下半~底部は欠損している。体部は外傾し、口縁部付近では直立気味に立ち上がり、現存する形状は円筒状を呈する。口縁部は複合口縁をなし体部と同じ原体で斜縄文 (RL) が施文される。口唇部は内側からつまみ出すようにつくられ薄手になる。炉内に埋置された側の外面には焼土が密着し、器表は脆くザラザラする。口径は30.4cmである。拓本の掲載は割あいたが埋土上位から粗製土器片が出土している。

円盤状土製品 (22・23) 埋土下位から出土している。縄文土器の破片を人為的に打ち欠いて円盤状に仕上げているもので、23は半分程欠損する。22は径3cm・厚さ5mm、23は径3.9cm・



第11図 A III j 4 住居跡

厚さ7mmを測り、周縁部には調整を施していない。

A III j 4 住居跡 (第11図、写真図版6・39)

**位置** 調査区域西側の尾根南寄りに位置する。北東側でB III a 4 住居跡状遺構と南西側でB III a 4 土坑と重複する。重複する遺構の新旧関係は新しい順にB III a 4 住居跡状遺構→本遺構→B III a 4 土坑と思われるが、本遺構→B III a 4 住居跡状遺構の可能性もある。**検出** B III a 4 住居跡状遺構の底面が南西部で切れていることと、炉の検出により遺構の存在が判明したものである。

**形態・規模** 北～東側にかけてB III a 4 住居跡状遺構と重複し、正確な形態・規模は不明である。検出された西側の状況から不整形であったと推測される。床面の規模は3.4m×3.3m程かと思われる。**埋土** 全体に不自然な堆積状況を呈している。埋土上位には暗褐色の砂質シルト、中央から北壁際にかけて暗褐色～黒褐色の砂質シルト、床面上には黒褐色のシルトがブロック状に堆積している。これらの埋土堆積状況は、人為的作用によるものと思われる。壁 IV層～V層にある。壁高は北西壁62cm、西壁50cm、南壁38cmである。

**床** VI層上面にあり、ほぼ平坦で締まっている。**柱穴・土坑** 検出されていない。

**炉** 中央部やや南寄りに地床炉がある。焼土は80cm×75cmの不整形に広がるが、南側に口径

30cm、深さ15cm程の小穴があり土器埋設炉であったと思われる。焼土は明赤褐色を呈して堅く締まり、厚さは最大20cmに及ぶ。

#### 遺物 (第12図24～45)

**土器** (24～30) 30は床面、26は埋土下位、他は埋土中からの出土である。30は深鉢の体部片で斜縄文 (RL) が施されている。24は有孔吊り手状小突起をもつ小形鉢である。底部から内湾気味に外傾して立ち上がり、体部中央でほぼ直立し、口頸部が外傾する器形である。有孔突起は両側にあり、口頸部と体部にある。2個が一对をなしている。体部中央の突起間に横位隆帯を巡らし文様帯を区画している。文様帯は沈線により縄文帯と無文帯を区画し、かつ「L」字状または逆「L」字状の文様を描いている。体部下半には平行沈線により帯縄文を描く。無文帯は丁寧な器面調整が施されている。

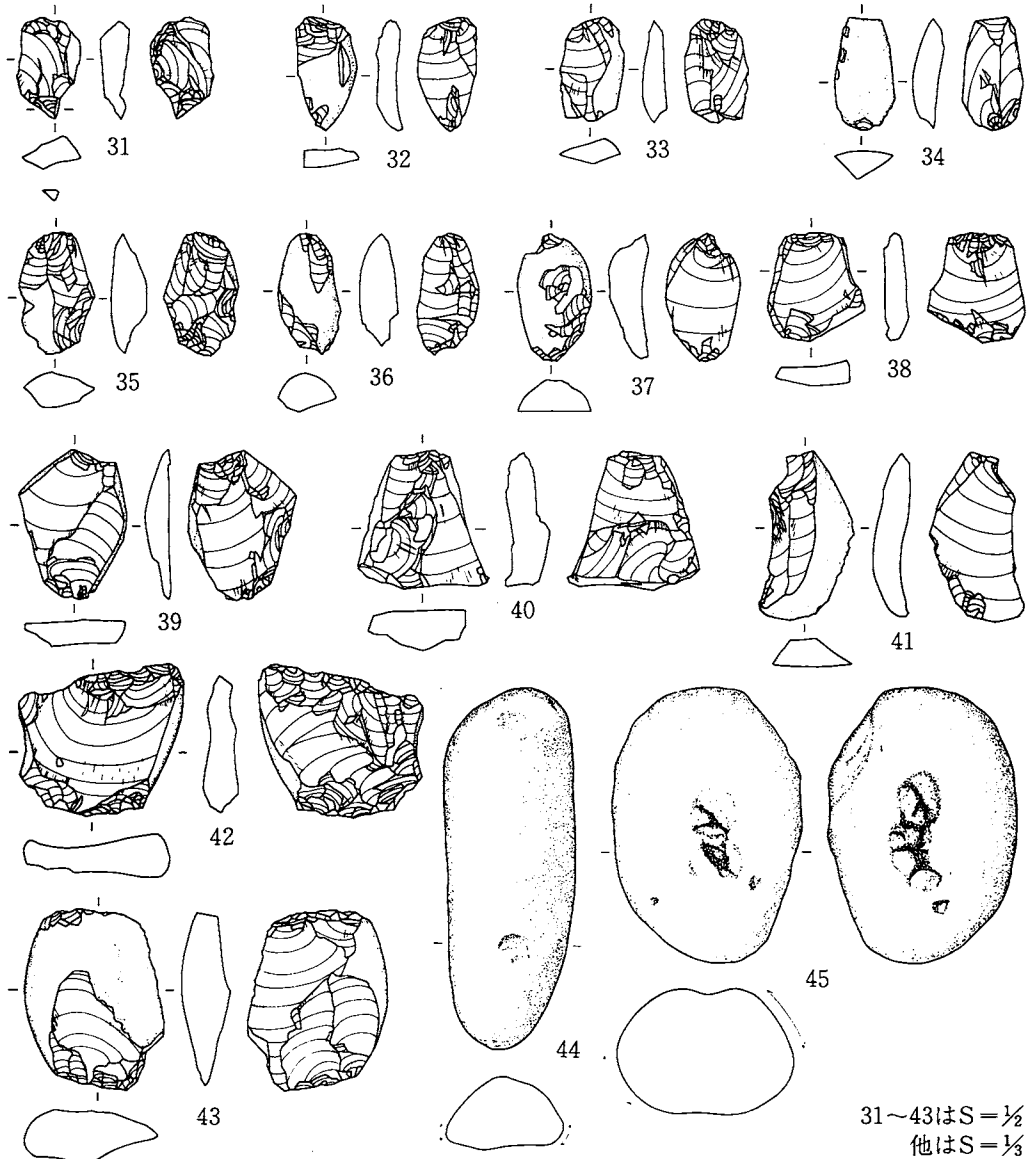
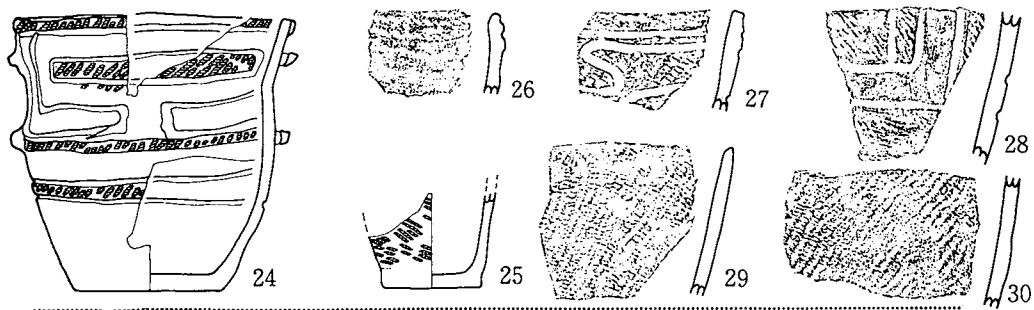
25はミニチュア様の小形土器の底部である。細い原体により地文が施されている。内面には煤が付着している。胎土には石英砂が多く混入する。26は内湾する鉢の口縁部で、口縁に平行する2条の原体側面圧痕文が施されている。27は口縁に平行する沈線を持ち、28は屈曲する沈線で無文帯を区画している。

**石器** (31～45) 石錐 (1点)、楔形石器 (12点)、磨・凹石 (2点)、フレーク (5点) 等がある。剥片石器は埋土中位から一括出土したものである。なお、フレークの図面掲載は割あいた。31の石錐は頭部が素材剥片の形状をそのまま残し、錐部は短く断面は三角形を呈する。楔形石器は平面形が四辺形を基本とし、対辺する縁辺部に使用剥離痕のある38・42と碎片の32～37・39～41・43がある。石質はいずれも北上山地産のチャートである。44・45は磨石・凹石の機能を合わせ持つもので表裏面とも凹痕を有し、対辺する側縁は特に磨滅し平らになっている。

#### B II a 10住居跡 (第13図、写真図版7・40・41)

**位置** 調査区域西側の尾根中央付近に位置する。北西側でB II a 9土坑と重複し土坑を切っていることから、遺構の新旧関係は本住居跡が新しくB II a 9土坑が古い。**検出** IV層上面で遺構南側を半円状の暗色部として検出したものである。

**形態・規模** 平面形は南北方向にやや長い楕円形状を呈している。規模は床面で南北3.6m×東西3.35mであるが、南東～南側の壁はやや不明確である。**埋土** 4層に大別される。上位から暗褐色の砂質土、黒色の砂質シルト、黒色のシルト質土、暗褐色のシルトで構成され、3層は壁際で厚くなり遺物を多く包含する。この埋土の堆積状況は、自然堆積によるものと思われる。**壁** IV層下位～V層中にあり、60～70度位に外傾して立ち上がる。壁高は北壁85cm、東壁40cm、西壁45cm、南壁20cmである。



31~43はS=1/2  
 他はS=1/3

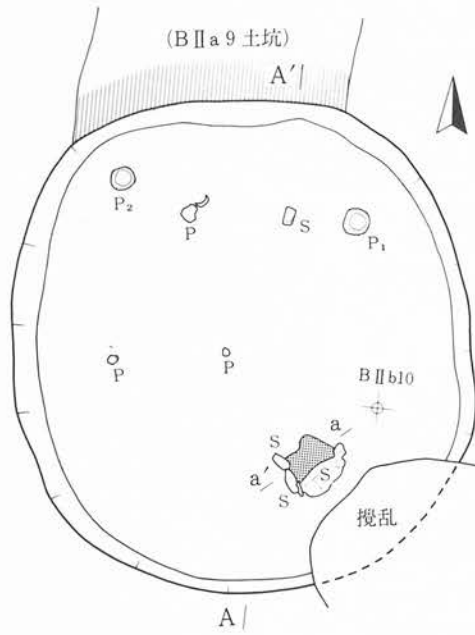
第12図 A IIIj4 住居跡出土遺物

床 北側はⅥ層上面のシルトで締まっているが、南側はⅤ層下位の砂質土でやや柔らかい。全体に平坦であるが僅かに南側へ低くなっている。柱穴 柱穴状の小穴が北東隅と北西隅にある。口径と深さはP<sub>1</sub>が24cm×22cm・33cm、P<sub>2</sub>が20cm×16cm・31cmである。

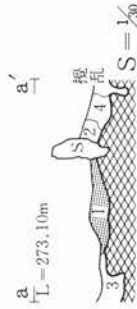
炉 南東壁寄りに石囲炉がある。大小3個の安山岩質亜角礫を「く」の字状に埋置している。炉内及び周辺が攪乱を受けており礫の抜き取り痕は明確ではないが、炉石の上部に大き目の亜角礫が2個あったことから四方に礫が埋置されていたと推測される。焼土は床面下約7cmで検出され、40cm×25cmの広がりをもつ。赤褐色を呈し堅く締まっている。厚さは最大8cmを測る。

#### 遺物 (第13～15図46～86)

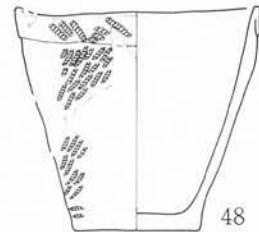
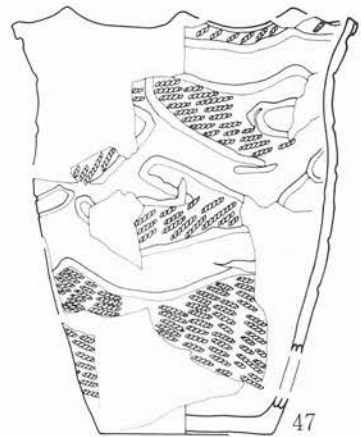
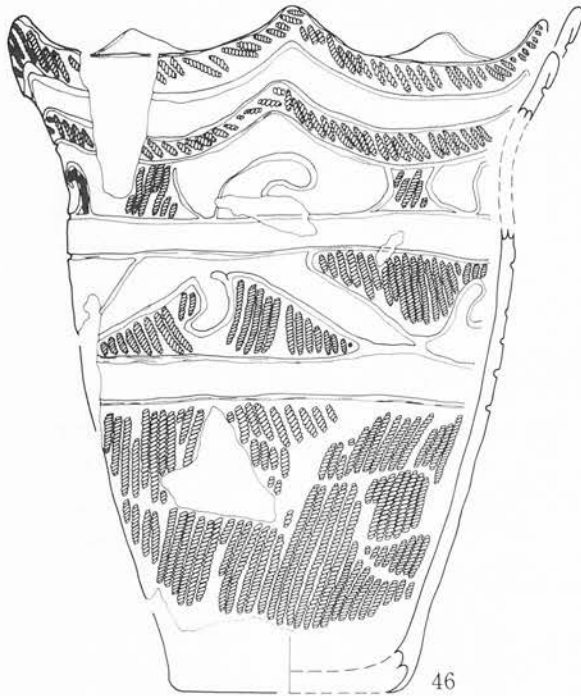
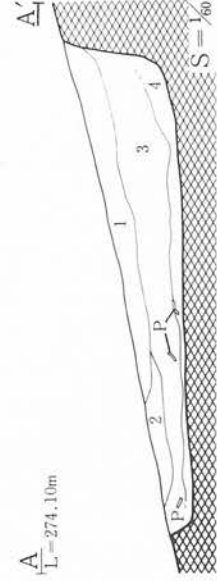
土器 (46～66) 50は床面、47・56・65・66が埋土下位、他は埋土中～上位から出土している。50は口頸部の欠損する小形の壺で胴下部が焼成前に切断されている。切断は外面の下方から幅の狭い工具で施され、切断部は鋸歯状を呈している。また、切断部の一箇所に段差があり、上下の接合の際の目印となる。器形は胴下部に最大径をもち、その箇所で屈曲し、胴上半部は内湾気味に窄み頸部へ続く。胴部の左右両側の上下に2個一対の有孔突起をもつ。施文は屈曲する横位平行沈線により切断部の上部にのみ施文される。46は埋土中位から出土の5波状口縁をもつ鉢で、底部が欠損している。器形は底部付近から胴上部にかけ直線的に外傾して立ち上がり、頸部が僅か窄み口縁部は直線的に外傾する。文様は沈線により施文される。口縁部には口縁に平行する波状沈線で、無文帯と縄文帯とが区画されてある。体部の上部及び中央付近には横位平行沈線で無文帯を構成し、体部と頸部の文様帯を区画している。頸部には曲線沈線により波頭状の文様を描き、体部には斜行波頭状、鱗状を呈す沈線で文様が施文される。縄文帯及び体部下半の地文は、沈線施文後に斜行・縦走縄文(RL)が施文される。47は小波状口縁の小形の鉢である。体部上部が僅かに内湾気味を呈し頸部がややしまる。口縁は短く外反している。口縁部には幅の狭い隆帯をもち複合口縁状を呈す。口縁直下には平行する波状沈線により無文帯を区画し、頸部から体部中央は屈曲する浅い沈線により縄文帯と無文帯とを区画する。地文は単節縄文(LR)である。胎土には小礫や砂粒が多く混入する。底部に笹葉状の圧痕がある。48は複合口縁をもつ小形の鉢で、底部から直線的に外傾して立ち上がる。口縁部と体部は単節斜縄文(RL)が施される。口径9.8cm、器高9.0cm、底径5.0cmである。49は複合口縁をもつ深鉢の口縁部から体部の破片である。口縁部には斜縄文、体部には縦走縄文が施される。外面には黒斑があり、小礫や砂粒の混入が多い。焼成は脆く全体に器表がザラザラする。54・55は鉢及び深鉢の底部である。54は小形鉢で底面が上げ底状につくられる。55は底部と体部とを密着させるため最下端に、指頭状の圧痕が見られる。体部に無節縄文(Lr)が施文される。56～60は深鉢の口縁部で、59は平縁で他は波状口縁である。いずれも口縁に平行する沈線が施されている。57にはボタン状の突起がある。61・62は深鉢の体部片で屈曲する沈線または渦巻状の沈線



1. 5 YR 4/8 赤褐色 硬 土 堅く縮まっている。硬皮は良好である。  
 2. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト質 縮まりなく柔らかい。黒色土がブロック状に混入する。  
 3. 10 YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 全体に堅く縮まり、炭化物と焼土粒を微量に混入する。  
 4. 10 YR 4/4 褐色 シルト質 やや堅く縮まっている。

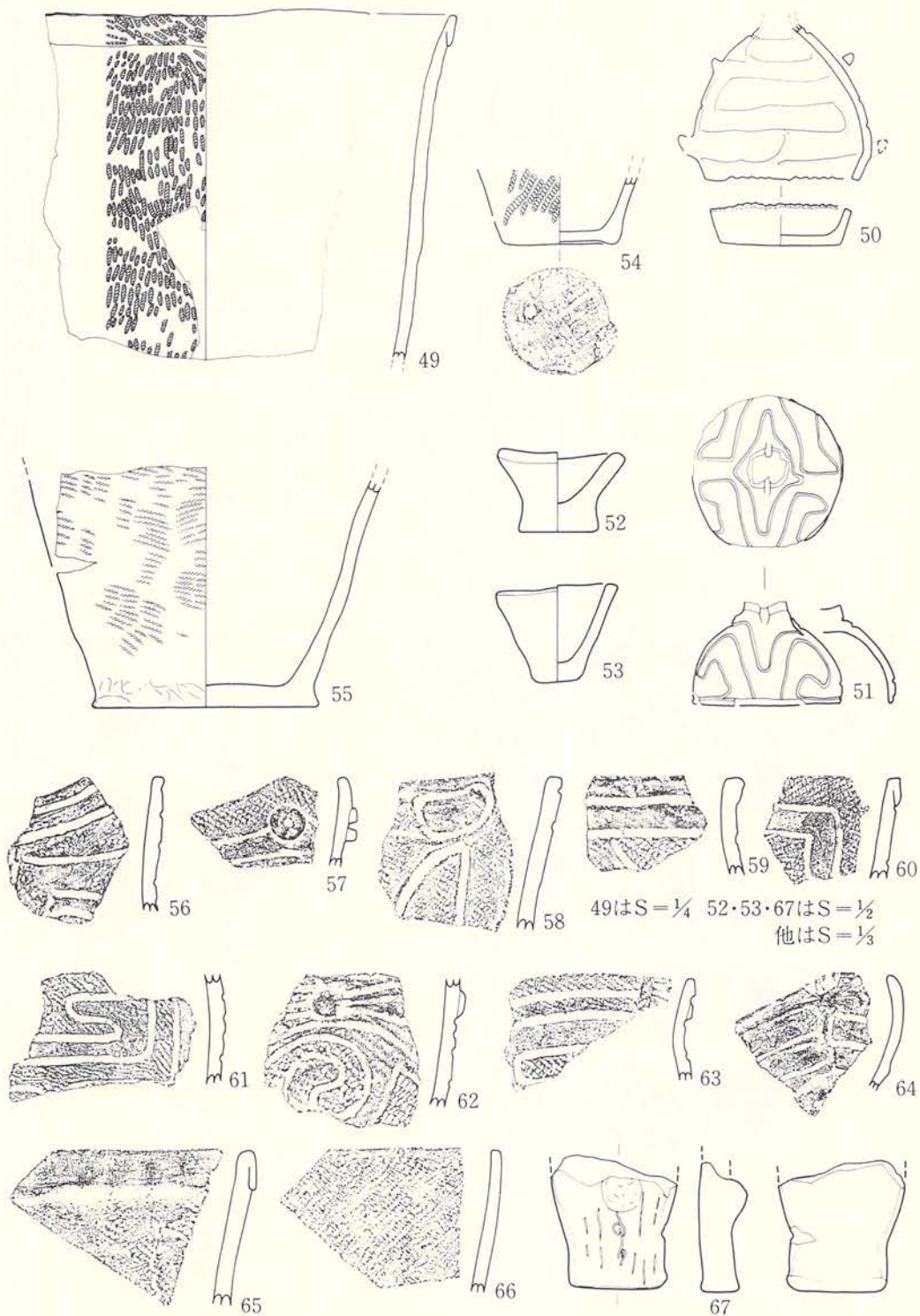


1. 10YR 3/3 暗褐色 砂 質 縮まりなくほくほくしている。植生根多い。  
 2. 10YR 2/1 黒褐色 砂 質 粘性なくほくほくしている。  
 3. 10YR 1/7 黒 色 シルト質 粘性に富みやや縮まっている。土器片を含有する。  
 4. 10YR 3/3-3/4 暗褐色 シルト 全体に堅く縮まっている。微量の炭化物を含有する。



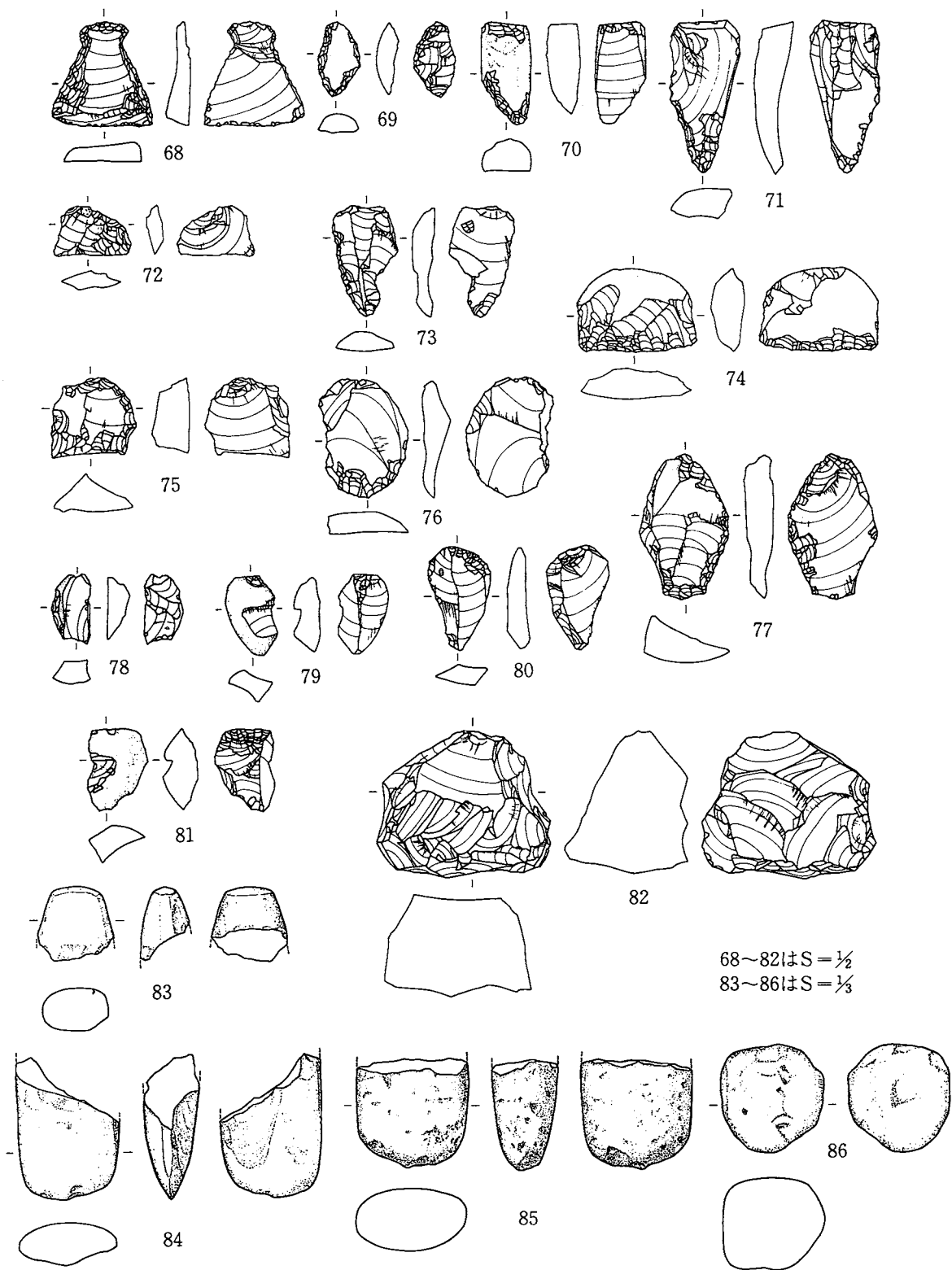
46~48はS=1/3

第13図 B II a10住居跡・出土遺物(1)



第14図 B II a10住居跡出土遺物(2)





第15图 B II a10住居跡出土遺物(3)

をもつ。62は円形状の突起をもつ。63は外反する口縁をもつ鉢の口縁部で、平行する2条沈線及び長方形の文様帯が施される。また、口縁部直下に粘土隆帯及び小突起をもつ。64は小形の鉢で地文はなく浅い沈線が施文されている。51は蓋状の土器である。上部に紐を通す穴があったものと思われる。全体の形状は半球状の碗形を呈している。上部には台形状の張り出しをもつ。文様は沈線により施文され、下端の縁には横位1条の沈線が巡り、体部には左右対称形の曲線をなす沈線が施される。内外面は丁寧に調整されている。52・53は坏状のミニチュア様の土器で、器高は2.5cmと2.9cmを測る。器表はいずれも無文である。

**土偶 (15)** 上半部を欠損した板状土偶で、現存部に径1cm、厚さ5mmほどの円錐形を呈する貼付があり、その下位に細い沈線で文様を描いている。

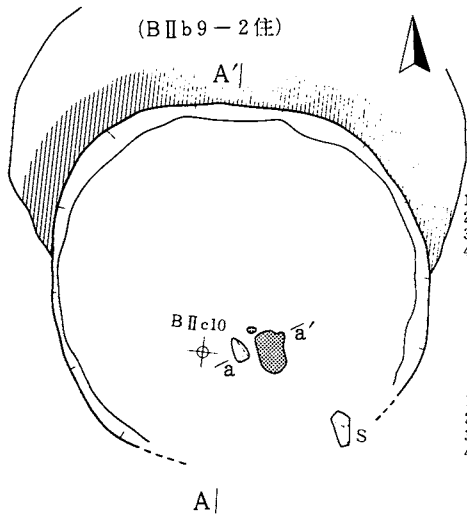
**石器 (68~86)** 石匙(1点)、搔・削器(9点)、楔形石器(4点)、石核(1点)、フレーク(30点)、磨製石斧(3点)、球形状石製品(1点)等が出土している。埋土から出土したフレークの図面掲載は割あいをした。68はつまみに対して刃部が平行する縦形石匙である。刃部は直線的でつまみ部まで丁寧に調整加工を施している。搔・削器は2側縁に刃部加工を施し先端部を尖頭状につくり出した69~71、直刃状の72~74、曲刃状の75~77等がある。74・79の刃部は両面調整加工を施している。78~81は楔形石器の碎片と思われるもので、対辺する端部に剝離痕がある。82は埋土下位から出土した珪質泥岩石の核剝片である。83~85は埋土出土の磨製石斧で、基部ないし刃部を欠損する。83は基部の破片で、端部はやや丸味を持ち丁寧に面取りが施されている。84は蛤刃で刃縁は円刃状である。85は刃先が欠損しているため形態は不詳である。横断面は楕円形で研磨は粗雑である。86は砂岩を球形状に面取りを施した石製品である。

#### B II b 9-1 住居跡 (第16図、写真図版8・41)

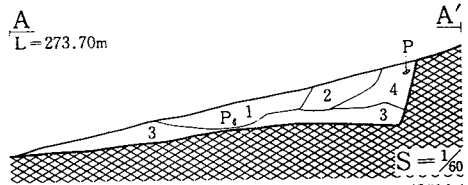
**位置** 調査区域西側の尾根中央付近に位置する。北側でB II b 9-2住居跡と重複しこれを切っているので遺構の新旧関係は本遺構が新しく、B II b 9-2住居跡が古い。**検出** IV層中で円形暗色部として検出している。

**形態・規模** 南壁は土砂の流失で遺存しないが、検出された状況からほぼ円形であったと推測される。規模は床面で東西2.85cm、南北の現存値は約1.8mである。**埋土** 4層に大別される。埋土中央部に黒褐色シルト質土、北壁際の上位に土器を多く包含する暗褐色のシルト質土、埋土下位から床面にかけては黒褐色土がブロック状に混入する褐色のシルト等が堆積する。この埋土の堆積状況は、人為的作用と自然堆積によるものと思われる。**壁** 70~80度位に外傾して立ち上がる。壁高は北壁48cm、東壁24cm、西壁20cmである。南壁は不明である。

**床** 北壁寄りにはVI層上面、中央部はV層下位でほぼ平らであるが南側に緩く傾斜する。北側

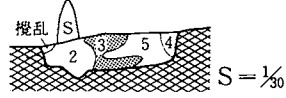


A  
L=273.70m

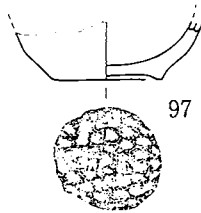
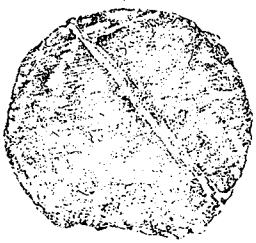
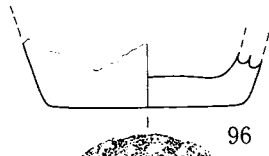
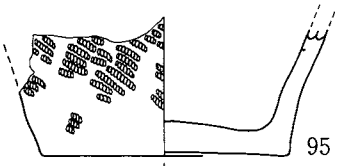
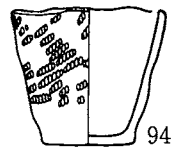
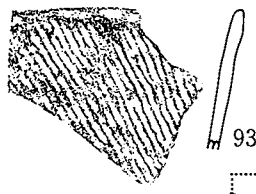
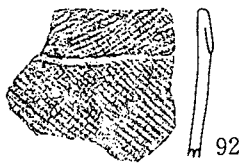
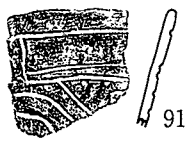
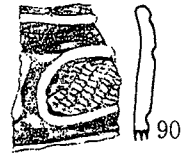
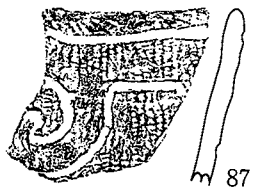


1. 10YR 2/2 黒褐色 シルト質 締まっている、粘性あり、径1~2mmの浮石含む
2. 10YR 2/3 黒褐色 シルト質 全体に締まっている、黒色土がブロック状に混入
3. 10YR 4/4 褐色 シルト 強く締まり粘性に富む、黒褐色土がブロック状に混入
4. 10YR 3/4 暗褐色 シルト質 強く締まっている、炭化物と多くの土器が含有

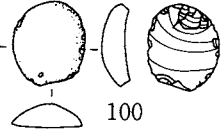
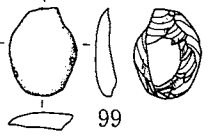
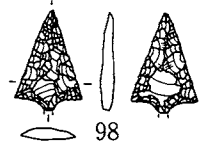
a L=273.00m a'|



1. 5 YR 3/6 暗赤褐色 焼 土 強く締まっている
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト質 柔らかい、粘性あり、焼土粒炭化物わずか混入
3. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト質 柔らかく締まりなし、焼土粒炭化物混入
4. 10 YR 3/4 暗褐色 シルト質 やや締まっている、炭化物わずか混入



87~97はS=1/2  
98~100はS=1/2



第16図 B II b 9 - 1 住居跡・出土遺物

床面と炉付近の床面では10cm程の高低差がある。特に堅く締まった箇所は認められない。柱穴・土坑 検出されていない。

炉 床面の南東寄りに位置し、礫が1個伴う配石炉である。礫は安山岩質の垂角礫で僅か焼成を受けている程度であり、床面を掘り窪め埋置したのではなく床面に置いたような状況である。礫の東側に焼土は35cm×20cmに広がり、全体に攪乱を受けている。現存する焼土の厚さは最大15cmで堅く締まっている。

#### 遺物 (第16図87~100)

土器 (87~97) いずれも埋土中からの出土である。87~91は沈線が施文されるもので、87は波状口縁を呈する深鉢で口縁に平行する1条の沈線及びその下位には渦巻状の沈線文が施される。88は小山形口縁をもつもので口縁に平行する沈線文が施される。89・90は内湾または内傾する平縁深鉢の口縁部である。口縁部に文様帯をもち、89にはつる巻状の沈線文、90は曲線沈線文が施される。91は薄手の鉢の口縁部で、地文はなく細い平行沈線が横位と斜位に施文されるものである。92は複合口縁の深鉢で、口縁部には体部と同じ斜縄文が施されている。94はミニチュア様の小形土器で口縁が小さく波打つようにつくられる。外面に僅かに煤が付着する。口径6.2cm、器高5.4cm、底径3.8cmである。95・96は深鉢、97は小形鉢の底部である。底面は95が笹葉状の圧痕であり、96・97は網代痕である。97は底部付近が丸味をもち、外面は丁寧に調整され、僅かに煤が付着する。

石器 (98~100) 98は基部がやや直線的な有茎鏃で、両面から丁寧に剝離調整を施している。99・100は楔形石器の碎片と思われるもので、対辺する端部に剝離痕がある。埋土からフレークが4点出土しているが、図面の掲載は割あいた。

#### B II b 9-2 住居跡 (第17図、写真図版9・42)

位置 調査区域西側の尾根中央付近に位置する。南側はB II b 9-1住居跡と重複し切られているので遺構の新旧関係は本遺構が旧く、B II b 9-1住居跡が新しい。検出 B II b 9-1住居跡北側で地山面が切れる箇所があり試掘溝によって検出したものである。

形態・規模 南半部が重複する遺構で切られていることから全体の形態・規模は不明であるが、現存状況から東西方向に長軸をもつ楕円形状を呈していたと思われる。現存規模は床面の東西で3.25mである。埋土 上位は暗褐色のシルト質土、下位はより暗い極暗褐色のシルトで構成され、土器と褐色シルトがブロック状に含有する。この埋土の堆積状況は、人為的作用と自然堆積の相互作用によるものと思われる。壁 IV層中~V層相当にあり、北側では約60度位に外傾して立ち上がる。壁高は北壁48cm、東壁24cm、西壁20cmである。

床 VI層シルト面で締まっている。ほぼ平らであるが南側に傾斜している。またB II b 9-

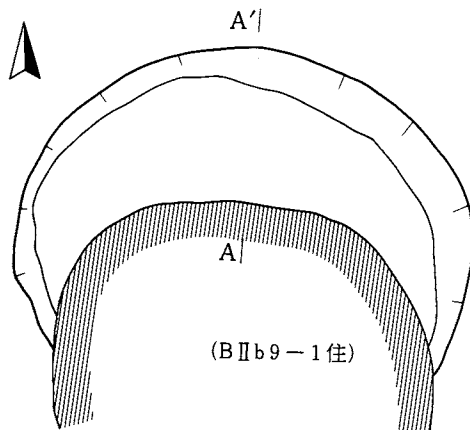
1 住居跡の床面より10cm程高くなっている。  
 炉・柱穴・土坑 検出されていない。

遺物 (第18図101~122)

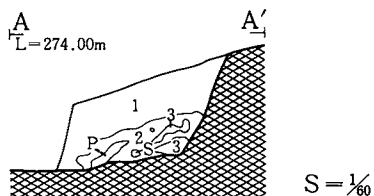
土器 (101~115) 103は床面、101・102・106・107・111・114・115は埋土下位、他は埋土中からの出土である。103・104は小形の切断土器である。103は底部に4個の脚状の小突起をもち、底部から内湾気味に立ち上がり体部中央付近で屈曲する。体部中央の両側に有孔突起をもつ。

鋸歯状を呈する切断面は体部上部にあり、幅の狭い工具により斜め上方から切断されている。器面調整は丁寧に調整され、沈線が施文される。体部中央には分岐する横位の沈線が、体部上半には曲線及び波状を呈する沈線が施文される。焼成は極めて脆く、灰黄色を呈する。104は破片のため全体の器形は不明であるが、体部下半に

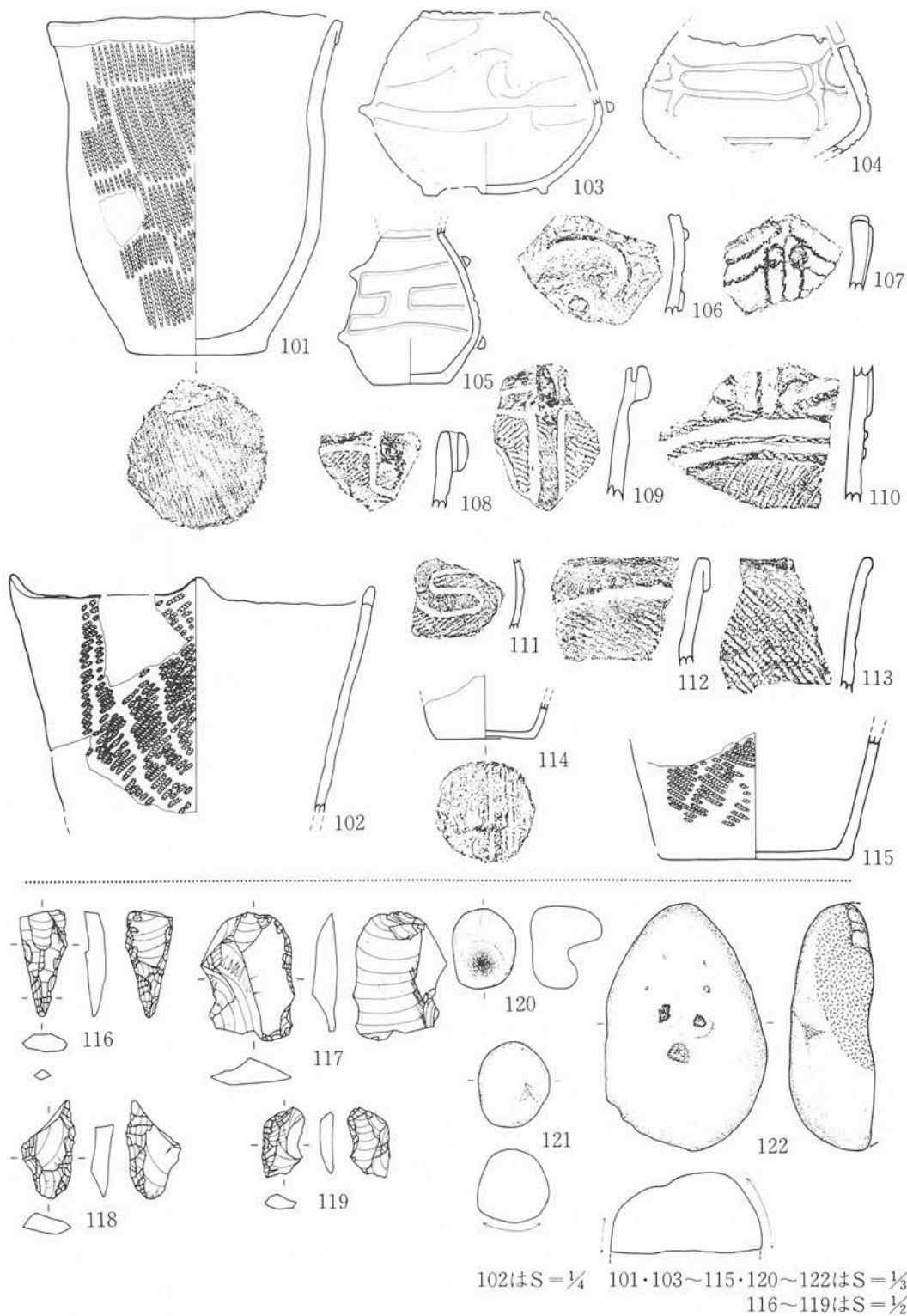
最大径をもち体部上半は直線的に内傾する。体部上位にある切断面はやや水平気味で、103と同様に鋸歯状を呈している。体部の全面に細い平行沈線で横位の楕円文が2段に施文されている。焼成は堅緻である。外面は丹が塗付され、内面にも付着が認められる。101は一部分がB II f 10 住居跡の埋土中から出土し、接合復元されたやや小形の鉢である。口縁部は複合口縁で不規則に波打つようにつくられる。体部中央は直立し立ち上がり、体部上半から口縁部は外傾する器形である。口縁部はナデ調整され、体部は撚糸文が丁寧に施文される。内外面に僅かに煤が付着している。底面には笹葉状の圧痕をもつ。焼成はやや脆く、軟質な感じのする土器である。口径は13.8cm、器高16cm、底径6.6cmである。102は小山形口縁をもつ鉢の上半部である。体部は直線的に外傾し立ち上がる。地文は斜縄文 (RL) で内外面に煤が付着している。胎土に砂粒が多く、焼成は脆く器表はザラザラする。105は口縁部の欠損するミニチュア様の土器で、カメ棺状の器形を呈している。体部左右の上下に対をなす2個の有孔突起をもち、地文はなく頸部に1条の横位沈線が巡り、体部には屈曲する横位沈線で「工」字状の文様を描く。器面調整は丁寧に施されている。106・107は山形口縁をもつ鉢の口縁頂部である。106はやや薄手で口縁部は内湾し、棒状工具で押圧され台形状を呈している。口縁頂部直下に細い隆帯が半月状に貼付られ、その下位にはボタン状の突起が施される。地文はなく口縁に平行する2条の原体圧痕が施文される。器面調整は内外面とも丁寧に施されている。107も山形頂部は台形状を呈し、口縁



1. 10YR 3/4 暗褐色 シルト質 堅く締まっている、炭化物混入する
2. 10YR 2/3 極暗褐色 シルト質 黒色土がブロック状に混入する
3. 10YR 4/6 褐色 シルト 堅く締まっている、粘性あり



第17図 B II b 9 - 2 住居跡



第18図 B II b 9 - 2 住居跡出土遺物

頂部の真下に2つのボタン状突起をもち、口縁に平行する2条隆帯及びボタン状突起から垂下する3条の隆帯が施される。108・109は平縁の深鉢で、108は口縁部に有孔突起をもち屈曲する沈線で縄文帯を区画している。109は口縁部に突起をもち、口唇上部から円形刺突が施され、平行沈線により無文帯と縄文帯を区画している。110は隆帯が多用される深鉢の体部で、隆帯には縄文が施される。体部地文は付加条の縄文が施文される。114・115は小形鉢と深鉢の底部で、114は地文はなく底面に笹葉状の圧痕をもつ。115は斜縄文(LR)が施文され底面に網代痕をもつ。

**石器** (116~122) 石錐(1点)、搔・削器(3点)、磨石(1点)、凹石(1点)、磨・凹石(1点)等である。埋土から出土したフレーク15点の図面掲載は割あいしている。116の石錐は棒状の形態を呈し、錐部の断面は三角形で両面から調整加工を施している。搔・削器は刃部が曲刃状の117・119と直刃状の118があり、118・119は両面から調整加工を施している。121の磨石はこぶし大の大きさで、1側面が著しく磨滅している。120は円錐状に1cm程の凹痕を有する凹石である。122は半分程欠損した磨・凹石の機能を持つもので、両側縁は良く磨滅し3箇所に近い凹痕がある。

#### B II d 6 住居跡 (第19図、写真図版11・43)

**位置** 調査区域西側の尾根の北東寄りに位置する。西側約10mにB II b 7 陥し穴状遺構がある。**検出** 遺構確認の試掘溝によって検出している。平面形の確認面はIV層下位である。

**形態・規模** 遺構の南東側は粗掘りの際に削平して不明であるが、検出された状況から平面形は円形であると推測される。現存する床面は東西3.2m×南北3.0mである。埋土 黒褐色、暗褐色、褐色の砂質シルトで構成され全体に柔らかい。埋土の堆積状況は不自然な様相を呈しており、急斜面であり土砂の移動によるものと思われる。壁 IV層下位~VI層のシルト中にあるが、南側の壁は明確ではない。壁高は北壁55cm、北東壁32cm、西壁32cmである。

**床** シルト面で堅く締まっている。南側はIV層下位~V層相当で柔らかい。全体に緩く傾斜して南側へ下がり、北側とは約20cmの高低差がある。**柱穴・土坑** 検出されていない。

**炉** 南東壁寄りに礫を1個配置した炉がある。礫は10数センチの深さに埋置され、僅かに赤色変化が見られる。焼土は礫の西側に60cm×35cmの範囲に広がり、全体に攪乱を受けている。暗赤褐色を呈し柔らかい。厚さは最大11cmに及ぶ。

#### 遺物 (第19・20図123~127)

**土器** (123~130) 123は床面、128は炉上面、他は埋土中からの出土である。123は平縁の浅鉢である。底部から30度位に緩く立ち上がり、口縁部付近でやや屈曲し、45度位に外傾して立ち上がる。口縁直下に1条の横位沈線が巡り、地文はなく内外面は丁寧にナデ調整されている。胎土は砂粒が多く、焼成は脆い。口径は約25.8cm、器高8.9cm、底径10cmである。124は平縁の

深鉢である。底部から体部下半は外傾し、体部中央はほぼ直立気味に立ち上がり、口縁部付近で緩く外反する。地文は斜縄文(LR)が施される。内面調整は丁寧で、外面には煤が付着している。胎土に小礫や石英砂が多く混入する。口径25.4cm、器高35.3cm、底径9.8cmである。125は埋土下位出土の平縁深鉢で、体部下半～底部が欠損している。口縁部は不規則に僅か波立つようにつくられる。体部は直線的に外傾して立ち上がる。地文は縄文原体を縦回転施文されるが、原体としてRL・LR・RLRの3種を用いている。外面に煤が多く付着している。126は深鉢の体部片で平行する2条の沈線及び大きく屈曲する沈線が施文されている。127は山形口縁の深鉢で複合口縁直下に沈線が施される。128は頸部で屈曲し、口縁部が外反する鉢である。地文はなく横位の沈線が施文される。頸部に隆帯をもつ。

**石器** (131～137) 搔・削器(1点)、石核(1点)、フレーク(5点)、凹石(1点)、磨・凹石(1点)、磨・敲石(2点)、石皿(1点)が出土している。フレークの図面掲載は割あいた。132の搔・削器は2側縁に刃部加工を施している。131は珪質泥岩の石核剥片である。133は床面に埋置されていた凹石で、表と裏の4箇所凹痕を有している。複数の機能を持つものは135の磨・凹石と134・136の磨・敲石である。135は表と裏に凹痕、134は側縁が特に磨滅し端部に敲打痕がある。136はこぶし大の大きさで、1側縁は平らに磨滅し、端部の数箇所に敲打痕が見られる。137は半分ほど欠損した石皿で、やや幅広の縁取りがなされ、浅く凹んでいる。全体に脆くボロボロしている。

#### B II e 9 住居跡 (第21図、写真図版12・44)

**位置** 調査区域西側の中央東寄りの斜面に位置する。南東側2mにB II f 10住居跡がある。

**検出** IV層下位で半円状の暗色部として検出している。

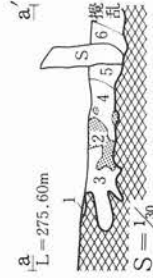
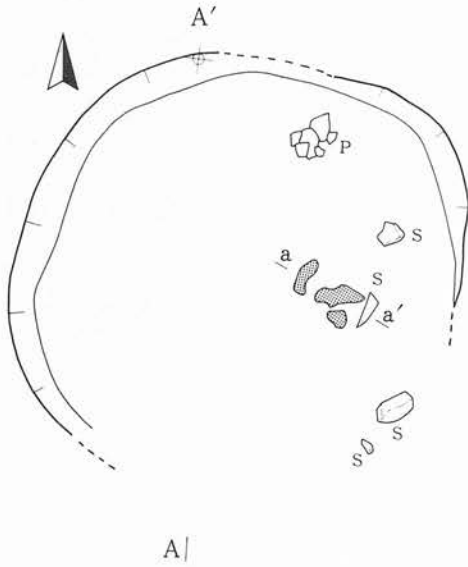
**形態・規模** 傾斜下方の南半部の壁と床が土砂の流失で遺存せず、全体の形態、規模は不明である。現存する北半部は半円形状を呈し、東西の床面は約3mを測る。埋土 黒褐色のシルト質土の単層である。褐色シルトと黒色土が混じり全体に締まっている。壁 北側にのみ現存し、壁高は中央部で40cmを測り、60度位に外傾して立ち上がる。

**床** IV層のシルト面でほぼ平らであるが緩く南側に傾斜する。また、炉の付近から急勾配となり地山へ続いている。**柱穴・土坑** 検出されていない。

**炉** 北側の壁から南1.6mに石囲炉がある。大小9個の垂角礫を外径70cm×65cmの楕円形状に配置しているが、全体が南側に傾いており南側の炉石は本来の位置から移動しているものと思われる。北側の炉石は埋置されたままである。炉内も全体に攪乱を受けており、焼土が僅かに現存する程度である。

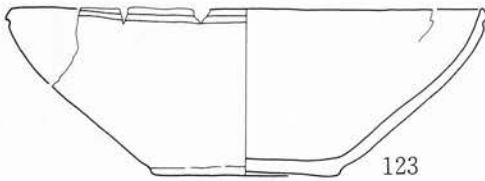
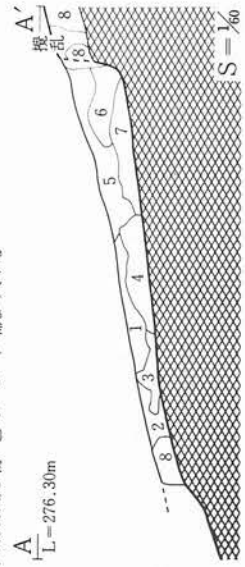
**遺物** (第21図138～141)



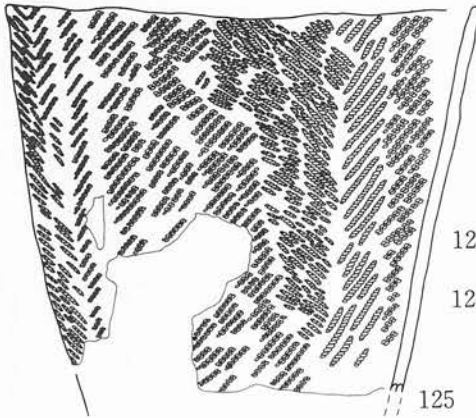


1. 2.5YR 3/6 暗赤褐色 焼土
2. 5 YR 3/6 暗赤褐色 焼土
3. 10 YR 3/4 暗黒色 シルト
4. 7.5YR 3/4 暗黒色 シルト
5. 5 YR 3/3 暗赤褐色 シルト
6. 7.5YR 4/3 褐色 シルト

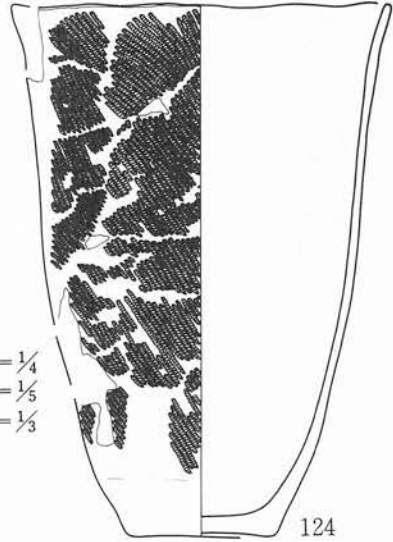
1. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト 柔らかい、炭化物混入する
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト 柔らかく締まりがない、炭化物わずかな混入
3. 7.5YR 4/3 褐色 砂質シルト 柔らかく締まりがない、黒色土わずかな混入
4. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト やや締まっている、腐敗シルトがフロックで混入
5. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質シルト 柔らかい、やや塑性あり
6. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト 柔らかい、褐色土がフロック状に混入
7. 7.5YR 2/2 黒褐色 シルト 柔らかい、褐色土がフロック状に混入
8. 7.5YR 4/3 褐色 シルト 締まっている



123



125



124

- 123・125はS=1/4  
 124はS=1/5  
 126~130はS=1/3



126



127



128

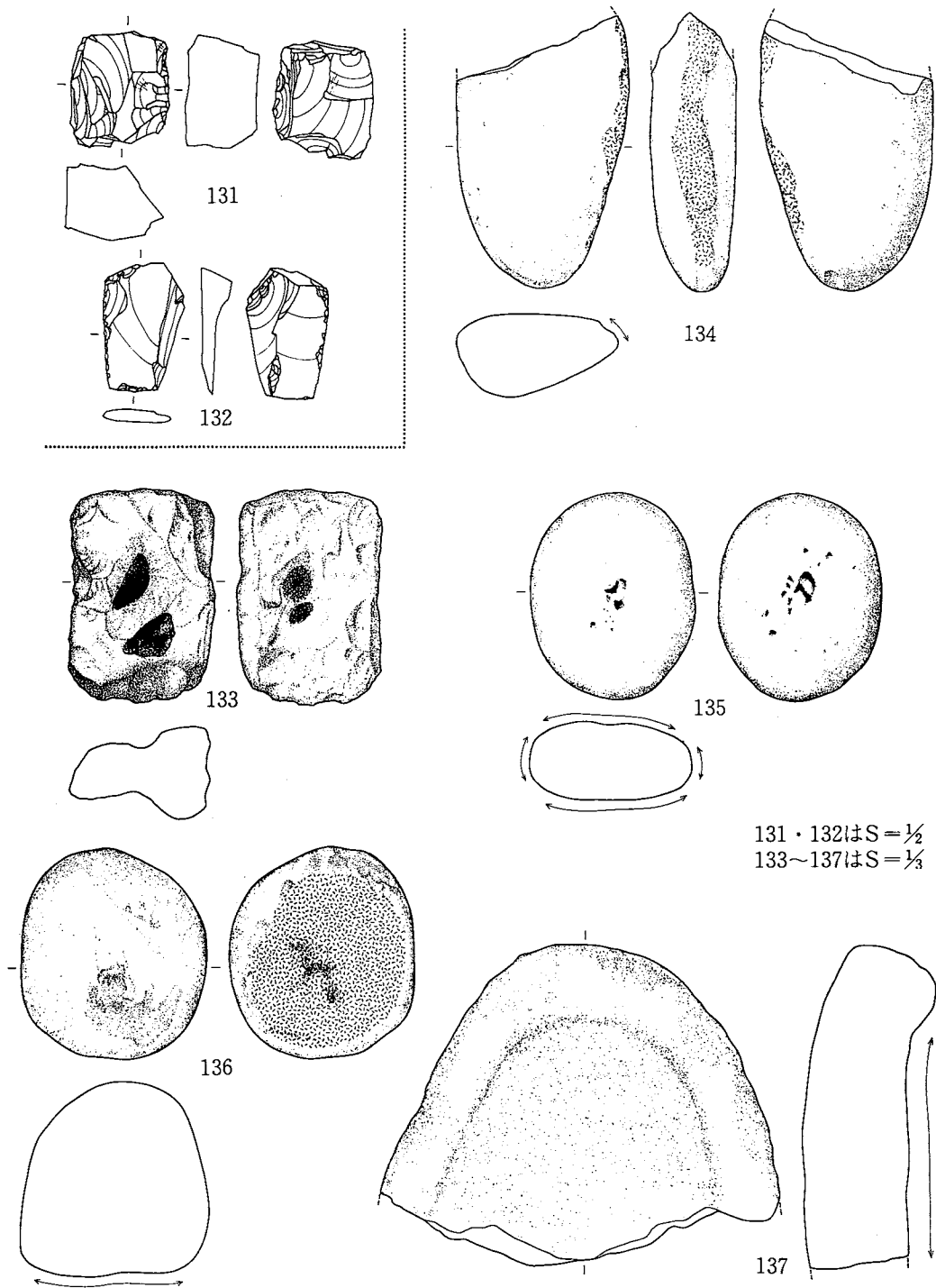


129

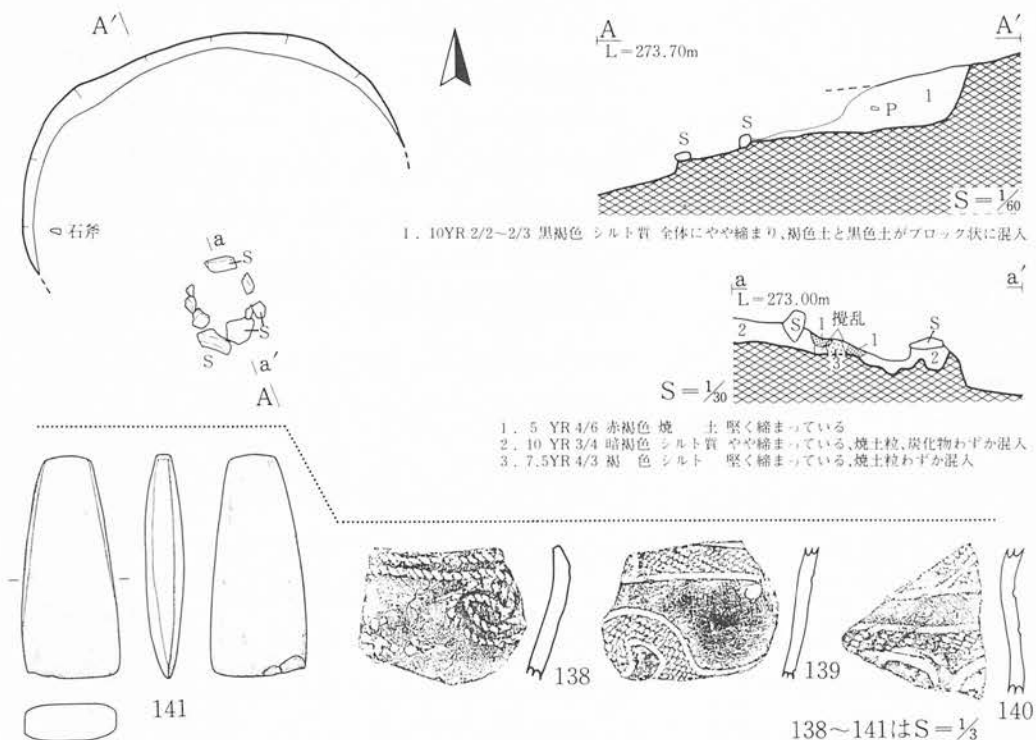


130

第19図 BⅡd6住居跡・出土遺物(1)



第20図 BⅡd6 住居跡出土遺物(2)



第21図 B II e 9 住居跡・出土遺物

**土器** (138~140) 139・140は埋土下位、138は埋土上位からの出土である。138は口縁上部が僅かに内湾する鉢で、波状口縁を呈すると思われる。地文はなく、平行する2条の原体圧痕が口縁部直下に施文され円弧状の文様を描き出している。焼成は堅緻である。139・140は鉢の体部片で平行する沈線で縄文帯と無文帯を区画するものである。

**石器** (141) 141は床上出土の所謂定格式磨製石斧で、両側縁と基部は研磨され稜をつくりだしている。刃部は一部欠損しているが直刃状と思われる。

#### B II f 10住居跡 (第22図、写真図版44・45)

**位置** 調査区域西側の緩斜面東寄りに位置する。北西側2mにB II e 9住居跡、北東の至近にB II g 10焼土がある。**検出** IV層相当中で半円状の暗色部として検出している。本遺構は床面に多くの炭化物及び焼土が散在していることから焼失住居と思われる。

**形態・規模** 土砂の流出で南側の壁は遺存しないが、現存する北側は隅丸形状を呈している。規模は床面で東西3.8m、南北の現存長3.1mである。**埋土** 北側壁寄りに暗褐色～黒褐色の砂質シルト、中央部から南側には黒褐色及び黒色のシルト質土が堆積する。中央部の下位から床面にかけて多くの炭化物が含まれ遺物も多く混入する。この埋土の堆積状況は一部人為作用

も加わっていると思われる。壁 南側の壁は流失して不明である。また、傾斜下方の南東側及び南西側の壁は明確でない部分があるが、壁高は北壁60cm、東壁30cm、西壁23cmを測る。

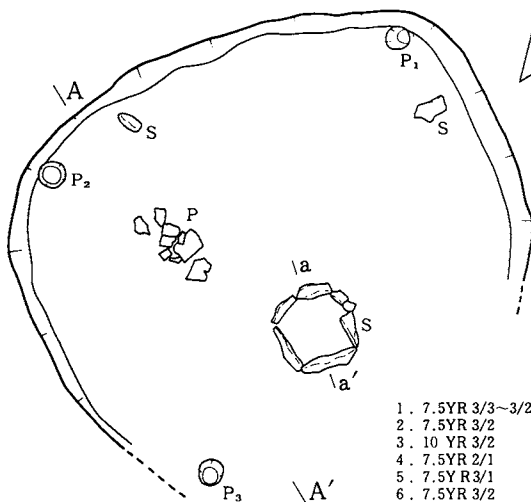
床 VI層上面にあり堅く締まり、ほぼ平坦である。床面北西側には焼土が多く散在する。柱穴 北東隅と北西隅及び南西寄りに各1個の計3個がある。直径と深さはP<sub>1</sub>18cm×18cm・21cm、P<sub>2</sub>24cm×20cm・18cm、P<sub>3</sub>20cm×19cm・37cmである。南東側では検出されなかったが本来4本の柱穴配置であったと推測される。

炉 床面中央南側に方形を呈す石囲炉がある。大小7個の安山岩質亜角礫が約10cm程に埋置されている。炉内の下部に焼土の痕跡があるが主に黒色のシルトが堆積する。礫は僅かに火熱による焼成を受けている。

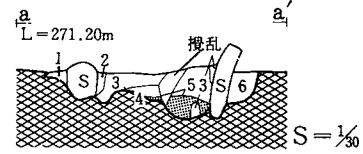
#### 遺物 (第22・23図142~160)

土器 (142~152) 142・145・153は埋土上~中位、他は埋土下位から出土している。142は4波状の口縁をもつ鉢である。底部から体部にかけ緩く内湾して立ち上がり頸部で窄み、口縁部は頸部から屈曲し内湾気味に外傾する。体部の最大径は中央より上部にある。器面の全体に大柄な文様が規則的に施される。口頸部には幅の広い隆帯と隆帯をふちどる沈線が施され、三角形や長方形の無文部をつくりだす。隆帯には縄文(LR)が施文される。体部は平行乃至屈曲する沈線により縄文帯と無文帯を区画する。外面には煤の付着が見られる。内外面のナデ調整は丁寧に施されている。口径は約19cm、器高23.6cm、底径7.6cmである。143は壺と思われる体部であり、全体に丸味をもち下半に最大径をもつ。幅1mm前後の細い沈線により施文されるが、沈線が所々で分岐している。内外面に多くの煤が付着している。胎土には砂粒や小礫や石英砂が多く混入するが、内外面は丁寧にナデ調整されている。144・147は深鉢の口縁部で、144は外傾し立ち上り、147は内湾する。144は斜縄文(LR)が施文され、胎土に小礫や粗砂を多く含み、焼成は脆く器表はザラザラする。147も斜縄文(LR)で縦回転施文される。胎土には石英砂や雲母が多く混入する。145・153・154は鉢及び深鉢の底部で、145は底面中央が盛り上がる。149~151は平縁の深鉢の口縁部で、149は縄文施文後に口縁に平行する3条の沈線と、その下位に曲線の沈線を施文している。149・150の地文は無節斜縄文で、150は縄文結束部が縦走する。152は鉢の体部で細い沈線により縄文帯と無文帯を区画し、縄文帯には縄文(LR)が充填される。平行する沈線の変換部には幅の細い隆帯が半楕円状に貼付られ、独特な文様をつくり出している。焼成は堅緻で、内外面のナデ調整は丁寧に施されている。

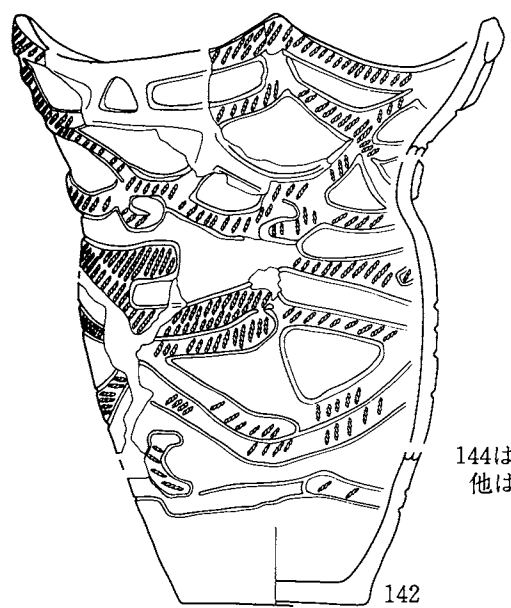
石器 (155~160) 155はつまみ状の頭部を持つ石錐で、錐部は短く丁寧に調整加工を施している。156の不定形石器は側縁の一部に刃部加工を施したものである。158・159は複数の機能を持ち合わせた磨・凹石で、158は3側面に浅い凹痕を有し1側面が特に磨滅している。159は表と裏の4箇所凹痕があり、両側縁の磨滅が著しい。160は欠損した石皿で、縁を残して平坦に



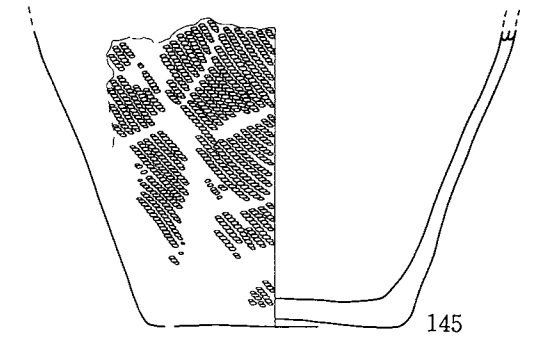
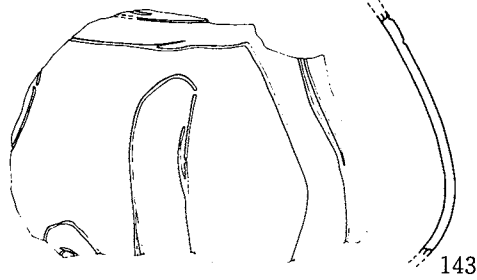
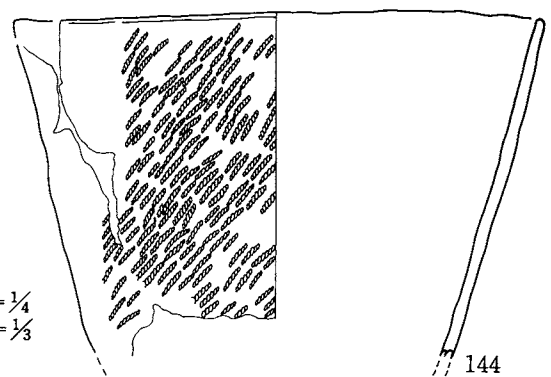
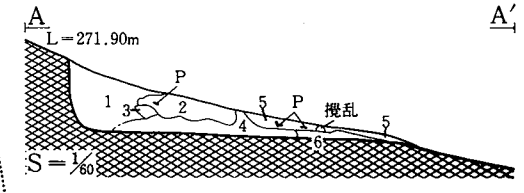
- |                 |         |                      |
|-----------------|---------|----------------------|
| 1. 7.5YR 2/1    | 黒色シルト   | 柔らかく締まりない            |
| 2. 7.5YR 2/1    | 黒色シルト   | 柔らかい、全体に浮石が混入する      |
| 3. 7.5YR 2/1    | 黒色シルト   | 柔らかい、炭化物わずが混入する      |
| 4. 7.5YR 3/4    | 黒暗褐色シルト | 締まっている、粘性あり          |
| 5. 5 YR 3/4~3/3 | 暗赤褐色シルト | 締まっている、焼成は弱い         |
| 6. 7.5YR 3/2    | 黒褐色シルト  | 強く締まっている、褐色土と黒色土の混合土 |



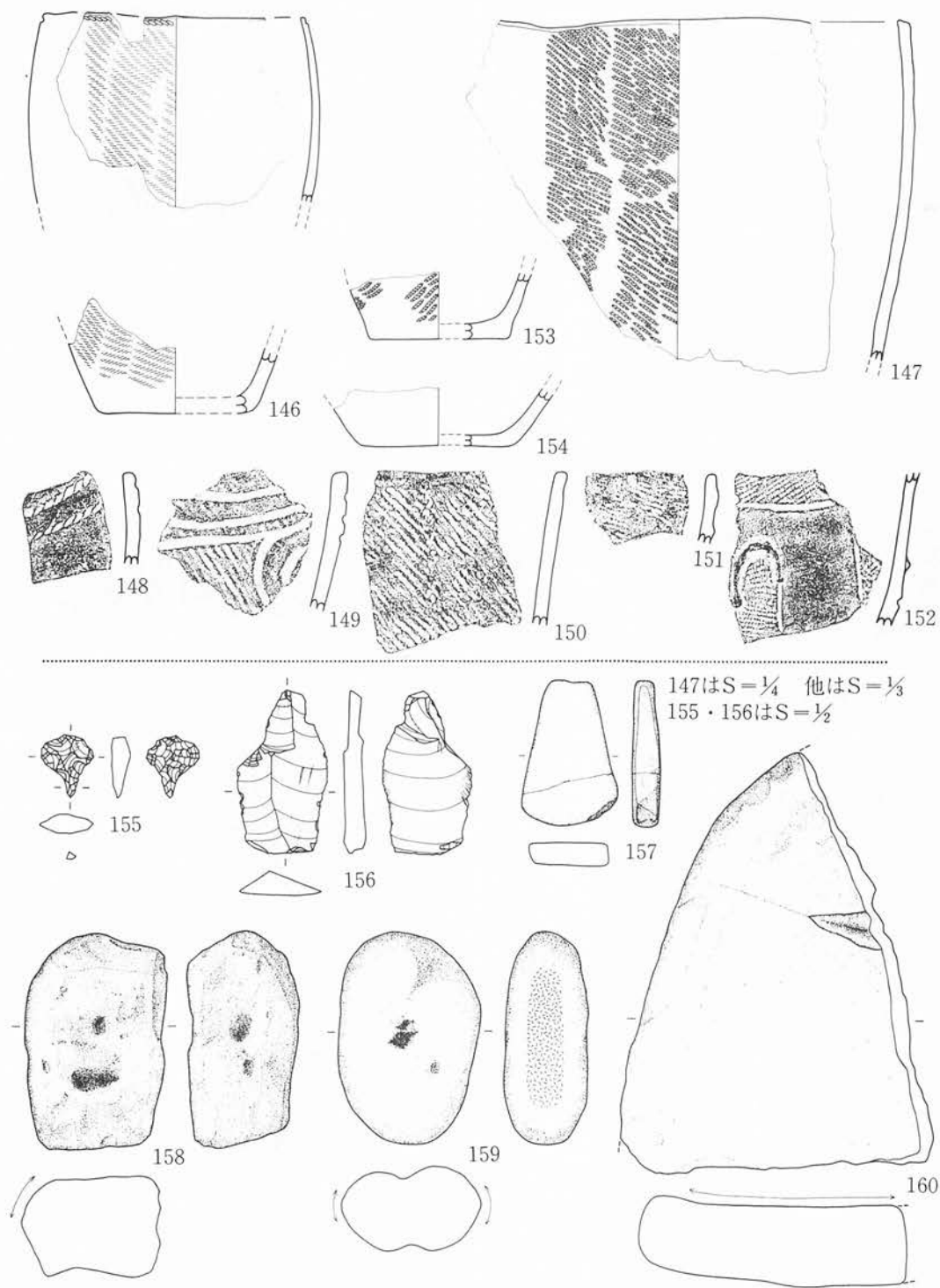
- |                  |         |       |                          |
|------------------|---------|-------|--------------------------|
| 1. 7.5YR 3/3~3/2 | 暗褐色~黒褐色 | 砂質シルト | 柔らかい、炭化物全体に混入            |
| 2. 7.5YR 3/2     | 黒褐色     | シルト質  | 柔らかい、炭化物わずが混入            |
| 3. 10 YR 3/2     | 黒褐色     | シルト質  | 締まっている、炭状シルトがブロックで混入     |
| 4. 7.5YR 2/1     | 黒色      | シルト質  | 柔らかい、下位に炭化物多く含む          |
| 5. 7.5YR 3/1     | 黒褐色     | シルト質  | 柔らかい、炭化物わずが混入            |
| 6. 7.5YR 3/2     | 黒褐色     | シルト質  | 柔らかく締まりない、褐色シルトがブロック状に混入 |



144はS=1/4  
他はS=1/3



第22図 B II f10住居跡・出土遺物(1)



第23図 B II f10住居跡出土遺物(2)

仕上げてある。全体に表面は脆くボロボロしている。157の板状石製品は埋土下位から出土し、側縁は面取りを施している。埋土中から出土のフレーク 2 点の図面掲載は割あいた。

### B III b 2 住居跡 (第24図、写真図版13・45)

**位置** 調査区域西側の中央やや南寄りに位置する。B III b 2 陥し穴状遺構と重複している。重複する遺構との新旧関係は陥し穴状遺構が新しく本遺構は古い。**検出** 遺構の東側をダメ押しで削平した断面により検出している。平面形の検出面はIV層下位の黒褐色土中である。

**形態・規模** 遺構東側はダメ押しの際に削平、南側は林道造成の際に攪乱されており、全体の形態及び規模は不明である。現存する西側の状況から推測すると床面は径3.5m程の円形を呈していたと思われる。埋土 東西の埋土断面はB III b 2 陥し穴状遺構により大きく攪乱されているが、上位から黒褐色土、黒色土、暗褐色土に大別される。いずれも全体に締まりがなく柔らかい。**壁** IV層下位～V層中に構築される。現存する壁の高さは北壁35cm、西壁30cmを測る。

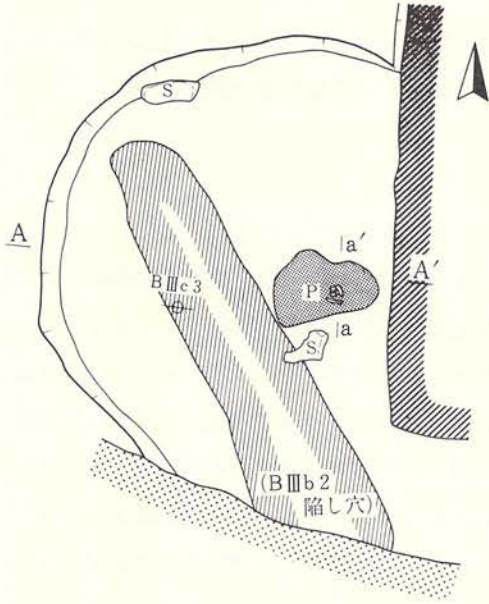
**床** V層下位にあり平坦であるが、全体に南側に僅かに傾斜している。**柱状・土坑** 検出されていない。

**炉** 遺構中央の東側に地床炉 1 基がある。炉の西側は陥し穴状遺構に切られている。現存する焼土は80cm×50cmの範囲で不整形に広がり、上面と炉内中に深鉢の破片を多く混入する。上部は柔らかく、下部はよく焼成され堅く締まっている。

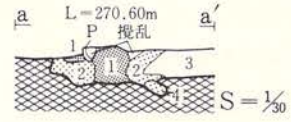
### 遺物 (第24図161～168)

**土器 (161～164)** 161は炉内、164は炉上面、他は埋土下位からの出土である。161・164は同一個体と思われる深鉢の口縁部及び体部片である。161は横位の沈線と斜位の平行する数条の沈線が施文され、縄文帯には横走縄文 (RL) が充填される。164は山形の複合口縁で口縁直下に平行する沈線が施される。162は内湾する小形の鉢で地文はなく、原体側面圧痕が口縁部及び体部に施される。器面調整は内外面とも丁寧な施されている。163は複合口縁の平縁深鉢で、口縁部と体部には異なる原体による斜縄文が施される。

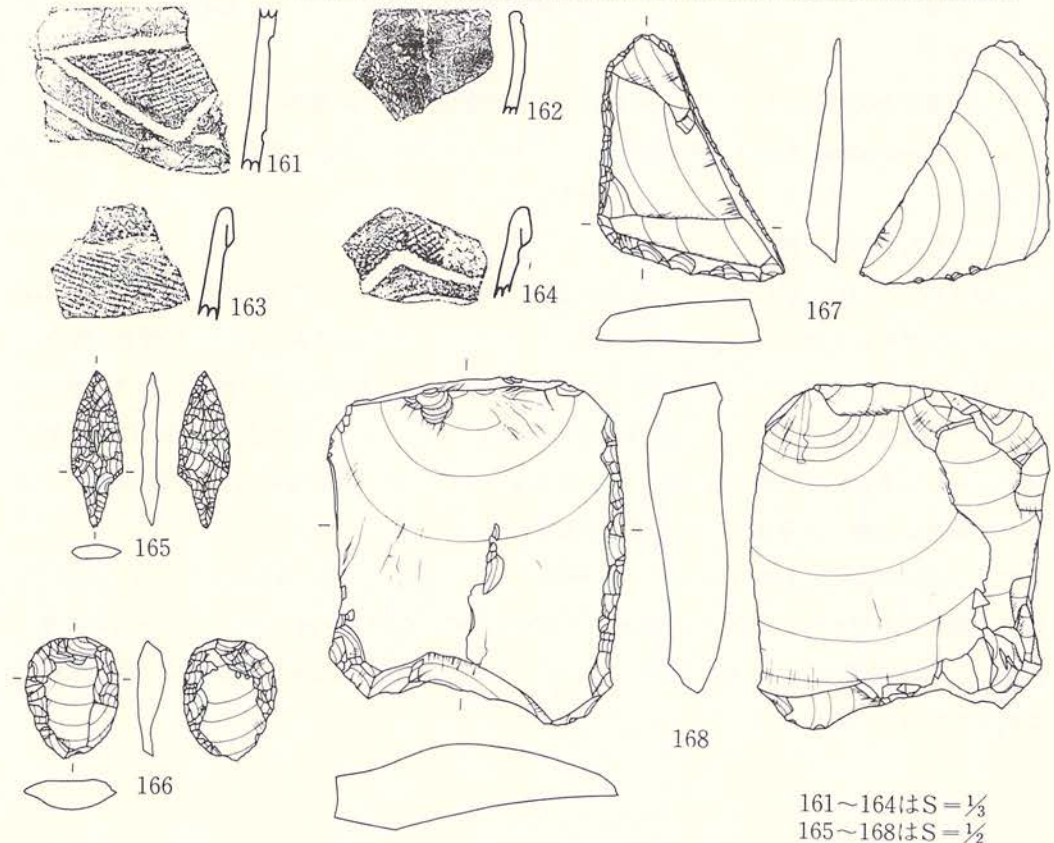
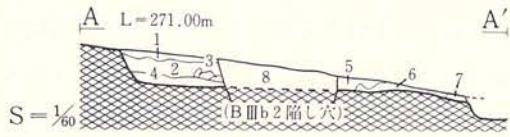
**石器 (165～168)** 石鏃 (1点)、搔・削器 (3点) が埋土下位から出土している。165の石鏃は基部がやや突出する有茎鏃で、両面とも丁寧な剝離調整加工を施している。166～168は搔・削器で、165は両側縁から刃部加工をしている。167・168は直刃状を呈し、片面にだけ刃部加工を施している。



1. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土 堅く締まっている
2. 5 YR 3/3 暗赤褐色 シルト質 柔らかい、焼土粒多く混入する
3. 7.5YR 4/6 褐色 シルト 締まっている
4. 5 YR 3/6 暗赤褐色 シルト質 柔らかく締まりない



1. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質土 柔らかく締まりない
2. 7.5YR 2/1 黒色 砂質シルト 柔らかい、浮石全体に混入する
3. 7.5YR 4/3 褐色 砂質土 柔らかく締まりない
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト 柔らかい、褐色土と黒色土の混合土
5. 7.5YR 2/3 極暗褐色 砂質シルト 柔らかい、焼土粒わずか混入する
6. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質シルト 柔らかい、焼土粒多く混入する
7. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 柔らかい、やや粘性あり
8. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質シルト 柔らかい、全体に浮石多く混入する



第24図 B III b 2 住居跡・出土遺物



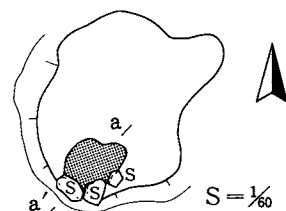
C III h 1 住居跡 (第25図、写真図版14)

**位置** 調査区域東側の緩斜面西寄りに位置する。東北東側5 m にC II i 10陥し穴状遺構がある。**検出** IV層下位相当面で炉跡及び貼床を検出している。

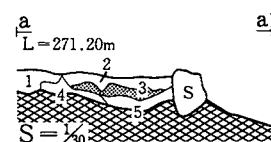
**形態・規模** 土砂の流失により壁は現存せず形態及び規模は不明である。床 炉跡の北側に1.1m×1.4mの広がりをもつ貼床のみが現存する。貼床は黄褐色浮石が多く混入するシルト質土でやや締まっている。厚さは5 cm程である。**柱穴・土坑** 検出されていない。

**炉** 安山岩質の垂角礫が3個現存する配石炉である。礫の抜きとり痕は検出されていないが、本来石囲炉であったと思われる。礫の北側に焼土が45cm×35cmの不整楕円形状に広がる。焼土の形成は良く、赤褐色を呈し強く締まっている。

遺物は出土していない。



- 1. 10YR 3/2 黒褐色 砂質シルト
- 2. 10YR 2/2 黒褐色 砂質シルト
- 3. 2.5YR 4/6~4/8 赤褐色 焼土
- 4. 10YR 4/6 褐色 シルト
- 5. 5 YR 5/4 にぶい赤褐色 砂質



第25図 C III h 1 住居跡

C III i 3 住居跡 (第26図、写真図版14・15・46・47)

**位置** 調査区域東側の緩斜面南西寄りに位置する。東側に隣接しC III j 3-1住居跡がある。**検出** V層上面で半円状の暗色部として検出している。

**形態・規模** 平面形は円形を呈し、規模は床面で径2.8mを測る。埋土 色調等により6層に分けられる。埋土の上位中央には黒褐色の砂質シルトがレンズ状に堆積する。全体にIV層起源の浮石が多く混入して柔らかく、下位に土器を多量に含んでいる。埋土下位から北壁際には暗褐色と黒褐色の砂質シルトが堆積する。やや強く締まり、VI層起源の褐色土が混入する。南壁寄りにはV層土に類似する暗褐色土で占められ、ブロック状の褐色土が混入する。この埋土の堆積状況は人為的な埋め戻しや遺物の廃棄が伴っているものと思われる。**壁** 壁はV層中にある。壁高は北壁33cm、南壁18cm、東壁34cm、西壁21cmである。東～北壁は70～80度位に、西～南壁では緩く50～60度位に外傾して立ち上がる。

**床** VI層上面にあり、強く締まっている。ほぼ平坦であるが僅かに南側に傾斜し、両側で約10cmの高低差がある。**柱穴** 柱穴及び柱穴状の小穴が計11個検出されているが、P<sub>2</sub>とP<sub>8</sub>は埋土の状況から攪乱である。柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>9</sub>の6本と思われる。P<sub>6</sub>の底部から

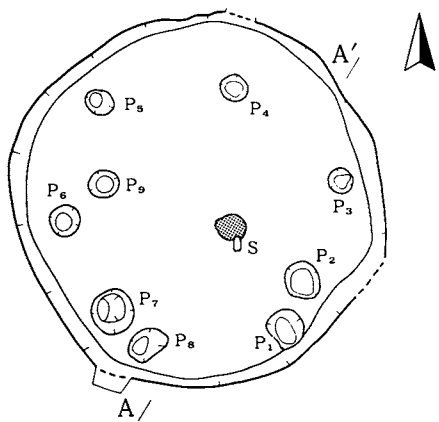
PNo	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>
口径 cm	30×26	31×26	21×20	23×20	24×20	25×22	26×24	35×34	32×24
深さ cm	30	5	9	13	14	17	13	12	20

は小形鉢（172）が正立位で、その上に波状口縁の鉢（170）を被せた状況で出土している。

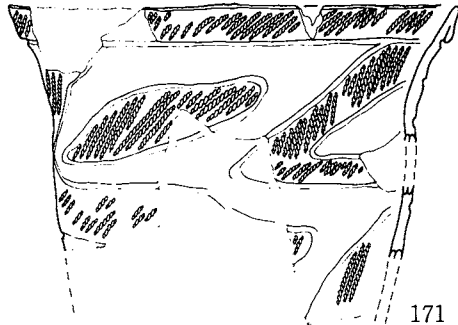
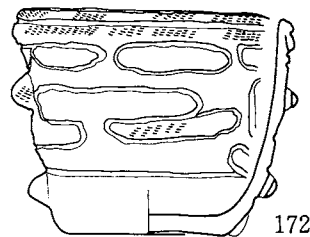
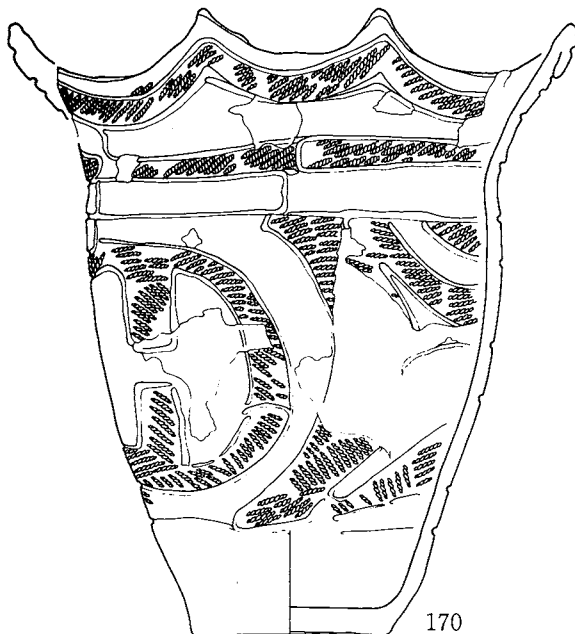
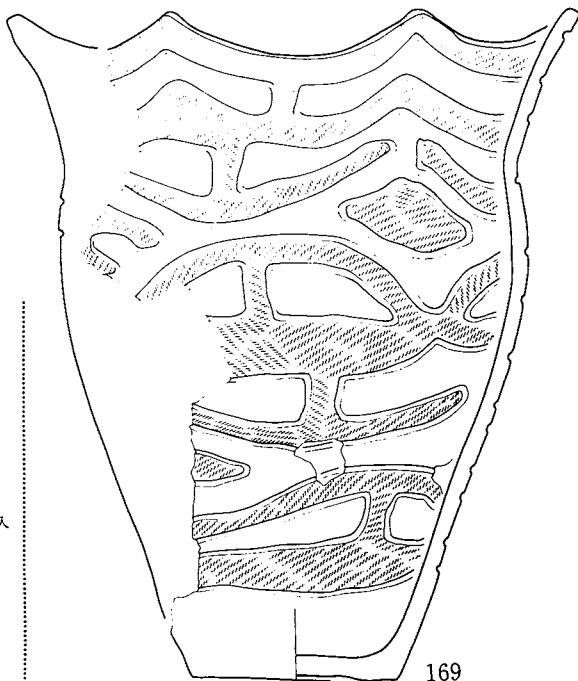
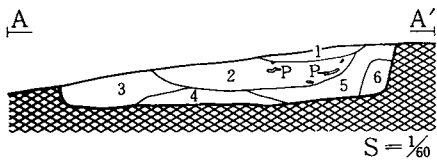
炉 中央部東寄りに25cm×20cmほどの円形を呈した地床炉と思われる痕跡がある。

遺物（第26～28図169～197）

土器（169～185） 住居内の柱穴から170と172が出土している。171・176・178・179・184・185は埋土下位、他は埋土中～上位から出土のものである。172は柱穴内で正立し、その上部に170の底部が伏せられた状況で出土している。内外丹塗りの小形鉢である。左右の両側に上下2個の有孔突起をもち、その延長の最下端には溝が刻まれる。体部下半はやや丸味をもって外傾し、口縁部付近は直立気味に立ち上がる器形である。口径は器高より大きく縦断面形は台形状を呈す。口縁は平縁の複合口縁で、口縁部及び体部下位に横位沈線が巡り、その沈線間に文様が施される。文様は沈線により長楕円文・「工」字状の文様が横位に施文される。器表は沈線施文後にナデ調整され、地文（Rℓ）は口縁部及び体部の一部に残るだけである。口径11.0cm、器高8.9cm、底径7.0cmである。170は172の出土したピット上部で押しつぶされた状況で出土している。6波状口縁をもつ鉢で、底部付近に赤色顔料（ベンガラ）が多く残っている。器形は底部から直線的に外傾して立ち上がり、体部上位で僅かに内湾し頸部で窄み、口縁で強く外傾する。口縁は複合口縁で、平行する2条の沈線が巡っている。頸部には沈線により上下2段に長形状の区画が施され、その箇所に縄文の施文された帯縄文をつくる。体部は沈線により円弧状又は「H」状の文様を描き、無文帯と縄文帯を区画する。169は6波状口縁をもつ鉢で、体部上位が内湾し頸部がゆるく窄み170に比べ体部上部に丸味をもつ。口縁は外湾気味に外傾する文様は体部下端を除く全面に沈線により横位に展開する区画文が施文される。縄文帯に着目すると上下の縄文帯を連結し「工」字状の文様が多用され、無筋縄文（Lr）が充填される。171は平縁の複合口縁をもつ鉢で、頸部が僅かに窄まる。口縁直下に一条の横位沈線が巡り、体部にはほぼ平行する沈線によって屈曲する帯縄文及び不整楕円文が施される。外面に煤が付着している。口径は約18cmである。174・176は平縁の深鉢で複合口縁である。174は体部上部が内湾気味を呈し、頸部で窄み口縁が外傾する。口縁部・体部ともに無節斜縄文（Rℓ）が施される。176は直立気味に立ち上がり、筒状を呈している。口縁部にはやや細めの斜縄文（LR）、体部には太めの縄文（LR）が施される。粗砂の混入が多く焼成は脆い。175は小形の鉢で、底部は張り出すようにつくられる。地文は口縁部・体部ともに単節斜縄文（LR）が施文される。177は沈線が施文される土器の底部は、台付状に底部周縁が張り出し底面中央は薄くなる。底部の張り出し部の両側に有孔部があり、その間の底面には溝が刻まれる。内外面は丁寧にナデ調整されている。178は網目状捺糸文が施文される深鉢の底部である。底面は網代痕である。胎土に小礫と粗砂が極めて多く、内外面はザラザラする。179～182は波状口縁をもつ鉢～深鉢の破片である。口縁に平行する沈線をもつ。179は複合口縁部に2条の沈線が施される。181は波状頂

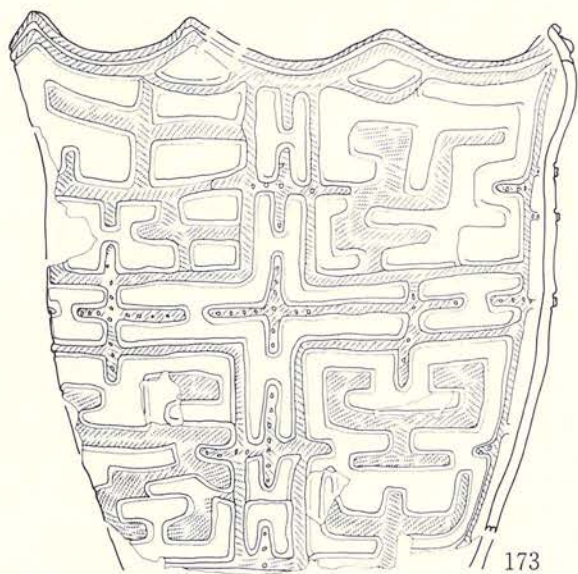


- 1. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質シルト 柔らかく締まりない、全体に浮石混入
- 2. 7.5YR 2/2~3/2 黒褐色 砂質シルト 柔らかい、黄褐色浮石全体に多く混入する
- 3. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂 質 やや締まっている、褐色土がブロック状に混入
- 4. 10 YR 3/4 暗褐色 砂質シルト やや締まっている、5層より明色
- 5. 10 YR 3/2 暗褐色 砂質シルト やや締まっている、黒色土と褐色土の混合土
- 6. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質シルト 堅く締まっている、全体に浮石多く混入

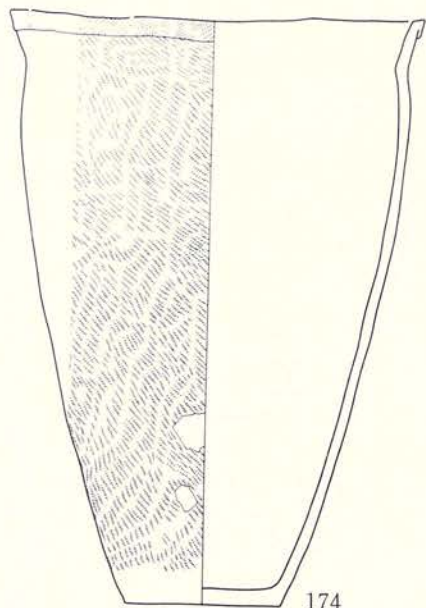


169~172はS = 1/3

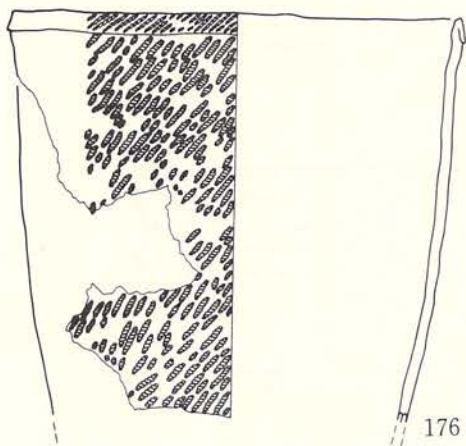
第26図 C III i 3 住居跡・出土遺物(1)



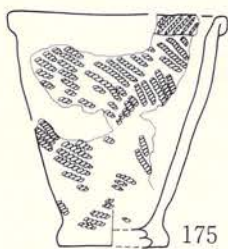
173



174



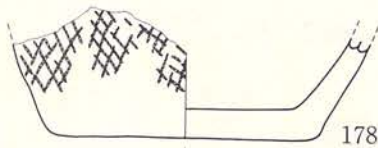
176



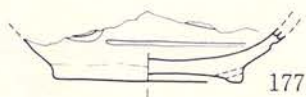
175



173・174はS=1/5  
176はS=1/4  
他はS=1/3



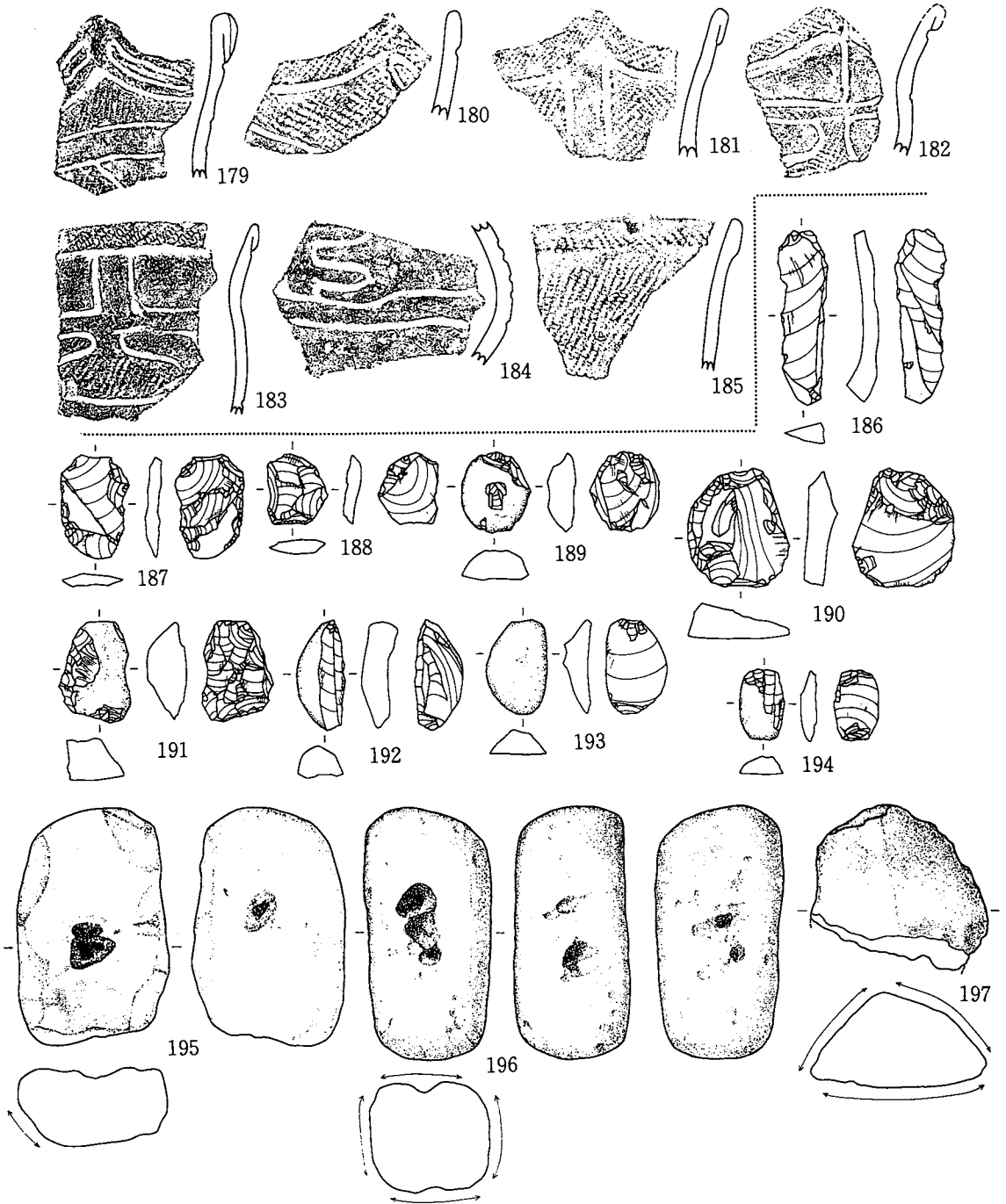
178



177



第27図 CⅢi3住居跡出土遺物(2)



179~185・195~197はS=1/2  
 186~194はS=1/2

第28図 CⅢi3住居跡出土遺物(3)

部の下位に沈線で区画された無文帯が垂下している。183は平縁の鉢の口縁～体部である。口縁部は頸部で屈曲し外傾する。沈線により施文され、口縁部には方形状の文様が、体部には曲線文が描かれる。184は壺の胴部片と思われる。地文はなく幅広の沈線で「S」字状の文様を描き、最大径をもつ箇所には2条の平行線を巡らせている。

**石器** (186～197) 搔・削器 (2点)、不定形石器 (1点)、楔形石器 (6点)、磨石 (1点)、磨・凹石 (2点) 等の器種が出土している。搔・削器は刃部加工を両側縁から施した187と片刃の186がある、188は側縁の一部に刃部を施した不定形石器である。189～194は楔形石器の破片と思われるもので、対応する端部に剝離痕がある。195・196は複数の機能を持った磨・凹石である。195は一部破損した磨石の表と裏面に凹痕を有する。196はこぶしほどの大きさで、全体が磨滅し4側面に凹痕がある。197は3側面使用の磨石で一部が欠損している。

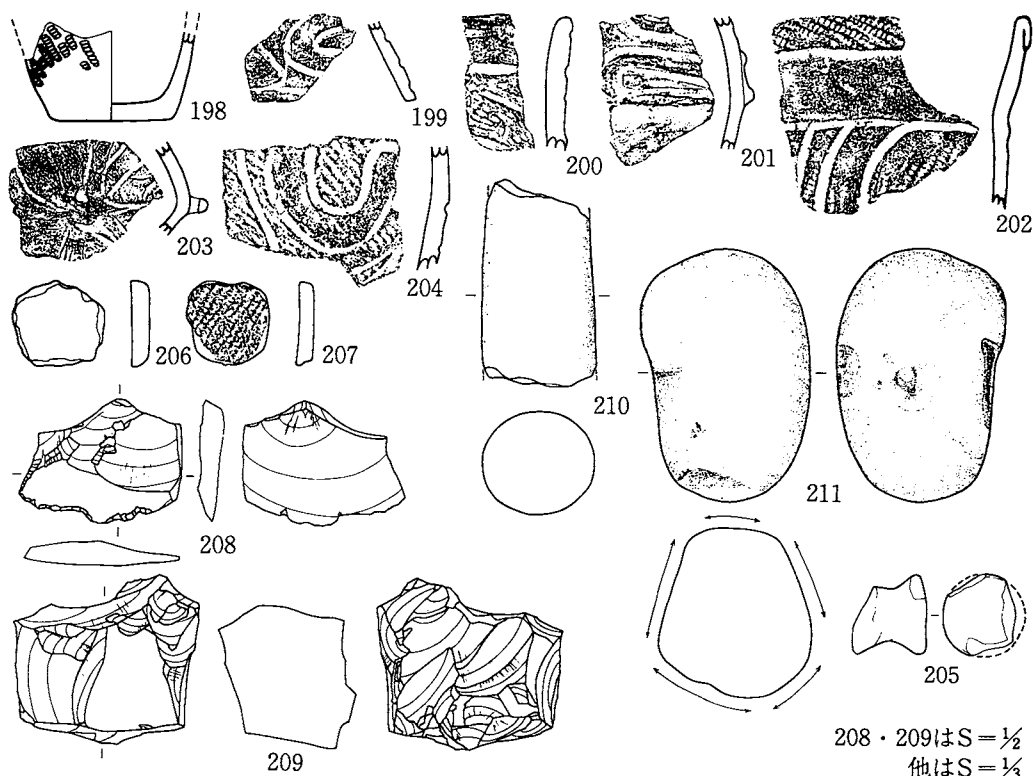
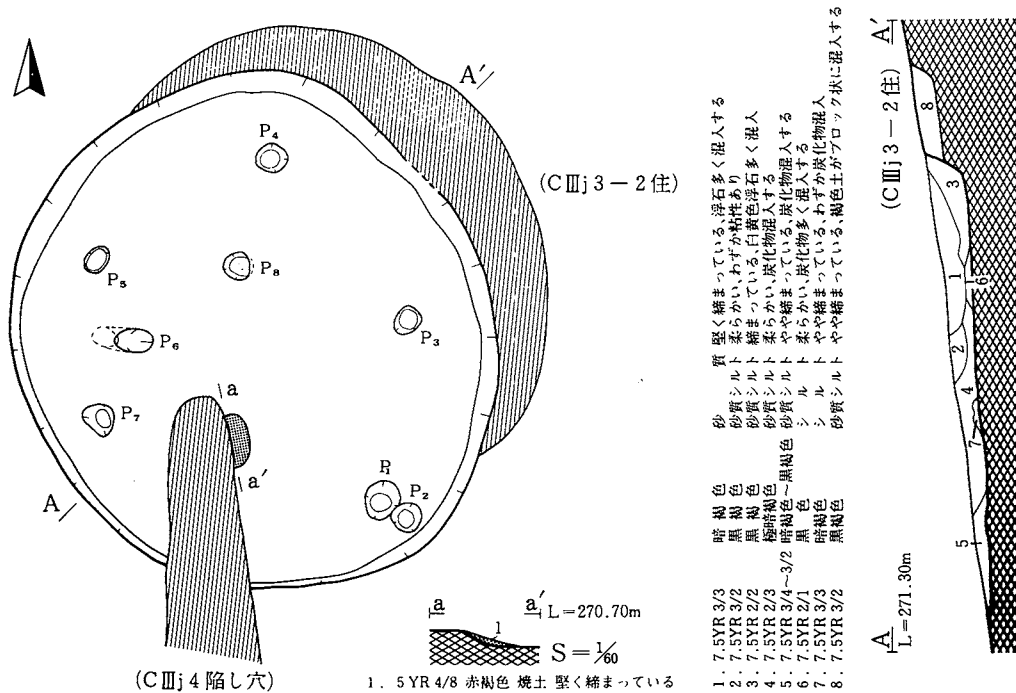
### C III j 3-1 住居跡 (第29図、写真図版15・48)

**位置** 調査区域東側の緩斜面南西寄りに位置する。北側～東側でC III j 3-2住居跡と、南側でC III j 4 陥し穴状遺構と重複している。重複する遺構との新旧関係は新しい順にC III j 4 陥し穴状遺構→本遺構→C III j 3-2住居跡である。**検出** V層中でC III j 3-2住居跡を含め半円状の暗色部として検出している。埋土下位～床面に多量の炭化物が出土していることから焼失住居と思われる。

**形態・規模** 平面形はほぼ円形を呈し、規模は床面で東西3.7m×南北3.8mを測る。**埋土** 北側にレンズ状に堆積する暗褐色の砂質土、北壁際及び埋土中央部に堆積する黒褐色・極暗褐色の砂質シルト、南側に堆積する暗褐色～黒褐色の砂質シルト等で構成される。埋土下位から床面にかけて多くの炭化物が出土している。炭化物はクリと鑑定されている。この埋土の堆積状況は一部不自然な状況があるものの主に自然堆積によるものと思われる。**壁** V層中にあり、南壁はやや不明な点もある。壁高は北壁30cm、東壁26cm、西壁16cm、南壁5cmである。壁の立ち上がりは北側で60度位に外傾する。

**床** IV層上面にあり、やや締まっている。小さな凹凸があるものの、全体的には平坦に近く南側に緩く傾斜する。北側と南側では約20cmの高低差がある。床面には炭化物が多く散在している。**柱穴** 柱穴及び柱穴状の小穴が計8個検出しているがP<sub>8</sub>は攪乱である。柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>～P<sub>5</sub>、P<sub>7</sub>の5本と思われる。P<sub>8</sub>は底部が開口部に対し斜め45度にあることから補助的性格をもつ柱穴であろう。P<sub>2</sub>の埋土中から深鉢の底部が出土している。

PNo	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
口径 cm	32×27	23×22	21×20	24×22	22×17	32×18	27×25	24×20
深さ cm	10	23	63	35	60	77	16	12



第29図 C III j 3-1 住居跡・出土遺物

**炉** 中央部の南側に地床炉がある。西側はC III j 4 陥し穴状遺構に切られ、かつ陥し穴状遺構の壁の崩壊に伴って焼土が崩落している。現存する焼土は南北45cm×東西15cmに広がり、厚さは5 cm程である。

**遺物** (第29図198～205)

**土器** (198～204) 199～201は床面から、他は埋土下位の出土である。198は鉢の底部で、地文はLR縦回転施文である。内面には多量の煤が付着している。199は切断土器と思われる破片で、曲線の細い沈線が施文されている。焼成は堅緻である。200・202は深鉢の口縁部である。200は口縁に平行する2条の沈線をもち、202は頸部に1条の横位の沈線が巡り、口縁部無文帯を区画する。体部には縦位の沈線文が施される。201は幅広い隆帯をもつ鉢、203は有孔突起をもつ小形鉢で地文はなく細い沈線が多用される。器表には丹が塗付されている。204は深鉢の体部である。曲線の沈線で無文帯を区画している。

**土製品** (205～207) 耳飾りと円盤状土製品が出土している。205は半欠品であるが滑車形耳飾りである。胎土に粒形1 mm程の粗砂を多く含み、焼成も悪く脆くなっている。206・207は縄文土器破片を人為的に径3 cm前後の円盤状に打ち欠いたものである。206は無文の土器片を使用している。

**石器** (208～211) 不定形石器(1点)、石核(1点)、フレーク(7点)、磨・凹石(1点)、石棒(1点)が埋土下位から床上で出土している。フレークの図面掲載は割あいした。208は側縁の一部に刃部加工を施した不定形石器である。209は流紋岩質極細粒凝灰岩の石核剥片である。211は2個の凹痕と5面の磨面を有する磨・凹石で、一側縁は弓状に湾曲する。210は石棒と思われる破片で径4 cm前後の円柱状に仕上げてある。

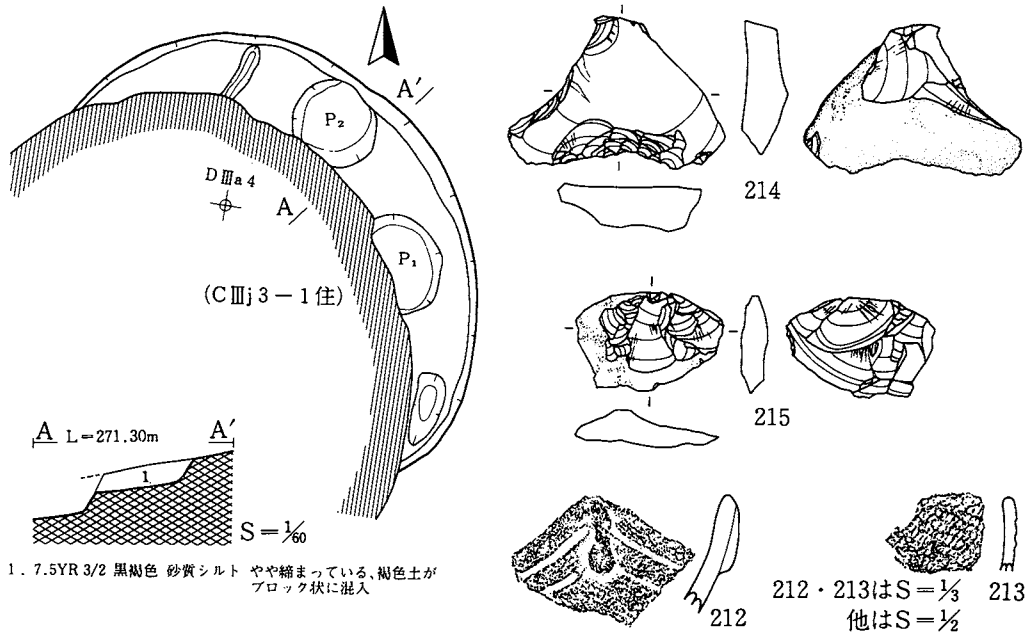
**C III j 3-2 住居跡** (第30図、写真図版16・48)

**位置** 調査区域東側の緩斜面南寄りに位置する。南側でC III j 3-1 住居跡と重複し切られていることから遺構の新旧関係は本遺構が旧く、C III j 3-1 住居跡が新しい。**検出** V層上面でC III j 3-1 住居跡と共に半円状の暗色部として検出している。

**形態・規模** 北側～東側の部分が三日月状に現存するのみである。検出された状況から径3.8 mの円形を呈していたと推測される。**埋土** 黒褐色の砂質シルトで構成されている。褐色土がブロック状に混入し、やや締まっている。**壁** V層の下位にあり、各壁の高さは北壁10cm、北西壁17cm、東壁17cmを測る。

**床** 浮石が多く混入するVI層相当上面にある。床面は凹凸があり、傾斜下方の南側へ下がる。**柱穴・土坑** 柱穴はなく浅皿状の土坑がある。P<sub>1</sub>はほぼ円形と推測され口径約80cm・深さ18cm、P<sub>2</sub>は口径70cm×60cm・深さ20cmである。





第30図 C IIIj 3 - 2 住居跡・出土遺物

炉 現存部では検出されていない。

遺物 (第30図212~215)

土器 (212・213) 2点は埋土下位からの出土である。212は山形口縁の鉢で、口縁は内湾気味に外傾して立ち上がる。山形口縁頂部から短く垂下する隆帯が貼付され、縄文施文後に口縁に平行する2条の沈線を施している。213は平縁の小形鉢で斜縄文(RL)が施文されている。

石器 (214・215) 埋土下位から214の不定形石器とフレイク215が出土している。

D III a 4 住居跡 (第31図、写真図版18・48)

位置 調査区域東側の緩斜面南寄りに位置する。南側でD III a 5住居跡と重複している。重複する遺構との新旧関係は、D III a 5住居跡が新しく本遺構が古い。検出 V層下位~VI層上面にかけて半円形状の暗色部として検出している。

形態・規模 南東部はダメ押しの際に削平し、南西部はD III a 5住居跡と重複しているために全体の形態及び規模は不明である。現存状況から平面形は円形を呈していたと推測される。現存する床面の規模は東西で4.2mを測る。壁 V層下位にある。壁高は北~北西壁15cm、東壁10cmである。

床 VI層シルトの上面で、東側は平坦で締まっている。西側は褐色シルトによって貼床が施

されていた痕跡が見られる。**柱穴・土坑** 柱穴は3個検出され、口径・深さはP<sub>1</sub>が43cm×40cm・58cm・P<sub>2</sub>が40cm×50cm・53cm、P<sub>3</sub>が33cm×32cm・48cmである。P<sub>2</sub>と対をなす柱穴は検出されていない。P<sub>4</sub>は小土坑である。平面形は48cm×45cmの円形で、断面形は浅鉢状を呈し、深さは48cmである。また、埋土下位から土器(216)が出土している。

**炉** 北壁から南側1.5mに40cm×30cmの地床炉がある。楕円形状に広がり、厚さは最大9cmに及ぶ。

#### 遺物(第32図216～221)

**土器(216～218)** 216は柱穴状ピットP<sub>4</sub>の埋土下位、他は埋土から出土している。216は壺の胴部である。最大径をもつ箇所ですく「く」の字状に強く屈曲する。その部分には横位1条の隆帯が巡り、上半部の文様帯を区画している。文様は細く浅い沈線によって縦横にかつ不規則に施される。内外面はナデ調整されている。器厚は薄く、器面は凸凹している。胎土に粗砂や小礫の混入が多く、焼成は悪い。217・218は屈曲する沈線が施文される土器の体部片である。

**石器(219～221)** 磨石(2点)と磨・凹・敲石(1点)が埋土下位から出土している。219はこぼしほどの大ききで4面が磨滅している。220は円盤状を呈し、表は裏面に比べて側縁の磨滅が著しい。221は表と裏面に凹痕、側縁に磨滅痕、端部に敲打痕がある。

#### D III a 5 住居跡(第31図、写真図版18・49)

**位置** 調査区域東側の中央南寄りに位置する。北側はD III a 4 住居跡と重複する。貼床の広がり状況から推測すると本遺構はD III a 4 住居跡より新しいものと思われる。**検出** D III a 4 住居跡の精査中に南側に広がる貼床により検出している。

**形態・規模** 貼床のみ遺存し全体の形状は不明である。貼床の範囲は東西1.4m×南北3.0mである。

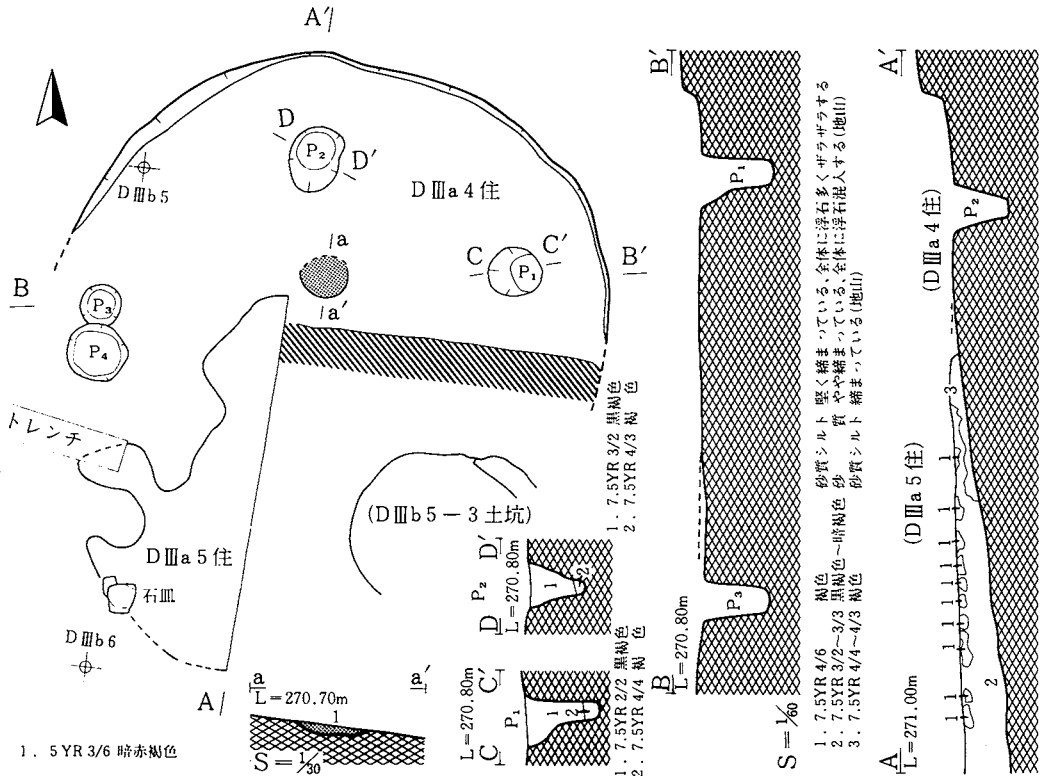
**床** 遺存する貼床はほぼ平坦で、黒褐色土上に浮石を多く混入した明黄褐色のシルト土により構築されている。**柱穴・炉** 検出されていない。

本遺構はD III a 4 住居跡とほぼ重複するような広がりをもつことから、D III a 4 住居跡を拡張した遺構と思われる。

#### 遺物(第32図222～224)

**土器(222)** 埋土下位から出土している。小形鉢の底部で無節斜縄文(L r)が施文され、底面には笹葉状の圧痕がある。胎土に砂粒や小礫が多く混入する。焼成は良く堅緻である。図面の掲載はしなかったが他に粗製土器片が僅かに出土している。

**石器(223・224)** 石皿が床上から出土している。223は破片のため形態は不明であるが、縁を残し中央部が浅く窪む流紋岩質中粒凝灰岩製である。224は凝灰質砂岩の割り石を利用したも



第31図 D III a 4・5 住居跡

ので、表と裏が弓状に窪んでいる。

#### D III C 1 住居跡 (第33図、写真図版16・49)

**位置** 調査区域東側の緩斜面東寄りに位置する。南側4 mにD III c 3住居跡がある。検出IV層上位で半円状の暗色部及び炉跡によって検出している。

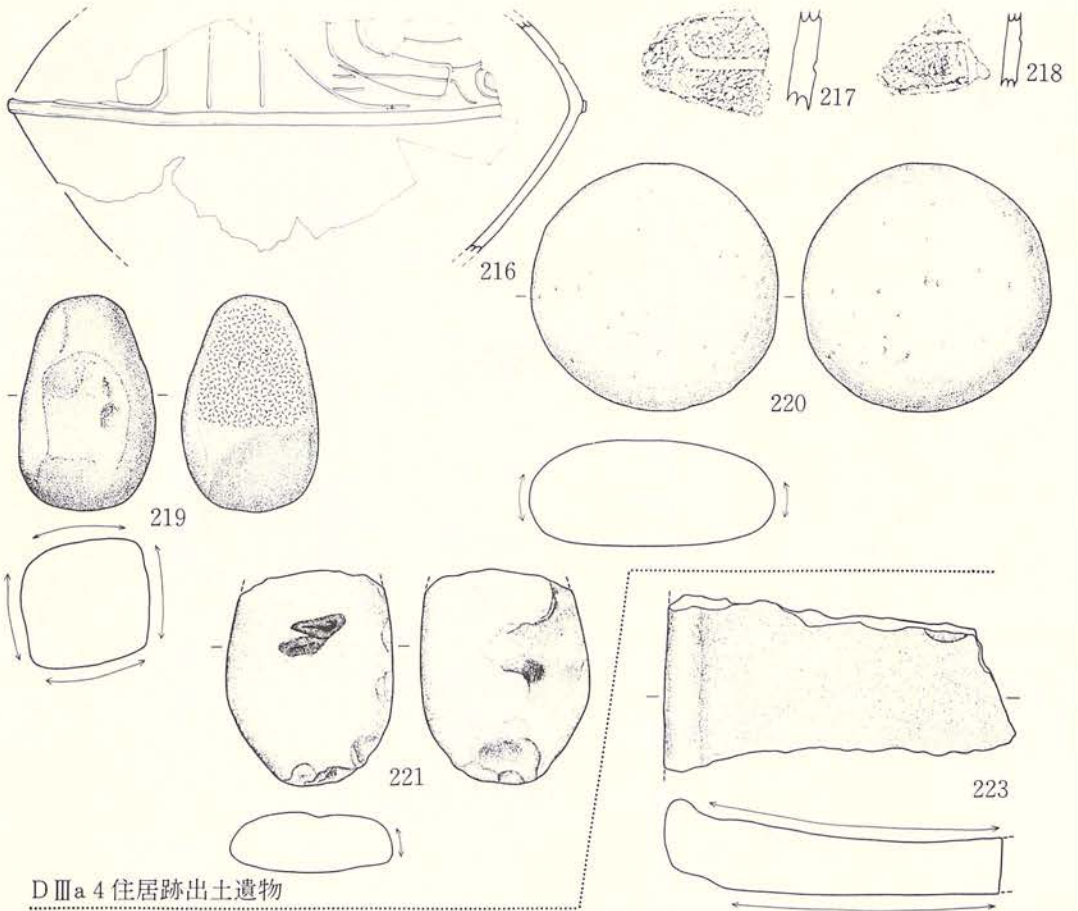
**形態・規模** 土砂の流失で南半部の壁や床面が現存せず、全体の形態及び規模は不明である。床面と思われる範囲は2.5m×1.5mが現存する。壁 緩く湾曲を呈する北壁のみ現存する。壁高は約20cmである。

**床** VI層シルト面につくられる。ほぼ平坦であるが南西側に緩く傾斜して低くなる。炉跡より南側は遺存せず流失したと考えられる。**柱穴・土坑** 検出されていない。

**炉** 北壁の南側1.5mに配石炉がある。規模は外径45cm×25cmで、径10cm程の垂角礫を2個埋置してある。焼土は礫の南側に44cm×22cmの不整形に広がり、にぶい赤褐色を呈し強く締まっている。焼土の厚さは最大6 cmを測る。

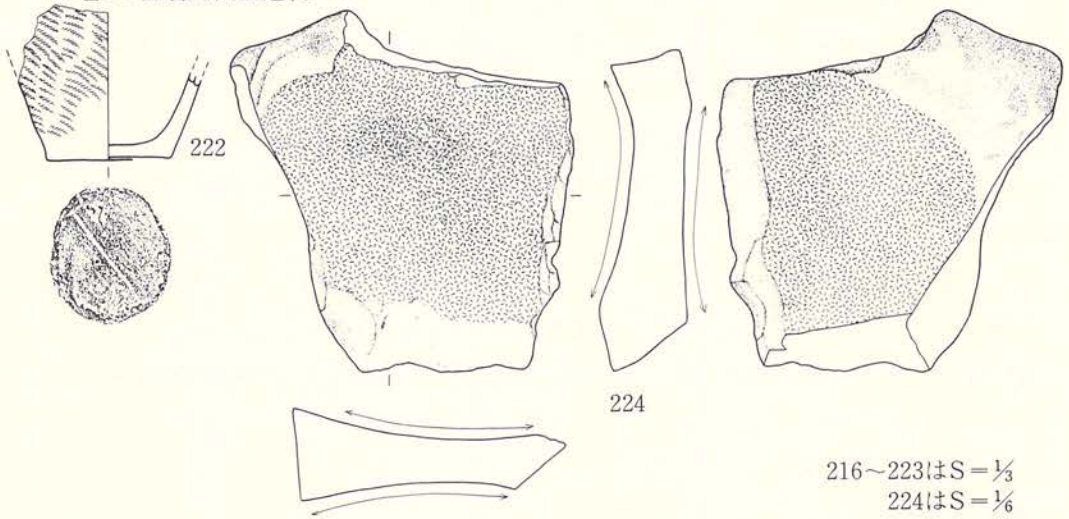
#### 遺物 (第33図225~227)

**土器 (225~227)** 3点は床面から出土した深鉢破片である。225は屈曲する沈線により縄文



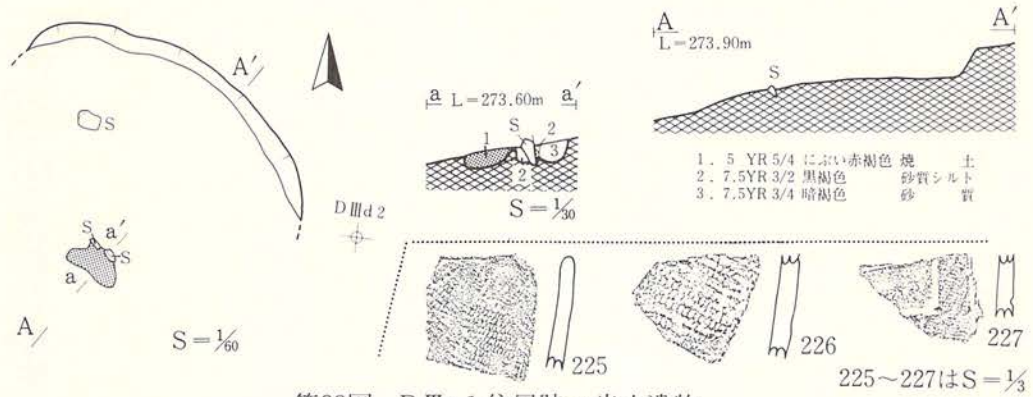
D III a 4 住居跡出土遺物

D III a 5 住居跡出土遺物



216~223はS=1/3  
224はS=1/6

第32図 D III a 4・5 住居跡出土遺物



第33図 D III c 1 住居跡・出土遺物

帯と無文帯を区画し、縄文帯には斜縄文（RL）が施文される。225は斜縄文（RL）、226は斜縄文（LR）が施文されている。

#### D III c 3 住居跡（第34図、写真図版17・49・50）

**位置** 調査区域東側の尾根筋南西寄りに位置する。北側5mにD III c 1住居跡がある。検出ダメ押しによってVI層上面で半円形状の暗色部として検出している。

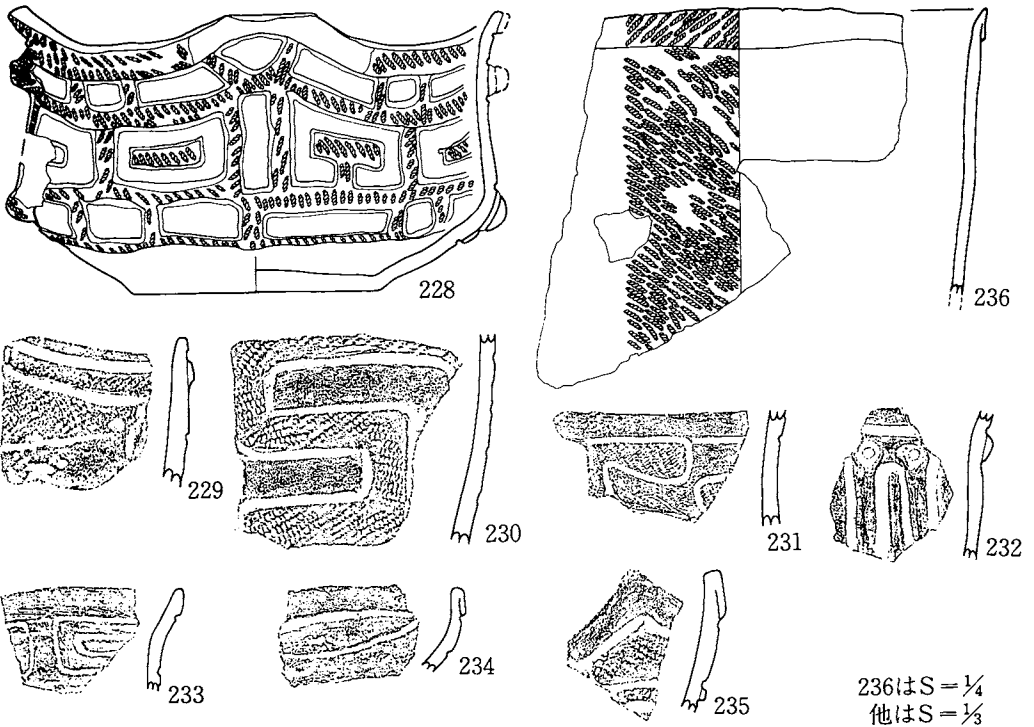
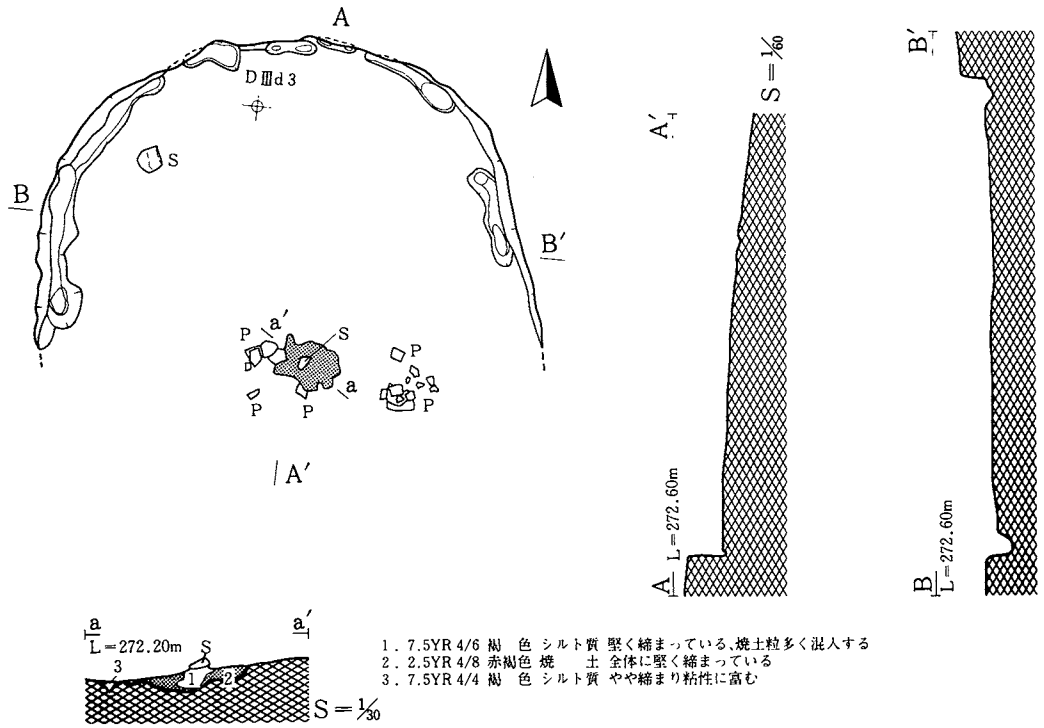
**形態・規模** 北東隅と南東隅は隅丸形状にやや張り出す形状を呈するものの、南側は削平され、全体の形態・規模は不明である。現存する床面の東西規模は3.7mである。**壁** VI層上位にあり北壁はほぼ直立し、東壁及び西壁は70～80度位に外傾して立て上がる。壁高は北～北東が30cm、北西が17cmである。

**床** VI層のシルト面上でほぼ平坦である。特に堅く締まった箇所は認められない。**柱穴・土坑** 検出されていない。**周溝** 部分的に途切れるが幅10cm～20cm、深さ5cm～10cmで壁際に巡る。北壁部の周溝は壁下位の外側に挟まれるように掘り込まれている。

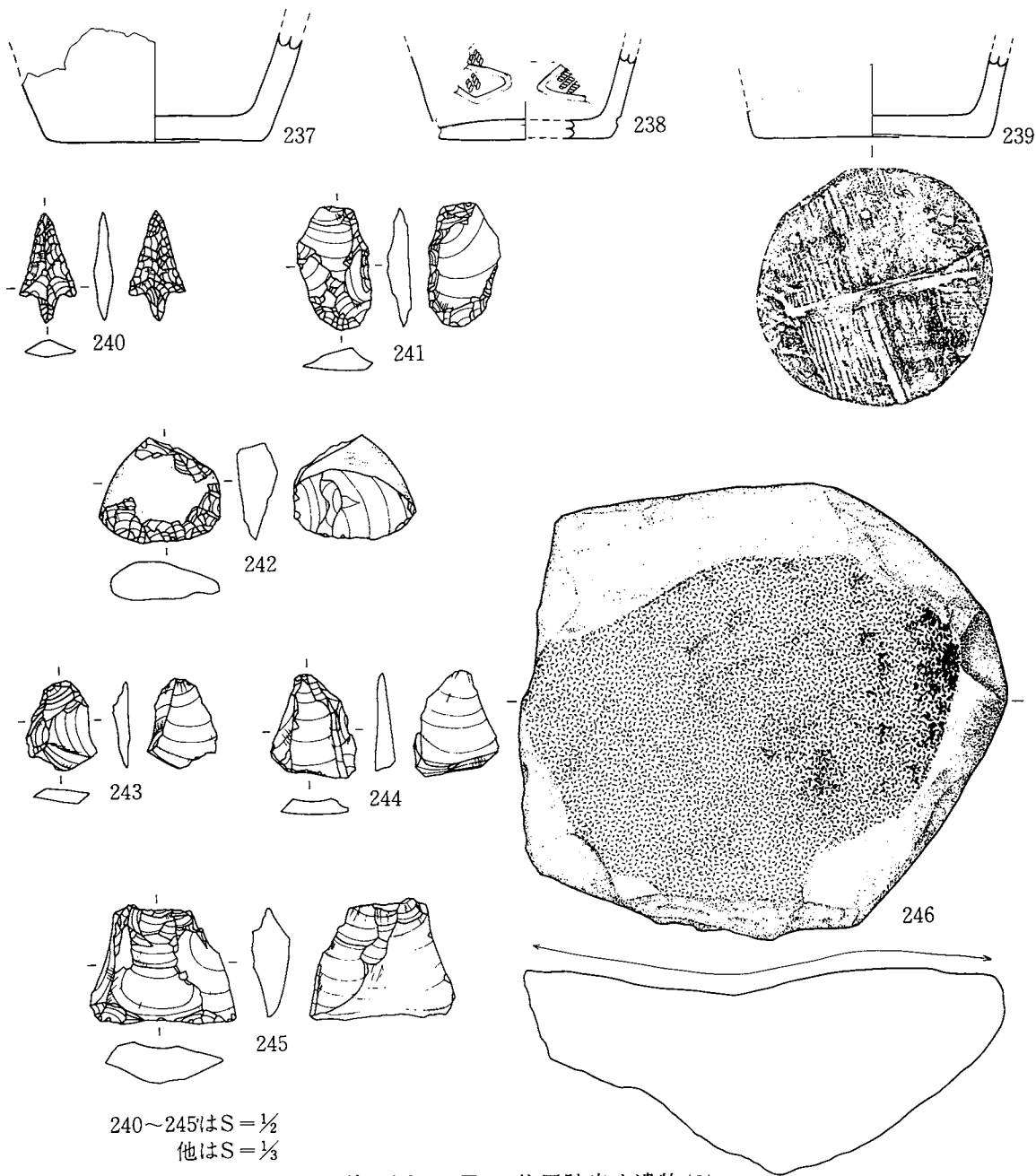
**炉** 北壁から南側へ2.3m、西壁から1.8mの位置に地床炉がある。焼土は50cm×35cmの不整形に広がり、赤褐色を呈し堅く締まっている。

#### 遺物（第34・35図228～246）

**土器**（228～239） 228～231は炉周辺、236は炉上面、他は埋土下位から出土している。228は4つの台形山形口縁をもつ浅鉢で、底部は大き目につくられ安定している。体部は底部から緩く立ち上がり、体部下半で強く屈曲し直立気味に口縁部に続く。口縁部は僅かに外反する。両端の山形口縁部の直下と体部屈曲部に対となる有孔突起がある。口縁部から体部下半まで幅の広い隆帯と無文部をふちどる沈線が規則的に施され、幾何学的文様を描き出している。隆帯及び沈線で区画された箇所には縄文が施文される。無文部及び内面は丁寧にナデ調整されてい



第34図 D III c 3 住居跡・出土遺物(1)



第35図 DⅢc 3 住居跡出土遺物(2)

る。口径20.2cm、器高11.0cm、底径9.8cmである。胎土に砂粒が多く混入するものの、焼成は良い。229・235は波状口縁の鉢で、229は口縁に平行する一条の隆帯及び沈線をもち、体部には沈線により無文線帯を区画する。隆帯にも体部と同じ斜縄文(LR)が施文される。235は複合口縁の波状頂部で沈線と隆帯により施文される。230・231は鉢の体部で屈曲する沈線により縄文

帯を区画し、縄文（RL）が充填される。232～234は隆帯と沈線、または沈線のみが施された鉢である。232は垂下する隆帯の上部交差部に2個の竹管状の刺突をもち、隆帯に沿って沈線が施される。233は口縁部が外反するもので、平行沈線により口縁に平行する長方形の文様を描く。234は小形の鉢と思われるもので、口縁は内湾気味を呈している。口縁直下に沈線が巡り、これと平行するように緩く湾曲する沈線が施される。236は複合口縁をもつ平縁の深鉢である。小礫や砂粒が多く、再火熱を受けて器表は剥落しザラザラする。237・239は深鉢の底部で239の底面には茅状繊維束の圧痕がある。237は表面が内面に比べて丁寧にナデ調整されている。いずれも小礫や砂粒が多く混入する。238は鉢の底部で最下端に横位の沈線が、体部には曲線の沈線が施され斜縄文（RL）が充填される。胎土に砂粒や雲母が多く混入する。

**石器**（240～246） 石鏃（1点）、搔・削器（2点）、フレーク（3点）、石皿（1点）等が出土している。240の石鏃は基部に抉入がある有茎鏃で、両面から丁寧に調整加工を施している。搔・削器は側縁の刃部加工が片面の242と両面の241がある。243～245はフレークで、245は床上から出土している。246は輝石安山岩の割り石を利用した石皿で、1面が使用され多少窪んでいる。

## 2. 竪穴住居跡状遺構

### B III a 4 住居跡遺構（第36図、写真図版19・20・50～52）

**位置** 調査区域西側の尾根南寄りに位置する。南西側でA III j 4 住居跡と重複し、遺構の新旧関係は不詳な点があるものの新しい順に本遺構→A III j 4 住居跡と思われる。**検出** IV層上面で黒褐色の不整形な落ちこみ部として検出している。

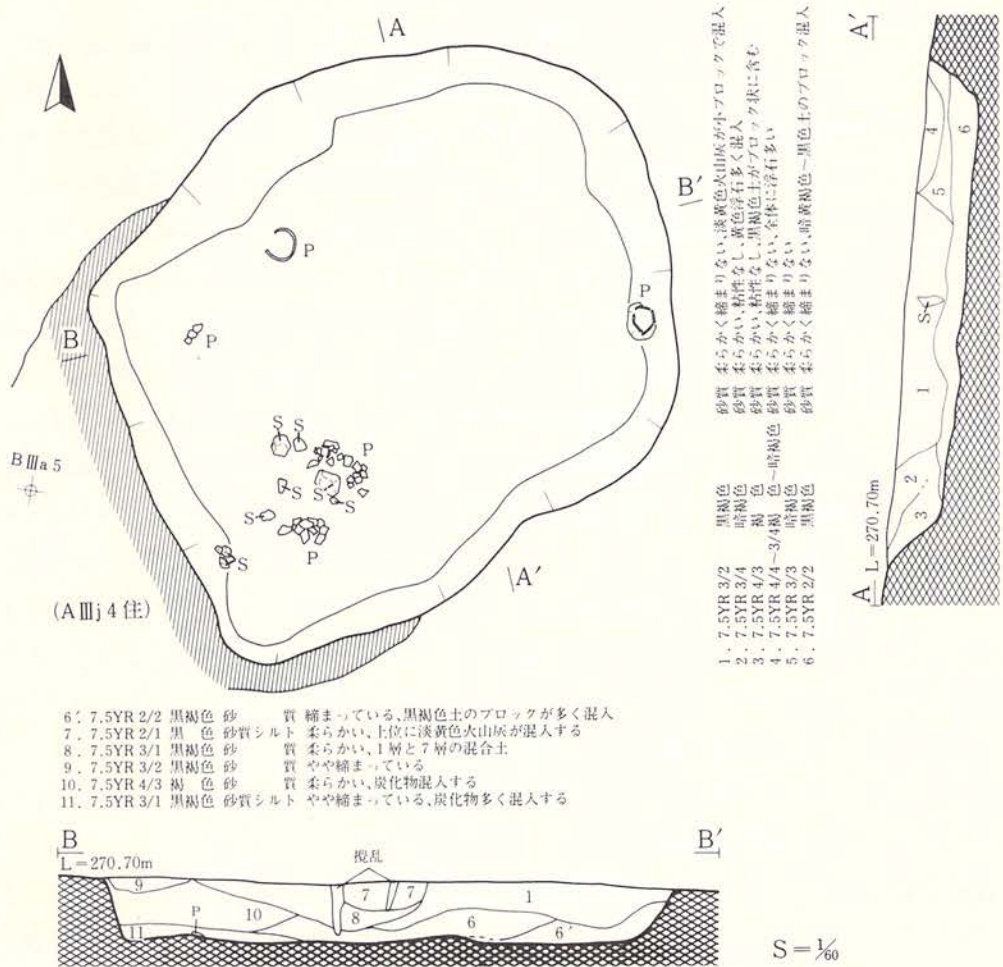
**形態・規模** 隅丸長方形を基調としているが北側はやや弧状を呈する。規模は床面で4m×3.2mを測る。**埋土** 木根等による攪乱もあるが黒褐色砂質土を主体とする11層に細分される。埋土の大部分を占める黒褐色土は、上部に少ブロックの十和田a 降下火山灰を含み、締めりはなく柔らかい。床上の11層は炭化物を多く混入している。**壁** IV層上位～V層にあり、東壁42cm、西壁45cm、南壁36cm、北壁53cmである。

**床** 凸凹が多少見られるもののほぼ平坦で締まっている。北側と南側では25cm程の比高があり、南側へ緩やかに傾斜している。**柱穴・土坑・炉** 検出されていない。

### 遺物（第37～39図247～292）

**土器**（247～269） 249は埋土下位～床面にかけて出土している。251は北西壁際から正立して、253は北東壁際で倒立した状態で出土している247・250・256・262・266・259は中央部の埋土下位から一括出土したものである。255・263は埋土中～下位、他は埋土中～上位から出土している。247は連鎖状の隆帯をもつ鉢で、体部上半～口縁部は欠損している。指頭圧痕をもつ連鎖状





第36図 B III a 4 住居跡状遺構

隆帯は縦位及び体部の下部に横位に貼付られる。縄文帯は細い沈線により区画され、平行する沈線の屈曲部には半円状の断面三角形を呈する隆帯が貼付られる。縄文帯及び体部下には単節斜縄文 (RL) が施文され、無文帯は丁寧にナデ調整される。内外面に煤が付着している。胎土に石英砂が多く混入し、色調はにぶい赤褐色を呈す。焼成は良い。248は平縁の鉢で、底部がやや張り出すようにつくられる。底部から口縁部にかけて緩く内湾するように外傾して立ち上がり、全体の形状は碗状を呈している。口縁には2条平行沈線が、体部には平行沈線による渦巻文が施され、その間には縄文が充填される。底面には笹葉状の圧痕がある。器面の調整が悪く、焼成は脆く全体に粗雑な作りである。249は深鉢の体部下半～底部で、地文 (RL) 施文後に綾絡文を縦位に施し、さらに平行沈線が施文される。体部下は縄文が施されずナデ調整

されている。胎土に小礫や粗砂が多く、焼成は悪い。250はやや小形の4波状口縁をもつ鉢で、体部下半～底部が欠損している。体部はほぼ直立気味に立ち上がり頸部で僅かに窄み、口縁は頸部から内湾するように立ち上がる。口縁の最上部には原体側面圧痕が施される。波状頂部の直下に断面が三角形の隆帯が貼付られ、頸部には連鎖状に指頭圧痕をもつ隆帯が横位に巡る。地文は無節斜縄文(Lr)が縦回転施文される。胎土に粗砂が多く混入し、焼成は脆い。251はRL斜縄文が施文され、外面には煤が付着している。252は小形鉢の底部で、底部から緩く外傾して立ち上がる。地文はなく沈線が施文される。底面には笹葉状の圧痕があり、器面は内外面とも丁寧に調整されている。253は体部下半～底部が欠損しているが251とほぼ同様な器形である。斜縄文(Lr)が施文され、胎土には砂粒が多く混入している。255は口縁に平行する2条の原体側面圧痕が施され、三日月状を呈する隆帯が貼付される。256は内湾する波状口縁の頂部で、細めの隆帯が口縁に平行し2条、波状頂部から縦位に3条が貼付される。隆帯上部には縄文が施文される。259も内湾気味を呈する口縁部で隆帯が多用される。260は薄手の土器で地文はなく、曲線の沈線が施文され有孔突起をもつ。262は連鎖状の隆帯をもつもので隆帯の交差する箇所にはボタン状の突起をもつ。267・268は深鉢の底部で、268は太めの斜縄文(LR)が施文されるが、269の地文は不明である。共に底面に網代痕をもつ。254は口縁部が欠損したミニチュア様の土器で、地文は斜位と縦位方向に縄文(LR)を施文している。

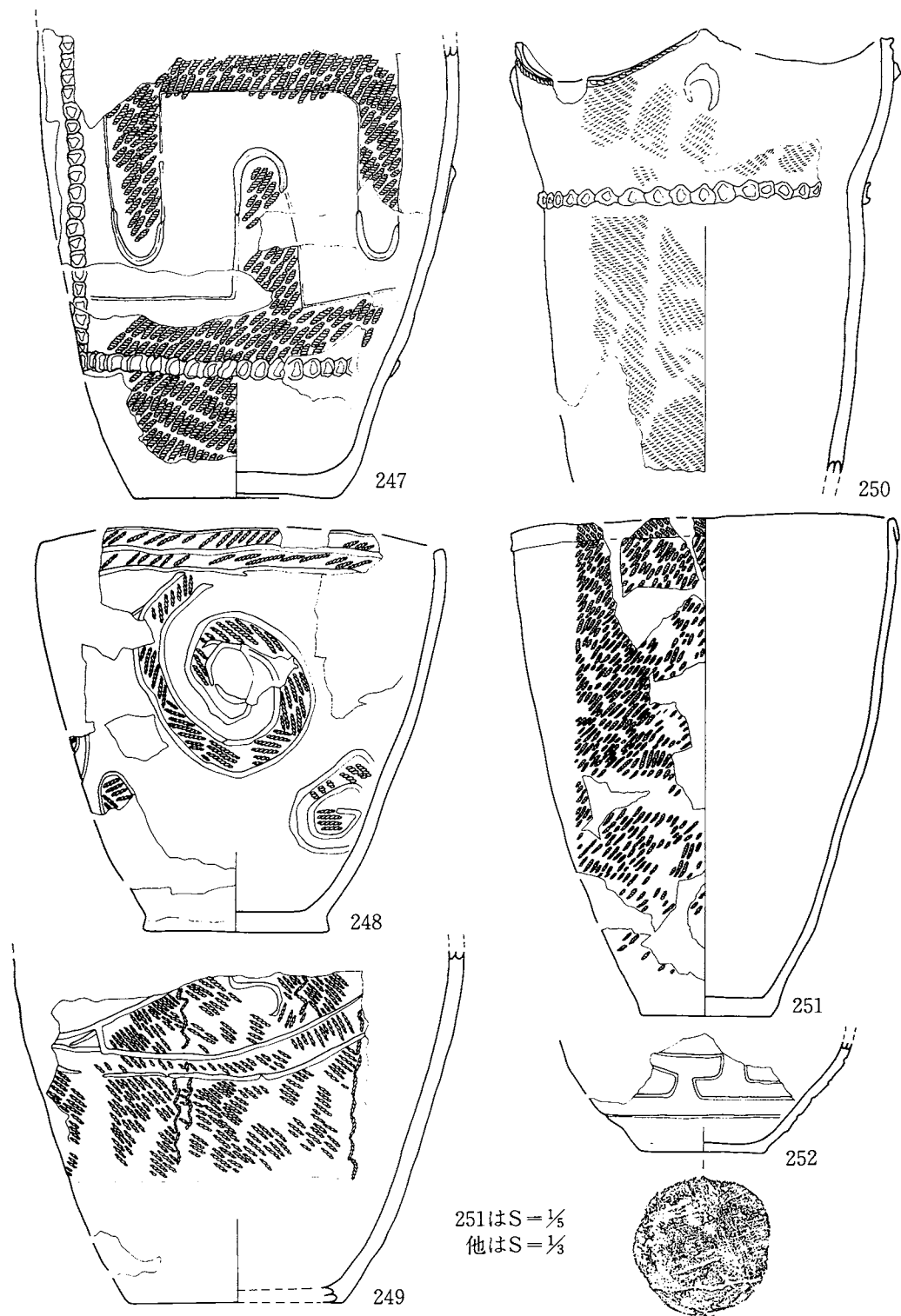
**土製品 (270)** 270の円盤状土製品は、人為的に縄文土器片を打ち欠いて円盤状に仕上げている。また、周縁の一部は磨かれている。

**石器 (271～292)** 楔形石器(11点)、石核(3点)、フレーク(26点)、磨製石斧(1点)磨石(1点)磨・凹石(2点)、磨・敲石(3点)、石皿(1点)等が埋土中から出土している。フレークの図面掲載は割あいした。楔形石器は四辺形を基本とし、対辺する縁辺部に使用剥離痕のある271～273と碎片と思われる274～281がある。282～284の石核(珪質泥岩)は西壁際の埋土下位から一括して出土したものである。285は磨製石斧で、基部は面取りが施され、刃縁は円刃状を呈する。両側縁の稜はあまり明瞭ではない。286は半分以上欠損した磨石である。287・288は磨・凹石、289～291は磨・敲石の複数機能を持ち合わせたものである。288は3側面に凹痕を有し、290・291の端部には敲打痕がある。292の石皿は割石(輝石安山岩)を利用したもので、半分以上は欠損している。使用面は平らで中央部に浅い凹痕が1個ある。

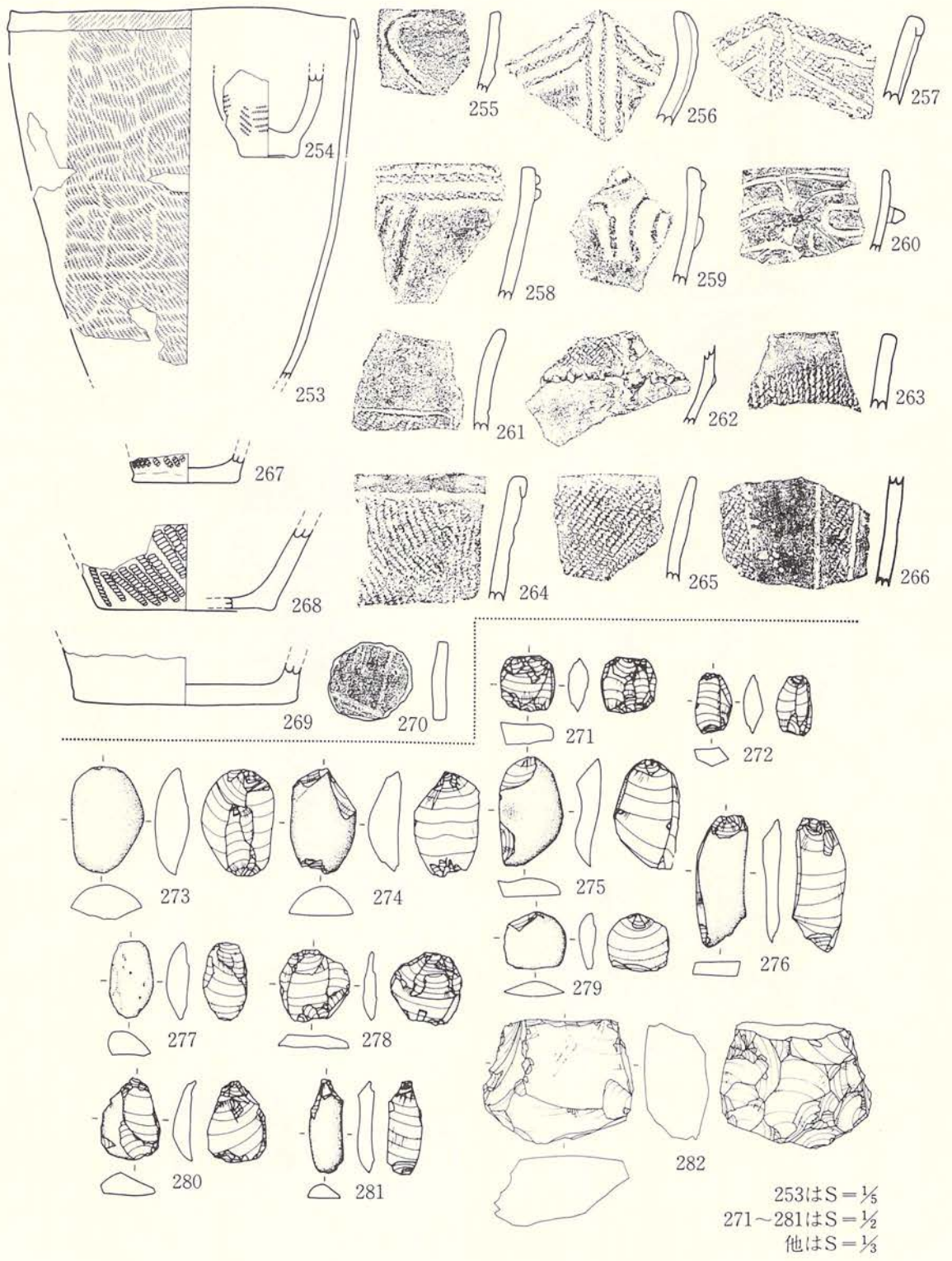
### 3. 炉跡・焼土遺構

#### A III j 3 炉跡 (第40図、写真図版21)

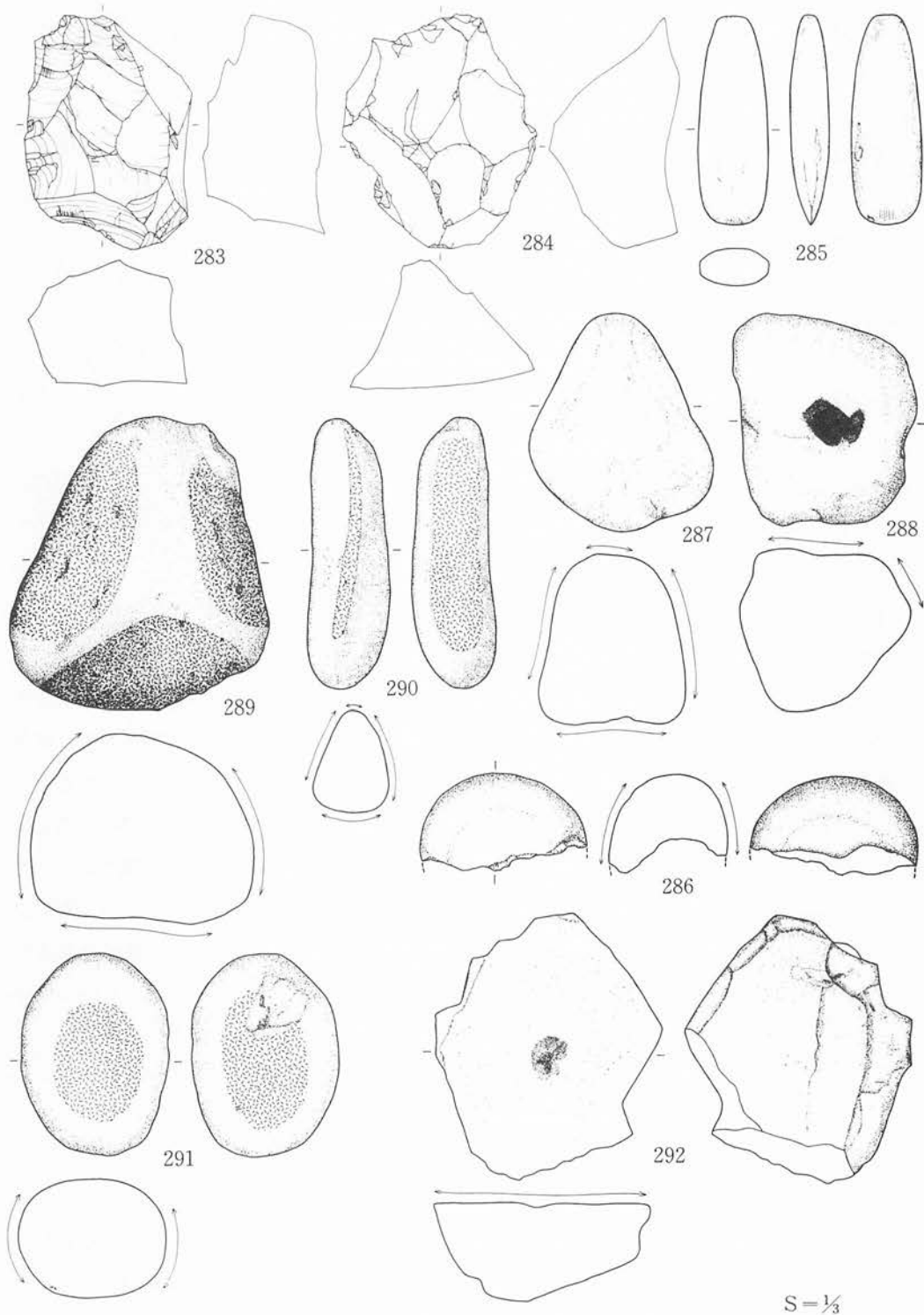
調査区域西側の尾根南寄りに位置する。A III i 2 住居跡と重複し切られていることから新旧関係は本遺構の方が古い。検出はA III i 2 住居跡の東側床面から東壁にかけ焼土の広がりによ



第37図 BⅢa 4 住居跡状遺構出土遺物(1)



第38図 B III a 4 住居跡状遺構出土遺物(2)



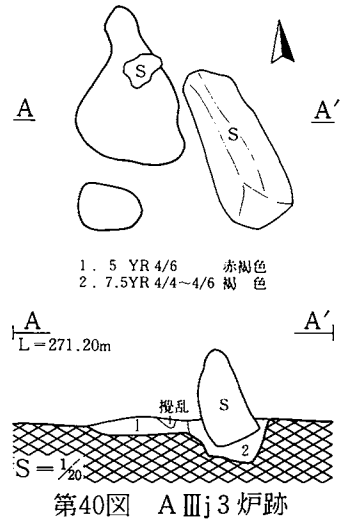
第39図 B III a 4 住居跡状遺構出土遺物(3)

って確認されたものである。長さ45cm×17cmの垂角礫を1箇埋置し、焼土は45cm×28cmの広がりをもつ。焼土は赤褐色を呈しやや締まり、厚さは最大5cmを測る。この焼土は現地性のものであると思われる。

遺物は出土していない。

#### D II h 9 炉跡 (第41図、写真図版21・53)

調査区域東側の中央部東端に位置する。南東側にD II h 10 炉跡がある。III層相当の黒色土が帯状に堆積する箇所に試掘を入れた際に本遺構を検出している。炉は石囲炉で垂角礫を3個「コ」の字状に配置し、10数cm程埋置している。礫は長さ30cm程でやや扁平を呈し、火熱を受け赤色変化を生じている。規模は礫の両端で50cmを測り、炉内は攪乱を受けたと思われる赤褐色焼土粒を僅かに混入する暗褐色シルトが堆積する。



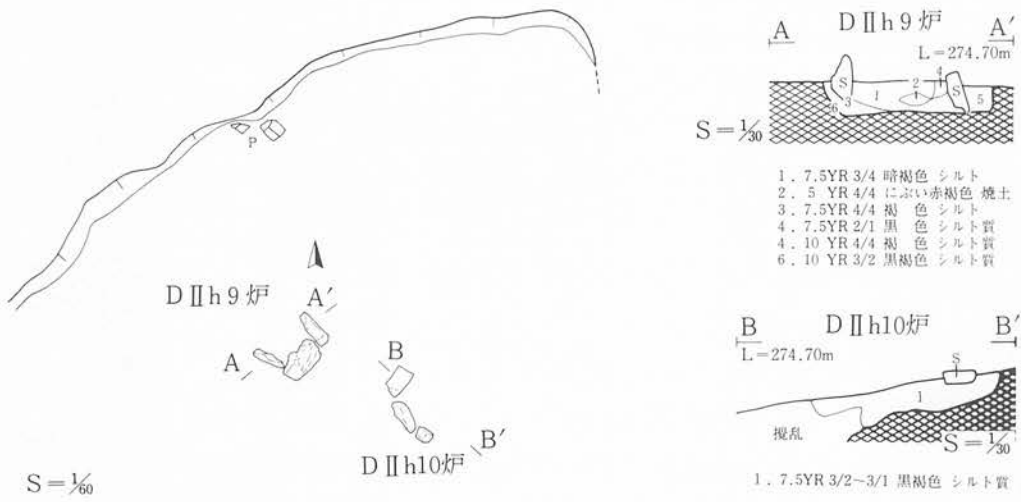
第40図 A III j 3 炉跡

#### 遺物 (第41図 1～5)

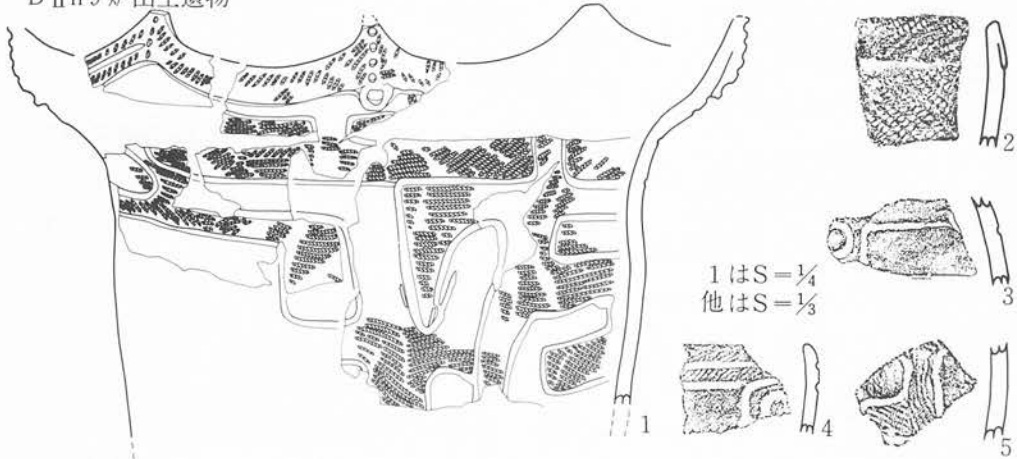
土器は2が炉内から、他は炉周辺から出土したものである。1は炉跡北側の地山が壁状に切れる箇所から出土した大形深鉢の体部～口縁部である。8個の山形口縁突起をもつ。体部は直立気味に立ち上がり頸部で窄み、口縁は頸部から大きく屈曲して外傾する。口縁は幅広い複合口縁で、山形突起には頂部から縦に連続刺突が施される。その真下にはボタン状の貼付を部分的に付け変化をもたせている。頸部・体部は沈線による幾何学的で大柄な文様を描き、縄文帯と無文帯を区画している。文様が入組むためか無文帯に明瞭な沈線区画をもたず縄文が施される部分も見られる。縄文は主に斜位の回転による横走縄文(RL)が施される。無文帯及び内面は丁寧にナデ調整される。器厚は8mm～9mmと厚く、焼成は堅緻である。色調は赤褐色を呈している。2は内湾する粗製深鉢の口縁部片で複合口縁をもつ。体部・口縁部には同じ原体により斜縄文(LR)が施される。3は地文をもたず屈曲する沈線及び円弧状の沈線文をもつ鉢である。4は口縁に平行する2条沈線と体部には曲線の沈線が施される薄手の鉢である。5は4と同様に曲線の沈線を施す鉢の体部破片である。

#### D II h 10 炉跡 (第41図、写真図版21)

調査区域東側の中央部東端に位置する。遺構の南東側は尾根の急斜面で北西側1mにD II h 9 炉跡がある。D II h 9 炉跡との新旧関係は不明であるが、遺存状況から本遺構の方が古いと思われる。耕作土直下のIII層相当の黒色土下位で検出している。黒色土下位に構築され、垂角



D II h 9 炉出土遺物



第41図 D II h 9・10炉跡、出土遺物

礫 3 個を弧状に配置する。規模は南北に65cmを測る。中央の礫だけが僅かに埋置されている。また、炉内の焼土の形成は認められない。本遺構の北側には地山がやや凸凹しつつも平らに広がる面があり、さらに北側には壁状に地山が切り込まれる箇所があることと考え合わせると、住居跡に伴う炉跡であった可能性もある。

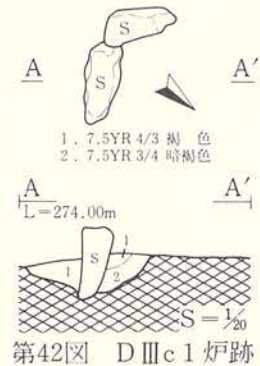
遺物は出土していない。

D III c 1 炉跡 (第42図、写真図版21)

調査区域西側の中央部付近の緩斜面上に位置する。南東側 2 m に D III c 1 住居跡が隣接す

る。IV層上位で検出している。長さ25cm×5cm程の直角礫2個を「八」の字状に埋置させた配石炉である。炉内における焼土の形成は全く僅かに炭化物が散在する。

遺物は出土していない。



#### B II c 10 焼土 (第43図、写真図版22)

西側調査区域の尾根中央付近に位置する。北西側3mにB II b 9—1住居跡がある。IV層中で検出している。

焼土及び焼土粒は90cm×48cmの不整形に広がり、全体に攪乱を受けている。焼土の形成は焼土粒とIV層の砂質土が混合する褐色と暗褐色土で大半を占める。現存する焼土の厚さは最大6cmである。この焼土は現地性のもと思われる。

共伴する遺物はないが、周辺から縄文時代後期の土器が出土している。

#### B II d 7 焼土 (第43図、写真図版22)

調査区域西側の尾根北寄りに位置する。北東側5mにB II e 6住居跡がある。IV層上面で検出している。

焼土及び焼土粒は47cm×23cmの不整形に広がる。焼土の形成は微弱で、IV層の砂質土が僅かに火熱を受けた程度であり、暗赤褐色を呈し柔らかく締まりはない。

共伴する遺物はなく時期は不明である。

#### B II g 10 焼土 (第43図、写真図版22・53)

調査区域西側の東側の斜面に位置する。南東側にB II f 10住居跡が隣接する。III層相当の黒色土中で検出している。

焼土は45cm×34cmの不整形に広がり、一部攪乱を受けている。西側に比べ東側が強く焼成を受け強く締まっている。焼土の厚さは最大12cmである。この焼土は現地性のものである。

遺物 (第44図1)

1は焼土上面から出土の磨石で、両端部および3側面が磨滅している。

#### B III c 3 焼土 (第43図、写真図版22)

調査区域西側の尾根の南寄りに位置する。西側にB III b 2住居跡が隣接する。III層中で検出している。

焼土は65cm×48cmの不整な楕円形状をなし、全体が木根等により攪乱され、遺存状況が悪い。



現存する焼土の厚さは最大12cmを測り、にぶい赤褐色を呈し柔らかい。この焼土は現地性のものである。

遺物は出土していない。

#### D II a 9 焼土 (第43図、写真図版23・53)

調査区域東側の緩斜面中央北寄りに位置する。北東側4 m にD II a 8 土坑がある。IV層上位で検出している。

粗掘りの際に焼土上面を重機で削平しており、現存する焼土及び焼土粒は50cm×27cmの不整な楕円形状を呈する。焼土の北西側に炭化物及び焼土粒が混入する暗褐色土が広がる。焼土はIV層の砂質土が焼成を受けたもので、赤褐色を呈し締まっている。全体は重機の削平以前に攪乱を受けており、現存する厚さは最大7 cmを測る。この焼土は現地性のものである。

遺物 (第44図2・3)

土器2・3は焼土内から出土している。2は隆帯と沈線が多用される小形鉢の体部片、3は深鉢の体部片で曲線の沈線及び隆帯を施している。

#### D II c 9 焼土 (第43図、写真図版23)

調査区域東側の中央の緩斜面に位置する。北西側8 m にD II a 9 焼土がある。VI層の上面で検出している。

焼土及び焼土粒は58cm×40cmの不整な楕円形状の広がり呈するが、全体に暗褐色シルトの混合土で柔らかく締まりはない。北側での焼土塊の厚さは最大5 cmを測る。この焼土は異地性と思われる。

この遺構に伴う遺物は出土していないが、焼土の周辺部から縄文時代後期の土器片が出土している。

#### D II g 10 焼土 (第43図、写真図版23)

調査区域東側の尾根筋のやや南寄りに位置する。南西側2 m にD II f 10 陥し穴状遺構がある。VI層上面で検出されている。

焼土及び焼土粒は65cm×55cmの楕円形状に広がり、焼土の形成は中央部から北側で厚く最大8 cmに及ぶ。北側は全体に攪乱を受けており、木根攪乱部や褐色シルトと焼土粒の混合土が広がる。この焼土は現地性のものである。

遺物は出土していない。

#### D III a 1 焼土（第43図、写真図版23・53）

調査区域東側の緩斜面中央付近に位置する。西側に隣接しC III j 1 土坑がある。IV層上位で検出している。

焼土及び焼土粒は65cm×50cmの不整形に広がり、焼土の東側に破損した深鉢が横転して出土している。深鉢の内部にも周辺部と同様な焼土がある。焼土及び焼土粒は柔らかく締めりはなく、全体に炭化物が混入している。この遺構は、焼土を入れた深鉢と共に焼土を廃棄したものと思われる。

#### 遺物（第44図4・5）

土器4は焼土塊と共に横位の状態で出土した深鉢で、口縁～体部上半が欠損している。体部下半は底部から直線的に外傾して立ち上がる。体部の地文はLR斜縄文で、焼成は良い。5は曲線の沈線及び隆帯が施される深鉢の体部片である。

#### D III a 5 焼土（第43図、写真図版24・53）

調査区域東側の緩斜面南寄りに位置する。C III j 5 配石遺構内の東寄りにあり、焼土上面は配石遺構面より10cm～15cm下位で検出している。

焼土及び焼土粒は65cm×52cmの不整形に広がり、上面には深鉢の破片が散在し、焼土内には破損した深鉢が横位の状態で出土している。強く焼成を受け、赤褐色を呈し堅く締まっている。厚さは最大11cmである。この焼土は現地性のものであり、C III j 5 配石遺構に伴う遺構の可能性がある。

#### 遺物（第44図6～8）

6は焼土の中央部で横位の状態で出土した深鉢の体部下半～底部である。底部下端は強く張り出し、底部内面の中央が半球状に盛り上がる。体部下半の形状は底部から僅か内湾気味に立ち上がり、その後ほぼ直線的に外傾する。体部地文は斜縄文（RL）である。7は焼土周辺から出土した壺と思われる土器の体部片である。2条の隆帯で体部文様帯を区画し、屈曲する沈線により区画文様を描き出している。

8は焼土上面から出土した円盤状石製品である。白色粒凝灰岩を粗く面取りし、いびつな円盤状に仕上げている。側面には浅いV字状の条痕が数条見られる。

#### D III d 4 焼土（第44図、写真図版24）

調査区域東側の緩斜面南寄りに位置する。北側3mにD III c 3 住居跡がある。IV層下位で検出しているが粗掘の際焼土上面を削平している。

現存する焼土及び焼土粒は40cm×35cmの範囲に不整形に広がる。焼土はにぶい赤褐色を呈し、

柔らかく締まりがない。現存する厚さは僅か数センチを測るだけである。この焼土は現地性のものと思われる。

遺物は出土していない。

#### D III f 1 焼土 (第44図、写真図版24・53)

調査区域東側の尾根筋中央付近に位置する。北東側に隣接してD II f 10 陥し穴状遺構がある。VI層上面で検出している。

焼土及び焼土粒は北西—南東方向に長い1.35m×60cmの不整楕円形状に広がる。北西側は南東側に比べ焼成が弱く、暗赤褐色を呈している。焼土は中央から南東寄りに厚く、最大8cmを測る。この焼土は現地性のものと思われる。

#### 遺物 (第44図9)

9は焼土内から破片として出土した深鉢の体部下半～底部である。底部から緩く内湾気味に立ち上がる器形である。底部付近に横位沈線を巡らせ、体部文様帯を区画する。体部文様は平行する2条の沈線により大柄な曲線文様を描き、縄文帯と無文帯を区画する。縄文帯には複節斜縄文(RLR)が施されている。土器は火熱を受け脆くなり、胎土に粗砂を多く混入する。

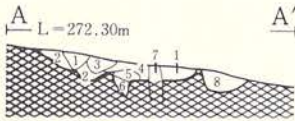
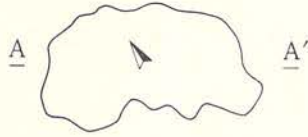
#### D III g 4 焼土 (第44図)

調査区域東側の尾根南寄りに位置する。西側2mにD III f 3 陥し穴状遺構がある。VI層上面で検出している。

焼土は全体に木根による攪乱を受けている。現存する焼土及び焼土粒は55cm×22cmの範囲で南北方向に長い不整形を呈する。色調は赤褐色で、堅く締まっている。厚さは最大5cmを測る。この焼土は現地性のものと思われる。

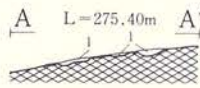
遺物は出土していない。

B II c10 焼土



1. 5 YR 4/8 赤褐色 焼土
2. 7.5YR 4/4 褐色 砂質
3. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質
5. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質
6. 5 YR 3/3 暗赤褐色 砂質
7. 5 YR 3/3 暗赤褐色 砂質
8. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質

B II d 7 焼土



1. 5 YR 3/3 暗赤褐色 焼土

B II g10 焼土



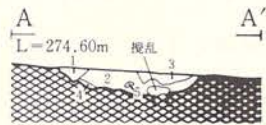
1. 5 YR 4/8 赤褐色 焼土
2. 5 YR 3/6 暗赤褐色 焼土
3. 5 YR 3/3 暗赤褐色 焼土
4. 5 YR 3/3 暗赤褐色 焼土
5. 5 YR 3/6 暗赤褐色 焼土

D II a 9 焼土



1. 2.5YR 4/6 赤褐色 焼土
2. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土
3. 5 YR 3/6 暗赤褐色 焼土混土
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質
5. 7.5YR 3/4~4/4 暗褐色-褐色 砂質
6. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質
7. 10 YR 4/6 褐色 シルト
8. 7.5YR 4/3 褐色 砂質シルト

D II c 9 焼土



1. 5 YR 5/8 明赤褐色 焼土
2. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト
3. 5 YR 3/3 暗褐色 シルト
4. 5 YR 3/6 暗赤褐色 シルト
5. 5 YR 3/6 暗赤褐色 焼土

B III c 3 焼土

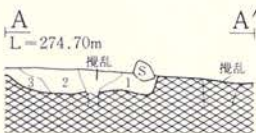


1. 10 YR 3/3 暗褐色 砂質
2. 5 YR 4/4 にぶい赤褐色 焼土
3. 5 YR 3/6 暗褐色 焼土
4. 5 YR 2/4 極暗赤褐色 シルト
5. 5 YR 4/4 にぶい赤褐色 焼土
6. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト
7. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト

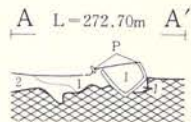
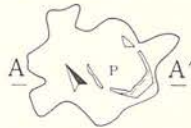
D II g10 焼土



1. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土
2. 7.5YR 4/4 褐色 シルト質
3. 7.5YR 4/3 褐色 シルト質

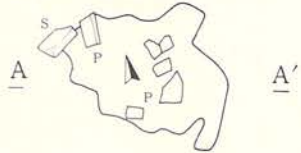


D III a 1 焼土

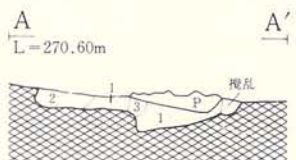


1. 5 YR 3/3~3/4 暗赤褐色 焼土混土
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト

D III a 5 焼土



1. 2.5YR 4/6 赤褐色 焼土
2. 5 YR 4/4 にぶい赤褐色 砂質シルト
3. 10 YR 4/4 褐色 シルト



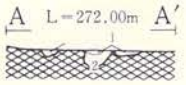
S = 1/30

第43図 焼土遺構(1)

D III d 4 焼土

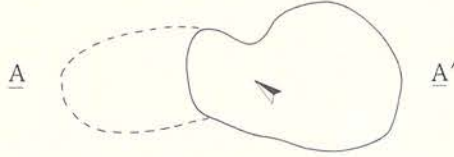


- 1. 5 YR 4/4 に近い赤褐色 焼土
- 2. 7.5YR 3/2 黒 褐色 シルト

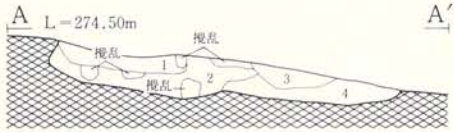


S = 1/30

D III f 1 焼土



- 1. 5 YR 3/3 暗 赤 褐色 シルト
- 2. 5 YR 4/4 に近い赤褐色 シルト
- 3. 5 YR 4/6 赤 褐色 焼土
- 4. 5 YR 4/3 に近い赤褐色 シルト



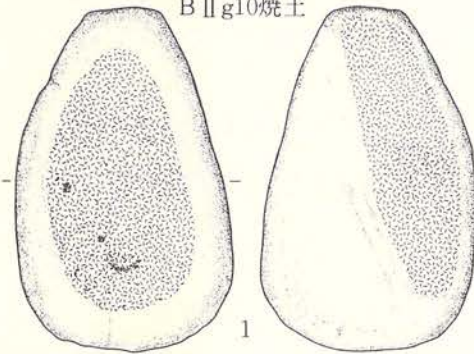
D III g 4 焼土



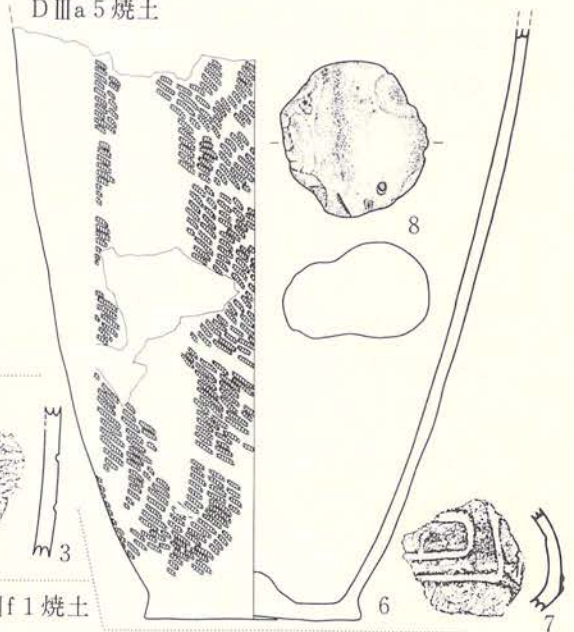
- 1. 5 YR 4/6 赤 褐色 焼土
- 2. 5 YR 3/6 暗 赤 褐色 シルト



B II g10 焼土



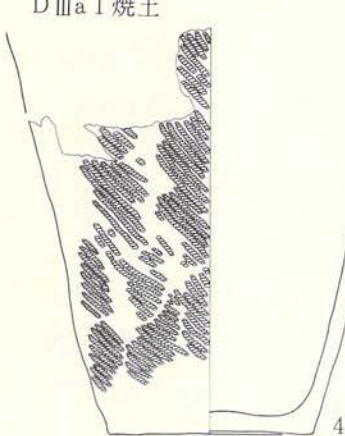
D III a 5 焼土



D II a 9 焼土

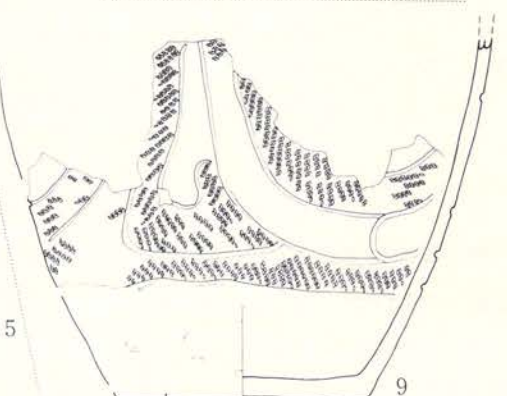


D III a 1 焼土



D III f 1 焼土

4 は S = 1/4  
6 は S = 1/5  
他は S = 1/3



第44図 焼土遺構(2)・出土遺物

## 4. 土坑

### A II j 10土坑（第45図、写真図版25・54）

調査区域西側の尾根中央付近に位置する。A II i 10住居跡と重複し、その上位にある。Ⅲ層中で方形の暗色部として検出している。

平面形は開口部・底部とも隅丸方形を呈する。規模は開口部が1.26m×1.12m、底部が1.16m×1.06mである。壁は底面に対し直立気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈す。深さは中央部で18cmと浅い。底面はほぼ平坦で締まっている。南側底面にA II i 10住居跡の炉上面が露呈している。

埋土の主体は炭化物が多く混入する黒色砂質シルトで、柔らかく締まりはない。埋土下位から底面にかけて木質の残る炭化物が多く出土している。樹種はクリと鑑定されている。

### 遺物（第50図1～4）

埋土中から楔形石器3点と不定形石器1点が出土している。1～3は平面形が四辺形を基本とする楔形石器で、対辺する縁辺部に使用剝離痕がみられる。4は側縁の一部に刃部調整加工を施した不定形石器である。

### A III j 5土坑（第45図、写真図版25）

調査区域西側の尾根の南寄りに位置する。遺構の北側にA III j 4住居跡が隣接している。Ⅲ層中で木根の密生する窪地として検出している。

平面形は開口部・底部ともほぼ隅丸長方形を呈する。規模は開口部が2.1m×1.74m、底部が1.6m×1.2mである。中央部の深さは40cmである。壁は60～70度位に外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は凹凸があり、全体として南西側に緩く傾斜している。北側隅の底面及び壁に現地性の焼土が検出されている。

埋土は炭化物が多く混入する黒褐色、黒色、暗褐色の砂質土に分けられる。いずれも木根が多く、柔らかく締まりはない。埋土の主体をなすのは黒色土で、下位には焼土粒が含まれる。

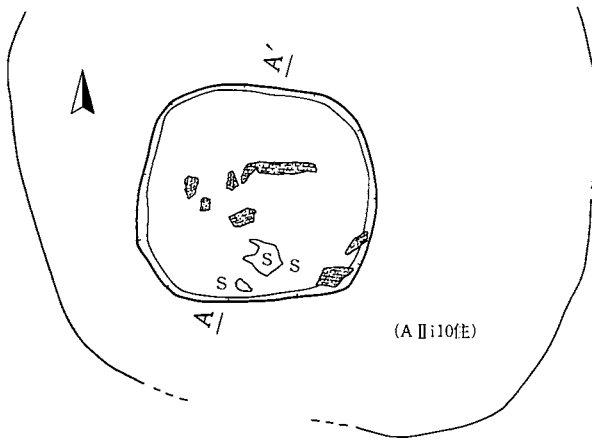
遺物は出土していない。本遺構は埋土の堆積状況等から現代の土坑と考えられる。

### B II a 9土坑（第45図、写真図版25・54）

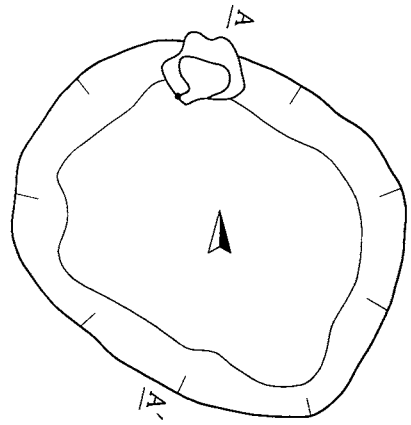
調査区域西側の尾根中央部に位置する。南側はB II a 10住居跡と、北側でB II a 8陥し穴状遺構と重複する。重複する遺構との新旧関係は、B II a 10住居跡とB II a 8陥し穴状遺構が新しく、本遺構はより古い。B II a 10住居跡の北壁西側が切れていることにより遺構の存在が判明し精査した。

南側及び北東側が住居跡と陥し穴状遺構に切られているため全体の形状・規模は不明である。

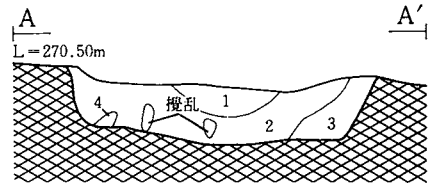
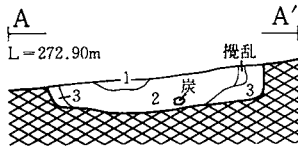
A II j10土坑



A III j5土坑

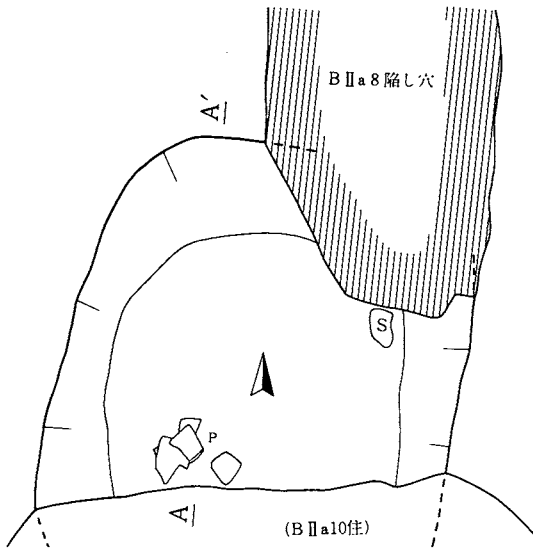


1. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂 質 柔らかい、炭化物多く混入する
2. 7.7YR 2/1 黒色 砂質シルト 柔らかく締まりがない、炭化物多い、下位に焼土粒混入
3. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質シルト 柔らかい、焼土粒わずが混入する

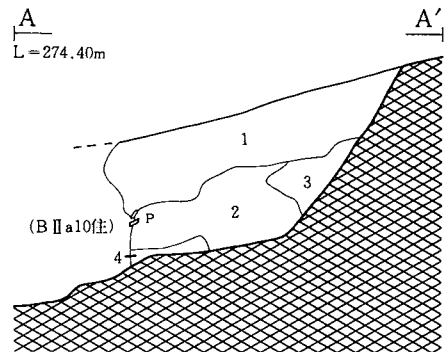


1. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂 質 柔らかく締まりない、木根多い、炭化物混入
2. 7.5YR 2/1 黒色 砂質シルト 柔らかい、炭化物多く混入する、下位に焼土粒含む
3. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂 質 柔らかく締まりない、炭化物混入する
4. 5 YR 3/6 暗赤褐色 焼 土 柔らかく締まりない

B II a9土坑



1. 10YR 3/3 暗褐色 シルト 柔らかい、褐色土がブロックで混入
2. 10YR 3/4 暗褐色 シルト 柔らかい、全体に浮石混入する
3. 10YR 4/6 褐色 シルト やや締まっている
4. 10YR 2/3 黒褐色 シルト やや締まっている、全体に浮石多く混入



S = 1/40

第45図 土坑(1)

現存する状況から平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は不明であるが東西方向は開口部2.1m・底部1.5mで、南北方向は現存値で開口部1.9m・底部1.4mを測る。壁は70度位に外傾して立ち上がり、東西の断面形は浅鉢状を呈する。中央部での深さは70cmである。底面はほぼ平坦で締まっている。

埋土は浮石を混入する暗褐色主体の3層に大別される。壁際の褐色土と下位の黒褐色土はやや堅く締まっている。

#### 遺物（第50図5～15）

土器13は底面から出土の平縁深鉢である。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部近くで僅かに外反する。地文は単節斜縄文（RL）で、内面は丁寧にナデ調整され、外面には煤が付着している。胎土に小礫や雲母が多く混入するものの、焼成は良く堅緻である。口径は25.0cm、器厚は7mm～8mmである。14は埋土中から出土した粗製深鉢で体部下半から底部を欠損している。体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は平坦ではなく若干波打つようにつくられる。体部の地文は単節斜縄文（RL）であるが複合口縁には施文されていない。外面に煤が付着する。焼成は良い。口径は22.9cm、器厚は6mmである。12は埋土中から出土したミニチュア様土器の体部～底部である。体部は直線的に立ち上がる。地文は斜縄文（RL）が施され、内面は丁寧に調整される。外面に黒斑がみられる。焼成は良く緻密である。底径は4.0cmである。10・11は埋土下位から、9は埋土中から出土している。10・11は沈線が施されるもので、10は口縁に平行する長円形～長方形の区画をつくる。11は蛇行する沈線で縄文帯と無文帯を区画する。9は小山形の口縁突起で隆帯が円弧状に貼付られる。

石器は5・6・15が埋土中から出土したものである。5は一部を欠損した石錐であり、断面形は三角形を呈し、両側縁から調整加工を施している。6は両側縁に刃部調整加工を施した搔・削器である。7・8はフレイクで底面から出土している。15は磨・凹石の複数の機能を持つ石器で、4箇所磨面と3箇所5箇所凹痕を有する。

#### B III a 4 土坑（第46図、写真図版25・54）

調査区域西側尾根の南寄りに位置する。A III j 4 住居跡と重複し、その下位にある。重複する遺構との新旧関係は、A III j 4 住居跡が新しく本遺構はより古い。A III j 4 住居跡の炉跡の精査によって検出している。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、規模は開口部が径1.3m、底部が径1.5mである。壁はVI層以下の褐色シルト中にあり、南側は直立気味に立ち上がるが、東西及び北側では70～80度で内傾している。東西方向の断面形は壁が内傾して立ち上がり、台形状を呈する。全体の形態は変形フラスコ状である。底面はほぼ平坦で堅く締まっている。深さは中央部で82cmを測る。



埋土は黒色土、黒褐色土、極暗褐色土で構成され、壁際には壁崩落土と思われる褐色土が堆積する。埋土の最上部は暗褐色土で堅く締まっており、人為的に埋め戻されたものであろう。2層以下は自然堆積によるものと思われる。

#### 遺物（第50図16～18）

土器16は埋土下位から、17・18は埋土中からの出土である。16は撚糸文が施文される厚手の深鉢体部片である。17も撚糸文が施文される深鉢の口縁部片で、口唇部は内側からの調整により丸味をもつ。18は体部片で縦位の平行沈線で縄文帯と無文帯を区画し、無文帯は丁寧にナデ調整されている。

#### B III a 6 土坑（第46図、写真図版26・54）

調査区域西側の南端に位置する。北側5 mにA III j 4住居跡がある。IV層上位で楕円形を呈する暗色部として検出している。

平面形は開口部・底部とも北西―南東方向に長軸をもつ楕円形である。規模は開口部が1.0 m×70cm、底部が1.6m×1.2mである。壁はIV層中にあり、底面から丸味を呈して立ち上がり、上半部では強く内傾して窄み、開口部付近で直立する。断面形は変形フラスコ状である。深さは中央部で45cmを測る。底面はV層上面にあり締まっている。ほぼ平坦であるが傾斜下方の南東側へ下がり、両端での高低差は約20cmである。

埋土は黒色、黒褐色、暗褐色の砂質土で構成され、全体に柔らかい。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

#### 遺物（第50図19・20）

土器19・20は埋土中から出土した粗製深鉢の体部片である。19は斜位の回転施文(RL)、20は横位の回転施文(RL)である。

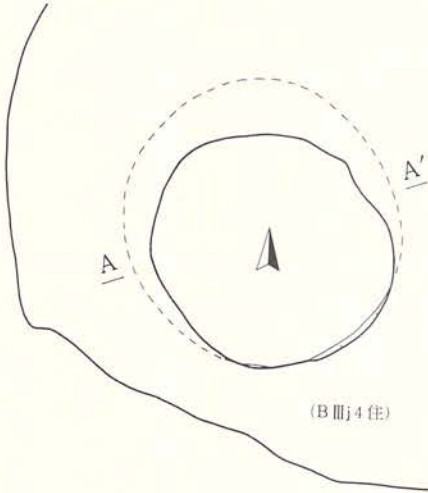
#### B III d 4 土坑（第46図、写真図版26・54）

調査区域西側の南側緩斜面に位置する。北西7 mにB III b 2住居跡、B III b 2陥し穴状遺構がある。VI層上面で円形暗色部として検出している。

平面形は開口部が円形・底部は隅丸方形である。規模は開口部が径1.7m、底部は1.2m×1.0 mを測る。壁はVI層以下のシルト中にあり、70度位に外傾して立ち上がる。全体の形状はバケツ状で、断面形は開口部が広く逆台形状を呈する。深さは中央部で約90cmを測る。底面は平坦で締まっている。

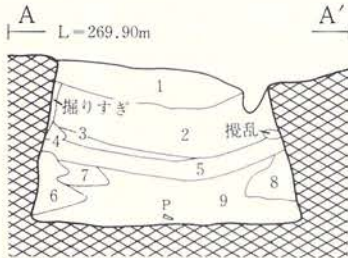
埋土の最上部に中礫浮石と考えられる浮石粒が多く混入する。埋土中位～下位は黒色土、黒褐色土、壁際には地山起源の褐色シルトが堆積する。全体に浮石の混入が多く堅く締まってい

B III a 4 土坑

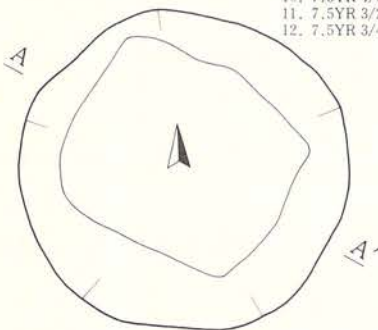


(B III j 4 住)

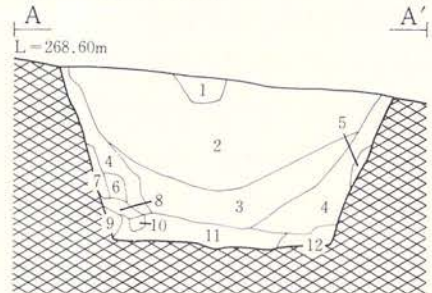
1. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト 強く縮まっている、褐色土がブロック状に混入
2. 7.5YR 2/2 黒褐色 シルト質 縮まっている、粘性あり
3. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト質 縮まっている、褐色土が多く混入する
4. 7.5YR 4/3 褐色 シルト 柔らかく縮まりない
5. 7.5YR 2/1 黒褐色 シルト質 強く縮まっている、炭化物混入する
6. 7.5YR 4/4 褐色 シルト 柔らかい
7. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト質 強く縮まっている、黒色土と褐色土と混合土
8. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト やや柔らかい
9. 7.5YR 2/3 極暗褐色 シルト やや縮まっている、褐色シルトと黒色土の混合土



B III d 4 土坑

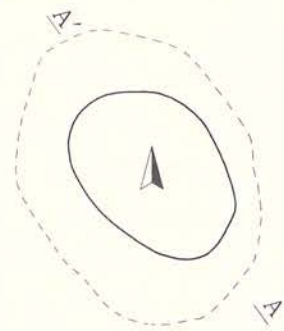


1. 10YR 4/4 褐色 砂質 強く縮まっている、浮石粒多い
2. 7.5YR 1.7/1 黒色 シルト 強く縮まっている、2-5mmの浮石混入
3. 7.5YR 2/1 黒色 シルト 縮まっている、2層より浮石多くやや明色
4. 7.5YR 3/3-3/2 暗褐色-黒褐色 シルト 縮まっている、褐色シルトと黒色土の混合土
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト 縮まっている、粘性あり
6. 7.5YR 3/3 シルト 柔らかく縮まりない、褐色土が多く混入
7. 7.5YR 5/6-4/6 明褐色-褐色 シルト 縮まっている、粘性あり
8. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト 柔らかい、褐色土と黒色土の混合土
9. 7.5YR 5/8 明褐色 シルト 縮まっている、粘性あり
10. 7.5YR 4/6 褐色 シルト 縮まっている、粘性あり
11. 7.5YR 3/2 黒褐色 砂質シルト 強く縮まっている、全体に浮石粒多くザラザラする
12. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト 強く縮まっている

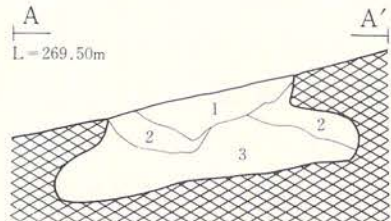


S = 1/40

B III a 6 土坑



1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質 柔らかい、木根多い
2. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質 柔らかい、黒色土と褐色土の混合土
3. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質 柔らかい、褐色土がブロックで混入



第46図 土坑 (2)

る。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

#### 遺物 (第50図21)

土器21は埋土下位から出土した深鉢口縁部片であり、僅かに外反する。地文は単節斜縄文(RL)であり、器厚は8mmと厚手である。

#### C II i 10-1 土坑 (第47図、写真図版26・54)

調査区域東側の緩斜面中央やや西寄りに位置する。北西側にC II i 10-2 土坑が、南側にC II i 10 陥し穴状遺構が隣接する。VI層上面で楕円形暗色部として検出している。

平面形は北西-南東方向に長軸をもち、開口部・底部ともやや不整な楕円形である。規模は開口部が1.2m×95cm、底部が1.1m×83cmである。壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈している。深さは北西側で15cm、南西側で浅く5cm程である。底面は平坦でなく中央付近で段差をもち南西側で数センチ高くなる。

埋土は黒褐色シルト質土の単層であり、堅く締まっている。

#### 遺物 (第50図22)

土器22は埋土中から出土した鉢の体部片で、地文はなく曲線の沈線文が施文されている。

#### C II i 10-2 土坑 (第47図、写真図版26)

調査区域東側中央やや西寄りの緩斜面に位置する。南東側にC II i 10-1 土坑が、北西2mにC II g 9 陥し穴状遺構がある。VI層上面で検出している。

平面形は北西-南東方向に長軸をもち、開口部・底部とも楕円形を呈する。規模は開口部が76cm×58cm、底部が62cm×50cmである。壁は60~70度位に外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。深さは中央部で18cmを測る。底面はほぼ平坦でやや締まっている。

埋土は黒褐色シルト質土の単層であり、堅く締まっている。

遺物は粗製土器片が数点埋土から出土しているが、細破片のため図面の掲載は割あいをした。

#### C III h 4 土坑 (第47図、写真図版27)

調査区域東側南西寄りの緩斜面に位置する。北東側の至近にC III i 4 陥し穴状遺構がある。V層下位で長楕円形状を呈する暗色部として検出している。

平面形は開口部・底部とも北西-南東方向に長辺をもつ隅丸長方形を呈している。規模は開口部が1.94m×66cm、底部が1.88m×54cmである。壁はV層下位~VI層上位にあり、ほぼ直立気味に立ち上がる。南北方向の断面形は浅鉢状を呈する。深さは傾斜上方の北側で約35cm、南側で約25cmを測る。底面は凹凸が少なく平坦で締まっている。

埋土は黒褐色シルト質土で全体に堅く締まっている。V層に比べ浮石の混入は僅かである。南東壁際の埋土中位から径20cm位の垂角礫が2個出土している。

遺物は出土していない。

#### C III h 6 土坑 (第47図、写真図版27)

調査区域東側南西寄りの緩斜面上に位置している。周辺に他の遺構はない。III層下位で炭化物が多く混入する方形の暗色部として検出している。

平面形は開口部・底部とも隅丸方形を呈している。規模は開口部が1.28m×1.02m、底部が1.22m×96cmである。壁高は低く外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈している。深さは中央部で12cmを測る。底面は平坦であるが締まりはなく、焼土粒や炭化物が散在する。また、北西壁が火熱を受けて赤色変化している。

埋土は炭化物が多く混入する黒色砂質土で、柔らかく締まりはない。埋土中から出土した炭化物の樹種はナラと鑑定されている。

遺物は出土していない。

#### C III j 1 土坑 (第47図、写真図版27)

調査区域東側中央西寄りの緩斜面上に位置する。東側にD III a 1 焼土が、北西3mにC II i 10陥し穴状遺構がある。他の遺構とは重複していないが、遺構西側はダメ押しの際に重機で削平している。IV層上位で炭化物が多く混入する長形状の暗色部として検出している。

平面形は北西—南東方向に長辺をもつ隅丸長方形を呈していたと推測される。規模は開口部の長辺方向の現存値1.5m、短辺80cm、底部の長辺方向の現存値1.45m、短辺75cmである。壁は外傾し立ち上がるが壁高は低く、断面形は浅皿状を呈する。中央部での深さは約10cmを測る。底面は平坦であるが北西側に緩く下がり、南東側と北西側では10cmの高低差がある。

埋土は径0.5cm位の炭化物が多く混入する黒褐色砂質土の単層である。焼土が僅かに混入する。

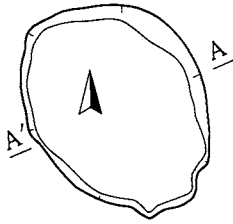
遺物は出土していない。

#### C III j 4 土坑 (第47図、写真図版27)

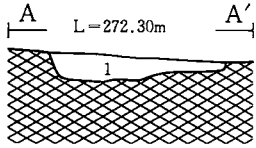
調査区域東側の緩斜面南側に位置する。南東側に隣接しC III j 5 配石遺構がある。VI層上面で検出している。南側1mには本遺構と同規模の土坑がある。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、規模は開口部が径60cm、底部が径40cmである。断面形は浅皿状で、深さは中央部で16cmを測る。底面はやや凹凸を呈し、特に締まりはない。

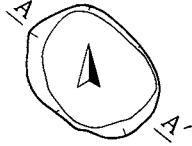
C II i10-1 土坑



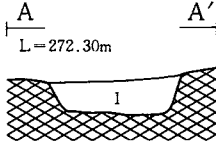
1. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト質



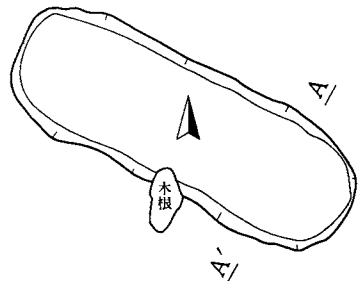
C II i10-2 土坑



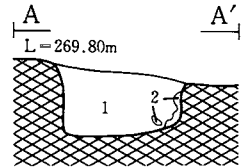
1. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト質



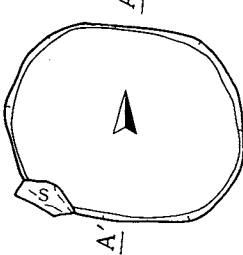
C III h 4 土坑



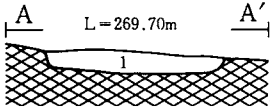
1. 7.5YR 2/1 黒色 シルト質  
2. 7.5YR 5/6-5/8 褐色 シルト



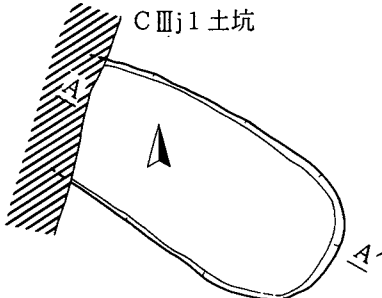
C III h 6 土坑



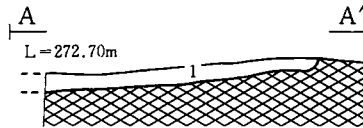
1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質



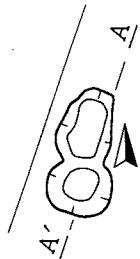
C III j 1 土坑



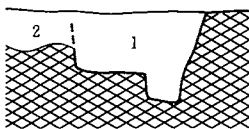
1. 7.5YR 3/1~3/2 黒褐色 砂質



C III j 5-1 土坑

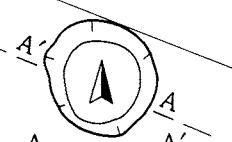


L=270.40m

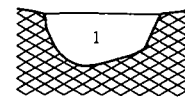


1. 7.5YR 2/1 黒色 シルト質  
2. 7.5YR 2/1 黒色 シルト質

C III j 5-2 土坑

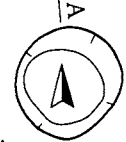


L=270.40m

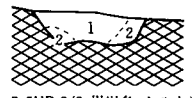


1. 7.5YR 2/1 黒色 シルト質

C III j 4 土坑

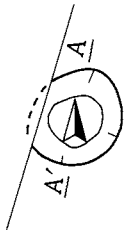


L=270.60m

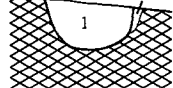


1. 7.5YR 2/2 黒褐色 シルト質  
2. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト質

D III a 4 土坑



L=270.60m  
堀りすぎ

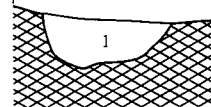


1. 7.5YR 3/1 黒褐色 シルト質

D III a 5 土坑



L=270.40m



1. 7.5YR 3/2~2/2 黒褐色 シルト質

S=1/40

第47図 土坑(3)

埋土は黒褐色、暗褐色のシルト質土で締まっている。埋土の堆積は自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

#### C III j 5-1 土坑 (第47図、写真図版28)

調査区域東側の緩斜面南側に位置する。C III j 5 配石遺構内の南側で、配石面より下位のV層中で検出している。

平面形は円形と楕円形が重複するような形状を呈する。開口部の規模は68cm×34cm、断面形は円形部が柱穴状で深さ48cm、楕円部が浅鉢状で深さ約30cmである。

埋土は浮石が多く混入する黒色シルトの単層で構成され、締まっている。

遺物は出土していない。

#### C III j 5-2 土坑 (第47図、写真図版28)

調査区域東側の緩斜面南側に位置する。北側1mにはC III j 4土坑がある。C III j 5 配石遺構内の南側で、配石面より下位のV層中で検出している。

平面形は開口部・底部とも円形である。規模は開口部が径約60cm、底部が径約40cmである。

断面形は浅鉢状で、深さは中央部で28cmを測る。底面は凹凸している。

埋土は浮石が多く混入する黒色シルト質土の単層で締まっている。

遺物は出土していない。

#### D III a 4 土坑 (第47図、写真図版28)

調査区域東側の緩斜面南側に位置する。南東側1mに同規模のD III a 5土坑がある。C III j 5 配石遺構北東の礫の下位にあり、VI層上面で検出している。

平面形は開口部・底部とも円形を呈し、規模は開口部が径約55cm、底部が径約30cmである。

断面形は浅鉢状である。底面は中央部が僅かに窪む湾曲状をなし、深さは中央部で25cmを測る。

埋土は浮石粒が多く混入する黒褐色のシルト質土である。

遺物は粗製土器の破片が数点出土しているが、細破片のため図面の掲載は割あいをした。

#### D II a 8 土坑 (第48図、写真図版29・55)

調査区域東側中央やや北寄りの緩斜面に位置する。南西側4mにD II a 9焼土がある。IV層下位で方形の暗色部として検出している。

平面形は開口部・底部ともやや歪んだ隅丸方形を呈する。規模は開口部が1.6m×1.5m、底部が1.4m×1.28mである。壁は60～70度位に外傾し、断面形は浅皿状を呈している。中央部での

深さは32cmである。底面はほぼ平坦で締まっている。

埋土の主体は暗褐色のシルト質土で、堅く締まっている。埋土下位には土器を含む異地性の焼土塊及び褐色シルトがある。この埋土の堆積状況は下位が人為的に、上～中位は自然堆積によるものと思われる。

#### 遺物（第51図23～26）

土器25は埋土下位の焼土塊と共に出土した壺である。口頸部には4つの有孔把手をもち、底部はやや大きく安定し、胴部は球形状を呈している。把手は口縁部から頸部にかけて架橋状に貼付られ、側面には沈線が施されている。胴部は沈線でふちどられた幾何学的文様が施文される。文様は「T」「L」状の意匠で、胴上部～頸部と胴部中央に描かれ、文様の展開は横位のくりかえしとなる。胴部下半では沈線で区画される部分が周辺部より低くなり、その周辺は隆帯状を呈する。また文様帯の最下端は隆帯が横位に巡り、さらに胴部中央にかけて隆帯が縦位に貼付られるが、上部ほど薄手となり胴部と一体化する。器表は丁寧に調整が施され滑らかであり、色調は暗赤褐色を呈す。23・24は埋土下位から出土した鉢と思われる口縁部片である。23は口縁部が外反して上部が肥厚し、口唇部は平坦につくられる。地文はなく屈曲する沈線及び曲線の沈線が施文される。24は深めの沈線が施文されている。

石器26は底面から出土した石器原材と思われる角閃石英安山岩である。長さは46.5cm、幅12.4cm、重さ8.1kgを測る。

#### D III a 5 土坑（第47図、写真図版28・55）

調査区域東側の緩斜面南側に位置する。北西側1mにD III a 4 土坑がある。C III j 5 配石遺構内東側の配石面より下位のVI層上面で検出している。

平面形は開口部が不整楕円形を、底部は円形を呈している。規模は開口部が70cm×60cm、底部が径約40cmである。断面形は浅鉢状で中央部の深さは24cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、南側で僅かに高くなる。

埋土は浮石粒が混入する黒褐色のシルト質土で、炭化物を僅かに含んでいる。

#### 遺物（第51図27）

土器27は埋土から出土した深鉢体部片である。単節斜縄文（RL）が施文される。

#### D II d 4 土坑（第48図、写真図版29）

調査区域東側の尾根北側に位置する。西側が畑の造成のため削平されており、断面によって検出している。この付近では表土が浅く、遺構平面の検出は地山面である。

平面形は現存状況から開口部が約1.2m×90cmの楕円形と推測される。底部は68cm×60cmの楕

円形を呈している。壁は約75～80度で外傾して立ち上がり、南北方向の断面形はバケツ状を呈している。深さは中央部で90cmを測る。底面は小さな凹凸があるがほぼ平坦で堅い。

埋土は上位～中央部に暗褐色～黒褐色シルト、壁際及び埋土下位には暗褐色～褐色シルトが堆積し堅く締まっている。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物は出土していない。

#### D III b 5 — 1 土坑（第48図、写真図版29・55）

調査区域東側の南側緩斜面に位置する。遺構の北西～西側でD III b 5 — 2・3 土坑及びD III b 5 陥し穴状遺構と重複している。重複する遺構との新旧関係は新しい順に、D III b 5 陥し穴状遺構→本遺構→D III b 5 — 2 土坑→D III b 5 — 3 土坑である。

平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈し、規模は開口部が1.08m×90cm、底部が1.8m×1.8mである。壁はVI層以下の褐色シルト中にあり、底部から50～60度位で内傾して立ち上がり、開口部付近ではほぼ直立気味となる。断面形はフラスコ状を呈している。底面は平坦で堅く締まっている。深さは中央部で1.36mを測る。底面のほぼ中央に径28cm・深さ19cmの円形の副穴がある。

埋土は黒褐色～暗褐色の砂質シルト・シルトで、最下位の5層は柔らかく締まりがないが他は堅く締まっている。この埋土の堆積状況は最下部4・5層は人為作用によって埋め戻されたものと思われる。その上部は自然堆積によるものであろう。

#### 遺物（第51図28～31）

土器28は西壁寄り底面から出土した狩猟文土器で、下半部は欠損している。現存器高20.4cm、胴部最大径約30cmで、器表は赤色顔料（ベンガラ）を塗付している。隆帯で弓と矢、獣、楕円文、釣りばり、針葉樹などを描いている。詳細はVII章でふれることにしたい。29は小形長頸壺の口縁部破片で、外反する口縁部上部に一条の浅い沈線が巡る。焼成は堅緻で丁寧にミガキを施し、内外面に赤色顔料（ベンガラ）を塗ってある。

石器30は石錐で、つまみ部は片面のみが調整加工され、錐部は著しく短い。31は側縁に刃部の調整加工を施した搔・削器である。

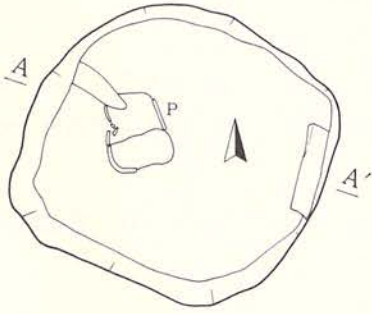
#### D III b 5 — 2 土坑（第48図、写真図版30）

調査区域東側の南側緩斜面に位置する。南側でD III b 5 — 1・3 土坑と重複している。重複する遺構との新旧関係は、新しい順にD III b 5 — 1 土坑→本遺構→D III b 5 — 3 土坑である。VI層上面において円形の暗色部として検出している。

平面形は開口部が円形を、底部は楕円形を呈している。規模は開口部が70cm×64cm、底部が

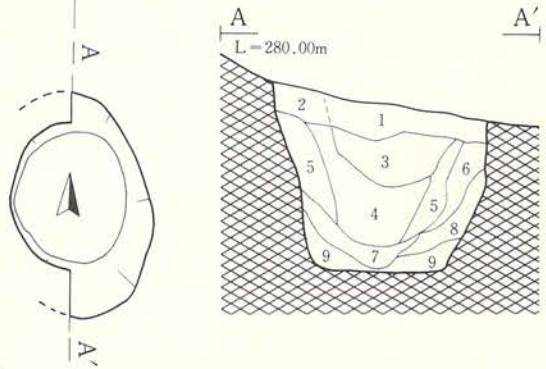


D II a 8 土坑

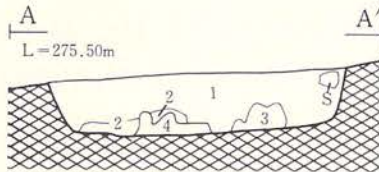


1. 10YR 3/3 暗褐色 シルト質 全体に強く締まる、微量の焼土混入
2. 10YR 3/2 黒褐色 砂質シルト やや締まりある、径1mm位の浮石含む
3. 10YR 4/6 褐色 シルト 強く締まる、黒色土わずか混入
4. 5 YR 4/6 赤褐色 焼土 締まりなくさらさらしている

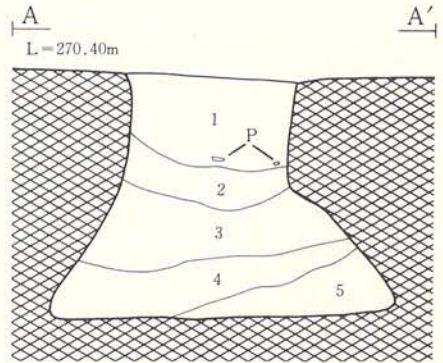
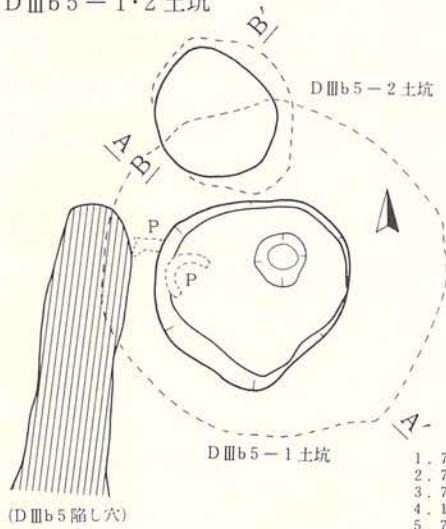
D II d 4 土坑



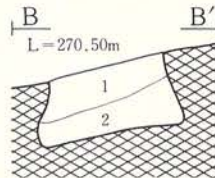
1. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質 やや締まっている、黒色土と褐色土の混合土
2. 7.5YR 4/3 褐色 砂質 締まっている、やや粘性あり、褐色土がブロック状に混入
3. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト 強く締まっている。
4. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト 強く締まっている、浮石・砂粒が混入
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト 強く締まっている、径10mm位の浮石混入
6. 7.5YR 4/3 褐色 砂質シルト 締まっている、微細な白黄色浮石混入
7. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト 強く締まっている、5層に限る
8. 10 YR 4/6 褐色 砂質シルト 強く締まっている、径3cm位の礫混入
9. 10 YR 3/4 暗褐色 シルト 強く締まっている



D III b 5 - 1・2 土坑



1. 7.5YR 2/2 黒褐色 砂質シルト やや締まっている、炭化物が全体に混入する
2. 7.5YR 3/3 暗褐色 シルト やや締まっている、褐色シルトが小ブロック状に混入
3. 7.5YR 3/1 黒褐色 シルト 柔らかい、浮石・黄褐色シルトがわずか混入する
4. 10 YR 2/2 黒褐色 シルト 締まっている、灰黄色シルトが全体に混入する
5. 7.5YR 3/4 暗褐色 シルト 柔らかく締まりない、褐色シルトがブロック状に混入



1. 10YR 3/3 暗褐色 シルト質 やや締まる、径0.5~1cm大の浮石を含む
2. 10YR 3/2 黒褐色 シルト質 やや締まっている、浮石混入する

S = 1/40

第48図 土坑(4)

90cm×74cmである。壁は下半部では内湾気味に、開口部付近では直立気味に立ち上がり、断面形は変形プラスチック状を呈している。深さは中央部で35cmを測る。底部は堅く締まり平坦であるが傾斜下方の南側へ下がり、両端での高低差は10cmある。

埋土は暗褐色、黒褐色シルト質土で浮石がやや多く混入し締まっている。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物は出土していない。

#### D III b 5-3 土坑 (第49図、写真図版30)

調査区域東側の南側緩斜面に位置する。D III b 5-1・2 土坑及びD III b 5 陥し穴状遺構と重複し、本遺構はこれらの遺構に切られている。重複する遺構との新旧関係は、新しい順にD III b 5 陥し穴状遺構→D III b 5-1 土坑→D III b 5-2 土坑→本遺構である。VI層上面で検出している。

北西側から南側が重複する遺構に切られているため、平面形・規模は不明である。現存する部分から推定すると、平面形は開口部・底部とも隅丸方形または隅丸長方形を呈していたものと思われる。規模は開口部が $1.3\text{m} \times (1.2 + \alpha)\text{m}$ 、底部が $1.0\text{m} \times (60 + \alpha)\text{cm}$ である。現存する壁は下半部ではほぼ垂直気味に、上部では70～80度位に外傾して立ち上がる。底面は平坦で堅く締まっているが、南東側に僅かに傾斜する。北東―南西の断面形は上辺と下辺の差があまりない逆台形状を呈している。深さは中央部で1.0mを測る。

埋土は上位～中位に黒色、黒褐色、暗褐色の砂質シルト～シルト、下位に褐色シルトが堆積し、全体に締まっている。この堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物は出土していない。

#### D III g 2 土坑 (第49図、写真図版30)

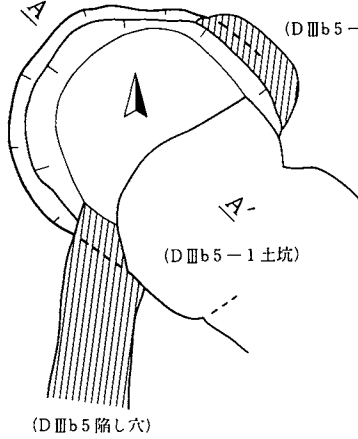
調査区域東側の尾根中央南寄りに位置する。北北西側4mにD II f 10陥し穴状遺構がある。VI層上面で方形の暗色部として検出している。

平面形は開口部・底部とも隅丸方形を呈している。規模は開口部が $1.36\text{m} \times 1.18\text{m}$ 、底部が90cm×80cmである。壁は60度位に外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦で堅く締まっているが、傾斜下方の南側へ下がり、北側と南側で10cmの高低差がある。底面及び壁は火熱により赤色変化している。

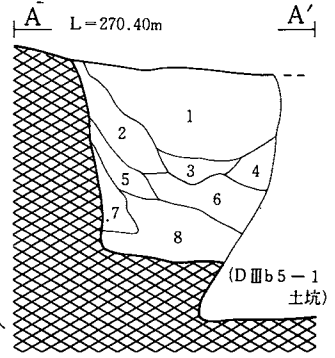
埋土は黒褐色～暗褐色、暗褐色～褐色の砂質シルトで、炭化物が多く混入する。埋土下位～底面には炭化物が多く検出されている。

遺物は出土していない。

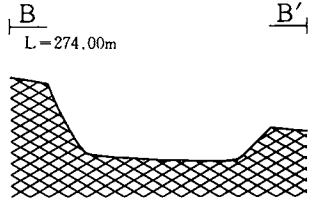
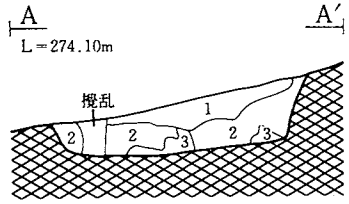
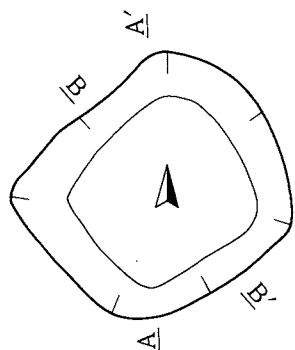
D III b 5 - 3 土坑



- 1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質シルト 強く締まっている、全体に浮石多く混入
- 2. 7.5YR 3/2 黒褐色 砂質シルト 強く締まっている、浮石多く混入
- 3. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト やや柔らかい、褐色土が多く混入
- 4. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質シルト 締まっている、全体に浮石多く混入
- 5. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト 締まっている
- 6. 7.5YR 3/2 黒褐色 シルト 締まっている、全体に浮石多く混入
- 7. 7.5YR 4/4 褐色 シルト 締まっている 粘性あり
- 8. 7.5YR 4/4-4/3 褐色~暗褐色 シルト やや柔らかい、褐色土がブロック状に多く混入

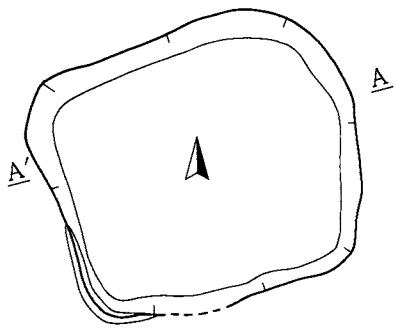


D III g 2 土坑

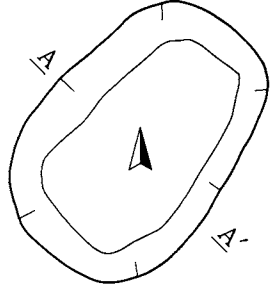
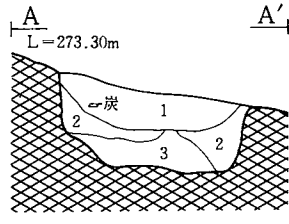


- 1. 7.5YR 3/2~3/3 黒褐色~暗褐色 砂質シルト 締まりなくボロボロする、炭化物多く混入
- 2. 7.5YR 3/4~4/3 暗褐色~褐色 砂質シルト やや締まっている、焼土粒炭化物混入する
- 3. 7.5YR 3/2 黒褐色 炭化物 暗褐色土が混入する

D III h 7 土坑

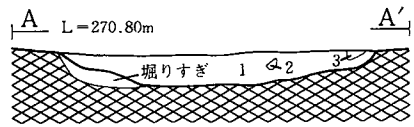


D III i 1 土坑



- 1. 7.5YR 3/2 黒褐色 砂質シルト 柔らかく締まりない 炭化物多く混入する
- 2. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質 柔らかく締まりない
- 3. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト 柔らかい、やや粘性あり、褐色土混入する

- 1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質シルト 柔らかく締まりない、炭化物多く混入
- 2. 5 YR 3/3 暗赤褐色 焼土 柔らかい、粘性ある
- 3. 10 YR 3/3 暗褐色 砂質シルト 柔らかく締まりない、炭化物・灰が多く混入



$S = \frac{1}{40}$

第49図 土坑(5)

### D III h 7 土坑 (第49図、写真図版30)

調査区域東側の南東端に位置する。北東側 3 m に D III h 6 陥し穴状遺構がある。IV層下位で方形の暗色部として検出しているが、粗掘りの際すでに窪みを呈していた。

平面形は開口部・底部ともほぼ方形を呈している。規模は開口部が1.62m×1.44m、底部が1.46m×1.26mである。壁高は低く、断面形は浅皿状を呈する。中央部での深さは16cmを測る。底面は緩く湾曲し中央部が僅かに窪む。全体に木根による攪乱を受けている。底面には焼土が散在し、南西隅の壁が火熱により赤色変化している。

埋土は炭化物が多く混入する黒色砂質シルトで柔らかく締まりはない。下位に灰状のシルト及び焼土が多く混入する。

遺物は出土していない。

### D III i 1 土坑 (第49図、写真図版31)

調査区域東側尾根の東斜面に位置する。西側 8 m に D III g 2 土坑がある。IV層の再堆積層の上面で長方形の暗色部として検出している。

平面形は開口部・底部とも隅丸長方形を呈している。規模は開口部が1.54m×1.04m、底部が1.2m×65cmである。壁は傾斜下方の南東側は70度位に、傾斜上方の北西側では下部は45度位に、上半部は80度位に外傾して立ち上がる。短軸方向の断面形は非対称の浅鉢状を呈する。中央での深さは約40cmを測る。底面は締まりなく、凹凸があつて全体が僅かに傾斜し、下方の南東側に下がる。壁の北西隅に火熱による赤色変化がある。

埋土は炭化物の混入するI層起源と考えられる。黒褐色砂質土で構成され、柔らかく締まりはない。

遺物は出土していない。

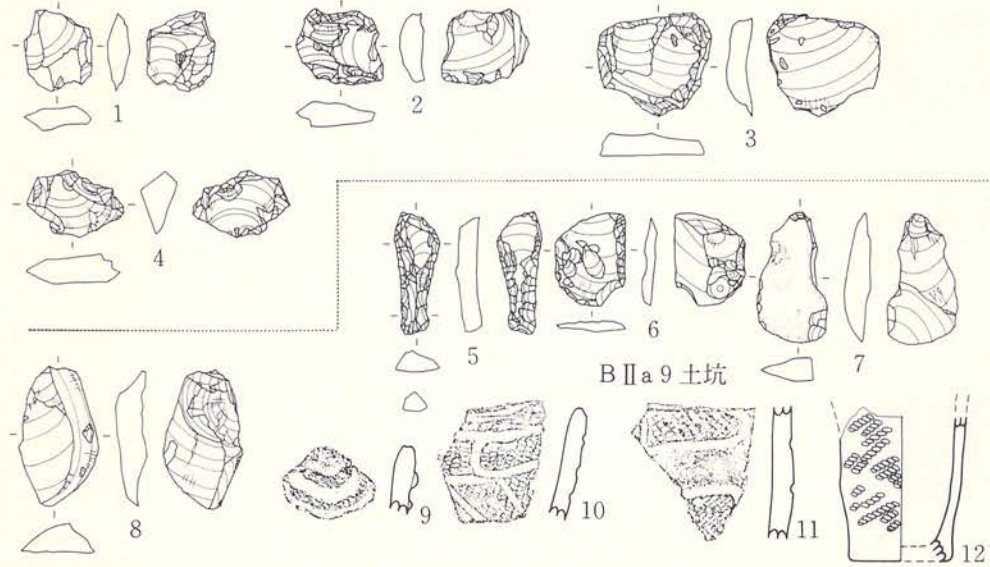
## 5. 陥し穴状遺構

### B II a 8 陥し穴状遺構 (第52図、写真図版32)

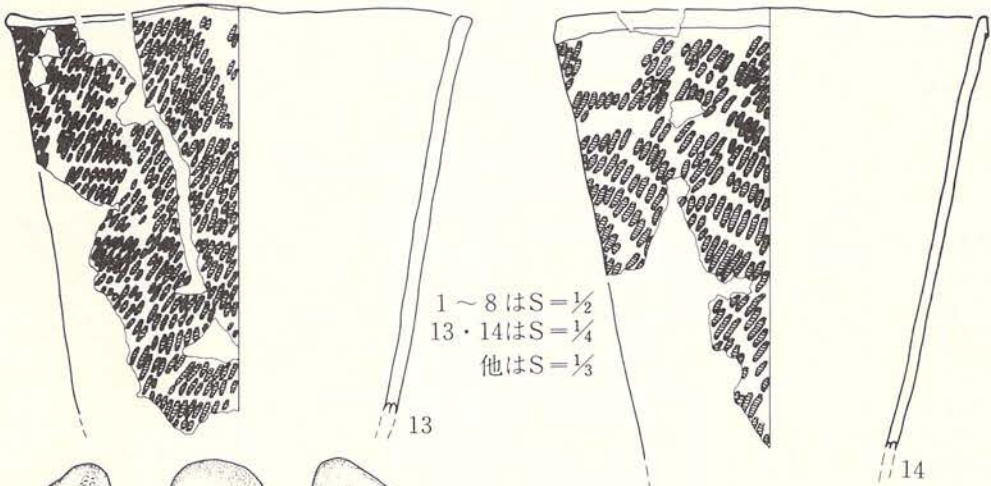
西側尾根の中央やや北寄りに位置する。北東3.0mにB II b 7 陥し穴状遺構がある。本遺構の南側はB II a 9 土坑と重複している。重複する遺構の新旧関係はB II a 9 土坑が旧く、本遺構が新しい。B II a 9 土坑の精査中に、本遺構の南側を検出し陥し穴状遺構と判明した。

南側は土坑精査のため掘り過ぎてているが、平面形は南北方向に長軸をもち開口部は長楕円形状を、底部は溝状を呈する。規模は開口部が長軸の長さ推定2.9m、幅1.25m、底部は2.1m×30cmである。断面形の短軸方向は開口部が広がるU字状を、長軸方向は両端の開口部が広がる不整形形状を呈していたと思われる。底部は凹凸があり、南側へ傾斜し下がる。両端での高低差

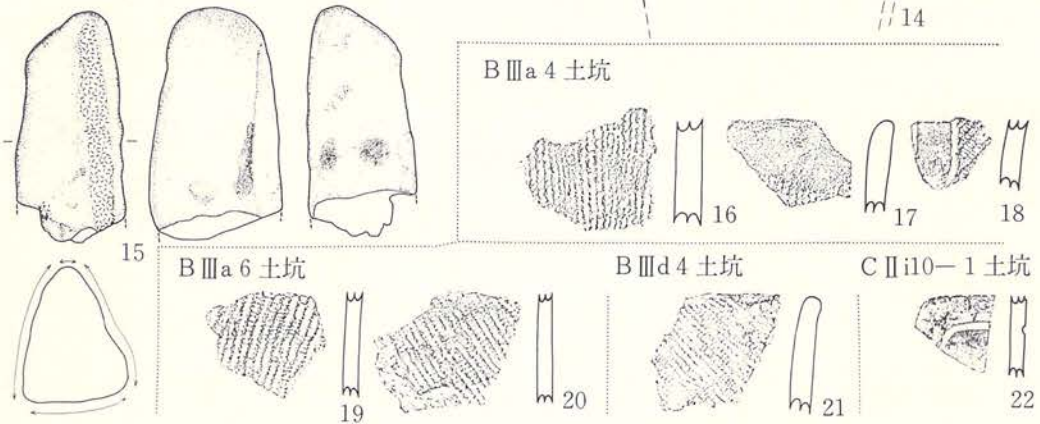
A II j10 土坑



B II a 9 土坑



B III a 4 土坑



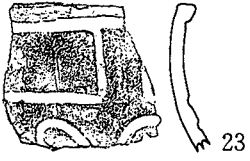
B III a 6 土坑

B III d 4 土坑

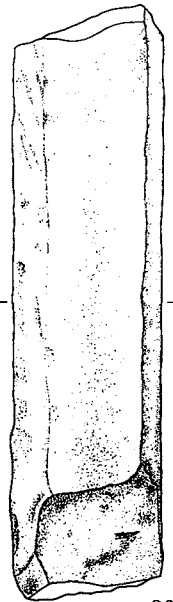
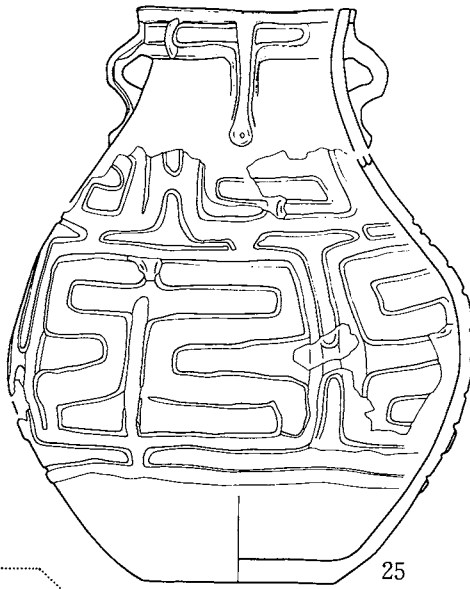
C II i10-1 土坑

第50図 土坑出土遺物(1)

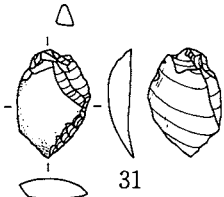
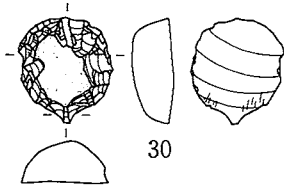
D II a 8 土坑



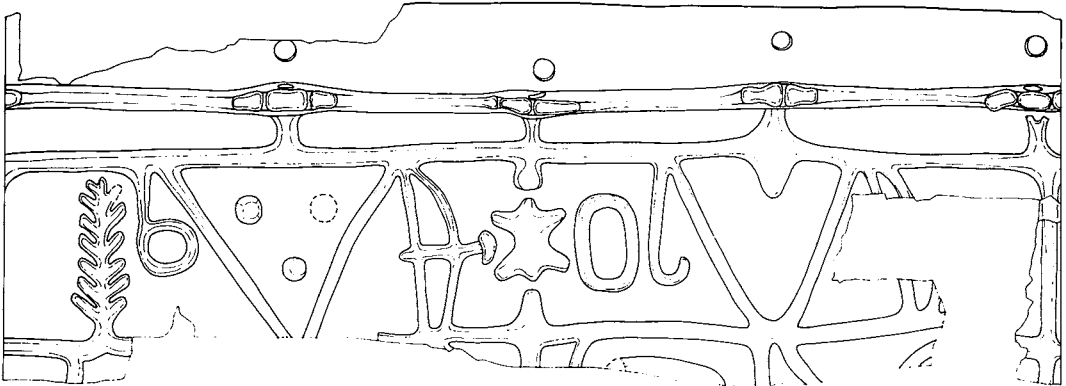
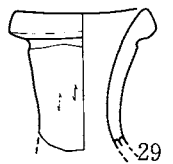
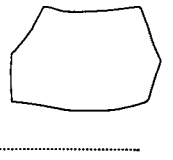
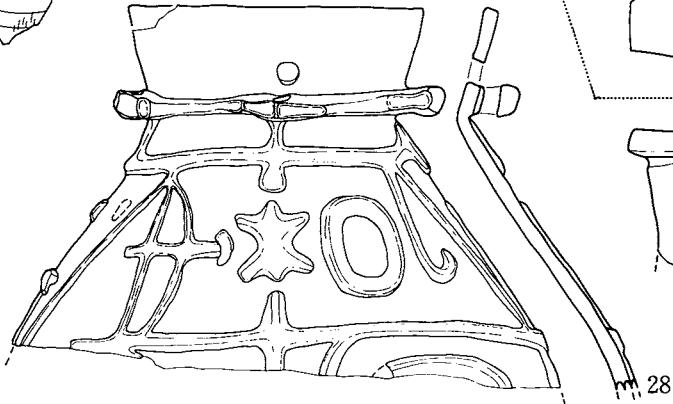
D III a 5 土坑



D III b 5 - 1 土坑



29~31はS=1/2  
28はS=1/4  
26はS=1/6



第51図 土坑出土遺物(2)

は25cmである。中央部での深さは1.3mを測る。

埋土の上部はⅣ層起源の砂質土とⅥ層起源のシルト質土、中位～下位には黒褐色シルトが堆積している。

遺物は出土していない。

#### B II b 7 陥し穴状遺構（第52図、写真図版32）

西側尾根の中央北寄りに位置する。南西3.0mにB II a 8 陥し穴状遺構がある。他遺構とは重複していない。Ⅵ層上面で検出している。

平面形は北西—南東に長軸方向をもち、開口部は長楕円形状を、底部は両端の隅が角張る不整形長方形を呈している。規模は開口部が2.4m×1.0m、底部は2.0m×40cmである。断面形は短軸方向が開口部の広がるU字状を、長軸方向が上端が僅かに広がる不整形四辺形状を呈している。底部は中央でやや湾曲を呈し、傾斜下方の南東側へ下がる。両端の高低差は35cmである。深さは中央部で1.0mを測る。

埋土は木根等による攪乱があるが、堆積状況は自然堆積によるものであろう。埋土の上位～中位に黒色～暗褐色の砂質土、シルト質土、下位には黄褐色～褐色シルトが堆積する。

遺物は出土していない。

#### B III b 2 陥し穴状遺構（第52図、写真図版32・56）

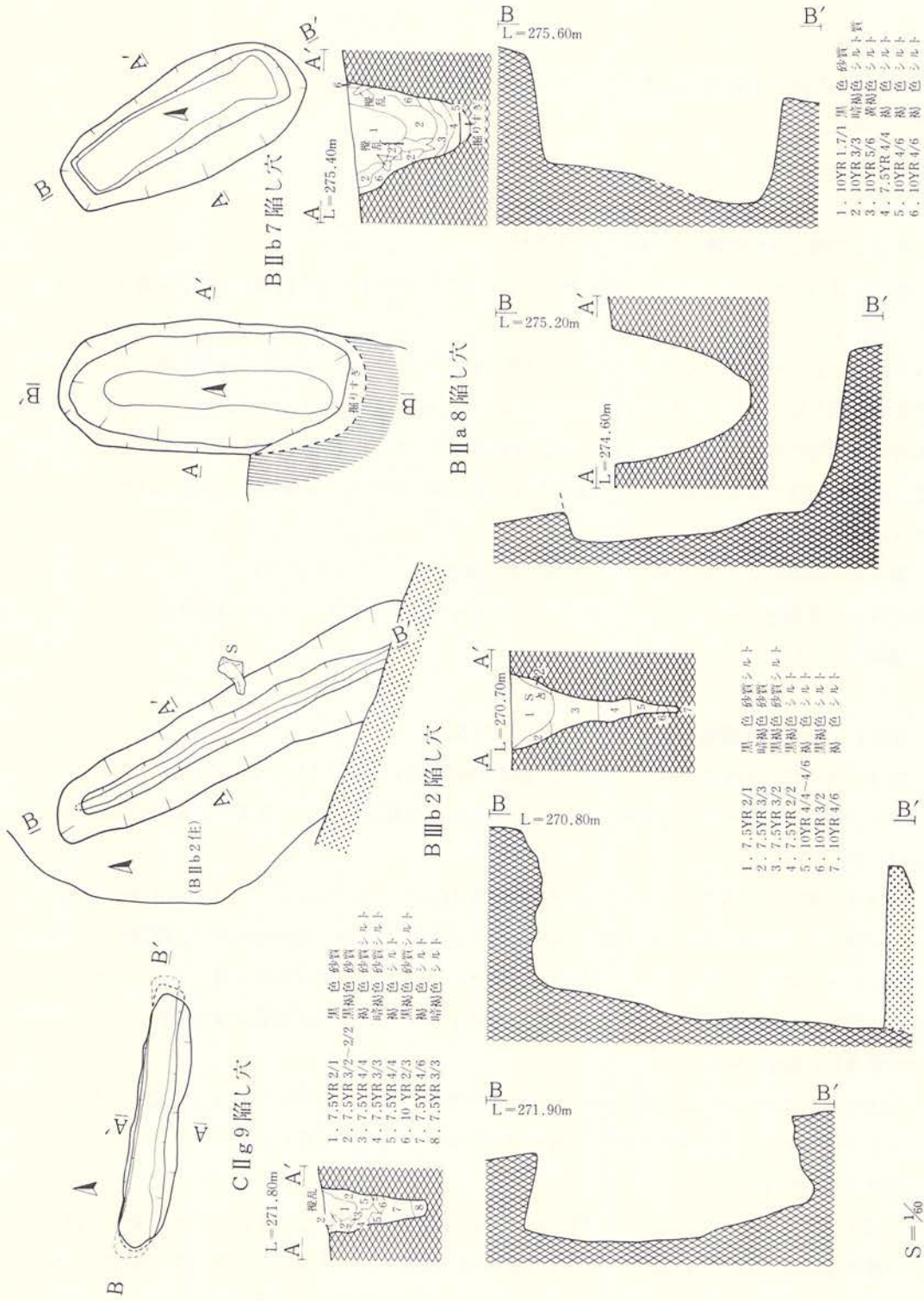
調査区域西側の中央南寄りに位置する。遺構の南側は林道の下にあり全体を完掘していない。B III b 2 住居跡と重複し、住居跡を切っているので本遺構が新しく、B III b 2 住居跡が古い。Ⅲ層下位で検出している。

平面形は開口部、底部とも北西—南東方向に長軸をもつ溝状である。規模は開口部の長軸の長さが現存値で3.5m、幅70cm、底部が長軸方向の現存値で3.2m、幅10cmを測る。断面形は短軸方向がロート状を、長軸方向は壁がほぼ直立気味に立ち上がる長方形を呈すると思われる。底部は若干凹凸を呈して傾斜下方の南東側へ緩く下がり、両端での高低差は30cm程ある。中央部の深さは1.6mを測る。

埋土は、上位に黒色、暗褐色、黒褐色の砂質シルト～砂質土が、中～下位に黒褐色、褐色のシルトが堆積する。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

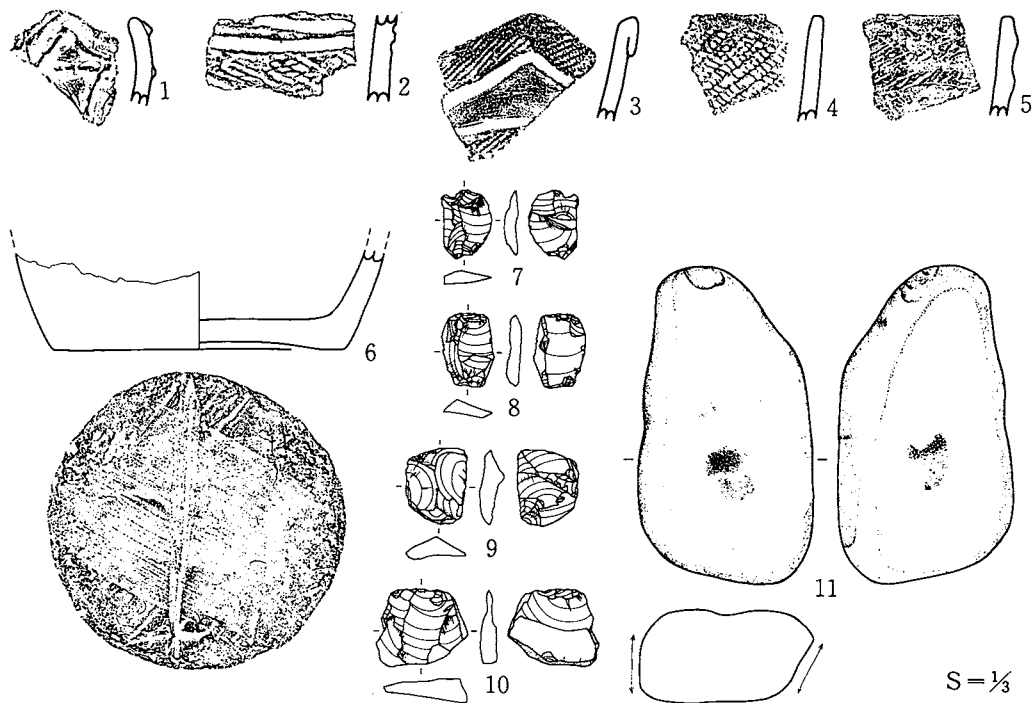
遺物（第53図1～11）

土器1と6は埋土下位から、他は埋土中～上位から出土している。1は内湾する波状口縁をもつ鉢の頂部片であり、断面が三角形の幅の狭い隆帯が貼付される。地文はなく器表は丁寧にナデ調整されている。2・3は横位の沈線をもつ深鉢の体部片・口縁部片である。2は2条



第52図 陥し穴状遺構 (I)





第53図 B III b 2 陥し穴状遺構出土遺物

の平行する沈線をもち、3は波状の複合口縁頂部で横位の沈線により口縁部無文帯を区画する。4・5は粗製深鉢の口縁部片で、口唇部が平坦につくられる。6は深鉢の底部で底面に笹葉状の圧痕及び植物の茎状の圧痕をもつ。焼成は良く、胎土に小礫や粗砂が多く混入する。石器は埋土中～上位から、7～10のフレークと磨・凹石が出土している。11は表裏面に凹痕を2個有し、側縁部が特に磨滅している。

#### C II g 9 陥し穴状遺構 (第52図、写真図版33)

東側中央西寄りの緩斜面に位置する。南東4.0mにC II i 10陥し穴状遺構がある。他遺構とは重複していない。VI層上面で検出している。

平面形は東西方向に長軸をもち開口部、底部とも溝状である。規模は開口部が2.35m×45cm、底部は2.6m×20cmである。断面形は短軸方向が幅の狭いV字状を、長軸方向では両側の壁下部が広がり底部中央が窪むように湾曲した不整形形状を呈している。底部は湾曲しながら西側へ下がり、両端の高低差は30cmである。深さは両端で75cm～80cmであるが、中央部では95cmを測る。

埋土は上位から中位に黒色・黒褐色・暗褐色の砂質シルトが、中位～下位には褐色シルトが、

最下部には暗褐色シルトが堆積する。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。  
遺物は出土していない。

### C II i 10 陥し穴状遺構 (第55図、写真図版33)

調査区域東側中央西寄りの緩斜面に位置する。北西に隣接しC II i 10-1 土坑が、北西4.0mにはC II g 9 陥し穴状遺構がある。他遺構とは重複していない。VI層上面で検出している。

平面形は北西-南東方向に長軸をもち開口部、底部とも僅かに湾曲気味を呈する溝状である。規模は開口部が2.5m×45cm、底部両端は開口部より奥に入って長くなり、規模は2.85m×20cmを測る。斜面上方の北壁上部がオーバーハング気味に南側に張り出す。短軸方向の断面形は上下幅がほぼ同一な短冊状を、長軸方向は両側の壁下部が広がる不整台形状を呈している。底部は凹凸しながら西側へ低くなり、両端での高低差は約35cmである。中央部での深さは1.0mを測る。

埋土は黒褐色、暗褐色のシルトが主体をなし、壁際及び中位に壁の崩落土と思われる褐色シルトが堆積する。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物は出土していない。

### C III i 4 陥し穴状遺構 (第55図、写真図版33・56)

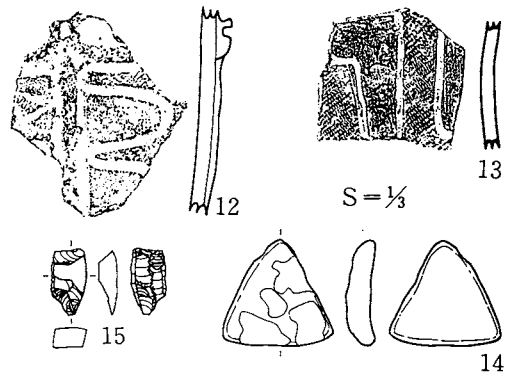
調査区域東側の緩斜面南寄りに位置する。北東1.0mにC III i 4 住居跡が、東5.0mにC III j 4 陥し穴状遺構がある。他遺構とは重複していない。V層上位で検出している。

平面形は北北東-南南西方向に長軸をもち開口部、底部とも溝状である。規模は開口部が3.55m×60cm、底部が3.1m×10cmである。断面形は短軸方向がV字状を、長軸方向では両側壁がほぼ直立気味に立ち上がる長形状を呈している。底部は凹凸しながら傾斜下方の南南西側へ下がり、両側での高低差は約20cmである。中央部の深さは1.45cmを測る。

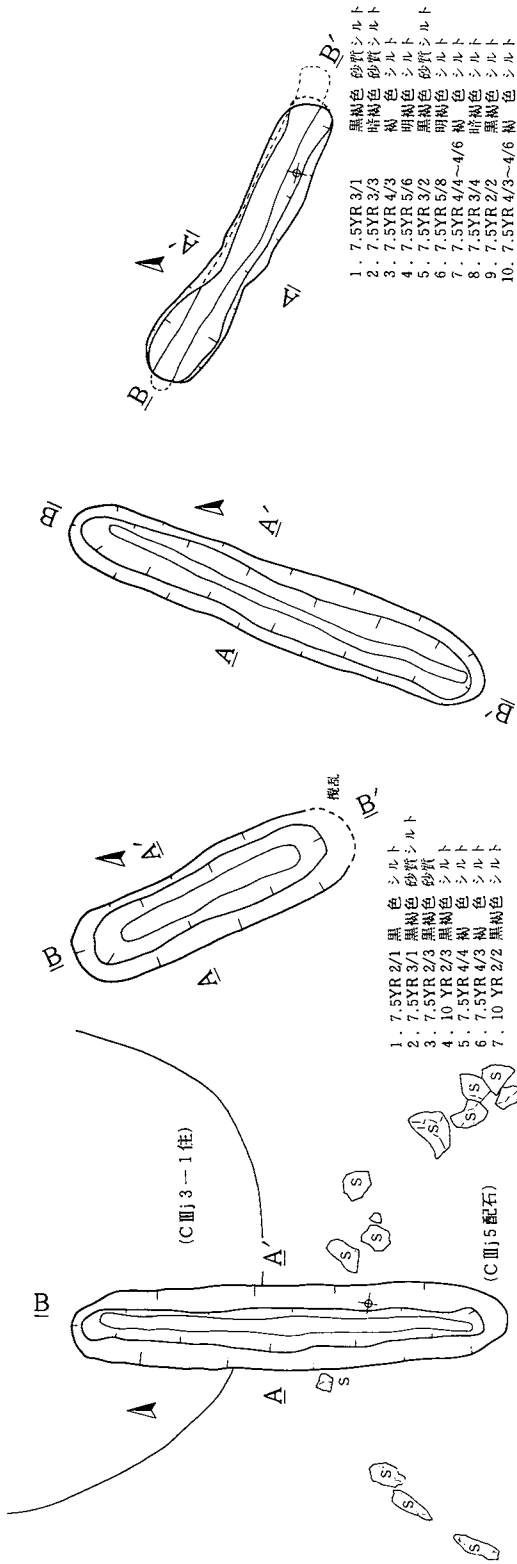
埋土は黒色、黒褐色のシルトが主体を占めている。埋土中位の壁際及び下位に褐色シルトが堆積する。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物 (第54図12~15)

土器 (12・13) 2点は埋土中からの出土である。12は深鉢の体部片で、ボタン状突起とそれから垂下する粘土隆帯をもつ。隆帯の左右には蛇行する幅の広い沈線が地文上に施文



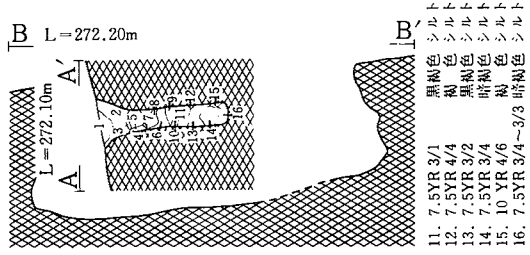
第54図 C III i 4 陥し穴状遺構出土遺物



1. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質シルト
2. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質シルト
3. 7.5YR 4/3 黒褐色 砂質シルト
4. 7.5YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
5. 7.5YR 3/2 黒褐色 砂質シルト
6. 7.5YR 5/8 暗褐色 砂質シルト
7. 7.5YR 4/4~4/6 暗褐色 砂質シルト
8. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト
9. 7.5YR 2/2 暗褐色 砂質シルト
10. 7.5YR 4/3~4/6 暗褐色 砂質シルト

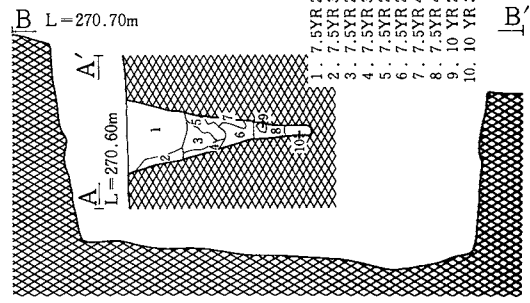
1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質シルト
2. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質シルト
3. 7.5YR 2/3 暗褐色 砂質シルト
4. 10 YR 2/3 暗褐色 砂質シルト
5. 7.5YR 4/4 暗褐色 砂質シルト
6. 7.5YR 4/3 暗褐色 砂質シルト
7. 10 YR 2/2 暗褐色 砂質シルト

C IIi10 陥し穴



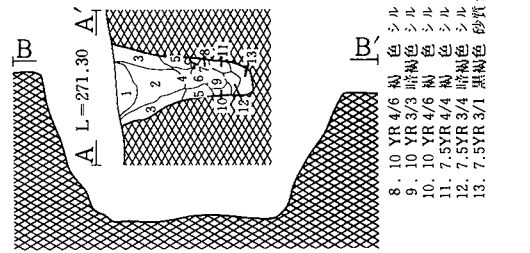
11. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質シルト
12. 7.5YR 4/4 暗褐色 砂質シルト
13. 7.5YR 3/2 暗褐色 砂質シルト
14. 10 YR 4/6 暗褐色 砂質シルト
15. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト
16. 7.5YR 3/4~3/3 暗褐色 砂質シルト

C IIIi4 陥し穴



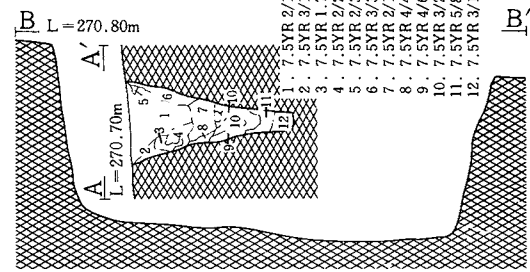
1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質シルト
2. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質シルト
3. 7.5YR 3/2 暗褐色 砂質シルト
4. 7.5YR 2/3 暗褐色 砂質シルト
5. 7.5YR 2/2 暗褐色 砂質シルト
6. 7.5YR 4/6 暗褐色 砂質シルト
7. 7.5YR 4/6 暗褐色 砂質シルト
8. 10 YR 2/3 暗褐色 砂質シルト
9. 10 YR 3/3 暗褐色 砂質シルト
10. 10 YR 3/3 暗褐色 砂質シルト

C IIIj3 陥し穴



8. 10 YR 4/6 暗褐色 砂質シルト
9. 10 YR 3/3 暗褐色 砂質シルト
10. 10 YR 4/6 暗褐色 砂質シルト
11. 7.5YR 4/4 暗褐色 砂質シルト
12. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質シルト
13. 7.5YR 3/1 暗褐色 砂質シルト

C III:4 陥し穴



1. 7.5YR 2/1 黒色 砂質シルト
2. 7.5YR 3/1 黒褐色 砂質シルト
3. 7.5YR 1/1 黒褐色 砂質シルト
4. 7.5YR 2/2 暗褐色 砂質シルト
5. 7.5YR 2/3 暗褐色 砂質シルト
6. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質シルト
7. 7.5YR 2/1 暗褐色 砂質シルト
8. 7.5YR 4/4 暗褐色 砂質シルト
9. 7.5YR 4/6 暗褐色 砂質シルト
10. 7.5YR 3/2 暗褐色 砂質シルト
11. 7.5YR 5/8 暗褐色 砂質シルト
12. 7.5YR 3/1 暗褐色 砂質シルト

S = 1/60

第55図 陥し穴状遺構(2)

される。13はやや薄手の鉢体部片で、一部屈曲する縦位の沈線文が施されている。14は正三角形を呈する盤状土製品で、僅かに湾曲をしている。胎土には粗砂を多く含み、表面の一部は剥落する。15は埋土中位から出土のフレークである。

### C III j 3 陥し穴状遺構（第55図、写真図版33）

調査区域東側の緩斜面やや南寄りに位置する。南西2.0mにはC III i 3 住居跡がある。他遺構とは重複していない。VI層上面で検出している。

平面形は北西—南東方向に長軸をもち、開口部が長楕円形状を、底部が溝状である。開口部の南側が攪乱を受けているが、規模は開口部の長軸の長さが推定値で2.4m、幅70cm、底部は1.8m×15cmである。断面形は短軸方向が開口部の広がるU字状を、長軸方向は両側壁が大きく外傾する逆台形状である。底部は若干の凹凸があるが、両端での高低差はない。深さは中央部で1.1mを測る。

埋土は黒色、黒褐色、暗褐色のシルト、砂質土が主体を占めている。埋土中～下位の壁際に褐色シルトが堆積する。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物は出土していない。

### C III j 4 陥し穴状遺構（第55図、写真図版34・56）

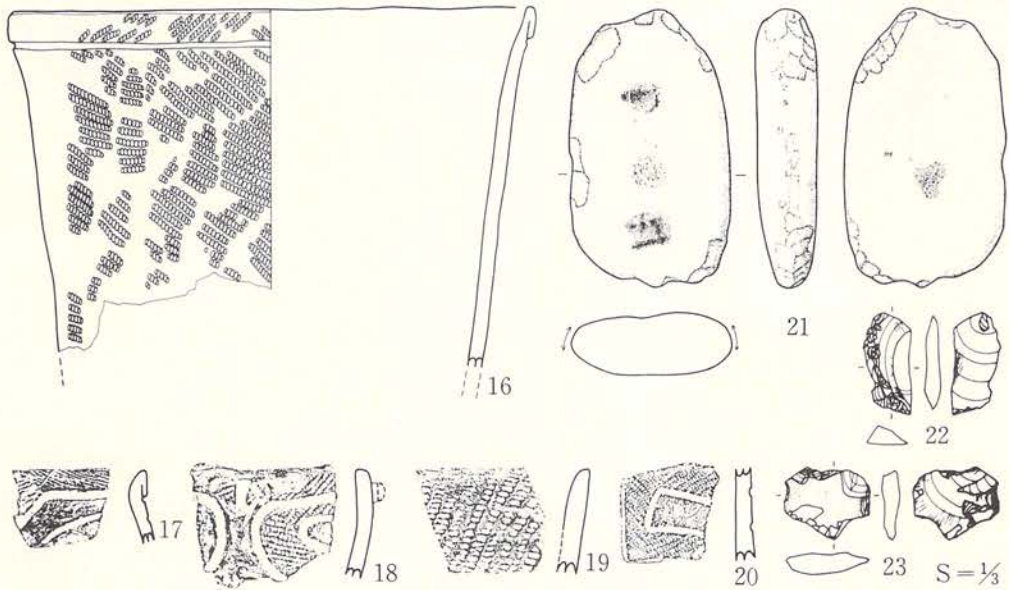
東側緩斜面の南寄りに位置する。本遺構は北側でC III j 3—1 住居跡と、南側ではC III j 5 配石遺構と重複し、両遺構を切っている。遺構の新旧関係は、本遺構が新しくC III j 3—1 住居跡、C III j 5 配石遺構はより古い。IV層下位で検出している。

平面形は開口部、底部とも南北方向に長軸をもつ溝状を呈する。規模は開口部が3.5m×70cm、底部が3.0m×10cmである。断面形は短軸方向がV字状を、長軸方向は開口部が底部より広がる逆台形状を呈している。底部は若干凹凸しながら傾斜下方の南側へ緩く下がり、両端の高低差は20cmである。中央部の深さは1.3mを測る。

埋土は中位から上位にはV層起源の黒色～黒褐色のシルト～砂質シルトが、中位から下位には壁の崩落土と思われる褐色シルトが主として堆積し、最下部には褐色シルトが多く混入する黒褐色土が堆積している。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物（第56図16～23）

土器17は埋土中から、他は埋土上位から出土している。16は平縁深鉢の口縁部～体部である。体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部付近で緩く外反する。口縁は複合口縁でその直下に横位の沈線が施される。体部の地文は小単位で単節斜縄文（LR）が施文される。口縁部には体部の原体より細い斜縄文（LR）が施される。外面には煤が多く付着している。胎土は粗



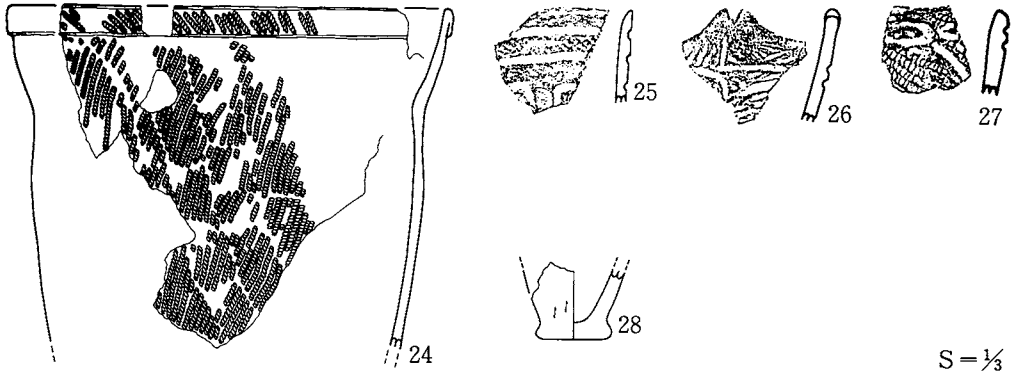
第56図 C III j 4 陥し穴状遺構出土遺物

砂が多く混入し、焼成は脆い。内面はナデ調整される。口径は21.0m、器厚は6mmである。17・18・20は平行沈線が施文されるものである。17は内傾する口縁部で複合口縁を呈する。口唇部は内削りされている。18は内湾気味を呈する鉢の口縁部で口縁直下に有孔突起をもつ。平行する曲線の沈線が施文され沈線間に縄文が充填される。20は体部片で屈曲する沈線で文様帯を区画するものである。石器は磨・凹・敲石の21とフレーク22・23が埋土中から出土している。21は両端部に敲打痕による剥落があり、表裏両面に4箇所程度の浅い凹痕を、両側縁に磨面を有し、複数の機能を持つ石器である。

#### C III j 5 陥し穴状遺構 (第60図、写真図版34・57)

調査区域東側緩斜面の南寄りに位置する。北東に隣接しC III j 5 配石遺構が、北西4.0mにはC III i 4 陥し穴状遺構がある。他遺構とは重複していないが、遺構の南端は林道の下にあり全体を完掘していない。IV層下位で検出している。

平面形は南北方向に長軸をもち、開口部が不整楕円形状を、底部が溝状である。規模は開口部の長軸の長さが推定で3.1m、幅は一定せず75cm~1.15m、底部は2.5m×15cmである。断面形は短軸方向はV字状を、長軸方向は開口部が底部より僅かに広がる逆台形状を呈すると思われる。底部は傾斜下方の南側に緩く下がり、北側と南側では約20cmの高低差がある。中央部での深さは1.45mを測る。



第57図 CⅢj5 陥し穴状遺構出土遺物

埋土は上位にⅣ層起源の黒色～黒褐色の砂質シルトが、中位～下位はⅤ層起源を主とする黒褐色シルトが堆積する。下位に壁の崩落土と思われる褐色シルトのブロックがある。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物（第57図24～28）

土器25は埋土中から、他は埋土上位から出土している。24は平縁深鉢の口縁部～体部である。体部は内湾気味に立ち上がり頸部で僅かに窄み、口縁は複合口縁で頸部から外傾して立ち上がる。体部・口縁は同じ原体（RL）で施文されるが、体部は斜回転施文で縦走縄文気味となる。内面は丁寧に調整される。推定口径は29.7cm、器厚は7mmである。25～27は口縁部片で、いずれも沈線が施文される。25はつくりの丁寧に薄手の鉢で口縁に平行する2条の沈線、その下位には屈曲する沈線文をもつ。26は小山形の口縁突起で山形頂部に棒状工具による圧痕が施される。28は埋土上位から出土したミニチュア土器の破片で、焼成は堅緻で外面に丁寧なミガキ調整を施している。

#### DⅡ f 10陥し穴状遺構（第60図、写真図版34・57）

東側の尾根中央付近に位置する。南西1.0mにDⅢ f 1焼土、北東2.0mにDⅡ g 10焼土がある。他遺構との重複はない。灰白色火山灰が混入する黒色土が広く堆積する部分に東西方向に、トレンチを入れ遺構の存在が確認されたものである。平面形の検出はⅥ層上面である。

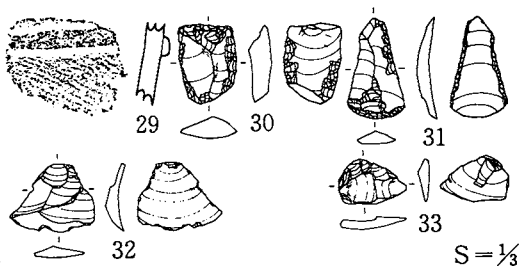
平面形は開口部、底部とも北西—南東方向に長軸をもつ溝状を呈している。規模は開口部が3.3m×55cm、底部が3.25m×5cmである。断面形は短軸方向が開口部の開くロート状を、長軸方向は両端の壁下部が僅かに抉り込まれた状況で、形状は不整長形状を呈する。底部は傾斜下方の南東側へ下がり、両端での高低差は20cmである。中央部の深さは1.05mである。

埋土は上位にⅢ層起源の黒色～黒褐色シルトが、中～下位には暗褐色～褐色シルトが堆積す

る。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物（第58図29～33）

土器29は埋土上位から出土した深鉢体部片である。横位隆帯をもち、地文はRL斜縄文である。他に粗製土器片が僅かに出土している。30



と31は搔・削器で、30の刃部は両側縁から調整加工を施している。31は片刃調整加工したものである。32は不定形石器で側縁の一部に刃部調整加工をしている。33はフレイクである。

第58図 D II f10陥し穴状遺構出土遺物

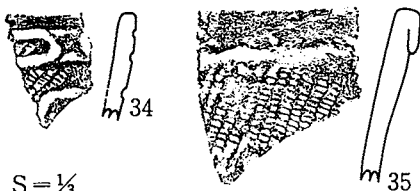
S = 1/3

### D III b 5 陥し穴状遺構（第60図、写真図版35・57）

調査区域東側の緩斜面南寄りに位置する。東4.0m にD III b 5 陥し穴状遺構がある。北側でD III b 5-1 土坑、D III b 5-3 土坑と重複している。重複する遺構との新旧関係は新しい順に、本遺構→D III b 5-1 土坑→D III b 5-3 土坑である。南側は林道の下にあり、全体を完掘していない。VI層上面で検出している。

全体の形状は不明であるが、検出された状況から平面形は南北方向に長軸をもち、開口部、底部とも溝状を呈すると思われる。規模は開口部の長軸の長さが現存値で2.5m、幅は40cm～90cm、底部の長軸長の現存値2.7m、幅が20cmである。断面形は短軸方向がV字状を、長軸方向は壁下方がやや広がる長方形状と思われる。底部は凹凸が少なく、傾斜下方の南側へ下がる。北側と南側の高低差は約25cmである。検出中央部での深さは1.0mを測る。

埋土は黒褐色、暗褐色、黒色、褐色の砂質シルト、シルトで構成される。埋土中位の壁際から中央に厚く堆積する褐色シルトは一時に崩落した地山と思われる。



この堆積状況は自然堆積によるものと思われる。 S = 1/3

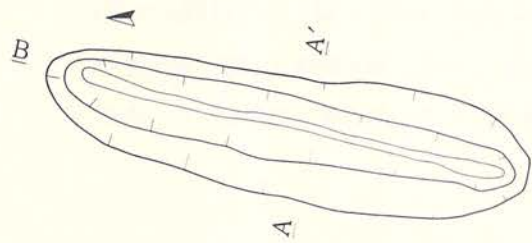
遺物（第59図34・35）

第59図 D III b 5 陥し穴状遺構出土遺物

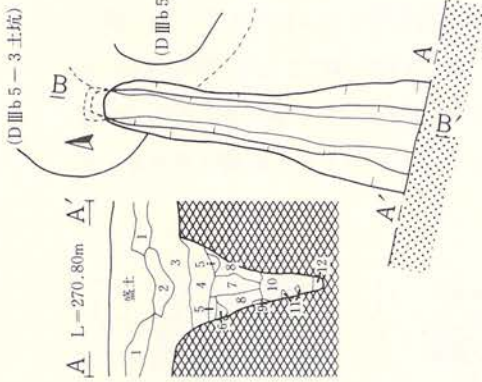
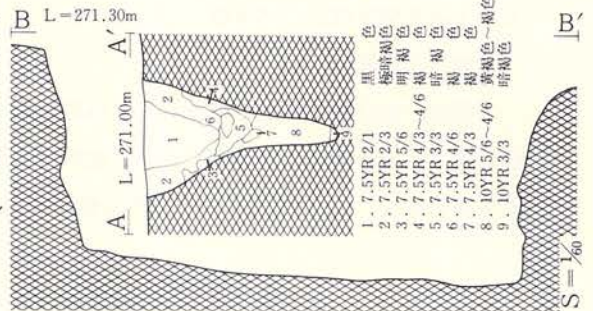
土器34と35は埋土中から出土した平縁深鉢の口縁部片である。34は斜縄文（RL）施文後に口縁部直下には長円状の沈線文、体部に曲線の沈線文が施される。35は複合口縁をもち、体部の地文は斜縄文（RL）であり、口縁部は無文である。

### D III c 5 陥し穴状遺構（第60図、写真図版35・57）

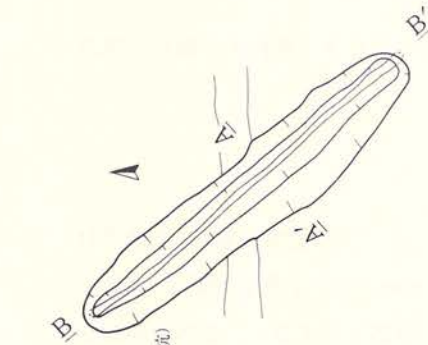
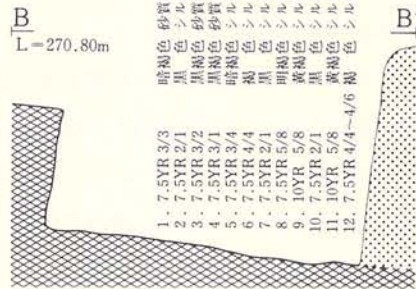
東側緩斜面の南寄りに位置する。西4.0m にD III b 5 陥し穴状遺構がある。他遺構との重複は



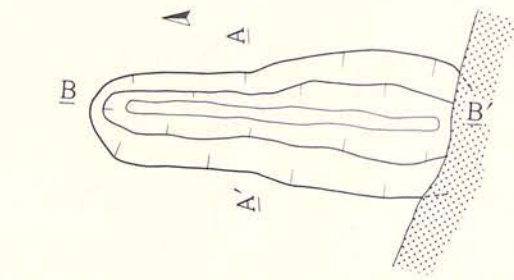
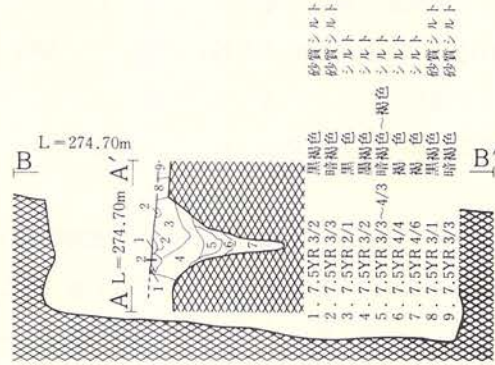
D III c 5 陥し穴



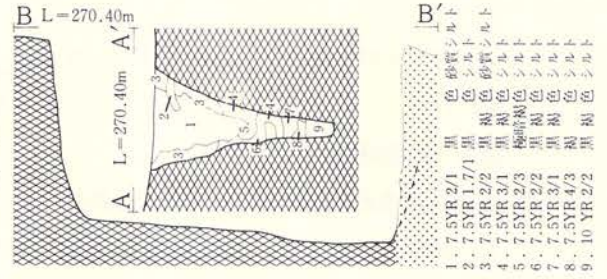
D III b 5 陥し穴



D II f 10 陥し穴



C III j 5 陥し穴



第60図 陥し穴状遺構(3)



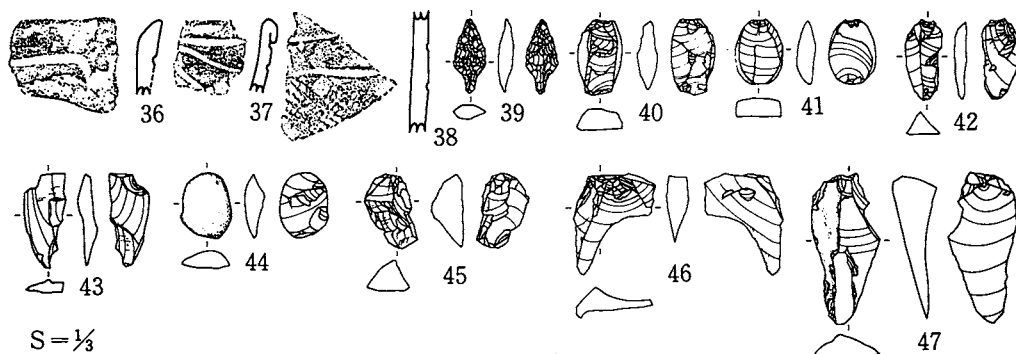
ない。V層中位で検出している。

平面形は開口部、底部とも南北方向に長軸をもつ溝状を呈する。規模は開口部が3.95m×95cm、底部は3.5m×80cmである。断面形は短軸方向の開口部が広がるロート状を、長軸方向は不整な長方形状を呈している。底部は傾斜下方の南側へ緩く下がり、両端の高低差は約25cmである。中央部での深さは1.55mを測る。

埋土は上位～中位に黒～暗褐色の砂質シルト～シルトが、中位の壁際から下位には、褐色～黄褐色のシルトが堆積する。壁際及び中位の褐色シルトは壁の崩落土と思われる。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

#### 遺物（第61図36～47）

土器36は埋土中から、他の2点は埋土上位から出土している。いずれも横位の沈線が施文される。36は平縁の口縁部片で肥厚する口縁が内削りされる。37は波状を呈すると思われるもので複合口縁を呈する。38は平行沈線により無文帯を区画するものである。石器は埋土上位から中位にかけて出土したもので、39は基部がやや突出する有茎石鏃である。40と41は対辺する縁辺部に階段状の剝離痕を有する楔形石器、42～47はフレイクである。

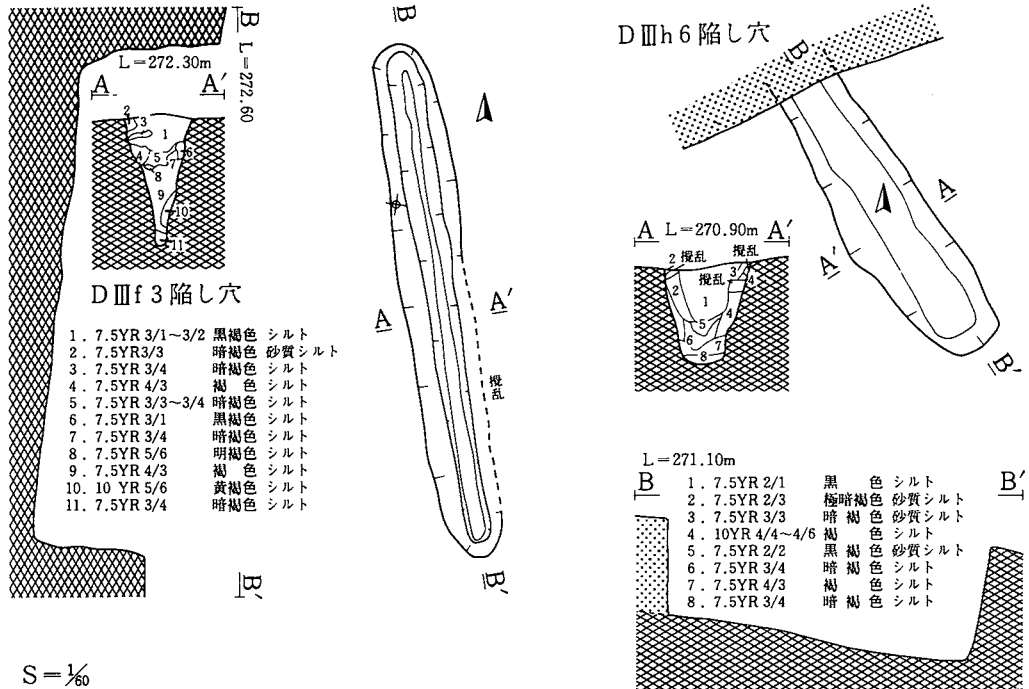


第61図 D III c 5 陥し穴状遺構出土遺物

#### D III f 3 陥し穴状遺構（第62図、写真図版35・57）

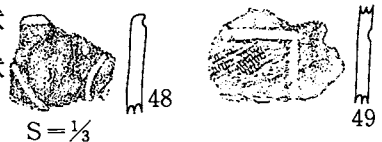
東側尾根の南寄りに位置する。東2.0mにD III g 4 焼土、北5.0mにD III g 2 土坑がある。他遺構との重複はない。VI層上面で検出している。

平面形は開口部、底部とも北北西—南南東に長軸をもち溝状を呈する。開口部の南東部は木根等による攪乱がある。規模は開口部が4.15m×55cm、底部が3.8m×5cm～10cmである。断面形は短軸方向がV字状を、長軸方向は両端壁がほぼ直立して立ち上がる平行四辺形状を呈している。底部は傾斜下方の南側へ凹凸もほとんどなく緩く下がり、両端の高低差は17cmである。中央部での深さは1.05mを測る。



第62図 陥し穴状遺構(4)

埋土は上位に黒褐色シルト及びブロック状を呈する褐色～暗褐色シルトが、中位～下位には褐色、黄褐色、暗褐色シルトが堆積する。上位のブロック状を呈する土層は抜根による攪乱部である。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。



遺物 (第63図48・49)

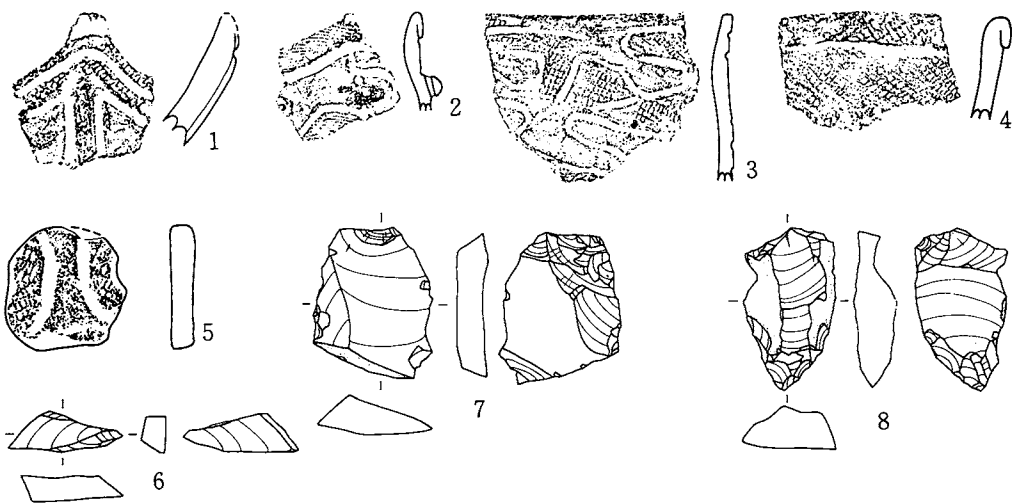
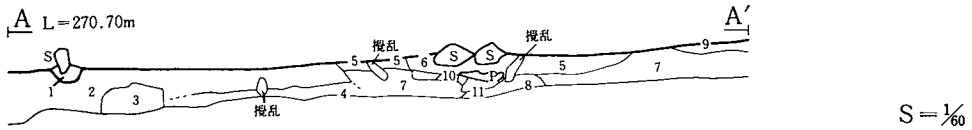
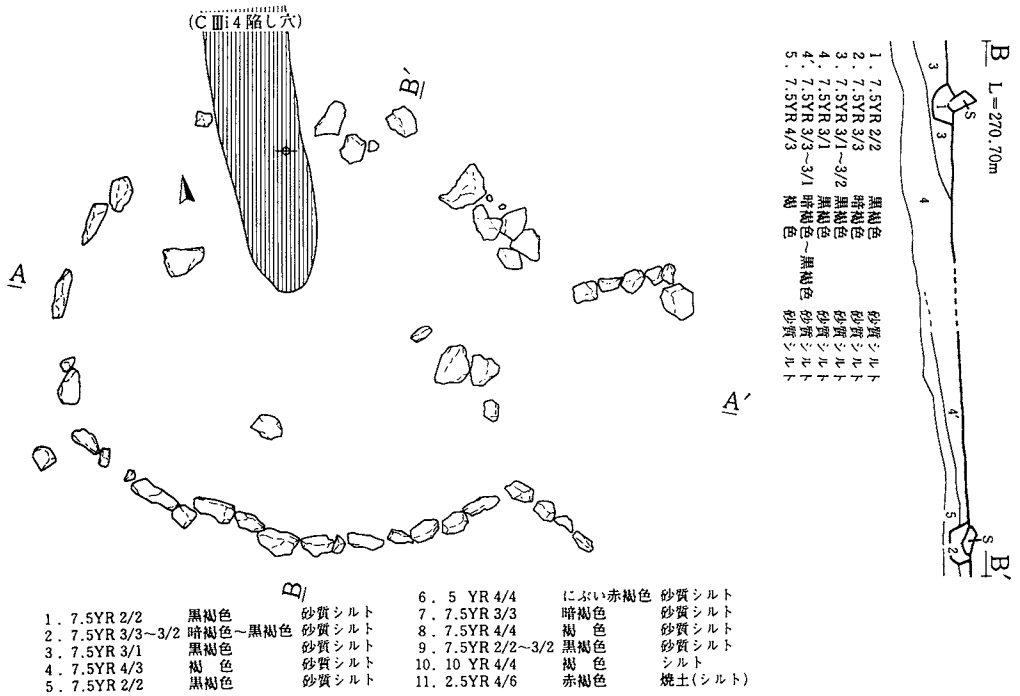
第63図 D III f 3 陥し穴状遺構出土遺物

土器48は埋土下位から、49は埋土上位から出土している。48は無文の口縁部に沈線文が施され、49は体部片で屈曲する沈線で縄文帯を区画するものである。

#### D III h 6 陥し穴状遺構 (第62図、写真図版35)

調査区域東側の南東端に位置する。遺構の北側は林道の下にあり、全体は完掘できていない。他遺構とは重複していない。VI層上面で検出している。

全体の平面形状は不明であるが、検出された状況からは開口部、底部とも長軸方向を北西—南東にもつ長楕円形状を呈すると思われる。規模は開口部が長軸方向の現存長2.5m、幅65cm、底部は長軸方向の現存長2.3m、幅30cmである。断面形は短軸方向の上幅がやや広がるU字状を呈する。長軸方向は壁が直方気味に立ち上がる平行四辺形状を呈すると思われる。底部はやや



5~8はS=1/2  
1~4はS=1/3

第64図 C IIIj 5 配石遺構

幅広で平坦で、傾斜下方の南側へ緩く下がり、両端での高低差は35cmである。深さは検出した中央部で75cm、南端で90cmを測る。

埋土は上位の壁際に攪乱部がある。埋土の上位～下位及び最下部に黒色、黒褐色、暗褐色の砂質シルト～シルトが、中央壁際から下位には褐色シルトが堆積する。この埋土の堆積状況は自然堆積によるものと思われる。

遺物は出土していない。

## 6. 配石遺構

### C III j 5 配石遺構 (第64図、写真図版31・58)

調査区域東側の緩斜面南寄りに位置している。北側でC III j 4 陥し穴状遺構と重複し、切られていることから遺構の新旧関係は本遺構の方が古い。試掘トレンチ掘りの際にIV層上面で検出している。平面形は径4 m×3.5mのやや楕円形を呈し、東側で1 m程「ハ」の字状に開口する。北側は遺構が重複しているため配石の一部は欠落している。石は径20cm～40cm・厚さ10 cm大の垂角礫を39個余り規則的に配列し、内3分の2はIV層を3 cm～24cm掘り込んで埋置している。内部東寄りの配石遺構面から15cm下位でD III a 5 焼土遺構を検出しており、本遺構に伴う可能性も考えられる。

### 遺物 (第64図1～8)

土器1～4は配石内から出土している。1は鉢の波状口縁頂部片で隆帯が口縁に平行して2条、縦位に1条貼付られ、上部に縄文が施文される。2も鉢の波状口縁部片で沈線文が施され、有孔突起を持っている。3は平縁で曲線文を施してある。4は粗製深鉢の複合口縁部破片で斜縄文(LR)を施文している。器表には煤の付着が見られる。5は縄文土器片を人為的に打ち欠いた円盤状土製品で、周縁の一部は磨かれ調整されている。

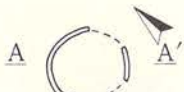
石器は6～8のフレークが3点出土している。

## 7. 埋設土器

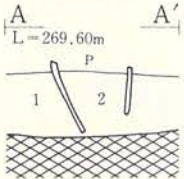
### C III e 1-1 埋設土器 (第65・66図、写真図版36・58)

調査区域中央部やや南寄りの緩斜面に位置する。北東側2.6mにC III e 1-2 埋設土器がある。IV層中位～V層で検出している。正立気味に埋設され、土器内部には炭化物が僅かに含まれる。1(第66図)は深鉢で底部を欠損している。口縁部はやや外傾し、体部に単節斜縄文(LR)を施文している。焼成は堅緻で器表に煤の付着が認められる。

C III e 1 - 1 埋設土器



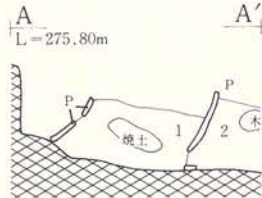
1. 7.5YR 2/1 黒色  
2. 7.5YR 2/1 黒色



D III h 7 埋設土器



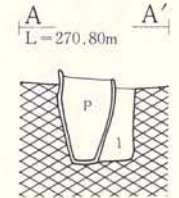
1. 7.5YR 3/2 黒褐色  
2. 7.5YR 3/4 暗褐色



D III a 4 埋設土器



1. 7.5YR 3/4 暗褐色



S = 1/20

第65図 埋設土器 (1)

C III e 1 - 2 埋設土器 (第65・66図、写真図版36・58)

調査区域中央部やや南寄りの緩斜面に位置する。南西側2.6mにC III e 1 - 1 埋設土器がある。IV層中位で口縁部を伏せた状態で検出している。2 (第66図)は平縁の浅鉢で、底部から内湾気味に立ち上がる。体部下半の隆帯を境に文様帯と無文帯に区画している。口縁部の4箇所には対をなす棒状の隆帯が縦位に貼付られる。文様は平行する沈線で「コ」の字乃至逆「コ」の字状に区画され、中は縄文が磨消されている。体部下半は荒いナデ調整が施される。

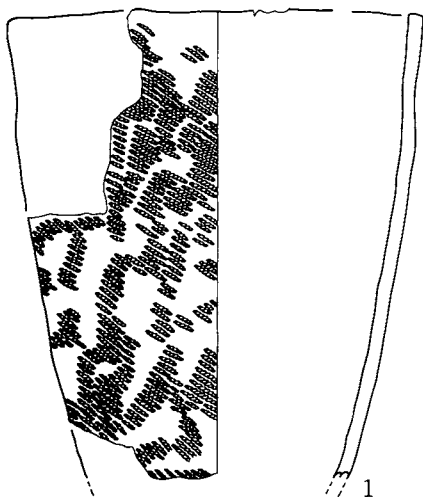
D III h 7 埋設土器 (第65・66図、写真図版36・58)

調査区域東側の緩斜面に位置する。IV層中で検出され、やや横位に埋設している。土器の内部は黒褐色砂質土に焼土粒と炭化物が多く混入している。攪乱があり明瞭な掘り込みは確認されない。3 (第66図)は波状口縁の深鉢で、体部下半から底部は欠損する。体部から内湾気味に立ち上がり口頸部で窄み、口縁部は外傾する。口縁の波頂部下位には棒状の貼付があり、その上に円形刺突を施している。また、体部上位にもボタン状の突起が貼付られている。平行する沈線で工字状、X字状、円弧文等の文様を描き出し、中は磨消縄文を施している。器表は再火熱を受け、一部は剥落しザラザラしている。

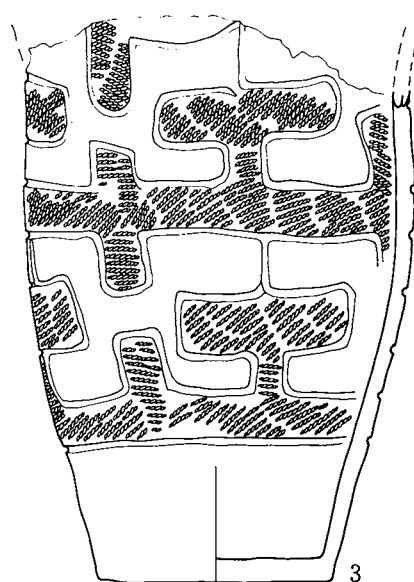
D III a 4 埋設土器 (第65・66図、写真図版37・58)

調査区域東側の緩斜面南寄りに位置する。北側にC III j 3 - 1・2 住居跡、南側にC III j 5 配石遺構が隣接している。検出はIV層下位～V層である。検出面から20cm掘り込んで正位に埋設されている。4 (第66図)は口縁部を欠損しているが深鉢と思われる。体部の文様は平行する沈線で擦程のX字状に施し、中は丁寧に磨消している。器表は火熱を受け煤が付着する。

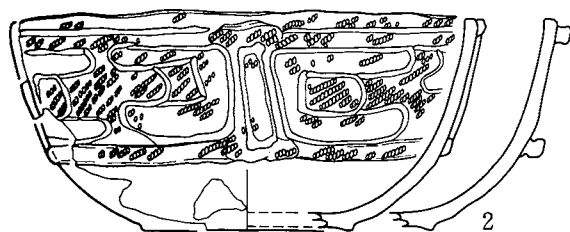
CⅢe1-1埋設土器



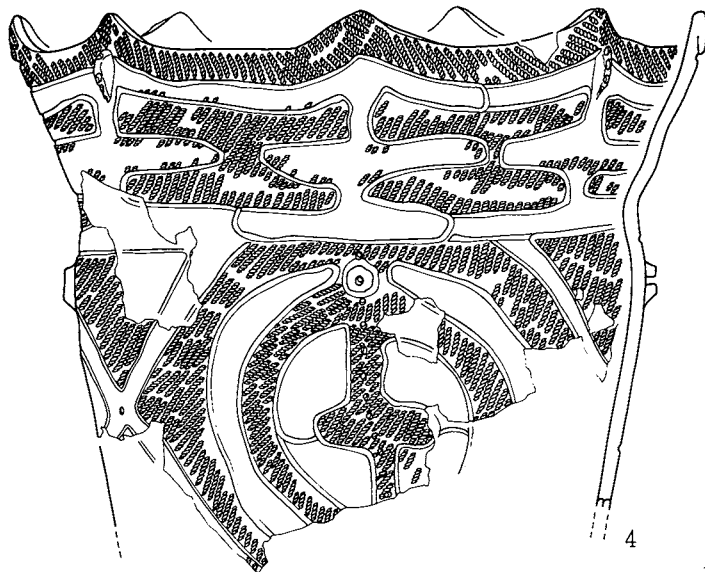
DⅢa4埋設土器



CⅢe1-2埋設土器



DⅡh7埋設土器



1と4はS=1/4  
他はS=1/2

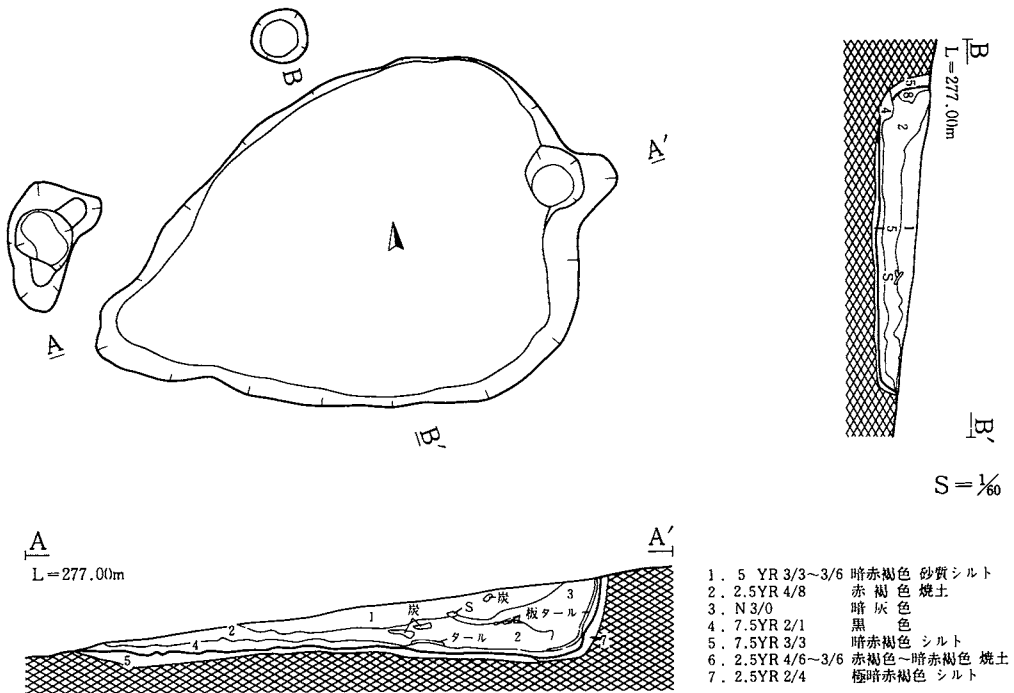
第66図 埋設土器(2)

## 8. 炭窯

### D II c 7 炭窯 (第67図、写真図版37)

調査区域東側の緩斜面北寄りに位置する。耕作土真下のVI層上面で焼土塊の広がりにより検出している。地山シルトを掘り込んで構築され、平面形は北北東—南南西に長軸をもつ無花果形を呈し、傾斜下方の南南西側は焚口で幅が狭くなり、奥ほど幅が広がる。開口部の規模は4.0m×2.7mを測る。煙出口は最奥に設けられ、ほぼ鉛直に煙突敷設痕がある。埋土は天井の崩落土によって占められ、暗褐色～赤褐色焼土が主体をなす。埋土の最上部には焼土がブロック状を呈し、黒色土や煙突破片・木片が混入する。また、天井の崩落土と底面の間には炭化粒が5cm前後堆積する。壁は地山を掘り込んでほぼ垂直に立ち上がり、強い火熱を受けてレンガ状に堅く締まっている。壁高は北側48cm、南側20cm、東側70cmを測る。底面は焚口部より僅かに低く構築され、ほぼ平坦である。火熱による焼成を受けて赤褐色～暗赤褐色に変化し、極めて堅く締まっている。

この炭窯の時期は山田地区民によれば、昭和30年代に周辺で構築した内の1基との事である。



第67図 D II c 7 炭窯

## V. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は土器、土製品、土偶、石器、石製品、古銭等である。土器はコンテナ（46cm×37cm×30cm）で60余箱、縄文時代早期～後期と弥生時代のものであるが、大多数は縄文時代後期に属している。石器は560点を数え、その70%程が剥片石器で占められている。以下土器から順に記述することにする。

### 1. 土器

土器の分類は時代別及び時期別に次の第Ⅰ群～第Ⅷ群に大別し、さらに文様や施文等の特徴により細分した。図面を掲載したものは、口縁部の拓本を中心に225点である。

#### 第Ⅰ群土器（第68図1、写真図版59）

本群は縄文時代早期に属する土器で、調査区域北西寄りの地点から出土している。1は深鉢と思われる口縁部破片で、貝殻腹縁刺突文を連続施文し、かつ上下で方向を変え羽状の文様をつくり出している。焼成は堅緻で黄褐色を呈している。

#### 第Ⅱ群土器（第68図2～3、写真図版59）

本群は縄文時代前期に属する土器で、調査区域南西寄りの地点から僅かに出土している。2・3は深鉢の体部片で、単節斜縄文を横位及び縦位に回転し羽状に施文している。2は胎土に粗砂及び繊維の混入が多く、焼成は脆い。3は繊維の混入は僅かで、内面調整が丁寧に施され焼成も良い。

#### 第Ⅲ群土器（第68図4～12、写真図版59）

本群は縄文時代中期末葉～後期初頭に属すると思われる土器である。BⅢa 4住居跡状遺構からも数点出土している。

1類 磨消帯をもつもの（4～6） 沈線により磨消帯と縄文帯を区画し、磨消しは縦方向に施されている。4は鉢の口縁部破片で磨消しが口縁部から体部に向け施される。5・6は細目の沈線で縄文帯を区画し、5は磨消帯が「U」字状に施される。

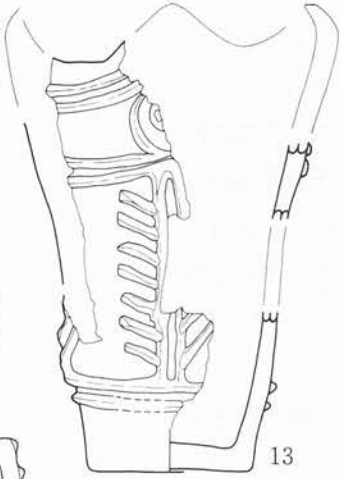
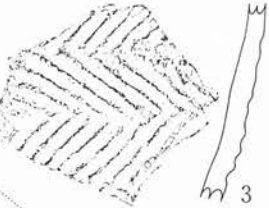
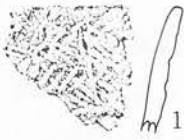
2類 隆帯をもつもの（7～13） いずれも波状口縁で、特徴として隆帯の断面は三角形状を呈する。以下のa・bに細分した。

a 口縁に半円状の隆帯が施されるもの（7・8） 波状口縁頂部の真下に「C」字状乃至逆「C」字状を呈する半円状の隆帯を施し、器表は丁寧にナデ調整されている。8は波状頂部に棒状工具で押圧が加えられ凹んでいる。

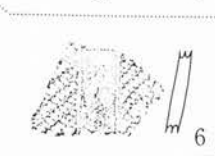


第I群土器

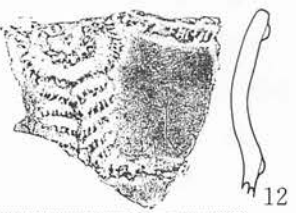
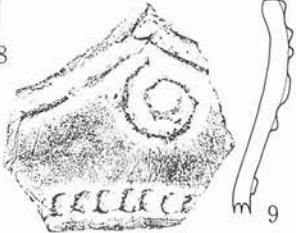
第II群土器



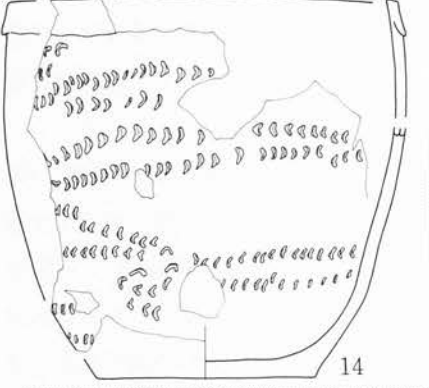
第III群1類土器



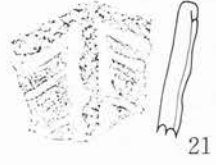
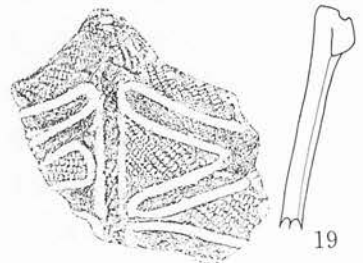
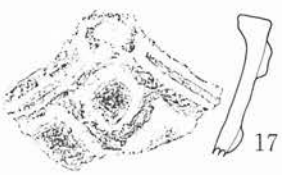
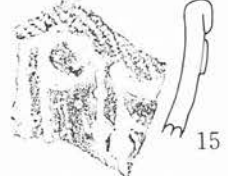
第III群2類土器



第IV群1類土器



第IV群2a類土器



S=1/3

第68図 遺構外出土土器(1)

b 口縁に平行する隆帯が施されるもの(9~13) 波状口縁に平行する隆帯が1~3条施され、さらに頂部真下に渦巻状の隆帯が貼付されるもの(9・11)もある。9には連鎖状の隆帯が頸部に貼付られている。12は口縁上端を欠損しているが波状を呈すると思われ、隆帯には連続刻目が施されている。13は4波状を呈すると思われる小形の鉢である。体部下半は直立気味に、上半から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がる。口縁部と体部上半及び下半には横位に2条の隆帯が巡り、波状頂部の下位に渦巻状及び綾杉状の隆帯が貼付られ、独特な意匠をつくりだしている。隆帯は9・10と比較して幅・厚みもあり、丁寧に調整されている。

#### 第IV群土器(第68図14~第74図138、写真図版59~65)

本群は縄文時代後期に属すると思われる土器を一括し、以下の1~3類に分類した。

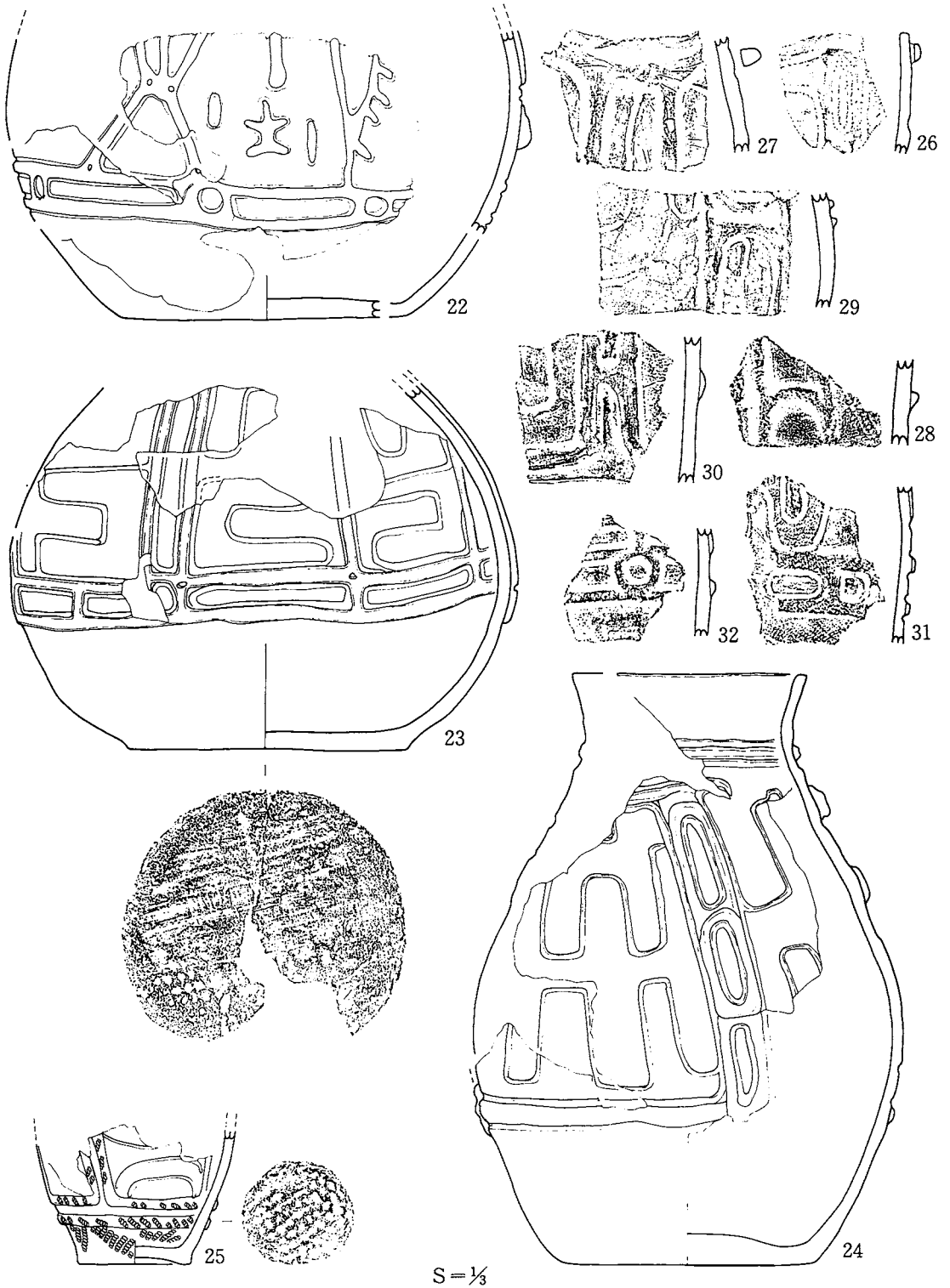
1類 連続刺突文をもつもの(14) 14は複合口縁の小形鉢である。体部上半は僅かに内湾気味を呈し、器面調整後に半截竹管状の連続刺突文が横位に2列3段施されている。胎土には粗砂や小礫が多く混入し、かつ器表が凸凹し粗雑な感じのする土器である。

2類 隆帯をもつもの(15~41) 隆帯の施文方法により以下のa~dに細分した。

a 波状頂部から隆帯が施されるもの(15~21) 15~21は波状口縁の鉢または深鉢破片で、複合口縁のものが多い、15は波状頂部の真下にボタン状の突起をもち、その突起を挟んで垂下する2条の隆帯が施される。16~18は口縁に平行する隆帯及び波状頂部の下位に菱形状の文様をつくり出している。19~21は波状頂部の真下から1条の隆帯が垂下するもので、隆帯の左右には沈線が施文される。20の隆帯には連続する刻目が、他は縄文が施文される。

b 平行する隆帯が施されるもの(22~32) 22~24は壺である。22は胴部下半~底部の破片で、胴径に比較して底径が大きく安定感がある土器と思われる。隆帯及び隆帯に沿って沈線が施され、胴部下半には横位に平行する2条の隆帯が巡り、部分的に隆帯が連結されて円形文をつくる。胴部は隆帯により飾り弓と思われる文様を描き、その左側には架橋状の隆帯が貼付され、隆帯の交差部には刺突が施される。中央部には動物を思わせる隆帯及び小楕円形状の隆帯が施される。これらの隆帯に沿って浅い沈線が施され、内外面を丁寧に調整している。焼成は良く緻密である。23は22と同様に底径が大きく、かつ最大径が胴部下半にあり、安定感を呈する土器である。隆帯及び沈線により施文される。胴部最大径の箇所連結する横位2条の隆帯が巡り、この連結により長形状の区画及び円形文を描いている。胴部中央には縦位に2条及び1条の隆帯が貼付され、隆帯の交差部には刺突が施される。この縦位の隆帯間には屈曲する沈線が施文される。底面には網代及び笹葉状の圧痕がある。24は最大径が胴部下半にあり、胴部上半は緩く内傾し、口縁部が外反する。全体が西洋梨を思わせる形状を呈する。頸部と胴部下半に横位1条の隆帯が巡り、胴部には斜めに垂下する隆帯が施される。垂下する隆帯間は

第IV群2b類土器



第69図 遺構外出土土器(2)

横位に連結され、長楕円状の文様が描かれる。胴部には屈曲する沈線文が、上下2段に亘って施文される。器面調整は23と同様丁寧に施され、焼成は緻密である。25は小形の鉢で体部下位に横位の隆帯を、体部には縦位の隆帯が貼付され、隆帯には縄文が施文される。上げ底状の底部には網代痕がある。26・28～32は上記に類似した隆帯文をもつもので、29・32の器形は壺と思われる。31は隆帯が幅広く縄文が施文される。26・27は有孔突起をもつものである。

c 1条の隆帯をもつもの(33・34) 33は小形の鉢で体部下位に横位一条の隆帯が巡り、体部文様帯を区画する。隆帯には縄文が施文されている。34は体部に縦位の隆帯をもち、その下端から横位の隆帯が巡る。地文はなく屈曲する沈線文が左右非対称に施文される。

d 口縁に平行する隆帯をもつもの(35～41) 35のみが波状口縁と思われるもので、他は平縁を呈する。35は複合口縁から縦位の隆帯が垂下し、横位の隆帯と連結する。隆帯及び複合口縁直下は沈線で縁どられている。36・38は幅の狭い隆帯が1条・2条平行に施される。36は口縁に無文帯が、38は体部に無文帯が区画される。37は幅のある隆帯が独特の文様をつくるもので、隆帯には縄文が施され沈線が縁どりされる。39は隆帯間に渦巻状の沈線文が施される。40は35と同様に隆帯の左右に沈線による区画文をもつが、区画内にも縄文を施文している。

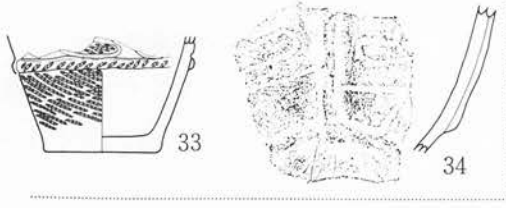
3類 沈線が施文されるもの(42～138) 本類は主として沈線が施文されるもので、最も出土点数が多い。以下のa～fに細分した。

a ボタン状の貼付突起または円形刺突が施されるもの(42～54) 42～54は鉢や深鉢の口縁部破片である。48のみ平縁で、他は山形口縁を呈している。山形口縁のものは頂部直下にボタン状の突起をもち、その突起に円形刺突を施した42～46、刺突が施されない47がある。突起は円形状のもの及び西洋梨状の膨みを呈するものがある。刺突は先端に丸味をもつ円形工具によって押圧状に施されるものが多い。45は頂部の最上端に上方から円形刺突が施される。ボタン状突起に刺突が施されない47は頂部が調整されて台形状を呈し、やや内湾気味となる。上下に円形の突起をもち、器面には原体側面圧痕が施される。頂部の真下に円形刺突をもつものは、1個と2個施されるものがある。53は肥厚する口縁頂部に上方から溝状の圧痕が施され、頂部直下には貫通孔がある。54は円形刺突の周りに小刺突が施されている。

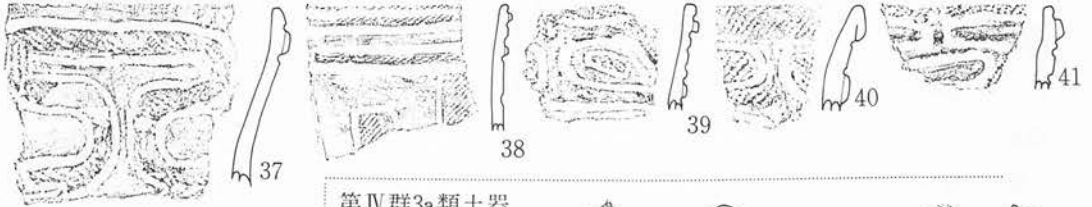
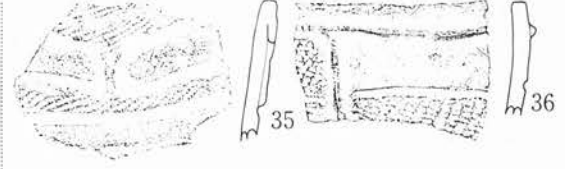
b 口縁頂部に小突起をもつもの(55～58) 55～58は山形口縁の鉢及び深鉢破片である。上記のaとは異なり突起は口縁頂部から滴状に小さく、または小瘤状に施される。口縁に平行する沈線をもち、複合口縁の55・56は口縁部にも沈線が施され、体部には沈線による区画文を描いている。

c 口縁頂部の真下に沈線楕円文、菱形文等が施されるもの(59～67) 59～67はa・b同様に山形口縁の鉢及び深鉢の破片である。口縁頂部を中心に左右対称に沈線が施文される。沈線が口縁頂部から垂下する59・60、楕円状の文様を描く63・64、方形または菱形の文様を描

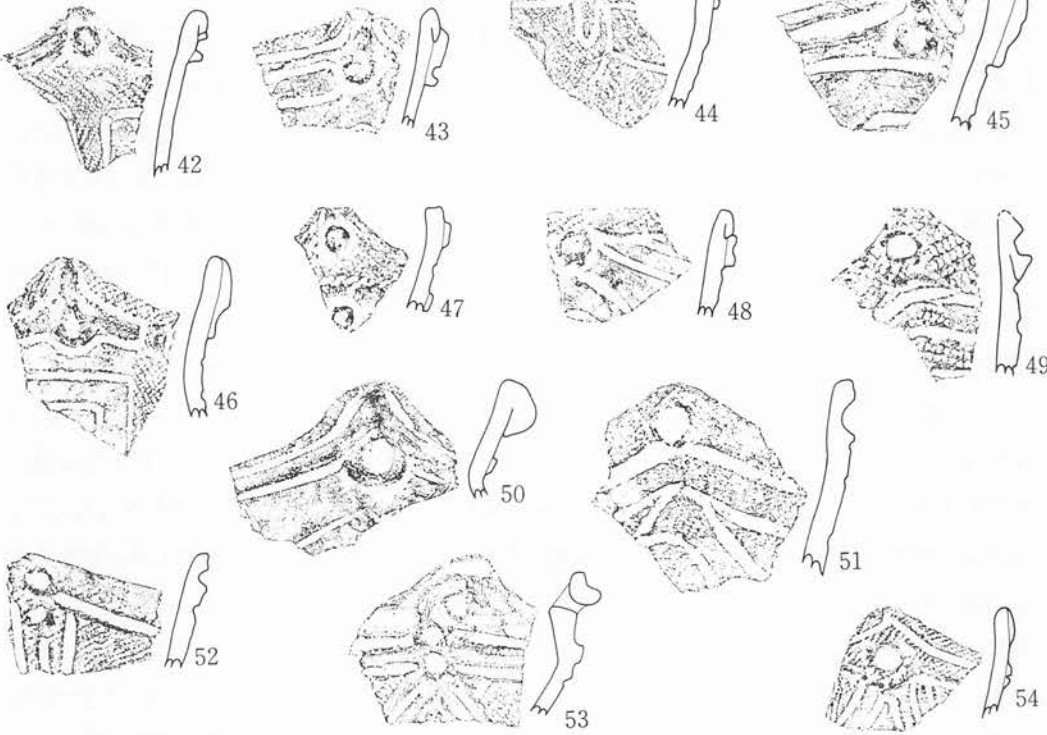
第IV群2c類土器



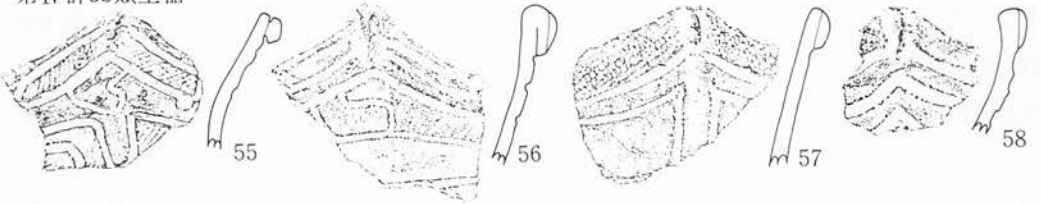
第IV群2d類土器



第IV群3a類土器



第IV群3b類土器



S = 1/3

第70図 遺構外出土土器(3)

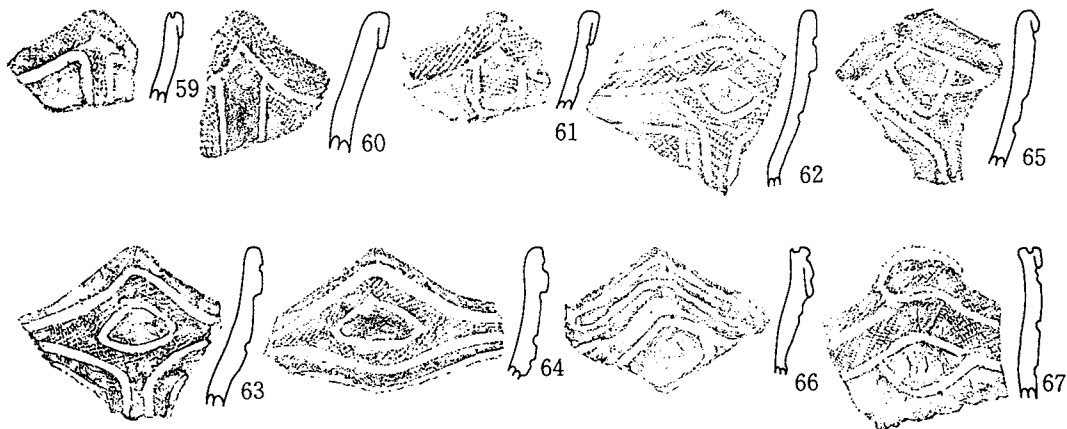
くものがある。平行する沈線間には縄文が充填されるものと、無文帯のものがある。

d 口縁に平行する沈線が施されるもの(68~74) 68~74は口縁に平行する1~3条の沈線が施され、沈線間は無文となるものが多い。体部の沈線文は方形区画する72、蛇行する74があり斉一性は認められない。

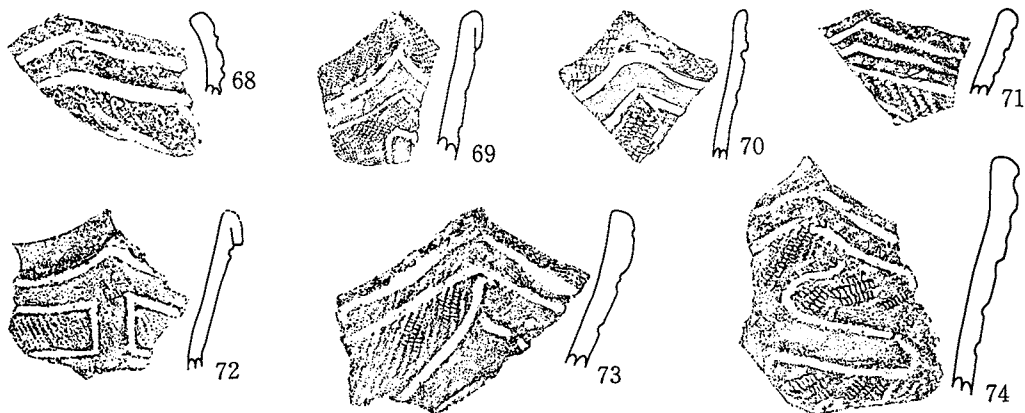
e 屈曲する沈線が施文されるもの(75~105) 器種は浅鉢、鉢、深鉢、壺、小型鉢、小型切断土器など多種に及ぶ。壺、浅鉢、切断土器は地文をもたず沈線文のみ施されるものが多い。沈線は幾何学的な文様を構成し、横位または縦位に展開される。75は体部下半に最大径をもつ浅鉢である。体部上半は緩く内傾して窄み、全体に安定感のある土器である。体部上位の左右両側に2個の有孔突起をもち、地文はなく沈線が施文される。口縁には2条の平行沈線、体部には沈線による区画文が横位に施される。器面は丁寧に調整されている。焼成は良く、色調は暗赤褐色を呈する。82は口径が大きい壺である。胴部下半に最大径をもち、頸部が僅かに窄む。頸部と胴部下位に隆帯が巡り、この隆帯の左右両側に上下対となる有孔突起がある。口頸部から胴部には蛇行気味の沈線が縦位に施文される。地文はなく器面は丁寧に調整されている。96~101は壺及び浅鉢と思われるものである。深鉢や鉢と思われるものは、沈線により無文帯と縄文帯を区画し、縄文を充填施文するものが多いが、77・91のように区画を明瞭に区別しない場合もある。79~81・102~105は小型の切断土器である。体部上半で切断された79・80・102と体部下半及び下端で切断されているものがある。体部上半で切断されるものは体部が急傾斜して窄み、口頸部は極端に細くなる。有孔突起をもつものは80・103・105がある。

f 曲線沈線が施されるもの(106~138) 器種は鉢、深鉢、浅鉢、壺などがある。106は平縁の浅鉢で、体部中央に最大径をもち、全体としてやや球形状の器形を呈する。口縁部は短く頸部から外反する。口縁部と体部中央付近に有孔突起をもつ。有孔突起は上下の対とはならず、口縁部と体部の位置は90度ずれている。文様は頸部に一条の沈線が巡り、体部に渦巻状を呈する沈線文が横位に展開する。底面には笹葉状の圧痕及び円形沈線文が施される。器面は丁寧に調整されている。113は4波状口縁の鉢で、波状頂部は台形状を呈している。体部上半は僅かに内傾して頸部が窄み、口縁部は屈曲した後直立気味に立ち上がる。口縁部は3条の平行沈線を、体部の上・中・下部には2条の沈線を横位に施して文様帯を区画する。沈線文は波状頂部の下位に渦巻文を、体部には平行する沈線で三角形の区画や波頭状の文様を描いている。縄文は部分的に施文される。112は平縁の小型鉢で複合口縁をもつ。体部上位に平行する2条の沈線で体部文様帯を区画し大柄な沈線文を描く。縄文は沈線の施文後に施されている。107・108は浅鉢と思われるもので、縄文はなく細目の沈線が全体に施されている。108は底部の4箇所張り出しをもち、台付状につくられている。その他の土器の文様については簞状の文様をもつ115・119、波頭状の文様をもつ117・118・122、渦巻文をもつ119・120・123・124、楕円・中・円形

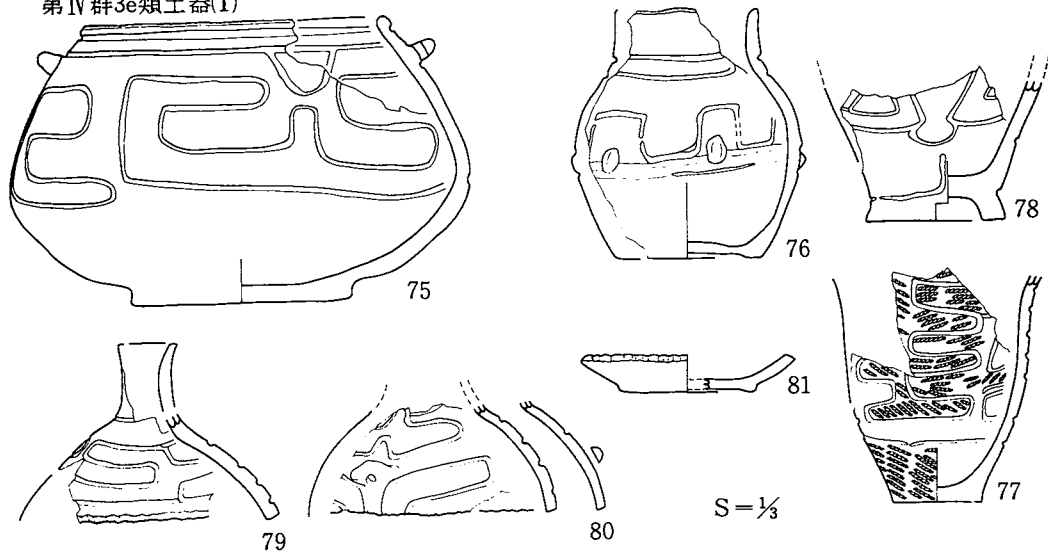
第IV群3c類土器



第IV群3d類土器

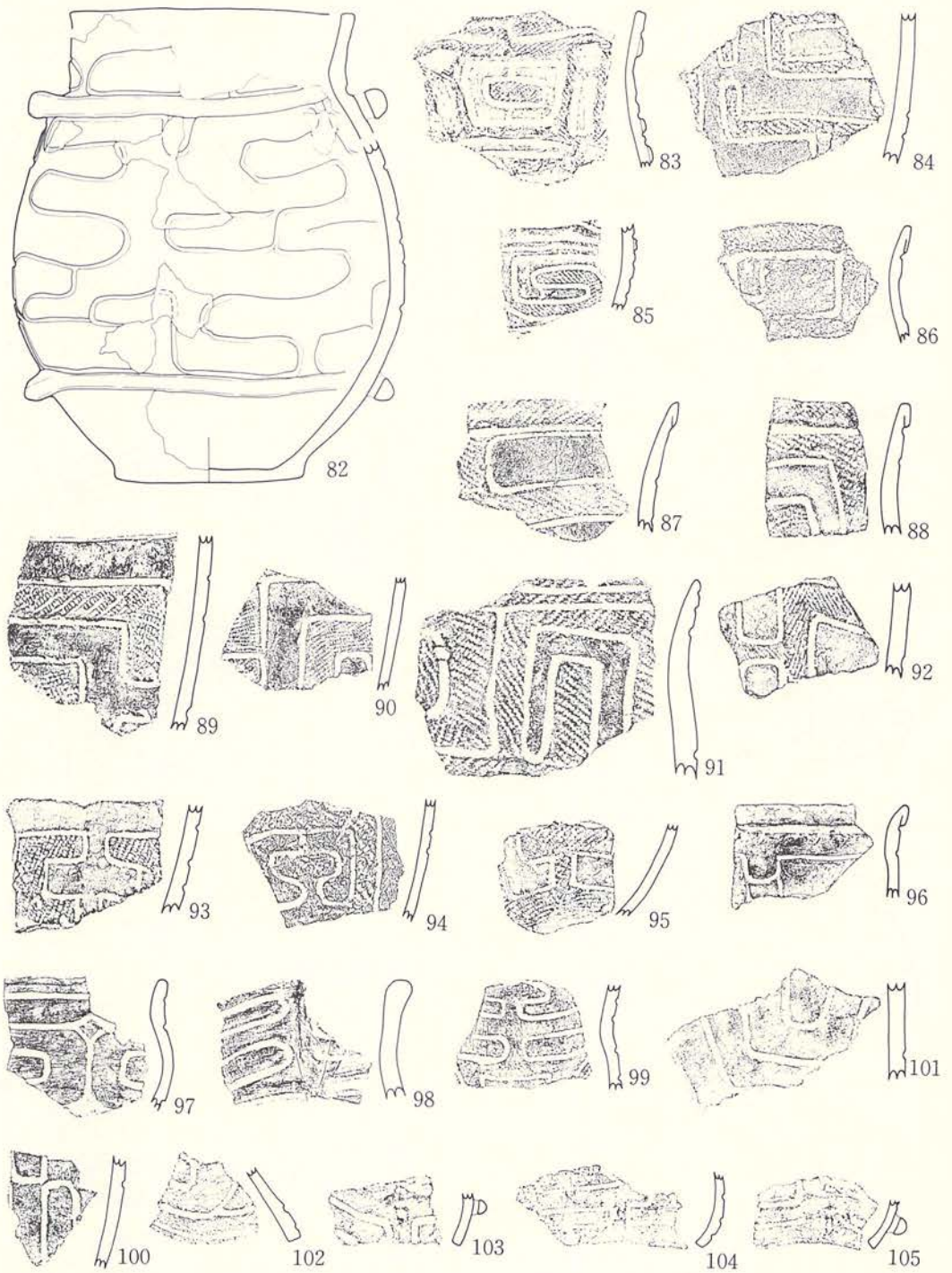


第IV群3e類土器(1)



第71図 遺構外出土土器(4)

第IV群3e類土器(2)

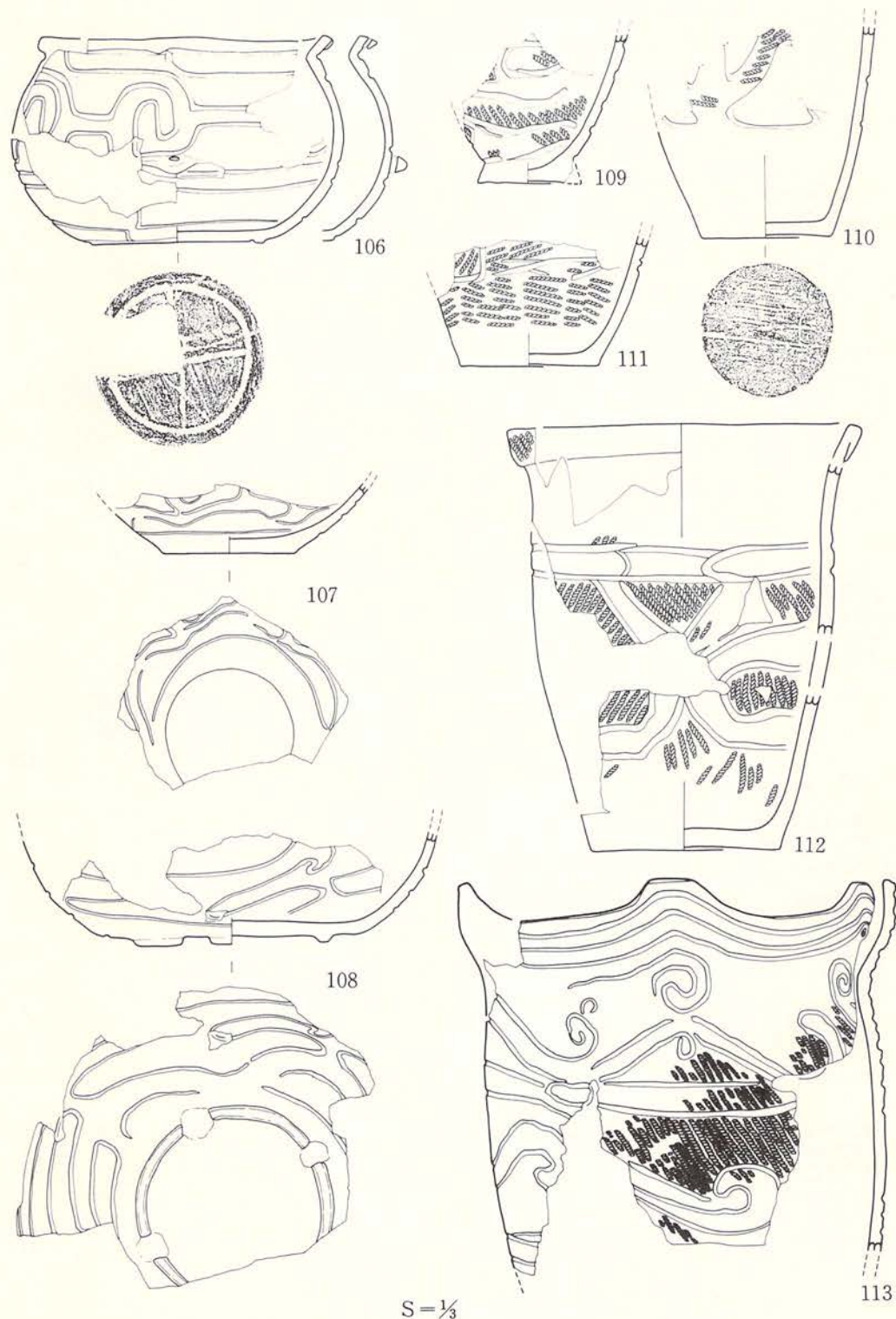


S = 1/3

第72図 遺構外出土土器(5)

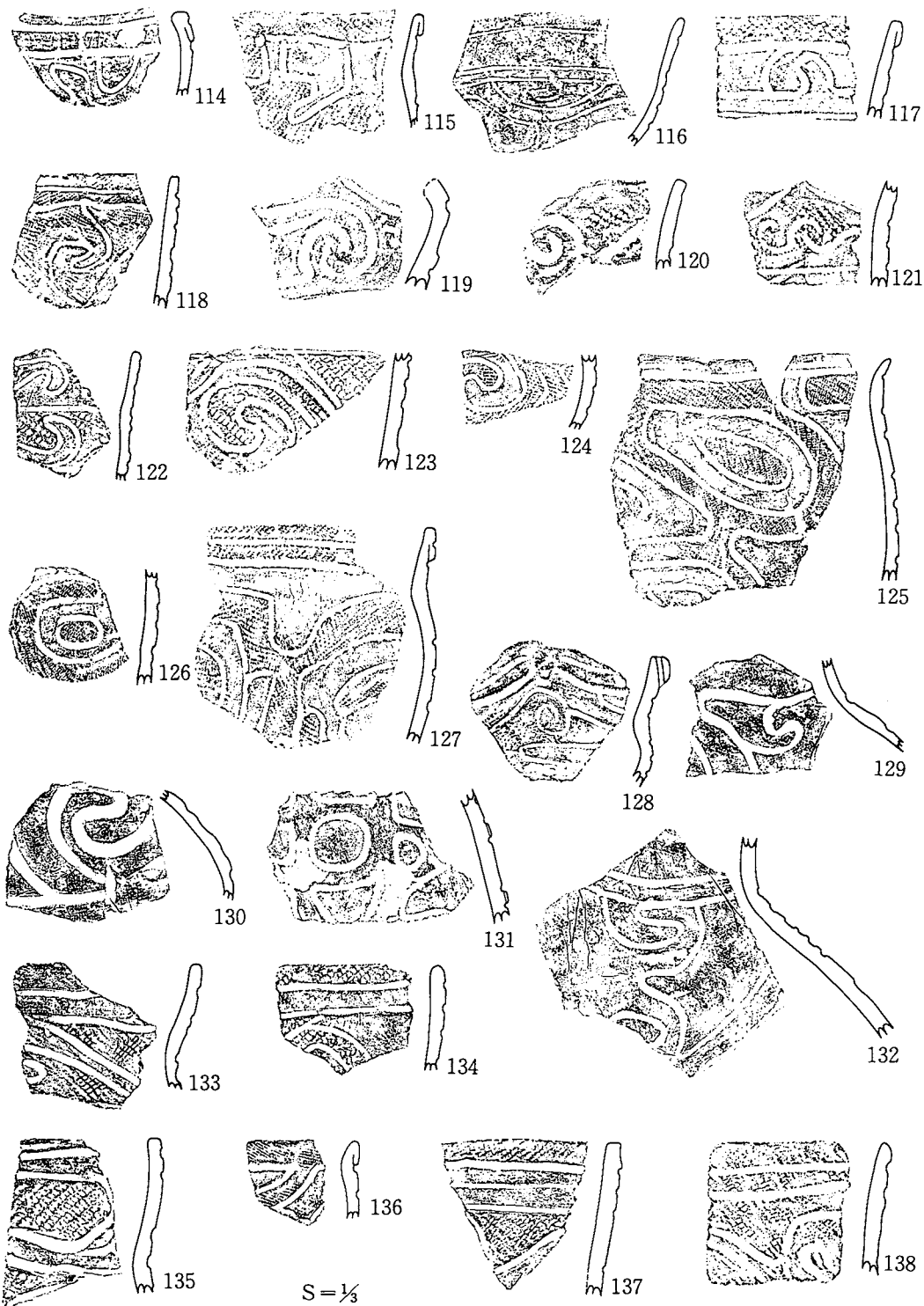


第IV群3f類土器(1)



第73図 遺構外出土土器(6)

第IV群3f類土器(2)



第74図 遺構外出土土器(7)

文をもつ125・126・131などがあり、これらの文様は器面全体に展開されるものと思われる。114～132は壺の上部破片で、131は円形や三角形の小区画と隆帯が施されている。133～138は鉢及び深鉢の口縁部破片で、口縁に平行する1～3条の平行沈線が描かれる。

#### 第V群土器（第75図139～第78図200、写真図版66～69）

本群はI群～IV群以外の縄文粗製土器及び底部破片を一括したものである。以下の1～3類に分類した。

1類 複合口縁をもつもの(139～160) 口縁部～底部まで復元できたもの2点、口縁部～体部の一部が復元できたもの3点、他は破片である。器種は深鉢及び鉢である。口縁部の形状は頸部から強く外反する139・157・160、緩く外反する146・149・159、直立乃至内湾気味を呈する142・150・154などに分けられる。複合口縁には無文のもの、原体側面圧痕が施される147、網目状文が施される144・148、体部施文と同じ原体により斜縄文が施される140・142・151・154～156、横位の沈線が施される152・153と多種多様である。

#### 2類 複合口縁をもたないもの(161～181)

a 横位の沈線または頸部に磨消文が施されるもの(161～168) 161は口縁部が外反するもので、頸部に幅広い磨消しが施される。口縁部と体部の斜縄文(RL)は原体の回転方向を異にして施文している。平行する横位の沈線をもつものは、沈線間に縄文が施文される162・164、沈線間が無文の163・167、縄文施文後に沈線が施される166・168などがある。いずれも器種は深鉢及び鉢である。

b 地文のみ施文されるもの(169～181) 179は体部に膨らみをもち頸部がややしまる器形を呈している。他の口縁部は内傾または直立気味を呈する171・180と外傾するものがある。地文は網目状文、単節斜縄文、擦糸文、無節斜縄文等がある。181は地文施文後に縦位の綾絡文を施している。

#### 3類 粗製土器の体部～底部破片(182～200)

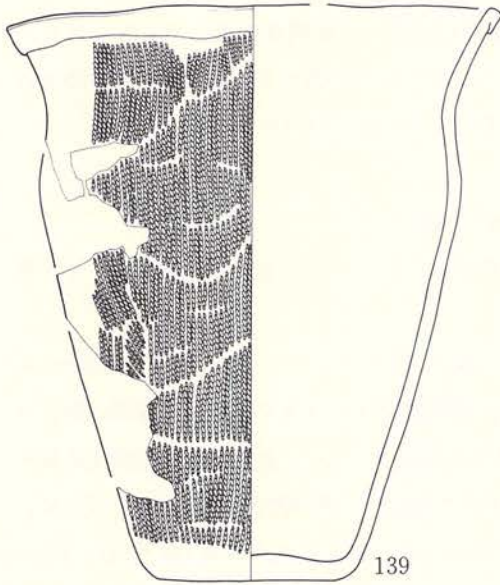
a 底部圧痕をもたないもの(182～185) 182は深鉢で底部から直線的に外傾して立ち上がり、体部に単節斜縄文(LR)を施文している。183～185は小型土器で、185の底部はつまみ出すようにしてつくられ、高台状を呈して安定感がある。

b 網代痕をもつもの(186～196) 底部圧痕の大半は網代痕であり、186に代表されるように横の条に対し縦の条を交互に編むものが殆んどである。器種は底径から判断すると多くは深鉢と思われる。

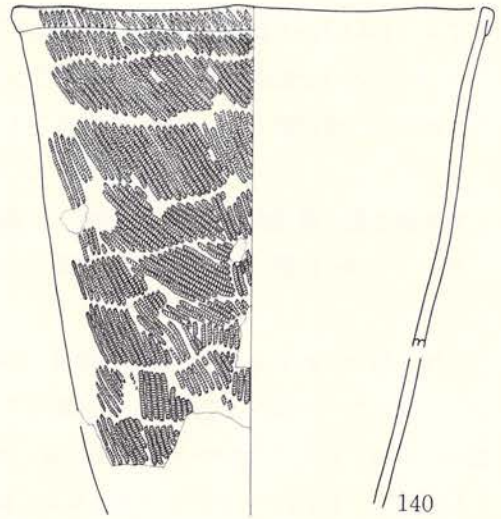
c 笹葉状の圧痕をもつもの(197・198) 197は莖状のものを直交し重ねた圧痕である。

d 木葉痕をもつもの(199・200) 200は小型の浅鉢の底部と思われるもので、内面に曲線

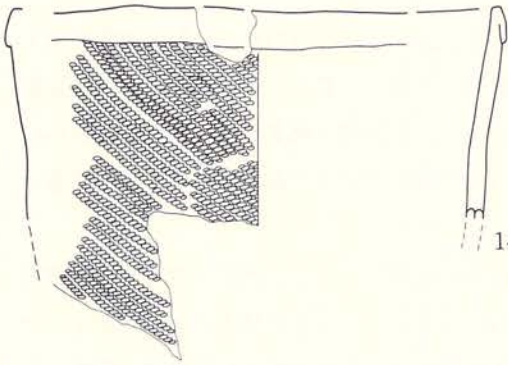
第V群1類土器(1)



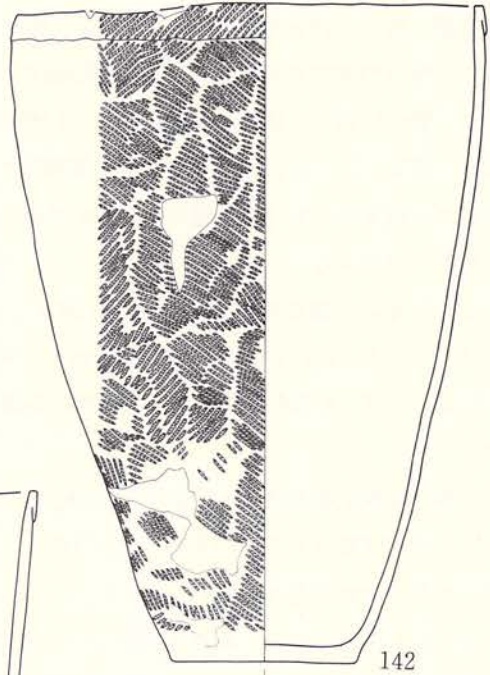
139



140



141



142



143



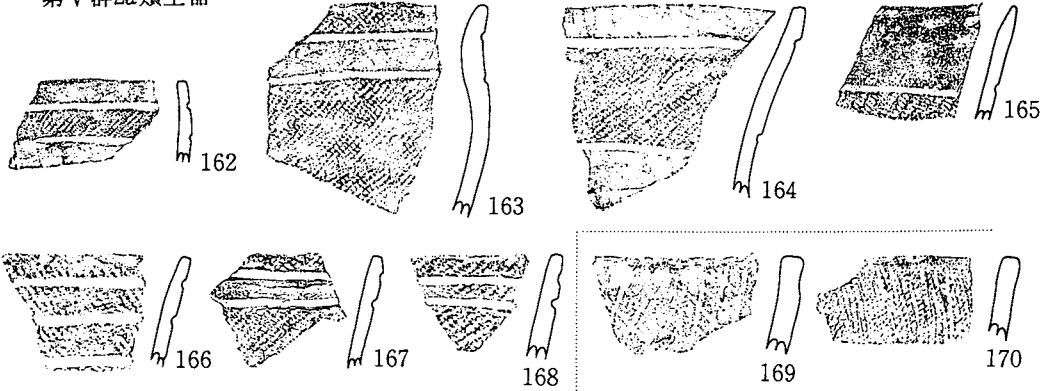
141・142はS = 1/3  
139・143はS = 1/4  
140はS = 1/2

第75図 遺構外出土土器(8)

第V群1類土器(2)



第V群2a類土器



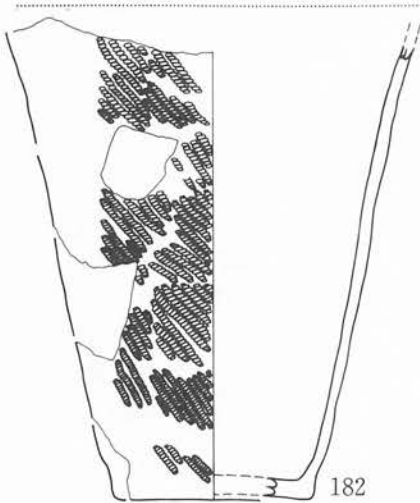
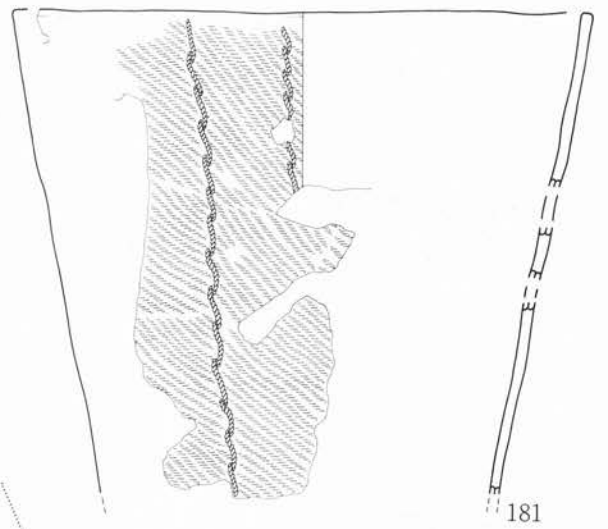
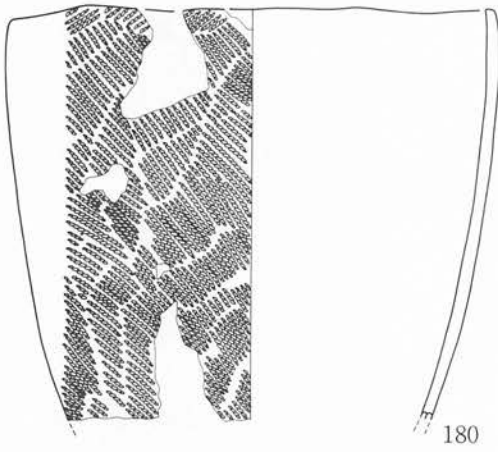
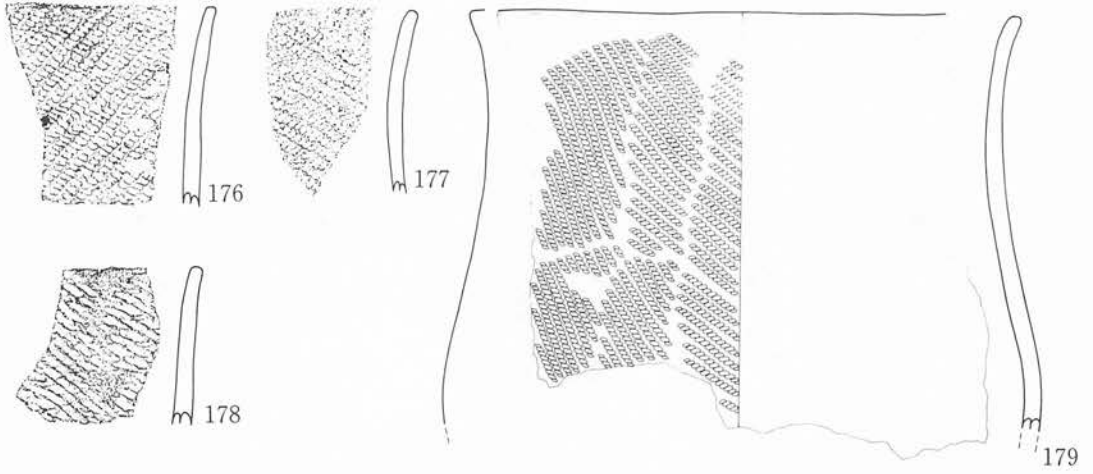
第V群2b類土器(1)



S=1/2

第76図 遺構外出土土器(9)

第V群2b類土器(2)



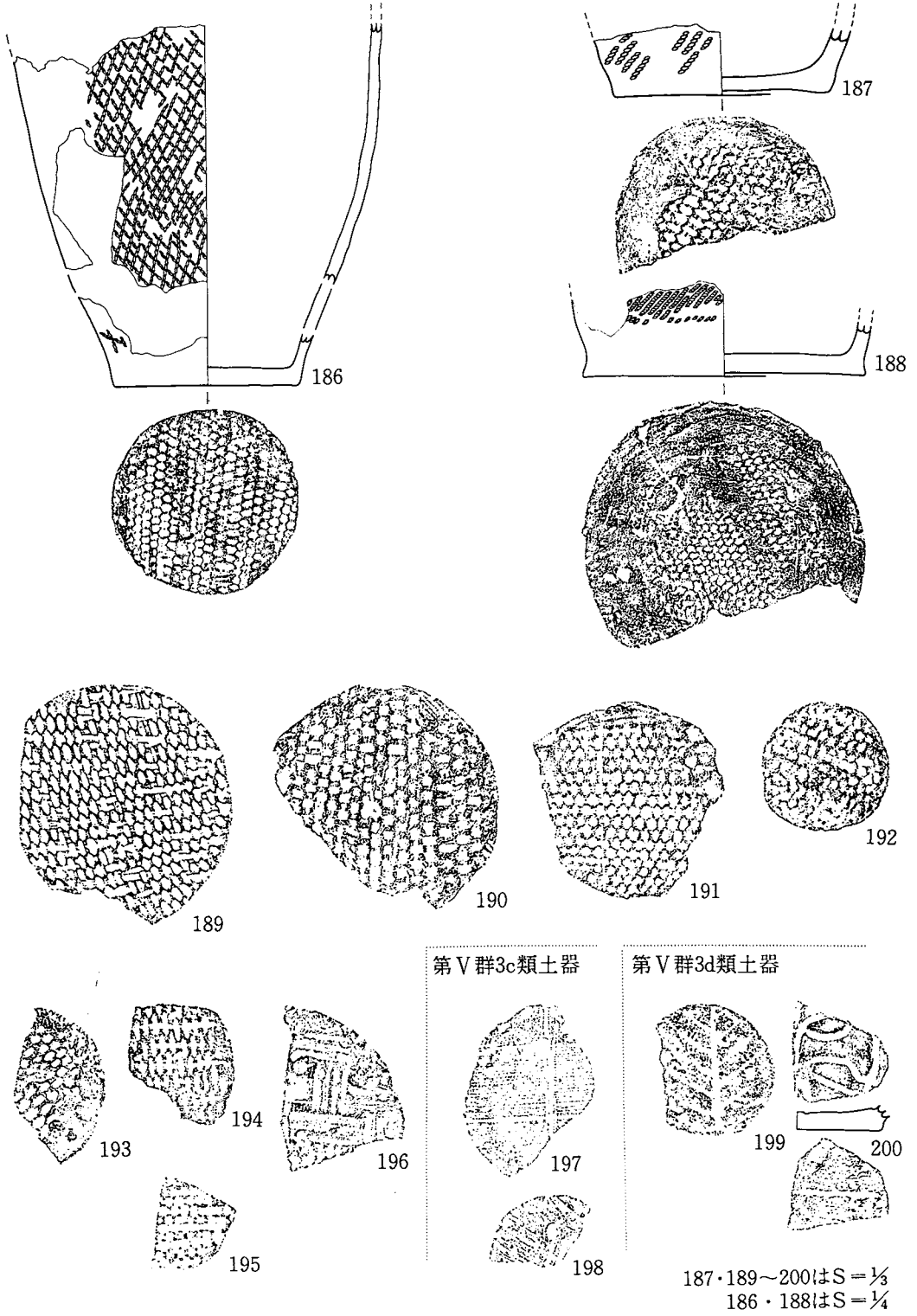
第V群3a類土器



176~179・183~185はS=1/3  
180~182はS=1/4

第77図 遺構外出土土器(10)

第V群3b類土器



第78図 遺構外出土土器(11)

の沈線文が施文され、丁寧にナデ調整されている。

#### 第Ⅵ群土器（第79図201～212、写真図版70）

本群はミニチュア様の土器を一括したものである。以下の1・2類に分類した。

1類 沈線が施されるもの（201・202） 201は体部上半で内傾し、口径がやや狭くなる。口縁部と底部の左右両側には小孔が穿かれている。口縁には長楕円文、体部には方形区画文及び逆「コ」の字状の区画文が描かれている。202は底部が丸味をもち不安定なつくりを呈している。体部下半で屈曲し、体部は内傾し口径は小さくなる。文様は細い沈線で線画のように渦巻文が横位に連続施文されている。いずれも焼成は堅緻である。

2類 無文のもの（205・208・210～212） 205は上底状を呈するもので、胎土に砂粒の混入が多く焼成は脆い。208は浅鉢状を呈するもので、底部が欠損している。器厚は全体に厚く、内面及び口唇部は丁寧にナデ調整されている。粗砂が多く焼成は脆い。211は底部が張り出すようにつくられ、口縁部直下と体部下端にそれぞれ対となる4個の小孔が穿かれている。口縁部直下は真横から、体部下端は斜め上方から穿かれている。器面調整は良く、焼成は堅緻である。212は鉢形状を呈し、口縁は複合口縁である。底部には小孔があり、焼成後に穿孔されたものと思われる。内外面には黒斑があり、胎土に砂粒を多く含み焼成は脆い。

#### 第Ⅶ群土器（第79図205～215、写真図版70）

本群は弥生土器を一括したものである。施文等により1～3類に分類した。

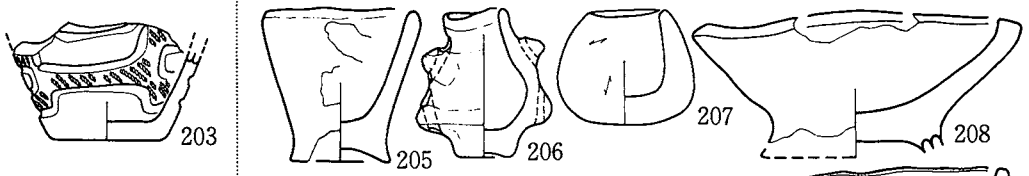
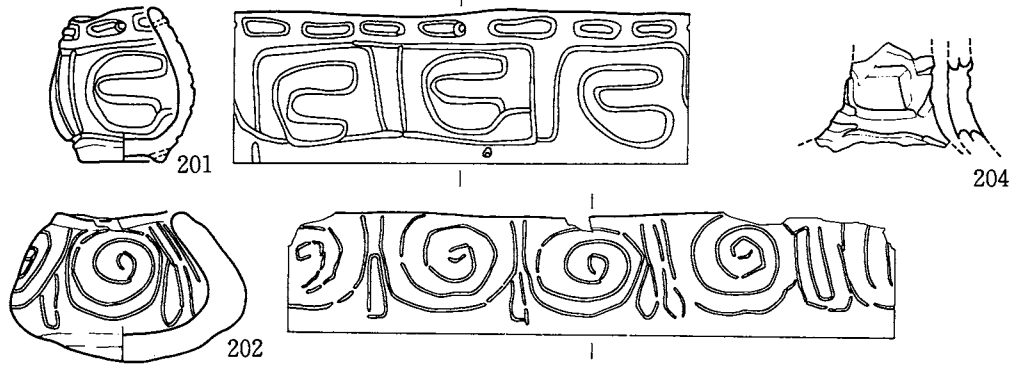
1類 横位の平行沈線をもつもの（213～217） 口縁に平行するように2～4条の細い沈線が横位に施されている。沈線間に連続刺突を施すものは213・214がある。215は壺の体部破片である。器厚は4mm～5mmと薄手で、小礫や砂粒の混入が多い。

2類 撚糸文が施文されるもの（218～222） 218は小型鉢の底部、他は鉢の口縁部と体部破片である。218は細い斜縄文を施文後に撚糸文を疎らに施し、底面には縄文原体の圧痕がある。219の口縁部は撚糸文を縦位に、体部は斜位に施している。220・222は斜位に施文し羽状の文様をつくり、220は綾絡文を横位に施文して文様に変化をもたせている。本類も1類と同様に器厚は薄く、全体に粗砂や小礫の混入が多いものの焼成は堅緻である。

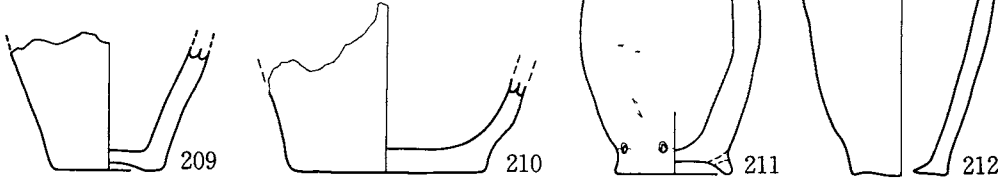
3類 原体圧痕が施されるもの（213） 小型鉢の体部下半と思われるものである。縦位に平行する2条の原体側面圧痕文を施し、その後に綾絡文を横位に施文している。器面調整は丁寧に粗砂の混入は少ないが、上記の1類や2類に比べて焼成は脆い。



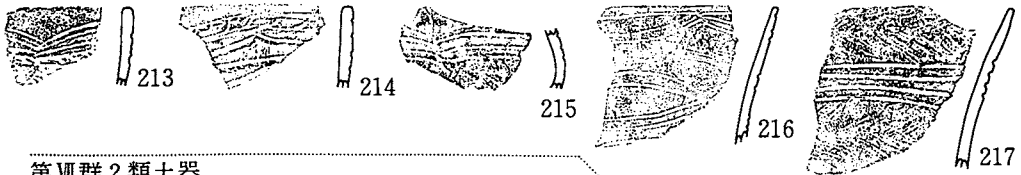
第VI群 1類土器



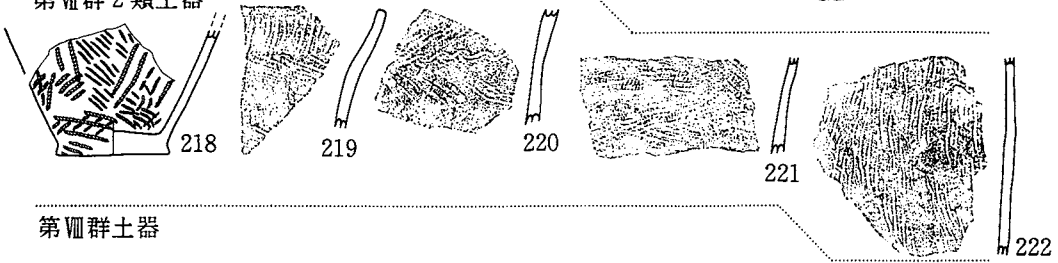
第VI群 2類土器



第VII群 1類土器

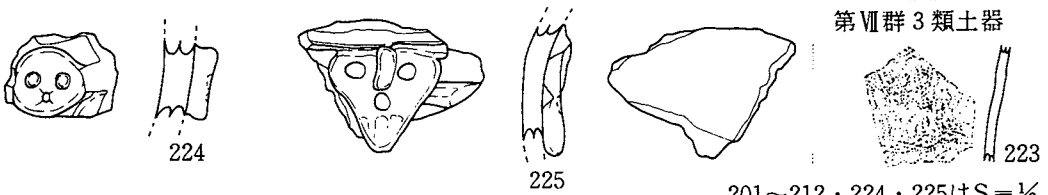


第VII群 2類土器



第VIII群土器

第VII群 3類土器



201~212・224・225はS=1/2  
213~223はS=1/3

第79図 遺構外出土土器(12)

## 第Ⅷ群土器（第79図224・225、写真図版70）

本群は獣面及び人面付土器を一括したものである。224は獣面状突起と思われる破片でやや楕円形を呈し、目と口は円形刺突文が施されている。また、口を模倣した円形刺突文の上には「X」字状の細い刻みがある。大きさは長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ7mmである。225は人面付土器破片である。逆正三角形を呈する顔面には、棒状工具で円形刺突し目と口を表現している。鼻は一部剝落しているが、長方形の隆帯を貼付している。大きさは長さ3cm、幅3cm、厚さ5mm程である。胎土には粗砂が多く含まれ、焼成は堅緻である。

## 2. 土製品

土製品は鐸形土製品1点、耳飾り2点、<sup>きのこ</sup>茸形土製品4点、蓋形土製品3点、円盤状製品62点、器種不明なものが2点出土している。大半のものは縄文時代後期に属すると思われるもので占められている。以下順に概略を述べることにする。

### (1) 鐸形土製品（第80図1、写真図版71）

1は一部欠損するが所謂釣鐘状のつまみを持つもので、胴部に細い沈線で平行沈線文と曲線文を描いている。器高は3.3cm、幅2.2cmと小形であるが、比較的精巧なつくりをしている。焼成は良く胎土に粗砂と雲母を含む。

### (2) 耳飾り（第79図2・3、写真図版71）

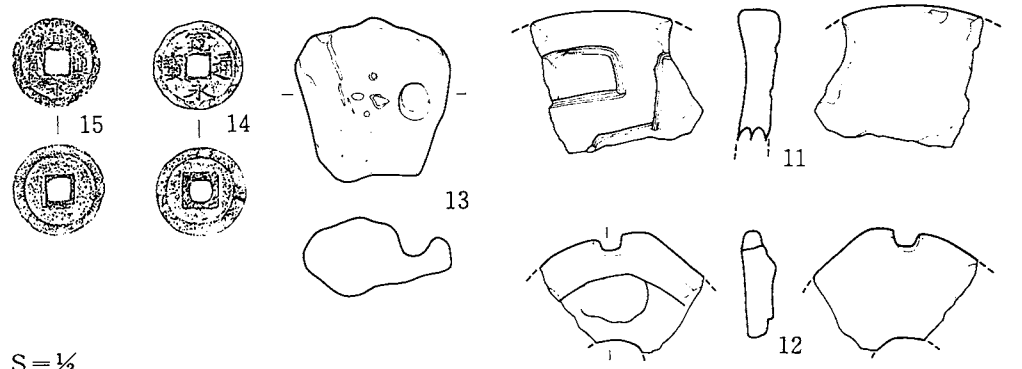
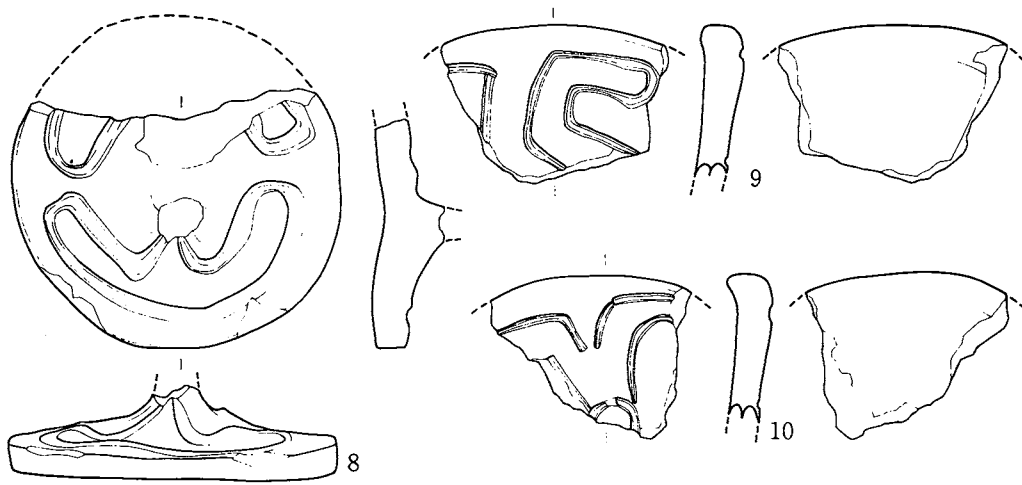
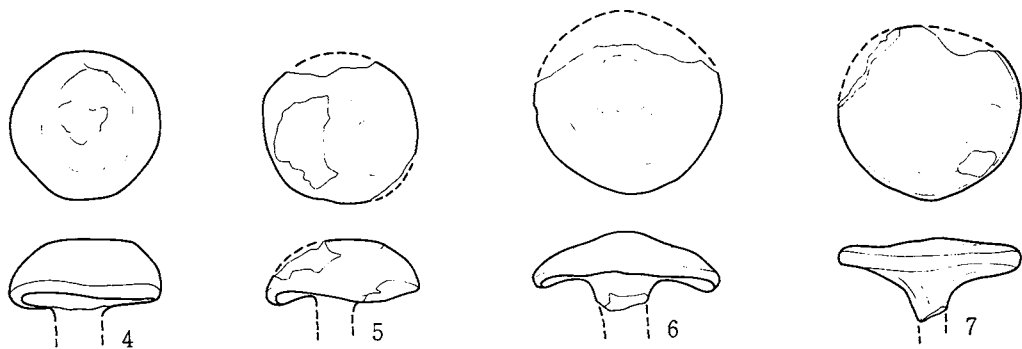
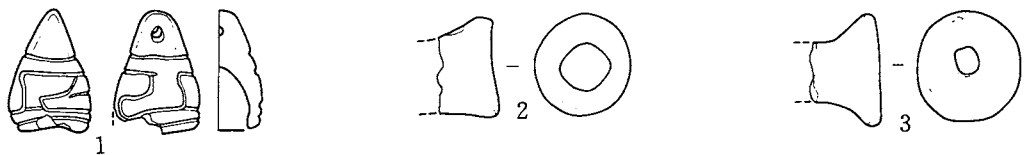
2・3は半欠品であるが滑車形耳飾りと思われる。外径は2.5cm～2.7cmを測り、中央には方形気味の孔がある。焼成は良く丁寧につくられ、胎土に粗砂と雲母を含む。

### (3) <sup>きのこ</sup>茸形土製品（第80図4～7、写真図版71）

茸を模倣したもので茎の部分はいずれも欠損している。笠の形態は半円形を基調とする4～6とやや平らな7がある。笠の径は4cm～5cmで、胎土には他の土製品類に比べて雲母と粗砂を多く含んでいる。

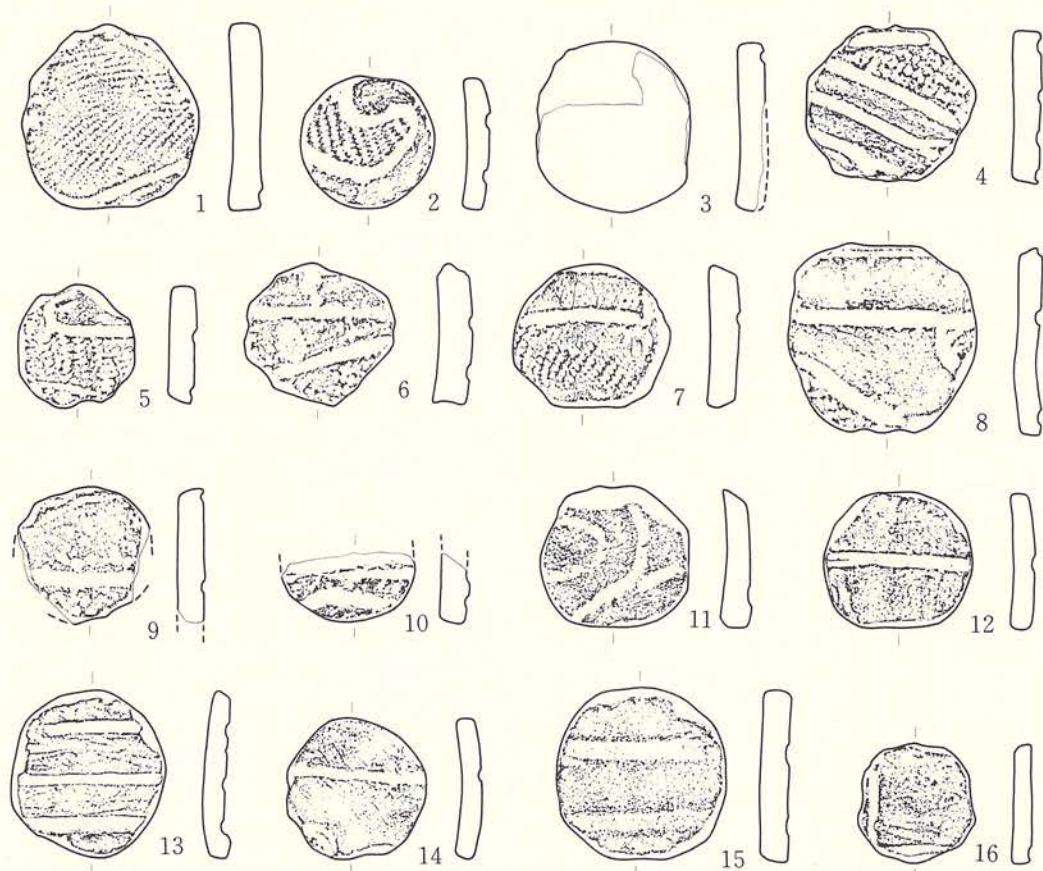
### (4) 蓋形土製品（第80図8～11、写真図版71）

8は3分の1ほど欠損しているが、径約8.7cm、厚さ9mmである。表面はやや太めの沈線で曲線文を描き、丁寧にミガキ調整を施している。裏面は中央部が弓状に窪んでいる。つまみの部分は欠損しているため不明であるが、現存部位から橋状を呈すると思われる。表と裏両面の一部には赤色顔料（ベンガラ）の付着が見られる。9～11の3点は同一個体片と思われるもので、表面は沈線文で文様が描かれ、ミガキ調整が両面に丁寧に施されている。胎土に含まれる粗砂の量は8に比べて多く、雲母の量は少ない。



S = 1/2

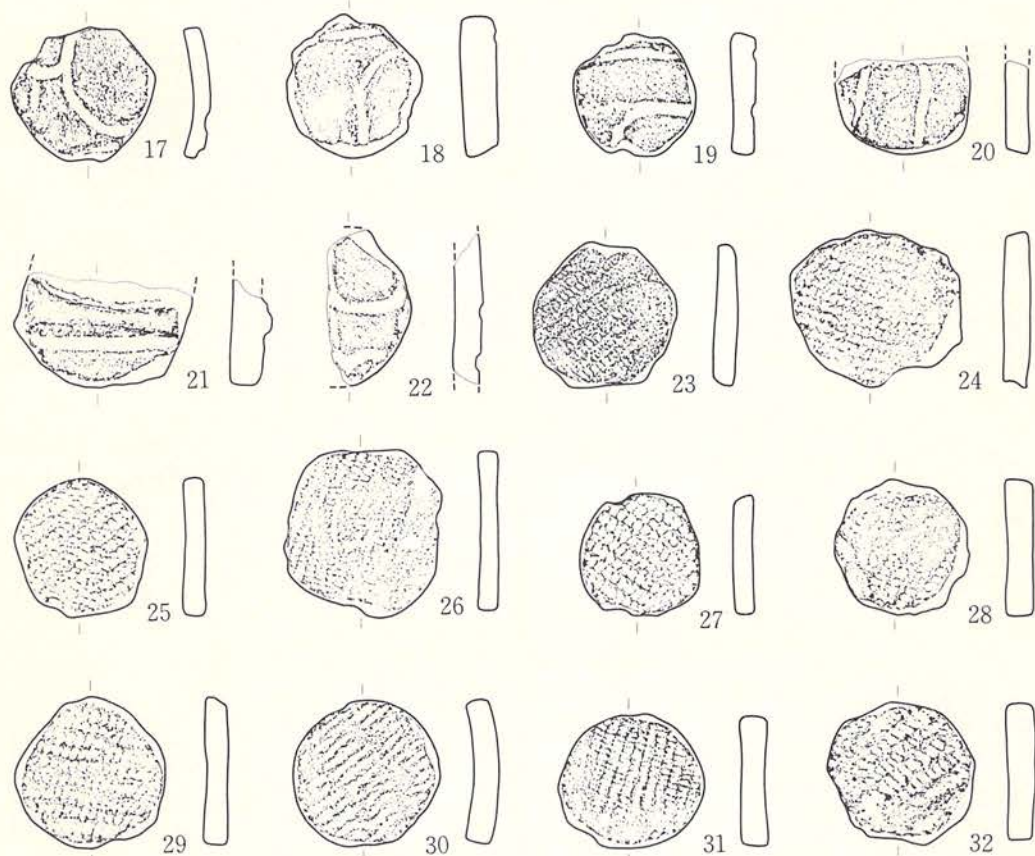
第80図 土製品・古銭



S = 1/2

No	出土地点	写 真 図 版	計 測 値				焼 成	胎 土	色 調	施 文	備 考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
1	B II・I	72-1	4.8	4.8	0.8	23.75	普通	砂粒多い	7.5YR% にぶい褐色	沈線、斜縄文(LR)	
2	B II f 9-IV	72-2	3.4	3.5	0.6	9.05	良い	石英砂含む	7.5YR% 褐色	曲線沈線、斜縄文(RL)	
3	B III e 6-III	72-3	4.4	4.1	0.6	13.75	悪い	砂粒多い	7.5YR% 橙色	無文	表面剥落
4	C III - III	72-4	4.0	4.5	0.7	17.35	良い	ち 密	5YR% 赤褐色	平行沈線、斜縄文(LR)	
5	C III h 4-III	72-5	3.2	3.1	0.7	8.20	良い	ち 密	5YR% 明赤褐色	沈線、縦縄文(RL)	
6	C III - III	72-6	3.7	4.0	0.9	16.10	悪い	粗砂多い	7.5YR% にぶい褐色	沈線、斜縄文(LR)	
7	D III d - III	72-7	3.7	4.1	0.7	14.15	良い	ち 密	5YR% 明赤褐色	沈線、斜縄文(LR)	
8	D III a 8-III	72-8	4.9	5.0	0.6	20.15	悪い	石英砂多い	10YR% にぶい黄褐色	沈線、磨消、斜縄文(LR)	
9	C III - III	72-9	3.5	(3.5)	0.7	9.85	普通	石英砂含む	7.5YR% 橙色	沈線、斜縄文(LR)	外面煤付着
10	C III - III	72-10	(1.8)	3.5	0.7	3.80	普通	ち 密	10YR% にぶい黄褐色	沈線	欠 損 品
11	B II c 10-IV	72-11	3.7	3.9	0.6	12.70	良い	粗砂多い	7.5YR% 明褐色	曲線沈線	丹 塗 り
12	B III - I	72-12	3.5	3.9	0.6	9.40	良い	石英砂含む	10YR% にぶい黄褐色	横位沈線	
13	B III - I	72-13	4.4	4.1	0.6	13.25	良い	ち 密	5YR% にぶい赤褐色	横位平行沈線	内面黒色
14	B III - IV上	72-14	3.7	3.7	0.5	9.55	良い	砂粒多い	5YR% 明赤褐色	沈線	
15	B III c 7-III	72-15	4.5	4.5	0.8	19.95	悪い	砂粒多い	10YR% 明黄褐色	横位平行沈線	
16	D III d 3-IV	72-16	3.1	3.1	0.5	5.80	良い	砂粒多い	10YR% 明黄褐色	沈線	

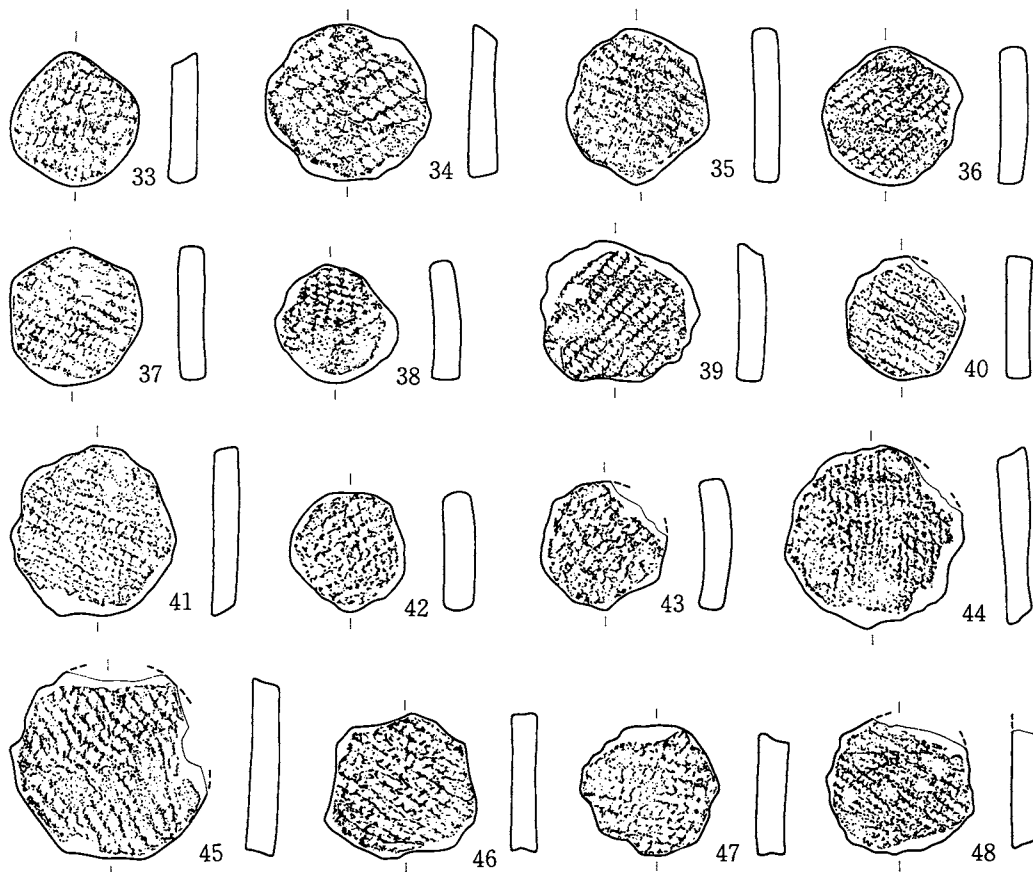
第81図 円盤状土製品(1)



S = 1/2

No	出土地点	写真 図版	計測値				焼成	胎土	色調	施文	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
17	D III d - I	72-17	3.5	3.8	0.5	6.30	悪い	砂粒多い	7.5YR 6/8 橙色	沈線	内面調整
18	トレンチ南-I	72-18	3.8	3.6	0.9	13.70	普通	砂粒多い	10YR 5/6 灰黄褐色	沈線	
19	C IV i 7-III下	72-19	3.2	3.2	0.6	7.55	悪い	砂粒多い	10YR 6/8 にぶい黄褐色	沈線	
20	D III e 7-IV	72-20	(2.5)	3.6	0.6	6.30	悪い	砂粒多い	10YR 6/8 にぶい黄褐色	沈線	欠損品
21	B III b 5-IV	72-21	(3.0)	4.7	0.9	14.10	良い	砂粒やや多い	7.5YR 6/8 にぶい褐色	沈線・隆帯	欠損品
22	D III a 7-III	72-22	(4.1)	(2.2)	0.7	7.05	良い	小礫・石英砂含む	10YR 6/8 にぶい黄褐色	沈線	欠損品
23	A III-IV上	72-23	3.8	3.8	0.6	11.50	悪い	砂粒多い	10YR 6/8 にぶい黄褐色	斜縄文 (R L縦)	外面煤付着
24	B II - I	72-24	4.1	4.5	0.7	15.60	良い	石英砂含む	7.5YR 6/8 にぶい橙色	斜縄文 (L R縦)	内面黒色
25	B II - I	72-25	3.6	3.5	0.6	9.20	良い	砂粒やや多い	10YR 6/8 にぶい黄褐色	斜縄文 (R L縦)	
26	B II h -IV	72-26	4.4	4.1	0.5	12.20	普通	砂粒・石英砂多い	10YR 6/8 にぶい黄褐色	斜縄文 (R L縦)	
27	B II c 10-IV	72-27	3.2	3.2	0.5	7.05	普通	粒砂多い	10YR 6/8 にぶい黄褐色	斜縄文 (L R縦)	
28	B III c 5-III	72-28	3.6	3.6	0.7	11.25	良い	石英砂含む	5 YR 6/8 にぶい赤褐色	斜縄文 (R L縦)	
29	B II d 9-IV	72-29	3.9	3.9	0.6	11.35	良い	砂粒多い	10YR 6/8 にぶい黄褐色	斜縄文 (L R縦)	
30	B II e 10-IV	72-30	3.9	3.8	0.7	12.05	普通	ち密	7.5YR 6/8 橙色	斜縄文 (L r横)	
31	B II i 9-III	73-31	3.5	3.9	0.7	11.95	悪い	粗砂多い	7.5YR 6/8 にぶい褐色	斜縄文 (R L縦)	
32	C III-III	73-32	3.7	3.8	0.7	12.85	普通	粗砂・石英砂多い	2.5Y 6/8 浅黄色	斜縄文 (R L縦)	

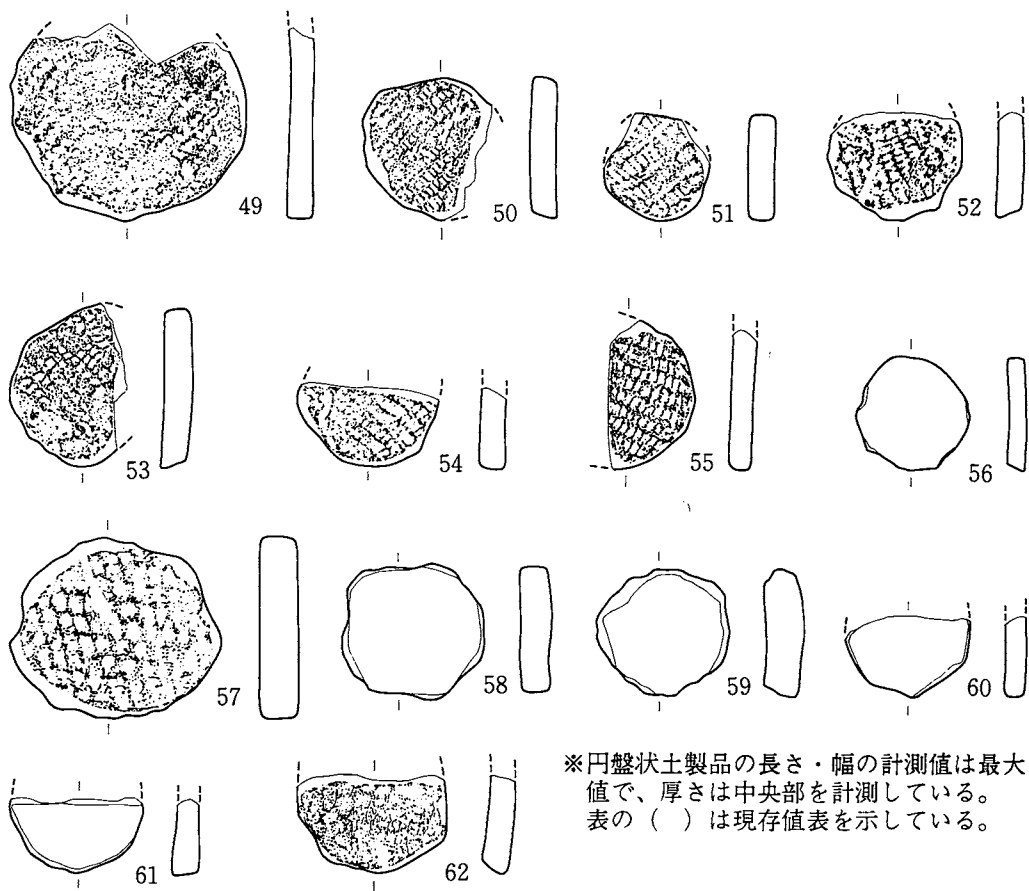
第82図 円盤状土製品(2)



S = 1/2

No	出土地点	写真 図版	計測値				焼成	胎土	色調	施文	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
33	C III-III	73-33	3.5	3.4	0.7	10.05	良い	小礫含む	7.5YR% にぶい褐色	横縄文 (LR)	
34	C III d-e6-粗	73-34	4.1	4.4	0.7	15.70	良い	小礫含む	7.5YR% にぶい褐色	斜縄文 (RL縦)	
35	C III i 2-III	73-35	4.0	3.7	0.6	11.90	良い	砂粒多い	7.5YR% にぶい褐色	斜縄文 (LR縦)	
36	C III j 5-IV	73-36	3.6	3.7	0.7	10.95	良い	小礫含む	5YR% にぶい赤褐色	斜縄文 (LR縦)	
37	D II-I	73-37	3.6	3.5	0.7	10.75	良い	石英砂 金雲母含む	7.5YR% にぶい橙色	斜縄文 (RL横)	
38	D III-III	73-38	3.2	3.2	0.7	7.90	悪い	石英砂含む	10YR% 明黄褐色	斜縄文 (LR横)	
39	D III a 7-III	73-39	3.6	4.2	0.7	12.00	良い	小礫、粗砂含む	7.5YR% 橙色	斜縄文 (RL縦)	
40	D III a 7-III	73-40	3.2	3.1	0.6	7.35	良い	粗砂多い	5YR% 暗赤褐色	斜縄文 (LR縦)	一部欠損
41	D III c 8-III下	73-41	4.4	4.4	0.7	15.70	良い	粗砂、石英砂多い	5YR% にぶい赤褐色	斜縄文 (LR縦)	
42	D III d-I	73-42	3.1	3.1	0.8	8.15	悪い	砂粒多い	2.5Y% にぶい黄色	斜縄文 (LR横)	外面煤付着
43	B II-I	73-43	3.4	3.4	0.7	8.60	普通	粗砂多い	5YR% にぶい赤褐色	斜縄文 (RL横)	一部欠損
44	B II d 9-IV下	73-44	4.8	4.7	0.7	17.55	悪い	砂粒多い	5YR% 橙色	捺糸文 (RL)	一部欠損
45	B II i-III	73-45	(4.9)	(5.1)	0.8	23.85	良い	小礫含む	5YR% 明赤褐色	斜縄文 (RL横)	一部欠損
46	C III-III	73-46	3.8	3.9	0.7	12.05	普通	砂粒多い	10YR% にぶい黄褐色	斜縄文 (LR縦)	
47	D III-III	73-47	3.4	3.6	0.8	11.65	良い	粗砂多い	7.5YR% 橙色	斜縄文 (LR縦)	
48	D III b 7-III	73-48	(3.6)	3.8	0.7	10.75	悪い	石英砂含む	7.5YR% にぶい橙色	斜縄文 (LR縦)	一部欠損

第83図 円盤状土製品(3)



※円盤状土製品の長さ・幅の計測値は最大値で、厚さは中央部を計測している。  
表の( )は現存値表を示している。

S = 1/2

No	出土地点	写真 図版	計測値				焼成	胎土	色調	施文	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)					
49	C III j 3-I	73-49	(5.2)	6.2	0.7	25.40	悪い	小礫含む	7.5YR% にぶい褐色	斜縄文 (R L縦)	煤附着
50	D III b 7-III	73-50	3.7	(3.4)	0.7	10.10	普通	粗砂、石英砂含む	7.5YR% にぶい黄褐色	斜縄文 (R L縦)	欠損品
51	D III g 3-IV	73-51	2.8	2.8	0.7	6.20	良い	ち密	7.5YR% にぶい褐色	斜縄文 (R L縦)	一部欠損
52	D III g 3-IV	73-52	(2.8)	3.6	0.7	8.30	普通	粗砂含む	7.5YR% にぶい橙色	斜縄文 (L R縦)	欠損品
53	D II - I	73-53	4.3	(3.1)	0.8	9.10	普通	粗砂多い	10YR% にぶい黄褐色	斜縄文 (L R縦)	欠損品
54	C III j 7-粗	73-54	(2.1)	3.8	0.7	6.20	良い	小礫含む	7.5YR% にぶい褐色	斜縄文 (L R縦)	欠損品
55	D III a 5-III	73-55	(3.9)	(2.3)	0.6	6.10	悪い	砂粒多い	10YR% にぶい黄褐色	斜縄文 (L R縦)	欠損品
56	B II - I	73-56	3.0	3.0	0.5	5.75	良い	ち密	2.5YR% 橙色	無文	内面調整
57	B III f 5-I	73-57	4.7	5.6	1.0	28.85	普通	粗砂多い	2.5YR% 明赤褐色	網代痕	底部
58	C III g 2-III	73-58	3.6	3.8	0.8	14.45	普通	砂粒、石英砂多い	2.5YR% 明赤褐色	無文	底部
59	D III g 3-IV	73-59	3.3	3.5	1.0	11.65	普通	粗砂含む	10YR% にぶい黄褐色	無文	
60	D III - I	73-60	(2.1)	3.8	0.5	4.25	普通	石英砂多い	5 YR% 明赤褐色	無文	欠損品
61	C III i 5-III	73-61	(2.0)	3.5	0.6	4.10	悪い	粗砂含む	10YR% にぶい黄褐色	無文	欠損品
62	D III d - I	73-62	(2.5)	3.9	0.7	10.20	良い	粗砂、石英砂含む	5 YR% 赤褐色	磨消し縄文	欠損品

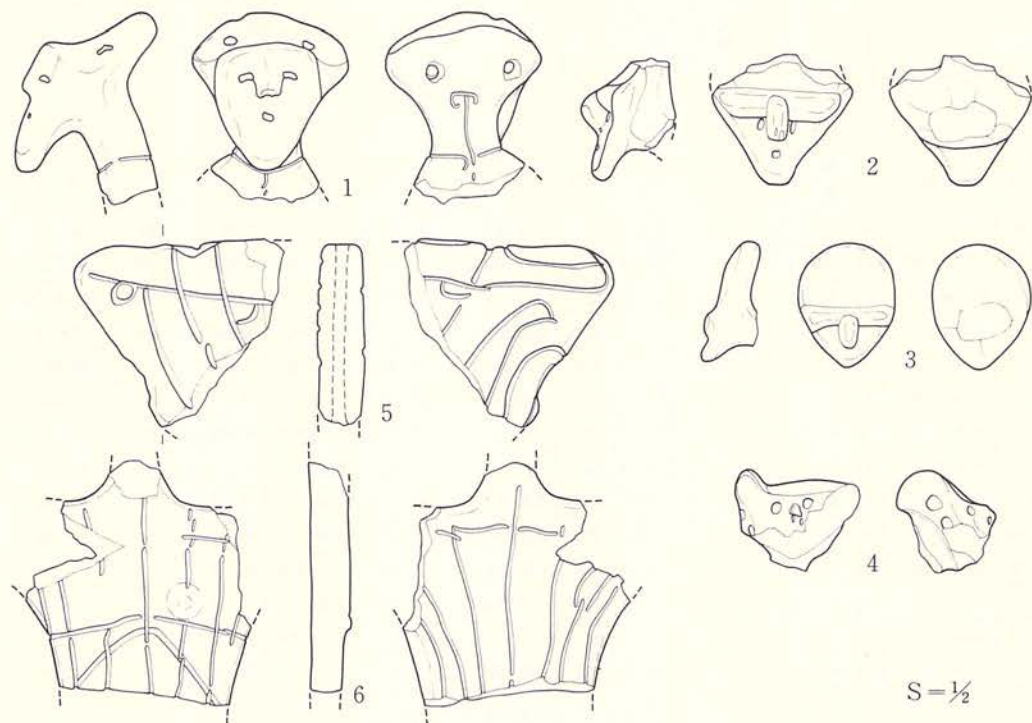
第84図 円盤状土製品(4)

(5)円盤状土製品 (第81~84図、写真図版72・73)

縄文土器破片を円盤状に打ち欠いたもので、土製メンコ・土製円盤などとも呼ばれている。出土した62点の内、完形品は42点である。形状は円形を基本としながらも楕円形状や多角形状を呈するものがある。大きさは径3cm~4cm内外のものが半数以上を占め、重さは6g~13gに集中している。周縁部の整形は打ち欠きだけのものが23点で、残りの39点は全周ないし一部周縁を磨っている。土器破片の使用部位は57・58が底部であり、ほかは鉢形土器の体部と思われる。57は網代痕があり、58は無文である。1~22は沈線文・単節縄文などの文様で構成され、11の表面には赤色顔料(ベンガラ)の付着が認められる。23~55は全体の半数以上を占める単節・無節縄文のものである。56・59・61は無文研磨で、62は磨消縄文である。また、表面に煤が付着するのは9・23・42・49の4点である。縄文時代後期の土器片が多くを占めている。

(6)器種不明な土製品 (第80図12・13、写真図版71)

器種が不明なものを一括している。12は周縁部に刻み目を施し、縁辺寄りに隆帯が巡る。その内側には粘土を指頭圧痕した貼付がある。中央部は欠損しているが、円孔され周縁部を磨いている。13は長さ4.3cm、幅4cm、厚さ2.1cm程の粘土塊に径8mm、深さ6mmの刺突を施している。いずれも用途は不詳である。



第85図 土偶



### 3. 土偶 (第85図1～6、写真図版71)

顔面部と体部の破片が6点出土している。1は顔面が逆三角形で目と口は小さな刺突孔で、鼻は隆帯で表現されている。頭部は扁平で上下に貫通する小孔が2個あり、頸部は細長い沈線で文様を描いている。2は頭部を欠損するものの、顔面は1と同様に眉から鼻にかけて逆三角形の隆帯で表現されている。目と口は浅い刺突孔を施している。3はややハート形の顔面に隆帯だけで眉と鼻を表現したものである。4は半分以上欠損しているが、1・2と同様な顔面の表現をし、頭部側面には円形の刺突が2箇所ある。5は肩部から腕部と思われる板状の破片で、上下方向に小孔が貫通し、表裏面には細い沈線で文様を描いている。6は胴体部破片で、胸に乳房は隆帯を貼付て表現するものの片方は剝落している。文様は縦位の平行線文を主体に描いている。胎土はいずれも粗砂と石英砂を多く含んでいる。

### 4. 石器

#### (1)石鏃 (第86図1～10、写真図版74)

石鏃は10点出土している。1～3は有茎鏃で、1・2の基部はやや突出する。3は基部に浅い抉入を有するものである。4～6は基部が尖る尖基鏃で4は菱形を呈している。7・8は二等辺三角形を基調とし、基部が直線的な無茎鏃である。8は先端部を欠損している。9・10の2点は調整剝離が不十分な半製品である。石質は2が珪質粘板岩、1・4・8が凝灰質珪質泥岩、他はチャートである。

#### (2)石錐 (第86図11～16、写真図版74)

石錐は大小合わせて6点出土し、欠損したものが多く、11はつまみ部を細長い錐部を両端から丁寧に調整剝離を施している。錐部の断面は菱形を呈する。12は不定形な剝片の一端に両端から調整加工し、錐部をつくり出している。13・14は三角形を呈し、錐部が短いものである。調整加工は丁寧に施されている。15は錐部が欠損したつまみ部である。16は一部欠損しているが、錐部を両端に有するものである。石質は13が輝緑凝灰岩、16が珪質粘板岩、他はチャートである。

#### (3)石匙 (第86図17、写真図版74)

石匙は1点出土している。つまみの主軸線に対して、刃部がほぼ平行する所謂縦型石匙である。刃部は側縁の一方にあり、片側から丁寧に調整加工を施して、下端はやや角ばっている。石質はチャートである。

#### (4) 搔・削器 (第86～91図 8～105、写真図版74～79)

搔器や削器等を本稿では一括し、搔・削器としている。刃部の形態から次のⅠ類～Ⅲ類に大別した。

Ⅰ類 直刃状を呈するもの(18～46) 縦長状剥片や三角形状剥片の1側縁に刃部を有するものである。刃部の調整剥離は片側から施すものが大部分である。石質はチャート、珩質泥岩が多くを占めている。

Ⅱ類 曲刃状を呈するもの(47～58) 刃部が曲線状のものである。半円形状の側縁に調整剥離して刃部をつくり出したものが多い。55・56・58は両面から丁寧に調整加工を施している。石質はチャート、珩質粘板岩、珩質泥岩、細砂質凝灰岩である。

Ⅲ類 複刃状を呈するもの(59～105) 2側縁に直刃状や曲刃状の刃部を有するものである。59は縦長状剥片の側縁に直刃状と曲刃状の刃部を有している。65・73は側縁に刃部をもち尖頭状の先端をつくりだしている。大部分の刃部は片側からの調整剥離を施すものであるが、98～102は両面から丁寧に調整を施している。石質はチャート、珩質粘板岩、珩質泥岩等が多い。

#### (5) 楔形石器 (第91～93図106～154、写真図版79～81)

四辺形を呈し、両極剥離痕によって特徴づけられる楔形石器は、碎片を含めて49点出土している。106～121は2個1対の刃部を有し、素材の面を残すものが多い。石質はチャートが大部分を占め、粘板岩、輝緑凝灰岩、珩質泥岩も僅少にある。

#### (6) 不定形石器 (第93図155～179、写真図版81・82)

(1)石鏃～(5)楔形石器を除いた剥片石器類で、縁辺部に調整剥離を施しているが適当な名称を与えることができないものを一括した。調整剥離痕や使用痕は剥片の側縁にもつものが多い。中には搔・削器の破片と思われるものも含まれる。石質はチャート、珩質泥岩、粘板岩、輝緑凝灰岩、凝灰質珩質泥岩等でチャートが半数を占めている。

#### (7) 石核 (第94・95図180～187、写真図版81・82)

石核は8点出土している。石質は流紋岩、珩質泥岩、凝灰岩、粘板岩、チャート等があり多様を呈している。



第86图 石鏃、石錐、石匙、搔·削器(1)



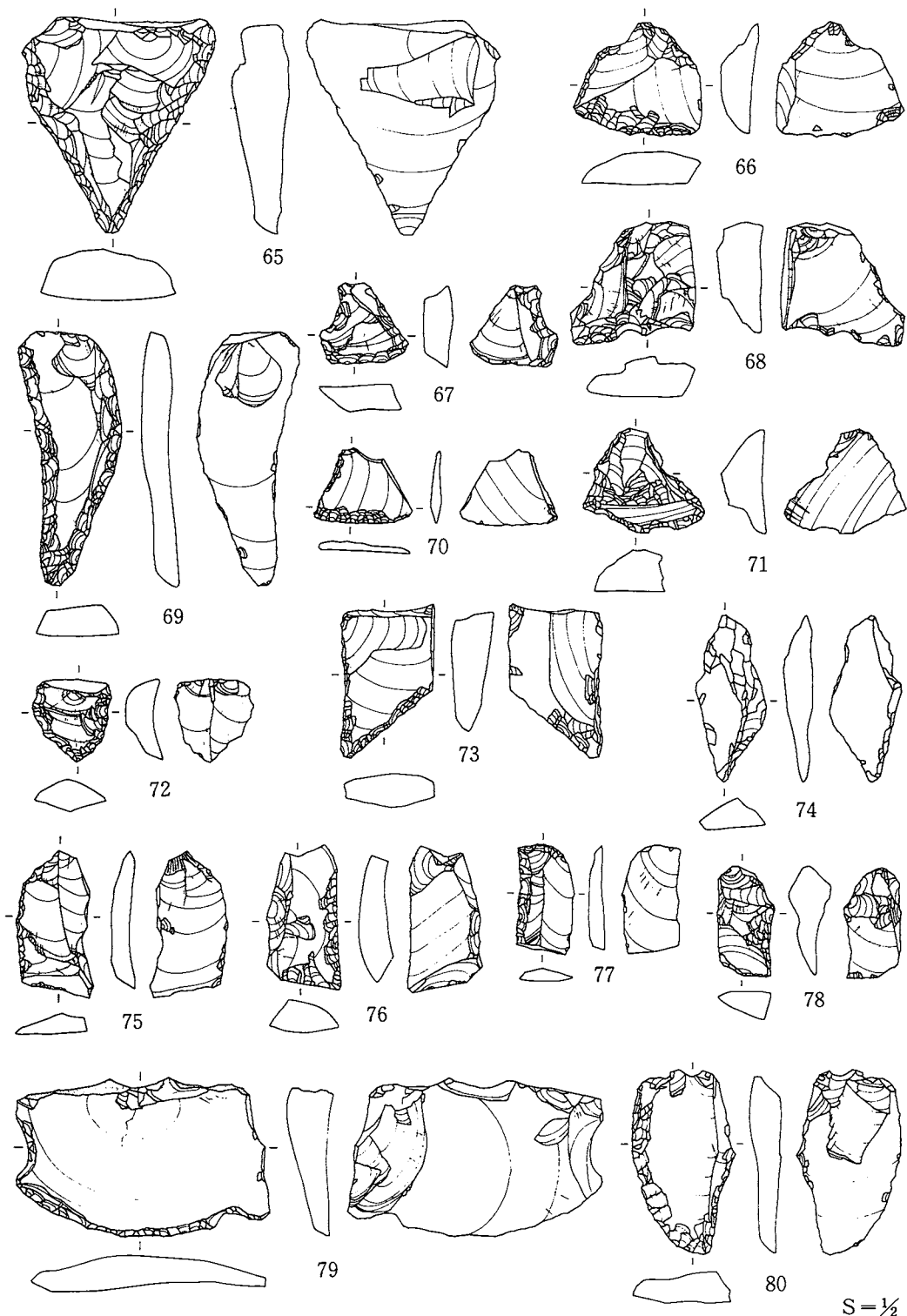
S = 1/2

第87图 搔·削器(2)

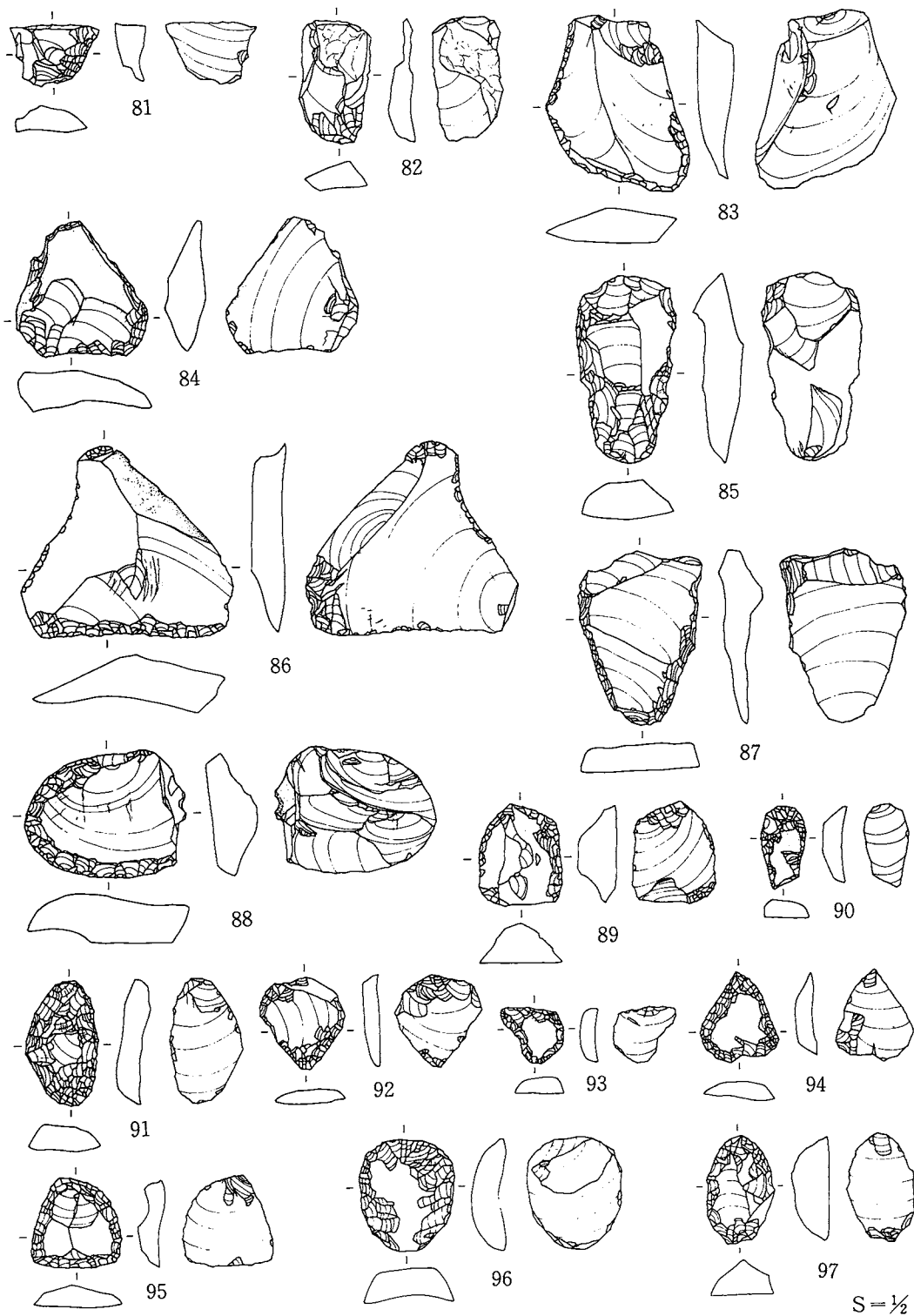


S = 1/2

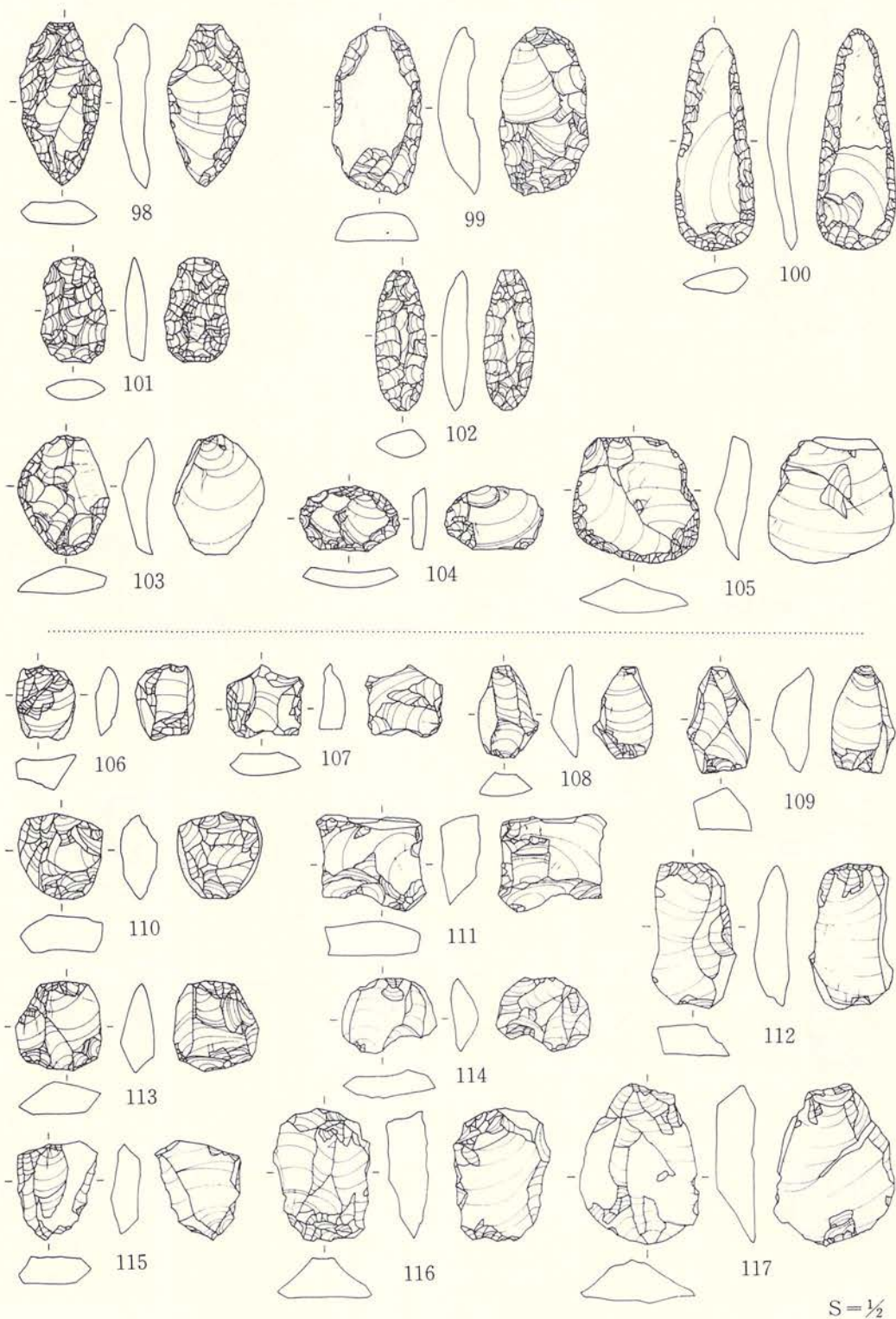
第88图 搔·削器(3)



第89图 搔·削器(4)

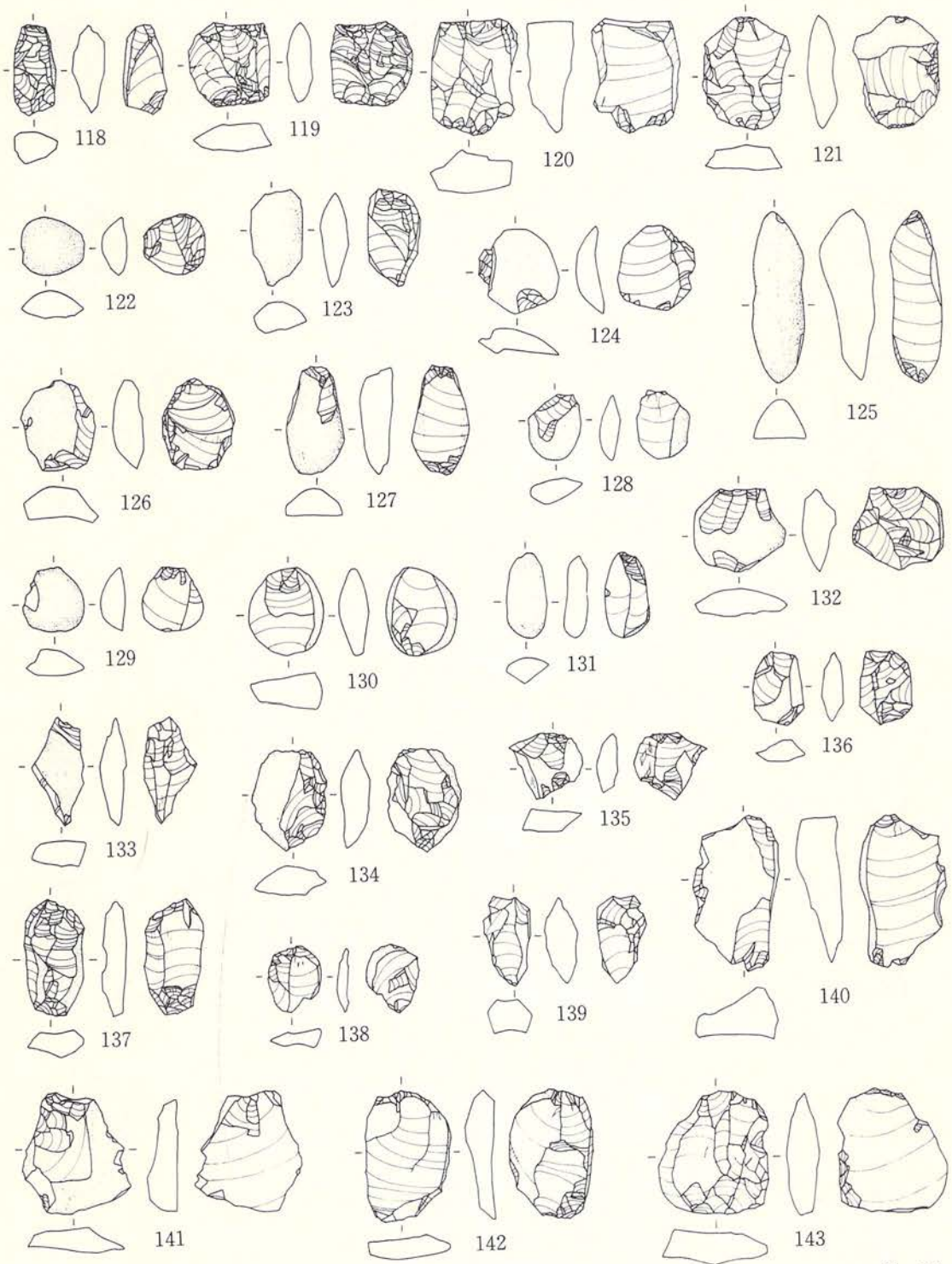


第90图 搔·削器(5)



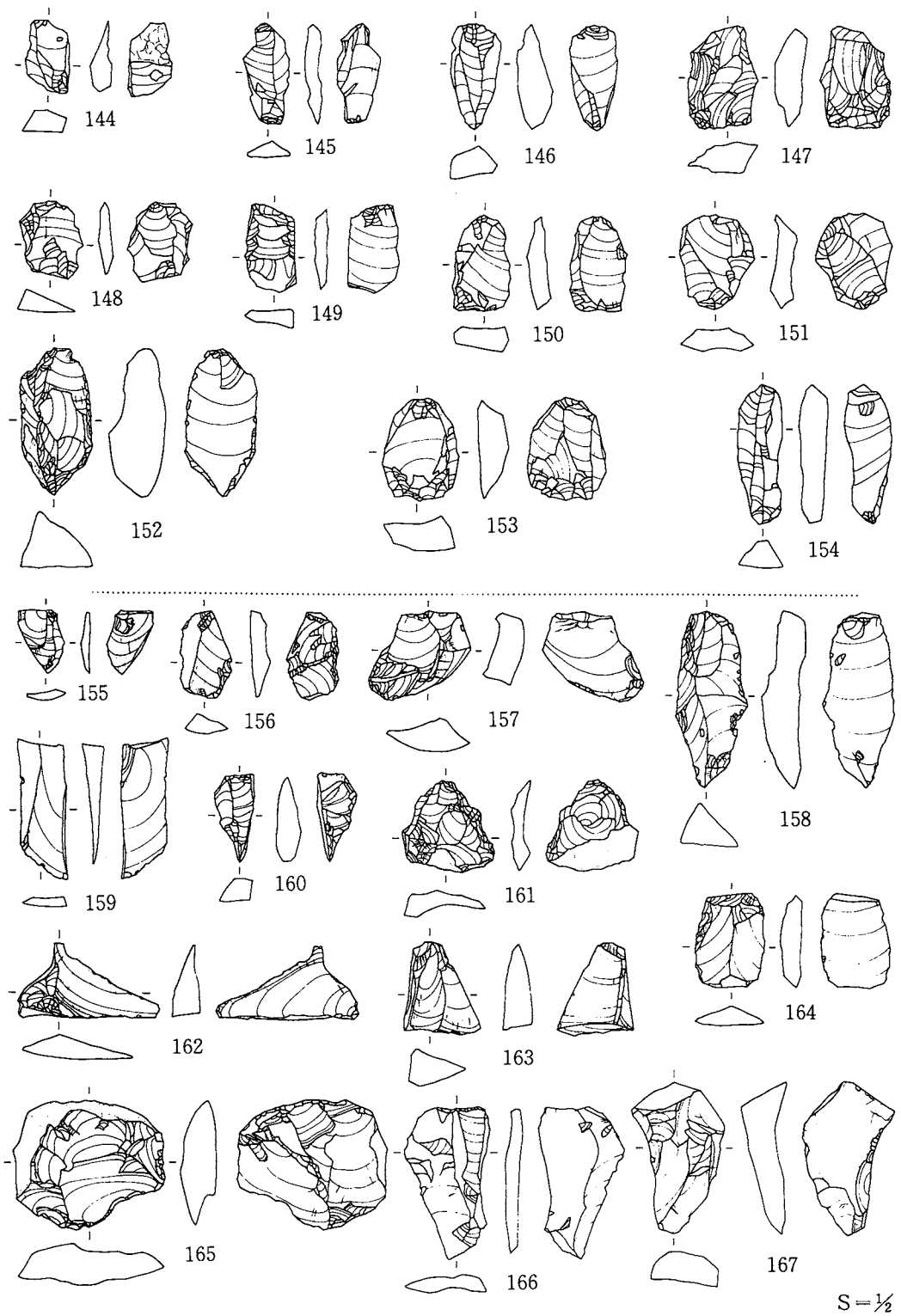
第91图 搔·削器(6)、楔形石器(1)



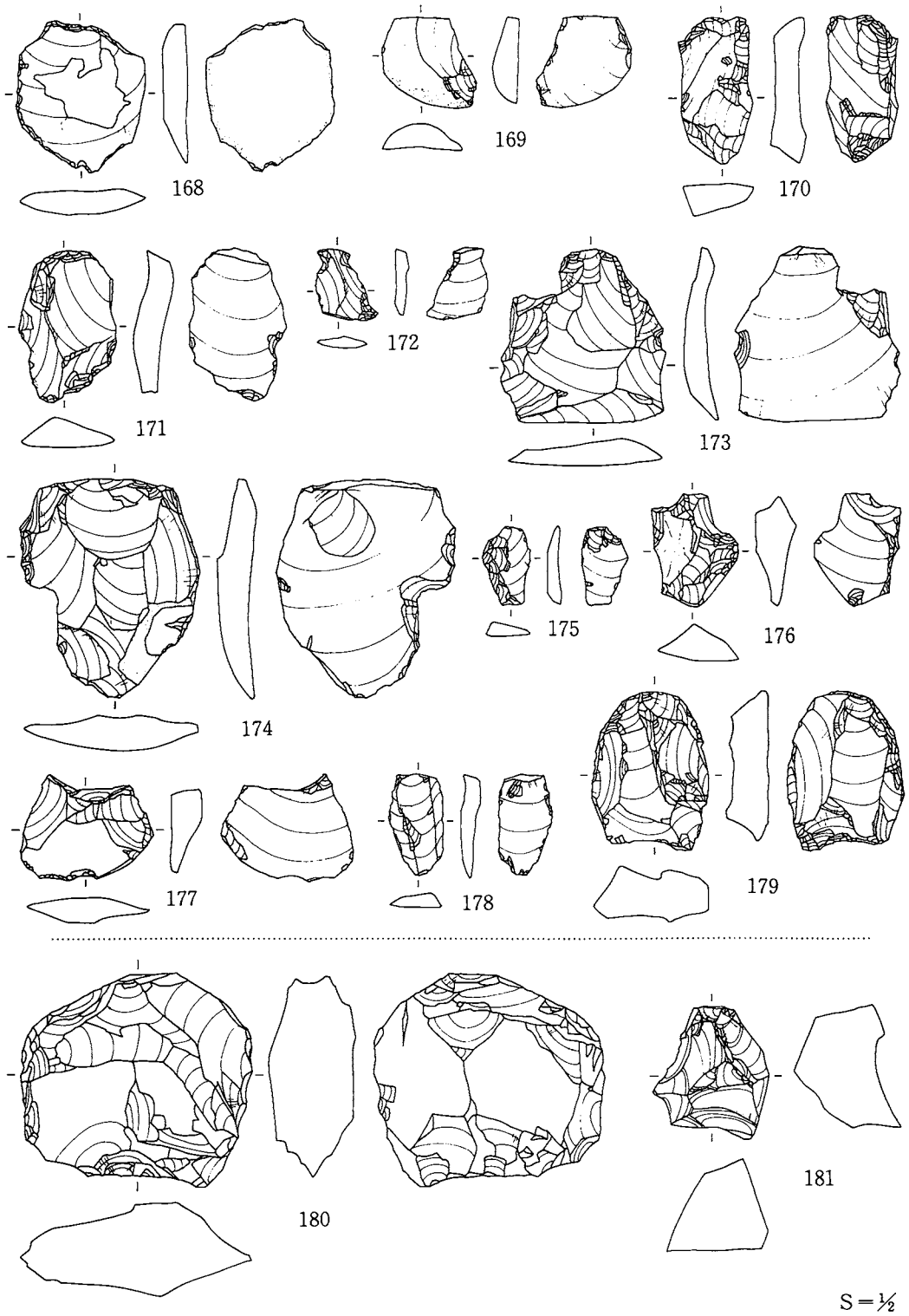


S = 1/2

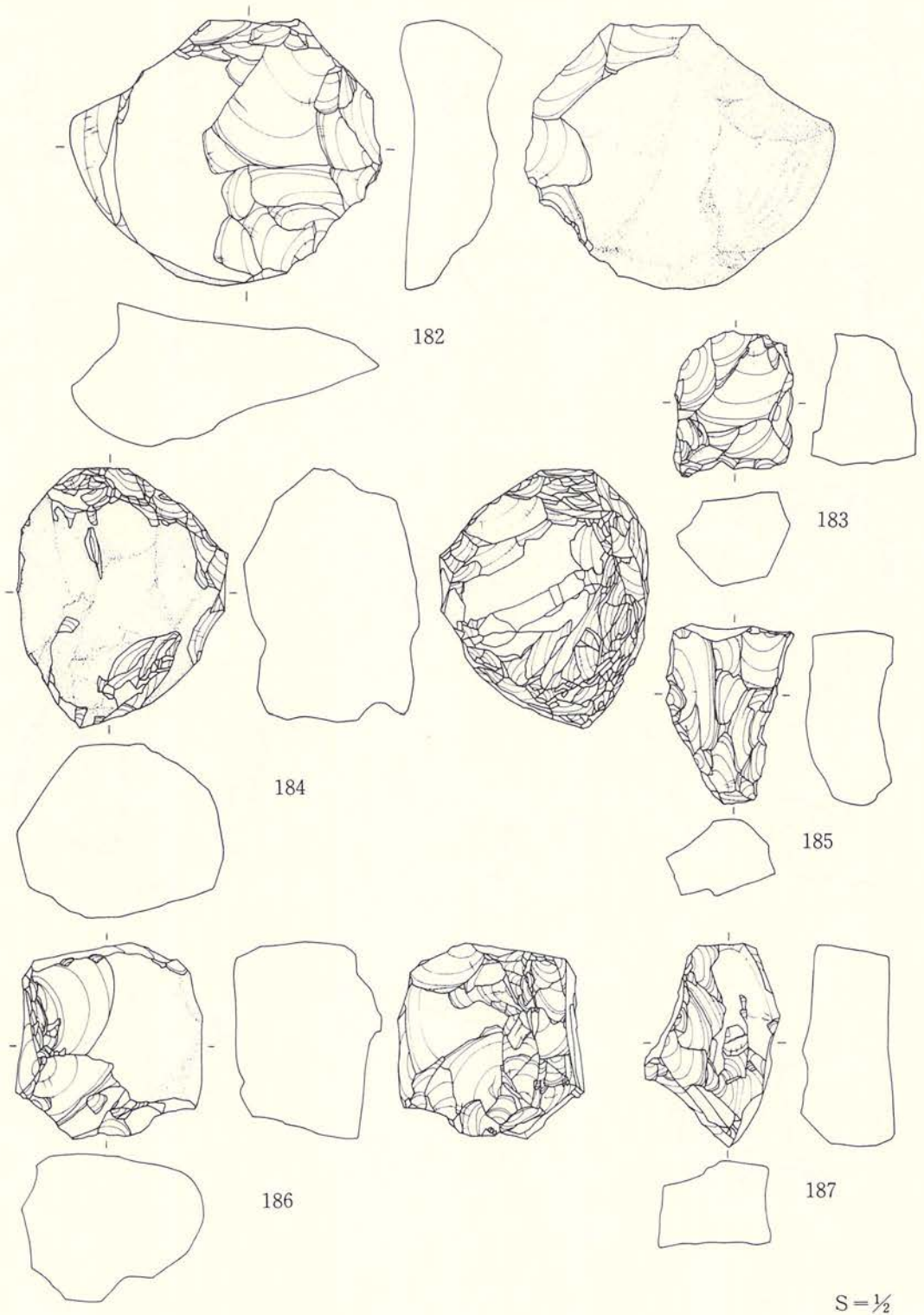
第92图 楔形石器(2)



第93图 楔形石器(3)、不定形石器(1)



第94图 不定形石器(2)、石核(1)



第95图 石核(2)

(8)磨製石斧 (第96・97図1～22、写真図版84・85)

磨製石斧は小形のものを含めて22点出土しているが、基部ないし刃部を欠損する例が多い。形態から次の様に大別した。

I類 長さが5cm以下の所謂小形磨製石斧 (第96図1・2)

1・2は磨製石斧のミニチュアで、両面と側縁は丁寧に研磨加工され精巧なつくりである。1は基端部を欠損したもので、刃部は円刃を呈している。2は完形品で長さ4.2cm、幅1.7cmを測る。基端部は平坦に面取りされ、刃部は直刃である。

II類 基部の形態がわかるもの(完形品を含む)を一括した(第96・97図3～16)

a 基端部は円形を呈し、面取を施さないもの3・4・7が該当する。3は粗く研磨加工されたもので、側縁の稜は不明瞭である。4は基端部と側縁の一部を剝落するものの、側縁に稜をつくり出す。3と4の刃部は円刃を呈している。7は刃部を欠損したもので丁寧に研磨加工を施している。

b 基端部は平坦で面取を施したもの5・6・8～16が該当する。5はほぼ完形品で、基部は尖がり、刃部は円刃を呈する。6は両側縁に稜をつくり出し、刃部は一部剝落しているが、円刃状と思われる。8・9は比較的小形の破片で精巧なつくりをしている。10・11・16は両側縁の稜が明瞭で丁寧に研磨加工を施している。

III類 刃部の形態がわかるものを一括した(第97図17～19)

17・18は所謂蛤刃(両凸刃)で、刃縁は弧を描く円刃を呈する。17は欠損した基部を平坦に調整している。19は欠損した基部と刃部に再調整加工を施したもので楔的な転用と思われる。

IV類 その他のものを一括した(第97図20～22)

20～22は基部と刃部を欠損したもので、21は両端部をつるつるに研磨している。22は両端部に敲打痕と軽い研磨を施している。いずれも欠損品の再利用をしたものである。

石質は輝石玢岩、硬砂岩、粘板岩、輝石安山岩等で輝石玢岩を使用したものが約半数を占めている。

(9)石皿 (第98・99図1～14、写真図版86・87)

石皿は14点出土しているが大部分は半欠品乃至破片である。形態から次のI・II類に分類した。

I類 扁平盤状で浅く凹むもの(第98図1～5)

a 扁平な転石を利用したもの(1～4) 1は円盤状を呈し、片面を使用したもので、中央部に敲打痕による剝落がある。2は片面、3・4は両面使用のもので磨滅している。

- b 不安定な割り石を利用したもの(5) 5は両面使用のもので、中央部に敲打痕による凹みがあり、両面には幅2mmほどの溝が円弧を描くように巡っている。

## II類 縁どりを施しているもの(第98・99図6～14)

細分は行わず縁どりを施しているものを一括した。縁はあまり高くないものが多く、比較的幅が広いのは10・13である。中央部が弓状に凹むものは6・11・13で、11・12や9・14は出土地点と石質が同じことから同一個体の破片と思われる。側面と裏面にも調整加工を施す例が多い。

石質は角閃石英安山岩、輝石安山岩、軽石質凝灰岩等であり、安山岩系のものを多く利用している。

### (10)凹岩(第100図1～4、写真図版88)

拳で握れるやや扁平な礫を用いており、形状は種々さまざまである。凹みは両面乃至側面に多数の敲打痕があり、逆円錐形や摺鉢状を呈している。大部分は両面に凹みを1～3個有するものであるが、1・2は側面も使用している。2は凹面が数個重なり浅皿状に広がっている。

### (11)磨石(第100・101図5～26、写真図版88・89)

磨面や擦痕があるものを一括している。図版中のスクリーンと→は使用痕や擦痕の範囲を示してある。形状は円形乃至楕円形を基調とするものが多く、他に隅丸長方形、不整形とさまざまである。5は拳に入る大きさで5側面が使用され、6は球形状を呈している。17は隅丸長形状で全面が良く使用されている。21は一部欠損しているが1側面のみ平らに磨滅する。断面が三角形の18・19・23は1側縁が著しく磨滅している。

### (12)磨・凹石(第102～105図27～59、写真図版90～93)

磨面と凹痕があるものを一括している。形状は円形、楕円形、隅丸長方形、不整形とさまざま、拳で握れるほどの大きさの礫を用いている。42・43は半円形を呈し、1面が平坦に磨滅しその中央部に凹痕がある。48は4側面に複数の凹痕を有し、2面が良く磨滅している。51は一部欠損するものの2箇所 shallow 凹痕があり、4側面は平坦に磨滅する。57は欠損した石斧を転用したもので先端部が良く磨滅している。58・59は径2.2cm・深さ1cmの摺鉢状を呈する凹痕を1個有し、58は両側面、59は3側面が平らに磨滅する。

### (13)磨・敲打石(第106図60～17、写真図版94)

磨面と敲打痕があるものを一括している。60は球形状を呈し、端部に敲打痕がある。61・63

はやや楕円形で、両面及び側面は磨滅し、両端部に強い敲打痕がある。62・64～67の断面は多角形状を呈し、1側縁が特に磨滅し端部に敲打痕を有している。

(14)磨・凹・敲打石 (第106図68、写真図版94)

68は側面に磨面、両面の4箇所には摺鉢状の凹痕、側面に敲打痕を有している。形状は楕円形を呈し、拳で握れるほどの大きさである。

## 5. 石製品・その他

石製品は盤状石製品5点、球形状石製品3点、石棒1点、凹部のある石製品1点、その他として古銭が2点出土している。以下器種毎に概略を述べる。

(1)盤状石製品 (第107図1～5、写真図版95)

形状は円形を基調にした1～4と5の長方形状を呈すると思われる2種類がある。1は径5cm、厚さ1.4cmで表裏面を丁寧に研磨している。2・3は加工しやすい細砂質凝灰岩を円盤状に仕上げたもので、3の片面には細い沈線文が施されている。大きさは2が径3.9cm、厚さ0.9cmで3が径6.6cm、厚さ1.6cmを測る。4は径3.4cm、厚さ0.4cmで中央寄りに直径4mmの円孔がある。5は一部欠損するものの丁寧に面取りを施し中央部は僅かに凹む。石質は1が輝石安山岩、4が粘板岩、2・3・5が細砂質凝灰岩である。

(2)球形状石製品 (第107図6～8、写真図版95)

6～8は径4.3cm～4.9cm大の球形状に調整加工したもので、拳の中に入る大きさである。石質は6が輝石安山岩、7・8白色細粒凝灰岩である。

(3)石棒 (第107図9、写真図版95)

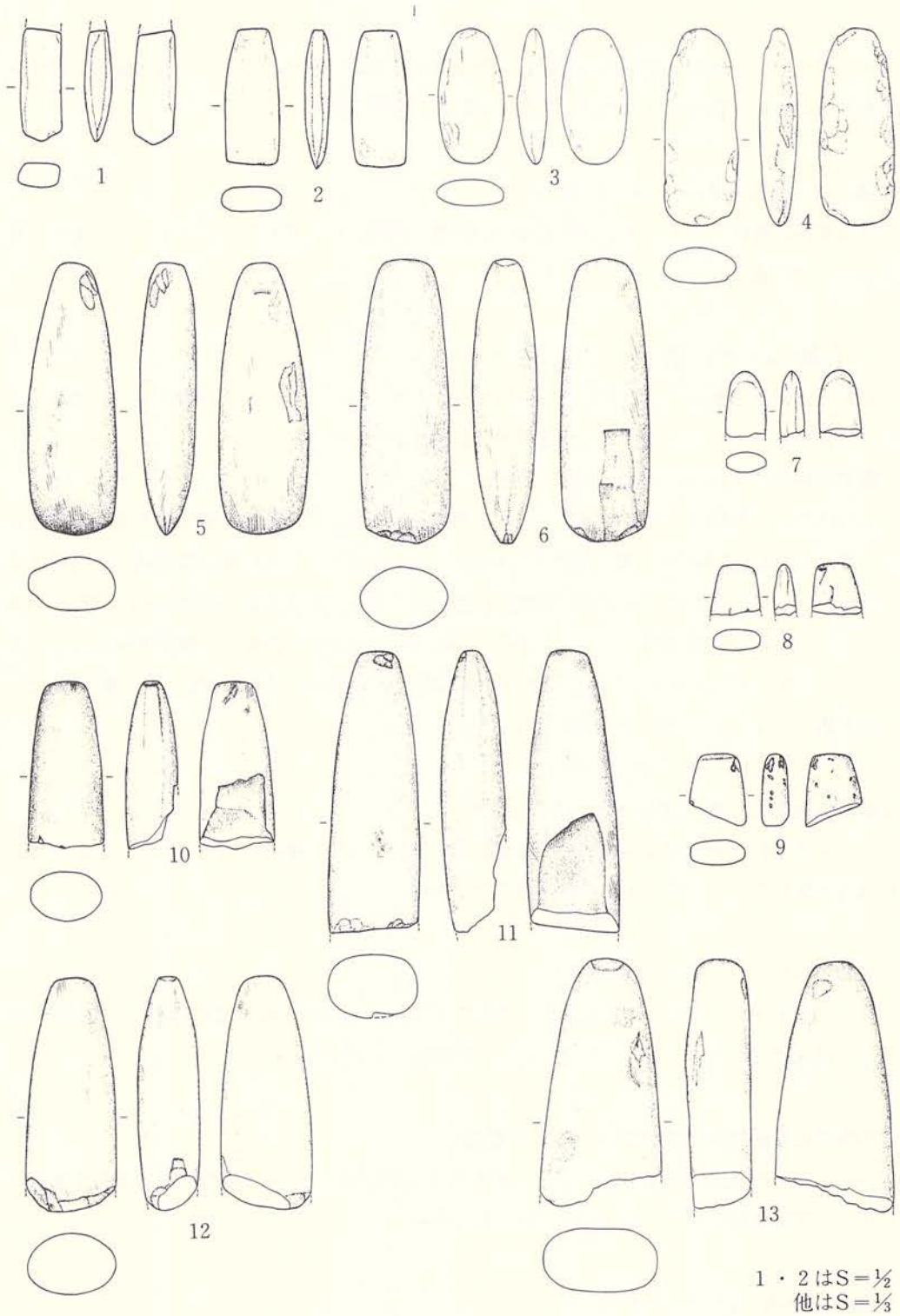
9は両端部を欠損した石棒の破片で、現存長は7.6cm、径3cm前後を測る。細砂質凝灰岩を研磨して円柱状に仕上げているが、一部は方形気味を呈している。

(4)凹部のある石製品 (第107図10、写真図版95)

10は白色細粒凝灰岩に径3cm、深さ1cmほどの凹みを施したもので縁の一部は欠損する。内外面には黒褐色をしたタール状の付着物が見られる。

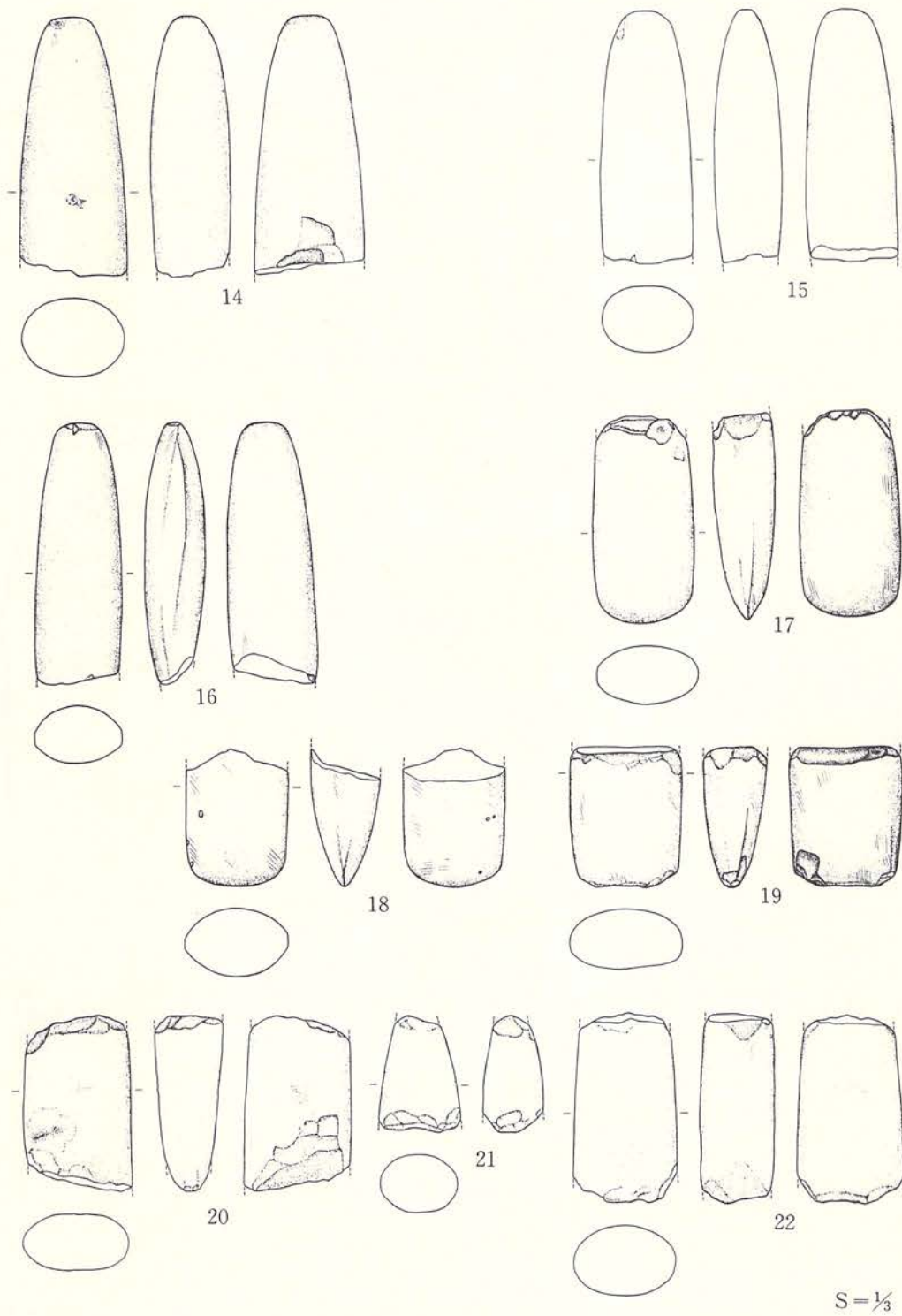
(5)古銭 (第80図14・15、写真図版71)

14・15は寛永通寶である。径2.4cmを測り、背銘はない。

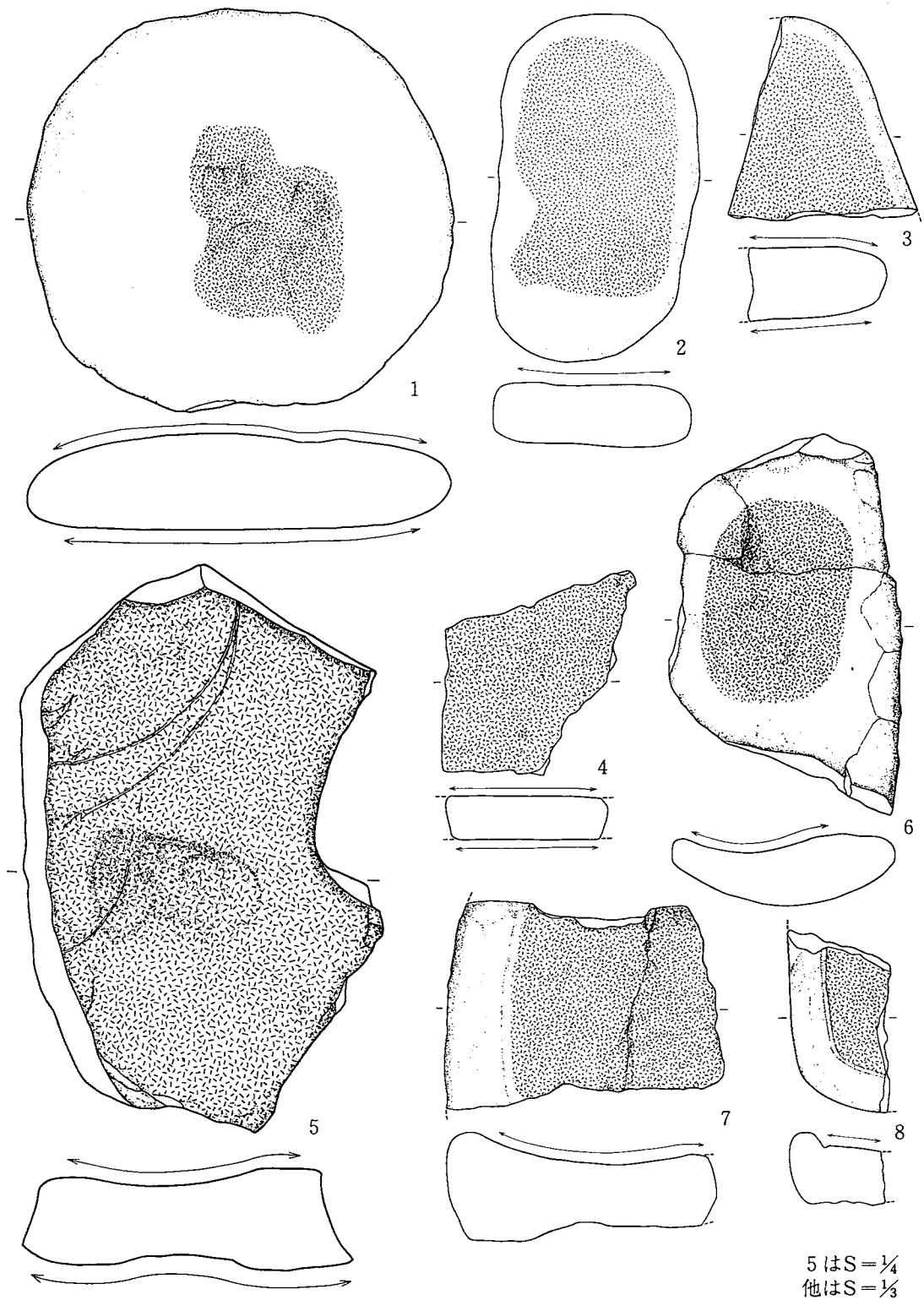


第96図 磨製石斧(1)

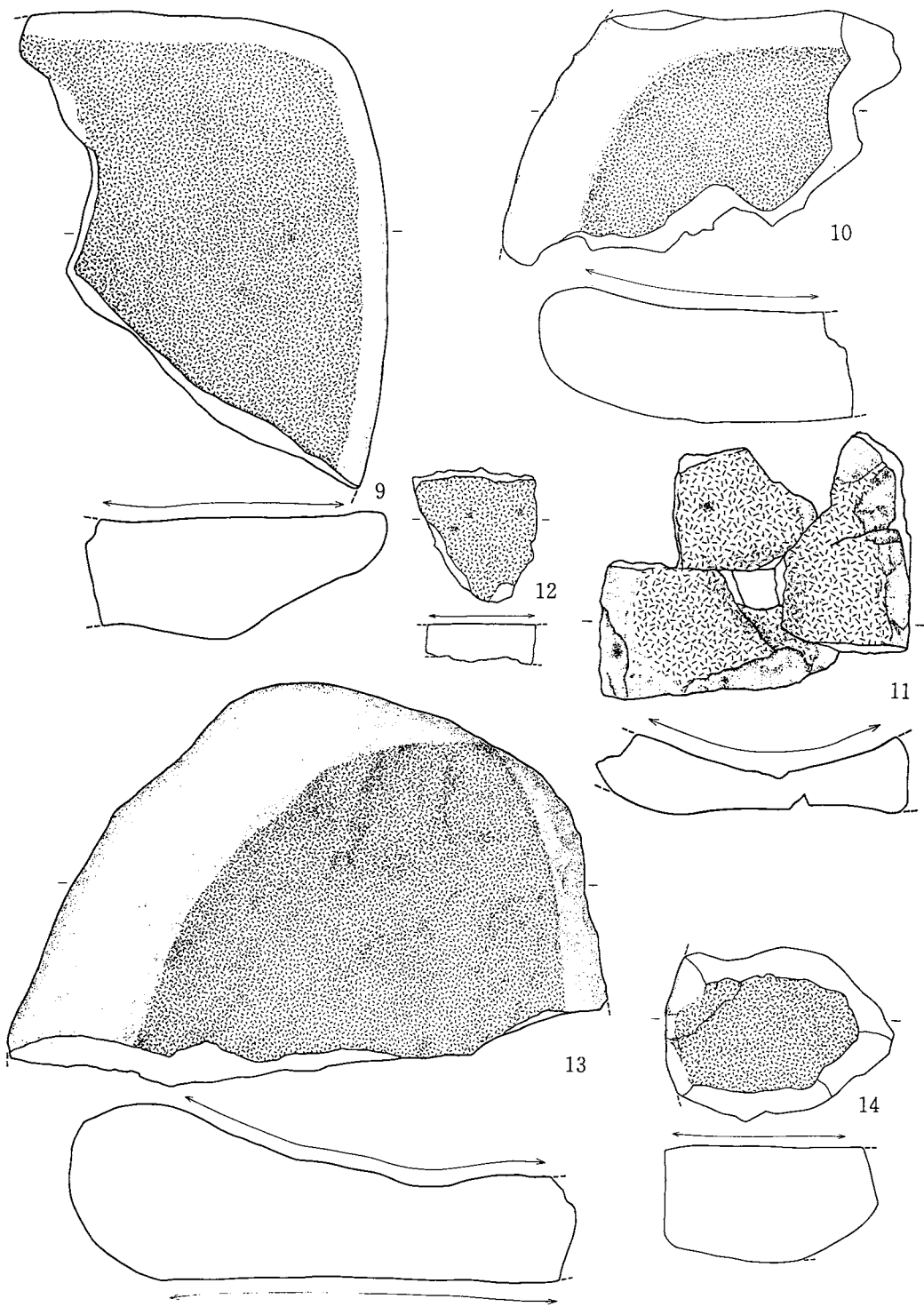




第97図 磨製石斧(2)

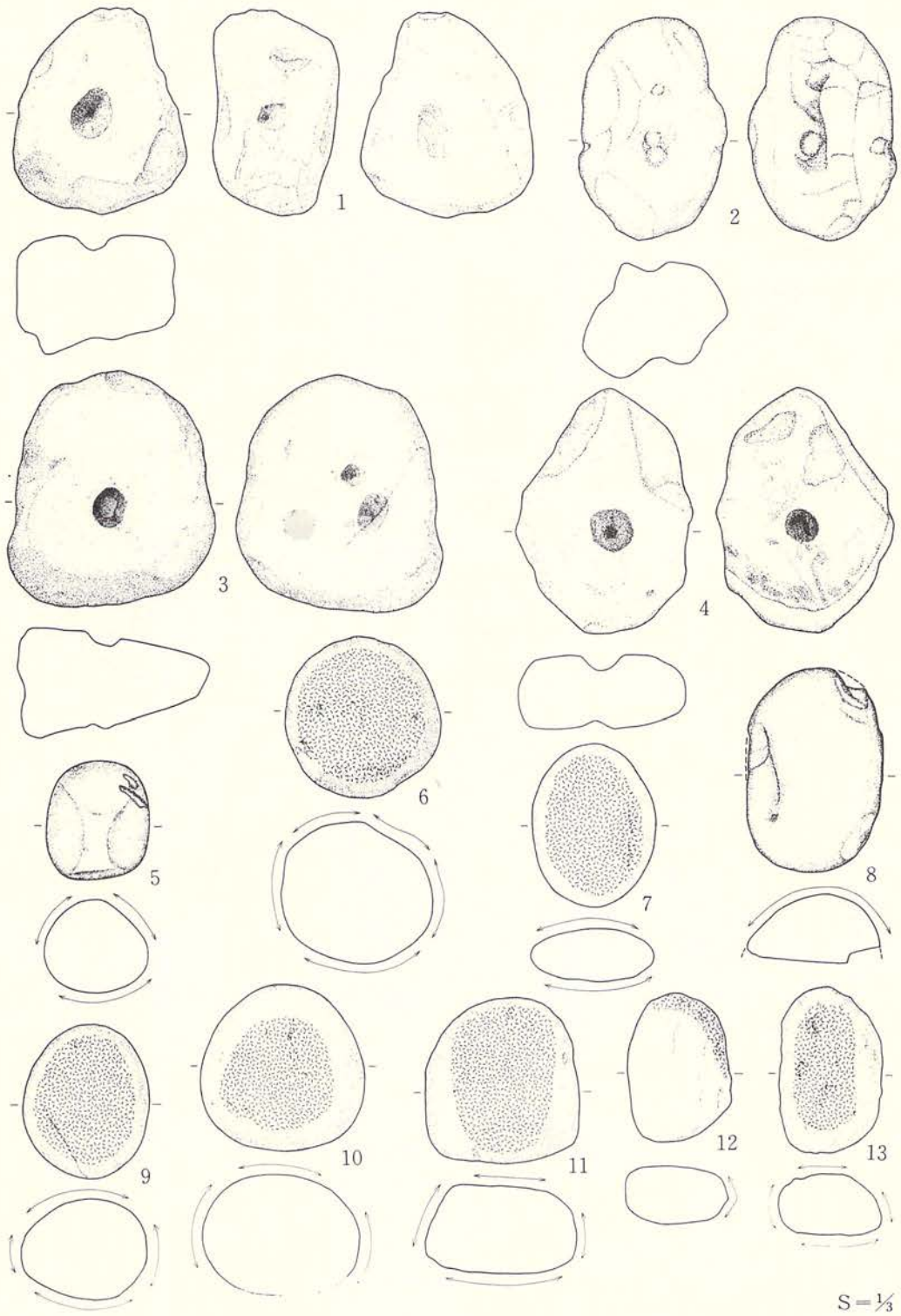


第98図 石皿(1)



11はS=¼  
 他はS=½

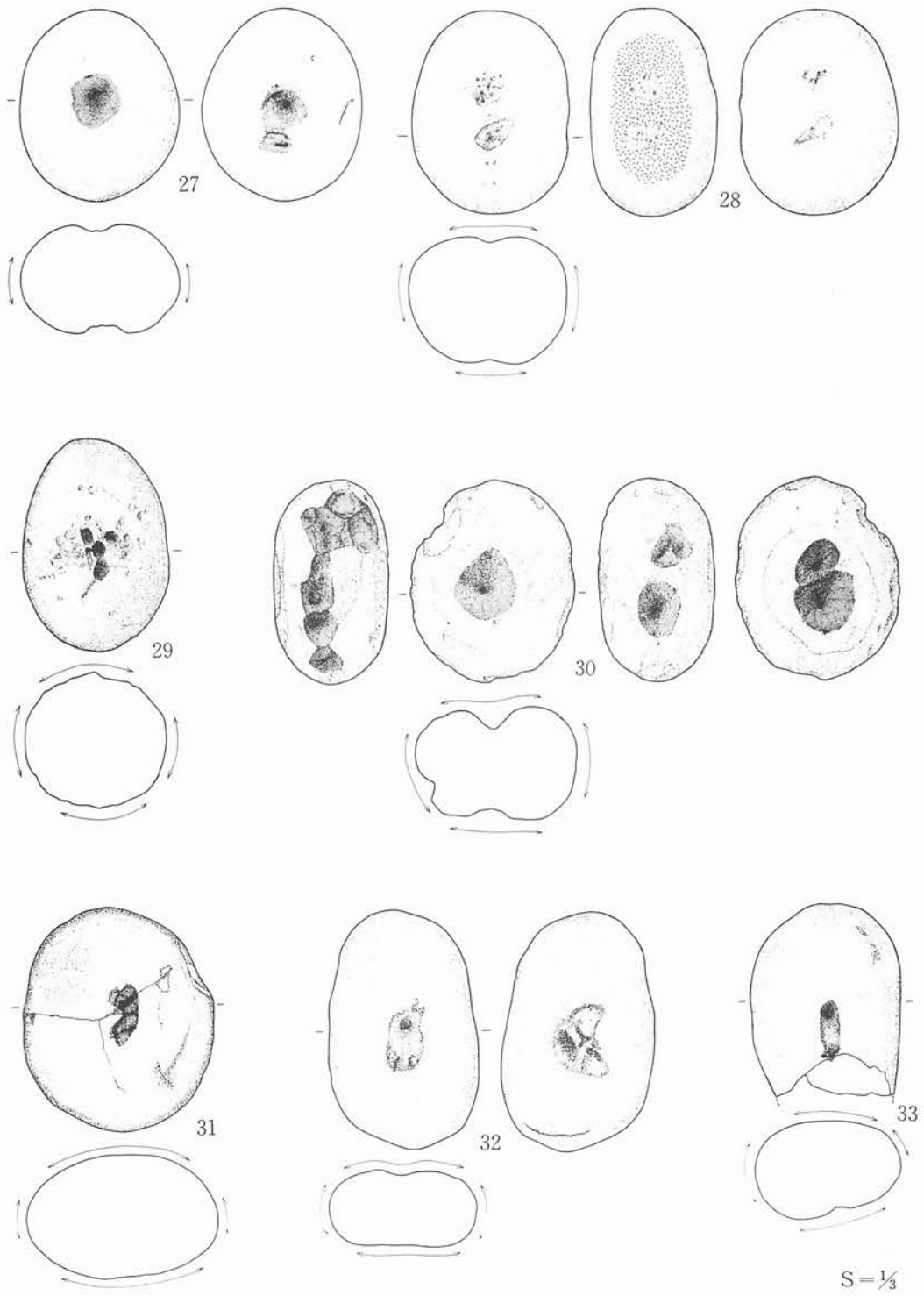
第99図 石皿(2)



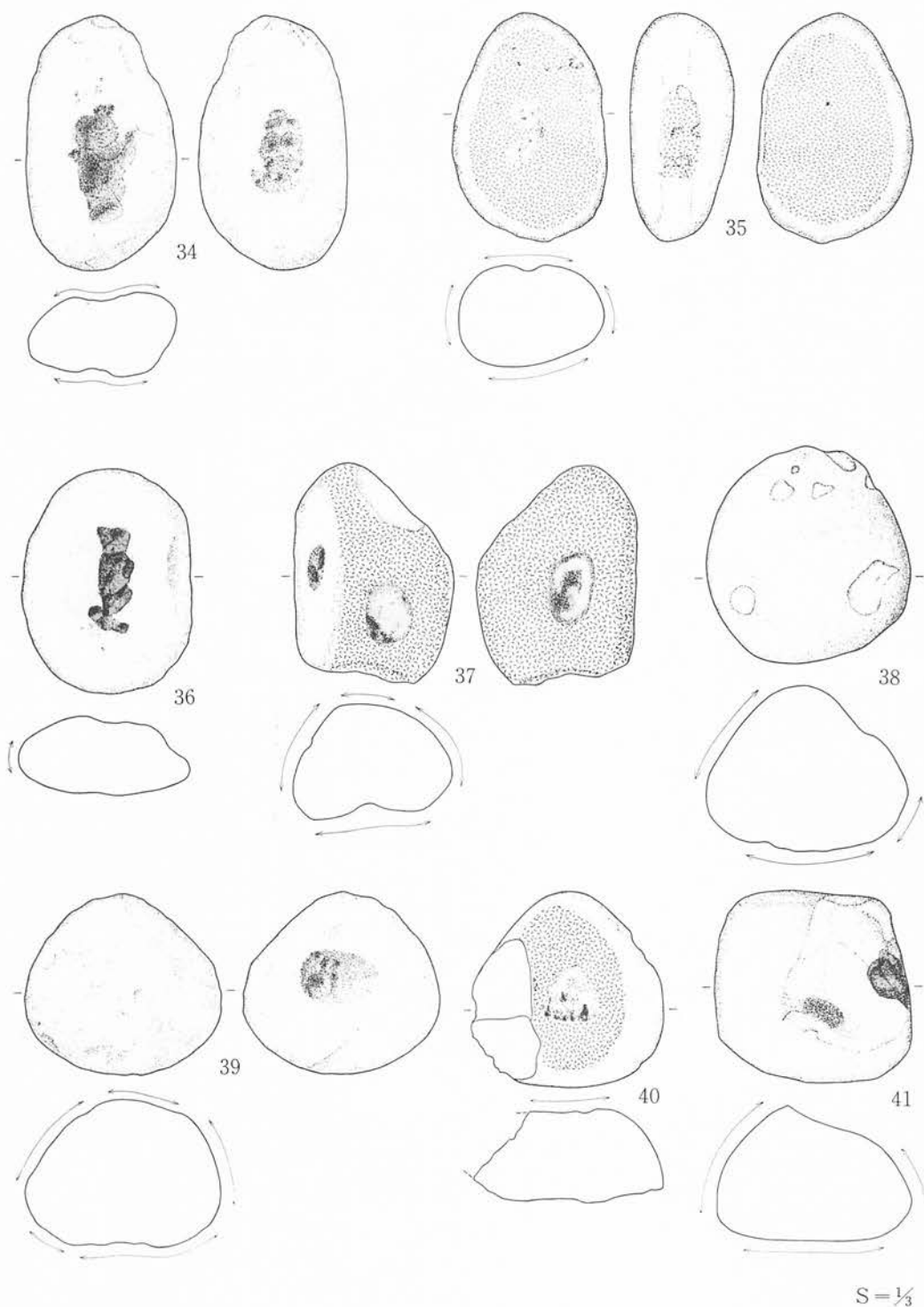
第100図 凹石、磨石(1)



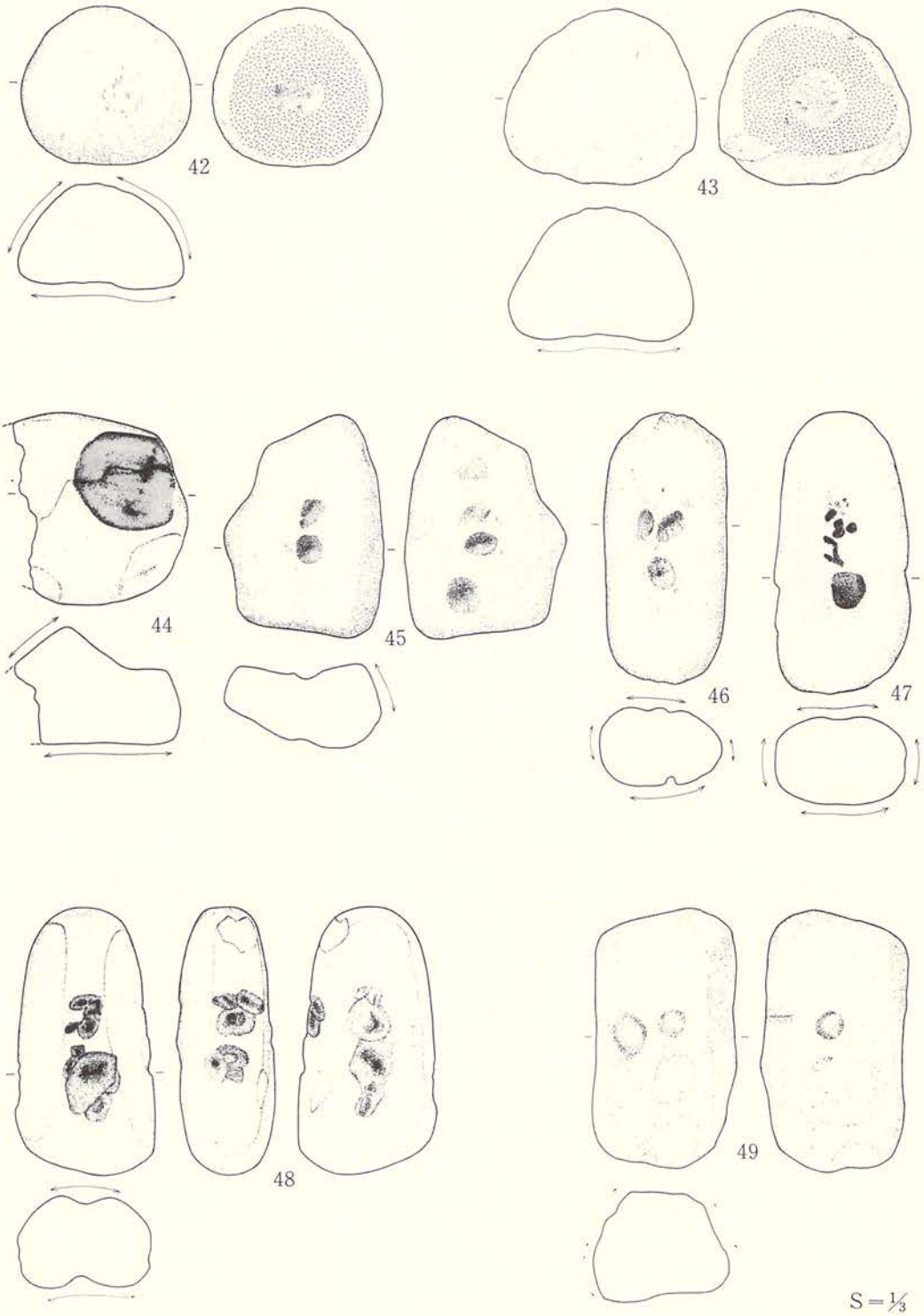
第101图 磨石(2)



第102図 磨・凹石(1)

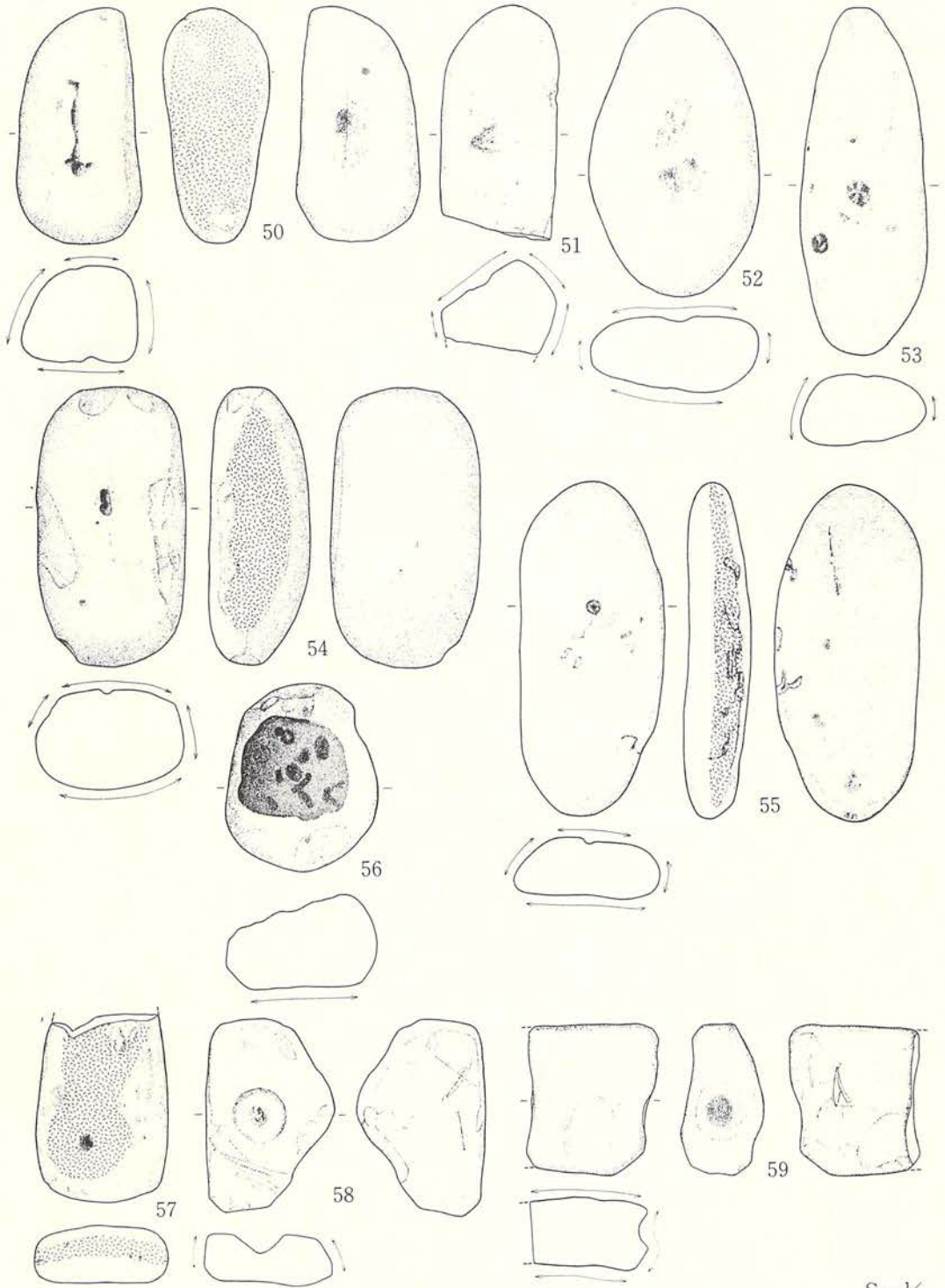


第103図 磨・凹石(2)

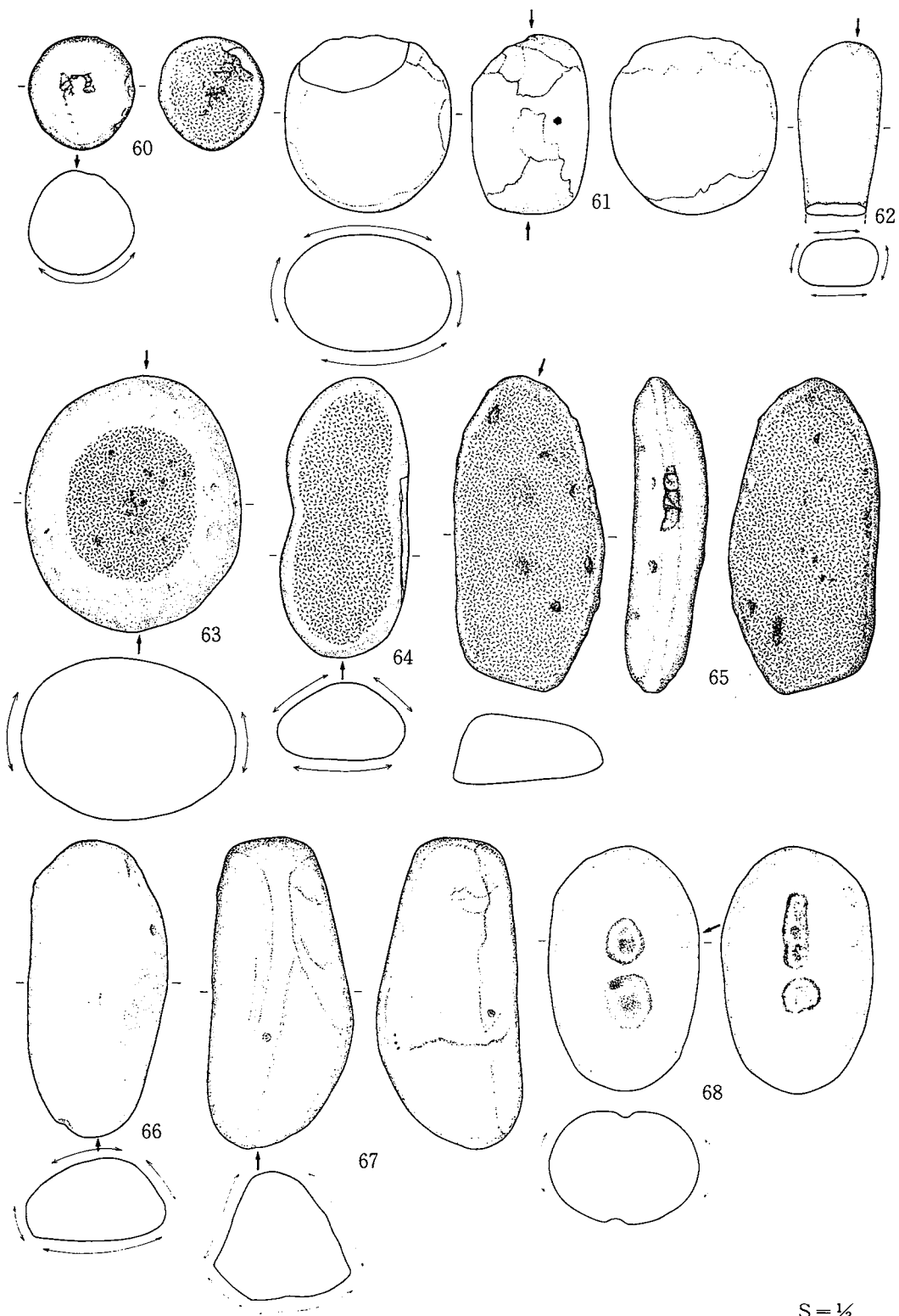


第104図 磨・凹石 (3)

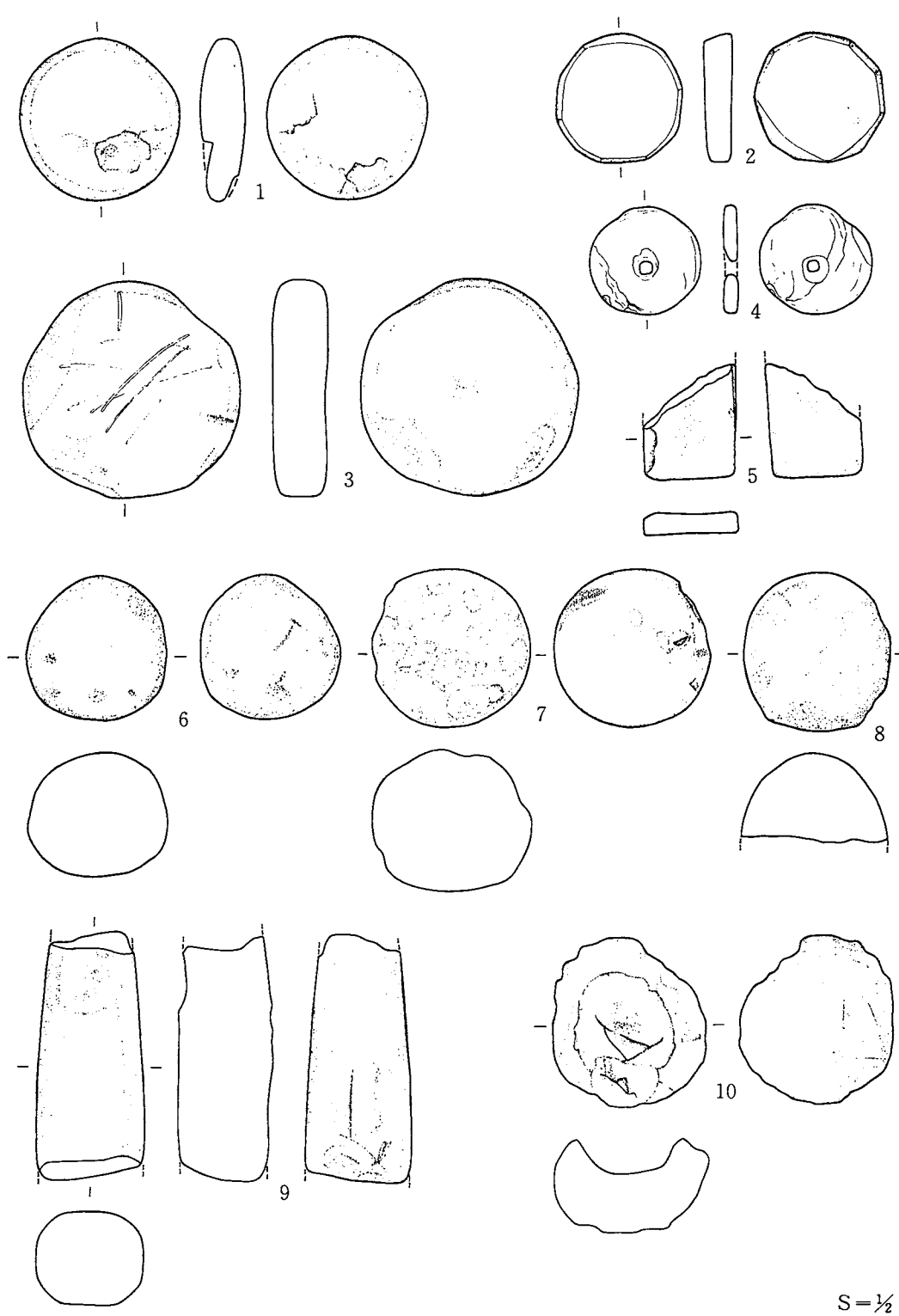




第105図 磨・凹石(4)



第106図 磨・敲石、磨・凹・敲石



S=1/2

第107図 石製品

表1 石器計測表(1)

( ) は現存値

No	遺構名 (グリット名)	出土地点	器種	石質	産地・成生年代	計測値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	A II i 10住	埋土	石鏃	珪質粘板岩	北上山地・古生界	(3.4)	1.1	0.6	1.9	9-13	38-13
2	A II i 10住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.9	3.2	1.0	11.8	9-14	38-14
3	A II i 10住	埋土	不定形石器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	1.9	3.4	0.7	4.8	9-15	38-15
4	A II i 10住	埋土	楔形石器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	3.1	1.7	1.0	4.7	9-16	38-16
5	A II i 10住	埋土	掻・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.9	2.5	0.6	7.0	9-17	38-17
6	A II i 10住	埋土	不定形石器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.5	6.7	0.9	27.0	9-18	38-18
7	A II i 10住	床上	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.4	8.6	5.4	630.0	9-19	38-19
8	A II i 10住	埋土	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(4.6)	2.9	2.2	55.0	9-20	38-20
9	A III j 4住	埋土	石鏃	チャート	北上山地・古生界	2.7	1.7	0.6	2.7	12-31	39-31
10	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	1.6	0.4	3.0	12-32	39-32
11	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.7	1.7	0.6	3.0	12-33	39-33
12	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	1.6	0.8	3.2	12-34	39-34
13	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.2	2.0	0.9	5.5	12-35	39-35
14	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.2	1.7	1.1	4.9	12-36	39-36
15	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.3	1.9	0.8	6.4	12-37	39-37
16	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.8	2.6	0.6	6.2	12-38	39-38
17	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.9	2.9	0.6	8.2	12-39	39-39
18	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.7	3.4	1.1	12.0	12-40	39-40
19	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.5	2.5	0.7	9.3	12-41	39-41
20	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.0	4.4	0.7	18.5	12-42	39-42
21	A III j 4住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.8	3.7	1.4	26.4	12-43	39-43
22	A III j 4住	埋土	磨・凹石	硬砂岩	北上山地・古生界	14.5	5.2	2.9	380.0	12-44	39-44
23	A III j 4住	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	11.0	7.5	5.1	590.0	12-45	39-45
24	B II j 10住	Q <sub>2</sub> 3層	石匙	チャート	北上山地・古生界	3.4	3.3	0.5	7.4	15-68	41-68
25	B II a 10住	埋土	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	2.4	1.4	0.6	2.3	15-69	41-69
26	B II a 10住	埋土中位	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	3.3	1.6	1.1	7.6	15-70	41-70
27	B II a 10住	埋土	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	4.9	2.3	1.0	12.0	15-71	41-71
28	B II a 10住	埋土	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	1.6	2.5	0.5	1.8	15-72	41-72
29	B II a 10住	埋土下位	掻・削器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	3.6	2.1	0.7	5.0	15-73	41-73
30	B II a 10住	炉埋土	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	2.7	3.9	1.0	12.0	15-74	41-74
31	B II a 10住	埋土	掻・削器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	2.6	2.8	1.2	7.7	15-75	41-75
32	B II a 10住	埋土	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.9	2.9	0.7	9.8	15-76	41-76
33	B II a 10住	埋土下位	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	4.7	2.9	1.1	16.0	15-77	41-77
34	B II a 10住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.3	1.3	0.8	2.0	15-78	41-78
35	B II a 10住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.6	1.6	0.7	3.7	15-79	41-79
36	B II a 10住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.4	2.1	0.6	4.6	15-80	41-80
37	B II a 10住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	1.7	2.0	0.8	5.3	15-81	41-81
38	B II a 10住	埋土下位	石核	硬砂岩	北上山地・古生界	4.8	5.7	3.0	12.0	15-82	41-82
39	B II a 10住	Q <sub>2</sub> 埋土	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(3.2)	(3.3)	1.8	20.0	15-83	41-83
40	B II a 10住	埋土上位	磨製石斧	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(6.2)	4.3	2.1	65.0	15-84	41-84
41	B II a 10住	Q <sub>2</sub> 埋土	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(4.6)	4.8	2.7	105.0	15-85	41-85
42	B II b 10住	埋土	球形状石製品	砂岩	二戸一帯・新第三系中新統	4.6	4.4	3.9	60.0	15-86	41-86
43	B II b 9-1住	埋土	石鏃	チャート	北上山地・古生界	(2.8)	1.8	0.3	1.1	16-98	41-98
44	B II b 9-1住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.5	1.9	0.4	2.6	16-99	41-99
45	B II b 9-1住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.4	1.9	0.7	3.9	16-100	41-100
46	B II b 9-2住	埋土	石鏃	チャート	北上山地・古生界	3.3	1.5	0.5	2.4	18-116	42-116
47	B II b 9-2住	埋土	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.9	2.9	0.7	7.7	18-117	42-117
48	B II b 9-2住	埋土	掻・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.0	1.7	0.5	2.1	18-118	42-118
49	B II b 9-2住	埋土	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	2.2	1.3	0.4	1.1	18-119	42-119
50	B II b 9-2住	埋土	凹石	白色細粒凝灰岩	二戸一帯・新第三系中新統	3.8	2.9	3.2	20.0	18-120	42-120
51	B II b 9-2住	埋土	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.0	3.3	3.3	65.0	18-121	42-121
52	B II b 9-2住	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(11.6)	7.5	(3.5)	47.0	18-122	42-122

表2 石器計測表(2)

( )は現存値

No	遺構名 (グリット名)	出土地点	器種	石質	産地・成生年代	計測値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
53	BII d 6住	埋土	石核	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.4	2.9	2.0	28.0	20-131	43-131
54	BII d 6住	埋土	搔・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.8	2.4	0.5	5.8	20-132	43-132
55	BII d 6住	床上埋置	凹石	凝灰角礫岩	二戸一帯・中新統	9.5	6.4	4.0	300.0	20-133	43-133
56	BII d 6住	埋土下位	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(11.9)	7.7	3.7	360.0	20-134	43-134
57	BII d 6住	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.1	7.3	3.4	350.0	20-135	43-135
58	BII d 6住	床上埋置	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.3	8.3	8.6	960.0	20-136	43-136
59	BII d 6住	ベルト埋土	石皿	凝灰角礫岩	二戸一帯・中新統	(14.2)	(17.7)	4.7	1100.0	20-137	43-137
60	BII e 9住	床上	磨製石斧	チャート質淡緑色凝灰岩	北上山地・古生界	8.8	3.8	1.5	85.0	21-141	44-141
61	BII f 10住	埋土	石鏃	チャート	北上山地・古生界	1.9	1.6	0.6	1.2	23-155	45-155
62	BII f 10住	埋土	不定形石器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.9	2.7	0.6	7.5	23-156	45-156
63	BII f 10住	埋土下位	板状石製品	凝灰質砂岩	二戸一帯・新第三系中新統	6.6	4.4	1.1	29.9	23-157	45-157
64	BII f 10住	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.7	6.4	4.6	450.0	23-158	45-158
65	BII f 10住	埋土下位	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.7	6.5	3.8	325.0	23-159	45-159
66	BII f 10住	埋土	石皿	浮石質凝灰角礫岩	二戸一帯・中新統	(18.8)	(14.2)	3.6	850.0	23-160	45-160
67	BIII b 2住	埋土下位	石鏃	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.1	1.3	0.4	2.1	24-165	45-165
68	BIII b 2住	埋土下位	搔・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.2	2.9	0.7	6.2	24-166	45-166
69	BIII b 2住	埋土	搔・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	6.4	5.0	1.0	29.0	24-167	45-167
70	BIII b 2住	埋土	搔・削器	粘板岩	北上山地・古生界	9.2	7.8	1.8	168.0	24-168	45-168
71	CIII i 3住	埋土	搔・削器	チャート	北上山地・古生界	5.2	1.5	0.6	5.3	28-186	47-186
72	CIII i 3住	埋土下位	搔・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.1	2.1	0.4	2.8	28-187	47-187
73	CIII i 3住	埋土	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.1	1.8	0.4	1.7	28-188	47-188
74	CIII i 3住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.4	2.1	0.8	4.7	28-189	47-189
75	CIII i 3住	埋土	楔形石器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.5	3.1	0.8	19.28	28-190	47-190
76	CIII i 3住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	2.2	1.2	8.2	28-191	47-191
77	CIII i 3住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.3	2.0	0.9	5.3	28-192	47-192
78	CIII i 3住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.9	1.8	0.7	3.7	28-193	47-193
79	CIII i 3住	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.1	1.4	0.5	1.5	28-194	47-194
80	CIII i 3住	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.8	7.0	3.4	395.0	18-195	47-195
81	CIII i 3住	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	11.5	5.8	5.0	540.0	28-196	47-196
82	CIII i 3住	埋土下位	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(7.4)	8.0	4.3	250.0	28-197	47-197
83	CIII j 3-1住	埋土下位	不定形石器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	3.3	4.3	0.6	7.6	29-208	48-208
84	CIII j 3-1住	埋土	石核	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.6	4.9	2.8	70.0	29-209	48-209
85	CIII j 3-1住	埋土下位	石棒	凝灰質砂岩	二戸一帯・新第三系中新統	(8.2)	4.5	4.1	120.0	29-210	48-210
86	CIII j 3-1住	床上	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.0	6.7	6.8	610.0	29-211	48-211
87	CIII j 3-2住	埋土下位	不定形石器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.0	6.0	1.2	25.0	30-214	48-214
88	CIII j 3-2住	埋土下位	フレーク	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	2.7	4.1	0.7	8.4	30-215	48-215
89	DIII a 4住	埋土下位	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.6	5.5	5.1	400.0	32-219	48-219
90	DIII a 4住	埋土	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.8	9.9	4.2	620.0	32-220	48-220
91	DIII a 4住	埋土	磨・凹・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(8.6)	6.7	2.4	240.0	32-221	48-221
92	DIII a 5住	床上	石皿	流紋岩質中粒凝灰岩	二戸一帯・新第三系中新統	(7.1)	(14.1)	2.4	320.0	32-223	49-223
93	DIII a 5住	床上	石皿	凝灰質砂岩	二戸一帯・中新統	29.0	27.6	4.4	4300.0	32-224	49-224
94	DIII c 3住	床上	石鏃	チャート	北上山地・古生界	2.9	1.6	0.5	1.2	35-240	50-240
95	DIII c 3住	埋土	搔・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.3	2.0	0.6	3.3	35-241	50-241
96	DIII c 3住	埋土	搔・削器	チャート	北上山地・古生界	2.8	3.3	1.1	10.5	35-242	50-242
97	DIII c 3住	埋土	フレーク	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	1.4	1.9	0.4	1.3	35-243	50-243
98	DIII c 3住	床上	フレーク	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.8	2.3	0.4	2.6	35-244	50-244
99	DIII c 3住	床上	フレーク	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	3.2	3.9	1.1	9.7	35-245	50-245
100	DIII c 3住	床上	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	18.5	19.7	8.2	3560.0	35-246	50-246
101	BIII a 4住居跡状	床上	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.0	2.0	0.7	4.4	38-271	51-271
102	BIII a 4住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.2	1.4	0.7	2.1	38-272	51-272
103	BIII a 4住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.0	2.7	1.2	15.0	38-273	51-273
104	BIII a 4住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.9	2.4	1.2	11.0	38-274	51-274

表3 石器計測表(3)

( ) は現存値

No	遺構名 (グリット名)	出土地点	器種	石質	産地・成生年代	計測値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
105	BIII a 4 住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.1	2.4	0.7	10.5	38-275	51-275
106	BIII a 4 住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.9	1.9	0.6	7.9	38-276	51-276
107	BIII a 4 住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.9	1.6	0.8	4.5	38-277	51-277
108	BIII a 4 住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.7	2.7	0.4	4.3	38-278	51-278
109	BIII a 4 住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.1	2.3	0.7	3.0	38-279	51-279
110	BIII a 4 住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	2.2	0.8	5.5	38-280	51-280
111	BIII a 4 住居跡状	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.5	1.3	0.6	2.9	38-281	51-281
112	BIII a 4 住居跡状	西壁際下位	石核	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	6.0	7.3	3.0	181.0	38-282	51-282
113	BIII a 4 住居跡状	西壁際下位	石核	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	10.6	7.7	5.4	512.0	39-283	52-283
114	BIII a 4 住居跡状	西壁際下位	石核	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	10.6	8.8	5.8	420.0	38-284	52-284
115	BIII a 4 住居跡状	Q,埋土	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	9.4	3.1	1.7	84.0	39-285	52-285
116	BIII a 4 住居跡状	床上	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(4.5)	(7.5)	5.4	175.0	39-286	52-286
117	BIII a 4 住居跡状	床上	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.0	8.4	7.6	690.0	39-287	52-287
118	BIII a 4 住居跡状	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.7	8.3	7.3	725.0	39-288	52-288
119	BIII a 4 住居跡状	埋土	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	13.5	11.8	8.6	1520.0	39-289	52-289
120	BIII a 4 住居跡状	埋土	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.3	3.7	4.5	320.0	39-290	52-290
121	BIII a 4 住居跡状	埋土	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.2	6.7	5.4	515.0	39-291	52-291
122	BIII a 4 住居跡状	埋土	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.0	10.3	4.5	630.0	39-292	52-292
123	BII 8 10 焼土	焼土上面	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	13.7	8.5	6.7	1105.0	44-1	53-1
124	DIII a 5 焼土	焼土上面	円盤状石製品	白色粒凝灰岩	二戸一帯・新第三系中新統	6.3	5.9	3.8	55.0	44-8	53-8
125	AII j 10 土坑	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.5	2.1	0.7	2.8	50-1	54-1
126	AII j 10 土坑	埋土	楔形石器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.3	2.7	0.7	4.7	50-2	54-2
127	AII j 10 土坑	埋土	楔形石器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.1	3.5	0.6	4.1	50-3	54-3
128	AII j 10 土坑	埋土	不定形石器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.0	3.0	0.8	5.2	50-4	54-4
129	BII a 9 土坑	埋土下位	石鏃	チャート	北上山地・古生界	3.8	1.4	0.6	3.5	50-5	54-5
130	BII a 9 土坑	埋土下位	搔・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	2.8	2.2	0.4	1.9	50-6	54-6
131	BII a 9 土坑	埋土下位	フレック	チャート	北上山地・古生界	4.0	2.2	0.7	6.0	50-7	54-7
132	BII a 9 土坑	埋土下位	フレック	チャート	北上山地・古生界	4.2	2.4	0.8	8.2	50-8	54-8
133	BII a 9 土坑	埋土下位	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.2	4.3	5.5	265.0	50-15	54-15
134	DII a 8 土坑	埋土下位	石器原材	角閃石英安山岩	二戸一帯・新第三系中新統	(46.5)	12.4	8.0	8100.0	51-26	55-26
135	DIII b 5-1 土坑	埋土中位	石鏃	チャート	北上山地・古生界	2.8	2.5	1.1	8.3	51-30	55-30
136	DIII b 5-1 土坑	埋土下位	搔・削器	チャート	北上山地・古生界	2.9	1.9	0.6	2.9	51-31	55-31
137	BIII b 2 陥し穴	埋土	フレック	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	2.7	2.0	0.5	3.0	53-7	56-7
138	BIII b 2 陥し穴	埋土	フレック	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	2.9	2.1	0.5	2.4	53-8	56-8
139	BIII b 2 陥し穴	埋土	フレック	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	3.0	2.4	0.7	4.6	53-9	56-9
140	BIII b 2 陥し穴	埋土	フレック	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	3.0	3.7	0.6	6.0	50-10	56-10
141	BIII b 2 陥し穴	埋土	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.6	7.0	3.6	520.0	53-11	56-11
142	CIII j 4 陥し穴	埋土	フレック	チャート	北上山地・古生界	2.6	1.4	0.7	3.3	54-15	56-15
143	CIII j 4 陥し穴	埋土	磨・敲石	硬砂岩	北上山地・古生界	11.2	6.4	2.4	280.0	56-21	56-21
144	CIII j 4 陥し穴	埋土	フレック	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.0	2.0	0.5	4.0	56-22	56-22
145	CIII j 4 陥し穴	埋土	フレック	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.9	3.4	0.7	4.5	56-23	56-23
146	DII f 10 陥し穴	埋土	搔・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.2	2.3	0.8	7.1	58-30	57-30
147	DII f 10 陥し穴	埋土	搔・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.0	2.3	0.5	3.7	58-31	57-31
148	DII f 10 陥し穴	埋土	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.7	3.4	0.5	3.8	58-32	57-32
149	DII f 10 陥し穴	埋土	フレック	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	1.7	2.7	0.3	1.7	58-33	57-33
150	DIII c 5 陥し穴	埋土	石鏃	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.9	1.3	0.6	1.3	61-39	57-39
151	DIII c 5 陥し穴	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	1.8	0.8	5.5	61-40	57-40
152	DIII c 5 陥し穴	埋土	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.6	1.9	0.7	4.8	61-41	57-41
153	DIII c 5 陥し穴	埋土	フレック	チャート	北上山地・古生界	3.2	1.5	0.9	2.7	61-42	57-42
154	DIII c 5 陥し穴	埋土中位	フレック	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.8	1.7	0.5	3.3	61-43	57-43
155	DIII c 5 陥し穴	埋土上位	フレック	チャート	北上山地・古生界	2.6	2.0	0.7	3.9	61-44	57-44
156	DIII c 5 陥し穴	埋土	フレック	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	3.0	1.8	1.2	4.7	61-45	57-45

表4 石器計測表(4)

( )は現存値

No	遺構名 (グリット名)	出土地点	器種	石質	産地・成生年代	計測値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
157	DIII c 5 陥し穴	埋土	フレーク	チャート	北上山地・古生界	4.0	3.3	0.8	5.9	61-46	57-46
158	DIII c 5 陥し穴	埋土上位	フレーク	チャート	北上山地・古生界	6.0	2.7	1.0	15.8	61-47	57-47
159	CIII j 5 配石	配石内	フレーク	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.1	1.1	0.6	2.8	64-6	58-6
160	CIII j 5 配石	配石内	フレーク	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.0	3.3	0.7	12.1	64-7	58-7
161	CIII j 5 配石	配石内	フレーク	チャート	北上山地・古生界	4.1	2.5	1.1	12.6	64-8	58-8
162	BIII c 4	III層	石鏃	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	2.6	1.2	0.5	1.2	86-1	74-1
163	BIII c 6	IV層	石鏃	珪質粘板岩	北上山地・古生界	2.9	1.5	0.7	2.4	86-2	74-2
164	DIII c 3	IV層上	石鏃	チャート	北上山地・古生界	(2.1)	1.4	0.4	0.7	86-3	74-3
165	BIII c 3	I層	石鏃	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.2	1.2	0.5	1.2	86-4	74-4
166	DII h 9	III層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	3.3	1.5	0.6	2.2	86-5	74-5
167	BIII a 7	III層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	3.6	1.4	0.6	2.8	86-6	74-6
168	CIII e 6	I層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	3.5	1.9	0.5	2.6	86-7	74-7
169	CIII区	III層	石鏃	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	(4.6)	2.2	0.5	4.7	86-8	74-8
170	BIII b 2	IV層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	(1.6)	1.4	0.5	0.8	86-9	74-9
171	BIII b 6	III層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	2.6	1.7	0.6	3.0	86-10	74-10
172	DIII区	III層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	(3.8)	1.7	0.7	3.3	86-11	74-11
173	BIII b 1	IV層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	2.5	1.5	0.7	2.2	86-12	74-12
174	トレンチ1中央	I層	石鏃	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.5	2.0	0.7	2.8	86-13	74-13
175	BIII c 3	III層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	2.4	1.7	0.6	2.0	86-14	74-14
176	BII区	I層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	(2.5)	1.5	1.0	4.1	86-15	74-15
177	DIII区	III層	石鏃	珪質粘板岩	北上山地・古生界	(5.8)	1.9	1.1	13.2	86-16	74-16
178	DIII区	III層	石鏃	チャート	北上山地・古生界	3.8	2.6	0.4	4.0	86-17	74-17
179	BIII a 1	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	2.5	1.9	0.4	2.2	86-18	74-18
180	CIII区	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	6.5	3.5	1.4	43.5	86-19	74-19
181	DIII j	I層	掻・削器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	5.0	2.4	1.8	13.0	86-20	74-20
182	BII区	III層	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.7	2.0	0.5	3.7	86-21	74-21
183	BII c 10	IV層	掻・削器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	3.5	7.4	1.1	29.3	86-22	74-22
184	BII d 8~9	IV層中位	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	7.1	3.4	1.3	40.4	86-23	74-23
185	DIII区	III層	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	5.8	3.3	0.6	11.3	87-24	75-24
186	BIII e 6	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	6.3	3.7	0.7	22.5	87-25	75-25
187	DIII区	I層	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.8	3.2	0.4	10.1	87-26	75-26
188	トレンチ南	I層	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	6.5	4.7	1.3	42.5	87-27	75-27
189	DIII区	III層	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.5	3.3	1.2	15.8	87-28	75-28
190	DIII c 5	III層	掻・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	1.8	1.6	0.5	1.6	87-29	75-29
191	DII区	I層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	3.7	1.2	0.4	1.9	87-30	75-30
192	BIII c 5	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	2.0	1.7	0.4	1.6	87-31	75-31
193	DIII i 6	IV層	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.2	1.8	0.7	9.3	87-32	75-32
194	BIII b 4	III層	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.0	2.3	1.0	7.6	87-33	75-33
195	BII区	IV層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	2.6	2.0	0.4	2.4	87-34	75-34
196	DIII h 2	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	2.5	1.7	1.0	4.2	87-35	75-35
197	BII f 8	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	1.8	3.4	0.6	5.2	87-36	75-36
198	DIII a 5	III層	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.5	2.9	1.3	18.3	87-37	75-37
199	BIII e 4	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	4.1	3.3	1.1	16.8	87-38	75-38
200	BII区	I層	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.1	2.4	0.7	7.8	87-39	75-39
201	BII d 9	IV層下位	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.1	2.5	0.7	6.1	87-40	75-40
202	BIII c 5	IV層	掻・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	2.4	1.9	0.5	2.2	87-41	75-41
203	BIII c 7	III層	掻・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.0	2.9	1.0	12.5	87-42	75-42
204	CIII j 3	I層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	3.1	2.7	0.4	4.3	87-43	75-43
205	AII区	I層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	3.7	1.9	0.6	5.4	87-44	75-44
206	AIII j 4	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	3.8	1.9	0.6	4.6	87-45	75-45
207	CIII区	III層	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.9	2.7	1.0	13.5	87-46	75-46
208	BII a 5	IV層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	4.7	3.6	1.1	24.9	88-47	76-47

表5 石器計測表(5)

( ) は現存値

No	遺構名 (グリット名)	出土地点	器種	石質	産地・成生年代	計測値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
209	DIII区	III層	撿・削器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.2	2.4	0.6	8.7	88-48	76-48
210	CIII区	IV層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	5.0	3.7	0.6	18.2	88-49	76-49
211	BII d 9	IV層	撿・削器	細砂質凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	6.1	4.4	0.7	21.1	88-50	76-50
212	DIII d 7	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.0	2.0	0.5	2.2	88-51	76-51
213	BIII a 6	IV層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.7	3.8	1.0	15.8	88-52	76-52
214	BII e 10	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.9	1.6	1.0	4.8	88-53	76-53
215	BIII区	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	4.1	2.0	1.1	11.4	88-54	76-54
216	BII c 10	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.4	2.8	0.6	3.0	88-55	76-55
217	BIII a 6	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.5	2.3	0.5	3.0	88-56	76-56
218	BIII区	III層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	6.6	3.4	0.8	16.2	88-57	76-57
219	DIII a 5	III層	撿・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.0	4.0	1.0	16.0	88-58	76-58
220	BII f 9	IV層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	8.6	3.6	1.1	42.9	88-59	76-59
221	BII c 10	IV層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.3	3.7	0.7	10.2	88-60	76-60
222	BII c 10	IV層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	5.9	2.3	0.7	8.1	88-61	76-61
223	BIII b 1	IV層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.0	2.2	0.5	4.1	88-62	76-62
224	BIII区	III層	撿・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	2.8	2.9	0.7	9.0	88-63	76-63
225	BII区	I層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.9	1.7	0.4	3.0	88-64	76-64
226	BII c 9	IV層	撿・削器	粘板岩	北上山地・古生界	6.5	5.9	1.7	57.3	89-65	77-65
227	DIII g 3	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	3.4	3.9	1.0	12.8	89-66	77-66
228	DIII d	I層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.4	2.7	0.8	5.9	89-67	77-67
229	DII区	III層	撿・削器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	3.7	3.7	1.2	14.3	89-68	77-68
230	CIII j 8	III層	撿・削器	凝灰質珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	7.6	3.1	0.8	23.9	89-69	77-69
231	BII d 10	IV層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	2.3	2.9	0.3	1.9	89-70	77-70
232	AII j 9	IV層上位	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.2	3.7	1.2	11.7	89-71	77-71
233	DII b 9	I層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.5	2.4	0.8	4.9	89-72	77-72
234	BII区	I層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.7	2.8	1.1	16.0	89-73	77-73
235	BII a 5	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	5.1	1.2	0.9	7.9	89-74	77-74
236	BIII a 5	III層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	4.4	2.4	0.6	6.9	89-75	77-75
237	CIII区	IV層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.4	2.2	1.0	10.6	89-76	77-76
238	CIII区	III層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.3	1.7	0.4	2.7	89-77	77-77
239	DII f 10	III層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	3.3	1.7	0.7	6.5	89-78	77-78
240	DIII f ~ g	I層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.8	7.7	1.0	48.1	89-79	77-79
241	AII区	I層	撿・削器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	5.6	3.2	0.8	17.5	89-80	77-80
242	CIII j 1	I層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	1.7	2.1	0.7	4.5	90-81	78-81
243	AIII j 7	III層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	3.7	2.2	0.7	6.2	90-82	78-82
244	CIII i 5	III層	撿・削器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	5.4	4.4	1.0	25.4	90-83	78-83
245	BII e 9	IV層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.1	4.0	1.0	18.5	90-84	78-84
246	BII b 7	IV層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	5.7	3.1	1.2	24.3	90-85	78-85
247	DIII区	I層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	5.9	6.5	1.3	48.7	90-86	78-86
248	BII g 7	III層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	5.3	3.8	0.8	22.5	90-87	78-87
249	DIII f 5	IV層	撿・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	3.9	4.9	1.4	26.2	90-88	78-88
250	AII区	I層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	3.1	2.5	1.2	9.8	90-89	78-89
251	トレンチ南	盛土	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.5	1.4	0.5	2.0	90-90	78-90
252	DIII h 6	III層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.8	2.2	0.7	7.8	90-91	78-91
253	BII区	I層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.8	2.6	0.5	3.9	90-92	78-92
254	DIII c 5	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	1.7	1.9	0.5	2.0	90-93	78-93
255	BII区	I層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	2.8	2.4	0.5	3.3	90-94	78-94
256	BII c 9	IV層	撿・削器	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	2.8	1.8	0.7	5.6	90-95	78-95
257	DIII h 7	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	3.4	2.9	0.8	13.7	90-96	78-96
258	BII c 9	IV層	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	3.3	2.1	1.1	8.3	90-97	78-97
259	BIII a 6	IV層	撿・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.9	2.5	0.6	10.6	91-98	79-98
260	トレンチ(杭)南	粗掘	撿・削器	チャート	北上山地・古生界	5.2	2.7	0.9	17.9	91-99	79-99



表6 石器計測表(6)

( ) は現存値

No	遺構名 (グリット名)	出土地点	器種	石質	産地・成生年代	計測値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
261	D III f 4	IV層	掻・削器	粘板岩	北上山地・古生界	6.7	2.4	0.6	11.4	91-100	79-100
262	D III区	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	3.2	2.0	0.6	3.9	91-101	79-101
263	C III区	III層	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.3	1.5	0.7	4.7	91-102	79-102
264	C III区	III層	掻・削器	チャート	北上山地・古生界	3.6	2.8	0.8	9.1	91-103	79-103
265	B III区	III層	掻・削器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	2.0	3.1	0.5	3.6	91-104	79-104
266	D III区	I層	掻・削器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	3.9	3.9	9.0	15.3	91-105	79-105
267	D II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.3	1.8	0.7	3.7	91-106	79-106
268	B III c 5	IV層	楔形石器	粘板岩	北上山地・古生界	2.2	2.4	0.7	4.4	91-107	79-107
269	D III h 4	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.8	1.8	0.7	3.5	91-108	79-108
270	D III c 5	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.3	2.0	1.1	7.8	91-109	79-109
271	A III j 6	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.6	2.5	1.1	9.4	91-110	79-110
272	D II c 9	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	3.3	1.1	14.7	91-111	79-111
273	B II a 9	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.5	2.5	0.9	15.8	91-112	79-112
274	トレンチ中央	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.7	2.6	0.9	7.7	91-113	79-113
275	D III d	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.2	2.9	0.7	5.3	91-114	79-114
276	B II d 10	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	2.5	0.8	7.3	91-115	79-115
277	A II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.0	3.0	1.2	18.3	91-116	79-116
278	B II d 9	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.9	3.7	1.2	22.3	91-117	79-117
279	A III j 6	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.8	1.3	0.9	4.1	92-118	80-118
280	C II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.5	2.5	0.7	6.0	92-119	80-119
281	D III a 5	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.5	2.6	1.3	15.3	92-120	80-120
282	C III j 3	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.4	2.7	0.8	8.6	92-121	80-121
283	D II h 9	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	1.8	1.9	0.8	3.1	92-122	80-122
284	A III f 6	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	1.6	0.8	4.9	92-123	80-123
285	A III i 4	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.6	2.5	0.6	5.2	92-124	80-124
286	B II f 10	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	5.3	1.6	0.6	15.4	92-125	80-125
287	B II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.8	2.3	1.0	7.4	92-126	80-126
288	D II h 9	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.3	1.8	0.8	7.0	92-127	80-127
289	D III区	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.0	1.7	0.7	2.8	92-128	80-128
290	B III b 2	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.0	1.9	0.8	3.0	92-129	80-129
291	C III j 5	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.7	2.3	0.9	7.2	92-130	80-130
292	B III c 5	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.6	1.3	0.7	2.9	92-131	80-131
293	D III a 5	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.5	2.9	0.8	7.4	92-132	80-132
294	B II a 10	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.3	1.6	0.7	3.8	92-133	80-133
295	B III i	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.1	2.3	0.9	7.1	92-134	80-134
296	D II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.1	2.3	0.6	2.9	92-135	80-135
297	B II d 9	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.2	1.6	0.6	2.4	92-136	80-136
298	A III j 6	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.6	1.8	0.7	6.6	92-137	80-137
299	C III h 4	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.1	1.6	0.4	1.4	92-138	80-138
300	A II j 10	III層	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.8	1.5	0.9	4.8	92-139	80-139	
301	B II f 9	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.7	2.7	1.2	16.8	92-140	80-140
302	B II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.7	3.4	0.8	11.2	92-141	80-141
303	C III区	III層	楔形石器	珪質泥岩	磐石西部・新第三系中新統	4.1	2.6	0.9	10.5	92-142	80-142
304	B III a 5	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.8	3.4	1.0	15.5	92-143	80-143
305	B III a 4	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.3	1.4	0.7	1.8	93-144	81-144
306	D II h 9	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.1	1.4	0.5	2.0	93-145	81-145
307	B II b 9	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.2	1.5	1.0	5.2	93-146	81-146
308	B III c 6	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.2	2.2	0.8	6.5	93-147	81-147
309	D III c 5	III層	楔形石器	輝緑凝灰岩	北上山地・古生界	2.4	2.0	0.4	2.1	93-148	81-148
310	B II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.7	1.5	0.4	2.9	93-149	81-149
311	B II区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.0	1.7	0.6	4.0	93-150	81-150
312	B III b 1	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	2.9	2.3	0.5	4.9	93-151	81-151

表7 石器計測表(7)

( ) は現存値

No	遺 構 名 (グリット名)	出土地点	器 種	石 質	産地・成生年代	計 測 値				図版番号	写真番号
						長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)		
313	B II f 9	III層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.5	2.2	1.4	13.8	93-152	81-152
314	B II 区	I層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	3.1	2.4	0.8	7.9	93-153	81-153
315	C III j 7	IV層	楔形石器	チャート	北上山地・古生界	4.3	1.4	0.8	4.6	93-154	81-154
316	B III 区	I層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.0	1.5	0.2	0.7	93-155	81-155
317	B II d 9	IV層	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	2.7	1.6	0.6	2.2	93-156	81-156
318	B III 区	I層	不定形石器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	2.8	3.1	0.8	5.8	93-157	81-157
319	B II f 9	III層	不定形石器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	5.4	2.2	1.2	10.9	93-158	81-158
320	A II 区	I層	不定形石器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	4.3	1.5	0.3	2.7	93-159	81-159
321	D III d	I層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.7	1.2	0.7	2.3	93-160	81-160
322	D III j	I層	不定形石器	蠟綠凝灰岩	北上山地・古生界	2.8	2.7	0.4	4.6	93-161	81-161
323	B III a 5	IV層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.3	4.3	0.7	3.8	93-162	81-162
324	B III a 5	III層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.8	2.4	0.8	5.9	93-163	81-163
325	D III h 7	IV層	不定形石器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	2.8	2.1	0.6	4.1	93-164	81-164
326	D III f ~ g	I層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	4.0	4.6	1.0	22.3	93-165	81-165
327	B III i	III層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	4.7	2.6	0.5	7.0	93-166	81-166
328	B II f 9	IV層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	4.6	2.9	0.9	13.0	93-167	81-167
329	A III j 6	IV層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	4.6	4.0	0.7	15.9	94-168	82-168
330	B II a 2	IV層上位	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	2.8	2.9	0.8	6.7	94-169	82-169
331	B II f 9	III層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	4.5	2.2	0.7	11.7	94-170	82-170
332	B II 区	I層	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	4.6	2.9	0.9	11.8	94-171	82-171
333	トレンチ 1 南	I層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.2	1.9	0.3	1.1	94-172	82-172
334	B III b 4	IV層	不定形石器	珪質粘板岩	北上山地・古生界	5.3	5.0	0.8	21.6	94-173	82-173
335	D II a 9	III層	不定形石器	凝灰質珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	6.6	5.4	1.0	36.3	94-174	82-174
336	B II 区	I層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	2.4	1.5	0.4	1.2	94-175	82-175
337	B II 区	I層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	3.4	2.7	1.0	7.2	94-176	82-176
338	D III 区	I層	不定形石器	珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	3.2	4.1	0.9	8.6	94-177	82-177
339	D II 区	I層	不定形石器	チャート	北上山地・古生界	3.1	1.6	0.4	2.7	94-178	82-178
340	D III c 4	IV層上位	不定形石器	蠟綠凝灰岩	北上山地・古生界	4.8	3.6	1.1	25.9	94-179	82-179
341	A III j 7	III層	石核	玻璃質流紋岩	奥羽山地・新第三系中新統	6.5	7.1	3.0	118.0	94-180	82-180
342	D II 区	I層	石核	凝灰質珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	4.1	3.5	2.4	36.1	94-181	82-181
343	D II h 9	II層	石核	細砂質凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.0	9.4	3.4	380.0	95-182	83-182
344	トレンチ中央	I層	石核	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.4	3.6	2.5	51.5	95-183	83-183
345	B III d 4	III層	石核	粘板岩	北上山地・古生界	7.8	6.4	5.2	325.0	95-184	83-184
346	B III 区	I層	石核	珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	5.5	3.9	2.2	53.5	95-185	83-185
347	B III 区	I層	石核	凝灰質珪質泥岩	礫石西部・新第三系中新統	6.0	5.6	4.0	200.0	95-186	83-186
348	B II f 10	III層	石核	チャート	北上山地・古生界	6.2	4.1	2.5	75.0	95-187	83-187
349	A III i 3	IV層	磨製石斧	チャート質淡緑色凝灰岩	北上山地・古生界	(3.4)	1.2	0.7	4.5	96-1	84-1
350	D II 区	I層	磨製石斧	粘板岩	北上山地・古生界	4.2	1.7	0.8	10.0	96-2	84-2
351	D III 区	I層	磨製石斧	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	6.3	3.1	1.2	32.0	96-3	84-3
352	A III g 4	IV層	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	9.1	3.4	1.7	80.0	96-4	84-4
353	D III h 4	IV層	磨製石斧	粘板岩	北上山地・古生界	12.5	4.1	2.6	218.0	96-5	84-5
354	D II i 10	I層	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(13.1)	4.1	2.9	245.0	96-6	84-6
355	B II f 10	III層	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(3.1)	1.9	1.0	6.0	96-7	84-7
356	B III 区	IV層	磨製石斧	粘板岩	北上山地・古生界	(2.4)	2.3	1.0	6.0	96-8	84-8
357	A II 区	I層	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(3.3)	2.6	1.2	15.0	96-9	84-9
358	B III 区	I層	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(7.7)	3.5	2.3	90.0	96-10	84-10
359	B II d 9	IV層下位	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(13.0)	4.2	2.9	250.0	96-11	84-11
360	B III 区	I層	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(10.8)	4.3	2.9	200.0	96-12	84-12
361	B II 区	I層	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(11.3)	5.6	3.0	310.0	96-13	84-13
362	D III a 5	III層	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(11.8)	4.9	3.7	320.0	97-14	85-14
363	B III a 5	IV層	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(11.4)	4.2	3.0	240.0	97-15	85-15
364	D II 区	I層	磨製石斧	輝石紛岩	北上山地・古生界	(11.9)	4.0	2.6	195.0	97-16	85-16

表8 石器計測表(8)

( ) は現存値

No	遺 構 名 (グリット名)	出土地点	器 種	石 質	産地・成生年代	計 測 値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
365	DIII a 4	IV層上位	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(9.4)	4.6	2.9	202.0	97-17	85-17
366	DIII d 3	III層	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(6.2)	4.7	3.1	112.0	97-18	85-18
367	BIII a 5	IV層	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(6.4)	5.1	2.7	150.0	97-19	85-19
368	BIII e 3	IV層	磨製石斧	硬砂岩	北上山地・古生界	(8.0)	4.9	2.6	187.0	97-20	85-20
369	BII c 9	IV層	磨製石斧	輝石砂岩	北上山地・古生界	(5.3)	3.7	2.6	73.0	97-21	85-21
370	DIII a 4	IV層上位	磨製石斧	輝石砂岩	北上山地・古生界	(8.6)	4.8	3.3	218.0	97-22	85-22
371	DIII b 4	IV層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	19.0	20.3	4.5	2600.0	98-1	86-1
372	DIII d 1	III層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	16.5	9.8	2.8	900.0	98-2	86-2
373	DIII d 1	III層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(9.7)	(9.0)	3.4	418.0	98-3	86-3
374	CIII j 3	I層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(9.6)	(9.2)	2.0	277.0	98-4	86-4
375	DIII g 4	II層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	35.0	22.6	4.4	7500.0	98-5	86-5
376	BII c 10	IV層	石皿	軽石質凝灰岩	二戸一帯・中新統	17.8	11.0	2.7	485.0	98-6	86-6
377	AIII i 3	IV層	石皿	角閃石英安山岩	二戸一帯・新第三系中新統	(10.0)	(13.3)	2.8	700.0	98-7	86-7
378	BII d 10	IV層	石皿	軽石質凝灰岩	二戸一帯・中新統	(8.7)	(4.9)	2.7	135.0	98-8	86-8
379	BII c 10	IV層	石皿	軽石質凝灰岩	二戸一帯・中新統	(21.4)	(16.7)	5.5	1415.0	99-9	87-9
380	BII d 7	III層	石皿	角閃石英安山岩	二戸一帯・新第三系中新統	(11.6)	(18.2)	5.0	1180.0	99-10	87-10
381	CIII g 6~7	I層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(16.0)	(18.4)	2.5	1030.0	99-11	87-11
382	BIII e 5	III層	石皿	軽石質凝灰岩	二戸一帯・中新統	(5.7)	(6.0)	1.7	75.0	99-12	87-12
383	CIII g 7	I層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(18.3)	(27.2)	5.0	4750.0	99-13	87-13
384	BII c 10	IV層	石皿	軽石質凝灰岩	二戸一帯・中新統	(7.9)	(10.3)	5.2	365.0	99-14	87-14
385	BIII c 5	IV層	凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.4	8.0	5.4	465.0	100-1	88-1
386	DIII d 7	III層	凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.3	6.7	4.0	430.0	100-2	88-2
387	AIII j 5	III層	凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.8	9.6	5.0	645.0	100-3	88-3
388	CIII h 1	IV層	凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	11.2	8.3	3.3	406.0	100-4	88-4
389	AIII区	I層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	5.4	4.8	4.3	160.0	100-5	88-5
390	AIII i 5	IV層	磨石	チャート	北上山地・古生界	7.5	7.2	6.5	473.0	100-6	88-6
391	DIII c 5	IV層	磨石	硬砂岩	北上山地・古生界	7.5	5.7	2.4	135.0	100-7	88-7
392	BIII c 5	III層	磨石	チャート	北上山地・古生界	9.5	(6.2)	3.1	290.0	100-8	88-8
393	BIII区	I層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	7.1	5.8	4.5	217.0	100-9	88-9
394	AII j 10	IV層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	7.7	7.5	5.5	430.0	100-10	88-10
395	BIII区	I層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	7.7	7.1	4.0	325.0	100-11	88-11
396	BIII a 6	IV層	磨石	チャート	北上山地・古生界	7.0	4.8	2.6	147.0	100-12	88-12
397	DIII区	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	7.7	4.7	2.8	95.0	100-13	88-13
398	BIII b 4	IV層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(4.5)	6.9	4.1	123.0	101-14	89-14
399	CIII j 6	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(8.6)	(6.5)	3.3	222.0	101-15	89-15
400	BII d 10	IV層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.1	9.6	4.9	845.0	101-16	89-16
401	BIII区	I層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.1	5.8	4.2	415.0	101-17	89-17
402	BIII区	I層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(4.2)	4.9	2.3	65.0	101-18	89-18
403	AIII h 7	IV層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	11.3	3.7	2.8	215.0	101-19	89-19
404	CIII区	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.3	6.2	2.5	160.0	101-20	89-20
405	CIII j 3	I層	磨石	両輝石安山岩熔岩	八幡平・第四系	9.7	8.5	5.1	340.0	101-21	89-21
406	AIII j 4	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.4	7.1	4.1	397.0	101-22	89-22
407	CIII区	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.9	6.8	3.6	500.0	101-23	89-23
408	BIII区	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	13.3	6.2	3.3	417.0	101-24	89-24
409	BIII c 1	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	13.9	6.6	2.2	225.0	101-25	89-25
410	DIII d 1	III層	磨石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(14.5)	7.5	3.0	588.0	101-26	89-26
411	DIII d 7	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.7	7.3	4.9	430.0	102-27	90-27
412	BII e 10	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.3	7.3	5.7	550.0	102-28	90-28
413	DIII区	IV層下位	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.6	6.7	6.2	500.0	102-29	90-29
414	BIII区	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.2	7.6	5.0	405.0	102-30	90-30
415	BIII a 4	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.2	8.7	5.5	680.0	102-31	90-31
416	AIII j 4	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.9	6.9	3.2	386.0	102-32	90-32

表9 石器計測表(9)

( ) は現存値

No	遺構名 (グリット名)	出土地点	器種	石質	産地・成生年代	計測値				図版番号	写真番号
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
417	BIII c 4	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(8.8)	6.9	4.2	346.0	102-33	90-33
418	AIII i 3	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	11.5	6.8	3.1	380.0	103-34	91-34
419	BIII c 7	III層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.3	7.0	4.5	470.0	103-35	91-35
420	BII区	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.2	7.7	3.4	364.0	103-36	91-36
421	トレンチ 1	中央	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.8	7.3	4.3	455.0	103-37	91-37
422	BIII d 4	III層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	9.8	9.3	7.4	718.0	103-38	91-38
423	BIII a 2	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.2	8.9	6.6	515.0	103-39	91-39
424	DIII c 1	III層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.9	8.7	4.1	400.0	103-40	91-40
425	BIII区	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.7	8.9	6.0	808.0	103-41	91-41
426	BIII i	III層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	7.0	7.7	4.7	330.0	104-42	92-42
427	BII区	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	7.8	8.6	6.0	475.0	104-43	92-43
428	BII区	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	(8.0)	8.7	5.2	410.0	104-44	92-44
429	BII f 10	III層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.0	7.2	3.8	348.0	104-45	92-45
430	DII c 6	土取穴	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.1	5.5	3.5	425.0	104-46	92-46
431	AII i 9	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.7	6.2	4.0	415.0	104-47	92-47
432	CIII e 6	III層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.2	6.3	4.1	437.0	104-48	92-48
433	BII区	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	11.7	6.5	4.6	540.0	104-49	92-49
434	CIII j 8	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	10.8	5.8	4.3	430.0	105-50	93-50
435	AII区	I層	磨・凹石	硬砂岩	北上山地・古生界	(10.7)	5.3	(4.2)	328.0	105-51	93-51
436	CIII j 6	III層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	13.2	7.9	3.5	582.0	105-52	93-52
437	DIII区	I層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	15.9	5.8	3.2	430.0	105-53	93-53
438	BII e 9	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.8	6.8	4.5	685.0	105-54	93-54
439	BIII c 6	IV層	磨・凹石	硬砂岩	北上山地・古生界	15.3	6.5	2.6	470.0	105-55	93-55
440	BIII b 4	IV層	磨・凹石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	8.7	7.0	3.9	346.0	105-56	93-56
441	CIII f 6	III層上位	磨・凹石	角礫質硬砂岩	北上山地・古生界	(8.6)	6.0	2.6	262.0	105-57	93-57
442	DIII f 5	IV層	磨・凹石	凝灰質砂岩	二戸一帯・新第三系中新統	8.9	5.9	2.4	100.0	105-58	93-58
443	DIII区	II層	磨・凹石	凝灰質砂岩	二戸一帯・新第三系中新統	6.9	6.0	3.2	220.0	105-59	93-59
444	BII区	I層	磨・敲石	チャート	北上山地・古生界	5.3	4.9	4.8	170.0	106-60	94-60
445	BII b 7	IV層	磨・敲石	角閃黒雲母花崗岩	北上山地・古生界	8.3	7.9	5.5	510.0	106-61	94-61
446	BII d 9	IV層下位	磨・敲石	硬砂岩	北上山地・古生界	(8.1)	4.0	2.2	130.0	106-62	94-62
447	BII b 7	IV層	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	12.0	10.2	7.6	1220.0	106-63	94-63
448	BIII c 5	III層	磨・敲石	硬砂岩	北上山地・古生界	13.3	6.1	3.7	446.0	106-64	94-64
449	BII d 8	IV層上位	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	14.9	7.1	3.0	510.0	106-65	94-65
450	BIII a 6	IV層	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	14.0	6.6	3.9	590.0	106-66	94-66
451	DIII区	表探	磨・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	14.9	6.9	6.0	795.0	106-67	94-67
452	BIII a 1	IV層	磨・凹・敲石	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	11.6	7.2	5.3	590.0	106-68	94-68
453	AIII j 6	IV層	円盤状石製品	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	5.0	4.9	1.4	44.0	107-1	95-1
454	BII c 5	IV層	円盤状石製品	細砂質凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.0	3.9	0.9	11.0	107-2	95-2
455	DIII区	IV層下位	円盤状石製品	細砂質凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	6.6	6.7	1.6	77.0	107-3	95-3
456	DIII a 5	III層	円盤状有孔石製品	粘板岩	北上山地・古生界	3.3	3.4	0.4	8.0	107-4	95-4
457	AIII j 4	IV層	板状石製品	細砂質凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	(3.5)	2.9	0.6	7.0	107-5	95-5
458	AII j 9	IV層	球形状石製品	輝石安山岩	奥羽山地・新第三系中新統	4.4	4.3	3.7	85.0	107-6	95-6
459	AII区	I層	球形状石製品	白色細粒凝灰岩	二戸一帯・新第三系中新統	4.8	4.9	4.3	75.0	107-7	95-7
460	DIII区	IV層下位	球形状石製品	白色細粒凝灰岩	二戸一帯・新第三系中新統	4.9	4.5	(2.6)	40.0	107-8	95-8
461	CIII j 3	I層	石棒	細砂質凝灰岩	奥羽山地・新第三系中新統	(7.6)	3.3	2.9	66.0	107-9	95-9
462	BIII a 5	IV層	石製品(凹石)	白色細粒凝灰岩	二戸一帯・新第三系中新統	5.2	4.7	1.8	30.0	107-10	95-10

## 2. 火山灰・炭化物・石質等の鑑定分析について

火山灰の同定は、B II c 3区とC III d 6区から出土の資料2点を蛍光X線分析で行い、その結果十和田a降下火山灰との所見をいただいた。資料の解析方法や分析方法は、当埋文センター発刊の調査報告書第116集親久保I～IV遺跡のⅧ章に詳細に掲載してあるので、本稿では割愛をする。

炭化物の樹種同定は、次のような所見をいただいた。

No	遺構名	樹種	No	遺構名	樹種
1	C III h 6 土坑埋土	ナラ	4	D III h 7 土坑	クリと広葉樹
2	D III i 1 土坑埋土	クリ	5	A II j 10 土坑	クリ
3	C III j 3-1 住床面	ナラ	6	A II j 10 土坑	クリ

石器の石質・産地・生成年代は、表1～9に一括掲載している。

## Ⅶ. まとめ

本遺跡からは、縄文時代後期初頭頃の竪穴住居跡を主体とする遺構と遺物が出土している。これらを中心に若干の補足を加えまとめとする。

### 1. 遺構

#### (1) 縄文時代の竪穴住居跡・竪穴住居跡状遺構

縄文時代の竪穴住居跡と竪穴住居跡状遺構は計19棟検出され、それに伴って土器や石器が出土している。以下に遺構の立地面、平面形態と規模、炉の形態、柱穴、重複関係、土器の特徴等を項目順に述べることにする。(Noは表10に符号する)

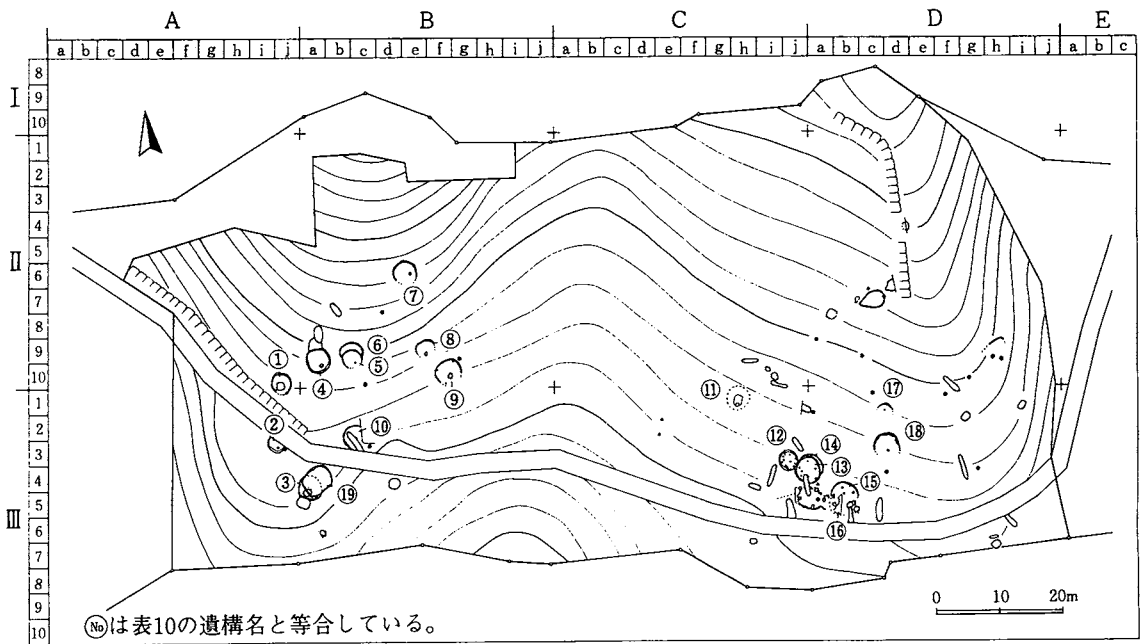
##### 遺構の立地面

調査区域の中央部には埋没した谷があり、住居跡はこれを境にして東側緩斜面と西側尾根の2地域から検出している。東側は南西寄りの斜面に8棟が集中するように立地している。西側はやや舌状に張り出す尾根の南斜面に8棟(住居跡状遺構1棟を含む)、南東斜面に3棟が点在して立地する。西側では東側地域に比べ急傾斜地に遺構が立地する傾向が見られる。最も高位に位置するのは⑦B II d 6住居跡で、下位にある③A III j 4住居跡との比高は約5.5mを測る。

##### 平面形態と規模

平面形は円形乃至楕円形を基調とするものが約半数を占めるが、隅丸方形や隅丸長方形(⑩B III a 4住居跡状遺構)を呈するものも含まれ多様である。遺構の大部分は削平を受けており、規模は推定の域を出ないものもあるが、総じて径3m～4m前後の住居跡が多い。

##### 炉の形態



第108図 竪穴住居跡分布図

表10 竪穴住居跡・竪穴住居跡状遺構一覽表

( ) は推定値、( ) は現存値

No	遺構名	平面形	規模		炉跡	柱穴	時期	備考
			開口部	床面				
1	A II i 10住居跡	隅丸方形	(3.0)m×3.1m	(2.7)m×2.9m	地床炉	—	後期初頭	A II j 10土坑と重複
2	A III i 2住居跡	円形	(1.5)m×2.75m	(1.4)m×2.5m	地床炉	—	後期初頭	A III j 3炉跡と重複
3	A III j 4住居跡	不整円形	(3.7)m×4.0m	(3.4)m×3.3m	地床炉	—	後期初頭	B III a 4住居跡状遺構・B III a 4土坑と重複
4	B II a 10住居跡	楕円形	3.95m×3.7m	3.6m×3.35m	石囲炉	2	後期初頭	B II a 9土坑と重複
5	B II b 9-1住居跡	円形	3.0m×(2.9)m	2.85m×(2.6)m	配石炉	—	後期初頭	B II b 9-2住居跡と重複
6	B II b 9-2住居跡	楕円形?	3.6m×(1.2)m	3.25m×(90)cm	不明	—	中期末~ 後期初頭	B II b 9-1住居跡と重複
7	B II d 6住居跡	円形?	3.9m×(2.6)m	3.2m×(3.0)m	配石炉	—	後期初頭	
8	B II e 9住居跡	不明	(3.1)m×(1.6)m	(3.0)m×(1.5)m	石囲炉	—	後期初頭	
9	B II f 10住居跡	隅丸方形	4.1m×(2.8)m	3.8m×(2.6)m	石囲炉	3	中期末~ 後期初頭	
10	B III b 2住居跡	不明	(3.8)m×(2.8)m	(3.7)m×(2.6)m	地床炉	—	後期初頭	B III b 2陥し穴状遺構と重複
11	C III h 1住居跡	不明	—	(1.1)m×(1.4)m	配石炉	—	不明	
12	C III i 3住居跡	円形	3.0m×3.1m	2.8m×2.8m	地床炉	6	後期初頭	
13	C III j 3-1住居跡	円形	4.15m×3.7m	3.8m×3.5m	地床炉	5	後期初頭	C III j 3-2住居跡・C III j 4陥し穴状遺構と重複
14	C III j 3-2住居跡	円形?	3.95m×(70)cm	3.8m×(55)cm	不明	—	後期初頭	C III j 3-1住居跡と重複
15	D III a 4住居跡	不明	(4.3)m×(2.2)m	(4.2)m×(2.1)m	地床炉	3	後期初頭	D III a 5住居跡と重複
16	D III a 5住居跡	不明	—	(3.0)m×(1.4)m	不明	—	後期初頭	D III a 4住居跡と重複
17	D III c 1住居跡	不明	(2.55)m×—	(2.5)m×(1.5)m	配石炉	—	後期初頭	
18	D III c 3住居跡	隅丸方形	4.0m×(2.4)m	3.7m×(2.3)m	地床炉	—	後期初頭	
19	B III a 4住居跡状	隅丸長方形	(4.6)m×(4.0)m	4.0m×3.2m	—	—	中期末~ 後期初頭	A III j 4住居跡と重複

炉は石囲炉、配石炉、地床炉の3形態が見られる。石囲炉は石を「く」の字に囲むもの、楕円形に囲むもの、方形に囲むものにと大別される。配石炉は囲まない程度に1～3個の石を埋設したもので、1個の例が多い。遺構の約半数を占めるのは地床炉で、中には土器を横位から斜位に埋設するものがあり多様である。

#### 柱穴

小穴状の柱穴が検出されたのは④B II a 10、⑨B II f 10、⑫C III i 3、⑬C III j 3-1、⑮D III a 4住居跡である。柱穴は2～6本と各遺構に差異が見られるが、3乃至5本が主体をなすと思われる。いずれも壁寄りに配置されている。

#### 重複関係

住居跡間で重複するのは8棟と比較的多い。斜面下方の遺構が上方の遺構を切っているのが3例⑤B II b 9-1・⑥B II b 9-2住居跡、⑬C III j 3-1・⑭C III j 3-2住居跡、⑯D III a 5・⑮D III a 4住居跡である。また、陥し穴状遺構と重複するのは⑩B III b 2、⑬C III j 3-1住居跡の2棟で、いずれも陥し穴状遺構に切られていることから新旧関係は住居跡が古いと言える。

#### 土器の特徴

土器は破片が多く、器形の全容がわかるものは少ない。大部分を占めるのは本遺跡の第Ⅳ群2～3類土器、第Ⅴ群土器、第Ⅵ群土器に比定されるものである。⑥B II b 9-2・⑨B II f 10住居跡、⑱B III a 4住居跡状遺構から第Ⅲ群2類土器が第Ⅳ群土器、第Ⅴ群土器と共伴して出土している。第Ⅳ群土器の文様は方形や三角形区画文を基調するものが主体で、隆帯、磨消縄文、沈線文等を多用している。これらの土器は文様や施文の特徴から東北地方北半の十腰内<sup>(註1)</sup>I式に類似するもので、縄文時代後期初頭に属する。また、⑥・⑨・⑱の3棟からは十腰内I式に先行するものと思われる土器を共伴することから見て、3遺構の時期は縄文時代中期末葉～後期初頭に属するであろう。

隣接する馬立I<sup>(註2)</sup>遺跡でも該期の住居跡が27棟検出されている。立地面は本遺跡と同様に尾根の南東及び南西斜面に偏る傾向を示している。規模は径4m～5mを呈する住居跡が主体を占め、大きさに多少差異が認められる。平面形態は類似し、円形乃至楕円形を呈するものが多い。炉の形態は石囲炉と地床炉があり、土器を埋設した地床炉は6例と比較的多い。柱穴は確認されなかった。重複関係は斜面下方の遺構が上方の遺構を切って構築されていることが両遺跡で確認されている。縄文時代中期末葉～後期初頭において、馬立I・II遺跡が立地する沢内川西岸の段丘縁辺部に集落の変遷があったことがうかがわれる。

表11 炉跡・焼土遺構一覧表

No	遺構名	形態	規模	焼土厚	備考
1	A III j 3 炉跡	配石炉(礫 1)	45cm×28cm	5 cm	
2	D II h 9 炉跡	石囲炉(礫 3)	54cm×40cm	—	炉内から土器 2 点、炉周辺から 3 点出土
3	D II h 10 炉跡	石囲炉(礫 3)	64cm×30cm	—	
4	D III c 1 炉跡	配石炉(礫 2)	30cm×25cm	—	
5	B II c 10 焼土遺構	現地性焼土	90cm×48cm	6 cm	周辺から縄文土器出土
6	B II d 7 焼土遺構	現地性焼土	47cm×23cm	1 cm	
7	B II g 10 焼土遺構	現地性焼土	45cm×34cm	12cm	焼土上面から磨石出土
8	B III c 3 焼土遺構	現地性焼土	65cm×48cm	12cm	
9	D II a 9 焼土遺構	現地性焼土	50cm×27cm	7 cm	焼土内から縄文土器片出土
10	D II c 9 焼土遺構	異地性焼土	58cm×40cm	5 cm	周辺から縄文土器片出土
11	D II g 10 焼土遺構	現地性焼土	65cm×55cm	8 cm	
12	D III a 1 焼土遺構	異地性焼土	65cm×50cm	7 cm	深鉢形土器が共伴
13	D III a 5 焼土遺構	現地性焼土	65cm×52cm	11cm	深鉢形土器が共伴、焼土上面から円盤状土製品出土
14	D III d 4 焼土遺構	現地性焼土	40cm×35cm	2 cm	
15	D III f 1 焼土遺構	現地性焼土	1.35m×60cm	8 cm	深鉢形土器の体部下半～底部 1 点出土
16	D III g 4 焼土遺構	現地性焼土	55cm×22cm	5 cm	

## (2) 炉跡

炉跡は 4 基（表11を参照）調査区域東側緩斜面と西端部林道南側から検出している。形態は石を 3 個「コ」の字状に配置した石囲炉と 1 乃至 2 個石を埋置する配石炉がある。なお、本稿では囲まない程度に石を置いたものを「配石炉」という表現を用いた。炉を構成する石は、長さ 25cm～45cm 大の直角礫や扁平な礫を使用している。炉内に焼土が形成するのは① A III j 3 炉跡だけで、他の遺構は焼土粒や炭化物の混入が僅かに認められるだけである。土器を伴うのは② D II h 9 炉跡で、炉内から本遺跡の第 V 群 1 類土器が出土している。また、② D II h 9 ・③ D III h 10 炉跡の北側には、壁状に地山を切り込んだ箇所があることを考え合わせると、本来住居跡に伴う炉跡であった可能性は十分にある。時期は遺物から縄文時代後期に比定される。

## (3) 焼土遺構

焼土遺構は調査区域東側緩斜面に 8 基、西側尾根に 4 基検出している。焼成は径 22cm～最大 135cm の範囲で受けている。遺物を共伴する遺構は 5 基（表11を参照）であり、縄文土器、円盤状土製品、磨石が出土している。縄文土器は沈線文及び隆帯を施したもので、本遺跡の第 IV 群 2～3 類土器、V 群土器に比定されるものである。遺物から見て縄文時代後期初頭の住居跡とほぼ同時期と思われるが、性格等は不詳である。



(4) 土坑

土坑は大小合わせて24基 (㊟は表12に符号する) 検出され、その内7基は埋土の状況から現代のものである。平面形は円形及び楕円形を基調とするものが半数を占め、隅丸方形や長方形は現代のものに多く見られる。断面形は浅皿状、浅鉢状、フラスコ状、台形状を呈するものがあり多様である。現代の土坑を除く17基の開口部での規模は径34cm~2.1m、深さ10cm~1.36mと大小の差異が認められ、総じて径50cm~80cm前後を測るものが多い。また、深さが50cm以上の土坑は6基あり、円形のもものが主体をなしている。分布状況は調査区域東側の緩斜面に18基、西側尾根を中心に6基が点在している。大部分は縄文の住居跡や陥し穴状遺構と同様な占地のあり方を示している。遺構と重複するものは6基で、西側尾根の③B II a 9、④B III a 4土坑は縄文時代後期の住居跡に、⑲D III b 5-1、⑳D III b 5-3土坑は陥し穴状遺構に切られている。また、遺物を伴う遺構は11基 (内1基は現代のもの) あり、剝片石器、礫石器、縄文土器等が僅かに出土している。中でも特質されるのは断面形がフラスコ状を呈する⑲D III b 5-1土坑底部から本県初の狩猟文土器が出土している。これらの縄文土器は本遺跡の第IV群2~3類土器、第V群土器に比定されるものである。遺構の構築時期は住居跡の切り合いや出土遺物から縄文時代後期初頭前後と推定されるものの、性格等は不詳である。

表12 土坑一覧表

( ) は推定値、〔 〕 は現存値

No	遺 構 名	形 態		規 模			遺 物	備 考
		平 面 形	断 面 形	開 口 部	底 部	深 さ		
1	A II j 10土坑	隅丸方形	浅皿状	1.26m×1.12m	1.16m×1.06m	18cm	剝片石器	A II i 10住居跡と重複、現代
2	A III j 5土坑	隅丸長方形	浅皿状	2.1m×1.74m	1.6m×1.2m	40cm		現代
3	B II a 9土坑	隅丸方形?	—	(1.9)m×2.1m	(1.4)m×1.5m	70cm	土器、剝片石器、礫石器	B II a 10住居跡・B II a 8陥し穴状遺構と重複
4	B III a 4土坑	円形	台形状	1.3m×1.18m	1.5m×1.4m	82cm	土器	A III j 4住居跡と重複
5	B III a 6土坑	楕円形	変形フラスコ状	1.0m×70cm	1.6m×1.2m	45cm	土器	
6	B III d 4土坑	円形	逆台形状	1.7m×1.7m	1.2m×1.0m	90cm	土器	
7	C II i 10-1土坑	不整楕円形	浅皿状	1.2m×95cm	1.1m×83cm	14cm	土器	
8	C II i 10-2土坑	楕円形	浅皿状	76cm×58cm	62cm×50cm	18cm	土器	
9	C III h 4土坑	隅丸長方形	浅鉢状	1.94m×66cm	1.88m×54cm	35cm		
10	C III h 6土坑	隅丸方形	浅皿状	1.28m×1.02m	1.22m×96cm	12cm		現代
11	C III j 1土坑	隅丸長方形?	浅皿状	(1.5)m×80cm	(1.45)m×75cm	10cm		現代、一部削平
12	C III j 4土坑	円形	浅皿状	58cm×54cm	37cm×42cm	16cm		
13	C III j 5-1土坑	不整形	不整形	68cm×34cm	50cm×16cm	48cm		
14	C III j 5-2土坑	円形	浅鉢状	60cm×58cm	41cm×44cm	28cm		
15	D III a 4土坑	円形	浅鉢状	(50)cm×54cm	28cm×28cm	25cm	土器	
16	D II a 8土坑	隅丸方形	浅皿状	1.6m×1.5m	1.4m×1.28m	32cm	土器、石棒	底部に焼土と鉢形土器
17	D III a 5土坑	不整楕円形	浅鉢状	70cm×60cm	44cm×40cm	24cm	土器	
18	D II d 4土坑	楕円形	深鉢状	(90)cm×1.2m	68cm×60cm	88cm		半分削平
19	D III b 5-1土坑	不整円形	フラスコ状	1.08m×90cm	1.8m×1.8m	1.36m	土器、剝片石器	D III b 5-2・3土坑、D III b 5陥し穴状遺構と重複
20	D III b 5-2土坑	円形	変形フラスコ状	70cm×64cm	90cm×74cm	35cm		D III b 5-1・3土坑と重複
21	D III b 5-3土坑	不明	—	(1.2)m×1.3m	(60)cm×1.0m	1.0m		D III b 5-1・2土坑、D III b 5陥し穴状遺構と重複
22	D III h 2土坑	隅丸方形	浅皿状	1.36m×1.18m	90cm×80cm	28cm		現代
23	D III h 7土坑	方形	浅皿状	1.62m×1.44m	1.46m×1.26m	16cm		現代
24	D III i 1土坑	隅丸長方形	浅鉢状	1.54m×1.04m	1.2m×65cm	40cm		現代

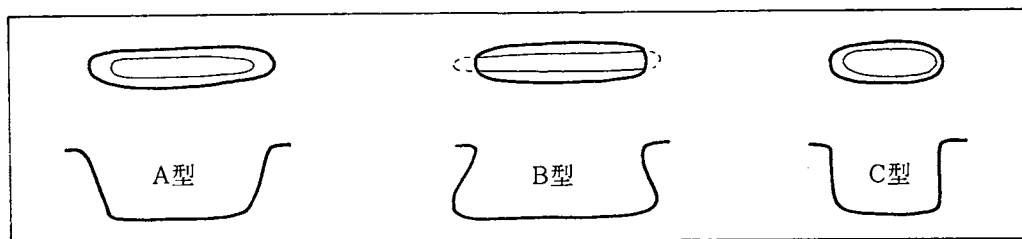
## (5) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は14基検出している。これら遺構の形態的な特徴を中心に若干の補足を加え検討してみたい。分類は平面形態と規模等から次の3型式に大別した。なお、長軸径は検出面の開口部を基準としている。(㊦は表13に符号する)

A型 平面形は溝状乃至不整楕円形状を呈し、長軸径が3m~4.2mのもの。短軸の断面形はV字状とロート状がある。③B III b 2、⑥C III i 4、⑧C III j 4、⑨C III j 5、⑫D III c 5、⑬D III f 3 陥し穴状遺構が該当する。

B型 平面形は溝状を呈し、長軸径が2.3m~3.3m前後で、両端部が開口部から外側へ抉り込まれるもの。④C II g 9、⑤C II i 10、⑩D II f 10、⑪D III b 5 陥し穴状遺構が該当する。

C型 平面形は長楕円形状を呈し、長軸径が2.4m~3mのもの。短軸の断面形はU字状を示す。①B II a 8、②B II b 7、⑦C III j 3、⑭D III h 6 陥し穴状遺構が該当する。



長軸方向は真北に対してN 2°~25°E 6基、N 8°~38°W 6基、N 66°~82°W 2基で北北東—南南西と北北西—南南東を示すものが約70%を占めている。等高線に沿うのは⑤C II i 10陥し穴状遺構の1基だけで、他は直交するものである。埋土の堆積状況はいずれも開口部から流れ込みと壁崩落土による自然堆積の様相を示している。十和田a降下火山灰の堆積は確認されない。

占地的に見ると埋没した谷を境にして調査区域の東側緩斜面に11基、西側の尾根に3基が分布している。単独で点在するのは少なく、2基乃至3基の単位で並列するようである。分布状況から見て、南側の調査区域外段丘縁辺部寄りにも遺構が存在すると思われる。

遺物を出土した遺構は8基と比較的多く、出土状況は埋土上~中位からのものが大部分を占めている。③B III b 2、⑬D III f 3 陥し穴状遺構の2基は埋土下位から縄文土器を出土しており、本遺跡の第IV群2~3類土器(縄文後期)に比定されるものである。また、他の遺構出土土器もほぼ同時期である。次に縄文時代後期初頭の住居跡と重複するものは③B III b 2、⑧C III j 4 陥し穴状遺構の2基で、いずれも住居跡を切って構築されている。

以上の諸状況から遺構の構築時期は、縄文時代後期初頭以降と推定されるものの、各型式ごとの新旧関係や使用時期差等は不詳である。

表13 陥し穴状遺構一覧表

( ) は推定値、[ ] は現存値

No	遺構名	形態		規模			長軸方向	断面形状		分類	備考
		開口部	底部	開口部	底部	深さ		長軸	短軸		
1	B II a 8 陥し穴状遺構	長楕円形状	溝状	(2.9)m×1.25m	2.1m×30cm	1.3m	N 2° E	不整台形状	U字状	C	B II a 9 土坑と重複
2	B II b 7 陥し穴状遺構	長楕円形状	不整長方形形状	2.4m×1.0m	2.0m×40cm	1.0m	N30° W	不整四辺形状	U字状	C	
3	B III b 2 陥し穴状遺構	溝状	溝状	(3.5)m×70cm	(3.2)m×10cm	1.6m	N26° W	長方形形状	ロート状	A	B III b 2 住居跡と重複、土器、剥片石器、礫石器
4	C II g 9 陥し穴状遺構	溝状	溝状	2.35m×45cm	2.6m×20cm	95cm	N82° W	不整台形状	V字状	B	
5	C II i 10 陥し穴状遺構	溝状	溝状	2.5m×45cm	2.85m×20cm	1.0m	N66° W	不整台形状	短冊状	B	
6	C III i 4 陥し穴状遺構	溝状	溝状	3.55m×60cm	3.1m×10cm	1.45m	N25° E	長方形形状	V字状	A	土器、板状土製品、剥片石器
7	C III j 3 陥し穴状遺構	長楕円形状	溝状	(2.4)m×70cm	1.8m×15cm	1.1m	N22° W	逆台形状	U字状	C	
8	C III j 4 陥し穴状遺構	溝状	溝状	3.5m×70cm	3.0m×10cm	1.3m	N 5° E	逆台形状	V字状	A	C III j 3-1 住・C III j 5 配石と重複、土器、剥片石器、礫石器
9	C III j 5 陥し穴状遺構	不整楕円形状	溝状	(3.1)m×75cm ~1.15m	2.5m×15cm	1.45m	N 2° E	逆台形状	V字状	A	土器
10	D II f 10 陥し穴状遺構	溝状	溝状	3.3m×55cm	3.25m×5cm	1.05m	N38° W	不整長方形形状	ロート状	B	土器、剥片石器
11	D III b 5 陥し穴状遺構	溝状	溝状	[2.5)m×40~ 90cm	(2.7)m×20cm	1.0m	N 8° E	長方形形状	V字状	B	D III b 5-1 土坑・D III b 5-3 土坑と重複、土器
12	D III c 5 陥し穴状遺構	溝状	溝状	3.95m×95cm	3.5m×80cm	1.55m	N13° E	不整長方形形状	ロート状	A	土器、剥片石器
13	D III f 3 陥し穴状遺構	溝状	溝状	4.15m×55cm	3.8m×5~ 10cm	1.05m	N 8° W	平行四辺形状	V字状	A	土器
14	D III h 6 陥し穴状遺構	長楕円形状	溝状	(2.5)m×65cm	(2.3)m×30cm	75cm	N27° W	平行四辺形状	U字状	C	

## (6) 配石遺構

配石遺構は、住居跡や陥し穴状遺構が集中する調査区域東側の南寄り緩斜面から検出している。平面形は径 4 m×3.5m の楕円形を基調とするもので、東側が 1 m 程「ハ」の字状に開口する。一部は C III j 4 陥し穴状遺構で切られ石が欠落するものの、39個の大小様々な亜角礫を規則的に配列している。配石内はほぼ平坦で、土坑や掘り込み等の痕跡は確認されなかった。遺物は僅かに本遺跡の第 IV 群 3 類、第 V 群 1 類土器が出土しており、時期は縄文時代後期初頭頃と思われる。下部施設を持たない配石遺構は、周辺の二戸市下村 B 遺跡<sup>(註 3)</sup>と浄法寺町柿ノ木平<sup>(註 4)</sup> III 遺跡からも検出している。時期及び性格は不明なものが多い。遺構の性格としては、昭和 28 年<sup>(註 5)</sup>に発掘調査が行われた岩手郡松尾村釜石遺跡の環状列石に類似性が見られ、祭祀的なものと思われるが詳細は不明である。

## (7) 埋設土器

単独に出土した土器は幾つかあるものの、埋設土器と確認されたのは 4 例だけである。調査区域中央部と東側緩斜面から検出している。この中で正立に埋設するのは C III e 1-1、D III a 4 埋設土器で、前者は深鉢の底部、後者は口縁部を欠損している。土器はいずれも本遺跡の第 IV 群 2・3 類、第 V 群の範疇に入るもので、時期は縄文時代後期初頭頃と思われる。

## (8) 炭窯

炭窯は1基調査区域東側の緩斜面から検出している。平面形は無花果形を呈し、規模は4m×2.7mである。底面はほぼ平坦で、焚口部より僅かに低く構築されている。煙出しは焚口の反対側最奥に設けられ、鉛直に煙突敷設がある。この炭窯は昭和30年代に築造されたもので、周辺の浄法寺町広沖遺跡<sup>(註6)</sup>、五庵Ⅲ遺跡<sup>(註7)</sup>からも類似するものが検出されている。

## 2. 遺物

遺物は遺構内外から土器、土製品、土偶、石器、石製品、古銭等が出土している。その中で数量的に多い土器を中心に述べる。

### (1) 土器

本遺跡から出土した土器は縄文土器と弥生土器である。出土量の大多数を占める縄文土器は早期、前期、中期末～後期、後期の時期に属するもので、後期の土器が主体をなしている。土器の文様や施文の特徴から次のⅠ群～Ⅷ群に大別した。各群の詳細はⅤ章の1土器において記述してあるので、ここでは割あいし概略を述べる。

第Ⅰ群土器 貝殻腹縁刺突文を施文したもので、上下に刺突方向を変え羽状に文様をつくり出している。本群は青森県蛭沢遺跡第Ⅱ類土器<sup>(註8)</sup>に類似しており、縄文時代早期後葉に属すると思われる。

第Ⅱ群土器 胎土に繊維を混入し羽状縄文が施文されるもので、縄文時代前期に属する。詳細は不明である。

第Ⅲ群土器 本群は文様や施文方法から縄文時代中期末葉～後期初頭に属すると思われるものを一括した。1類 中期末葉の大木10式の影響を大きく受けたもので磨消帯をもつ。2類 断面に三角形の隆帯が施文されるもので、内湾する山形口縁をもち、口縁には「C」字状又は渦巻状の隆帯をもつ。体部に綾杉状の隆帯をもつもの、狩猟文をもつものがある。本群は岩手県駒板遺跡Ⅲ群a類土器<sup>(註9)</sup>に、また2類は青森県蛭沢遺跡5群土器に類似するものである。

第Ⅳ群土器 本群は文様や施文の特徴等から後期に属するものを一括した。1～3類に分類し、2類はa～dに、3類はa～fに細分した。1類 半截竹管状の連続刺突を施文したものである。青森県丹後谷地遺跡8号土壙出土の土器<sup>(註10)</sup>に類似しており、後期初頭に属すると思われる。2～3類 隆帯による文様帯の区画、沈線による区画文や曲線文、渦巻文および棒状工具による円形刺突文など文様は多様である。渦巻文や曲線文が施文される3類fは東北北半の十腰内Ⅰ式に含まれ、他の2a～3eは十腰内Ⅰ式に先行する土器群かと思われる。狩猟文土器、小型切断土器、有孔突器をもつ鉢、壺の器種がある。

第Ⅴ群土器 本群は粗製土器を一括したものである。器種としては深鉢が大半を占めている。

土器は検出住居跡の出土遺物等から見て中期末葉～後期初頭に属するものと思われる。

第Ⅵ群土器 本群はミニチュア様の小型土器を一括したものである。沈線文が施文されるものは十腰内Ⅰ式と十腰内Ⅱ式に先行するものがある。無文のものに関しては時期不詳である。

第Ⅶ群土器 本群は弥生土器を一括したものである。Ⅰ類は沈線文が施文され弥生時代後葉に属するもので東北南半の天王山式に比定される。

#### 第Ⅷ群土器

本群は獣面状突起と人面付土器を一括したものである。獣面状突起の目と口は大小の円形刺突で表現している。口の上には兔唇<sup>みづくち</sup>を模倣したと思われる「×」字状の細い刻み目を施すのが特徴である。両耳は剥落している。人面付土器は幅8mmで平行する隆帯（断面が三角形）の上に貼付られたものである。人面は逆正三角形を呈し、目と口は円形刺突で、鼻は長方形の隆帯を貼付て表現している。口の下には簡略化した顎ひげと思われる微隆帯の貼付があり、男性的な様相を呈している。時期は胎土や隆帯等が本遺跡の主体を占める縄文時代後期初頭の土器群に類似することから、ほぼ同時期と思われる。岩手県内でも東和町石鳩岡遺跡<sup>(註11)</sup>（後期末）、千厩町南小梨蛇王遺跡<sup>(註12)</sup>からも人面付土器が出土している。また、北上市八天遺跡<sup>(註13)</sup>では深鉢の口縁部文様帯に人体文様を沈線で描いたものがある。獣面や人面付土器は総じて縄文時代後期初頭から晩期にかけての出土例が多いものの、用途は不詳である。

## (2) 狩猟文土器

粘土紐の貼付によって弓矢、動物などの狩の模様を表現した土器は、昭和57年に青森県八戸市<sup>にらくほ(註14)</sup>葦窪遺跡から出土し、文様を含め総体的な検討が行われ「狩猟文土器」と呼称されている。馬立Ⅱ遺跡でも狩猟文様を描いた壺形土器が、土坑と遺構外から出土している。これらの土器は本遺跡の第Ⅳ群2b類土器に包括されるものである。狩猟文土器の特徴を以下に略記する。

〈DⅢb5-1土坑出土の狩猟文土器 第51図28、写真図版55〉

土器は土坑底面の西壁寄りの地点から出土している。口縁部下位に穿孔されたつば状の突起を4箇所<sup>(註15)</sup>に有した壺形土器で、胴部下半～底部は欠損する。口径15.8cm、頸部径13cm、器厚0.8cm、現存器高は20.4cmを測る。口縁部は平縁を呈し、つば状の突起と対応して約径1cmの穿孔を4箇所に施している。胴部の文様は粘土紐貼付による隆帯で構成される。隆帯の断面形態は一部に三角形も認められるものの、総じて台形状を呈している。文様帯は二等辺三角形と台形を基調とする5区画から成り、中に弓矢、動物、楕円形の陥し穴(罘)、釣ばり、針葉樹とみられるものが彫刻的に描かれている。また、三角形の区画内には円形の貼付が3個（1個は剥落）ある。器表と口縁部内側には赤色顔料（ベンガラ）の付着が認められることから、本来は器表全面に塗付していたと思われる。胎土には極小（径1mm以下）～小径（径1mm～2mm）

の砂粒が混入し、焼成は良く堅緻である。

〈遺構外出土の狩猟文土器 第69図22、写真図版60〉

土器は調査区域東側のDⅡ区Ⅰ層から出土している。胴部上半～口縁部を欠損した壺形土器で、現存器高13.4cm、器厚0.5cm、底径は推定13.3cmを測る。胴部の文様は粘土紐貼付による隆帯で、弓、動物、小楕円形の陥し穴（罘）と思われるものが描かれている。隆帯の断面形態は台形状を呈する。胴部下位には横位に平行して2条の隆帯が巡り、部分的に連結し円形文をつくり出し、隆帯に沿って沈線が施されている。器表には赤色顔料（ベンガラ）の付着が認められる。焼成は良好で、堅くしまる。

これらの狩猟文土器は壺形土器の胴部に隆帯で、弓矢、動物、陥し穴等を簡略化して表現したものであり、胎土の様相や文様構成には差違は認められない。

狩猟文土器は岩手県北の二戸市米沢遺跡<sup>(註15)</sup>、青森県の八戸市葦窪遺跡、同市丹後谷地遺跡(1)(2)、上北郡六ヶ所村沖附(2)遺跡<sup>(註16)</sup>、東津軽郡平館村間沢遺跡<sup>(註17)</sup>からも出土している。本遺跡の土器文様は葦窪遺跡出土の狩猟文土器文様と極めて類似するものである。いずれも馬淵川流域から出土したことは、同流域が同じ土器文化圏であったことがうかがわれる。また、土器の用途は狩猟文様を描いたり器表にベンガラを塗付することからみて、日常用の器ではなく祭祀用の器であろう。時期は共伴遺物等から縄文時代後期初頭に属すると思われる。当時の狩猟に対する縄文人の精神文化を知る上での貴重な資料といえよう。

### (3) その他の遺物について

信仰儀礼にかかわる遺物としては、板状土偶と石棒が出土している。土偶はいずれも破片で、顔面は逆三角形やハート形を呈するものである。土製品は蓋形土製品、釣鐘状のつまみを持つ鐸形土製品、<sup>きのこ</sup>茸を模倣した茸形土製品、円盤状土製品、耳飾り等がある。円盤状土製品は遺構内外から68点出土し、3分の2は周縁部を磨って整形をしている。また、三角形盤状を呈するものはCⅢi 4 陥し穴状遺構の埋土から出土している。

石器は560点出土した内70%が剥片石器で占められ、搔・削器類や両極剝離痕と2個1対の刃部を有する楔形石器が比較的多い。礫石器の凹石、磨石、敲石は単一の機能ばかりでなく、磨痕、擦痕、敲打痕等を伴う複数の機能を有するものである。石製品は盤状石製器、球形状石製品、凹部のあるものが出土している。

〈引用：参考文献〉

- 註1 磯崎正彦・他（1968）：岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書 岩木山刊行会
- 註2 田鎖寿夫・他（1988）：馬立I遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集
- 註3 鈴木優子・他（1983）：下村B遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書第56集
- 註4 高橋義介・他（1985）：柿ノ木平III跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第89集
- 註5 草間俊一・他（1973）：岩手山「岩手の地誌三部作第一部」 岩手放送株式会社
- 註6 岩渕久・他（1986）：広沖遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第111集
- 註7 石川長喜・他（1986）：五庵III遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第112集
- 註8 三宅徹也・他（1979）：蛭沢遺跡発掘調査報告書 青森市蛭沢遺跡発掘調査団
- 註9 酒井宗孝・他（1986）：駒板遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集
- 註10 村木淳・他（1984）：丹後谷地遺跡(1)(2)発掘調査報告書 八戸市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 註11 小岩末治・他（1972）：岩手県史第1巻 岩手県
- 註12 熊谷常正（1978）：南小梨蛇王遺跡発掘調査報告書 千厩町文化財調査報告書第1集
- 註13 本堂寿一・他（1979）：八天遺跡発掘調査報告書 北上市文化財調査報告書第27集
- 註14 北林八洲晴（1983）：葦窪遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
- 註15 工藤利幸・他（1988）：「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集
- 註16 北林八洲晴（1986）：沖附(2)遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 註17 新谷武・他（1985）：今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第95集

# 写真図版





写真図版1 空中写真



遺跡遠景(西側上空から)



遺跡近景(西側から)

写真図版2 遺跡遠景・近景



作業風景

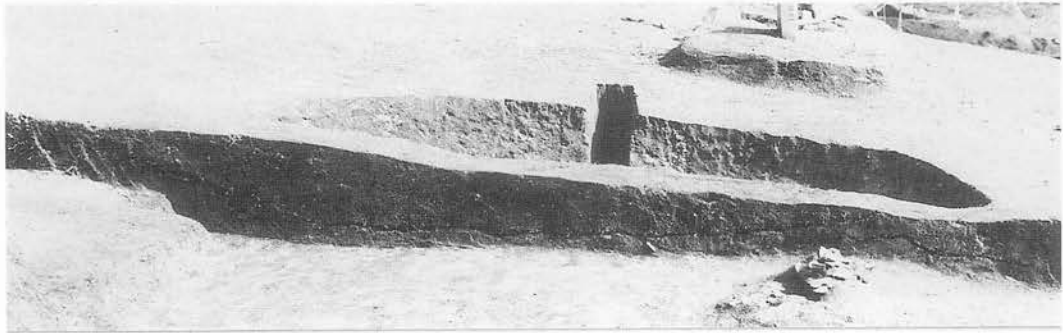


BⅢe7区土層断面

写真図版3 作業風景・土層断面



平面(南から)



埋土断面

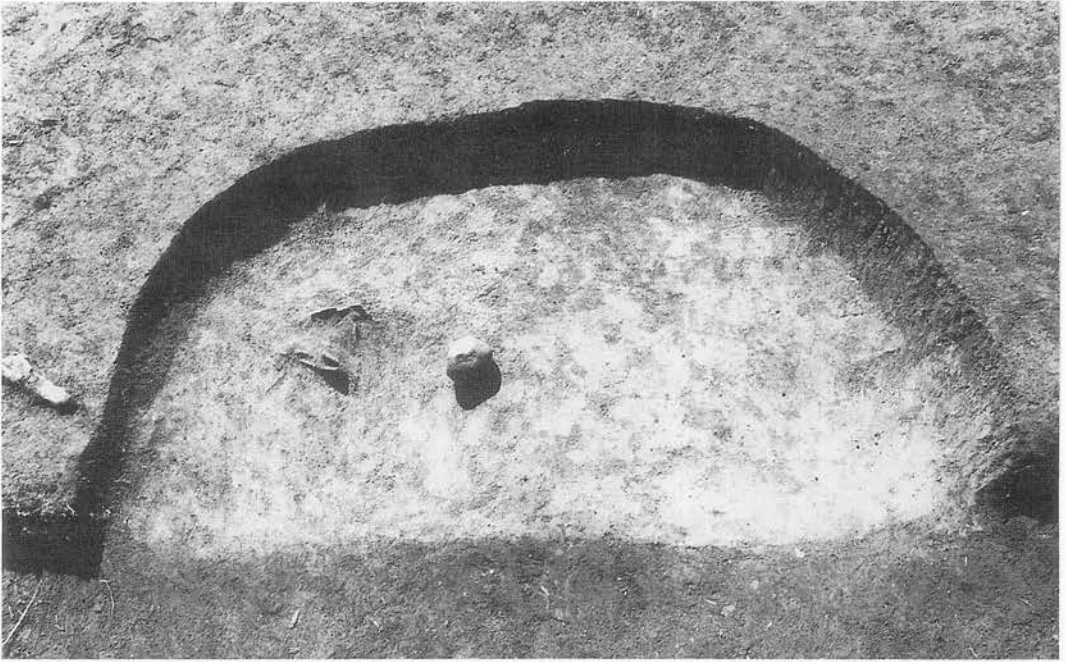


炉平面



炉断面

写真図版4 AⅡi10住居跡



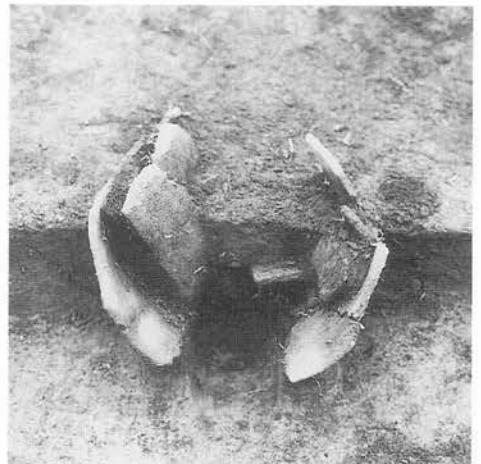
平面(北から)



埋土断面

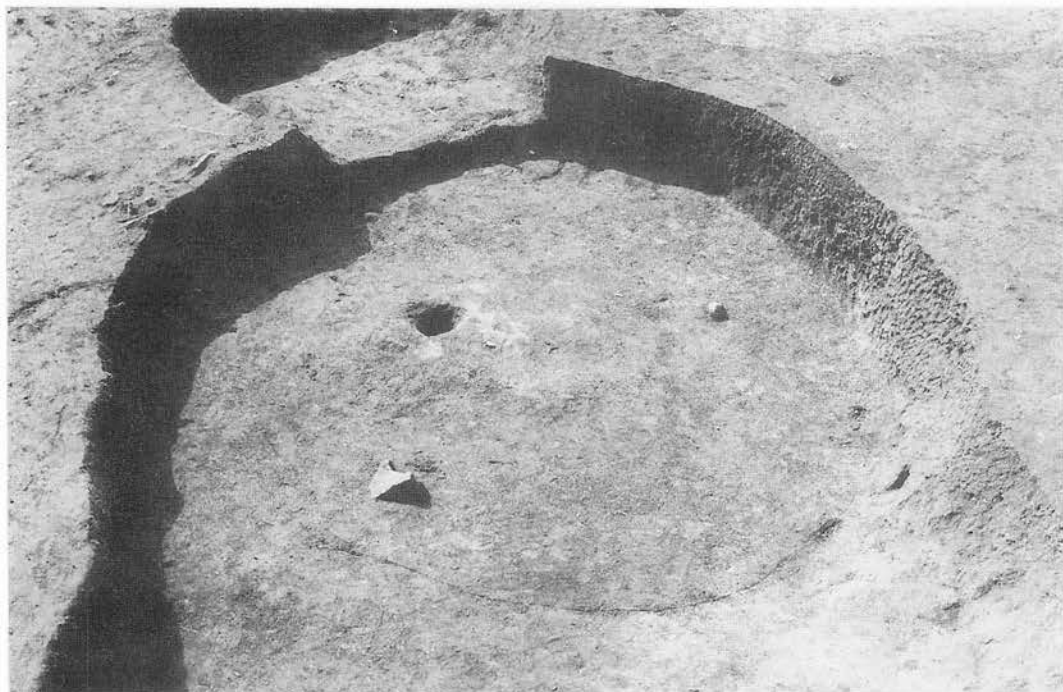


炉平面



炉断面

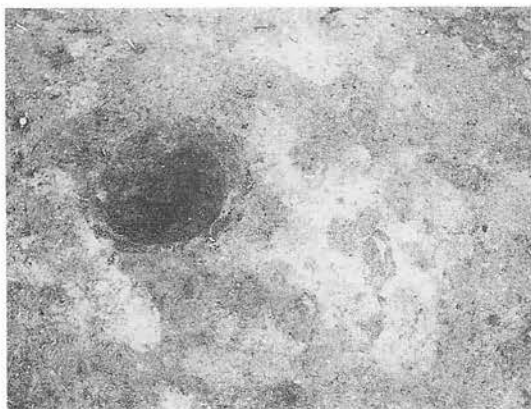
写真図版5 A III i 2 住居跡



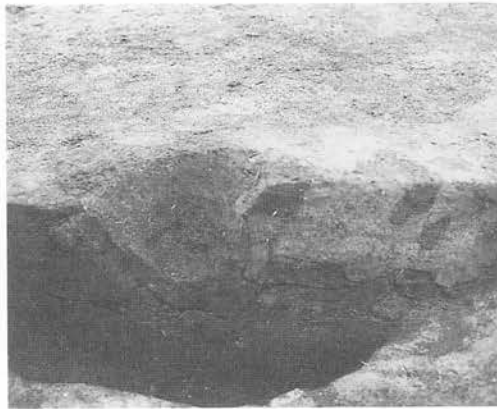
平面(北東から)



埋土断面

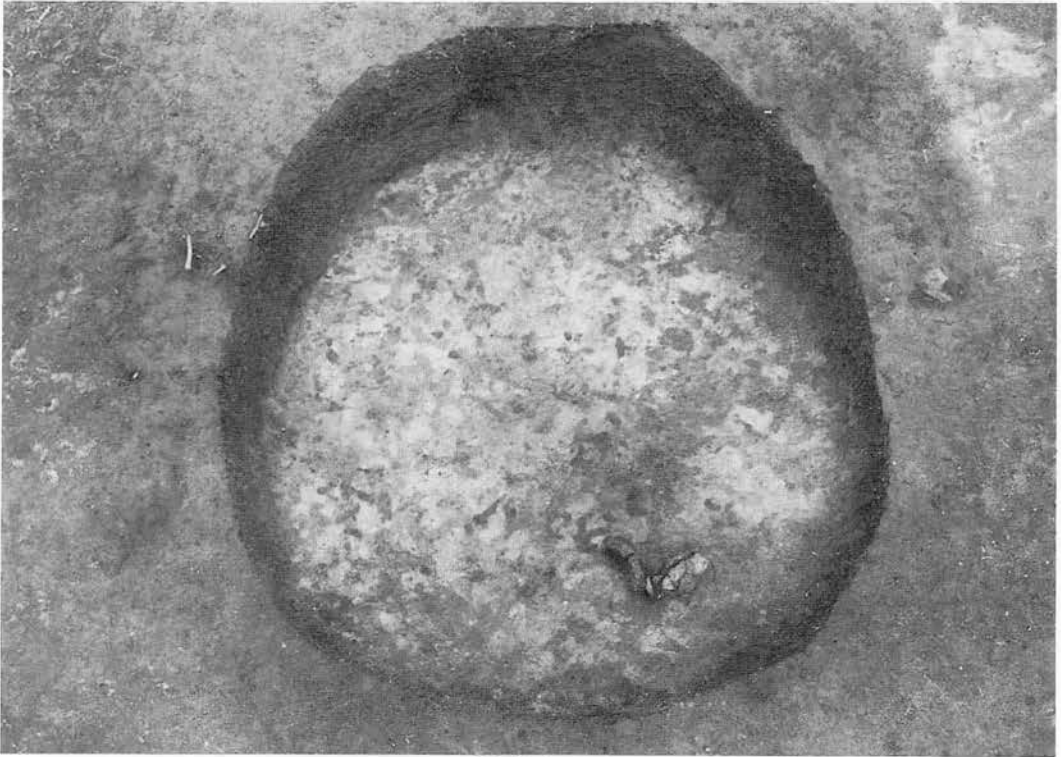


炉平面

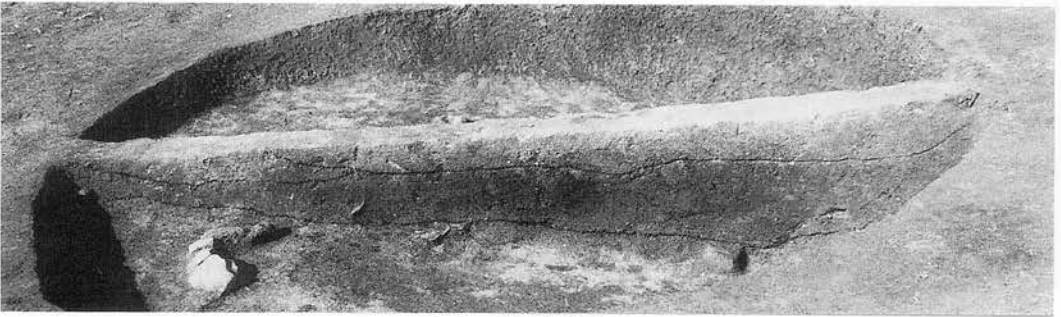


炉断面

写真図版 6 A IIIj 4 住居跡



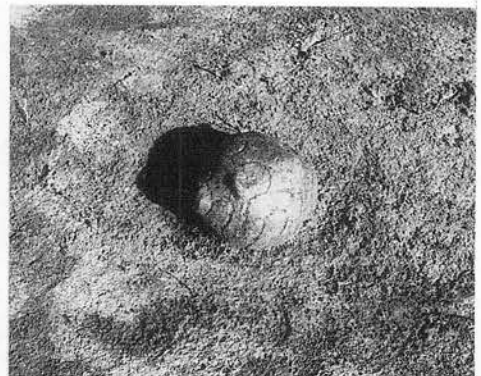
平面(南から)



埋土断面

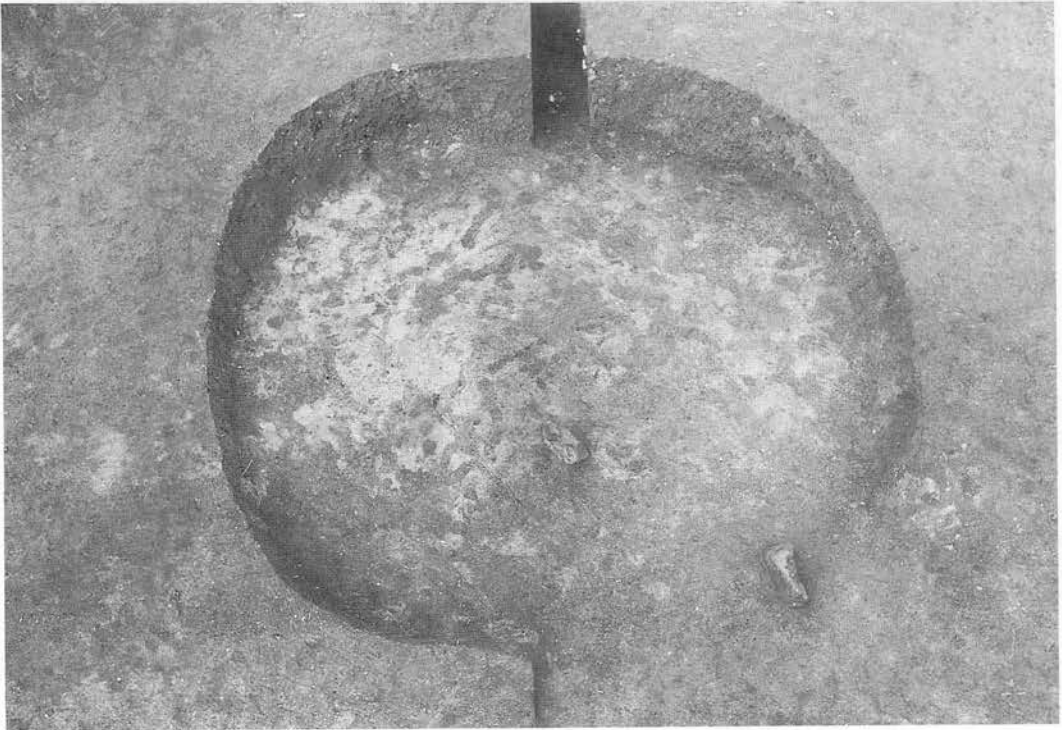


炉平面

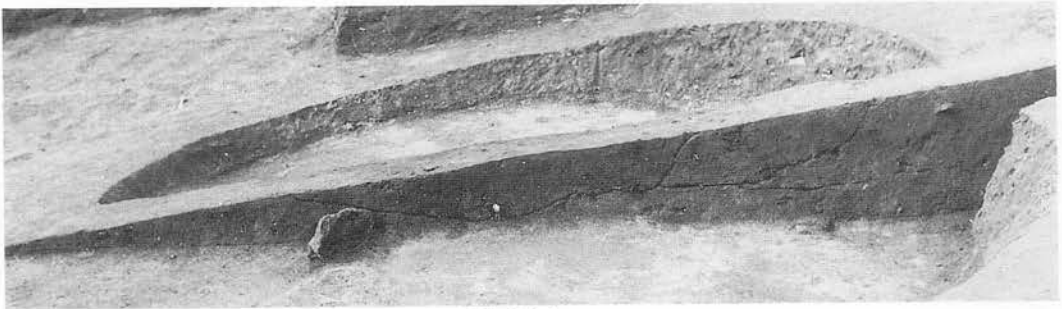


遺物出土状況

写真図版7 BⅡa10住居跡



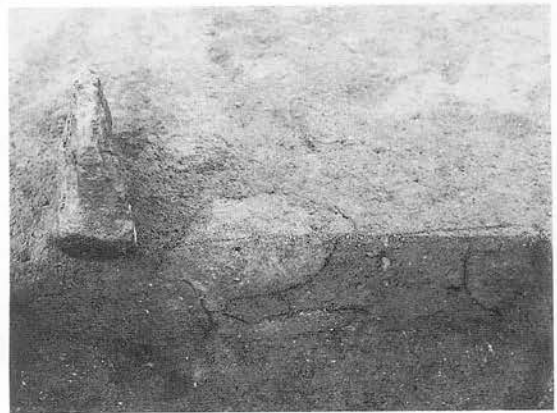
平面(南から)



埋土断面



炉平面



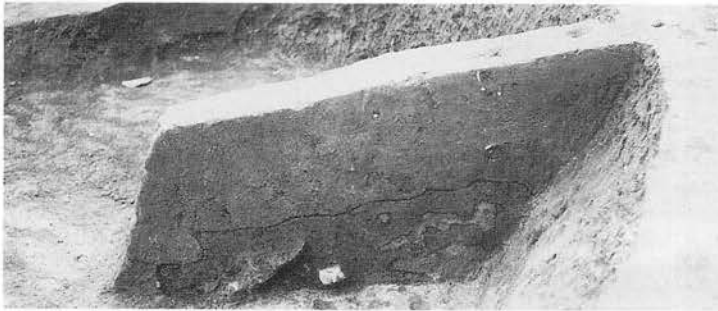
炉断面

写真図版 8 BⅡb9-1 住居跡

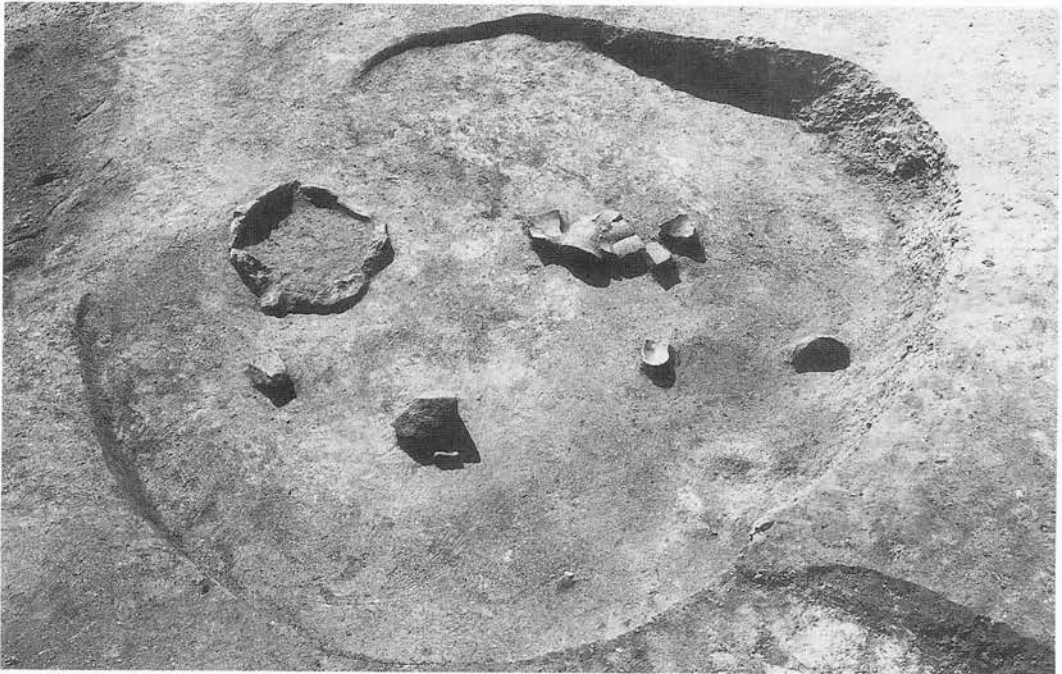




BⅡb9-2住居跡平面(南から)

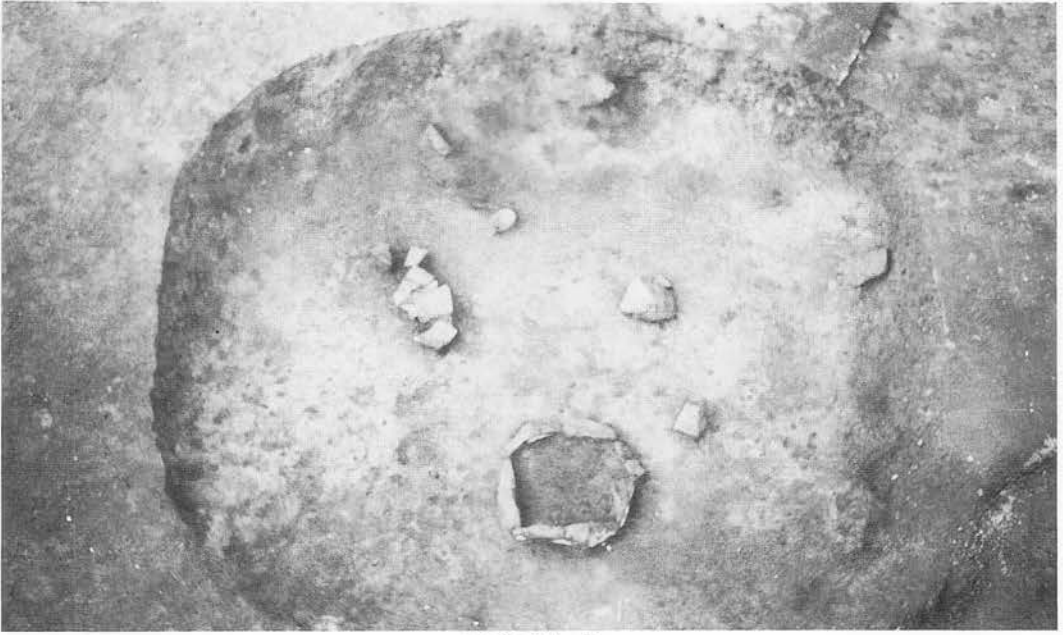


BⅡb9-2住居跡断面



BⅡf10住居跡遺物出土状況

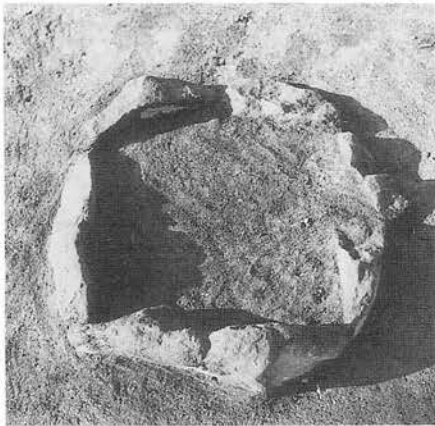
写真図版9 BⅡb9-2・BⅡf10住居跡



平面(南から)



埋土断面



炉平面

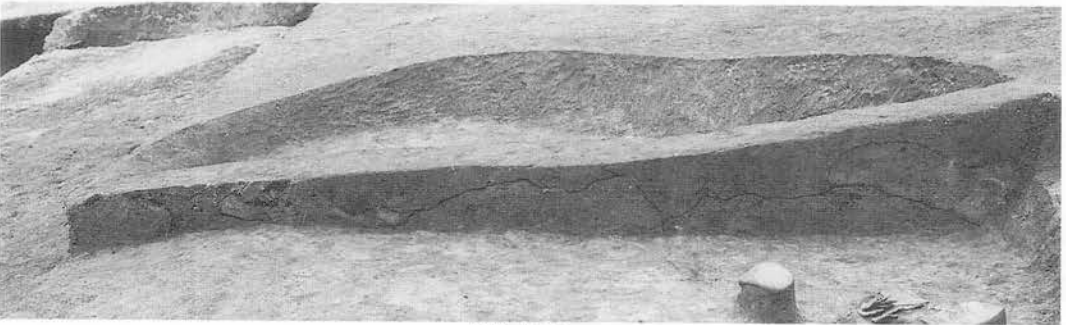


炉断面

写真図版10 BⅡf10住居跡



平面(西から)



埋土断面



炉平面

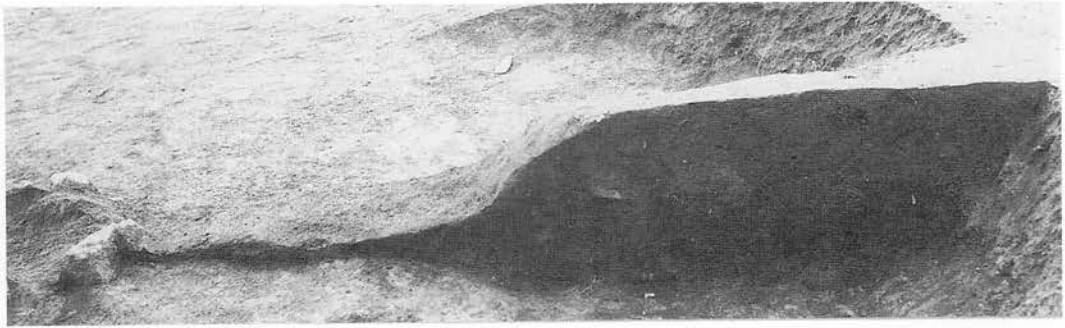


炉断面

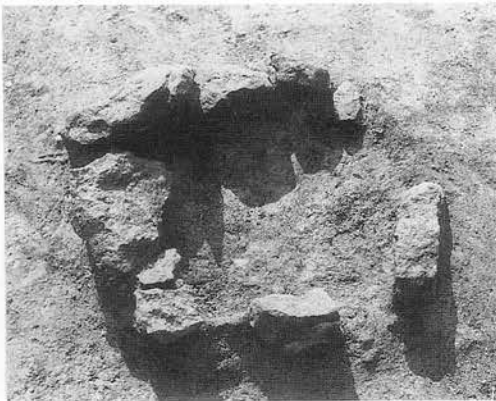
写真図版11 BⅡd6 住居跡



平面(南から)



埋土断面



炉平面

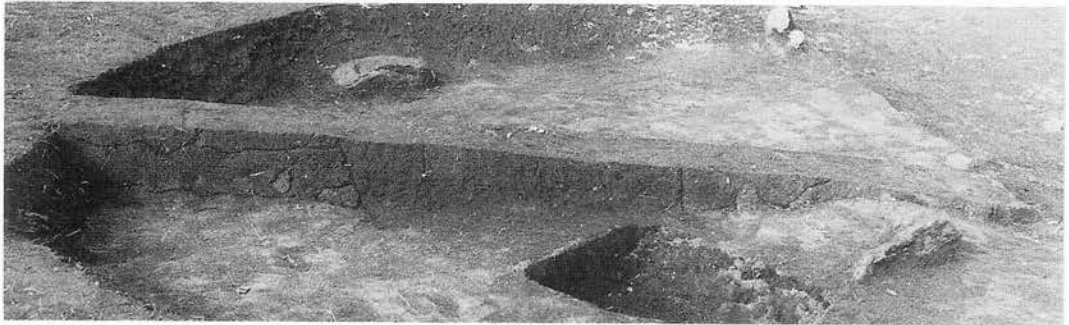


炉断面

写真図版12 BⅡe9 住居跡



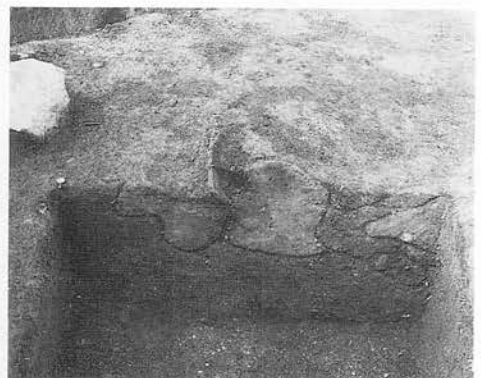
平面(南から)



埋土断面

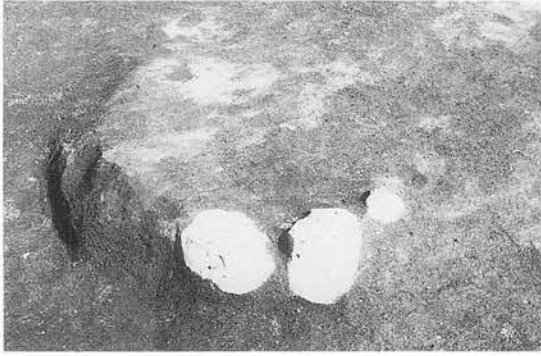


炉平面

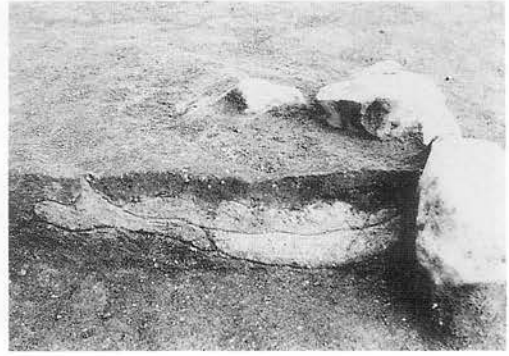


炉断面

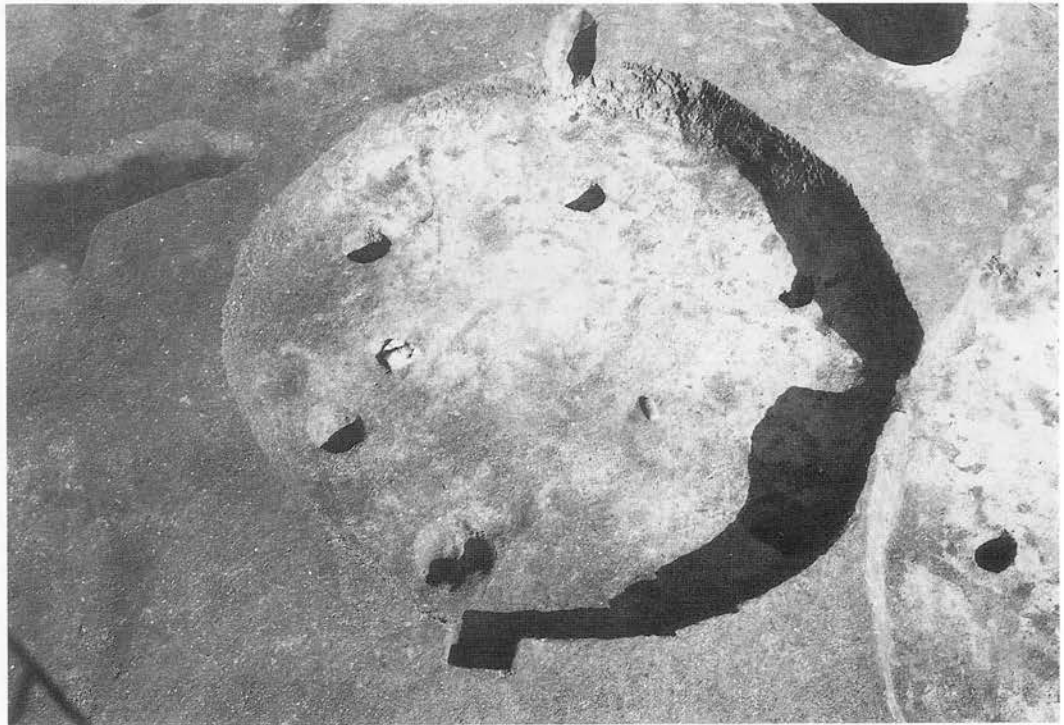
写真図版13 BⅢb2 住居跡



CⅢh1 住居跡炉平面



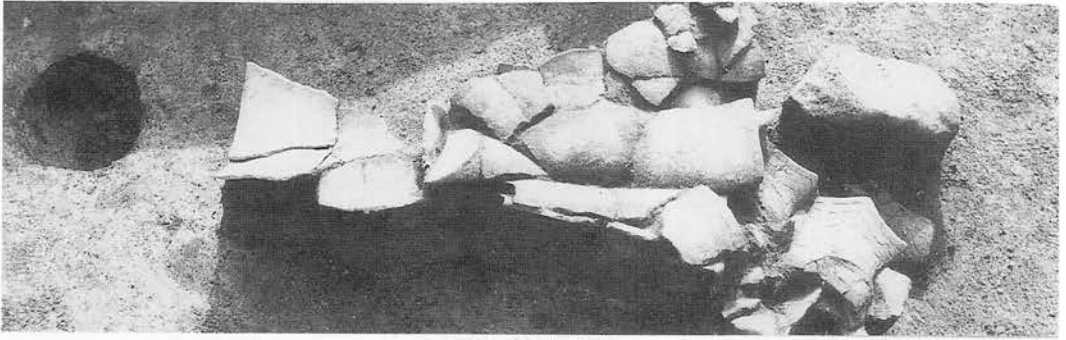
CⅢh1 住居跡炉断面



CⅢi3 住居跡平面(南から)



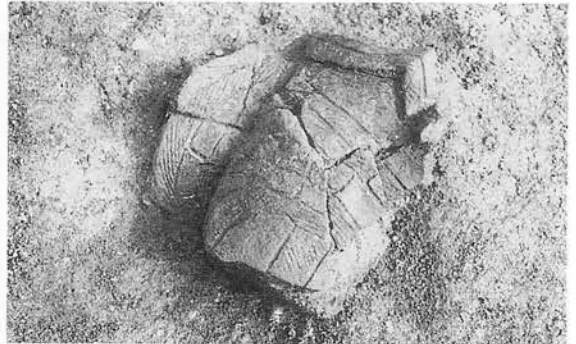
CⅢi3 住居跡埋土断面



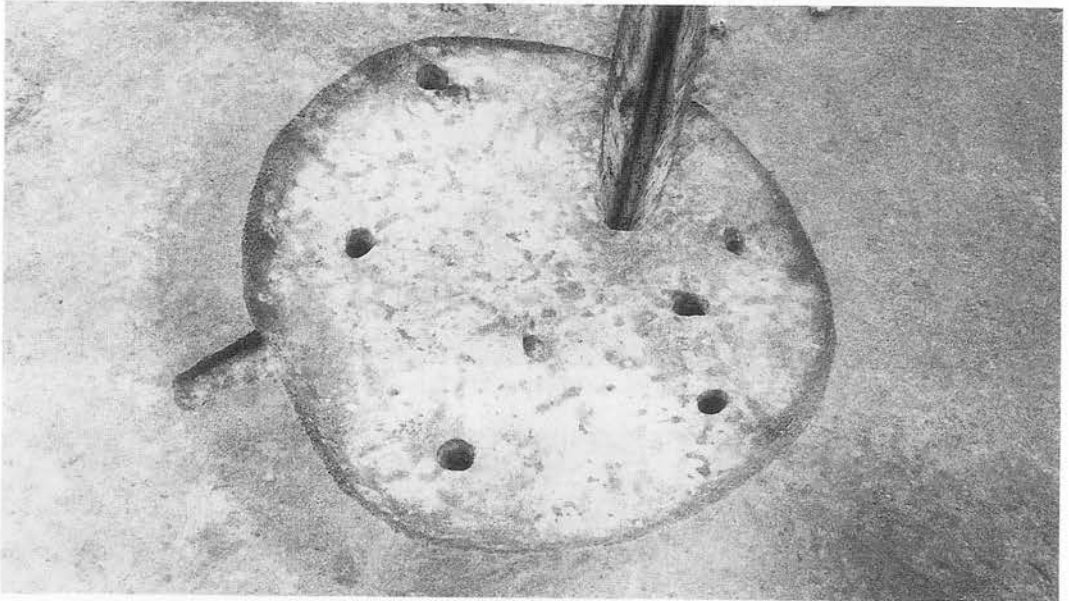
C III i 3 住居跡遺物出土状況



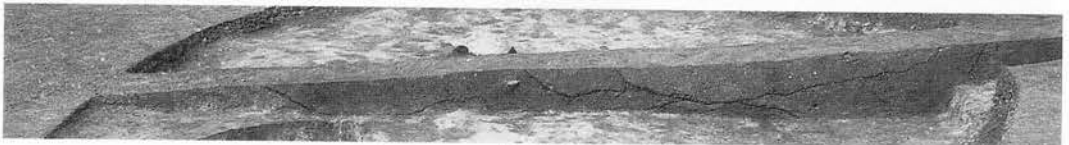
C III i 3 住居跡炉平面



C III i 3 住居跡遺物出土状況

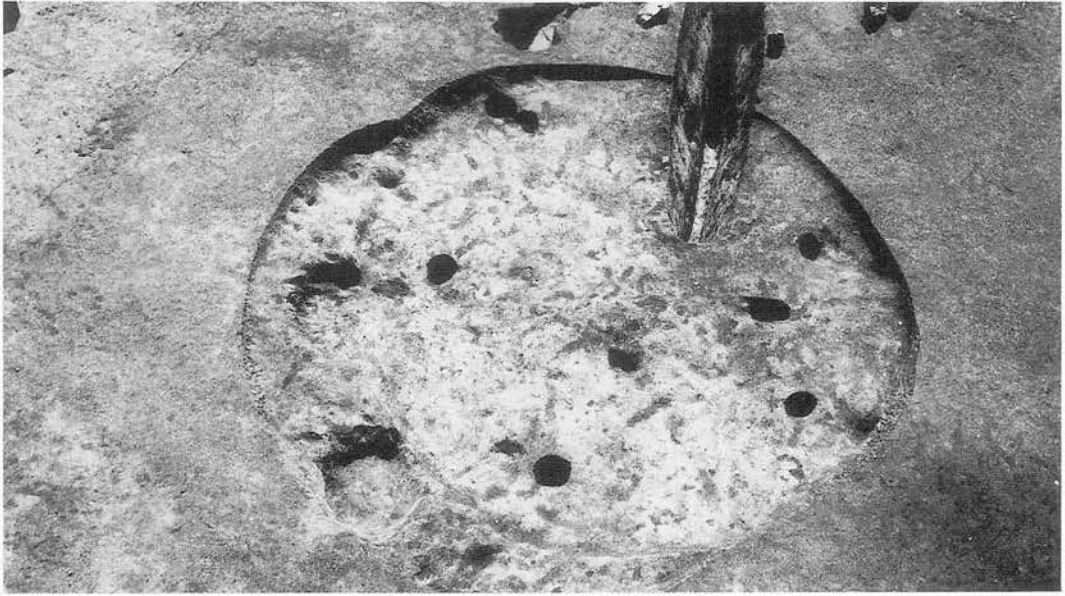


C III j 3 - 1 住居跡平面(北から)

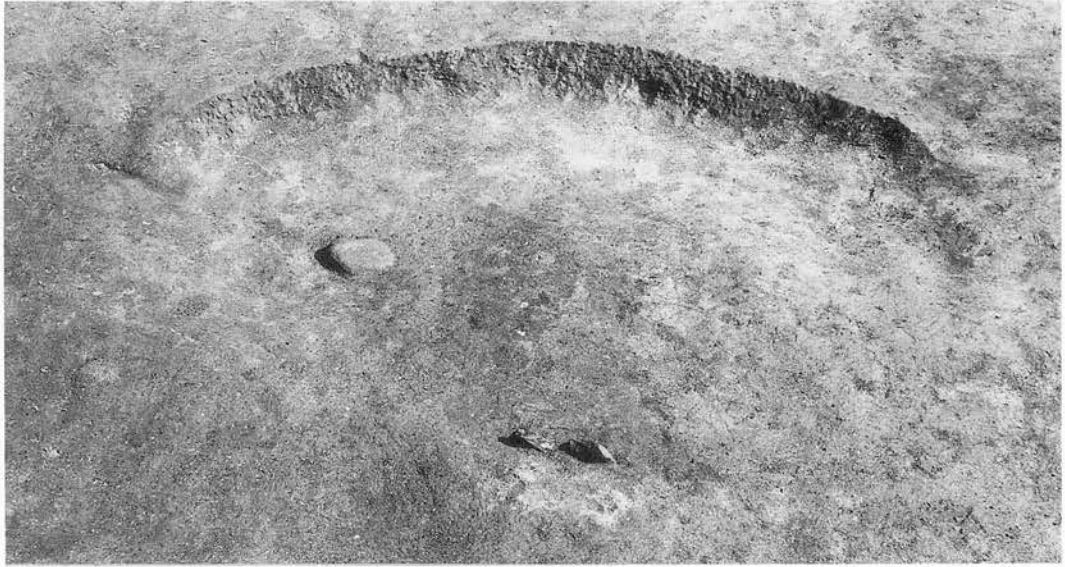


C III j 3 - 1 住居跡埋土断面

写真図版15 C III i 3・C III j 3 - 1 住居跡



CⅢj3-2 住居跡平面(北西から)



DⅢc1 住居跡平面(南から)



DⅢc1 住居跡炉平面



DⅢc1 住居跡炉断面

写真図版16 CⅢj3-2・DⅢc1 住居跡

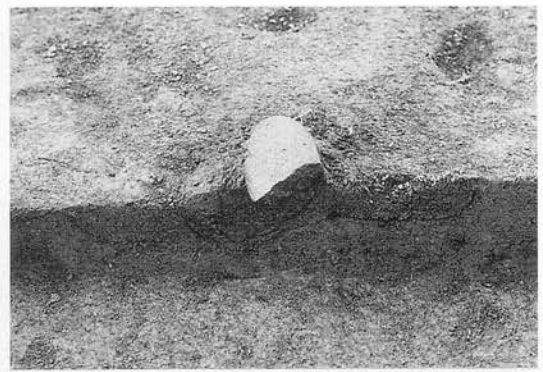




平面(南から)



炉検出状況

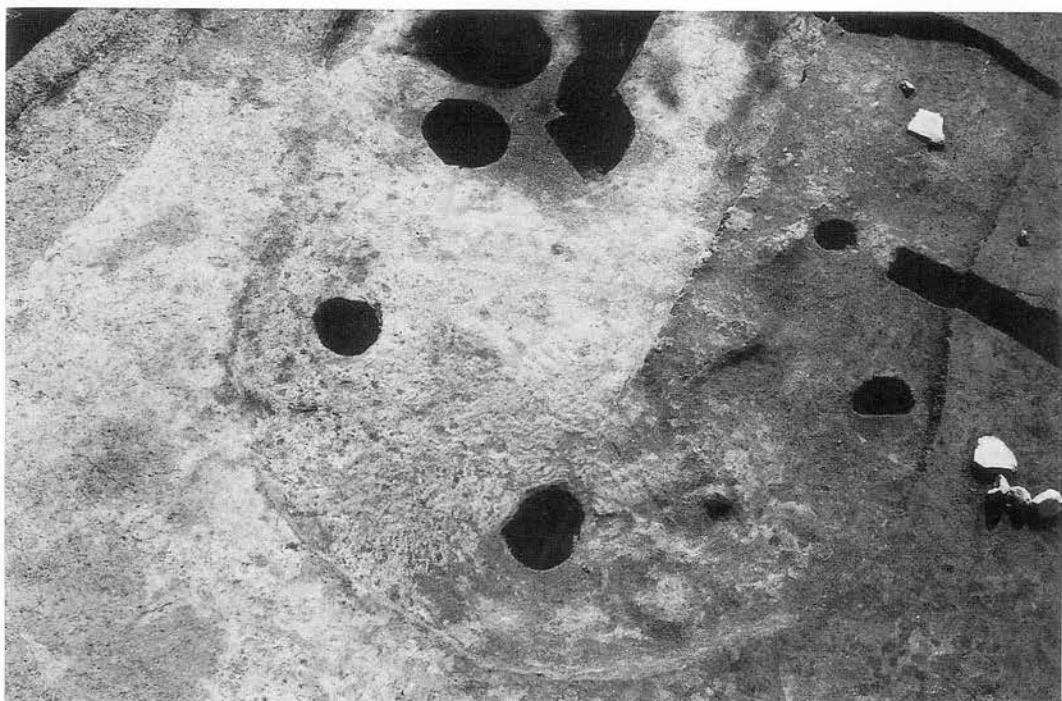


炉断面



遺物出土状況

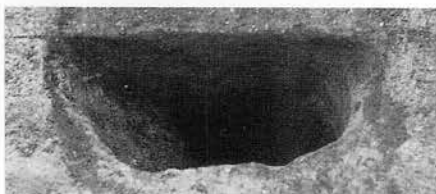
写真図版17 DⅢc 3 住居跡



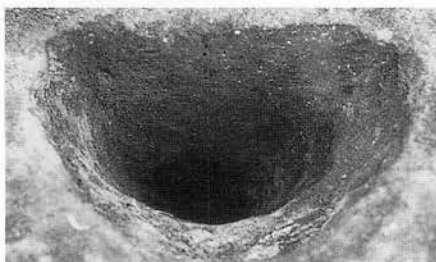
DⅢa 4・DⅢa 5住居跡平面(北から)



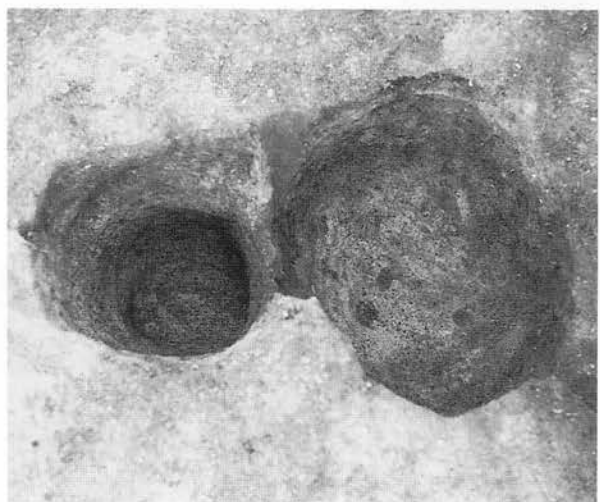
DⅢa 5住居跡貼床断面



DⅢa 4住居跡P<sub>1</sub>断面

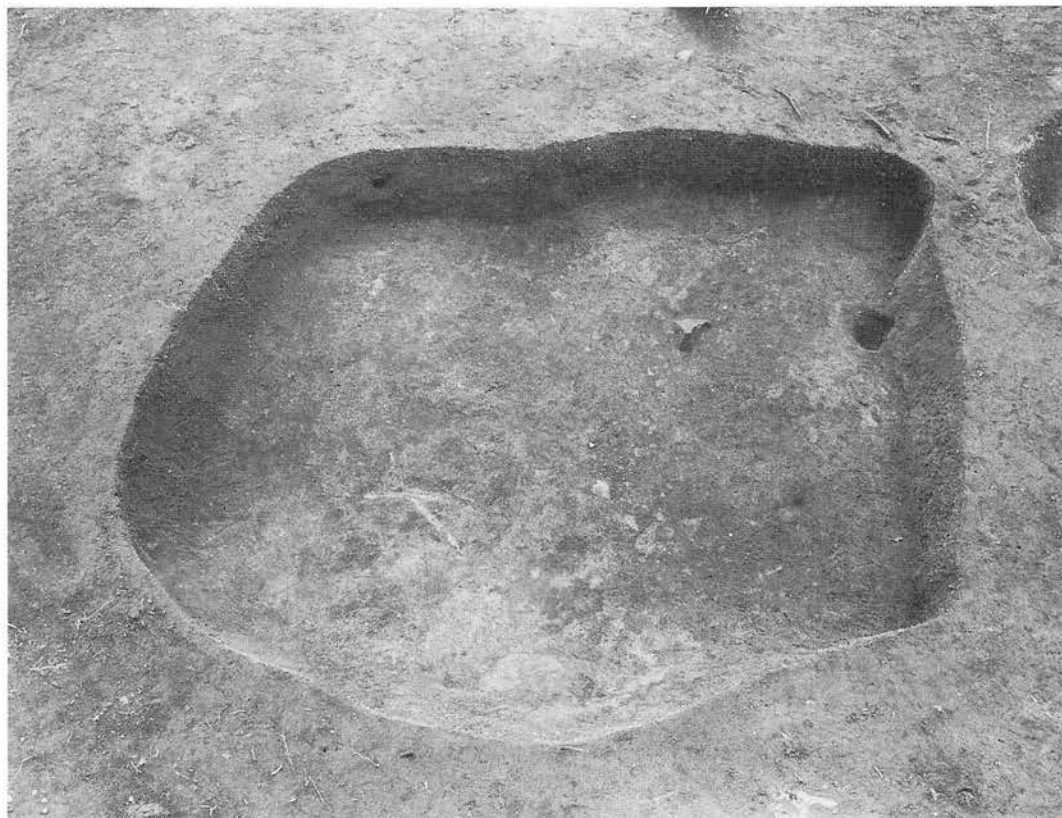


DⅢa 4住居跡P<sub>2</sub>断面

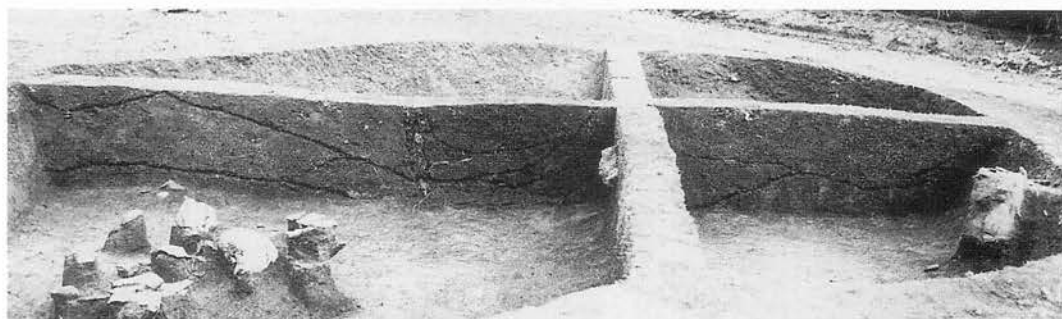


DⅢa 4住居跡P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>平面

写真図版18 DⅢa 4・DⅢa 5住居跡



平面(北から)

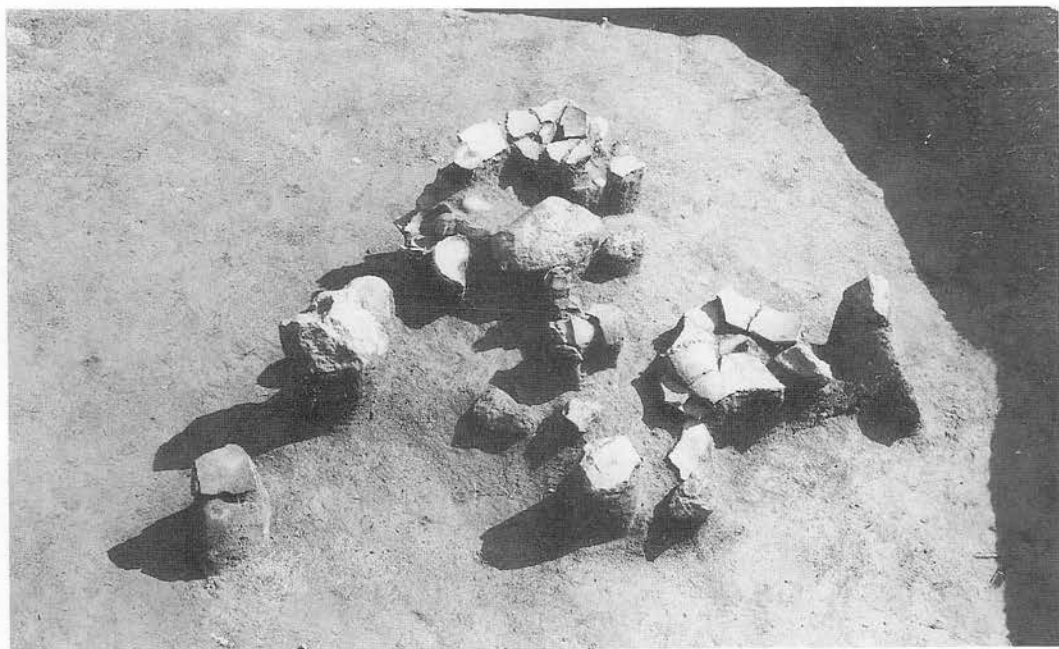


東西埋土断面



南北埋土断面

写真図版19 BⅢa 4 住居跡状遺構(1)



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

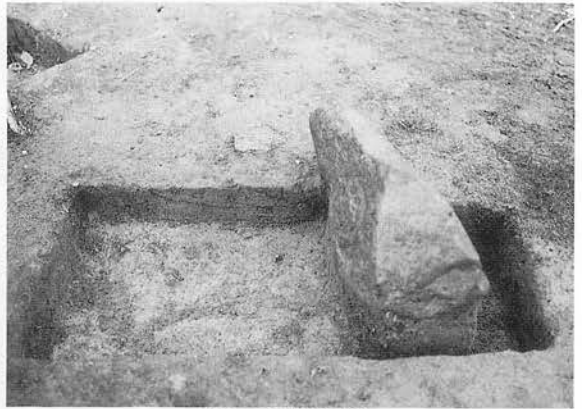


遺物出土状況

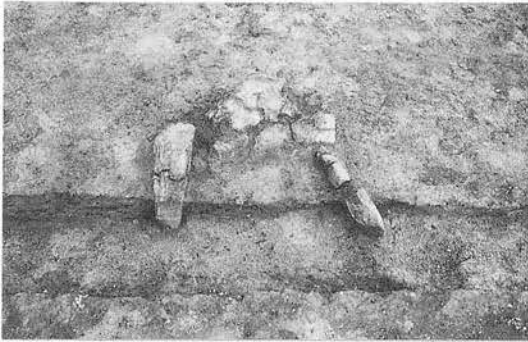
写真図版20 B III a 4 住居跡状遺構(2)



A IIIj 3 炉跡



A IIIj 3 炉跡断面



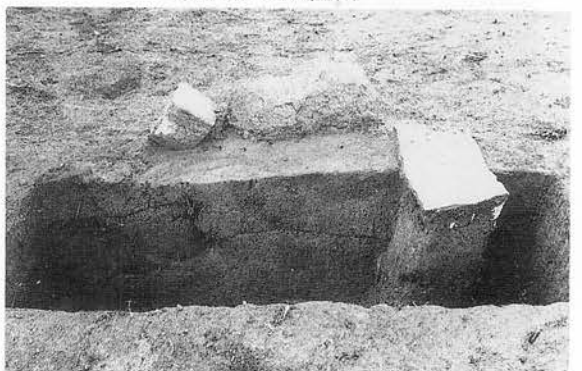
D IIh 9 炉跡



D IIh 9 炉跡断面



D IIh10 炉跡



D IIh10 炉跡断面



D IIIc 1 炉跡



D IIIc 1 炉跡断面

写真図版21 炉跡



B II c10 烧土



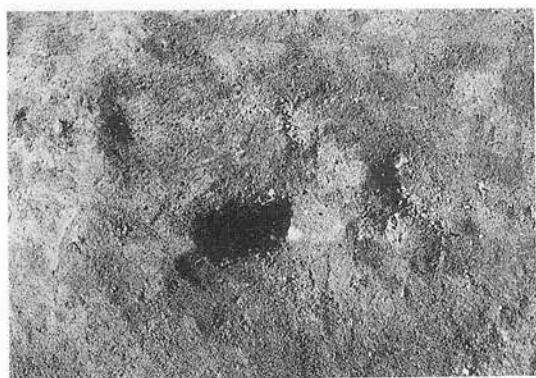
B II c10 烧土断面



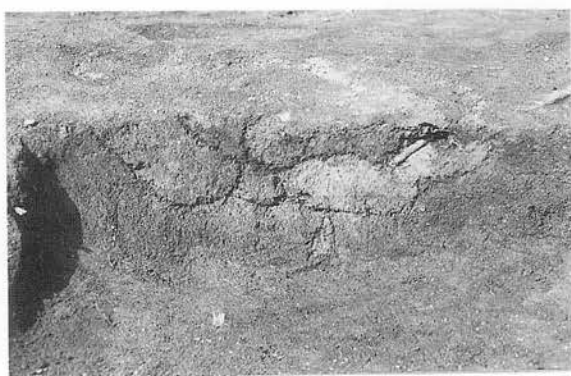
B II d7 烧土



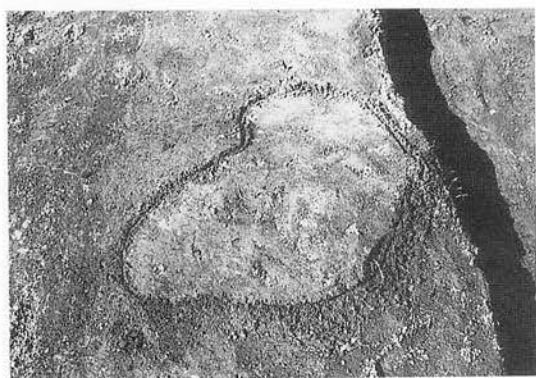
B II d7 烧土断面



B II g10 烧土



B II g10 烧土断面



B III c3 烧土

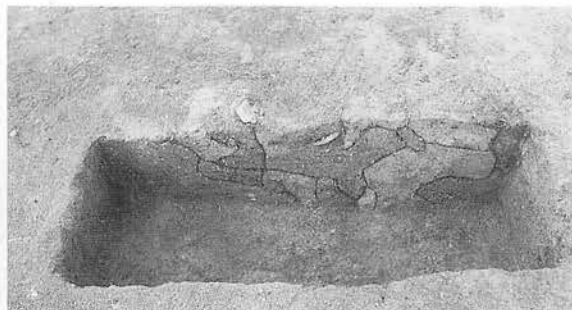


B III c3 烧土断面

写真図版22 烧土遺構(1)



D II a 9 烧土



D II a 9 烧土断面



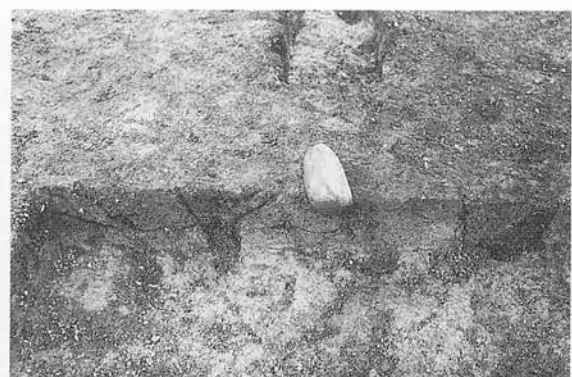
D II c 9 烧土



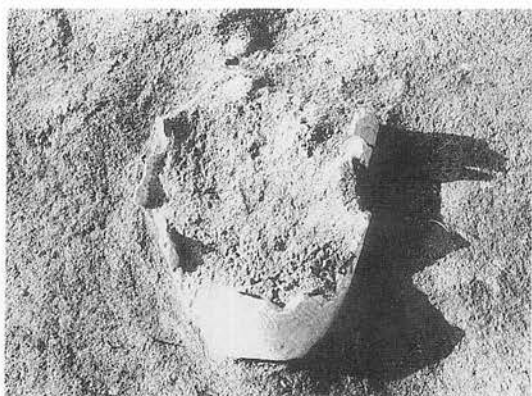
D II c 9 烧土断面



D II g10 烧土



D II g10 烧土断面



D III a 1 烧土



D III a 1 烧土断面

写真图版23 烧土遗構(2)



D III a 5 烧土



D III a 5 烧土断面



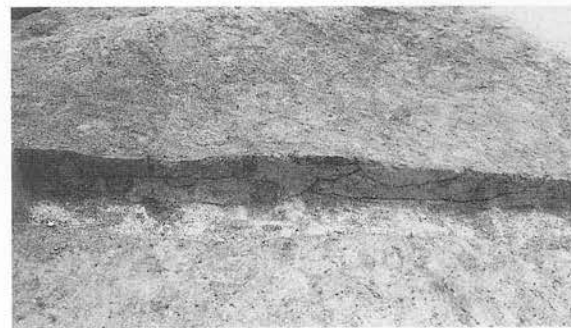
D III d 4 烧土



D III d 4 烧土断面



D III f 1 烧土



D III f 1 烧土断面



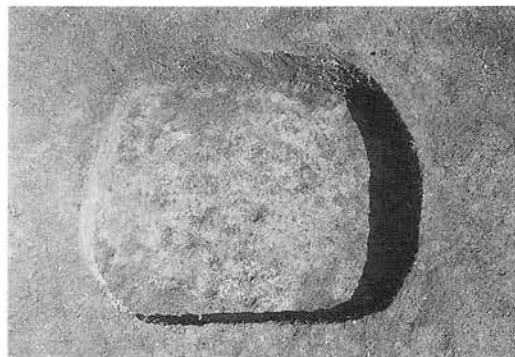
B III区遗物出土状况



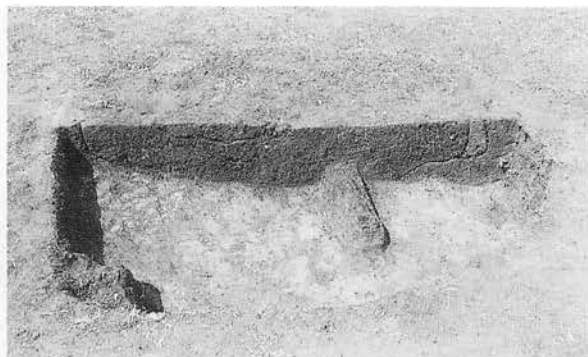
B III区遗物出土状况

写真图版24 烧土遗構(3)





A II j10土坑



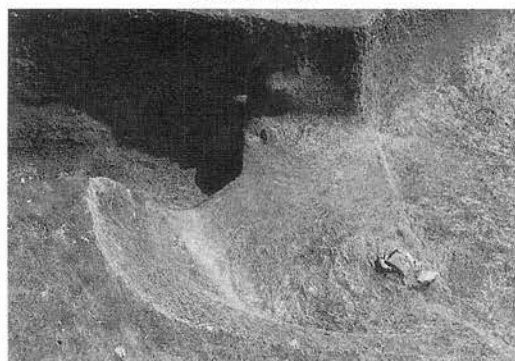
A II j10土坑断面



A III j5土坑



A III j5土坑断面



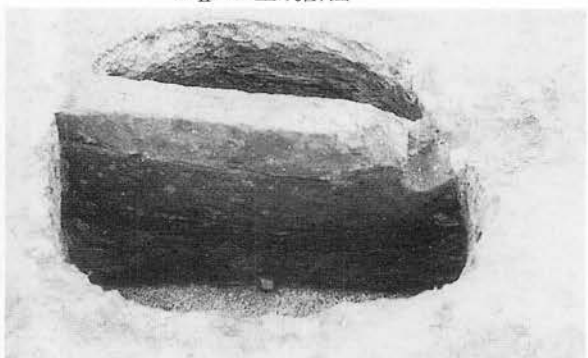
B II a9土坑



B II a9土坑断面

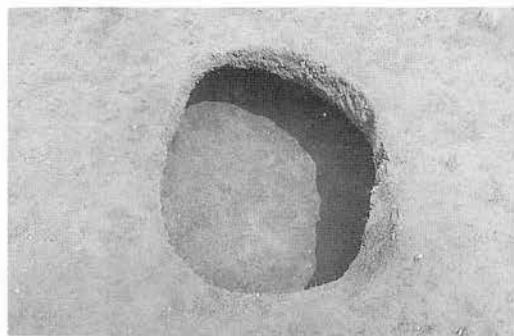


B III a4土坑

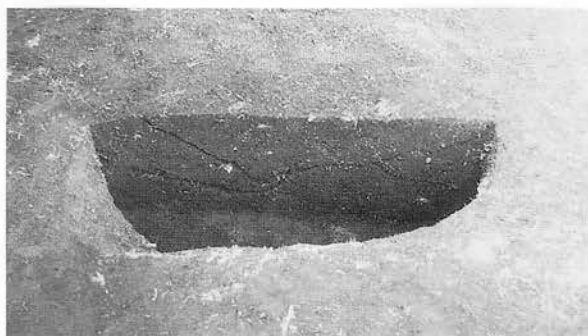


B III a4土坑断面

写真图版25 土坑(1)



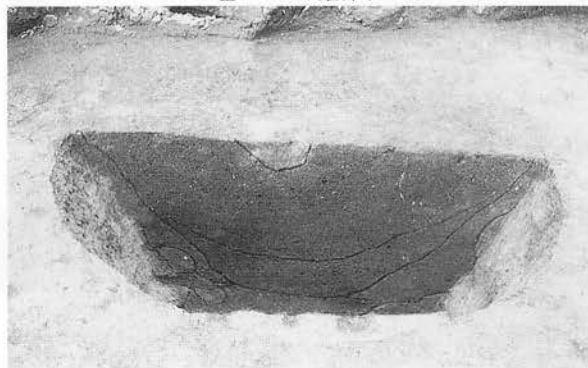
B III a 6 土坑



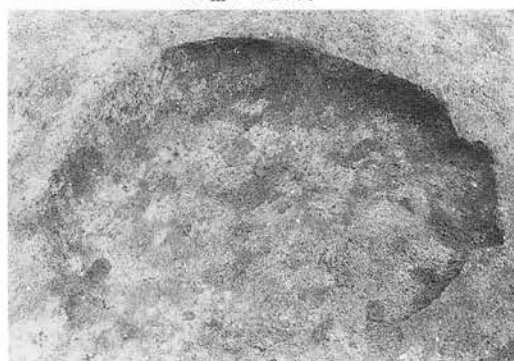
B III a 6 土坑断面



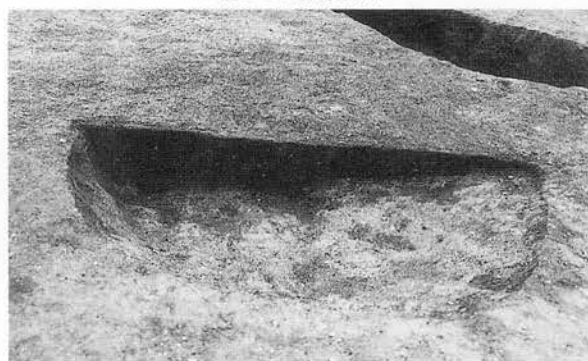
B III d 4 土坑



B III d 4 土坑断面



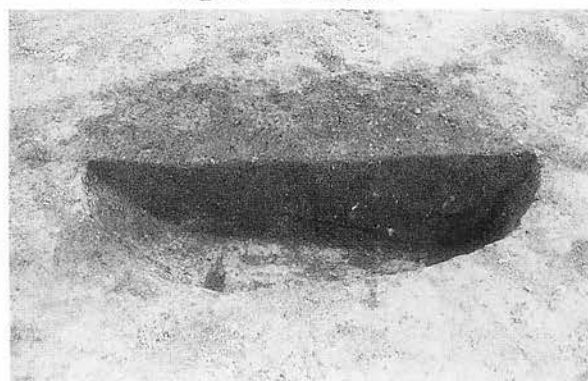
C II i10-1 土坑



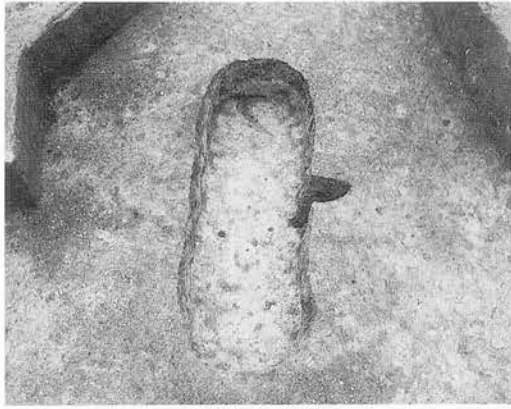
C II i10-1 土坑断面



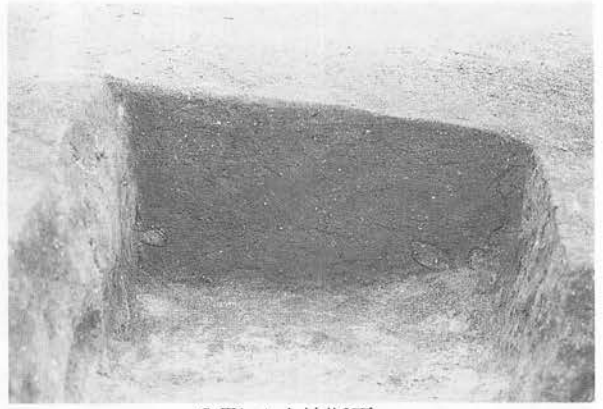
C II i10-2 土坑



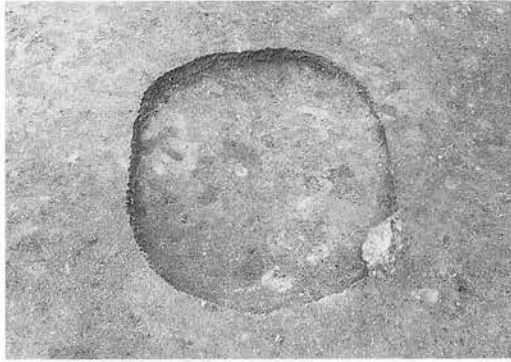
C II i10-2 土坑断面



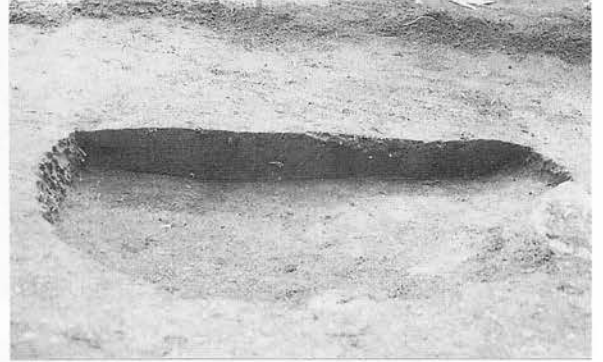
C III h 4 土坑



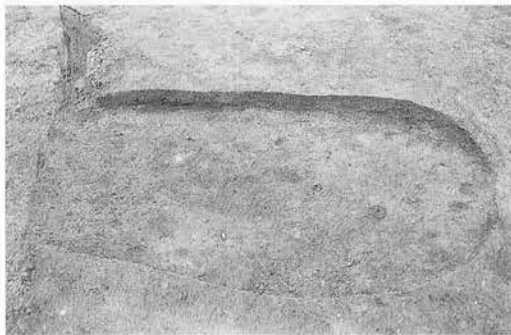
C III h 4 土坑断面



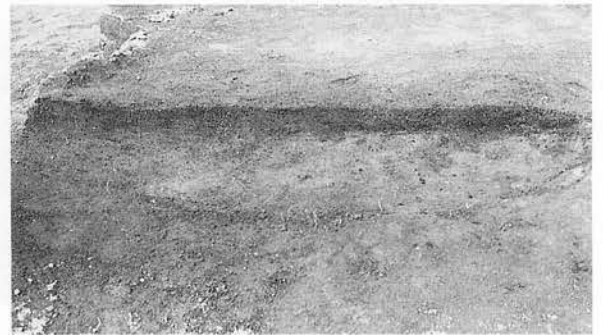
C III h 6 土坑



C III h 6 土坑断面



C III j 1 土坑



C III j 1 土坑断面



C III j 4 土坑



C III j 4 土坑断面

写真图版27 土坑(3)



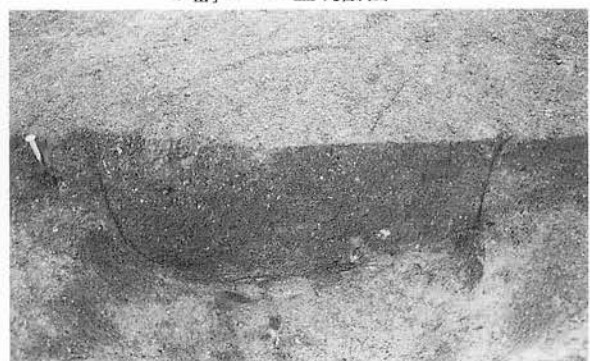
C IIIj 5-1 土坑



C IIIj 5-1 土坑断面



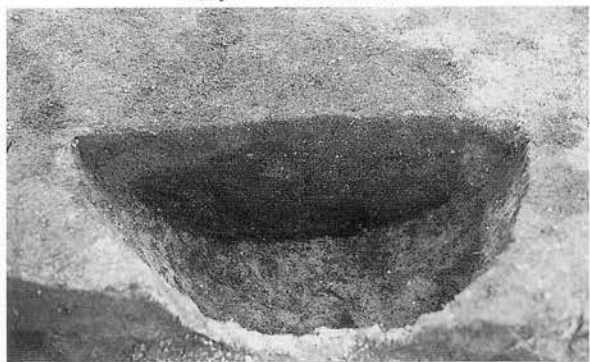
C IIIj 5-2 土坑



C IIIj 5-2 土坑断面



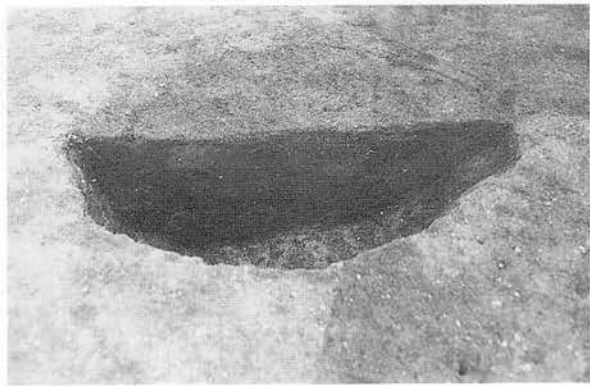
D IIIa 4 土坑



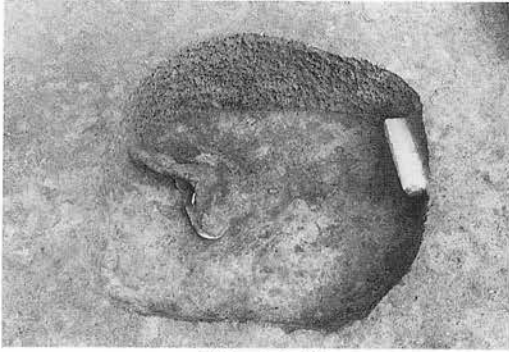
D IIIa 4 土坑断面



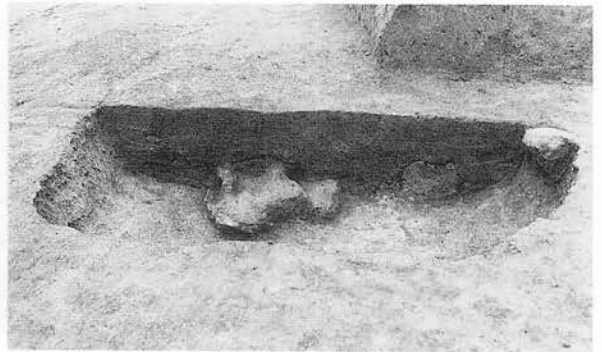
D IIIa 5 土坑



D IIIa 5 土坑断面



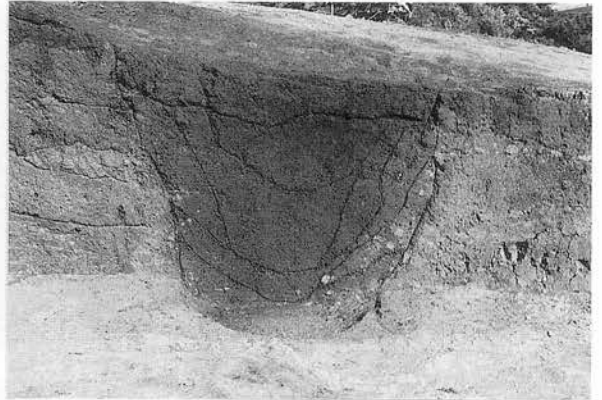
D II a 8 土坑



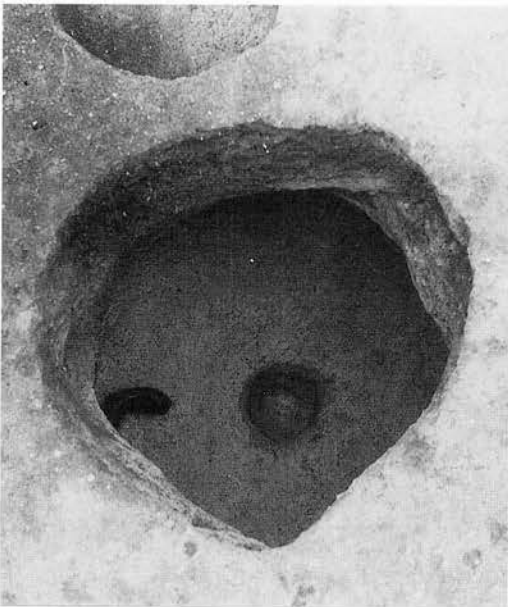
D II a 8 土坑断面



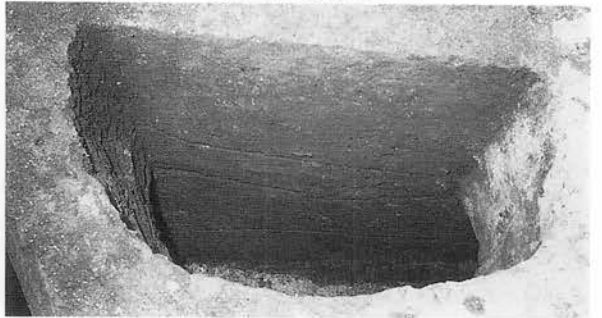
D II d 4 土坑



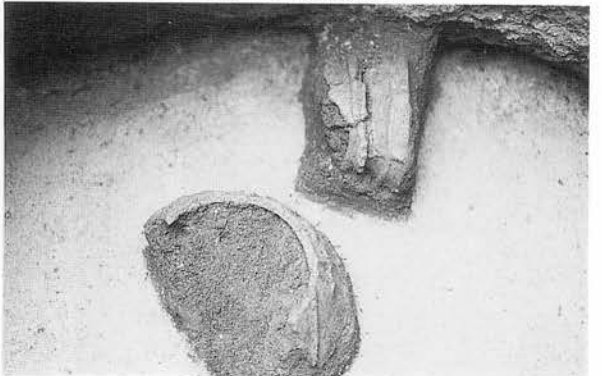
D II d 4 土坑断面



D III b 5 - 1 土坑



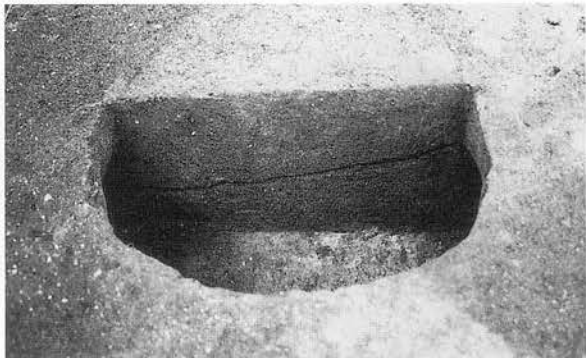
D III b 5 - 1 土坑断面



D III b 5 - 1 土坑遺物出土狀況



D III b 5 - 2 土坑



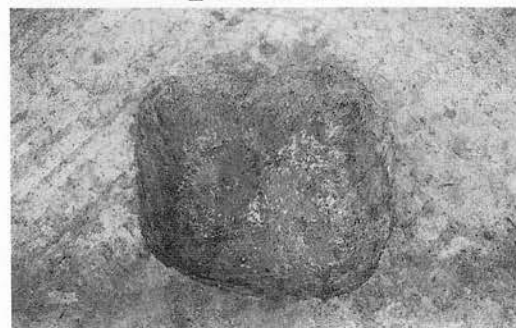
D III b 5 - 2 土坑断面



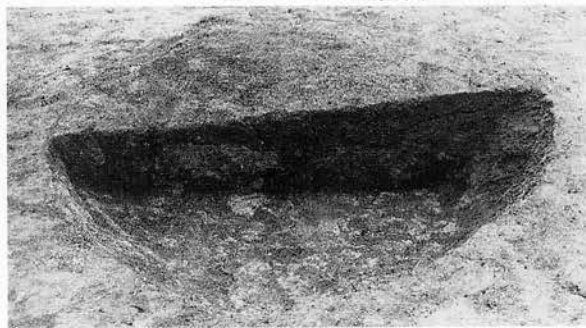
D III b 5 - 3 土坑



D III b 5 - 3 土坑断面



D III g 2 土坑



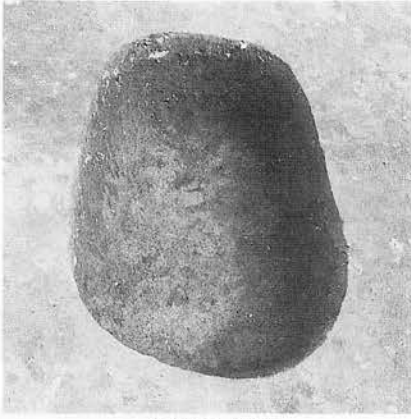
D III g 2 土坑断面



D III h 7 土坑



D III h 7 土坑断面



D III i 1 土坑



D III i 1 土坑断面



C III j 5 配石遺構(東から)

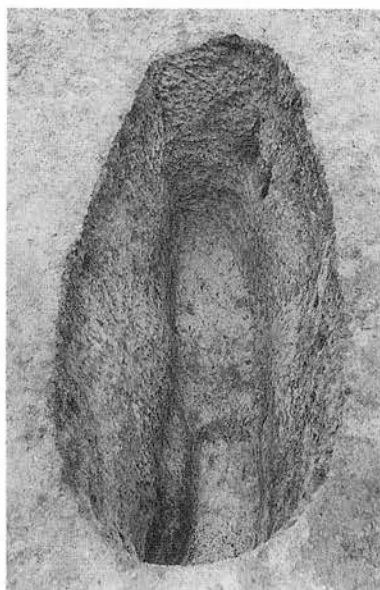


C III j 5 配石遺構 上部土層断面

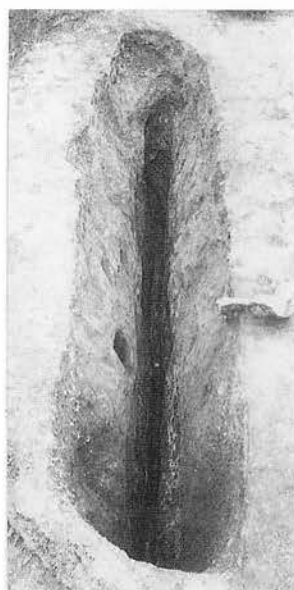
写真図版31 土坑(7)・C III j 5 配石遺構



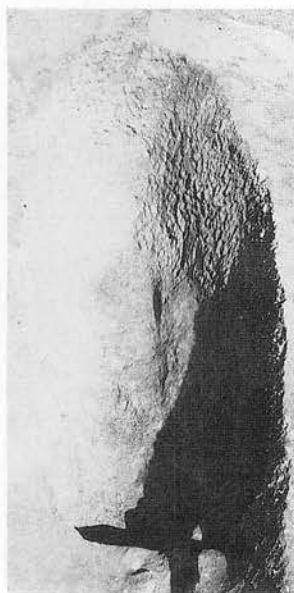
B II a 8 陥し穴平面



B II b 7 陥し穴平面



B III b 2 陥し穴平面



平面



埋土断面



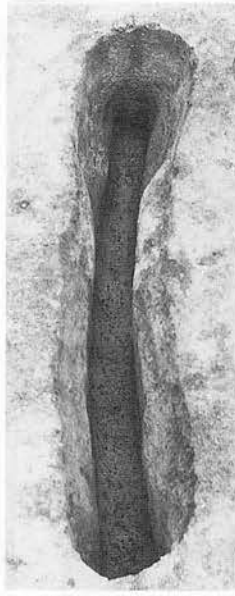
埋土断面

写真図版32 陥し穴状遺構(1)





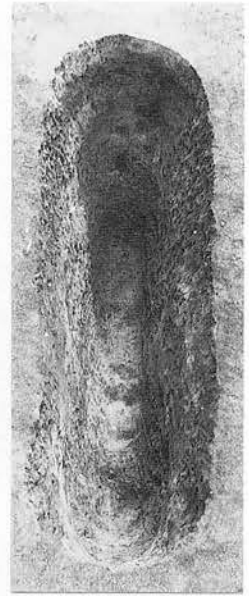
C II g 9 陥し穴平面



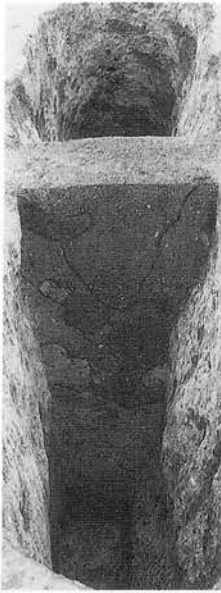
C II i 10 陥し穴平面



C III i 4 陥し穴平面



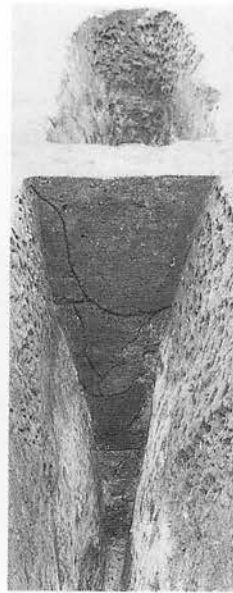
C III j 3 陥し穴平面



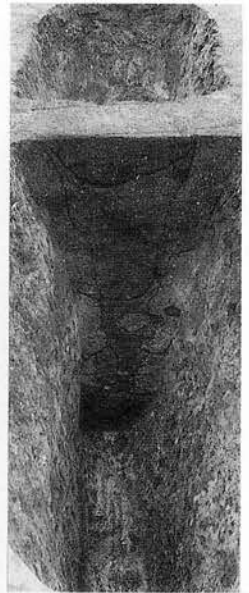
埋土断面



埋土断面

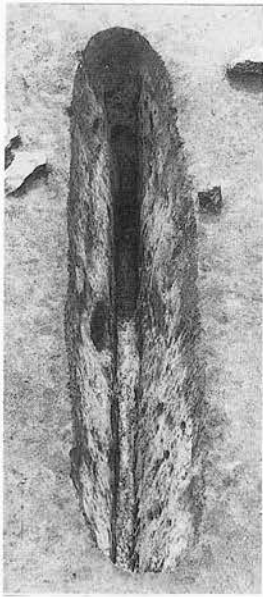


埋土断面

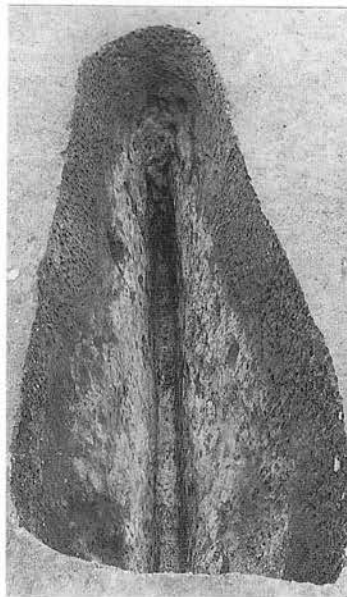


埋土断面

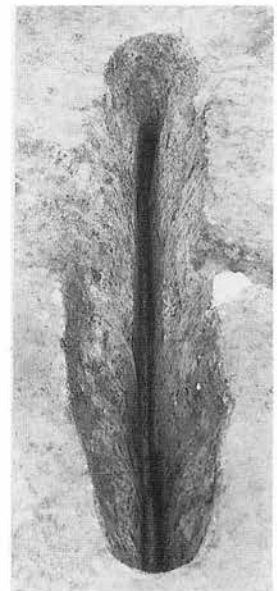
写真図版33 陥し穴状遺構(2)



C III j 4 陥し穴平面



C III j 5 陥し穴平面



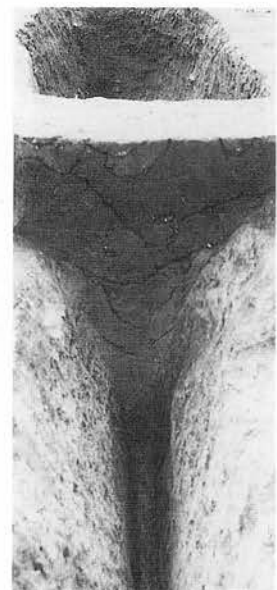
D II f10 陥し穴平面



埋土断面

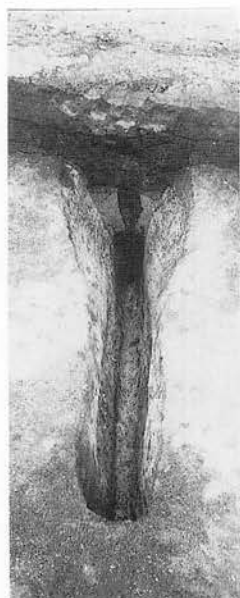


埋土断面



埋土断面

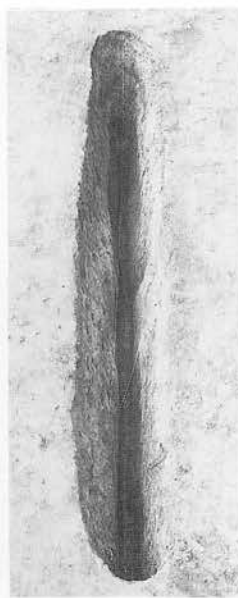
写真図版34 陥し穴状遺構(3)



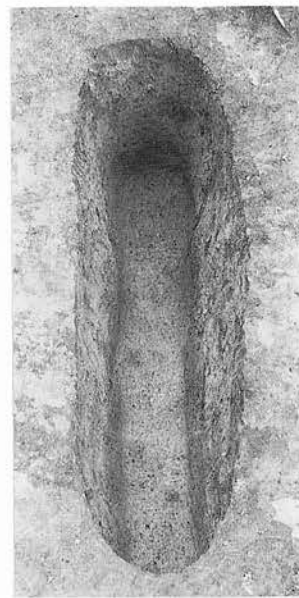
D III b 5 陥し穴平面



D III c 5 陥し穴平面



D III f 3 陥し穴平面



D III h 6 陥し穴平面



埋土断面



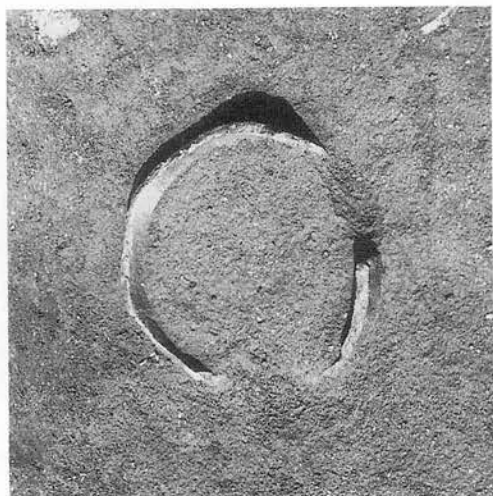
埋土断面



埋土断面



埋土断面



C III e 1 - 1 埋設土器検出状況



C III e 1 - 1 埋設土器断面



C III e 1-2 埋設土器検出状況



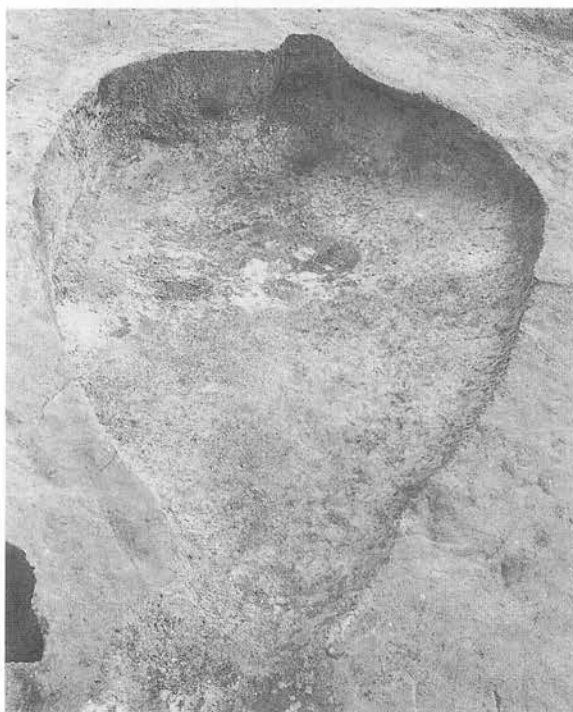
D II h 7 埋設土器検出状況



DⅢa 4 埋設土器検出状況



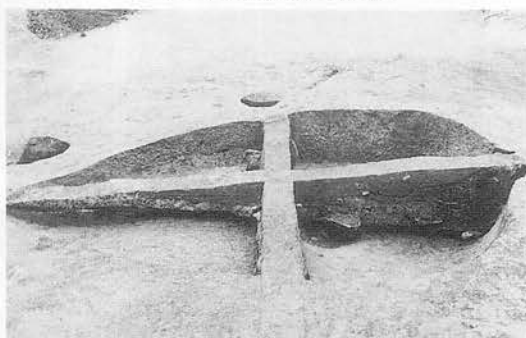
DⅢa 4 埋設土器断面



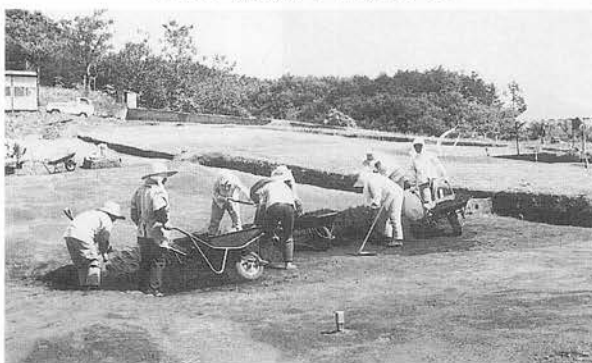
DⅡc 7 炭窯跡平面(西から)



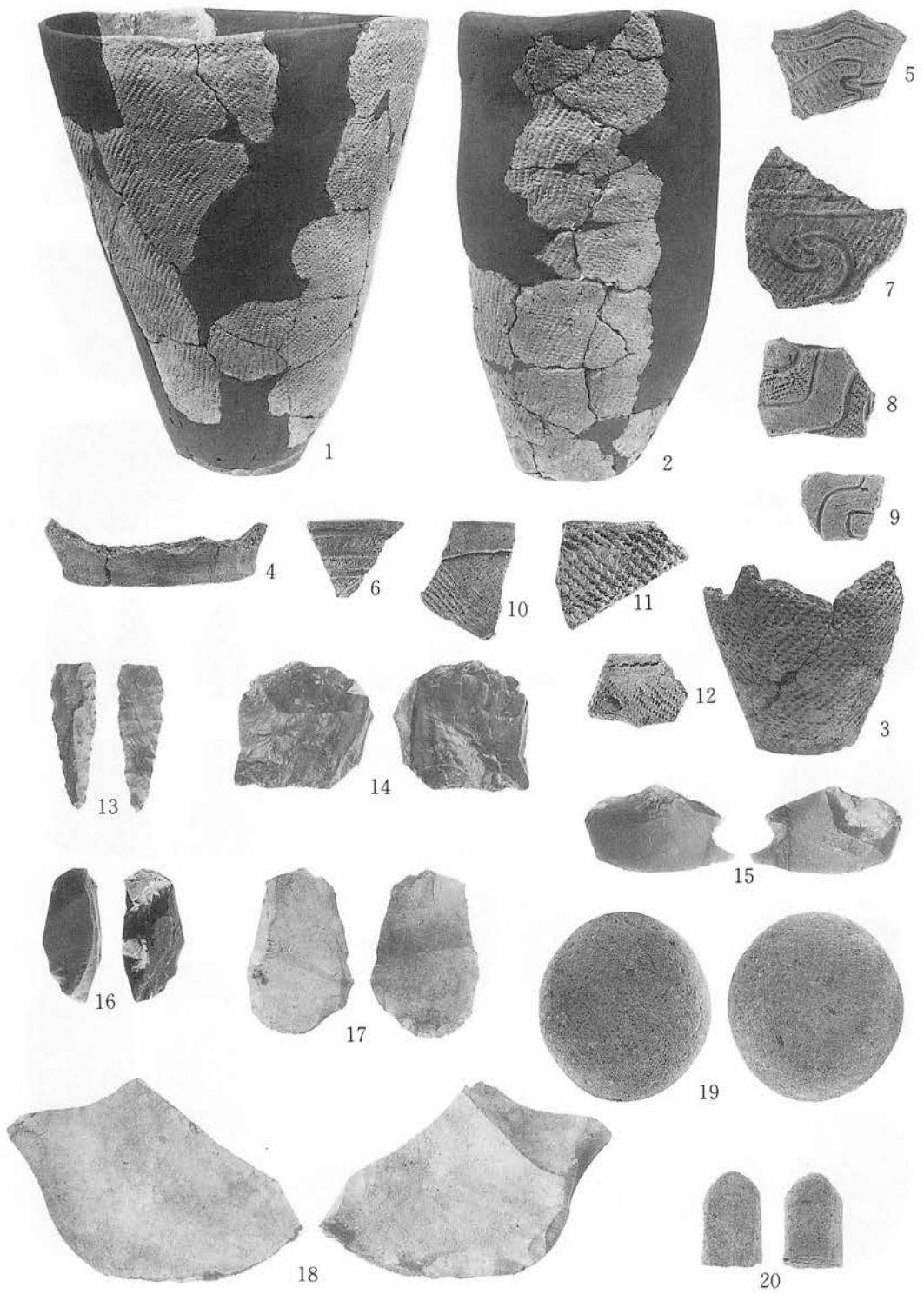
DⅡc 7 炭窯跡南北断面



DⅡc 7 炭窯跡東西断面



作業風景



写真図版38 A II i 10住居跡出土遺物

A III i 2 住



21



22



23

A III j 4 住



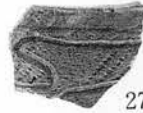
24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



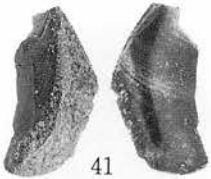
38



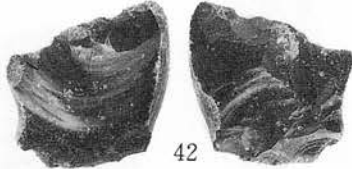
39



40



41



42



43

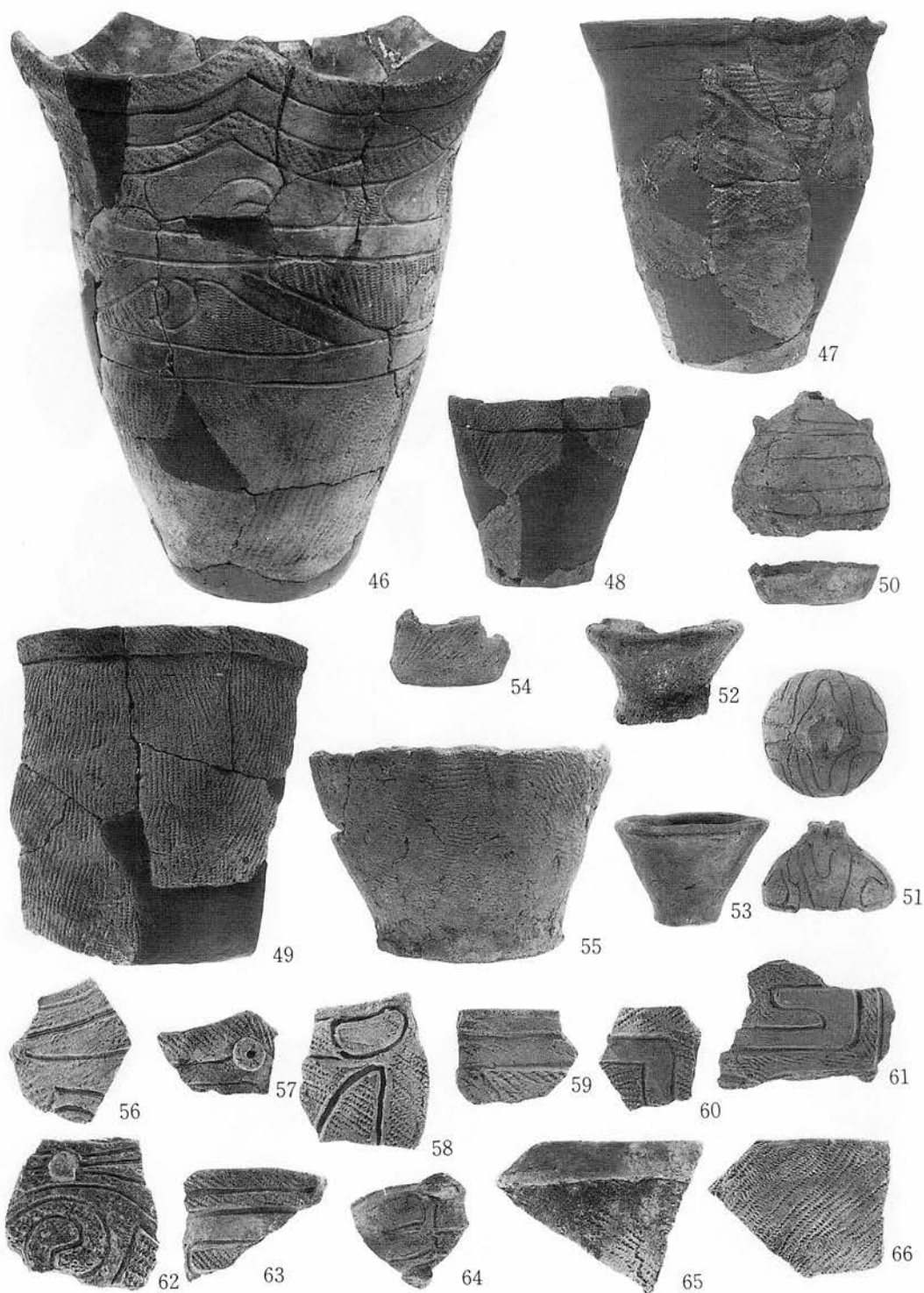


45



44

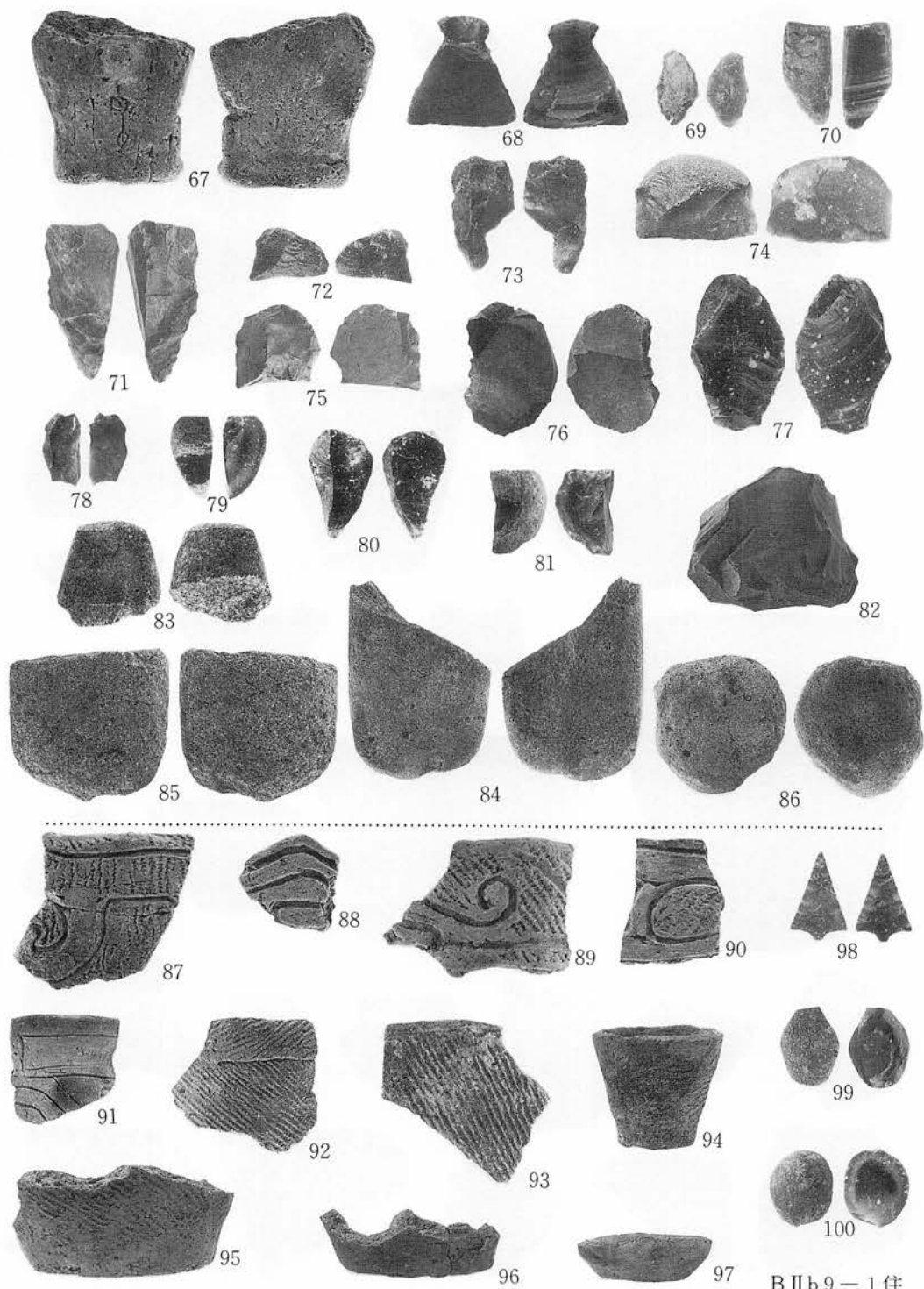
写真図版39 A III i 2 · A III j 4 住居跡出土遺物



写真図版40 BⅡa10住居跡出土遺物

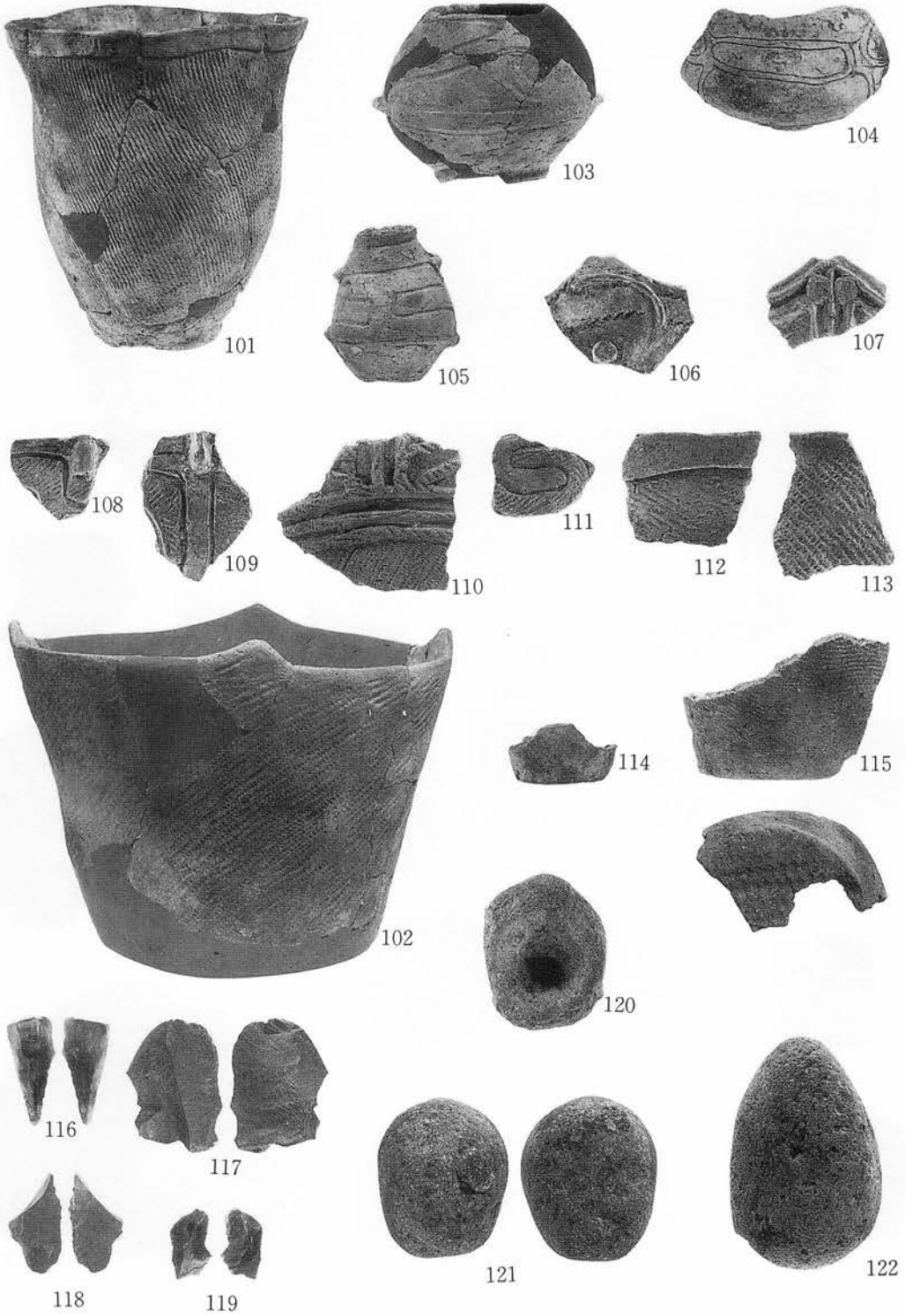


B II a10住

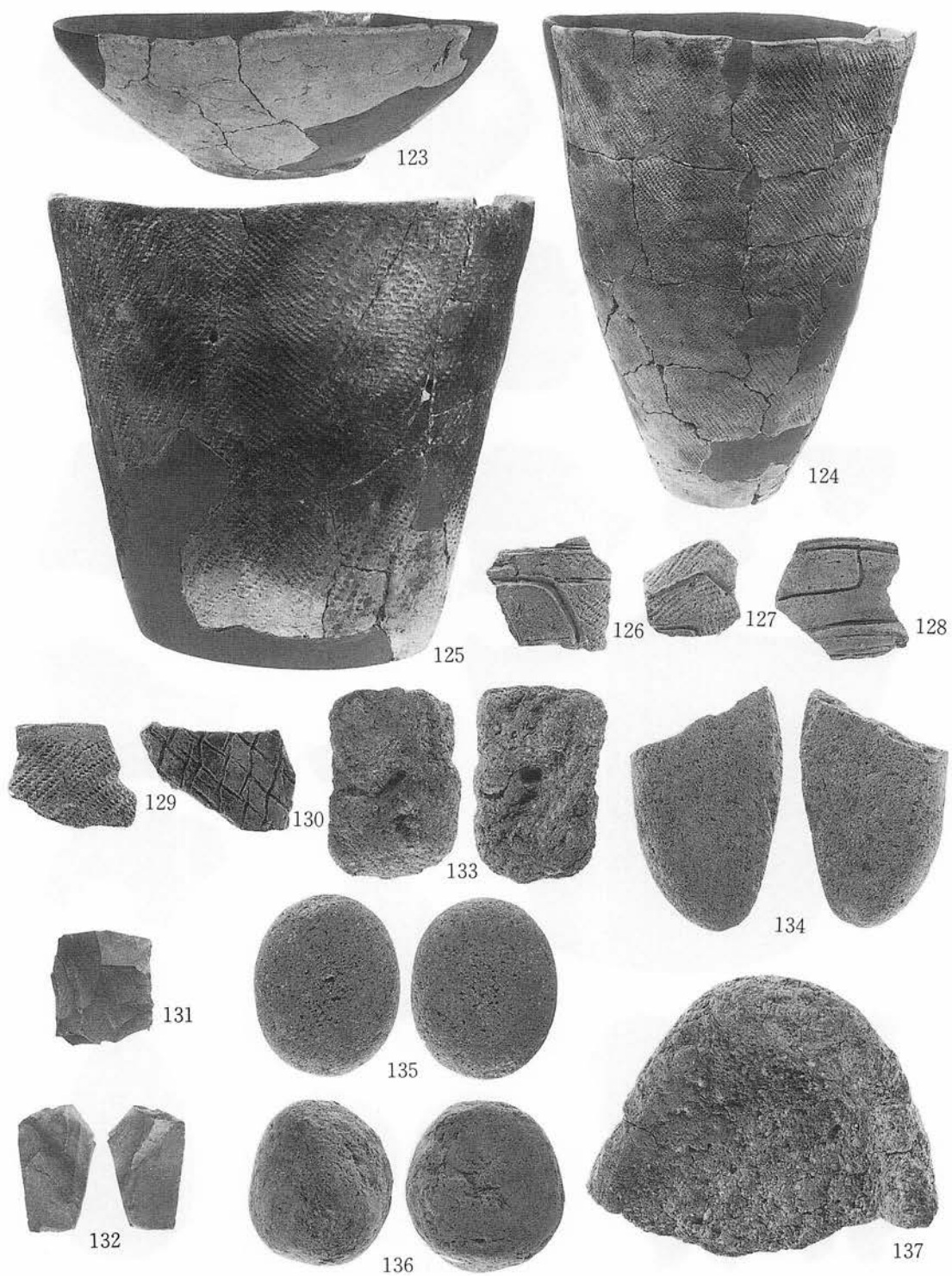


B II b9-1住

写真図版41 B II a10・B II b9-1住居跡出土遺物



写真図版42 B II b 9 - 2 住居跡出土遺物



写真図版43 BⅡd6住居跡出土遺物

B II e 9 住



141



138



139



140

B II f10 住



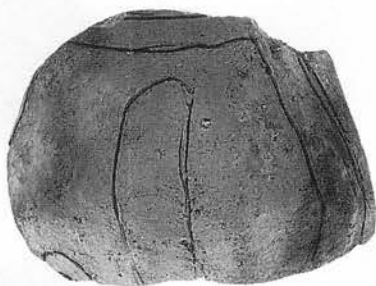
142



144



145



143



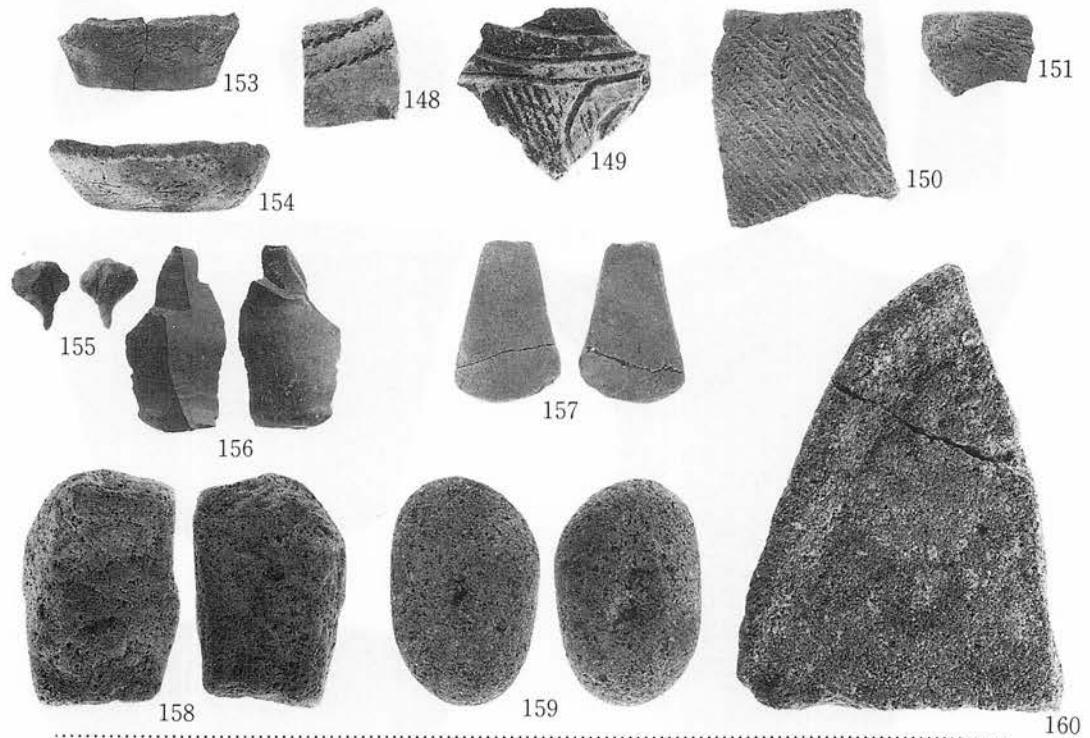
146



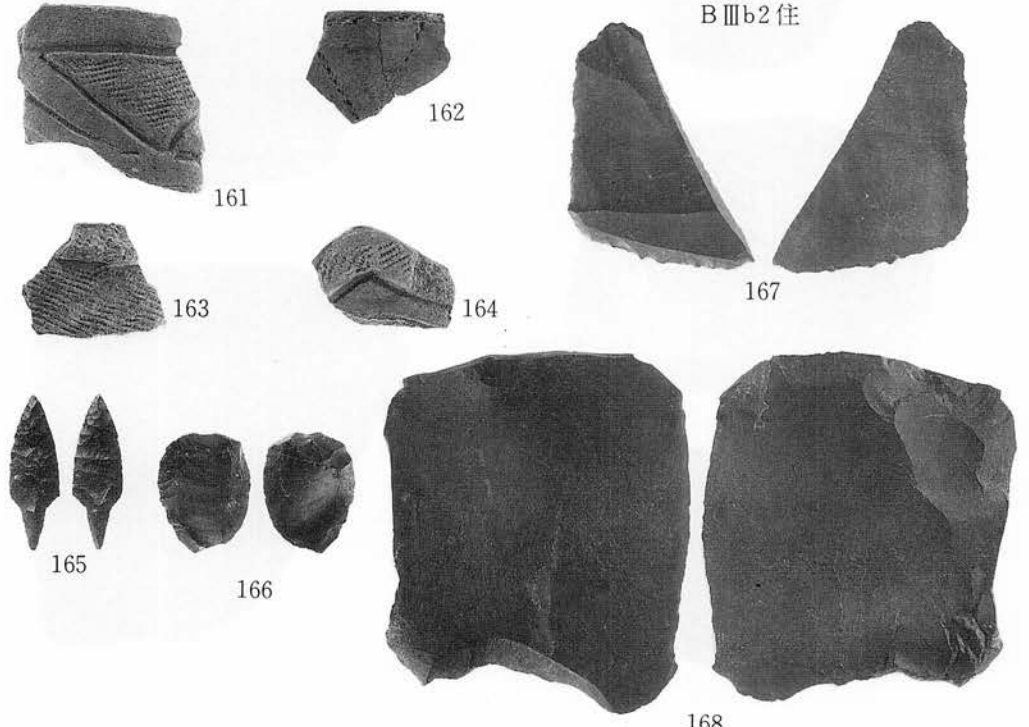
147

写真図版44 B II e 9 · B II f10住居跡出土遺物

B II f10住



B III b2 住



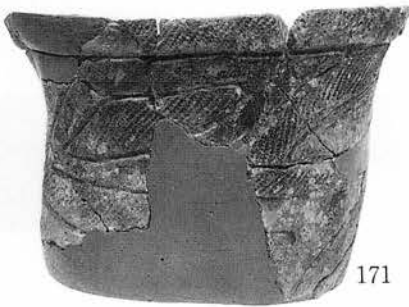
写真図版45 B III b 2 ・ B II f10住居跡出土遺物



169



170



171



172

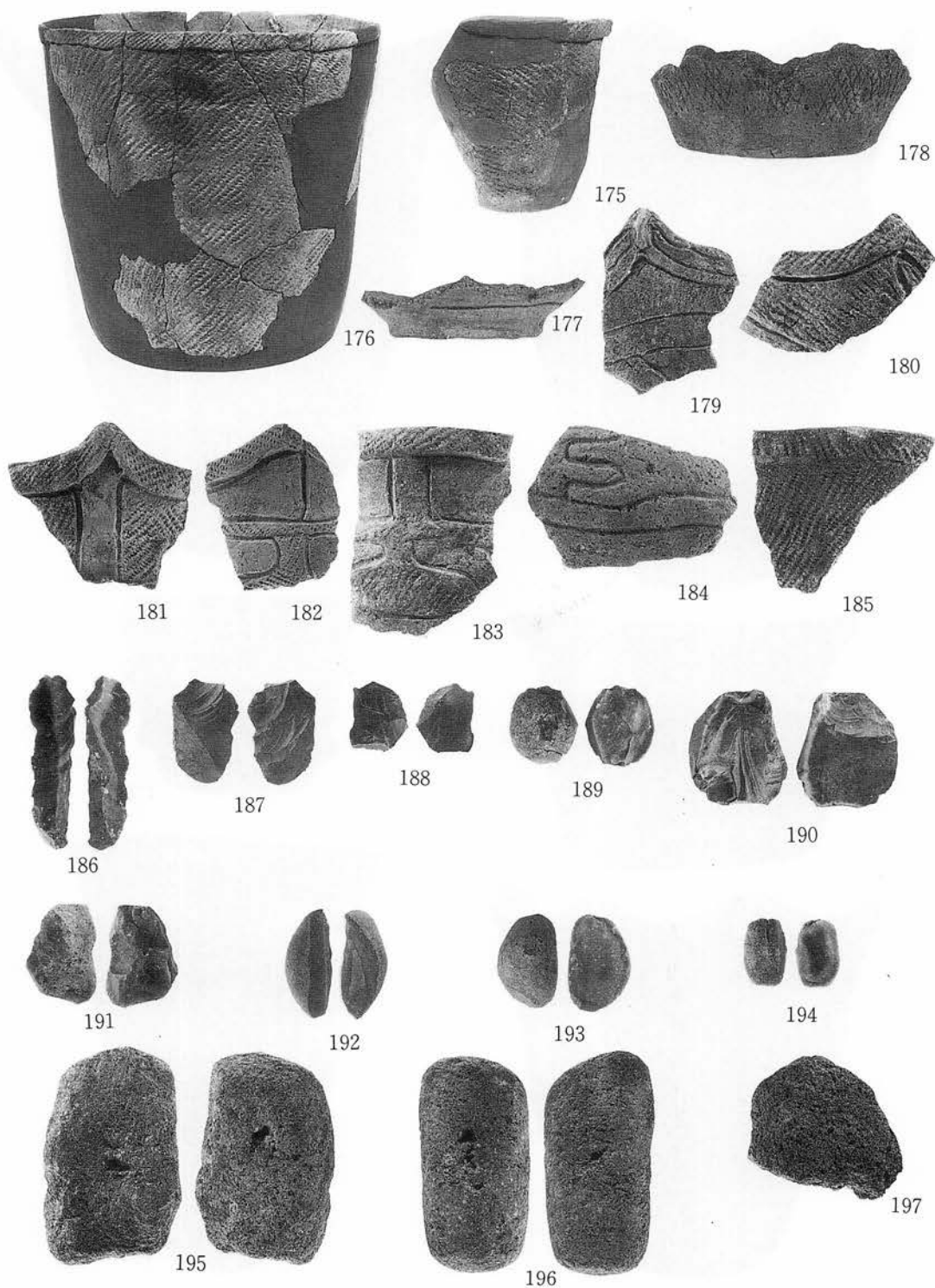


173



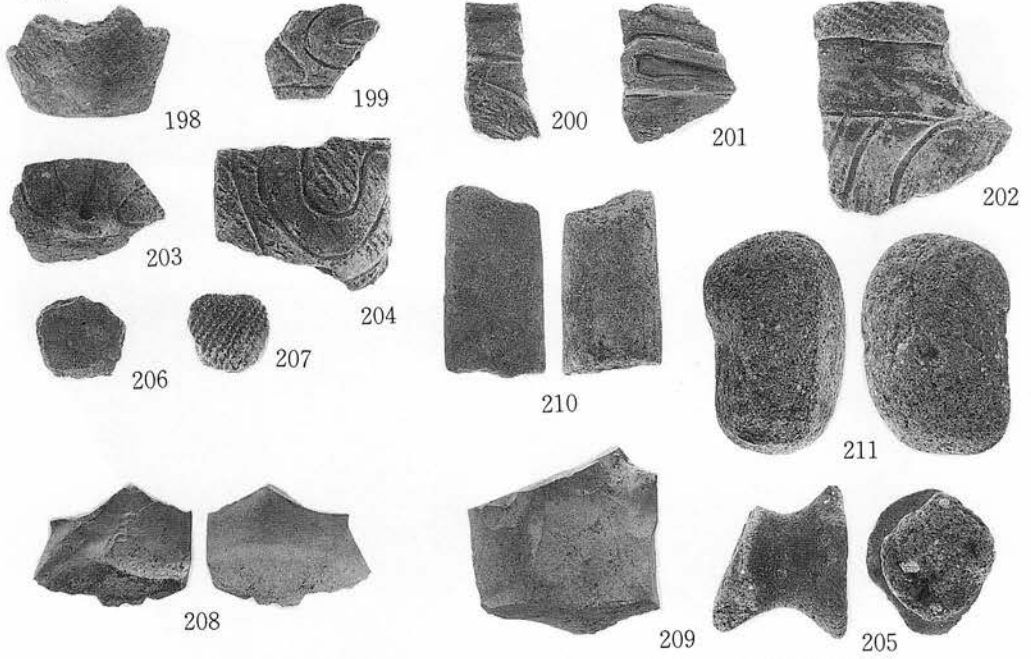
174

写真図版46 CⅢi3 住居跡出土遺物(1)

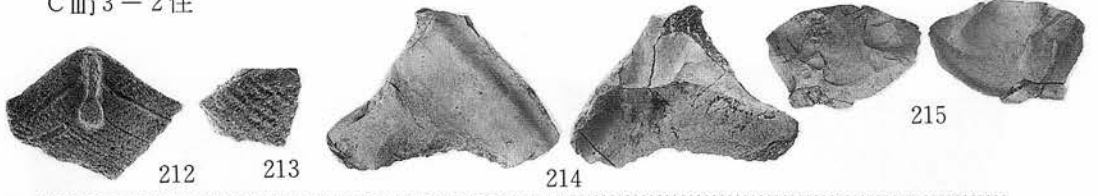


写真図版47 CⅢi3住居跡出土遺物(2)

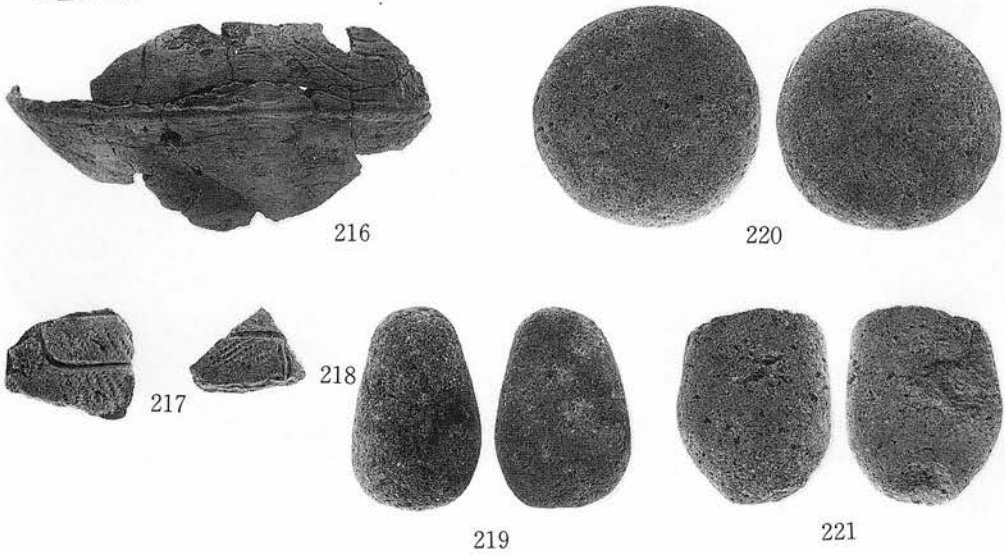
CⅢj3-1住



CⅢj3-2住



DⅢa4住



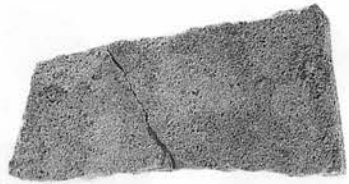
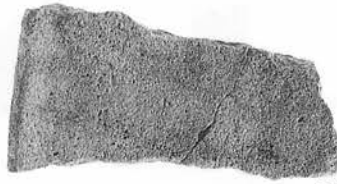
写真図版48 CⅢj3-1・2・DⅢa4住居跡出土遺物



DⅢa 5 住



222



223



224



DⅢc 3 住



228

DⅢc 1 住



225



226



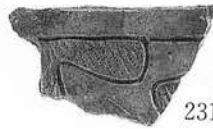
227



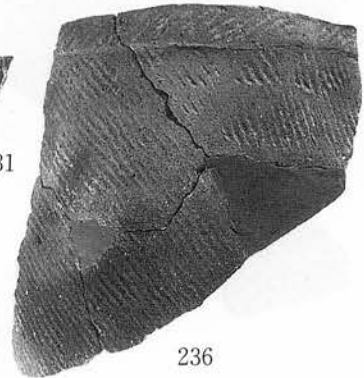
229



230



231



236



232



233



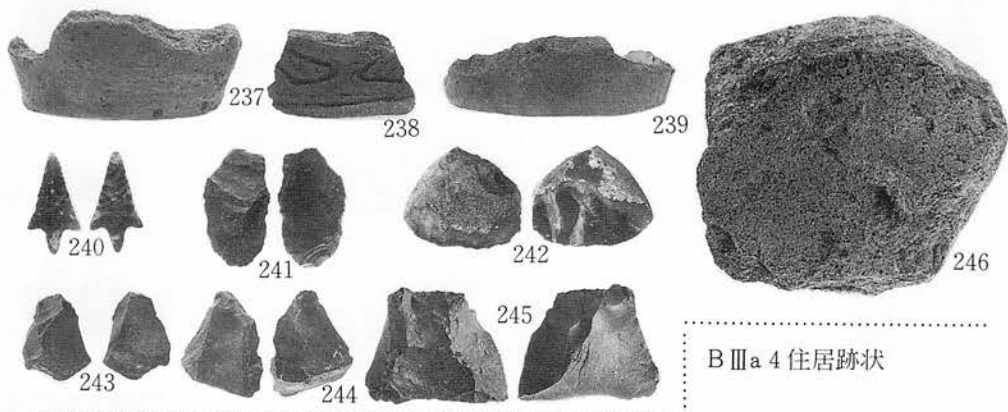
234



235

写真図版49 DⅢa 5・DⅢc 1・3 住居跡出土遺物

DⅢc 3 住



BⅢa 4 住居跡状



247



249

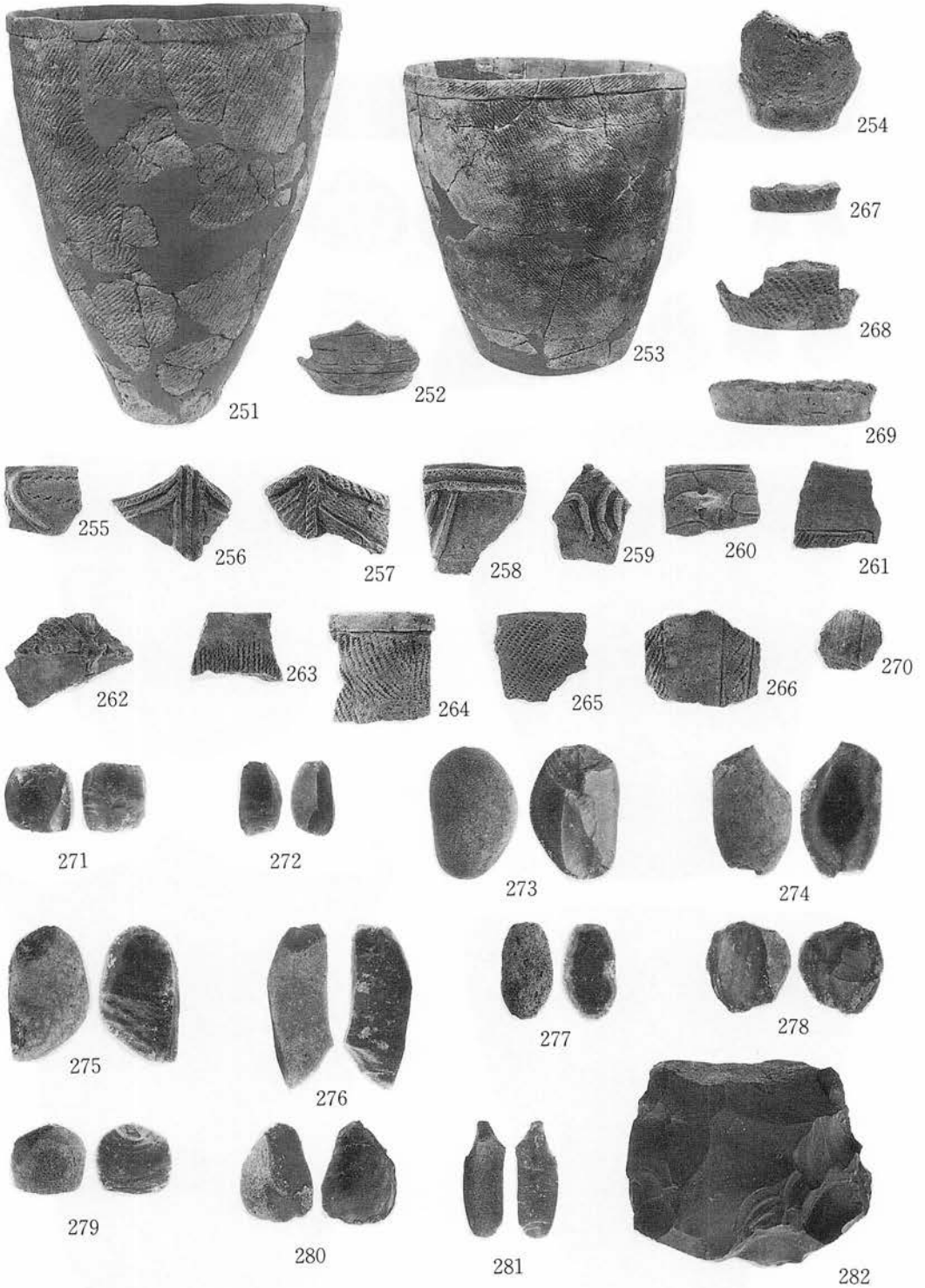


248

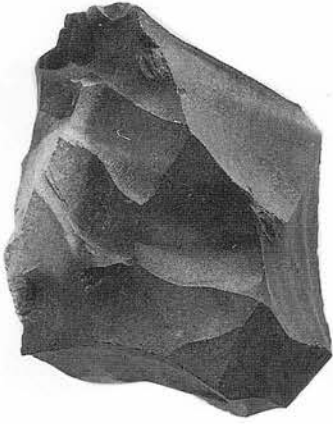


250

写真図版50 DⅢc 3 住居跡・BⅢa 4 住居跡状出土遺物



写真図版51 BⅢa 4 住居跡状遺構出土遺物



283



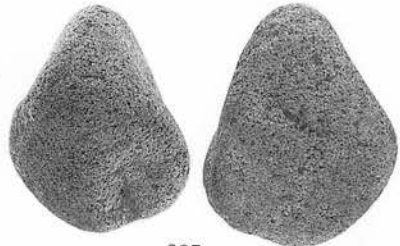
284



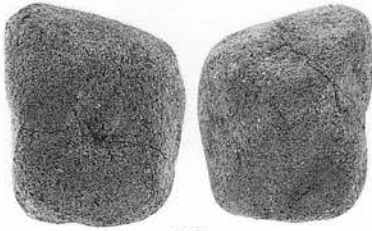
285



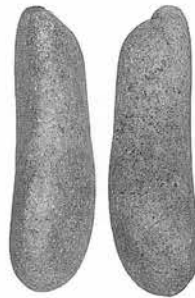
286



287



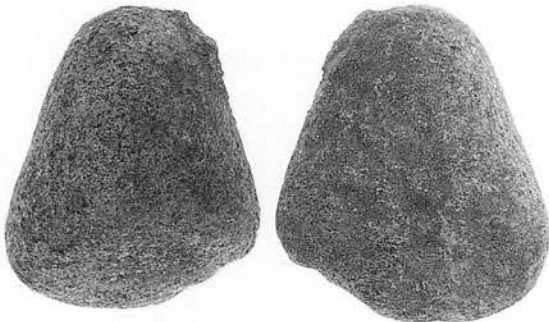
288



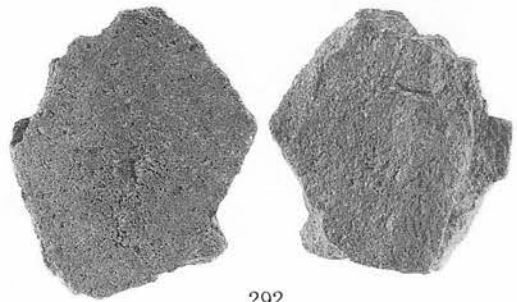
290



291



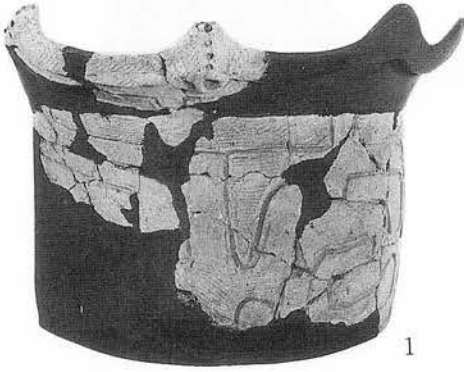
289



292

写真図版52 B III a 4 住居跡状遺構出土遺物

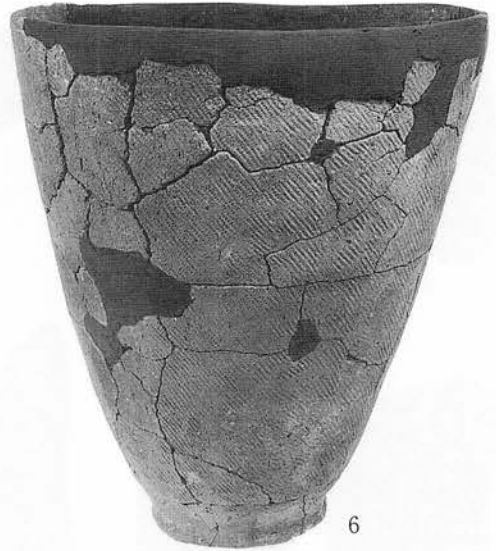
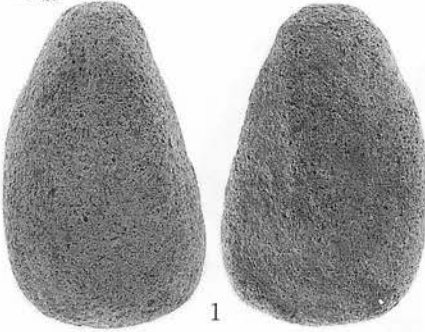
D II h 9 炉跡



D III a 5 焼土



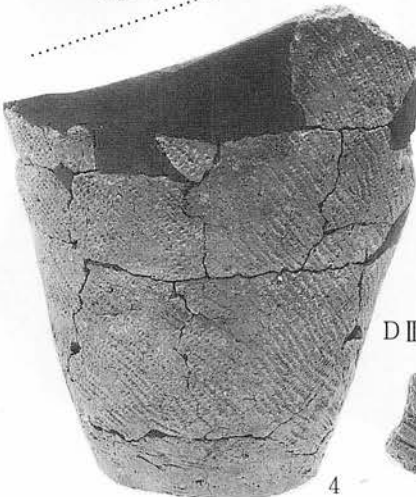
B II g10 焼土



D II a 9 焼土



D III f 1 焼土



D III a 1 焼土

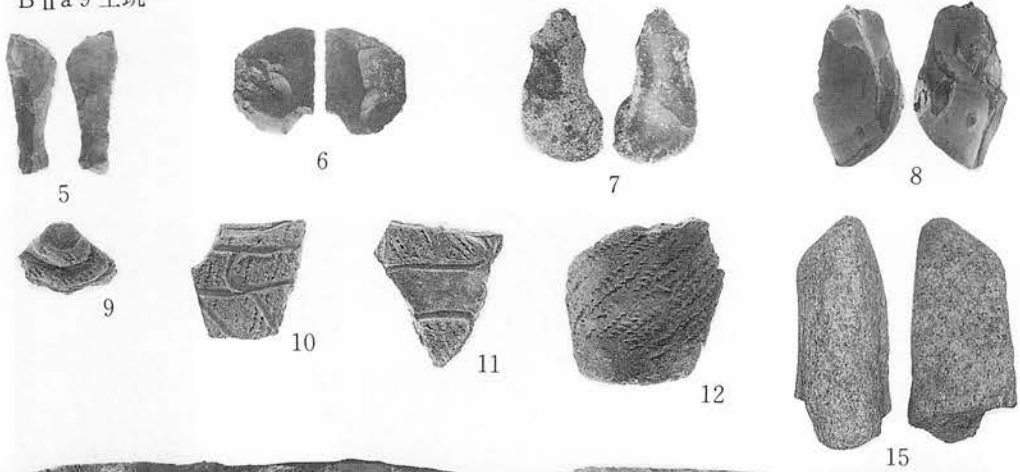


写真図版53 D II h 9 炉跡・焼土遺構出土遺物

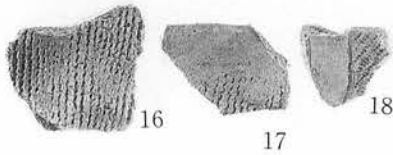
A IIj10土坑



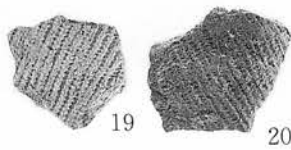
B IIa9土坑



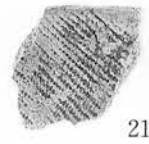
B IIIa4土坑



B IIIa6土坑



B IIId4土坑



C IIi10-1土坑



写真图版54 土坑出土遗物(1)

D II a 8 土坑



D III a 5 土坑

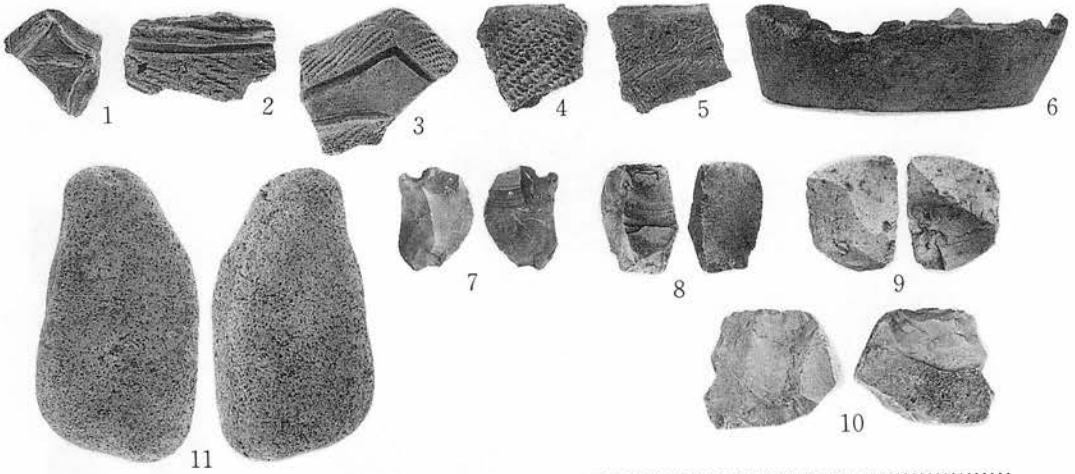


D III b 5 - 1 土坑

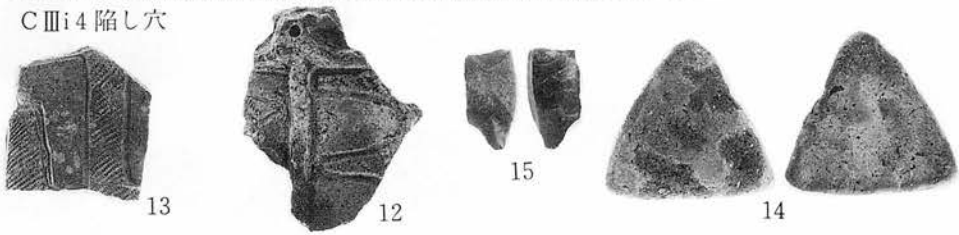


写真図版55 土坑出土遺物(2)

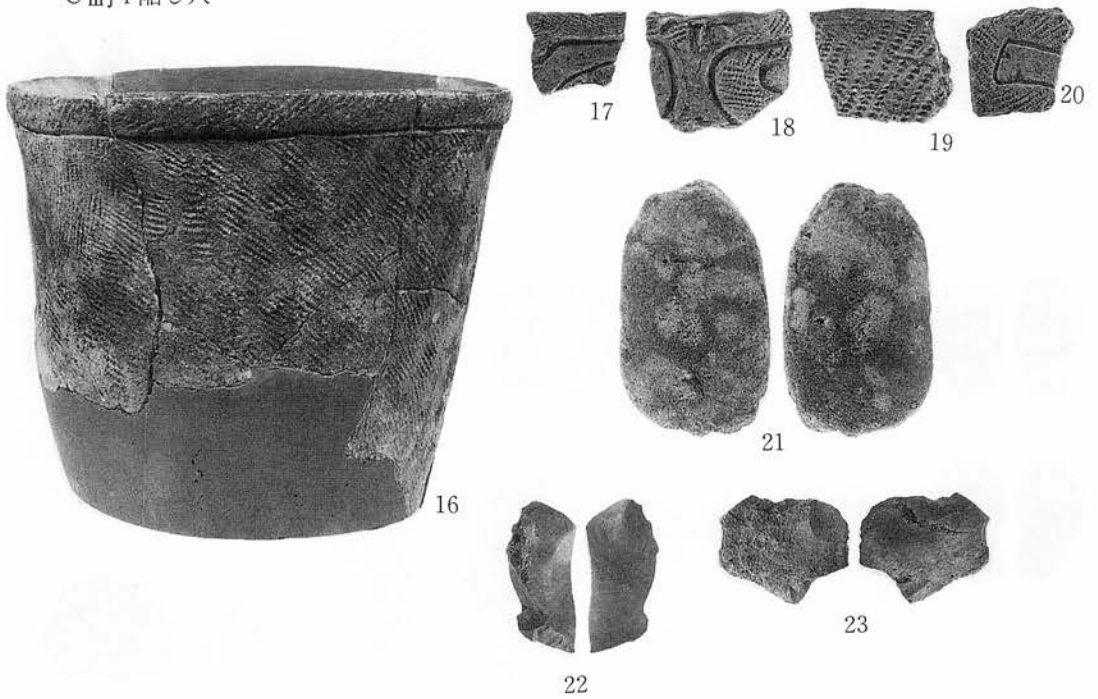
BⅢb2 陥し穴



CⅢi4 陥し穴



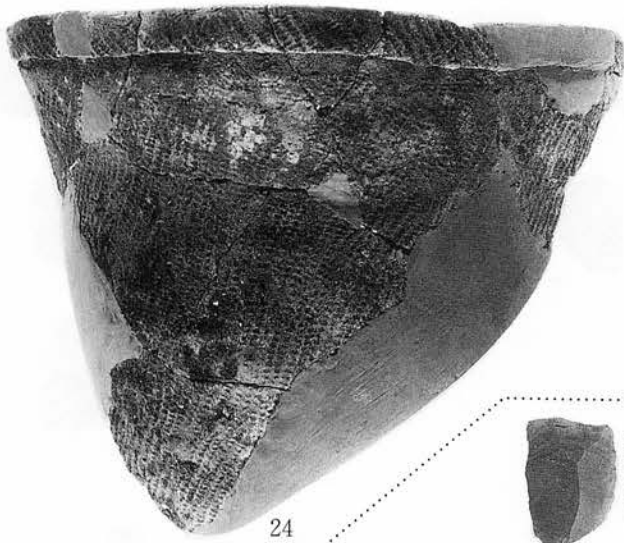
CⅢj4 陥し穴



写真図版56 陥し穴状遺構出土遺物(1)



CⅢj5 陥し穴



24



25



26

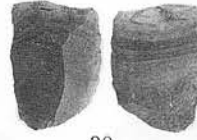


27



28

DⅡf10 陥し穴



29



30



31



32

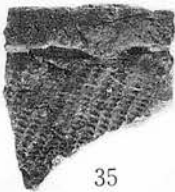


33

DⅢb5 陥し穴



34



35

DⅢc5 陥し穴



36



37



38



39



40



41



42



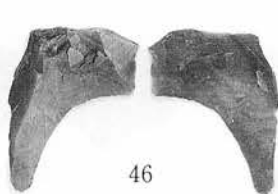
43



44



45



46



47

DⅢf3 陥し穴



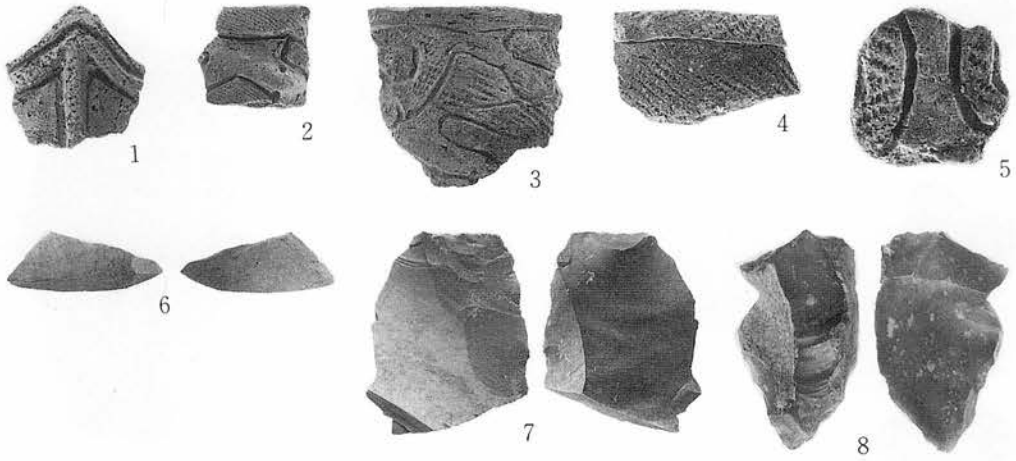
48



49

写真図版57 陥し穴状遺構出土遺物(2)

C IIIj 5 配石遺構



C IIIe 1 - 1 埋設土器



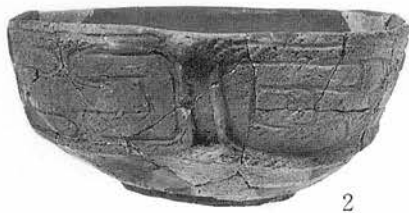
D IIIa 4 埋設土器



D IIh 7 埋設土器



C IIIe 1 - 2 埋設土器



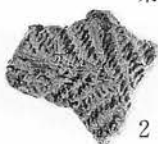
写真図版58 C IIIj 5 配石遺構・埋設土器

第Ⅰ群土器

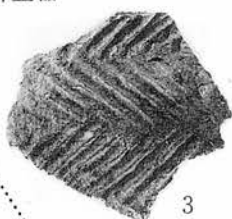


1

第Ⅱ群土器



2



3

第Ⅲ群1類土器



4

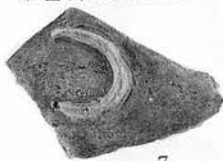


5



6

第Ⅲ群2類土器



7



8



10



11



9



12



13

第Ⅳ群1類土器



14

第Ⅳ群2a類土器



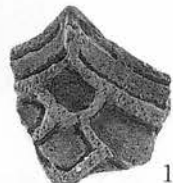
15



16



17



18



19



20



21

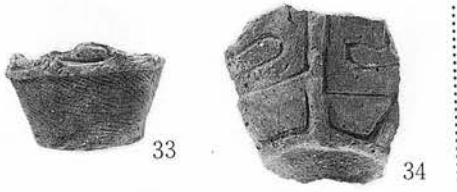
写真図版59 遺構外出土遺物(1)

第IV群 2b類土器

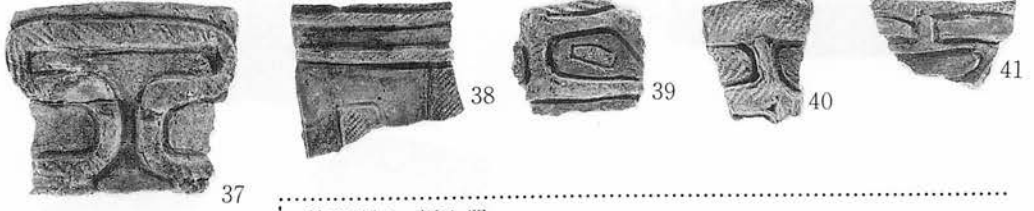
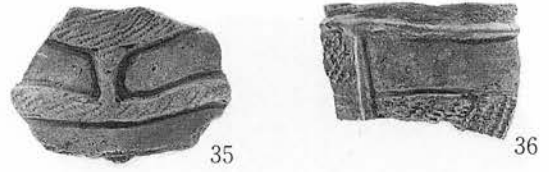


写真図版60 遺構外出土遺物(2)

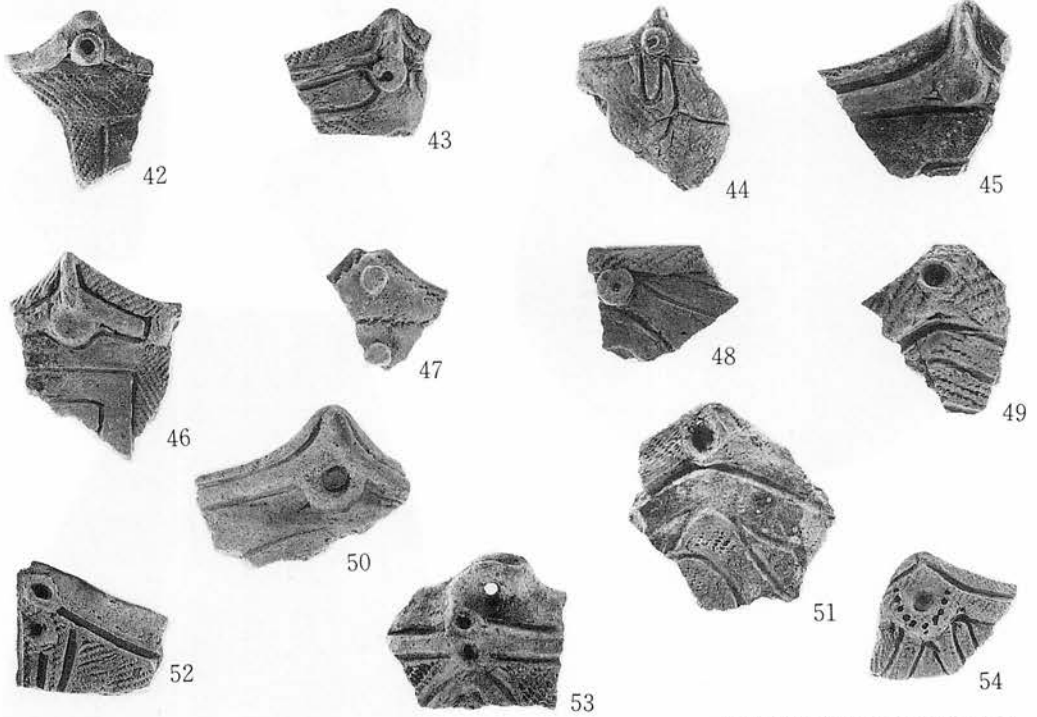
第IV群 2c類土器



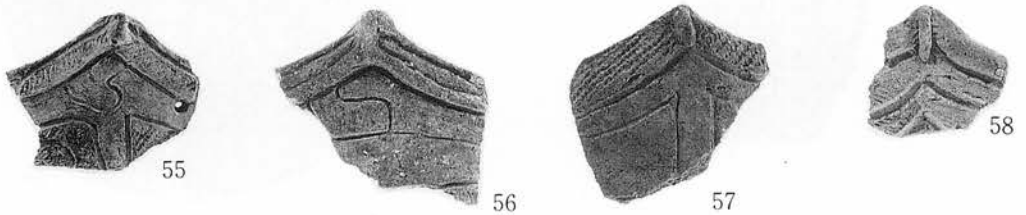
第IV群 2d類土器



第IV群 3a類土器

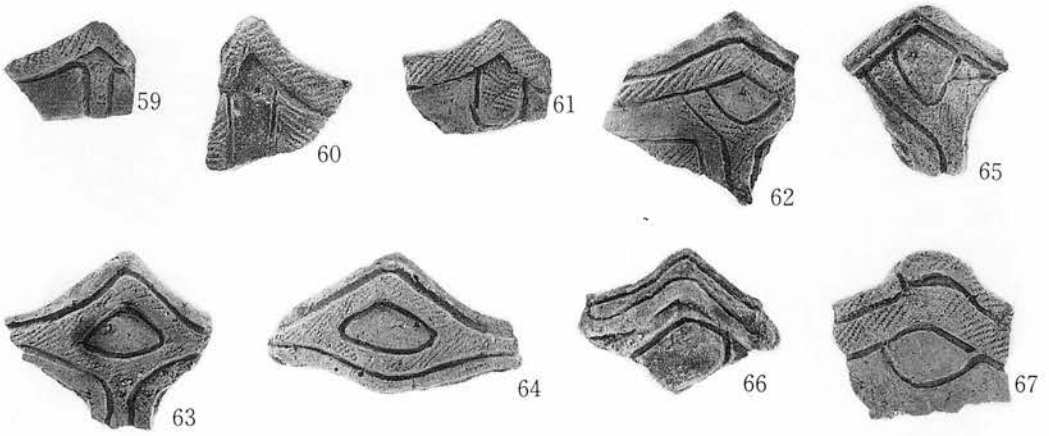


第IV群 3b類土器

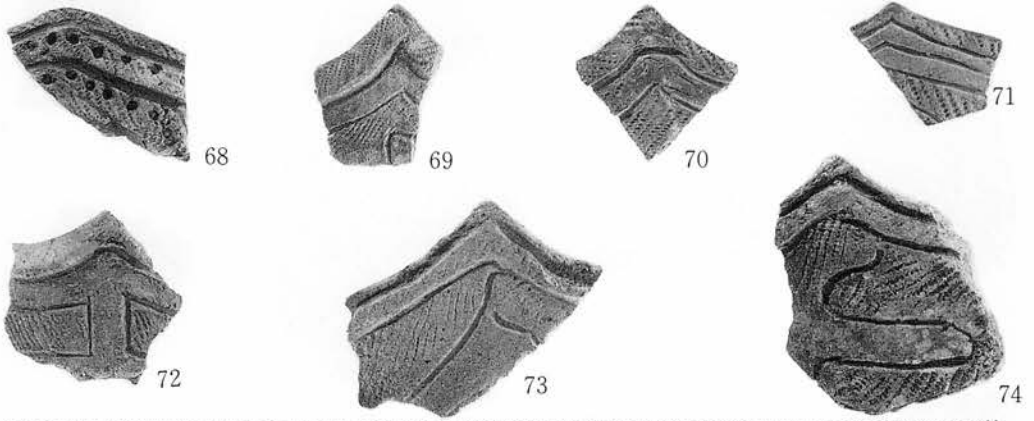


写真図版61 遺構外出土遺物(3)

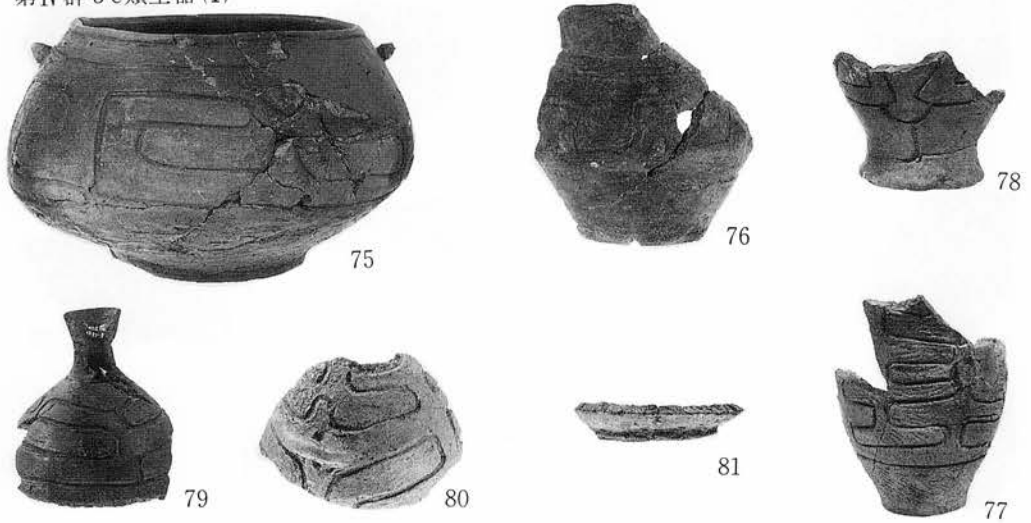
第IV群3c類土器



第IV群3d類土器

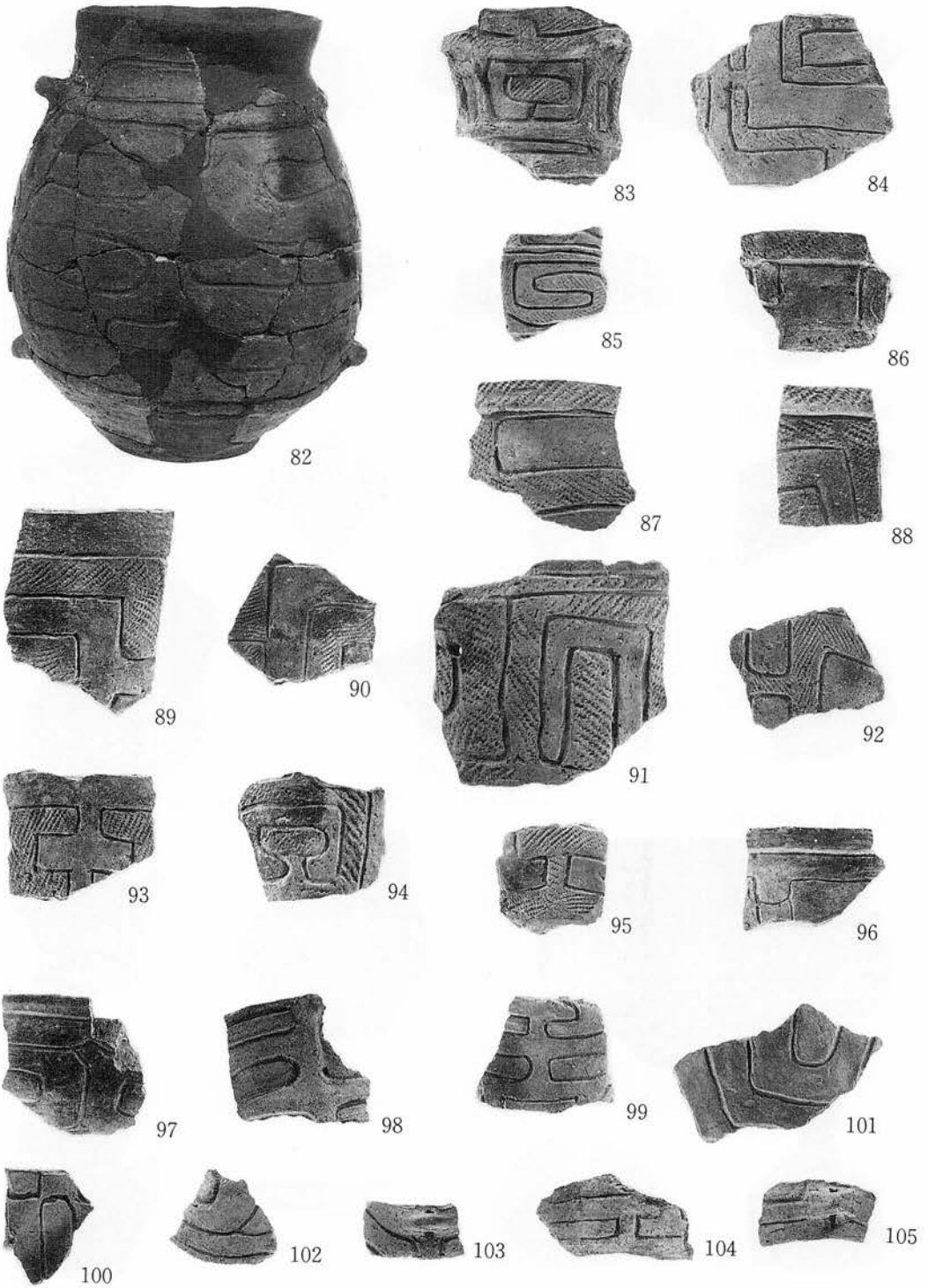


第IV群3e類土器(1)



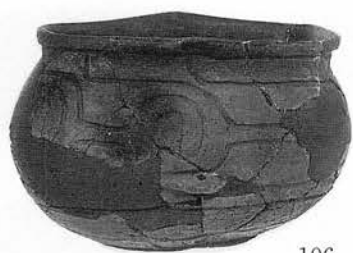
写真図版62 遺構外出土遺物(4)

第IV群 3e類土器(2)



写真図版63 遺構外出土遺物(5)

第IV群3f類土器(1)



106



109



110



111



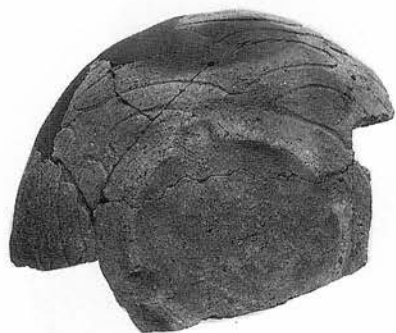
107



112



108

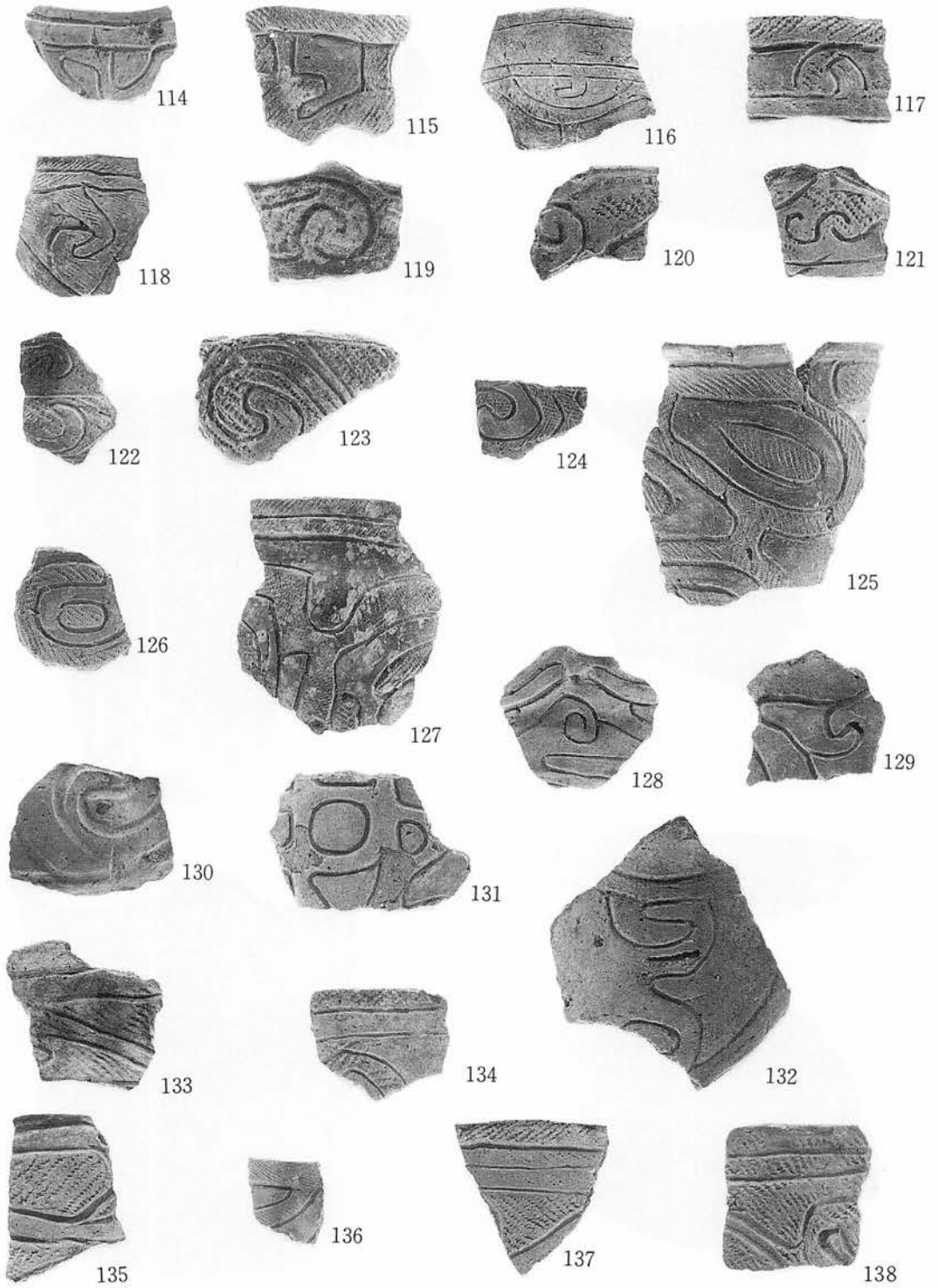


113

写真図版64 遺構外出土遺物(6)



第IV群 3f類土器(2)



写真図版65 遺構外出土遺物(7)

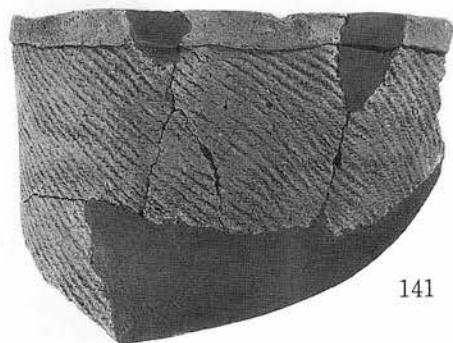
第V群1類土器(1)



139



140



141



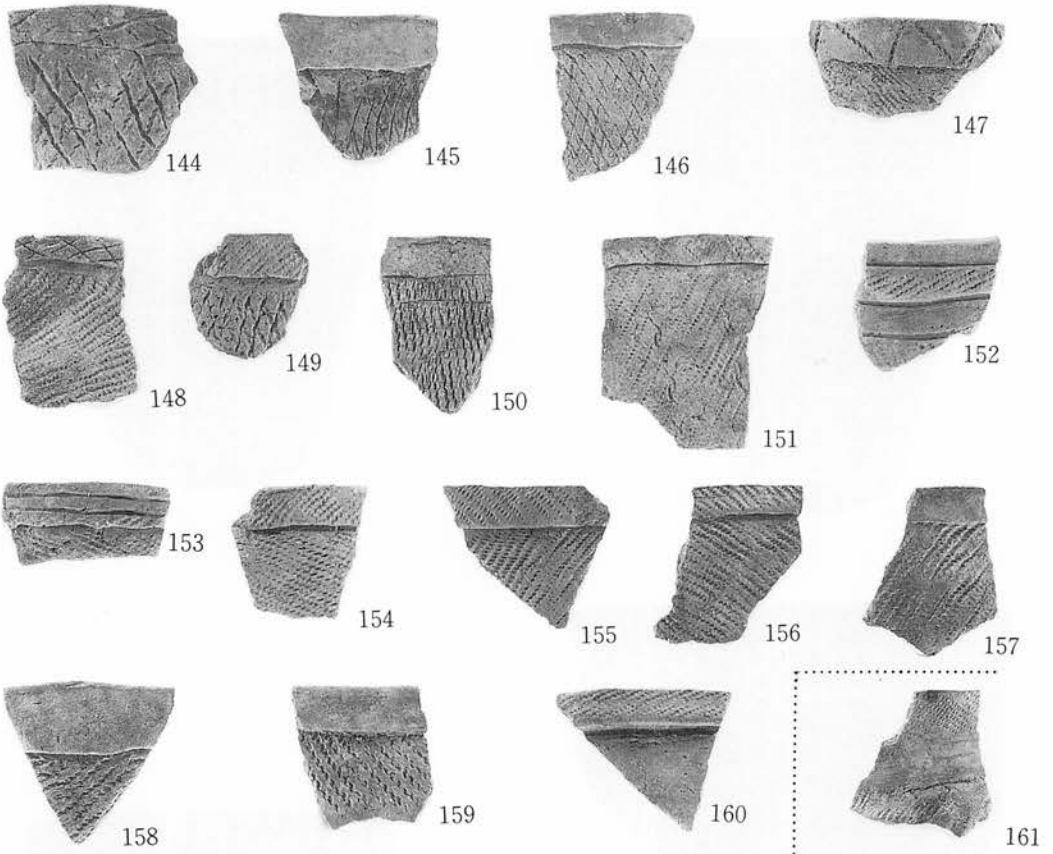
143



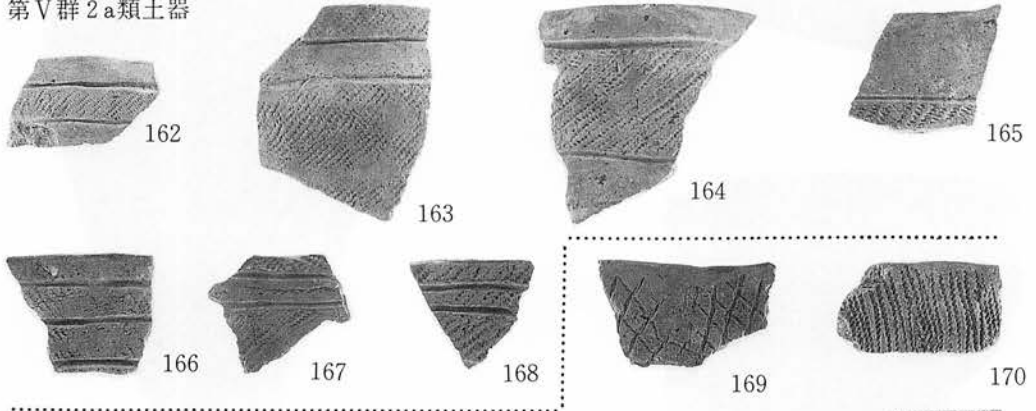
142

写真図版66 遺構外出土遺物(8)

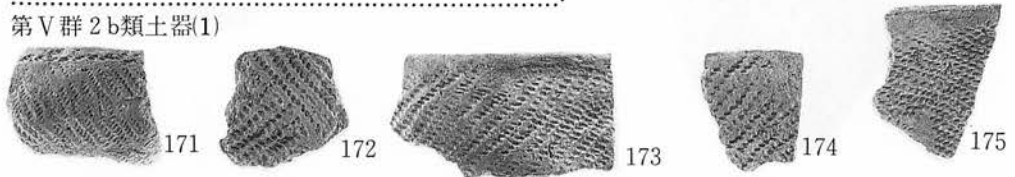
第V群1類土器(2)



第V群2a類土器



第V群2b類土器(1)



写真図版67 遺構外出土遺物(9)

第V群2b類土器(2)



176



177



179



178



180



181

第V群3a類土器



182



183



184



185

第V群3b類土器



186



187



188



189



190



191



192



193



194



195



196

第V群3c類土器



197



198

第V群3d類土器



199

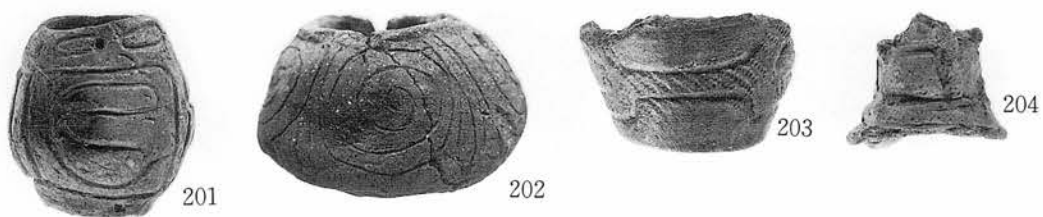


200

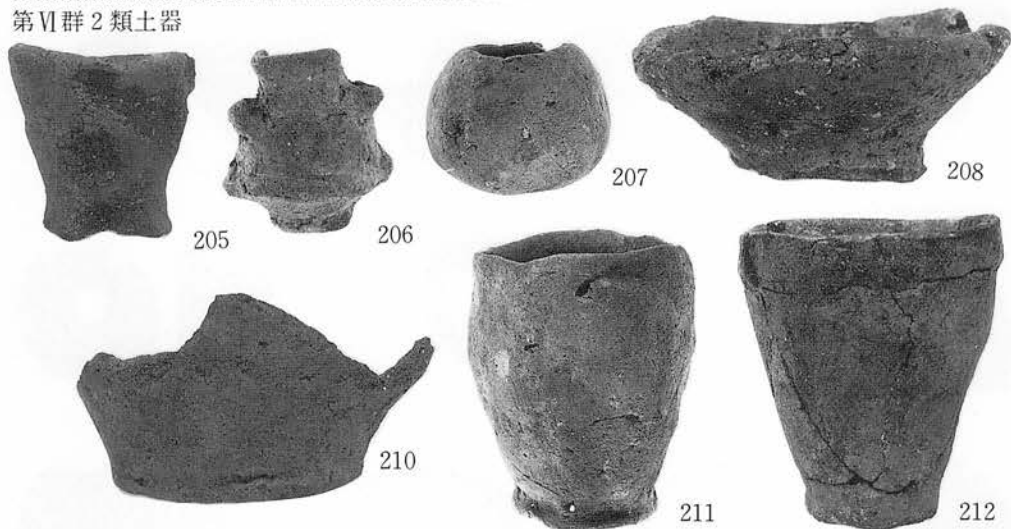


写真図版69 遺構外出土遺物(11)

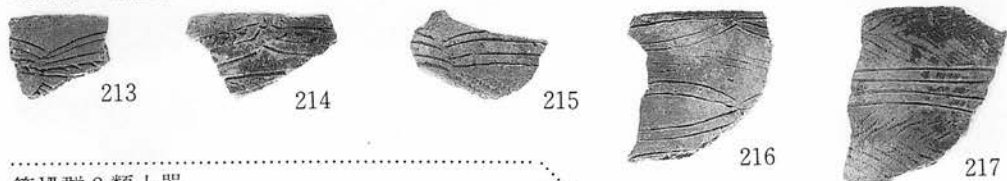
第Ⅵ群1類土器



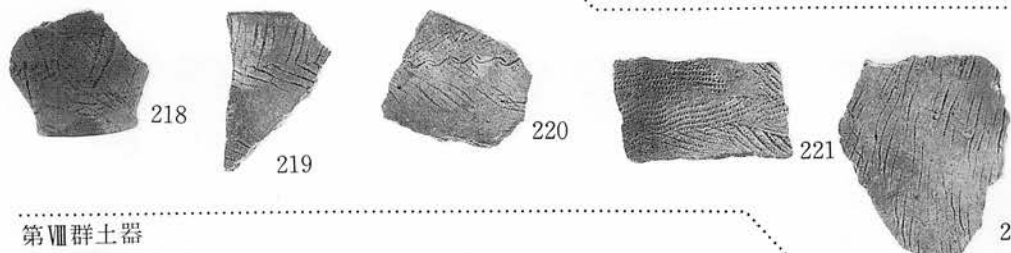
第Ⅵ群2類土器



第Ⅶ群1類土器



第Ⅶ群2類土器



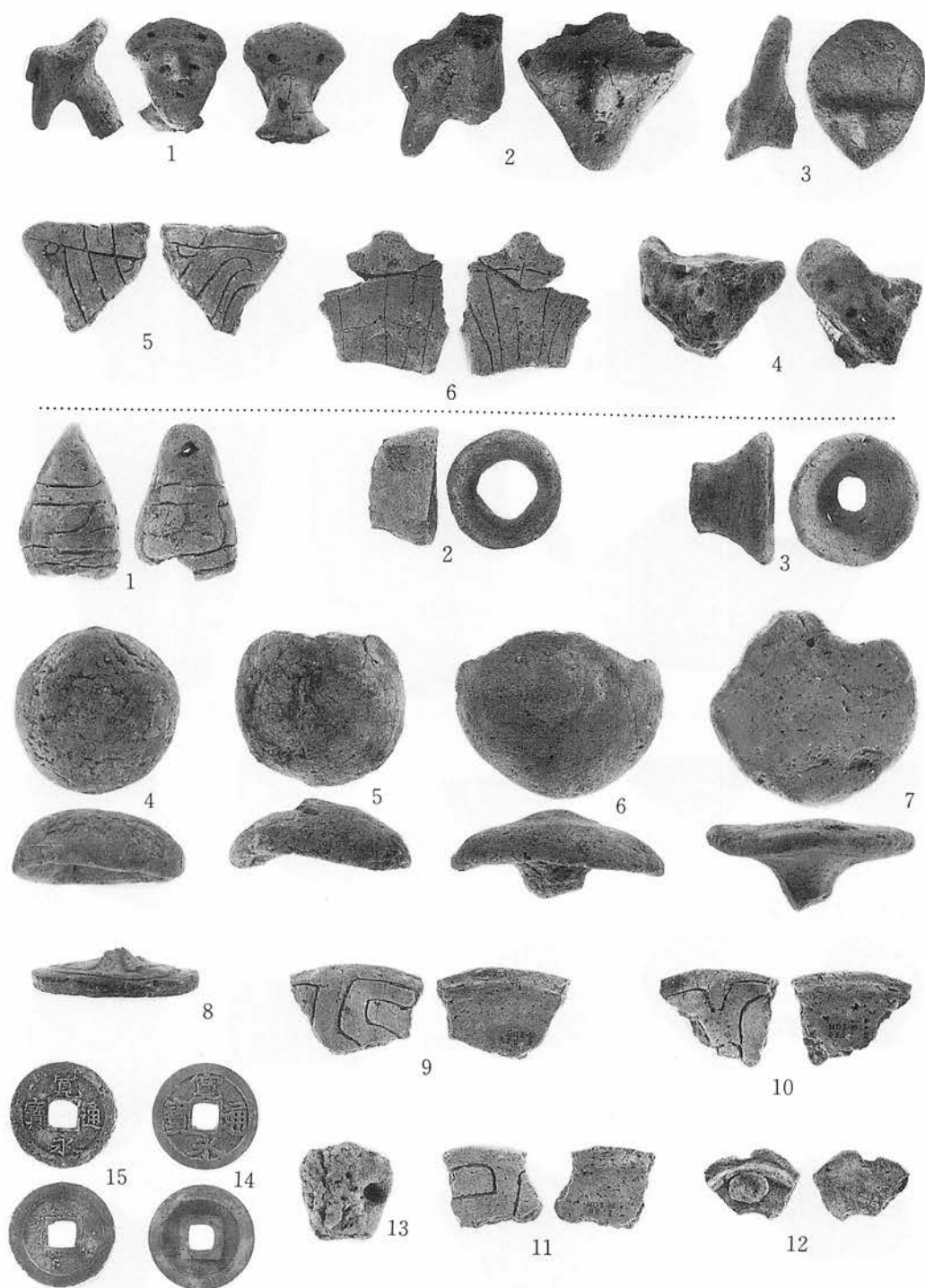
第Ⅷ群土器



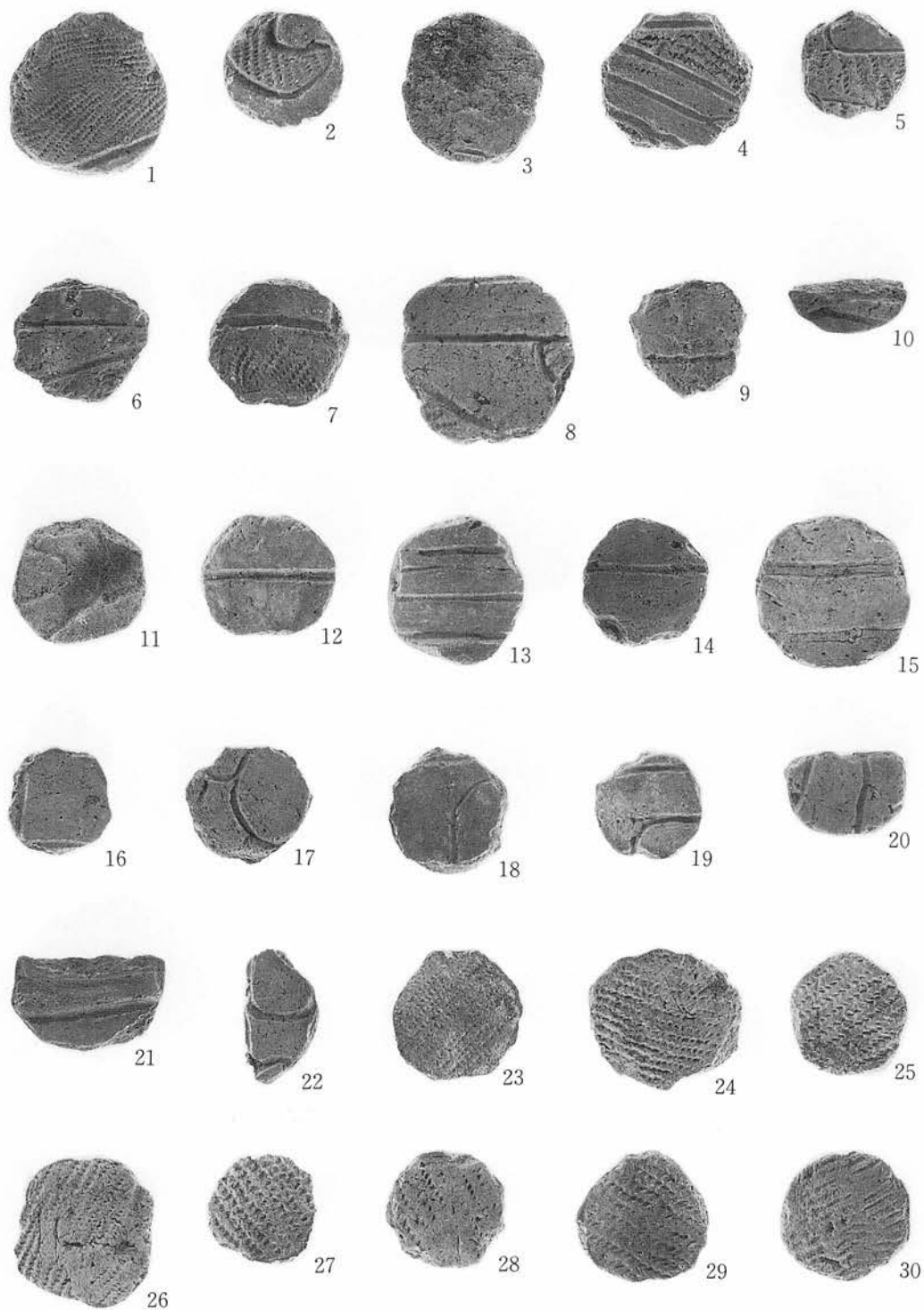
第Ⅶ群3類土器



写真図版70 遺構外出土遺物(12)

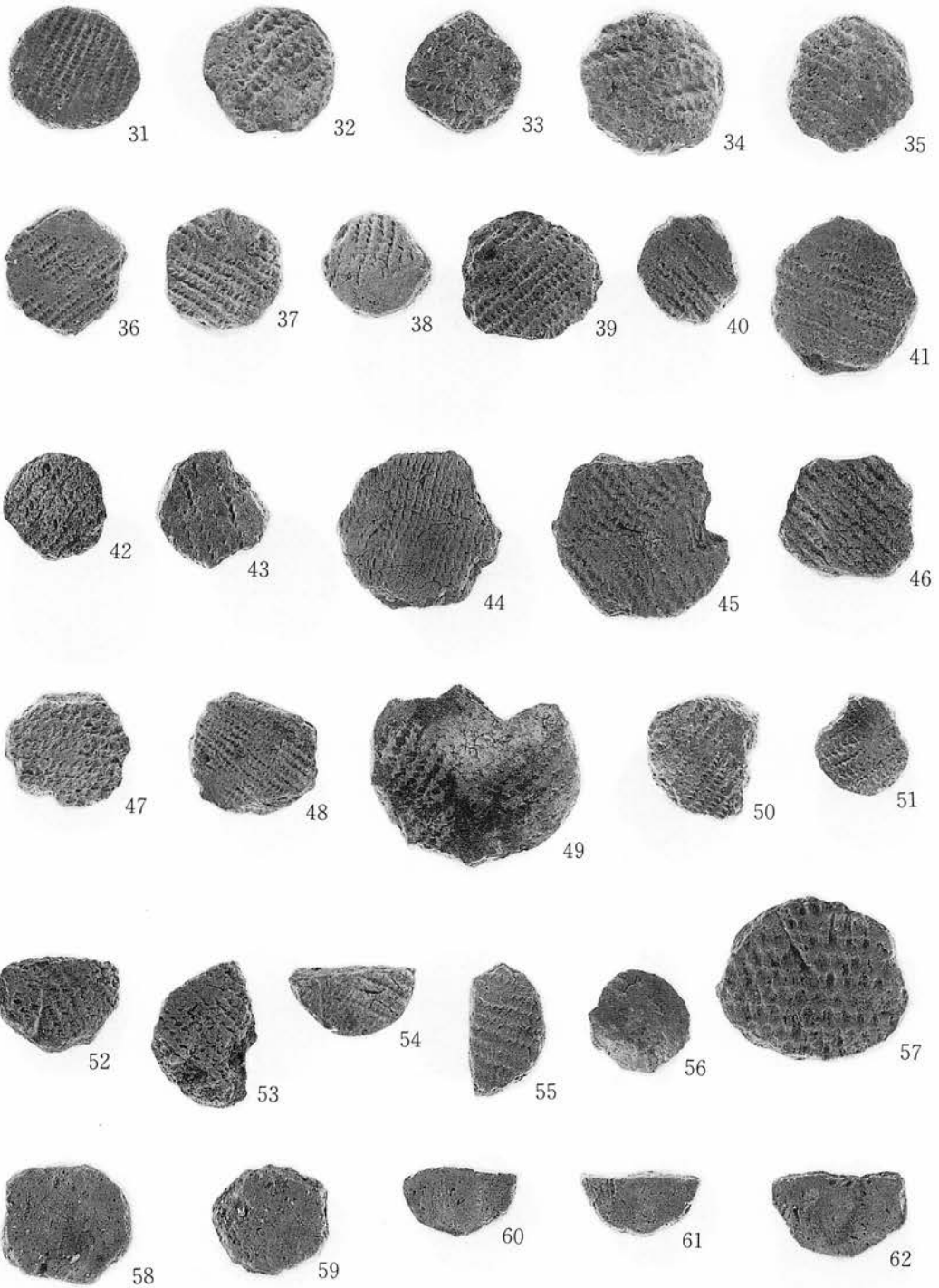


写真図版71 土偶・土製品・古銭

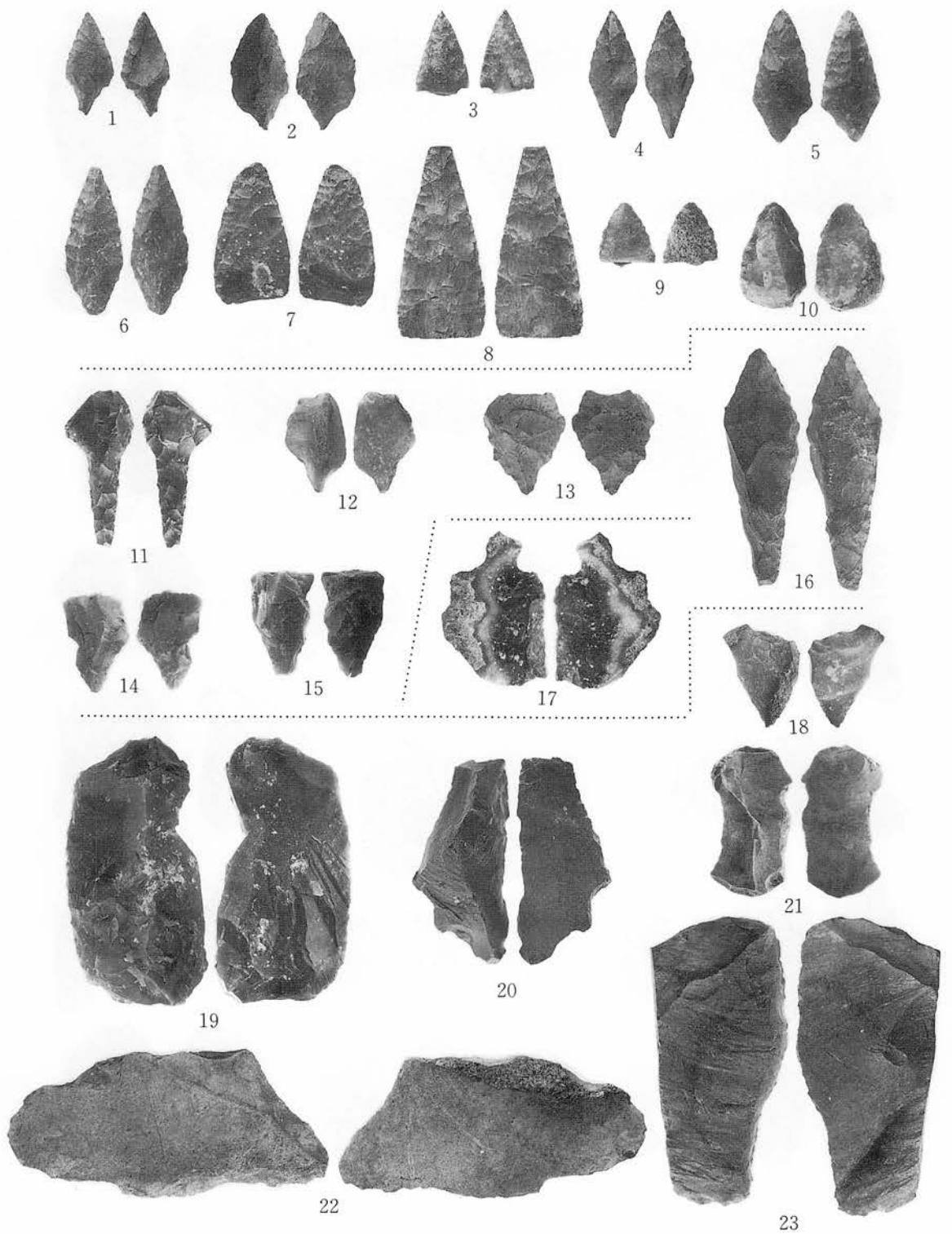


写真図版72 円盤状土製品(1)

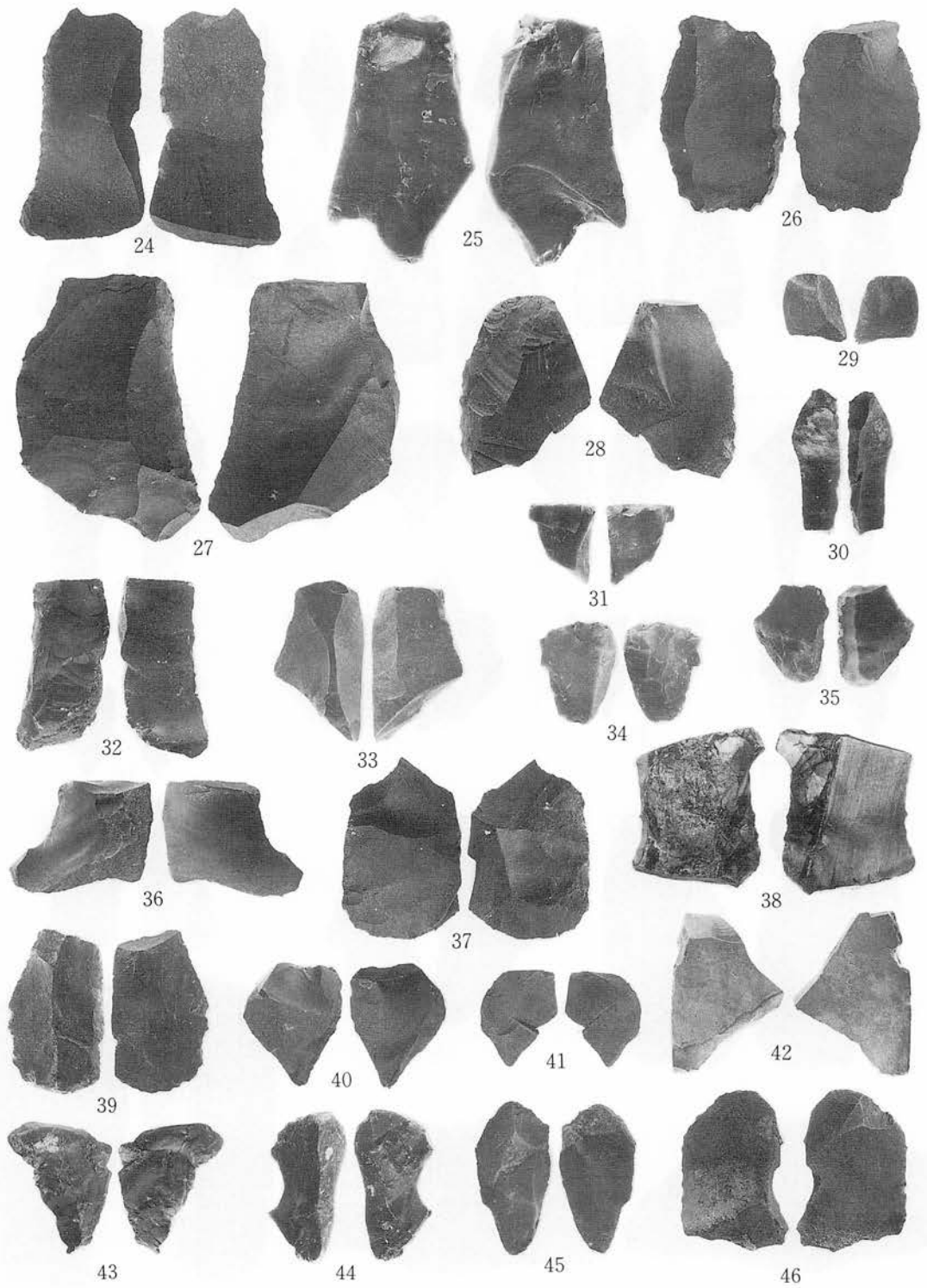




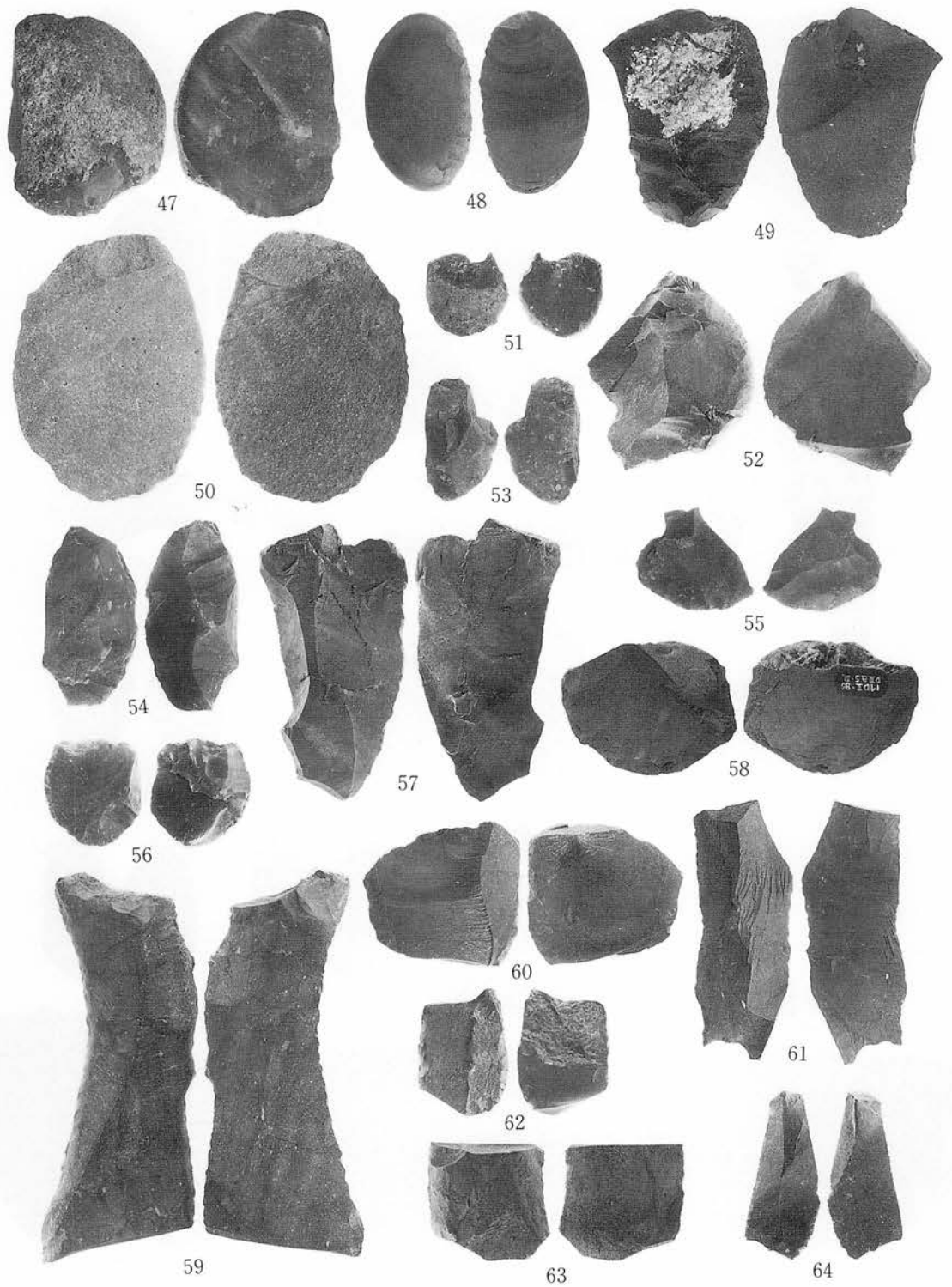
写真図版73 円盤状土製品(2)



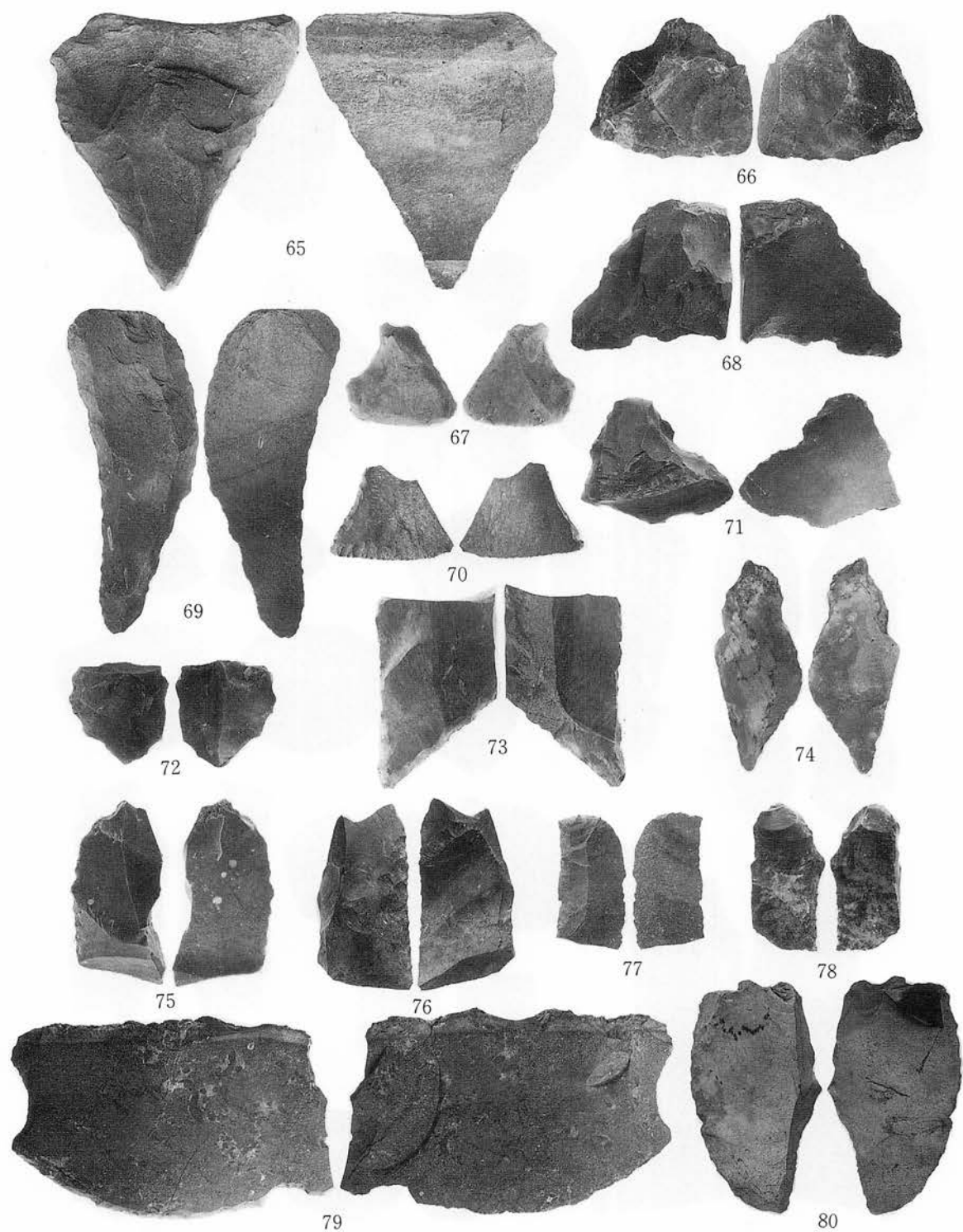
写真図版74 石鏃、石錐、石匙、搔・削器(1)



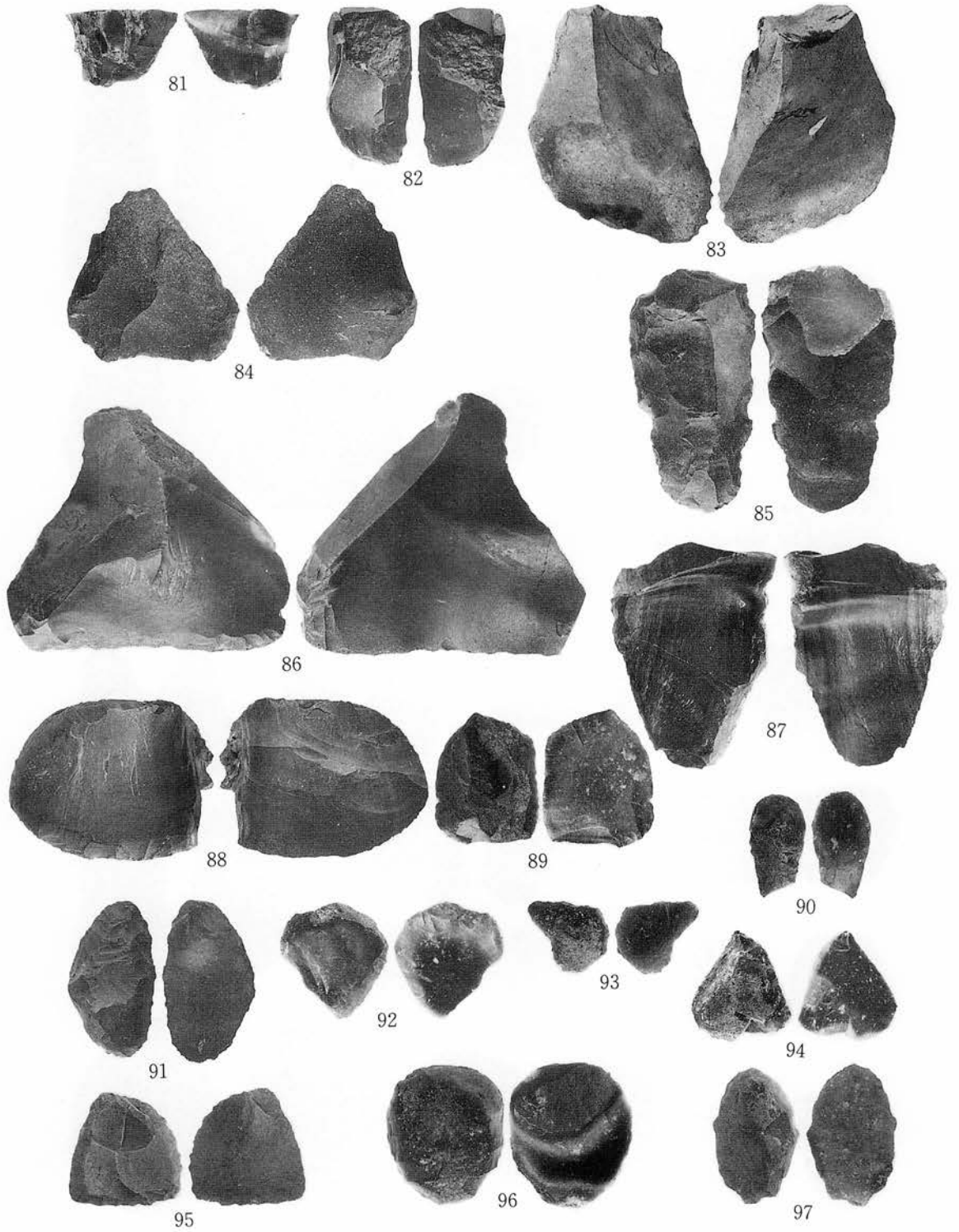
写真图版75 搔·削器(2)



写真图版76 搔·削器(3)



写真図版77 掻・削器(4)



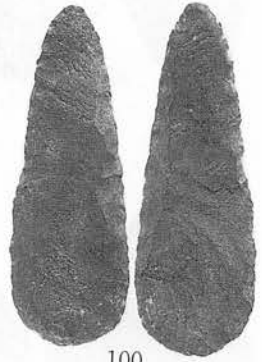
写真図版78 掻・削器(5)



98



99



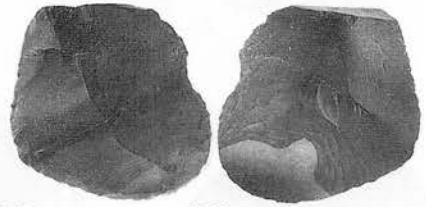
100



101



102



105



103



104



106



107



108



109



110



111



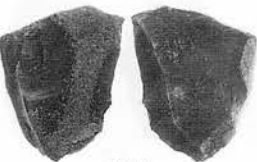
112



113



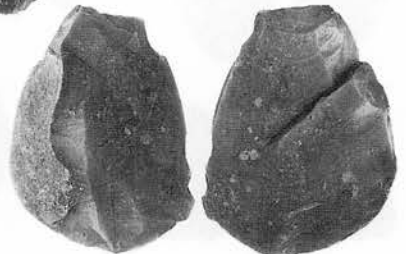
114



115

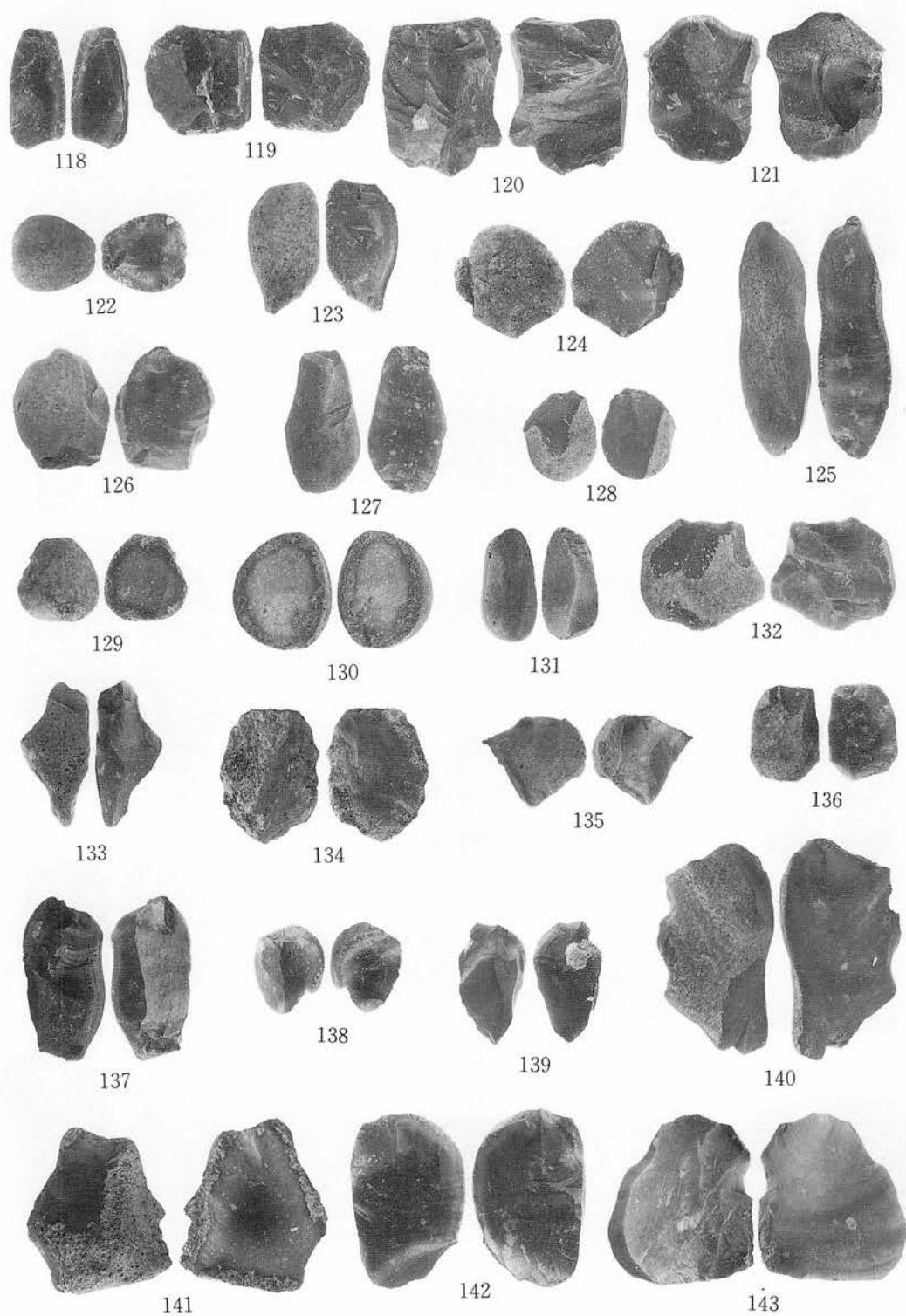


116



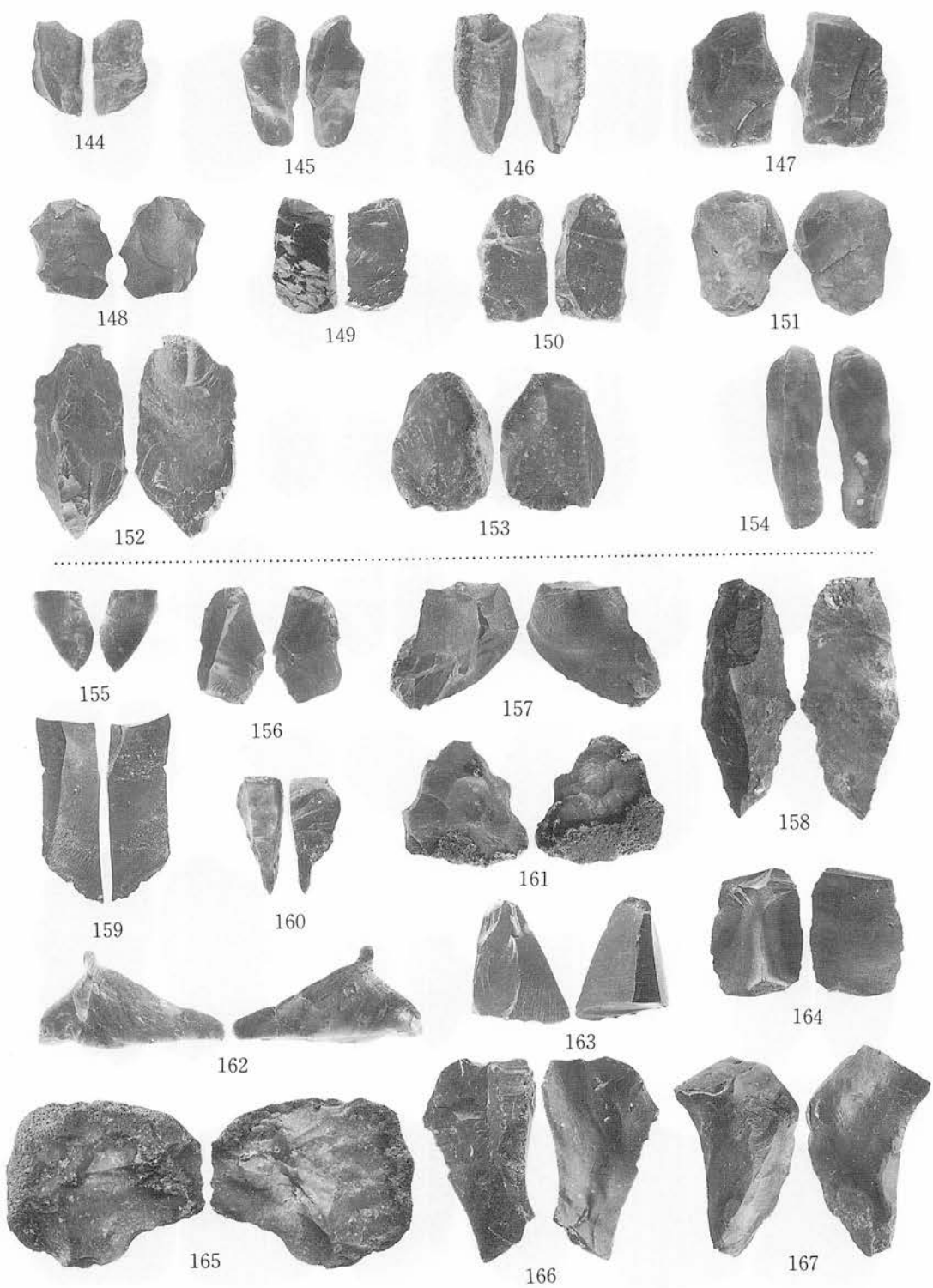
117

写真図版79 搔・削器(6)、楔形石器(1)

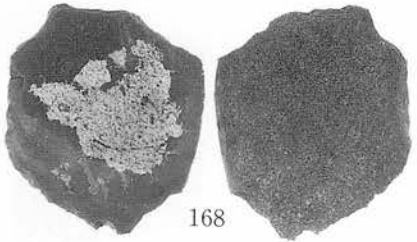


写真図版80 楔形石器(2)

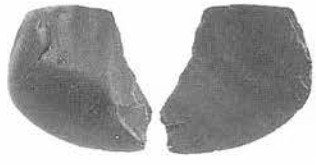




写真図版81 楔形石器(3)・不定形石器(1)



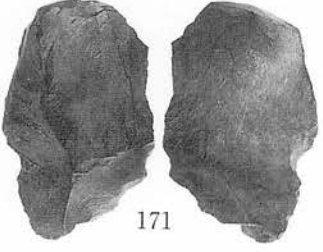
168



169



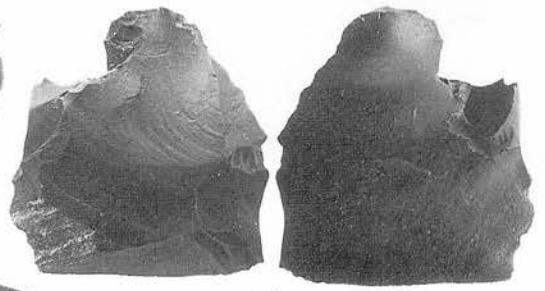
170



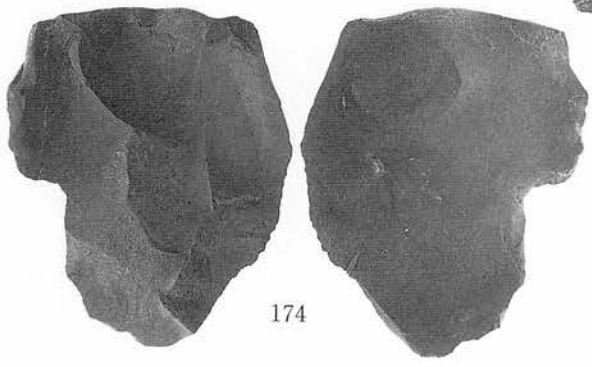
171



172



173

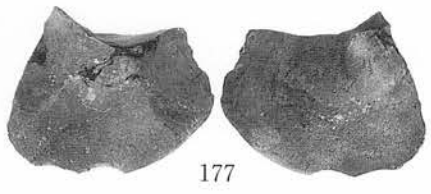


174



175

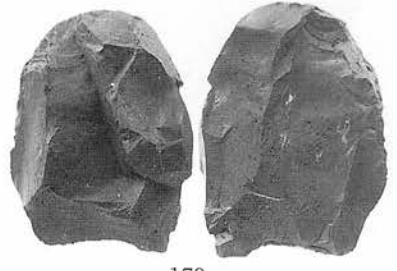
176



177



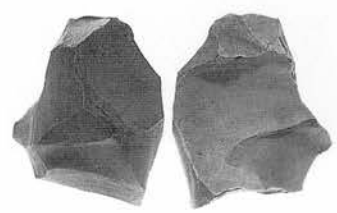
178



179

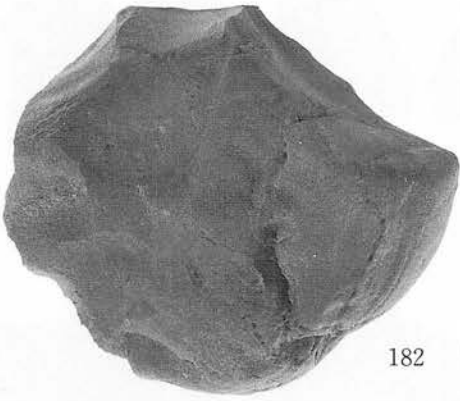


180

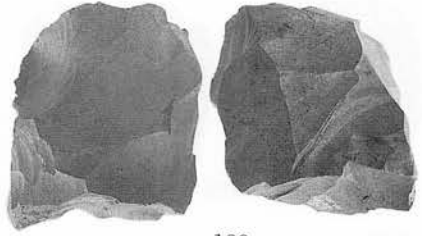


181

写真図版82 不定形石器(2)・石核(1)



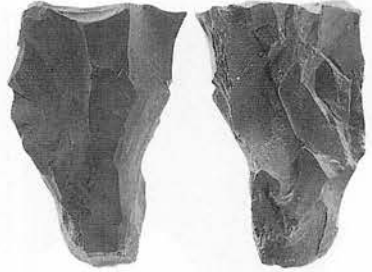
182



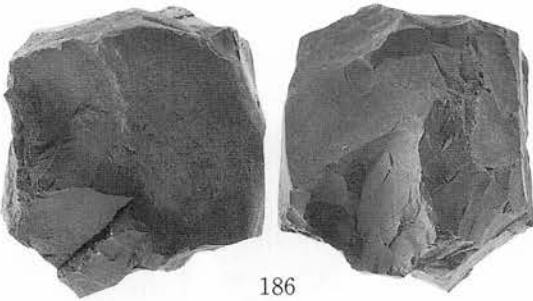
183



184



185

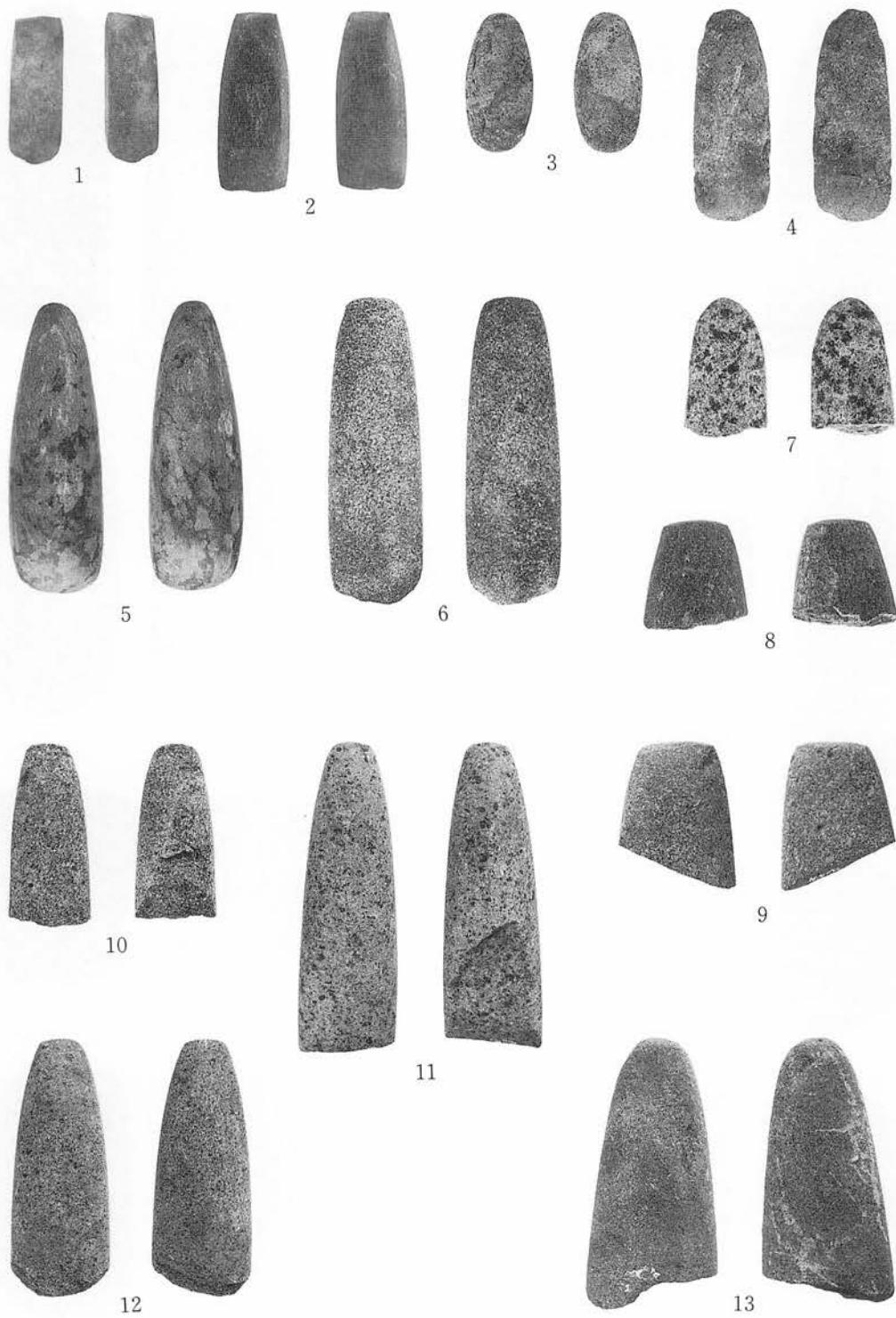


186

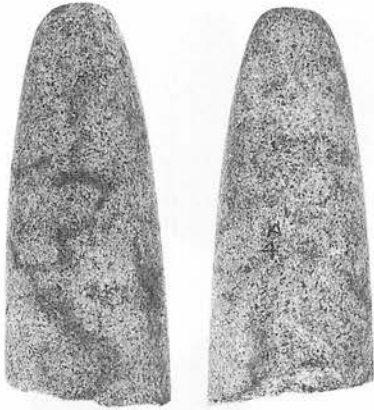


187

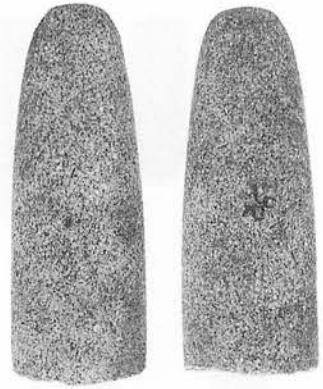
写真图版83 石核(2)



写真図版84 磨製石斧(1)



14



15



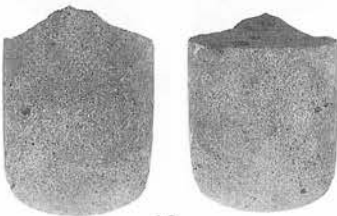
16



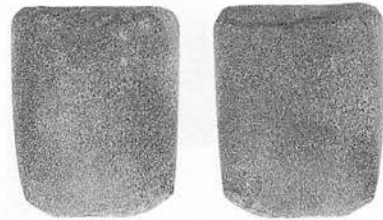
21



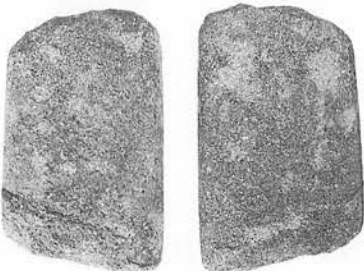
17



18



19

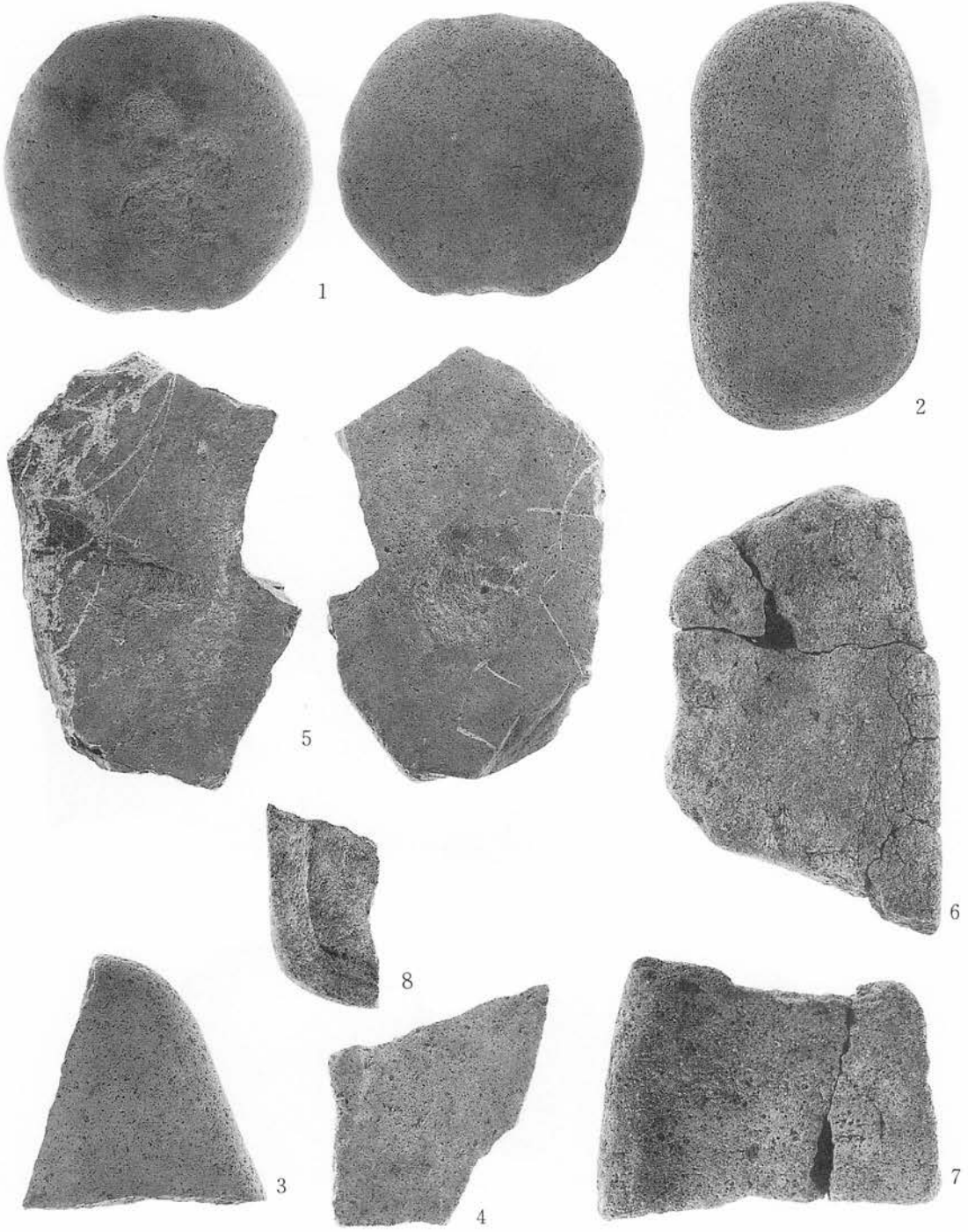


20

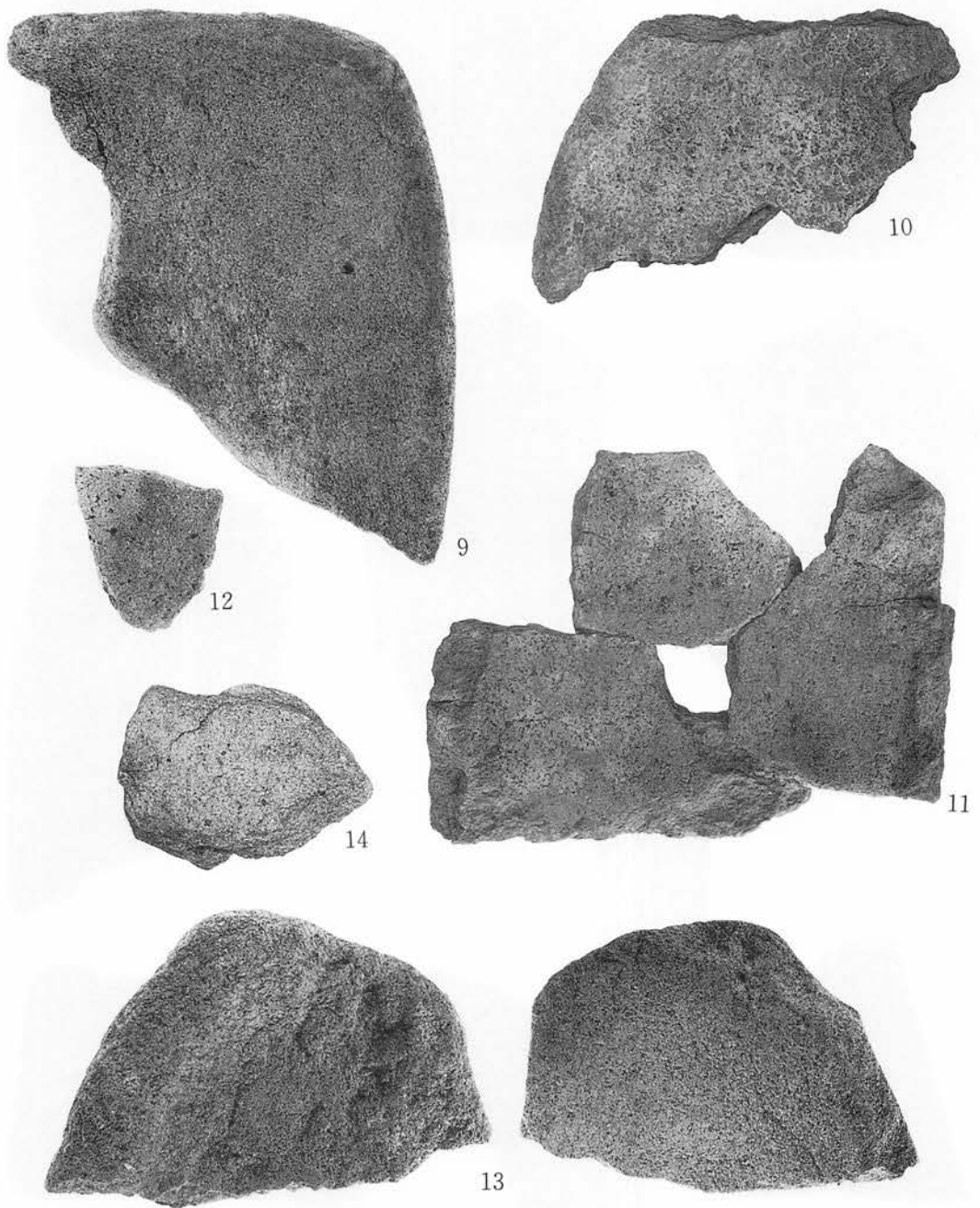


22

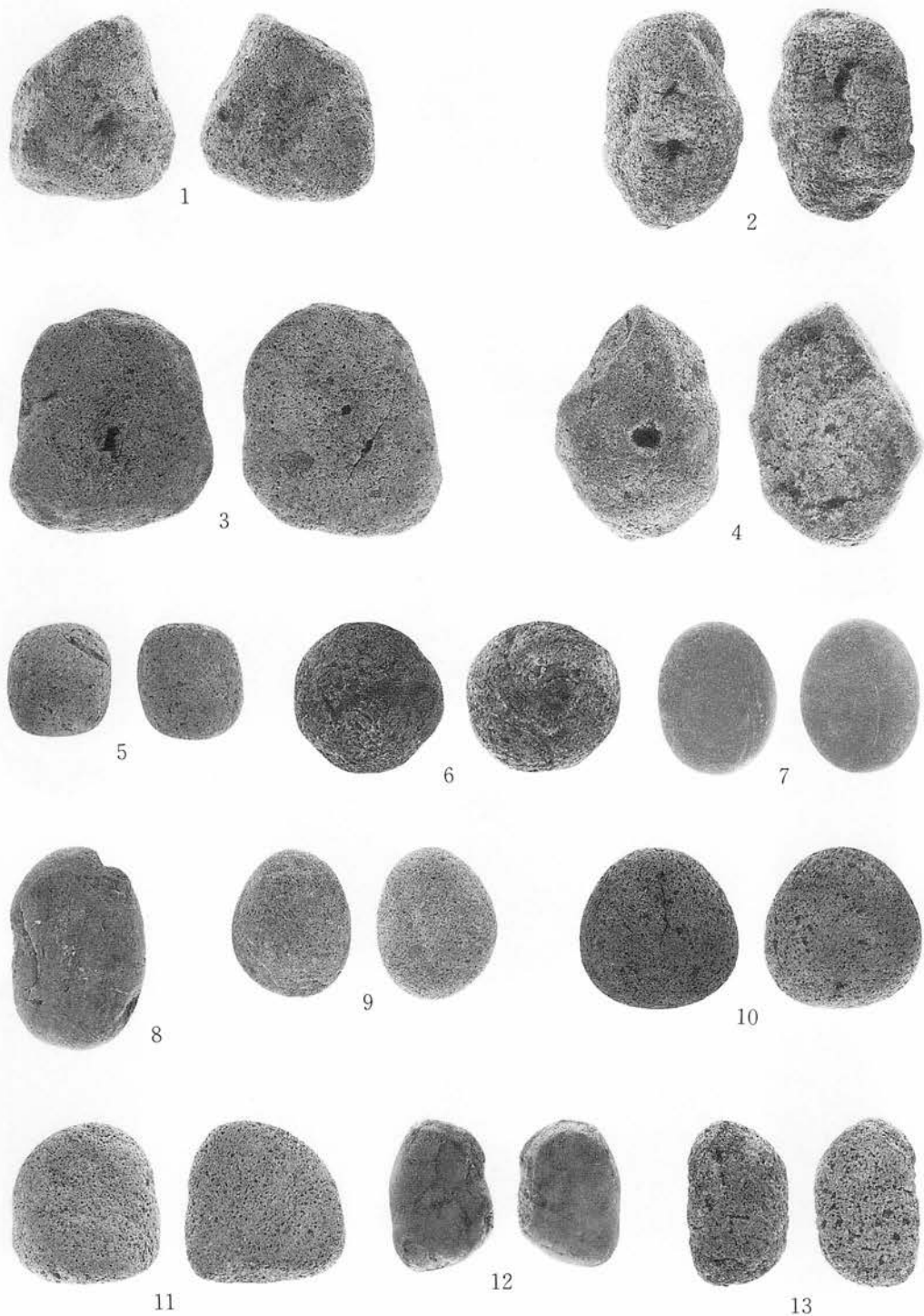
写真図版85 磨製石斧(2)



写真図版86 石皿(1)



写真図版87 石皿(2)

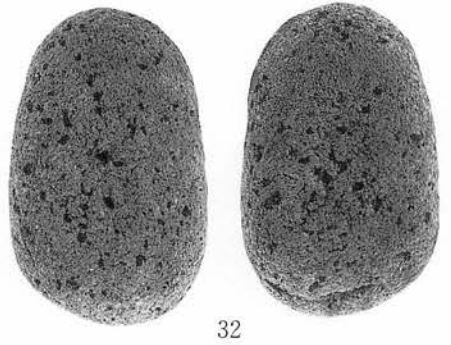
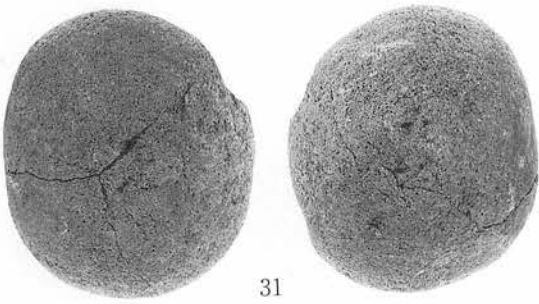
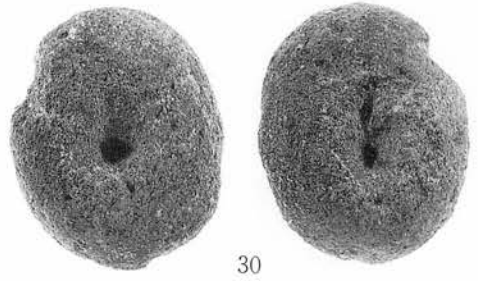
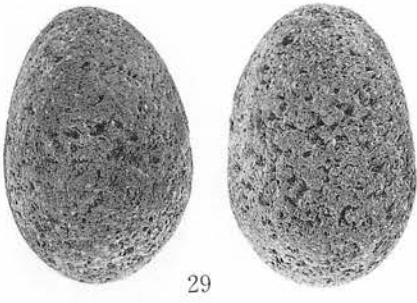
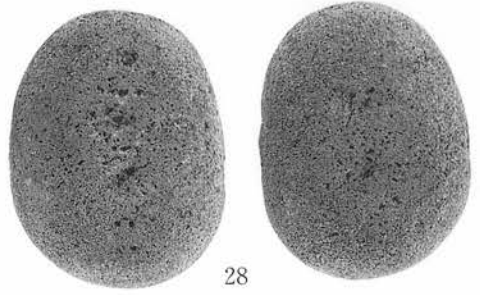
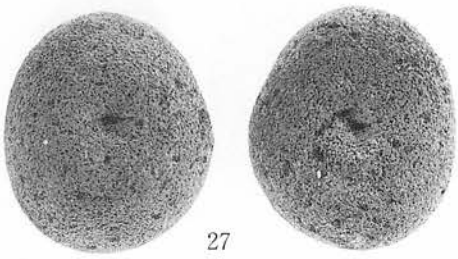


写真図版88 凹石・磨石(1)

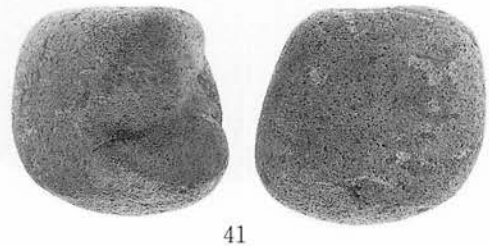
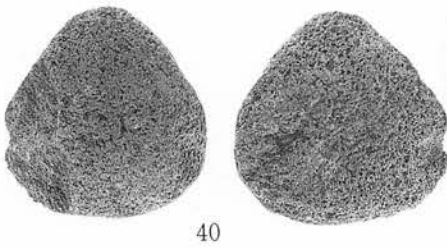
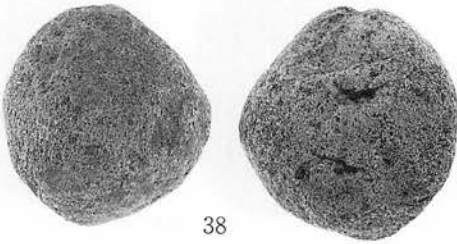
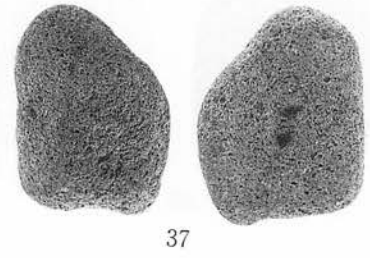
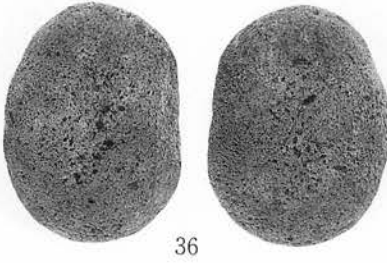
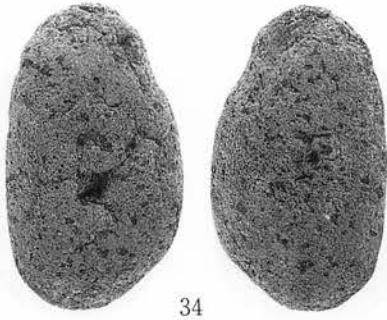




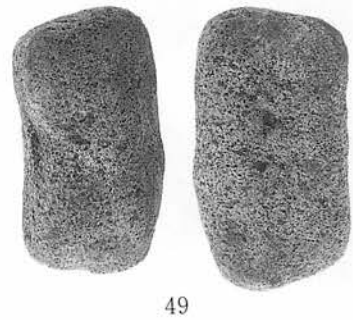
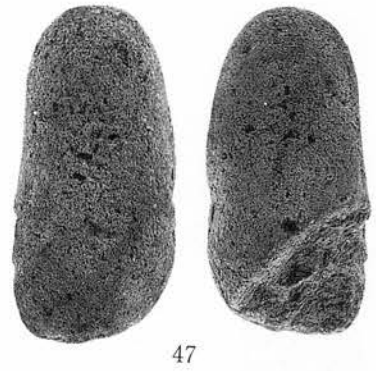
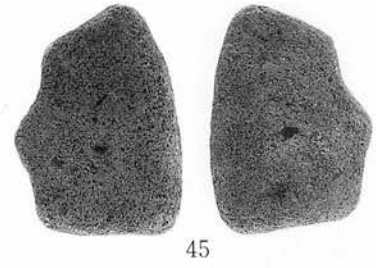
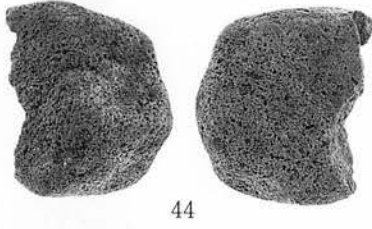
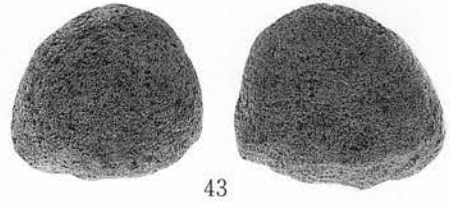
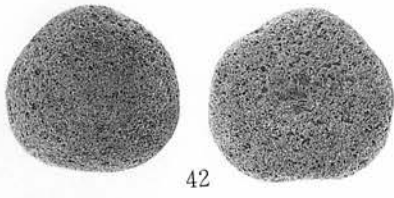
写真図版89 磨石(2)



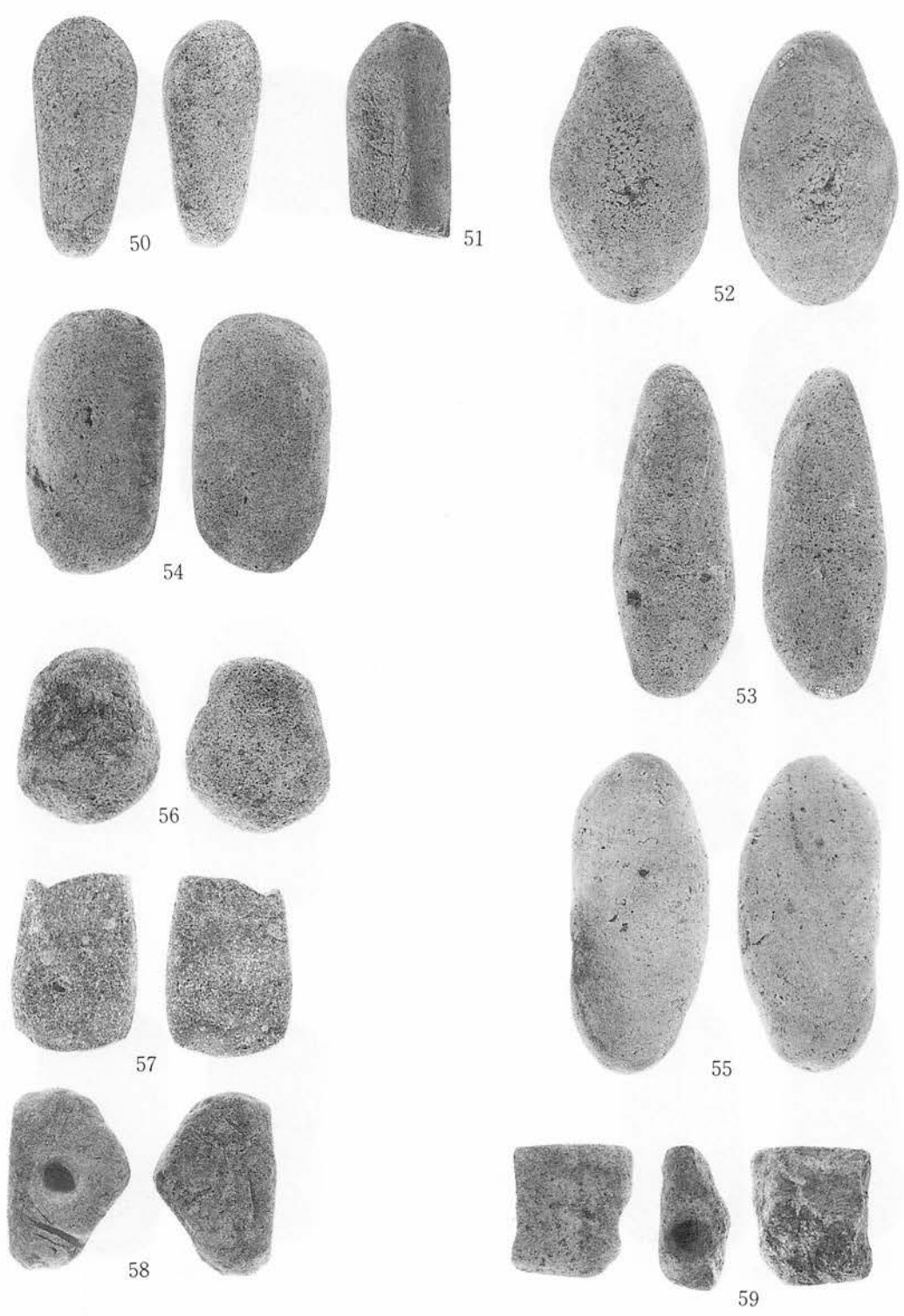
写真図版90 磨・凹石(1)



写真図版91 磨・凹石(2)



写真図版92 磨・凹石(3)



写真図版93 磨・凹石(4)



60



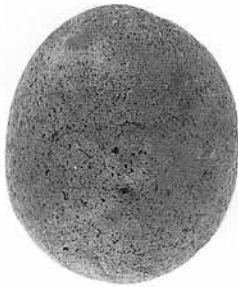
61



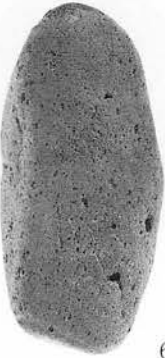
62



63



64



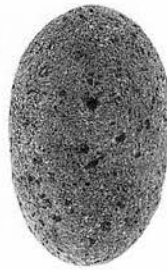
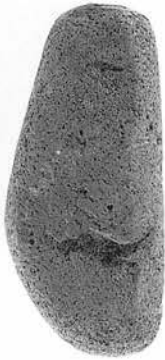
65



66



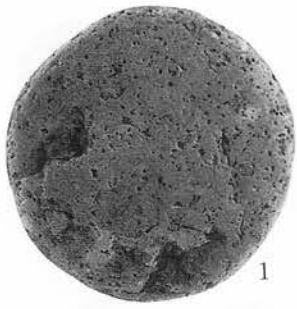
67



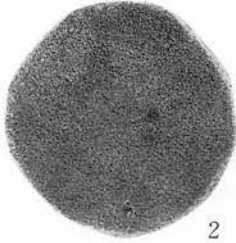
68



写真図版94 磨・敲石、磨・凹・敲石



1



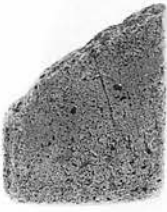
2



3



4



5



6



7



8



9



10

写真図版95 石製品

## (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所	長	及川昌二
副所	長	宮英一

### [管理課]

課	長	(副所長兼務)
課長補佐		伊藤吉郎
主事		立花多加志
嘱託		似内喜兵
運転技士兼技能員		佐藤春男

### [調査課]

課	長	昆野靖
主任文化財専門調査員		小田野哲憲
〃		三浦謙一
〃		工藤利幸
文化財専門調査員		佐々木嘉直
〃		平井進
〃		中村良一
〃		田村壮一
〃		光井文行
〃		玉川英喜
〃		佐藤嘉広
〃		中川重紀
〃		高橋義介
〃		酒井宗孝

### [資料課]

課	長	新田和雄
主任文化財専門調査員		高橋与右エ門
文化財専門調査員		田鎖寿夫



---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第122集

## 馬立II遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和63年3月25日

発行 昭和63年3月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23番27号

電話 (0196) 25-2323